

とある外道の少年探偵

過労死志願

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鬼に、悪魔に、マッドな魔法使い、

秘密結社に、謎のスナイパー、未来人とか、その他もろもろ……。

原作・二次にと大忙し。多種多様にして、各種諸々、小さきまざまな事件が起こる麻帆良に……とうとう奴らがやってきた!!

主人公「ミステリアスな謎? 青春群像劇? ○の組織との抗争? そんなものイヌにでもくれてやれ。僕たちは金になる事件でしか動かない」

超リアリスト探偵が贈る……外道すぎる探偵活劇!

目次

プロローグと外道な探偵	1
1 話 子ども先生推参!!	20
2 話・依頼内容のご確認	32
閑話・ネギの初依頼	50
3 話・O☆K A☆M Aヤクザ	66
4 話・原作激変の瞬間	99
5 話・怪盗・スパルタンVI!!	127
6 話・目標決定	149
7 話・桜通りのエターナルロリータ	176
8 話・明日菜参戦!!	214
閑話・決闘前の日常	227
9 話・深夜の激闘 1	264
1 0 話・深夜の激闘 2	301
閑話・個性的な初等部教師たち	322
1 1 話・犬神の力	335
1 2 話・修学旅行前	381
1 3 話・修学旅行一日目・昼間の部	410
1 4 話・修学旅行一日目 夜の部	443
1 5 話・修学旅行二日目苦勞人レイジの修学旅行	482
1 6 話・修学旅行二日目 恐怖の夜	499

	17話・修学旅行三日目	厄介な依頼	24話・爆走？	疾走？	大暴走？	逢
530	18話・修学旅行三日目	お守りの力	魔が時の幽霊レース			763
595	20話・修学旅行三日目	降臨☆満を持	25話・幽霊秘術・脳内催眠!!			778
	して!!		26話・学園祭前日!!			796
	21話・終わる騒動		27話・学際前日の一悶着			812
	閑話・クラレンスの里帰り珍道中	ござ	28話・第78回麻帆良祭、開幕!!			
	います		833			
	閑話・13番疑惑		29話・麻帆良武道大会開幕!!			843
	22話・怪奇!?	麻帆良に住む幽霊少女	30話・麻帆良武道会。激戦!!	第一回		
	!!		戦!!			863
	23話・幽霊学校		31話・なんか最近僕……影が薄い気がするんですが？			884
			32話・わがサンダー家には代々伝わ			
752						
742						

	る秘伝の交渉法があります	904		3 8 話・眠り姫だな、ガン〇〇	1040
	閑話・第四次図書館島戦争	918		3 9 話・オール・ハイル・ルルーシュ!!	
	閑話・とあるオリ主の災難	928	1052		
	番外・メリークリスマス!!	外道サンタ		4 0 話・不死身。不老不死！	スタンド
	クロースが行く!!	945		パワーツ!!	
	3 3 話・始まる終わり——文化祭最終日	962		4 1 話・そして、時は動き出す	
	!!			4 2 話・過去の清算	
	3 4 話・開戦!!	978		4 3 話・蘇る魔法世界の危機	
	3 5 話・踊る麻帆良大防衛線!!	世界樹		4 4 話・終る闘争	
	魔力だまりを封鎖せよ!!	989		最終話・全体的なエピローグ	
	3 6 話・黒い歴史と超の努力	1010			
1024	3 7 話・魔法少女(?) になつてよ!!				
				1180	
				1159	
				1139	
				1117	
				1094	
				1079	

プロローグと外道な探偵

うちは夢を見とった。

うちのろくでなしの腐れ親父がニコニコ笑いながらこつちに手をふつとるんや。

「マリー!! お父さん仕事に就いたでえ!!」

「ほんま!! ほんまなんお父ちゃん!!」

なぜか幼くなつとった私は、父親の言葉に無邪気に喜び、腐れ親父に駆け寄って行きよる。

「ほんまやで!! お父さんは自分で企業を立ち上げたんや!! これやつたらお父ちゃんも就職できるやろう!?!」

「お父ちゃんすごーい!!」

私は大いに喜びながら父親に抱きついた。その時、父親の最後の言葉が耳に入る。

「実は起業すんに二千万ほどかりてんねんけどな!!」

「やっぱりかいいいいい!! そんなオチやと思うたわボケオヤジイイイイイイイイ
!!」

「うわ!! なんだ一体!! どうしたんだマリー!!」

私の名前は安川マリー。借金まみれの父親に人身売買されたあげく、とある少年の下で働く薄幸の美少女（自称）や。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

安川マリーがいる場所は麻帆良学園女子中等部1—A。

デス眼鏡ことタカミチ・T・高畑を担任にもつ曲者クラスである。

今現在彼女はクラスに多くいる友人の一人、長谷川千雨の愚痴を聞いているところだった。

クラスにおいては公然のツツコミ役についているマリーは、麻帆良にいる数少ない常識人の一人だ。他の人間にあまり心を開かない長谷川が彼女には普通に話しかけるのもここが原因だったりする。

「でき、そのガキが不良をぶん殴ったら、その不良がまるで建築用のハンマーでぶん殴られたみたいになっ飛んでいったんだって!! マジでありえねえって!! どのドクタースランプだよ」

「ははははは……。そら凄い子がおったもんやなあ。クーフエイよりもすごいんとちゃうん」

微妙に引きつった笑みを浮かべながらマリーは何とかそう答えた。

しかし、彼女は内心では冷や汗を滝のように流しているのである。なぜなら、その不良を殴り飛ばしたガキとやらは、マリーが良く知る人物だったからだ。

『い、言われへん。そいつがうちの上司やなんて絶対に言われへん!!』

マリーは内心そんなことを考えながら、長谷川が飽きるまで彼女の愚痴に付き合っただった。

それから数時間後。マリーはとある会社の前にやってきていた。

犬神アンダーグラウンドサーチ。マリーが父親に人身売買された会社である。

職種は一応探偵事務所。といっても、ドラマや漫画に出てくるような冴え渡る推理で事件解決なんてスタイリッシュな探偵事務所ではない。

主な仕事はペット探しや不倫の裏づけといったいわゆるリアルサイドに沿った探偵事務所である。

マリーがそんなことを考え溜息をついていると、突然彼女の後ろに長身で細い影が差した。

「これはこれはマリー様。お帰りなさいませ」

「克蘭レスさん。ただいまー」

サイドでピンと跳ねた特徴的な口ひげを持つ燕尾服を着た細身の老紳士は、この探偵事務所の執事・クラレンス。年齢、正体、過去その他一切が不明なナイスガイである。

執事脳の腕も、助手としての力量も一級品のため、本来正式な助手であるはずのマリーに回ってくるはずの仕事を根こそぎ搔つ攫っているマルチスキル能力者だ。

「ゲル様がお待ちです。どうぞ中に」

「ありがとうクラレンスさん」

扉を開けマリーを先に入れてくれるクラレンスにお礼を言いつつ、マリーは事務所のなかに入った。

人身売買と言ってもマリーの場合はその形態をとった保護といったほうが相応しいのだろう。

借金まみれの父親に付き合い借金取りに終われる日々を送っていた小学生時代のマリー。そんな彼女を不憫の思った……のかは定かではないが、彼女の父親である男はむかし借りを作っていたこの会社を営んでいる人物に、借りを返す代わりにマリーの身元引受人になってくれるようにたのんだのだ。

結果、彼女の父親はマリーに内緒で、一人逃走。強制的に身寄りがなくなったマリーは助手としてこの会社に勤務することになったのだ。

さて、散々引つ張ったこの会社のオーナーについてだが……

「お、お願いです!! 俺の娘を助けてください!! このままじゃ、あのマフィア達に娘はひどい目に会わされてしまうんです!! お金はこれだけしかありませんがうちの全財産です。どうか、どうか娘を!!」

今日は珍しいことにお客が二人来ていた。

一人はボロボロの服を着たいかにも貧乏そうな男。その両手には数枚の小銭が握られており、大粒の涙を流しながら土下座をしていた。

「そんなことより、私のメリーちゃんを早く探してほしいぎます!! お金ならいくらでも払うぎます!!」

もう一人は、いかにも金持ちそうな太った夫人。その手には分厚い万札の束と、デブ猫の写真が一枚握られていた。

その二人に対面するように座っていたオーナーは、
「御意。すべては私にお任せ下さいマダム。」

メタルフレームの眼鏡に、切りそろえられた黒髪。鋭い目つきをした美少年。

マリーと同じ年の少年にしてこの会社のボス!! 犬神ゲルはそういつて、金持ちそうなマダムの手を取った。

「つておかしいやろうがああああああああああ!!」

ここは犬神アンダーグラウンドサーチ。探偵事務所である。

そこで言い合っているのは金髪碧眼に巧みな関西弁を操るアンバランスな少女、安川マリー。そして、完璧な無表情のままメガネをクイツと上げとんでもないことをのたまった、この探偵事務所のボス。少年探偵犬神ゲルである。

この探偵事務所には数々の異常な箇所がある。

一つ目。まだ中学生の犬神ゲルが経営者をしていること。

二つ目。そこにいる従業員のほとんどがまだ高校生にもなっていないメンバーで構成されていること。

そして三つめ。何よりも異常な箇所は……

「金にもならん依頼をするのは僕の主義に反する。摩訶不思議な難事件や怪盗との直接対決なんてものは名探偵にでも任せておけ」

「君はそうやないんかいな!!」

「少なくとも自分で名探偵というほどうぬぼれてはいない」

「あやまり!! 全国の名探偵の皆さんに謝りっ!!」

何よりも金を尊び、金にならなければどんな難事件であろうと動かない!! という、ある意味あっぱれな経営理念もっているところだった。

「大体、安川。ここ麻帆良では摩訶不思議な事件なんて腐るほど起きているんだぞ。い

「なあ、犬神君。なんかこう……私らがやってることって……なんか違わへん？」

今彼らが歩いているのは麻帆良学園都市の大通り。何とかネコの捕獲を終え仕事を完了した彼らは、探偵事務所へ帰るための帰路についているところだった。

「何がだ？」

「全部にきまつとるやんか!!」

鼻に詰め物をしながら、ゲージに入った猫を持つ犬神にマリーはそういった。

「私らがやってることって……犬探し、猫探し、浮気調査&猫探し、浮気調査、犬探し、ぼっかしやん。飯にもカツコかわいいくておしやれチックな少年探偵なのつとるくせに、なんやもう浮気調査するペット探偵になつとるやんか」

「依頼が来て、仕事をして、金をもらう。そしてそこに信用が生まれまた次の依頼が来る。美しく循環していて結構なことだと思わんか？」

「いや、そらおもうけど……ちやうやん!! もつとあるやん!! 少年探偵らしい事件!! 具体的には、小学生になつてもうた某高校生探偵のような密室連続殺人事件とかさあ!!」

「安川……その話を聞いた僕の感想を素直に言わせてもらおうと……」

犬神はそこで言葉を切り、眼鏡をクイツと押し上げた。

「超……どうでもいい」

「超!？」

「第一……依頼されたならともかく、なんで僕がそんな一銭の足しにもならんような事件を解決せねばならんのだ」

「いや、でも犬神君。難事件とか解決したら、評判が評判呼んで今よりさらに儲かんで」「断固拒否する!!」

「なんで!？」

「そのためのたった一度のタダ働きが僕には我慢ならんのだ。儲かっているのはわかるが魂が拒絶する!!」

「いや、しようやそんなくらい！ 損して得取れ、商売の基本やん!!」

「無理だ!!」

どうやら真剣に考えただけでも身の毛がよだつらしい。無表情ではあるが犬神の手がカタカタと震えているのがマリーにはわかった。

「はあ、君も難儀な体しとんなあ……。せやったら、もつとドラマチックな事件を……」
そう言つてマリーたちが、事務所への近道のために小さな路地を曲がり、暗い裏路地に入つてしばらくあるいた時、

「ん?」

息をもらしながらそう呟き、

「変質者とは失敬だな……」

サングラスをかけた男はそう言いながら銃を構えた。

「僕たちは……ゆかい犯だ!!」

「No!! 兄貴、YUUKA I HAN!!」

「ん? あれ、そうなの!!」

そんなことを言いながら、拳銃を下げ部下たちにそう尋ねるグラサン。部下たちもいつものことと諦めているのか、力なくそれに返答を返している。どうやらかなりの天然のようだ。

「愉快犯でも誘拐犯でもどっちでもいいえわ。私らに会ったんが運のつきやで!!」

「ばかやろー。ゆかい犯とゆかい犯じゃイメージが違いすぎるだろうが!! イメージが違いすぎるだろうが!!」

大事なことなので二回言ったようだ。

「そーか。伸ばすのか……」

男たちが何か言ってくるがマリーの耳にはもう入っていない。彼女の頭の中には明日の一面トップを飾るであろう自分たちのヒーローインタビューのことしかなかった。

「さあ、犬神君、出番や……」

そして振り返ったマリーの眼に映るのは、

「ふー。やれやれ……」

めんどくさそうに踵を返し、違う道から帰ろうとしている犬神の姿だった……。

「で……つて、なに帰ろうとしとんねん!!」

「安川。僕はさっさと依頼者に猫を引き渡し、金をもらいたいのだ」

「のだから……ちやうがな!! あの女の人助けなあかんやん!!」

犬神は、あわてて引き留めようとしてくるマリーの手を鬱陶しそうに眺めながら、気絶した少女に視線を移す。

「おーい。その女……僕は全くどうでもいいんだが、依頼料を払うなら助けてやらんこともないがどうする?」

当然気絶した少女から返事が聞けるはずもない。

「あの……犬神君?」

まさかと思いつつ、信じたくないマリーが確認のため犬神の声をかけた瞬間、

「返事がない。ただの屍のようだ」

「気絶しとんのに返事ができるか!!」

さわやかな笑顔でサムズアップした彼の頭を、マリーのハリセンが容赦なく一撃した。

「金の話なんて助けた後でも出来るやろ……君は少年探偵以前に人として改善せなあかん箇所がそこかしこに……」

その時、

「なにこつち無視して漫才してんだよ、ガキどもが！」

しびれを切らした目だし帽がポケットから拳銃を取り出し、犬神を撃った!!

しかし、犬神はそれにいち早く反応しわずかに体をずらすことによつて弾丸を回避。

そして、

「あ……………」

「あ……………」

その弾丸が猫を入れていたゲージを壊し、せつかく捕獲した猫に自由を与えてしまふ。

ニャー。と一声鳴きながらさっさと逃亡を開始する猫を、マリーと犬神は黙って見送ることしかできなかつた。

「おれたちは無駄な殺しが好きじゃないが……見られたからには仕方がねえ。おとなしく死んで……」

「ああ……。話してるところ悪んやけど、お兄ちゃん。ひとこと言わして」

「ああ？　なんだよ」

「そおのお……ご愁傷さま。殺されんとつてや。違う意味で一面飾ってまいそうやし」
「おまえ、なにいつてんだ!!」

しかし、苛立つ強盗をしり目に、マリーは気で両足を強化。犬神の邪魔にならないように近くの家屋の屋根まで飛びあがり退避する。

「なー」

「おお！ なんだ、あの子。ちようすげー」

ここ麻帆良ではこの程度のことではできる人間は多々いる。しかし、それに驚いているということは、彼らは外の人間なのだろう。

だから彼らは知らないのだ……。ここには……決して喧嘩を売ってはいけない存在がいることを。

「まったく……。何のつもりだ、貴様ら」

しばらくの間無言だった犬神は、数秒後眼鏡を押し上げ、

「何が不満だ？ せっかく面倒だからお互い不干渉で済ませてやろうとしているのに……このバカどもが!!」

瞬間。犬神は男たちのすぐ横に立っており、今まで発言しようとしなかった、もう拳銃を持っていない方の目だし帽の男を力いっぱいなぐりつけた。

瞬間!!

!!
」

「いや、私としてもそつちが理想なんやけどな……犬神君は……」

そして、そこで言葉を切ったマリーは、女子高生をたたき起し依頼料の請求をしている犬神を見て大きくため息をついた。

「超絶武闘派の……化け物探偵やねん」

犬神ゲル……無敵無双。

麻帆良の裏においては、高畑・T・タカミチを抑え体術最強の称号を持つ怪物少年探偵である。

1話 子ども先生推参!!

「ほんまにも〜。犬神君は少年探偵らしくなすぎさるわ。人間ヤード単位で飛ばすんは、違う世界の学園都市の第一位だけやおもとつたのに……」

「安川、その発言はいろいろと危ない」

マリーと犬神はそんなことを言い合いながら、事務所の玄関で靴を履いていた。

両者とも麻帆良学園中等部の制服に身を包んでおり、その手にはカバンが握られている。

「ほな、クラレンスさん。行つてきます」

「うむ。行つてくる」

「いつてらつしやいませ」

玄関先では執事服に身を包んだ老紳士が一礼をして二人を送り出す。

「まつて、二人とも!!」

そういつて追いついてきたのは今年で小学五年生になったマリーの助手……安川姫。

元暗殺者組織のボスの娘だった彼女は、犬神ゲルにとある事件の解決を依頼。なんやかんやで身元引受人がいなくなった彼女は一番なついていたマリーが引き取り面倒を

「うん!!」

かわいらしい笑顔を浮かべて頷いてくる妹分にマリーは鼻血を噴出させながら悶絶する。

「どうでもいいが、留年だけはするなよ。学費に響く」

「いや、中学生に留年はないやろ。それにこう見えても馬鹿レンジャーに入ってへんねんで!」

「入ってないだけだろう。低空飛行成績が」

「……何のことやらさっぱりでんなあ」

冷汗をダラダラ流しながら苦しい回避を披露するマリーを無言で見つめた後、犬神はすつと出口に目を向ける。

「開くぞ」

「ああ、ほないってきます。犬神君! 六重君と猫谷君とけんかしたらあかんで」

「当たり前だ。どうしてそんな金にもならないことをしなくてはいけない」

「行つてきます」

そう言つて、マリーと姫は電車の出口から飛び出す。

はじめのうちは人の波にもまれていた二人だったが、すぐに列の先頭に立ち改札を飛び越えるように通過（もちろん定期をきちんと通し回収したあとで）。移動購買部から、

「うう……一理あるわね」

マリリーの言葉に納得したのか、明日菜はやや不満そうではあったが矛を収め、アイアンクローをかましていた子供を雑に放り出した。

「うう……。せっかく教えてあげたのに……」

明日菜に放り出された後、何とか地面に着地した少年は若干泣きそうになりながらうなだれている。

「でもぼく、こんなところで何しとるん？　ここは女子中等部やから、ぼくみたいな子供はようはないやろ？」

「そっやね〜」

そういつてマリリーの質問に言葉を重ねてきたのは、マリリーの操る大阪弁とはまた違う関西弁——京都弁を操る大和撫子少女。

明日菜のルームメイトである近衛木乃香だ。

「ここは麻帆良学園都市の中で一番奥のほうの女子高エリア。初等部は前の駅やよ」

「……ホンマ何しに来たんやボク？」

「え、ええつと、ぼくは……」

木乃香とマリリーに尋ねられ慌てふためきながら何かを言おうとする少年。そのとき、

「その子は新任の先生だよ。安川さん。近衛さん」

「ということが今朝方あったんやけど……」

「ちよつとまで……。いや、マジでおかしなことだらけだろうが!!」

「安心してえや千雨。校長室でおかしいところは一通りツツコンどいたから」

「ありがとうな、マリィ。でも結局は覆らなかつたんだろう?」

「うん。まあ……学園長は妖怪やしなあ」

「はあ……。また頭痛の原因が増えた」

時刻はホームルーム前。場所は2—Aの教室。

そこでは、頭を抱えるメガネをかけた少女——長谷川千雨と苦笑を浮かべたマリィが雑談をしていた。

当然そのほかにも生徒はいて、今日やつてくる新任の先生のうわさを姦しく話し合っている。

「ああ!! チャオー私にも肉まんひとつ!!」

「了解ネ。マリィはいつもよく食べるネ」

「朝はこんくらいくつとかへんと体もたへんねん。仕事ミスったら晩飯抜かれる時もあるし……」

「お前はお前でなかなかドラマチックな人生送っているよな……」

「なんや千雨も味わいたいんかいな? うちのおやじの養子になつたらいやでも味わえ

んで」

「全力で遠慮させてもらう」

長谷川がそういつてひきつった笑みを浮かべたとき、マリーの耳にクスクスと笑う声が聞こえた。

「ん？　　なんや」

「ああ。双子と美空が洗礼の準備をしているみたいネ。相変わらずいたずら好きだな」「ちゅーか、中学生が作る罨ちやうやろあれ？　　どこのピタゴラスイツチャ」

まあ、いつも仕掛けられていることなのでさすがにマリーはもうあきらめていた。小さくツツコミをいれるだけ位にとどめて、あとは全力でスルーする。

その時、ようやく教室の扉に人の気配が現れた。

「お、きよつたな？」

「あ。マジかよ。早いな……」

長谷川がそういつて自分の席に戻るのを見届けつつ、マリーは子供先生の反応をうかがった。

仮にも裏サイドまほうに所属しているなら魔法なしでもある程度の対処はしてのけるはずだろうけど……子供やしなあ……。大丈夫やろうか？　　うちのクラスのトラップ群。

マリーがそんな風にはんの少しだけ不安を覚えていた直後、運命の時は訪れた！

……↑……↑……↑……↑……↑……↑……

ネギ・スプリングフィールドは緊張していた。

ここでの結果が彼の夢がかなうかどうかを左右する。そう思うと体が石のような固まっつてしまいそうだ。

「……………」

いや、この表現はいろいろトラウマとかがやばいから今度から使わないでおこう……。

とにかく彼は緊張していた。

いくら大人びた性格と子供離れた頭脳を持つているとはいえ、彼はまだ十歳の子供。緊張するのも仕方ないことといえた。

「ううう。こんなにたくさんの年上の人たちに教えるのか。なんだかドキドキしてきたぞ……。明日菜さんみたいな人ばっかりだったら嫌だなあ」

そして、ネギは自分の教室のドアを開ける。

……↑……↑……↑……↑……↑……↑……

ネギが入ってきた瞬間、マリーは驚きのあまりあいた口がふさがらなかつた!! なぜなら、ネギは魔法障壁を使ったまま教室の中に入ってきたからだ!!

「ちよ、ちよつとエヴァちゃん!? 魔法つて隠匿されとるもんちゃうの!!」

「ああ。その通りだ。だがあの坊やはそれに關しての知識が薄いらしいな……メルディアナ魔法学校ではいったい何を教えていたのか……」

マリーが隣の席に座っているエヴァンジェリンに話しかけたとき、ネギはようやく生徒がざわつていることに気づきその原因が、自分が黒板消しを空中にとどめているためだと気付いた。

ネギが魔法障壁を切つたため、黒板消しはようやく通常の物理法則に従つて落下した。

巻き上がる白い煙。むせ返るネギ……。

「いや、肩に粉が積もるほどつて……どんだけ、手入れしてへんねん!!」
とりあえず、マリーはツッコんでおいた。

「なあ、エヴァちゃん。いまのはアウト? セーフ?」

「チエンジ。顔を洗つて出直して来いと言われても文句は言えないな」

エヴァの評価を聞きマリーは顔をひきつらせた。

律儀に全部の罨にひっかかり目を回す子供先生に群がる自分のクラスメイトを見て、マリーは前途多難だなとため息をつくのだった。

…↑…↑…↑…↑…↑…↑…↑…↑…↑…

時刻は放課後。

マリーは学園室に呼び出しをくらってしまったため、一人廊下をのそのそと歩いていった。

「はあ………いったいなんなんやろ?　とうとう私もバカレンジャーの仲間入りしてもうたんかな?」

《バカゴールド》としてクラスメイトに囓し立てられている自分を想像してしまいマリーは冷や汗を流す。

そして、学園長室の前にたどり着いたマリーは二、三回ノックをした後、恐る恐る学園長室の中をのぞいた。

「し、失礼します………」

しかし、そこで待っていたのは意外な人物だった。

「遅いぞ安川、時は金なりといつも教えているだろう」

「つて、あれ？ 犬神君。こんなところで何しとるん？」

「クライアントの前だ、安川。姿勢を正せ」

そういわれて、マリーはようやく状況を理解した。

学園長室には執事服を着た克蘭レスと、初等部の制服ではなく動きやすい普段着を着た姫がいる。

「つてことは、学園長から仕事かいな」

「ほほほ。その通りじゃよ。犬神アンダーグラウンドサーチの諸君」

最後に、とうてい同じ人間とは思えない後頭部を持った老人が、老獪な笑みを浮かべてマリーを自分の城へと招き入れた。

2話・依頼内容のご確認

「でさあ、犬神君。今回の依頼のことどう思う？」

「どうとは？」

「いや、ネギ君のフォローについてやん」

「愚問だな、安川。僕たちはプロフェツショナルだ。金をもらい依頼されたのなら僕たちは無言で働くだけだ」

学園長から依頼を聞いたマリーと犬神はそんなことを話しながら女子校エリアを歩いていった。マリーの肩には肩車されたヒメが乗っており、その後ろをクラレンスが無音のままついていく。

依頼の内容は英雄の息子、ネギ・スプリングフィールドの護衛とサポート。

まだ幼いネギを最大限のサポートをするようにとのことだった。

「でも、いつもやったら裏の厄介ごとにはかかわろうとせえへんやんか。なんで今回に限って……」

「安川……。あまり自慢できないからここだけの話にするがな……」

犬神はそういうと、メガネを押し上げきらりと光らせる。

「僕は、親の仇であっても金さえもらえれば仕事を受ける人間だ」

「ほんまに自慢できひんで、犬神君!!」

顔に縦線が入ってしまっているマリーのツツコミを華麗にスルーし犬神は歩き続ける。

「でもなあ、犬神君。ネギ君のことなんやけどあれフォローするのほんまに大変や……」

その時、マリーの隣を一人の少女が通り過ぎた。

本を大量に抱え前髪で目を隠した少女。

本屋ちゃんこと宮崎のどかである。

「あ、安川さん学園長はどうでしたか?」

「ああ、なんや世間話聞かされたわ……」

「世間話ですか?」

「何をしている安川」

立ち止まって会話をしているマリーに十メートルほど先行してようやく気付いた犬神はふりむき、マリーのほうへ歩いてくる。

「いや、犬神君。もうちよい早くに気づいてえや。今までずつと話とつたやん」

「失礼な僕は気づいていたぞ。ただお前ごときのために立ち止まるのが面倒だったただだ」

「そっちのほうがりより悪質やないか!!」

本来なら絶対に入らないはずのハリセンの一撃を受け犬神のメガネが吹っ飛ぶ。いわゆるギャグ補正というやつだ。

「で、お前の後ろに隠れているその辛気臭そうな娘はいつたい何者だ?」

「辛気臭そうって……もうちよい言い方ってもんがあるやん。一応私のクラスメイトなんやで?」

若干顔が引きつってしまいうマリーだったが、とりあえず流すことにしたのか、犬神がやってきた瞬間自分の後ろに隠れてしまったのどこかを紹介する。

「私のクラスメイトでネギ先生の教え子の宮崎のどかちゃんや。これからいろいろあるかもしれないのやから覚えておいたほうがええんちゃうん」

「それはいいのだが、なぜこいつは僕を見て隠れたのだ?」

「ああ……この子、男性恐怖症やねん」

「ご、ごめんなさい」

「ああ、いい。別に気にすることはない。僕にとっては心底どうでもいいことだ」

「犬神君、その言いぐさはなおそうや……。本屋ちゃん、この人は私が働いとるバイト先のBOSSで、犬神ゲル君や」

「ゲルだ。覚えなくてもいいぞ」

「よ、よろしくお願いします」

「ああ、そんな挨拶なんてせんでええって。性格最悪やからあんま近づかほうがええよ」

「まあ、そうだな」

「否定せえへんの!?!」

そんな無駄話をしている時だった。

犬神とマリーの漫才に宮崎は少しだけ笑ってしまったっており、足もとへの注意がおろそかになってしまっていた。本を持ちすぎて前を見られなかったことも原因の一つだろう。

とにかく、彼女は階段に差し掛かっていることに気づかなかったのだ。

「あー!」

気づいた時にはもう遅く、彼女は階段から足を踏み外しそこから落ちてしまった。

「な!!」

「ふむ?」

マリーと犬神がそれに気づいた時、二人は素早く目配せをし、体内に気を循環。二人の相方を連れて行動を開始する。

犬神は素早く宮崎の体を捕まえ一緒に落下。受け身が取れるように位置を調節する。その下では素早く降りたクラレンスが二人をキャッチできるような体制で待機してい

る。

マリーは借金取りから逃れるために父親に鍛えられた俊足をいかんなく発揮し、杖を構えて何かをしようとしていた赤毛の少年に向かって駆け出す。

その間、0.1秒。俊足どころか神速とっていい速さ。瞬動術である。その先ではマリーの肩から飛び上がったヒメが、少年が杖を取り出す光景を見てしまったツインテールにオッドアイの少女の前に降り立ち、その首筋に手刀を当て意識を刈り取っている。

「ほんま何しとんねん、じぶん!! 今のはありえへんわ!!」

「え、あれ、安川さん!」

「安川……大丈夫か?」

「ああ、私は大丈夫やけど……」

「違う。その小僧の安否の確認だ。誰にも見られてないよな?」

「しょ、正直微妙やわ……。朝からなんか疑つとつたクラスメイトに、ちよつと見られてもうたかもしれへん。姫ちゃんがすぐに気絶させてくれたから、あいまいな記憶となるくらいまで印象は薄められたやろうけど……」

「ちつ。とにかくその小僧をよこせ。宮崎は気絶させて図書館に放置するようクラレンスに命令しておいた。目が覚めたら勝手に夢だと勘違いしてくれるだろう」

「明日菜は？」

「目撃者のことか？ どこにいたのかわからんからな。葉を打ち込んで眠らせた後学園長室に連れて行く。クライアントに相談する必要があるからな」

「あ、あなたたち!! いったい何者なんですか!! 明日菜さんたちに何を……」

「少し黙れ」

その言葉と同時に、犬神は掌底をふるう。それはネギが常に張っている魔法障壁をやすやすと貫通してその顎を直撃、脳を揺らし行動不能にする。

「ちよ!! 犬神君!! やりすぎやろ!!」

「安川……。今僕は仕事が失敗しそうになって非常に機嫌が悪い。意見をするなら……」

そして、抗議の声を上げたマリイに対して、完全に人殺しの目となった瞳を向けてくる。

「命を懸ける覚悟をしろ」

「い、Yes・BOSS……」

冷や汗をだらだらと垂れ流しながらマリイは敬礼する。

犬神はそんなマリイを見て鼻を一つ鳴らすと、ネギをぐるぐる巻きにした拳句猿轡をはめて捕縛。戻ってきたクラレンスがもってきたキャリーケースにネギを押し込み学

「黙れ、安川。僕は今不機嫌なのだ」

「はい……」

「いやいや、ひかんでくれよ、マリーちゃん。この怒気は老体にはこたえるのじゃぞ!? と、ちよつとだけ泣きそうになりつつ、近右衛門口を開く。

「犬神君。ばれそうになつたのはいつたい誰なのじゃ?」

「……現状は二人。こいつのクラスメイトの宮崎のどかと神楽坂明日菜です。後者は特に危険で魔法を使うところをじかに見られた可能性があります」

「ふむ……そうか」

黙り込む近右衛門にマリーは『何考えとるんやこの爺ちゃん』と首をかしげる。

そして近右衛門が出した結論に、

「のお。犬神君。その件に関してはこのまま放置してくれんかの?」

この学園の深淵を見ることになる。

……†……†……†……†……†……†……

「それは……どういうことでしょうか?」

「言葉どおりの意味じゃ。神楽坂明日菜の魔法ばれについてはこのまま放置。ネギ君か

ら彼が受け持つクラスへの魔法ばれもできうる限り目をつぶろうと思っておる」

「な、なやそれ……。あそこにはなんもしらん生徒や、一般人として成長しとる木乃香もおるんやで!! あんたの孫ちやうんかい!! それをなんでこんな危ない世界に引きずり込もうとしとんのや!？」

「少し黙れ、安川。クライアントの前だ」

学園長の言に犬神への恐怖も忘れてしまったマリイは思わず怒声を上げるが、犬神はそんなマリイに殺気を飛ばし黙らせる。

「……なるほど。メガロメセンブリヤ M Mの上から命じられた命令でしたか。悲しきは宮仕えといったところですか? あなたのご苦労はよくわかりますよ、近右衛門殿」

そして、犬神はまるでそんなこと思っていないといった表情のままそんなことをのたまった。その視線の先に、血がにじみ出るほどこぶしが握りしめられた近右衛門の手があることにマリイは気づいた。

「おおかた、英雄の息子により良い成長をもたらすためといったところでしょう? そのためなら、こいつを含む三十二人の女子生徒がどうなろうと知ったこっちゃないと……。相変わらずいい感じに壊れていますね。僕と気が合いそうだ」

「あつたらアカンやろ!？」

殺気に萎縮してはいてもきつちりツツコミを入れるマリイに感嘆しつつ、近衛門は頷

いた。

「そうじゃ。この学園はMM連合から援助を受けることによって成り立っておる。ナギをMM連合に紹介したのもわしじゃいな。あいつ優勝した格闘大会自体、戦争で直前だった連合に強力な兵士を送るために強者を見つけたというのが本来の目的じゃ」

「つまりこの学園はMM連合の完全な言いなりだど？」

「……ここに所属している魔法生徒や魔法先生のほとんどがMM連合出身のものやその息がかかった者たちじゃ。そうなるのもしかたあるまい」

「なるほど。了解しました。では神楽坂明日菜はこのまま放置させていただきます。そして、クラスメイトに対しての魔法ばれについての違約金は……」

「犬神君……実はそれが聞きたかっただけやろ」

「当然だ。僕が金のこと以外で動くと思っていたのか？」

「思つてへんけど、もうちよい取り繕えや!!」

メガネをきらりと光らせる犬神にマリーは容赦ないハリセンの一撃を加える。

「発生させるつもりはない。放置してくれて構わん。ただほかの生徒たちに知られるのはまずい」

「それは重々に承知しています。お任せ下さい。帰るぞ、安川」

「ちよ、ちやいまつてえや! 犬神君!!」

そしてさっさと踵を返して帰ろうとした犬神の服の裾をつかみ、マリーは犬神を引き留めようとした。

ズルズルズル……。

犬神は特に気にした様子もなくマリーを引きずって扉の前まで歩いたが……。

「いや、とまれや!!」

「安川……僕はさっさと帰りたいのだ。具体的には撮りためている『仁』のドラマの再放送を見たいのだ」

「犬神君も好きなん!? そっちのほうじゃ意外やわ! って、そんなこと言つとる場合ちやうやろ!」

そして、マリーは近右衛門のほうを振り向き大声を上げてたずねる。

「このままでええんか爺ちゃん!! 政治屋の言いなりになって、生徒犠牲にした拳句、孫まで危険な目にあわせて……ネギ君をこのままMM連合の言いなりにさせて……それでええんか!! 爺ちゃん!!」

「……いわげがないじゃろう!!」

今まで泰然とした表情を崩さなかった近右衛門は大声を上げて立ち上がった。クラシスはずっと重心をおとしマリーを守る位置に移動したが、犬神は何を考えているのかわからない表情のまま夕日を反射する眼鏡越しに近右衛門を見つめる。

「わしが好き好んで大切な生徒を巻き込むと思っておるのか!? 平和に過ごしてほしいと思つた孫を犠牲にするとでも思つたのか!? 大切な友人の息子に……アヤツを同じ過ちを犯させたいと思つているわけがないじやろう!! しかし、わしの力はあまりに小さい……。立派な魔法使いともてはやされたこともあつたが……所詮わしはMM連合の手のひらからは逃げられん、小さな男なのじや」

眉毛に隠れた瞳の奥から涙を流し、老人とは思えないほどの覇気を流す近右衛門にマリーはにやりと笑いかけた。

「せやつたら……うちに依頼せえへん?」

「?」

「おい安川。僕たちは託児所の職員じやないんだぞ?」

「犬神君は黙つてて!!」

マリーの言に若干額に青筋が浮かぶ犬神。マリーは怖いのでそれを必死に見ないようにしている。

なかなか恰好がつかない二人であつた。

「うちらは探偵やけど金さえもらえれば何でもやるで!! さいわい、この中にはMM連合の息がかかった人なんておらへんし、犬神君くらいの実力があつたらMM連合も文句はいわへんやろ? どういう教育するかはあつちからのオーダーはきてへんのやろ?」

せやったら私らがここでのネギ君の保護者になる!!」

「し、しかし……君たちを巻き込むわけにはいか……」

「クライアント」

そこで、犬神はようやく会話に介入してきた。メガネをきらりと輝かせながら、マリーを後ろに下からせ、黒い笑みを浮かべる。

「僕たちは金さえもらえれば何でもやります。むしろそれ相応の報酬をもらいますが……いったん報酬をもらった以上裏切るようなマネはしません。万難を排して依頼を完遂させてみせます」

だから金をよこせよ。言外にそう言っているのはこの二年で犬神の思考回路を熟知したマリーにはわかったが、近衛門にはわからなかったようだ。

まあ、わかるうとわからなかうと……彼が出す結論は、マリーと近右衛門双方が望むところだった。

「犬神アンダーグラウンドサーチに依頼の追加じゃ」

そして、近衛門は速筆で一枚の契約者を書き上げ犬神に渡した。

「クラスへの魔法ばれの極力阻止。ネギ・スプリングフィールドへの滞在先提供。および、ネギ君があらゆることに対して自分で考え、意見を言えるように、経験と知識を与えてやってくれ」

のようなもの唱えようとしてマリーに飛びつかれ阻止されていたネギ。そして自分に向かつてくる長い前髪に片目が隠された小学生ぐらいの少女。

「あれは……夢？」

その時、教室のドアが開き、みんなが一斉にクラッカーを鳴らす。

「ようこそ!! ネギ先生!!」

「ふお!? な、何の騒ぎじゃ!!」

「あれ、おじいちゃん!!」

教室に入ってきたのはネギではなく、長い頭の自分の祖父だと分かり木乃香は慌てて駆け寄った。

「うわあ、そうやん。わかつとこうや、私。このクラスが歓迎会せえへん訳ないやん……」

「ふむ。これはすべてタダなのか？」

「割り勘にきまつとるやろ!! つていうかなんでついてきトンねん!! ここは女子中学やでー!」

「依頼のために決まっているだろう。このガキは目を離すと危ないということは今十分知ったところだ」

「あわわわわ!! す、すいません」

そして後から入ってきたネギとマリーの隣を歩く見慣れない人々に、クラスメイトたちは警戒心をあらわにした。

「あなたたちだれですか？　ここは男子禁制の女子中ですよ？」

「ああ。いいのじゃよ、雪広君。彼らは今日からネギ君の家主になる人たちじゃ。これからいろいろあるじやろうから挨拶してもらおうと思つての」

みんなを代表してそう質問しに行く雪広に学園長は慌ててフォローを入れた。

「ごめんなくあやか。このひと達、私のバイト先の社長と社員やねん。今日だけは堪忍してくれへん？」

「まあ、マリーさんがそういうのなら……」

申し訳なさそうに手を合わせるマリーに雪広はしぶしぶとひきさがった。クラスのストッパーとして活躍するマリーには雪広も一目置いているのだ。

そして始まるパーティ。人の波はネギ先生に群がるチームと犬神に群がるチームに分かれる。

ネギのほうには昼間質問したりなかった姦しい一般生徒たちが。犬神のほうには普段めつたに裏にかかわつてこない犬神の参戦をいぶかしんだ裏の関係者が集まる。むろんその中にはタカミチもいた。

そしてマリーのほうにも……

「ねえマリー。あんた私になんか隠していない？」

「ぶふあ!!」

明日菜が突然そう尋ねてきて、マリーはあからさまな狼狽を示す。

「え、え？ な、何の話？」

「た、たとえば……あんたには笑われるかもしれないけど……ネギが超能力者とか!!」

杖見たのに何でその思考に行きつくんや!! とツツコミを入れてやりたかったが、マリーは必死に我慢する。ここでそんなこといつてしまえばすべてが台無しになってしまうからだ。

だが、

「知りたいか神楽坂明日菜？」

マリーの努力は……

「だったら明日の放課後。僕の会社に来るといい」

そういつて、明日菜に名刺を渡した犬神の手によって木端微塵に打ち砕かれた。

後日談というか、学園長と木乃香の会話。

「あれ、おじいちゃん。ネギ君私たちのところに泊まるんちゃうん？」

「ふむ。事情が変わってな。あっちのほうが部屋数も多いし、スペースもあるというこ

とじゃから泊めてもらえることになったのじゃ」

「そうなんや。ちよつと残念やなあ。ネギ君おつたらいろいろ楽しくなる予感がしたんやけど……。具体的には魔法使い的な事件に巻き込まれるような……」

自分の孫の勘の良さに、近衛門は戦慄を覚えたのだった……。

閑話・ネギの初依頼

「で……………ここは一体何の会社なんですか？」

「え……………」

ネギがこの会社に来てしばらくたつてのことだった。

ネギの質問にマリーは思わず氷結する。

「えーつと……………」

マリーは正直に答えるかどうか、かなり迷った。

『自称少年探偵事務所。ただし、やっていることは不倫調査をするペット探偵で、金がある人のためしか働かへん外道会社やで♡』

なんて、正直に答えることはできない……………。

「え……………えつとな、ネギ君……………。うちの会社はな、裕福な層をターゲットにした困った人を助ける仕事なんよ」

今回のメンバーは犬神とネギの二人。

本当はマリーもついてきたが、対象の名前を聞くと遠い目をして、『掃除してるわ』と喋ってさっさと部屋の掃除に戻ってしまった。ネギは出かけるさいに『気をしっかりと持つんやで』といわれた。

いったいこの仕事の先に何が待っているというんですか!? と、ネギが戦慄を覚えたのは秘密である。

「この人は自分探しの旅の常習犯でな。今までで計七十二回もの自分探しの旅に出ている」

「七十二回!? まだ見つかっていないんですか、自分!?!」

その回数に驚愕しながらネギは屋根の上を跳び移った。場所は民家の屋根の上。ここも近道だそうだ。

「奥さんはそうとうお怒りでな。全身の骨をたたき折つても連れ帰れとのことだ」

「え、えつと……。その人の名前はなんていうんですか?」

先ほどのセリフは聞かなかったことにして、ネギは話を無理やりに進めようとする。なかなか賢明な判断だった。

「ターゲットの名前は村雨アンドリユ」

「へえ……。ハーフの方なんですな」

「三十八歳妻子持ち……奥方からの依頼だ」

「……………」

もう黙り込むことしかできないネギであった。

「ふむ……なんだ。お前は何も言わないんだな」

「え……？　な、何か言ったほうがよかったですか？」

はあく。

犬神はため息をつくとき、ネギのほうへふりむき両手を両肩に置く。

「いいか野菜。僕の探偵事務所の助手には必須のスキルがある。これからも必要になってくるだろうから、必ず体得するんだ!!　いいな!!」

「は、はい!!」

いつになく真剣な犬神のセリフに、ネギは固まる。

「いいか？　僕の探偵事務所の助手に必要な必須スキルは……」

ゴゴゴゴゴゴ!!　と犬神から立ち上がる気迫にネギはごくりとつばを飲み込んだ。

「ツツコミの瞬発力だ!!」

「……………」

その時のネギの顔は、将来的にジャック・ラカンのもとで修行するときは無理やりさせられた嫌な顔たちよりも、さらに嫌そうな顔であったという……。

水塔を持ち上げている箱状の壁があり、その壁には無数の落書きが書かれていた。落書きの内容は至って普通の筆跡で書かれた文字。しかし、じぶんとはくじぶんとはくと数に近い文字が、壁一面を埋め尽くすように書かれている光景はちよつとしたホラーだった。そしてその前には、黒いポロシャツを着た男が一人ブツブツ何かを呟きながら立っていた。

「すべてここで発見したのだ!!　そして今日も!!」

「だああああああ!!」

犬神の話を聞き終えたネギはそのまま見事なスライディングを披露し、ずっこけた。

「お。今のは、なかなか良かったぞ」

「そ、そういう問題では……。あと、それは推理とは違うと思います」

鼻を抑えながら立ち上がってくるネギに、犬神は感心の声を上げた。

「大体なんでこのひと、捕まると分かっているとどこに来ているんですか?」

「野菜。三十八歳にもなって自分探しをしているような人間に論理的思考を期待するな」

「……………」

もう言葉もないネギである。

そんな時だ、

「ひどい言われようだな」

初めて男が発言した。そしてやたらと大物な雰囲気流しながら、ふりむいた男は不敵な笑みを浮かべながら犬神たちのほうを振り向いた。

「ま、根拠はないけど、ここに来たら答えが見えそうな気がするのね……。まあ、なんにしても久しぶりだね、犬神君」

そういいながら、村雨アンドリユー（38・妻子持ち）は、彼の自分探しの旅の妨害にきた外敵たちと相対するのだった。

……†……†………†………†………

「な、根拠なし」

「はい………そうですね」

そんな雰囲気は一切気にせず、犬神とネギは話を進めた。

「………まあいい。聞いてくれるかい犬神君」

「断る！」

「即答!？」

微妙に適応しつつあるネギが思わずツツコミを入れるのを満足気に見てから、犬神はアンドリユーに向かって歩いていく。

「要件は一つで、選択肢は二つだ。このままおとなしく帰るか、それとも僕に無理やり帰らされるかだ。十秒やる。好きなほうを選べ」

最後に、凶悪な鋭い瞳で眼を飛ばしながら、犬神は回答を迫る。しかし、アンドリユーはそんなことには一切ひるまず、はあくとため息をつきながら、首を振った。

「自分を探しに来ること七十二回。何度か答えらしきものは見えたが、それをつかむ前に七十二回連続で君に連れ戻された……。それに少しでも抵抗できるように体を鍛えてみたりしましたが……」

そこで、なぜか空中に映像が投影されるのを見て、ネギは『どうやってるんですか!?! 魔法!?!』と驚く!

「惨敗」

犬神君に殴り飛ばされて鼻血を噴出させながら吹き飛ぶアンドリユーさん。

「惨敗!」

犬神君のアップパーカットを食らい、鼻血を炎のように噴出させながらスペースシャトルのように飛んでいくアンドリユーさん。

「また惨敗!!」

もはや犬神君に何をされたのかもわからず、弾丸のように錐もみ状に回転しながら吹き飛びアンドリユーさん。

「ちよつとはこりましようよ……」

最後には両手両足が決して曲がらない方向に曲がってしまったアンドリユーさん（死に体）を引きずり夕日に消える犬神君を見て、ネギは顔に縦線を入れながらそう言った。

「頼む犬神君！ あと一日でいいんだ!! 僕に時間をくれないか!!」

「え、そんな短い時間でいいなら……へぶ!!」

「残念ながら、あなたの奥様からはソツコーで連れ戻せと言われてます」

何か余計なことを言いかけた野菜にスペシャルチョップを喰らわせながら、犬神はずんずんとアンドリユーに向かって進んでいった。しかし、

「ただとは言わない……」

アンドリユーのその言葉に、犬神の歩みが止まった。

「君たちが妻からどれほどの金額をもらっているのかは知らないが……僕を見逃してくれたら、その三倍を出そう!!」

「!!」

ネギはその言葉を聞き、もう決まったなと思った。自分を預かってくれて、面倒を見てくれている犬神のことは尊敬しているが、彼の唯一（笑）の弱点が金である。

こんなおいしい話犬神さんが蹴るはず……

「断るー！」

けるはず……………！けた!?

「い、犬神さんどうしたんですか!?! 普段ならこんなおいしい話ほうっておかないのに!?!」

「ふー。安川にもいったがな、野菜……………」

犬神はそんなことを言いながら、きらりと眼鏡を光らせ、まじめな声音でこう言った。「いったん金をもらって、金で転ぶような美学の欠けるようなことをしては、次の仕事につながっていかんからな……………どんな仕事でも信用を無くしたら終わりだぞ？ 覚えておけよ、野菜」

犬神のその言葉に、ネギは再び瞳をキラキラと輝かせる。

か、かつこいい!!

「や、やっぱり犬神さんは最高の少年……………」

「と、いつとくと表向ききれいに聞こえるな」

ネギが賛辞の言葉を送ろうとした直後、犬神が言ったセリフにネギは固まってしまった。

「え？ 表むき……………」

「そうだ。僕の調査では村雨家の財布のひもは完全に奥方が握っていてな。彼がどうこうできる金なんてものはスズメの涙だ」

「え、じゃあ三倍っていうのは？」

「その場しのぎの嘘だな!!」

「ひ、ひどいです!! アンドリユーさん!!」

ネギの涙ながらの抗議の声に、さすがに罪悪感が芽生えたのかアンドリユーはすつと視線をそらす。

「まあ、実際金を持っていたとしてももらんがな……」

「そ、そうなんですか？」

犬神の言葉を少し意外に思いつつネギは首をかしげる。

「当たり前だろ? もし彼の言うとおりで自分探しが終わってみろ。収入はそこで打ち止めだぞ」

「いや……まあ、そうですね」

「だったら、どう考えてもこれから先、十回でも二十回でも家出してもらったほうがお得ではないか!! ククククククククククククククククククククククク……フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

どす黒い笑みを浮かべながらそんなことを言ってくる犬神に、ネギは思わずドン引き

する。十歳の少年が見るにはいささかダメメージが大きすぎる笑みであった。

「さあ、さっさと帰るぞ、三十八歳。とつくに十秒過ぎ……」

そして、そのどす黒い笑みをひっこめて、振り返った犬神の目には、

「あ……」

やたらと分厚い、床に設置された非常用出口から逃げようとしている、村雨アンドリュウの姿だった。

「……………」

二人が愕然として固まっている間に、アンドリュウはさつと扉を閉め、これまたやたらと頑丈なカギをかける。

「やさしいいいいいいいいいいいいい!!」

「む、無理です!! あんな分厚い扉、魔力で強化しても開けられません」

「ちっ!! だったら仕方がない。お前は杖を使って出口に先回りしろ!! 認識障害を忘れるなよ!」

「は、はい!!」

ネギがそう答えながら杖を展開するのをしり目に、犬神は気での強化なんてされていない普通の右手で……

「ふん!!」

での敵のようにアウトローの人間ではないのだ。

少しだけ短絡的思考をしてしまった自分に反省しながら、ネギはとりあえず、何が彼をそこまで駆り立てるのか聞いてみるとした。

ネギ自身、いろいろと繊細な生徒たちを受け持つ中学生教師である。アンドリュウのケースは特別ではあったが、自分探しの旅については、正直他人ごとではない。

「あの……アンドリュウさん。どうして自分探しの旅なんてしようと思ったんですか？」

「!! ……き、聞いてくれるのかい!？」

「え、ええ。まあ。他人ごとではないので……」

少し異常なほど喜ぶアンドリュウにのけぞりながらネギは頷く。

「そ、そうかい!! それはよかった!!」

そして、アンドリュウはさめざめと泣きながら、

「犬神君はただの一度も聞いてくれなかったからね……。マリーという女の子は聞いてくれたんだけど……途中で犬神君に邪魔されちゃって」

それやか……。若干乾いた笑み浮かべながらネギは首を振った。マリーが苦勞する理由がなんとなくわかるといったところだ。

「では……。ほん。僕はある日思ってしまったんだ……。なぜ僕はここに存在するのか」

最終的に見事なボケと突っ込みの応酬を繰り広げてしまうネギなのであった。

後日談というか、事務所での会話。

帰ってきた犬神とネギが、いろいろ曲がつてしまった不思議生物を連れ帰ってくるのを見て、マリーは特に何を言うこともなく手を振った。

「お帰りー犬神君。奥さんが医療スタッフといっしょに待ったはるから、そこで報酬もらってや」

「わかった。野菜はこっちにおいていくぞ。余計なことをいわれてはかなわんからな」

犬神はそういって、さっさと事務所の中に入ってしまう。

「姬ちゃん……」

「何、ネギ？」

そして疲れきた表情で、ネギはマリーの手伝いで事務所の前掃除をしていた姫に話しかけて一言こういった。

「僕……犬神さんみたいには絶対にならない」

「それはとてもいいことだと思う」

麻帆良は今日も平和だっ………た？

3話・O☆KA☆MAヤクザ

神楽坂明日菜は迷っていた。

現在彼女がいる場所は、白い箱のような印象を受ける『犬神アンダーグラウンドサーチ』。一癖どころか、癖しかない少年探偵が経営する探偵事務所の前である。

そんなところに彼女が来たのは昨日言われた犬神の言葉が気になってしまったからなのだが、

「うくん。なんかここに来るまでに聞いた噂を聞いていると、入りたくなくなってくるのよね……」

犬神アンダーグラウンドサーチは意外と入り組んだところに立っており、ご近所の人には有名だが初めての人が訪れるのは多少難易度が高いだろうという何とも複雑な立地だった。

そんなわけで明日菜は道に迷うたびに近所の人たちに道を聞いていたのだが、彼らがお道教えるついでに言ってきたセリフたちがこれである。

『え、あそこに行くのかい？ 御嬢さん……悪いことは言わないからまずは警察に頼りなさい。彼らに頼るのはそのあとでも遅くはないだろう？』

「いや……私ちよつと外で待つてるから、お話終わったら呼んでくれない？」

「いや、来て早々にゆーとんの……。お茶でも出ささかいちよつと待つといて」

「必要ないな……。客でもない人間のために無駄な茶葉を使うな」

明らかに及び腰になつてゐる明日菜を無理やり座らせ台所に行こうとしたマリーを、犬神の言葉が制止させた。

「犬神君……もうちよい言い方があるやろ。あと明日菜を呼んだん犬神君やん」

「とはいえ金を落とさない奴のために金を使えば明らかにマイナスだろうが」

「君はホンマ人としてくさつとんなあ……」

若干顔に縦線を入れるマリーは無言でお茶を注いできた。犬神自身この程度の出費をいちいち気にする男ではない。先ほどのセリフは気分によつていわれるか言われなにかぐらゐのどうでもいいことなのだ。

「だが、安川。僕たちはまだクライアントをもてなしてゐるところだ。あまり私生活を見せて遠慮をされては困るからな。通すならお前の部屋に通せ」

「ああ……それはごめん」

普通に正論を言われてしまい、頭を下げるマリー。そこで明日菜はようやく自分と向かい合つてゐるよう設置されたソファアに座つてゐる女性に気が付いた。

「あ、すいません。お客さんがいたんですね」

「いえ、いいわよ。気にしないで。依頼が終わって報酬の清算のために来ているだけだから」

若干気の強そうな、髪を金色に染めた大学生ぐらいの女性は、胸元に抱えた犬を見せながら若干ひきつった笑みを見せている。どうやら先ほどのマリイの話は彼女に聞かせるために話されていたようだ。

「そうなんですか……。依頼って、そういえばマリイ、今日休んでいたわね」

「いろいろあつてん……。ああ、そうや、犬神君」

「ん？　なんだ安川」

マリイと呼ばれた犬神は近づいてきたが、

「ふん!!」

マリイが手品のように出現させハリセンの持ち手の部分（ガムテープ・ビニールテープで補強されているため、紙製のハリセンとはいえ当たると結構痛い）で殴りつけられた。

「フツ」

安川はそういうと華麗にハリセンを回しながら納刀。一仕事を終えた侍の顔で決めポーズをとる。

「おい安川。ハリセンの柄のほうで顔面をつくという行為は、ツツコミというよりも、も

はや限りなく暴力に近い」

「ほーん……。せやったらよけたらええやんか。大体そんないうやったら、さっきの依頼で可愛い助手を高さ200メートル近いビルからけり落とすいう行為はいつたいたなんやっちゅーねん」

そんなことされたの!?! 驚愕する明日菜を完璧に無視して、犬神はきらりと眼鏡を光らせる。

「獅子は……子を鍛えるためにあえて千尋の谷に……」

ゴスツ（マリーがハリセンの柄で犬神を殴りつける音）

「そう……あえて言うならば愛ゆえに……」

ゴスツ、ゴスツ！（マリーがハリセンの柄で犬神の顔を二連打する音）

「痛いな、冗談だ。あとそれはさっきからいつているように暴力」

ゴスツゴスツゴスツ!!!（もう無言で、マリーがハリセンの柄で犬神を殴り続ける音）

「……あ、痛っ」

「はあ？」

もういくつも青筋を浮かべながらマリーはひたすら犬神を殴り続けた。しかし犬神は一向に懲りた様子もなく反論を続ける。

「結果的に下で待っていたクランレスにお前を届けるためにはあの選択肢しかなかった

のだ。割り切れ」

「ああ……それで私生きとったんや。つて、ほかにもチョイスあつたやろ!? 両手もあ
いとつたし、なんも持ってへんかったやん!! なんでファーストチョイスが足!!」

マリーの猛烈なツツコミに、犬神は遠くを見つめるような瞳をして一言。

「すべては……お前のためだ」

「こつち見ていえや……」

あからさまにマリーのほうを見ようとしない犬神のど元に、ハリセンを突きつける
マリー。そのハリセンには若干気が通されている。

「そもそも結果的にって何やねん!」

「冗談?」

「なんで疑問形!」

そんな風いつもの漫才を繰り広げるマリーや犬神たちにあきれやら、驚くやら
……もういろいろと達観してしまった明日菜や依頼者の女性に、克蘭レスが、マリー
が入れかけていた紅茶を出した。

「めっちゃ怖かったんやで、も〜」

「心外だな。僕の冗談が笑いよりもまず恐怖を呼ぶとでも?」

「おもつくそよんどるやろうが!! あくもうううううう!!」

最終的にブチギレたマリイがハリセンの一撃で、犬神のメガネを吹き飛ばすことにより終幕する。それを見て依頼者の女性は苦笑をうかべながらマリイに話しかける。

「まあ、お互いダメな親もつて苦労するわねえ。私の父親もこの子助けるために車にはねられて死んじゃったし」

犬を抱えながらそういう依頼者に、明日菜はさらに驚く。明るそうに見えてそんな過去抱えていたの?! といった感じだ。

「はっはは!! そうでもありませんよ」

「なんで君が答えてんの?! しかも笑いながら!!」

しかし、依頼者の言葉に答えたのは犬神だった。あからさまな愛想笑いを浮かべながらそう答える犬神にマリイは怒鳴り声を上げる。

「何を言っている安川。お前はここに来てからまともな生活を送れているし、借金取りに追われることもなくなったじゃないか。さらに健康的な生活を送っているため肌艶もよくなったし報酬も入る。収支的に見れば明らかかなプラスだろう」

「う……。まあ、それはそうやけど……」

そこで犬神はきらりと眼鏡を輝かせて決め台詞をはなつ。

「お前が失ったものなんて……せいぜい、親子の絆ぐらいのものだろう!!」

「デカッ!! 結構でかいそれ!!」

いまさらながら驚愕とするマリーと、もうちよつと言いつてもものがあるだろうと依頼者と明日菜が愕然とする。

「そうか？」

本気で不思議そうな顔をする犬神に絶句することによって、この話題は終息した。

「それじゃ私は帰るわね。マリーちゃん。私麻帆良でスクールカウンセラーやつてるから何かあったら相談にきなさい。お茶を出してお話聞いてあげるから」

「うう。ほんまおおきにな」

「ご利用ありがとうございます」

そして、依頼者が腰を上げ帰ろうと出口に行くのを見送つてから、犬神は鋭い瞳を明日菜に向けた。

「さて……あの野菜の話だったな」

「ええ。私はそれを聞きにきたの」

そして、ようやく流れ始めた真剣な空気マリーがツバを飲み込んだ時。

「ゲル様」

「あ、クランレスさん。今日はどうもありがとうございます」

「いえ、クライアント様。その言葉をおっしゃるのはいささか早すぎるかもしれませんぞ」

そんな状態なので何もできない明日菜は、とりあえず近くににいるハリセンを構えたマリーにそう訪ねてみた。

「いや……なんやわからへんねんけど、その依頼者さんが犬の散歩しとつたらな、突然ヤクザの人たちに囲まれて、札束渡されて、犬拉致られたから取り返してほしい奇怪な依頼受け取ったんやけど……」

「あははは、奇怪でごめんね。私もちよつと意味わかんなかったから警察に頼れなかったのよ……」

隣で伏せている依頼者も若干顔をひきつらせている。

「ほんでその時犬を取り返すために敵対したんがあの人なんやけど……銃をガンガン撃ってくるから明日菜はそこにおつてや〜」

「銃!?!」

「銃だけにガンガン」

「犬神君下らんこと言うてる場合ちゃうやろ!?! つーか克蘭レスさんも何フツーに通しとんの!?!」

「失礼マリー様。ゲル様が仕事は終わったとおっしゃってましたので。てへぺろ(・ω<)>」

「てへぺろ(・ω<)>!?!」

老紳士の口から洩れる信じられない一言にマリーたちは思わず固まった。

「そんじやまあ……御嬢さん。その犬、返してもらおうか？」

「ふ、ふざけないで!! 大体この子はもともとうちの子で……」

依頼者がそういつて、男に向かって反論の声を上げようとした時だった!

「わるいごはいねくがあああああああ!!」

やたらと野太い、なまはげのような怒声とともに、部屋にあつた通りに面しているはずの壁が粉碎!! もうもうとした土煙を上げながら一人の人物が殴り込みをかけてきた!!

「な、なんや!?!」

「なまはげ?」

犬神とマリーがそういつて戦闘態勢を取り、その人物を見つめる。

ぴつちりと体に密着している深いスリットの入ったドレス。そこから覗く網タイツにガーター。靴はおしゃれなハイヒール。

「さあて、私の可愛いわんちゃんをそろそろ返してもらおうかしら?」

そんなことを言いながら土煙から出てきたのはピンクのルージュを口に塗った……。

そして、オカマの言葉聞いた途端、オカマ組長がふった豪腕によって吹き飛ばすチンピラ!!　そして、チンピラは壁に激突し意識を失った。

「ば、バカ野郎!!　何年姐さんの下でやってんだ!!　アニキはNGワードだろうが!!」

「え、NGそこなん!!　オカマやないの!?　ってか、組長?」

突如として明かされるオカマの身分にマリィは愕然とした。

こ、こんなが組長とか、この人たちの組大丈夫なんかいな!!　（いろんな意味で）

マリィがそんな風にあきれている時だった。

「え、えつとマリィ。そろそろ外に出ていい?」

「ああ、うん。かまへんよ」

いい加減、床の寝心地が悪くなってきたのか……。そういつてきた明日菜に、マリィはため息交じりに答えて明日菜をたたせる。

「ねえ、あんたいつつもこんな人たち相手にしてんの?」

そして、若干半眼になりながら尋ねてくる明日菜に、マリィは涙を流しながら頷いた。

「今回は特殊ケースやけど、ヤクザやったら週一のペースで来て犬神君に返り討ちにされてんで」

「それはさすがに多すぎない!?!」

そんな無駄話を一切無視して、明日菜と同じように立ち上がった依頼者は組長(?)に

食って掛かった。

「あ、あんたが親玉!? そいつらにこの子を拉致するように命令した張本人!」

「ええ。そうよ……。おや……。いうならば母みたいな存在なんだけどね?」

「母!」

気持ち悪さに鳥肌を立てた明日葉がツツコミを入れるが華麗にスルーし、組長(決)話を続ける。

「それにしても拉致とは失敬ね、ちゃんとお金は払ったじゃない」

「無理やりじゃないの!! 大体なんでヤクザの親分さんがこんな犬ほしがるのよ!!」

依頼者の言葉に、組長(怪)は少しだけうつむき暗い顔をする。

「……………だからよ」

「え?」

「そんな可愛いわんちゃんをこんな犬呼ばわりなんて、そんな……そんな人にその子を預けておくなんてできるわけじゃないじゃない!!」

「[[[あゝ]]]」

号泣しながらそう言い切る組長(泣)にマリーたちは思わず氷結した。

え、マジでそんな理由なの? みたいな白けた空気が事務所の中を漂う。

「ふん……………あきらめな」

そして、その空気を払拭しようとしているのか（できないだろうが）先ほど克蘭レスに連れられて入ってきた男が恰好をつけながら組長（照）の前に立ち、

「姐さんはなあ……可愛いものが大好きなんだよ!! そう、三千世界あまねくすべての可愛いものが私のものっていうぐらいにな!!」

クワツと気迫を込めながら、かつこ悪いことをいう男に、もうマリーたちは顔に縦線を入れっぱなしだった。

「ほら……こんなこと言うの恥ずかしいんだけど……『あたしのはあたしのも、あなたのものもあたしのも』みたいな！ テヘ」

『『剛田さんちの息子さん並み!?!』』

マリーたちの脳裏そんな言葉が浮かぶのも仕方ないと思えるほどの横暴っぷりだった。おまけに照れながら言っている……。

「えつと……そんな理由でこの犬追いかけてったん？ 取引の物を飲み込んでしもうたり……」

「何か重要な秘密を握っていたりは……」

マリーと明日菜が最後の希望とばかりに尋ねた質問に男はしっかりと首を振り、

「ねえ!!」

もうすがすがしいほどきっぱりと言い切ってくれた。

「通りで一目ぼれしちゃってえ!! てへぺろ(・ω・)」

ものつすごい悪寒とムカつきを覚える組長(変)にマリーはプルプルと震えながら一言……。

「そ、それが大金はたいたり、銃ぶつ放したり、人んちの壁ぶち破って登場したりするほどの理由かあほおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「やあね。あたり前田のクラツカーじゃない」

「姐さん。その返しはとても古いです。多分この小説を読んでいる人は誰もわからないと思います」

マリーの魂のツツコミに返される時代錯誤な言葉に、明日菜はもう言葉もなく呆然と自体に流されることしかできなかった……。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

そんなやりとりはともかくとして、ピンチである。

そりゃあもうこの上ないくらいにピンチだ。

何せ民家の壁を拳でぶち破って入ってくる怪物(真)が今回の敵なのだ。

犬神が負けるビジョンは全く浮かばないが、それでも万が一ということがある。何よ

り今回狙われているのは依頼者だ。犬神を抜かれて彼女に接近されただけでも依頼は失敗ということになる。

「それじゃ姐さん。さっさと犬取り返して帰りますよ」

「わかっているわよ。私だつてさっさとあのわんちゃん取り返して愛でてあげたいもの。というわけで、カワイ娘ちゃんたちとクールな坊や。そこをどいてくれないかしら。子供を殴るのは趣味じゃないの」

オカマの中に秘めたヤクザの風格を漂わせながら、組長は傲然と言い放った。その言葉に嘘はないのか今のところ明確な敵対行動はとっていないマリーたちに向かってこぶしは握られていない。

とはいっても、マリーも一応プロの探偵助手だ。一度受けた依頼を怖いからといって反故にすることはできない。

「犬神君。私があいつらの気いひいとくからノーラ（依頼者の名前）さんを安全な場所に……」

そしてマリーが段取りをつけようと犬神のほうを振り向いた時、

『ズズズズズズズ』

犬神はそんな音を立てながら明日菜が飲んでいた紅茶をすすって、ソファアでリラックスをしていた。

「つて、何しとんのや、犬神君!! あと人の飲みさしのまんとつて!」

「ん? 何を言っているのだ安川。ノーラさんとの依頼は犬を取り返し此処に連れてきたことで満了している。なぜ僕がそんなことをしなければならんのだ」

「!!」

「そうだ、犬神はこういうやつだったとちよつとだけ泣きながら思い出すマリー。もう明日菜も半眼を超えてどこか遠いところを見つめてしまっている。

「で、でも怒ってへんの犬神君!! 家の壁ぶち壊されたんやで!!」

「そこで方向性を変えてみるマリーだったが、

「あ、そこは気にしないでいいわよ、ボウヤ。さすがに壁の修理代くらいならだすわあ。今回はちよつと大人げなかったかなあと反省しているんだから」

「組長からの言質はとれた犬神は、フムと頷きながらマリーにひとこと。

「そういうことだ」

「つて、おとおおおおい!!」

「もう縦線入れっぱなしのマリーのツッコミ。

「そんな様子を見て、今まで無言だった明日菜はツカツカと犬神に歩み寄り、
「あんた何言ってるのよ!!」

「手を思いっきり振り上げた!!」

「ん?」

犬神はその態度を心底不思議に思いながら、明日菜の平手打ちを片手でとめ即座に関節を決め地面に転ばせる。

「きゃ!!」

そして無理やりうつぶせに寝かさされた明日菜の背中にドシンと座りながら、噛みつかれないように頭を足で踏みつけながら抑える。

「何のつもりだ、神楽坂明日菜」

「ちよ、犬神君やりすぎやで!!」

クラスメイトに訪れた突然の暴力に、さすがのマリーもあわてて犬神をどけにかか
る。

「さっきまで依頼を受けていた人が困ってんのよ!! なんて何にもしてあげないのよ!!
それでもあんた探偵なの!!」

マリーに助け起こされた途端ギャンギャン噛みついてくる明日菜に、若干不機嫌にな
りながら犬神は眼鏡を輝かせる。

「確かに僕は探偵ではあるが、それ以上にプロフェッショナルだ。金もないのにただ働
きができるか」

「な!!」

「神楽坂明日菜。この業界の素晴らしい格言を教えてやろう」

そして、若干の殺気をはらんだ瞳で明日菜を睨みつけ犬神はこういった。

「正義感で腹は膨れないのだ」

「つく!!」

生まれて初めてさらされる殺気に、明日菜は冷や汗をかきながら数歩下がってしまった。それほど犬神の殺気は強烈だったのだ。しかし、それでも明日菜はひかなかった。正義感は一倍感明日菜がこのまま引くわけがなかった。

そして、明日菜が再び口をひらこうとしたとき！

「せやったらこれで文句ないやろ、犬神君!!」

今まで何かをこそそこそとしていたマリィが、一枚の紙を持ってきて犬神につきつけた！

「ん?」

犬神がその紙面に目を通すと、そこには犬神アンダーグラウンドサーチの依頼承認書と、ノーラのサインがかかれています……。

「ふん。仕方ない」

犬神は特に何の感慨もなくそれを受け取ると、傍らに控えていた克蘭レスにそれを保管するように言い渡し、ノーラを守る立ち位置までやってくる。

「ふ〜。かわいい子に手を上げるのは本意じゃないけど、何事にも優先順位つてものはあるからねえ」

組長はそういういながら腕に力を込める。するとその腕は見る見るうちに盛り上がり、リンゴどころかスイカでも握りつぶせそうなほどの極太の筋肉を顕現させた。

「あやまんなら今のうちだぞ」

それを見た組長と一緒に事務所に入ってきたチンピラの一人が冷や汗をかきながら不敵に笑う。

「て、めえも結構な運動神経をしているみたいだが……うちの姐さんはマジモンの化け物だ!」

瞬間。振り抜かれた組長の腕がそのチンピラの頭をとらえ吹き飛ばした!!

そして、壁に刺さって沈黙してしまうチンピラに最初に入ってきた男は半眼になりながら、

「バカヤロー。化物もNGワードだろうが……」

とつぶやき、

「さ、ささあああああああ!!」

明日菜とノーラは愕然とした表情で固まった。明らかに人間の出せる筋力ではな

かった。

そして、目を爛々と輝かせ、某八門遁甲の陣を七門まで開けた某忍者先生みたいに顔中に血管を浮かせた組長が怒声を上げた。

「誰が化物じやああああああああ!!」

「アナタDEATH^デス^ス!!」

「あなたDEATHとも!! 壁に人刺さっているもの!!」

もう何でもアリな光景に慣れてしまったマリーはともかく、明日菜とノーラさん思わずそうツツコミを入れた。

そして犬神は、

「お前のことに決まっているだろうが」

「おおん!?!」

「うわあ……度胸あるなお前」

怒り狂った組長がふりむき、最初に入ってきた男がそうつぶやく。そこにはポケットに両手を入れダラツと応接用の机の上に立っていた犬神が、平然とした表情で毒を吐いていた。

「いい加減自覚しろ。この珍獣が」

ブチチチチチ!!

もういろいろとキレまくる音が組長から響き渡るの聞き、男は即座に組長から離れた。

「だれが……希少動物だ、ゴラアアアアアアアアア!!」

そんな怒声とともに、犬神が立っていた机が殴り碎かれる!! 犬神は跳ね上がる机の反動を利用し大きく跳躍、次は執務用の机の上に着地した。

「いいや。人類の亜種かもしれないな」

「かわいかったら何言っても許されると思ってんじやないわよ!! キイ———!!」

怒り狂う組長をソファアの影から見えていたマリーは、さつと顔を引つ込め自分と同じようにソファアに隠れていたノーラと明日菜に話しかける。

「とりあえず、ここは犬神君に任せて、さつさと逃げ……」

しかし、マリーの言葉はカチャツという金属音とともにさえぎられた。

「ブウウウウウウウウツ!! ホールドアップだ、この野郎」

今まで特に目立たなかった、初めに入ってきた男が拳銃をマリーの頭に突き付けていた。

「おう、シットやで」

「マリー!!」

「ちよつと、やめなさいよ!!」

明日菜やノーラさんはひどく慌てた様子で男にかみつくが、マリー自身はひどく落ちていた様子だった。

「銃なんて無粋なもん持ち出すんとかやうよ。あの組長さんかて拳で戦つとるやんか」
「あいにくこちとら無粋な男でな。さつさと犬わたせ。いい加減こんな茶番うんざりなんだよ」

さすがに情けないとは自覚しているのか、男はちよつとだけ口をとがらせてマリーの揶揄にそう返し銃の安全装置を外す。

しかし、マリーとてだてにこんな外道な探偵会社にいたわけではない。この程度の事態なら日常茶飯事だ。マリーはひどく落ち着いた様子で男に隙を作ろうと口を高速回転させる。

「それにしても情けないやんか。お兄ちゃんかて、こんなことしとうてヤクザになったわけちやうんやろ。アンナ女か男かもわからへん様な唇で命令されて、犬一匹をあほみたいな理由で追っかけて右往左往……。あげく、こんかわいらしい女の子の頭に銃突きつけて脅迫つて……これが極道のやることかいな?」

マリーのセリフに、男はちよつとたじろぐ。組長の言葉の端々からも読み取れるが、彼が所属する組は今時では珍しい任侠ヤクザだった。本来ならこんなことは固く禁じ

られている。

しかし、

「し、仕方ねえだろうがよお!! お、おれだって本当はもつとVシネみてえなヤクザが……。だ、大体昔はああじゃなかったんだよ、うちの組長は!!」

そういつて男が取り出した写真。そこには明日菜好みの渋くダンディなおっさんが写っていて……

「昔はこんななんだったんだよ!! ザ・若頭ってかんじで、俺らの憧れだったんだよ!!」

「「うそん!」」

せつかくできたスキを逃してでもマリーを含む三人は思わずツツコミを入れてしまった。

「それが……何があったのかわかんねえけど、先代が亡くなって跡目継いだとたんあんな感じに……」

そこまで言つて、男は目元を抑えてサメザメと泣き始めた。

「や、ヤクザだつて色々とおあるんだよおおおおおおおおおおおお!!」

「泣いた!?!」

「どこからツツコんだものかしら……」

明日菜とノーラがそんな風に愕然としている中、

「出でよ!!」
アデアット

マリーは即座にカードからハリセンを顕現。紙でできているそれで……男がもつていた銃をたたき折った!!

「つて、はあああああああああああ!!」

さすがにそんな事態になつては泣いている余裕はなくなったのか、男は慌ててもう一丁隠している銃を取り出そうと懐に手を突つ込むが、

「遅いで!!」

マリーが振りぬいた気を通したハリセンで一撃され、きれいに吹き飛んだ!! そのさい、紙のハリセンからは到底聞こえないような硬質な音が響き渡るのを明日菜は聞いた。

《豪気功》

アメリカ軍所属の傭兵だったマリーの父親が戦場で戦闘をしているさいに編み出した特殊な気の運用法である。この気は流し込んだ物質や、使用者の体の硬度を自由自在に変える気功であり、紙のハリセンに流し込んで、岩をも砕く硬度に変化させることが可能なのだ。

マリーが父親に売られる際に唯一教えてもらった武技で、この会社の依頼で死なないように必死で鍛え上げたものである。

「はい。少し後片付けでもしようかなと思ひまして……。壁の瓦礫を掃除しております」

「いや、揉め事解決してからにしようやそれ!? さつきまでめっちゃピンチやつてんで!!」

「?」 ですが結構うまく解決したようではありませんか」

「いや、まあ、そうやけども!! ……はあ、もうええわ」

マリリーの不満を泰然とした表情で受け流すクランレスをみて、マリリーはため息をついた。そして、

「なあ、クランレスさん。さつきからおもったんやけど、なんで犬神君はさつきから反撃しいひんの?」

とりあえず目下のところ一番の疑問となっていることを聞いてみた。

あれだけ信頼しているという風なセリフをマリリーが言ったのに、犬神は一向に組長を攻撃しようとしていなかったのだ。常にどこかの家具に乗って組長の攻撃が来たらよけるばかりで……。周囲には粉碎された家具が無数に散乱している。

「そういえば先日、事務所の家具を新調しようかなとおっしゃられていましたね」

「え……それってまさか」

「?」

何やら話を通じたマリーと克蘭レスの様子に、ノーラと明日菜は首をかしげた。

そして再び視点は犬神たちに戻り、

「犬神ゲルとか言ったわよねえ。凄いじゃない。私と喧嘩して一分間以上たつていたのはピクニックで出会ったくまちゃんだけよ。二分後に私がおしくいただいちやつただけだ」

「いやなに……ようやく予定分が壊れたからな」

そして、犬神は軽くその場で跳ね始めた。

「これで終わりだ」

瞬動。

ゲルは瞬時に組長の目の前に出現した。

「ふん!!」

組長は即座に反応してコブシの二連撃をゲルに向かってはなつが、さきほどの出現はフェイント!! 即座に体を反転させ、違う方向へと瞬動を行ったゲルは拳を放ったことで技後硬直に陥っている組長の死角に回り込む。

『早い……!!? なるほど。今までは手加減していたということね! でもそんな細腕

じゃ!!』

犬神が話をさえぎられ首をかしげるのをみながら、明日菜は額に血管を浮かべながらこう言い放った。

「ネギはうちで預かります!!」

まあ、今日の光景を見たら誰だってそう言うよなあ……。マリーはそんなことを考えつつ、犬神と明日菜の仲裁に入るのだった。

……。
ちなみに、結局その日はネギが何者なのかを明日菜に話すことはできなかったという

4話・原作激変の瞬間

「それにしても、なんで明日菜に魔法のこと教えようとしたんや？ 別に内緒で押し切れへんかった？」

「それについてはお前のほうがよくわかるべきだとは思うがな、安川」

犬神と明日菜の大喧嘩（明日菜が一方的に突っかかる形で）が起こった翌日。学校生活を終えた犬神とマリーは『ネギをきちんと連れ帰る』兼『魔法を不用意に使ったりしないように、監視をしながら事務所に連れていく』ために図書室内で本を読みながらネギの仕事が終わるまで時間をつぶしていた。

「ああいった手合いは、一度気になることを見つけるとそのことが解決するまで付け回してくる可能性が高い」

「ああ……確かに明日菜やつたらやりそうやなあ……」

「それにあいつは記憶を失った裏の関係者のようではないか。遅かれ早かれこういった事態には巻き込まれていた。だったら英雄のネームバリューがある野菜に任せるのが適任だ。それに僕は女子校にはあまり入り込めないが、野菜は一日の大半をこの校舎で過ごすことになる。お前だけでは手が回らないことも多いだろう。そのための協力者

が必要だとは考えていたのだ。だったら一回ばれかけてしまった神楽坂にその任を手伝ってもらうのが一番手っ取り早い」

「そ、そこまで考えてたんや!!」

め、珍しく犬神君がかしこく見えんで!!

明日は槍でも降るんじゃないかとマリイが戦々恐々としていた時、

「それに……昨日の様子だと僕がしなければならぬ野菜のフォローを無料でやってくれそうだからな。こちらは寝ているだけで仕事が終わってくれる、という夢のシステムが出来上がるというものだ!!」

「つて、やっぱりかいいいいいいいい!! そんなことやと思ったわ!!」

マリイの見事なツツコミハリセンが犬神に決まる。

二人がそんないつものやり取りをしている時だった。

「あ……ありがとうございます」

「いえ……鍵をかけたのでしばらくは大丈夫かと……」

突如図書室の入り口あたりから聞こえてきた会話に、メガネを拾っていた犬神と、ハリセンをカードに戻したマリイは首をかしげる。

「この時間此処に来るやつはいるのか?」

「まあ、おらんことはないやろうけど……さつき施錠される音がきこえとつたなあ。せ

やったら私らのことに気づかんと図書委員の誰かが施錠してもうたんやろうか?」

「ふん。女子校のやつはずいぶんと無能なんだな?」

「犬神君……。そのセリフはうちの女子全員を敵に回してしまふさかい、外では言わんほうがええで」

さらつと毒を吐く犬神に縦線を落としながらマリ―は一応忠告しておく。

「ふむ。まあ、閉められたところで問題ないか。たいていのドアは蹴り飛ばせば開くしな」

「いきなりうちの校舎の設備壊すような考え方はやめてんか!」

マリ―と犬神はそんなことを言いながら、のんびりと図書室の入り口へと向かっていく。まだ中に人がいるということを伝えようとしているのだ。閉められてからそれほど時間はたっていないから、まだ近くに人がいるだろうと踏んでの行動だ。

そしてマリ―と犬神は目撃することになる。ちよつと信じられない光景を、

「何をやっているあの野菜は……」

「あ、あははははははは」

確かに人はいた……。しかし外にはない。中にだ。

犬神とマリ―が見たものは、

「み、宮崎さん、だめですよ!! 生徒と先生がこんなことしちゃいけないって、お姉ちゃ

んが!!」

「は、はい……そうですね。ごめんなさいです……」

そんなことを言いながら無数の本をまわりに侍らせた、ネギと宮崎のどかがキスをしたようにしているシーンだった。

「う、うわあ……じゃ、邪魔してもうたかな?」

気を使ったマリリーが顔を真っ赤にしながらか遠くの本棚へ移ろうとしている。

「ふむ……」

しかし、犬神は無言でマリリーの肩をつかみその行動を止めた。

「ん? なんや犬神君。あ! まさか依頼のために邪魔しようとかいうんちゃやろな

!?!? せやったら今回ばかりは拒否させてもらおうで!!」

「いいや違う。いろいろ危なそうだからお前は寝ている」

「へ!?!」

瞬間、マリリーの鳩尾に容赦ない拳が突き刺さりその意識を刈り取った!!

「ぶふふう!!」

口からなんかいろいろと噴出させながら気を失うマリリーを放置し、犬神は肩を回しながら今にもキスしてしまいそうな二人へと近づくのだった。

は、だったら自分で証明して見せろと言いつつその惚れ薬を無理やり飲ませてしまった。

ここからが大変だった。この惚れ薬……相手に飲ませて相手をメロメロにしてしまうものではなく、作った本人が飲んで周囲の異性を魅了してしまうという無差別型の惚れ薬だったのだ!!

そのせいでクラス中から追い回されることになったネギを、たまたま通りかかった本屋ちゃんこと宮崎のどかが助けてくれたのだが……どうやらその宮崎も惚れ薬の影響を受けてしまったようであるに至ると……。

「あわわわわわ!! だ、誰か助けてええええええええええええ!!」

ネギがそんな悲鳴を上げた時だった。

「世話を焼かせるな、野菜」

!!
そんな声とともに、何かが凄まじい勢いで宮崎の首に叩き込まれその意識を刈り取る

「あ、あれ?」

突如クタクタとなつて自分に倒れこんでくる宮崎を支えながらネギは声を出した人物を見た。

「い、犬神さん!?!」

「何をしている……」

「いやいや、その前に犬神君。君は私に一言いうとくべきちゃうん？」

「……すまない安川……。昨日お前が楽しみにしていたアイスを食べたのは実はクラレ
ンスじゃなくて僕だったんだ!!」

「そんなことは聞いてへんわ、ボケエエエエエエエエエエ!!」

気円斬バリの勢いでぶん投げられたハリセンが、見事に犬神の顔にヒットしその眼鏡
を吹き飛ばす!

「す、すごいマリーさん!! あのだんさんにあんなことをするなんて!!」

「ま、マリー今の私にはあなたが救世主に見えるわ!!」

「いや、私が起こる前に何されとってん!」

「ふむ。ちよつとした拷問だ。気にするな」

「いやいや気にするよ、犬神君! 警察に聞かれたら一発逮捕やで!」

そんな風にいつものやり取りをした後、

「神楽坂が自分でその思考に行きついてくれたのはありがたいが、このままでは依頼の
完遂は難しそうだな」

「そうやなく。今回はちよつとしゃれにならん事件になつてしもうたし……。ネギ君
には私からきつく言つとくわ」

そう。本当に今回の事件はシャレにならなかつた。1クラス内で起こつたとはいえ

今回の事件は魔法使いが起こしてしまった事故としては十分に大きな部類である。それこそ、魔法の存在が一般人に気取られてしまうほどの……。

「さすがにその場にいた全員がいきなり一人の男の子に惚れよつたら、怪しむ奴はぎよーさん出てくるやろうし……ホンマやつたらバレへんでも自首しなあかんランクやで？」

「あうう」

「そ、そんなにヤバかったの今回の件？」

マリーの真剣みをおびたセリフに、ネギはもう泣き崩れてしまい明日菜は顔を青ざめさせた。

「禁止されている薬品まで使ったんだ。大人の魔法使いだったらオコジヨの刑でもまだ軽いほうだろう」

「まあ、ネギ君はまだ10歳ヤシ（英雄の息子やし）、多少の事件は大目に見てもらえるとは思うけど……」

マリーの言葉に、ネギと明日菜はほっと安堵の息をつく。しかし、犬神だけは黒い殺気を垂れ流したまま不穏な言葉を紡いでいく。

「ふむ……このままでは誰であつても庇いきれなくなるだろうな。仕方がない……少し自分が置かれている立場について自覚してもらおう」

「え？ 犬神君……なにを？」

そして犬神は黒い笑みを浮かべながら、ネギを指差し一言。

「お前、実はメガロメセンブリア元老院にいいように踊らされているのだぞ？（笑）」

「ちよ!! 犬神君!」

マリーが慌てて止めに入るが、犬神は一向に気にした様子も見せず、言葉を紡いでいく。

「第一おかしいと思わなかったのか? いくら優秀とはいえ十歳のガキに中学校の教師が務まるわけがないだろう。ましてやお前はくしゃみで魔力を暴発させてしまうような未熟者だ。普通の魔法生徒だったらあと二年は卒業を見送られるはずだ。魔法使用に対する禁止事項についても疎いし、魔法がどれほどの重要度をもって隠匿されているのかということも知らなさすぎる。そんなガキが、『魔法が優秀だから』という理由で卒業できるわけがないだろう? お前が卒業した裏にはなんならかの力が働いていたと考えるのが妥当だ」

犬神によって次々と指摘される不審な点たち。幼いながらも優秀なネギの頭脳はそれを次々とつなげていき一つの線に造り替えていく。

それによってより明確になってきた大きな意志の介入に、ネギは底知れない恐怖を感じた。

すべて自分自身が目指して、作り上げてきたと思っていた道が、実は誰かの手によって敷かれたレールの上だったとしたら……。自分ではどうすることもできないような大きな意志の存在に、まだ幼いネギの顔は恐怖でひきつっていく。

「お前が受け持っているあの2—Aにも秘密が隠れている。裏や荒事関連では忍者に備兵、中国拳法の名門の令嬢や関西最高の魔力を持つもの……さらには神鳴流剣士までいるしな。表のほうでもかなりの人員がそろっているな。大財閥の令嬢や中学生でありながら大学の研究室に呼ばれるような超天才。まさに次代の英雄の従者にはピッタリな豪華な顔ぶれではないか？」

さらに師匠役にはあの吸血姫がいるしな。まあ、これはメガロメセンブリアではなくクライアントの考えだろうが……。

最後の重要な情報だけは伏せて（バラすとおそらくあの金髪幼女と戦わないといけなくなるだろうから、それがかなり面倒くさくて……）、犬神はクラスの秘密をすべて暴露した。

「従者候補?！」

暗に自分が受け持つ生徒は、彼に巻き込まれて魔法のことは知ること前提に集められたと告げられナギの顔色はいよいよ紙のように白くなった。それはつまり、自分が他人の人生を滅茶苦茶にしてしまう可能性があり、自分のいく末を決めたルールを引いた人物がそのことを何とも思っていないということを指す。とてもネギが信じていた正義の魔法使いのやることではなかった。

「ちよつと、なによ、それ?!? 聞いてないわよ!!」

さすがにこの言葉は聞き捨てならなかったのか、怒声を上げて犬神に食って掛かる明日菜。犬神はそれに眉をしかめながら、指をふるい近くに控えていたクラレンスに指示をだした。

「うるさい。黙らせろ」

「御意」

クラレンスはそういうと同時に、消失。そして明日菜の後ろに出現した。

「な!!」

「神楽坂様。申し訳ありませんが、今は主が話しておられますのでしばらく黙っていてください」

クラレンスはそういうと、明日菜を羽交い絞めにして再び消失。どこかへ消えてしまった。

「あ、明日菜さん!」

「こつちを向け野菜。まだ話の途中だ」

慌てて明日菜を探そうとするネギの肩に手をかけ、犬神は眼鏡をきらりと光らせ、ネギの行動を止める。

「お前はまだまだ知らないなければならないことがある。逃げるのはすべてを聞いてからにしろ」

「なに?」

「僕らが請け負った依頼は《ネギが一人でものを考えられるようにすること》と《クラス
の連中には極力魔法ばれを控える》ということだ。このままではあいつは、いつまで
たつてもメガロメセンブリアの連中に踊らされたままだし、クラスの連中にも多数の魔
法ばれを起こす危険性があった。このまま行つてしまえばいつかあいつは致命的な失
敗を犯す。そうならないためにも、ここであいつに自分の立場を自覚させる必要があつ
た。あいつの本当の敵はひどく強大で狡猾だ。だつたらできるだけ早いうちにそれを
自覚させて、奴の中に潜んでいる子供ゆえの甘さを消す必要があつたんだ」

「犬神君……」

苦悩するように肘をつき腕を組む犬神に、マリーは少し言い過ぎたかと反省する。そ
うやんなあ。いくら犬神君でも、十歳の子供に理由もなしにあんなひどいことするわけ
ないやん。

マリーがそう思い、犬神に頭を下げようとした時だった。

「そうしなければ、僕は依頼を完遂したことにはならず、報酬はいつまでたつてももらえ
なくなつてしまう!! そんなことだけは絶対に避けなければならぬんだ!!」

「つて、やつぱりかいいいいいいいいいい!! そんなことやと
思つたわこの外道探偵!!」

でござるが、僕に近づかないで下さいとかいって木の上に登って行ってしまつて……。今からほかの先生を呼びに行くところでごござる』

『ありがとう!!』

そんなやり取りをした後、明日菜は一目散に世界樹へと走つていき、その上へとあがつた。

そして、そこでようやく、一本の巨大な枝の上にうづくまつたまま動こうとしないネギを発見したのであった。

「近づくなつて……。なんで？」

「僕が……。明日菜さんを巻き込んでしまったから……」

「ネギ……。私は、気にしていませんわよ」

「それでも!! 僕が巻き込んでしまったのは違いありません!!」

明日菜はネギに近づいて慰めてやろうとした明日菜は、ネギの口から出た大きな叫びに思わず足を止めた。よく見たらネギの足元に水滴が垂れたような跡がある。おそらく、泣いているのだろう。

「僕は……。僕はバカでした。父さんを探すことしか考えていなくて、マジステル・マジギ《立派な魔法使い》になることをしか考えていなくて……。周りが見えていなかつた。ちよつと考えれば犬神さんに言われるまでもなく気付けてはずなのに……。結局気づいた時には手遅れで、

明日菜さんを巻き込んでしまつて、もう最低です!!」

ネギが素晴らしいながら、目元をこすり立ち上がる。そして、何かを決意したかのような表情で、明日菜のほうを振り向いた。

「僕……ここを出ます。ウエールズに帰ります」

「ちよ、ネギ!? どうして!!」

明日菜は慌ててネギに駆け寄り、その体を抱きとめた。

「なんであんたがそんなことしなくちゃいけないのよ!! 悪いのは全部、そのメガロ……何とかの人たちじゃない!!」

「でも!! 僕がみんなを巻き込んでしまうから!! 僕が何も知らないせいで、いつかあのクラスの誰かを危険な目にあわせてしまう可能性があるから……。そ、それに……」

そこで、明日菜は気づいてしまった。ネギの体が小刻みに震えているのを。それは、悲しみや怒りなどの震えではなく、純粋な恐怖からの体の震えであることを……。

「僕……怖いんです。もしも、この決断すらも誰かのレールの上だったら……。僕の夢や目標はすべてまやかして、誰かに植え付けられたものだったら……。そう考えると、もう何も信じることができないんです。メガロメセンブリアも、学園長も、タカミチも、クラスのみんなも、そして……自分自身でさえも!!」

小刻みに震えて泣きじやくるネギに、明日菜は困った。それはそうだ。彼の悩みはあ

まりの巨大で複雑すぎた。元関係者の明日菜とはいえ、今は記憶を失った普通の中学生だ。彼の悩みに答えてやれるほど人生経験を積んだわけでもないし、彼の悩みを解決してやれるほど大きな力を持っているわけでもない。

だが、そんな彼女でも。いや、彼女だからこそいえることがあった。だから彼女は大きく手を振りかぶり

ネギの頭に拳骨をたたき落とす!!

「ばかあああああああああああああああああああ!!」

ゴイン!! という、決して人の頭が出してはいけない音を立てながら、ネギの頭に荒まじい衝撃が走り、ネギの頭がアニメのように横に膨れる。むろん口の中からは何かい

ろいろと出てしまっていた。

「あ、あすなさん!？」

「なんでそんなことが言えるのよ!! なんでそんなにすぐ諦められるのよ!!」

明日菜はそういって、再びネギを抱きしめる。今度は先ほどとは思いの込め方が違う。強く、強く、だれにも負けないほど強く……ネギを慰め、諫めるために明日菜は強くネギの体を抱きしめた。

「あんたの思いが偽物ですって?! そんなはずないじゃない!! こうして後悔しているあんたも、ゲルのところでショックを受けたあんたも、私たちの歓迎会で笑っていたあんたも、本屋ちゃんを助けようと魔法を使ったあんたも!! 全部本物に決まっているでしょ!!」

「あ、あすなさん……」

ネギはその時気が付いた。明日菜の目に大粒の涙が浮かんでおり、今にも零れ落ちそうになっていることに。

「わ、私にあなたの悩みを解決してやることはできないけど、私があんたの代わりになつてあげることができないけど、でも……手伝ってあげるから。あなたの悩みが解決できるように手伝ってあげるから……いなくなるなんて言わないで。まだ出会ってからちよつとしかたつていないけど、あんたみたいな子供が苦しんでいるのに、巻き込まれ

るのが怖いから、はいさよならなんて……できるわけないでしょう!!」

「あ、あずなさん!!」

最後にはネギももらい泣きしてしまい、二人な世界樹の上で泣き続けた。そんな二人をやさしく見守るように暖かい夕日は、二人が泣き止むまで、のんびりと待っていてくれた……。

……†……†………†………†………

この物語には不釣り合いなイベントが終わった後、何かいろいろと吹っ切れたネギと、明日菜は楓たちが呼んできた広域指導員のきつい説教を喰らってから家路について。危ないことはするなと鬼の新田にこっぴどく叱られてしまったのだ。

「あうう……色々と台無しね」

「ふふ。でも、明日菜さんと話せてよかったです。僕もいろいろと考えが変わりました」

「そう……」

ネギの言葉を聞き若干恥ずかしそうに頬を染める明日菜に、ネギは再び笑う。そして、

「クラレンスさん」

「はいはい」

明日菜から聞いて、つけてきているはずといわれたクラレンスと呼んでみた。するとこの老人はまるで闇からにじみ出るように姿を現してきて……。もうそれだけでかなりの使い手だということがわかってしまい、ネギは苦笑を浮かべる。

ほんと、自分の周りには異常ともいえる充実した環境があるのに、なんで気づけなかったんだろうと。

そして、それも今日までだと決意を新たにクラレンスに話しかけた。

「僕……強くなります。そして、本当の意味でかしくくなります。誰よりも何よりも強く、賢く、もう二度と誰の手にも躍らせないほどにです!! ですから……力を貸してください。僕を鍛えてください」

ネギの言葉を聞きクラレンスはしばらくの間無言だった。そして、

「お見事でございます。ネギ様。明日菜様」

クラレンスはそのままネギたちに向かって跪いた!

「え!?!」

「ど、どうしたんですか、クラレンスさん!!」

「ゲル様はあなたのその言葉をおまちでした」

「!?!」

明日菜とネギその言葉に純粋に驚いた。つまり、犬神はすべてを予想してネギにあのことを教えたことになる。

「ゲル様はあなたに自分の現状を正しく認識してもらうことを望んでおられました。ですが、まさかあの状況から新たな決意をすることは予想してはおられなかったでしょう。いやはや、見事の一言でございます」

「どうして、犬神さんはそんなことを……」

ネギはその言葉を聞いて、不信任をあらわにする。いまさつきまで彼が信じていたものが音を立てて壊れたところだ。そう簡単に他人を信じることはできない。

「さあ、なぜでございますでしょうか……あの方の深謀遠慮な理由に行きつくには、私は少し凡才すぎますゆえできませんが……。ただ……」

克蘭レンスはそこで言葉を切り、意味深に微笑んだ。

「私はあなたにかかわることを再三やめるようにゲル様に進言いたしました。あなたは何かと黒いうわさや陰謀が絶えないものです……ですがそれを突っぱねて、あなたを《犬神アンダーグラウンドサーチ》で預かると決めたのはゲル様です」

「!!」

「きつと、あなたに……何かを見いだされたのでしょうか。そしてあなたに協力したいと思われたのでしょうか」

クランレスの言葉を聞いて、ネギは泣きながら犬神アンダーグラウンドサーチに走っていった。

そして、

「犬神さん!!」

「なんだ、野菜。早かったな」

ネギは玄関の扉を勢いよく開き、事務所の中に飛び込む。そこには、今はいないクランレスと明日菜と自分の分の夕食が置かれていて……マリーと犬神と姫も自分たちの夕食には手を付けず、待っていてくれた。

それにネギは再び泣きそうになる。自分の帰りを待っていてくれる家族のような存在に、泣きそうになる。

でも今は泣くところじゃない。そんなことを犬神さんは望んでいないはずだ。そう思ったネギは目にぐっと力を込めて、頭を下げた。

「いろいろな話してくれてありがとうごさいます!! おかげで目が覚めました!! そのうえでこんなことを頼むのは凶々しいかもしれませんが……僕を、強くしてください!!」

ゲルはしばらく無言でその姿を見ていたが、

「フツ……」

やがて少しだけ笑みを浮かべ、食卓から立ち上がった彼はその頭をポンポンと叩い

た。

「いいだろう。僕がお前を強くしてやる」

「はい!!」

ネギは最後に顔を上げ、目元に涙をにじませながら笑ったのだった。

そして、それを見ていたマリィは……。

『フハハハハハハハハハハハハハハハ!! ただ働き人員ゲット』

という犬神の本音が聞こえていたのだが、

「いや、まあ……。水さすんもあれやし……。ネギ君もやる気になっているみたいやし……。今回は見送ろ」

そういつて、ハリセンを送還した後、明日菜を抱えて戻ってくるであろう克蘭レスを迎えに出るため、玄関へと足を向けるのだった。

後日談らしきなにか。

「あまり話を作るなよ克蘭レス」

「はっ。申し訳ございません。魔がさすとはまさにこのこと……」

「って、あれ嘘だったんですか!!」

「ねぎくくん。あんま克蘭レスさん信用せんほうがええで。隙見せたらからかわれるさかいに」

「どんな老執事!?!」

帰ってきたネギたちを交えた夕食でそんな会話が交わされたかどうかは、ご想像にお任せします。

5話・怪盗・スパルタンVI!!

麻帆良の静かな夜の闇の中、一人の少年が閃光のようにその闇を駆け抜ける。

「待ちなさい!! 六重!!」

「刀子……今の彼はスパルタンVIだ……」

「はっはあ!! 刀子女史、そんなのんびり歩いとつたら俺には追いつかれへんで!!」

何やらやたらと目立つ特徴的なセットをされた逆立った金髪に、目元を隠す真紅のマスク。少年の速さによってたなびく真紅のマフラーが夜の闇を鮮やかに彩る。

「そこまでだ、スパルタンVI!! 今日という今日は……」

「ぶち殺してやるから覚悟しやがれえええええええええええええええ!!」

「ちよ、先輩!!」

その先に現れたのはこの学校の魔法先生。レイジーとジョニー。一応広域指導員にその名を連ねているが、この学園都市にいる魔法先生や魔法生徒からは過激思想を持つということでもつまはじきものにされている凸凹コンビである。

「死ね!!」

「いや、殺しちゃダメですって!! スパルタンVIは僕たち魔法先生や魔法生徒の質を上

げるためにわざわざ泥棒を働いて……」

「わかりやすい説明おおきにレイジー!!」

明らかに殺傷能力が尋常ではなさそうな、通常の拳銃に三倍の大きさはある拳銃を軽々と振り回しスパルタンVIに焦点を当てるジョニーに、慌ててレイジーは飛びついた。

ちなみにジョニーは自分に逆らう生徒は皆殺しにしようとするという悪癖を持っているため相手のレイジーはかなりの苦勞を強いられていた。

「お〜い。れいじ〜。きいつけや」

「へ?」

そんな風に二人がもめていた時だった。突然かけられたスパルタンVIからの注意にレイジーはジョニーから目を離してそちらを振り返った。

するとそこにはスパルタンVIの靴が見えて……。

「へぶっ?!」

その足に顔を踏み抜かれたレイジーとジョニーはそんな悲鳴を上げて地面にたたき伏せられる。対するスパルタンVIは二人の顔を踏み台に大きく跳躍。気で強化された脚力を利用し、近くに建っていた時計塔の頂上へ一足飛びに跳躍した!!

「ははは!! 今回も俺の勝ちやな魔法生徒先生の諸君!! ほな、このお宝は成功報酬と

かの。しかし、いつまでも中学生に負け続けるというのはお。いい加減うちの損害もシヤレならんし、何とかならんものか？」

怪盗スパルタンVIこと六重トウジは魔法使いではなく、気の運用のプロフェツシヨナルだ。つまりバリバリの前衛型格闘家である。

中東の紛争地帯で活躍していた軍人の両親のもとで生まれた彼は、幼いころに両親を亡くし、米軍の育児施設で育てられた。その頃からメキメキと才覚を發揮し十歳のころには前線に出てあまたの敵を屠ってきたらしい。

だが、そんな彼もその当時はまだ常識の枠内にはまっっている強さしか持つておらず、彼が所属していた部隊がゲリラたちの奇襲を受けてしまい全滅。たった一人で死にかけながら紛争地帯をさまよっていたところを、たまたま観光に来ていたジャックラカンに拾われたのだ。

ラカンは彼を育てているうちに彼の中に眠る膨大な《気》に気づき、ある程度稽古をつけないと逆に危ないと判断。彼の技術のいくつかをトウジに授けた。もともと才能があつた彼はメキメキと実力を上げてき、現在の実力は本国ことメガロメセンブリアでの格付けでAA+。タカミチと同格と認定されている猛者となつた。

実際その実力は異常の一言に尽き、優秀な魔法使いたちがそろつているこの麻帆良での戦績はたった一人との戦いを除き無敗。まさに天才の名の体現者といつても過言で

はないだろう。

「それを見込んで、麻帆良にある秘宝級の魔法具を条件付きの報酬として魔法先生や生徒の訓練につきあつてもらつておるのじゃが……」

その条件とは『魔法先生や魔法生徒によつて嚴重に守られた魔法具をみごと盗みだすことができれば、その秘法の所有権を譲る』というもの。麻帆良にいるあの外道探偵のことを思い出した近衛門が『変わった少年探偵がおるのじゃから、変わった怪盗がいてもいいんじゃない？』と面白半分で提示した条件だったのだが、六重はそれをのんだ。

そして今に至り……彼が盗み出した麻帆良の秘宝は49個。そのすべての防衛線において魔法先生や生徒たちは彼に一撃を入れることもできていない。むろん演習という側面があるため同格のタカミチが出陣していないための結果だが……。

「そういうえばラカンさん、六重君がルパンやら怪人二十面相が大好きだつて言つていましたからね……。スタイルは全く違いますが……」

「ふむ。とにかくこのままでは麻帆良にある秘宝はすべてなくなつてしまふわい。仕方ない、あの子に助力を頼むかのう」

近右衛門はそういうと机の上に置いてあつた電話の受話器を取りあるところに電話をかけるのだった。

ん?」

「あんな劣悪な環境にいるんだから心配しないほうがどうかしているわよ!!」

「……」

微妙に否定できない明日菜のセリフにマリーは顔を引きつらせるしかなかった。まあオカマのヤクザが殴り込みに来るような場所に子供がいれば誰だって心配するだろう。

「で? どうなのよ?」

「ちゃんとネギくん専用の部屋があるさかいに安心し。うちは無駄に空き部屋が多いさかいなあ。なんやったら今度泊まりに来る?」

「ああ? いいの。お願いするわ。ゲルのやつ信用できないし」

「あとそうやなあ……昨日ネギ君が犬神君の依頼手伝ったんやけど……」

「へ、へんな依頼じゃないでしょうね!!」

「ああ……まあ、うん。それはええやんか」

「ちよつとはつきり答えなさいよ!?!」

まさか三十代にもなって自分探しの旅に行っている人の捕獲だなんて言えるわけもなく、マリーは言葉を濁すことで明日菜の追及を回避、ちよつとだけうつろな笑みを浮かべて話を逸らしたが、そんなマリーに嫌な予感を覚えたのか明日菜はあわてて食い下

がった。

そんな明日菜の必死な様子に、「しゃーないな」と言わんばかりにマリーは肩を竦めた後、

「まあ……ツツコミのスキルは上がったはずやわ」

「あんたのところの事務所って探偵事務所じゃなかったの？」

普通に探偵の仕事をしていれば上がるはずのないスキルの成長を聞き、明日菜は若干顔に縦線を入れるのだった。

……+……+……+……+……+……

「また派手にやったみたいやなあ……六重君」

朝練から帰ってきたマリーはクラレンスが作ってくれた朝食を食べながら、明日菜にもらった朝刊の記事に目を通す。ちなみにほかのメンバーはもう食事を終えており、犬神はソファで本を読み、ネギと姫は仲良く一緒に食器を洗っている。

クラレンスは朝に来客があるということで今は席を外していた。

『怪異？ 空を飛ぶ少年を私は見た!?!』

麻帆良新聞の一面トップを飾ったその記事を見てマリーは顔をひきつらせた。

そこには、月を背景に（みよーんという擬音が聞こえてきそうな）大跳躍をかまし、ばつちりと証拠写真を抑えられている裏の関係者が写っていた。

六重トウジ。犬神ゲルのクラスメイト兼自称永遠のライバルである。

「昨日はうるさかったからな……。おおかたあのダイナマイトバカが暴れていたんだろ。だったらあいつとの訓練ということは容易に想像できるはずだ」

犬神はそういつてメガネをクイツとあげる。

「つてか、犬神君気になったりせえへんの？ 一応クラスメイトやろ」

「え!? この人犬神さんのクラスメイトなんですか!？」

マリーの言葉に驚いた顔をするのは食器洗いを終えたネギである。昨日三十代モラトリウムを捕獲したネギは、ちよつとだけ現実より美化されていた犬神を現実に沿って正しく評価するようになり、マリーと同じようにツツコミの技術を習得していた。

つまりこの会社に慣れ始めていた。それがいいことなのかどうかは正直微妙なところだが……。

「ああ。裏の関係者で英雄の弟子らしいで」

「で、英雄の弟子!? す、すごそうな人ですね!!」

「まあ、英雄の息子のお前がそんなにたいしたことないからな。あまり期待しないほうがいいぞ」

「あう……」

さらつとはかれた犬神の毒舌に落ち込むネギ。そんなネギを氣遣つてか姫はポンポンとその頭を撫でた。

「姫ちゃんとネギ君は仲ええよな? どないしたん」

いつの間にか仲良くなっていた二人にマリーは少し笑いながら話しかけた。

「ネギの父親はダメ親。何となく共感ができる」

「だ、だから一応尊敬しているんだからそういうこと言うのはやめてよ!! た、確かに父さんは父親としては失格かもしれないけど、すごい人だったんだから!!」

「はいはい」

顔を真っ赤にして反論してくるネギを軽くかわす姫。ネギはそんな姫に頬を膨らませて頭に置かれた手を引き離す。

「そ、そんなこと言いながら姫ちゃんだつてほんとうはお父さんのこと好きだったんじゃないの?」

「え? 嫌いだったよ。存在自体がうざい人だったから……父のように慕っていた人はいたけど」

「実の娘にそんなこと言われるなんてどんな父親だったの!」

さらつと吐かれた毒舌にネギは愕然とした。この事務所……肉親に対する評価がシ

ピアすぎる。

そんな時だった。事務所のインターホンが鳴らされゲルが玄関に視線を向ける。

「来たか」

「どないしたん、犬神君？」

「依頼だ、安川。助手その二と野菜を連れて執務室へ来い。ああ、その前に東側の壁を見に行けそろそろ奴からの依頼も来るはずだ」

「奴？……ああ、また矢文かいな」

何やら納得した様子で朝食を掻き込んだマリイは、姫を背中に背負いネギの手を取る。

「二人ともいくで。依頼文回収に」

「なんのですか？」

「ん？ この子がそろそろ犬神君に依頼を出す頃やさかいな。その回収」

そういつて新聞を指差すマリイを見てネギは不思議そうに首をかしげるのだった。

……↑……↑……↑……↑……↑……↑……↑……↑……

ネギが玄関に到着した時、小刀と通常の拳銃の三倍はあると思われる化物銃を交差さ

せ睨み合っているクラレンスと、トサカヘアーの巨大な、眼帯男が立っていた。

「えつと……?」

「相変わらずデンジャラスやなあジョニー先生は」

その光景にフリーズしてしまったネギを放置し、マリィは拳銃を持った男に話しかけた。

「はん。安川か。相変わらずこのしみつたれた事務所に雇われてんのか?」

「いつてええことと悪いことがあんでジョニー先生。そんで克蘭レスさんは何しとんの?」

「ドアの外に殺気を感じましたので、一応の警告を」

無論この拳銃男は昨日スパルタンVIに敗北した凸凹コンビのジョニーである。その後ろにはデンジャラスすぎる二人の応酬にドン引きしているレイジーがいる。

「はあ。ほんで何しに来たんよ、先生方二人は?」

「わかってんだろうが。あのクソやろうに用がある」

そうこたえクラレンスに案内されて中に入っていくジョニーをポカンと見送った後、復活したネギは慌ててマリィに話しかけた。

「い、いいんですか!?! あんな悪そうな人中に入れて」

「ネギくん。落ち着いて。あれでも一応うちの教師やで」

若干顔をひきつらせてそう答えたマリーにネギはさらに目を丸くしてジョニーが消えた廊下とマリーに視線を往復させる。

「え？ 先生？」

「ジョニーとレイジーは初等部教師。ジョニーは体育。レイジーはクラス担任をしている」

「うそでしょう!？」

姫の追加説明にネギはさらに驚きの表情を見せた。

言いたいことはわかるけど、いろいろと遠慮がなくなってきたなあネギ君。もう何のオブラートにも包まずに信じられないといった顔をするネギに苦笑をうかべながら、マリーは矢文が刺さっているであろう事務所の裏手へあるいていく。

「ああ、やつぱり来とつたわ」

「それなんですかマリーさん？」

コンクリの壁に見ごとに突き刺さり、穴をあけている矢を見てマリーはため息をつきながらそれに気を流し引き抜く。それでもしないと深く刺さりすぎて抜けないのだ。

「見ての通りのもんや。でも真つ先に見るんは犬神君やから勝手に見たらあかんで」

マリーが素晴らしいながらネギに渡した矢文には豪快な文字で、

『果たし状!!』

ジョニーの殺す発言はいつものことなのだが、不慣れなネギはいちいち反応してしま
う。レイジーはそのたびにペコペコと頭を下げていた。

「先輩!! いつも言ってますが殺さないでください!」

そして、いつものようにジョニーを怒鳴りつけるが、ジョニーは聞く耳持たんと言わ
んばかりに鼻クソをほじくっていた。

「ふむ。別に貴様が依頼をけるというのであれば僕は別にかまわない。だが、こちらも
別口で依頼が入っていてな。今回のスパルタンⅥの件は独自にかかわらせてもらうつ
もりだ」

しかし、その犬神の言葉は聞き捨てならなかったのかジョニーは鼻クソをほじるのを
やめ眉を吊り上げた。

「ああ? また果たし状か? ったく。来てるいのはわかつていたがよお……。いい加
減気づけよクソガキ。てめえのせいであいつの活動はここ最近活発になっていやがる。
お前の負ける前は月一だった襲撃が今じゃ週三位増えていやがるんだ。あのバカ、俺た
ちとの戦闘をお前に勝つための特訓だと考えてやがる。この落とし前をどうつけるつ
もりだ」

そういつてジョニーが取り出した一枚の紙には大きな文字でこう書かれていた。

『今度こそ犬神君に勝ったんねん!!』

そしてその後ろには小さな文字で、

『PS・図書館の魔法書一冊。なんかテキトーにパクらせてもらいます』

明らかに本題とPSが逆な手紙にネギは唾然とすることしかできなかった。

「こんなバカな予告状まで出しやがって、おちよくついていると思えねえ」

「ふん。ジョニー。そのバカな予告状は貴様が昨日の夜にあいづを捕まえておけばなかつたはずのものだ」

「ぐ!!」

ジョニーの言い分をひとしきり聞いた後、犬神は特に興味もないといった表情でジョニーに向かって毒を投げつける。

「そのザマで手を出すなどは……片腹痛いわ」

「……………!!」

その言葉がまるで物質的な威力でも持っているかのようにジョニーの頭を殴りつけ、ジョニーの沸点の低い怒りの琴線に触れた。

「殺す。すぐ殺す! ぶっ殺す!!」

「落ちついてください先輩!!」

「あの……マリーさん」

「ん、なんや?」

なんかもういろいろキレてしまい、拳銃を片手にブツブツ不穏な言葉を呟くジョニー。そして、彼の暴走を何とか止めるために必死になつてしがみつくレイジーを見ながら、ネギはマリーに話しかけた。

「僕……あんな大人には絶対になりません」

「それはとてもいいことだと思うよ、ネギ」

この学園のネギの教師は……ほとんどが反面教師だった。

……+……+……+……+……+……

「にしても犬神君。ほんまよかったん？」

「何がだ？」

「いや、ネギ君達だけで捕獲に向かわせてよかったんかって聞いてんねんけど……」

そういうながらマリーと犬神は、夜のとばりに包まれた、麻帆良一高い時計塔の屋根から図書館島のほうを双眼鏡でのぞいていた。

図書館島から少し離れた大通りではネギと姫が待機しており、スパルタンVIを待ち構えている。

「いざとなれば助手その二が何とかするだろう。それに奴にはキッチンとクラレンスに伝

言を頼んだ。『僕と戦いたいならまずはネギ・スプリングフィールドを倒せ』と。なにどころにせよ逃げられることはない。あいつは僕との戦いに勝つことが目的だからな。野菜を抜けたとしても僕と一戦交えるまで逃げることはしないだろう」

「いや、それはわかってんねんけど……」

そんな会話をしながら釈然としない表情でマリーは双眼鏡を下し犬神のほうを見つめた。

「わざわざネギ君をぶつける必要があつたんかいな？　いつもはこんな面倒なことせんとVI殴り飛ばしてしまいやん」

そう。犬神は基本的にいつもからんでくるVIこと六重のことをめんどろな奴と認識している。そのため彼の依頼はきちんと受けて相手をするが、ネギをぶつけてラスボスとして居座るなどという面倒なことはせずじかに出向いて殴り飛ばして終わらせるのだ。

しかし、今回に限ってそれをしようとはしない……。

なんでや？　内心でそう首をかしげながら、マリーはとりあえず自分が真っ先に考えられる理由を口にしてみる。

「ネギ君関連で何かするつもりかいな？」

いぶかしげなマリーの視線に、犬神は覗いていた双眼鏡をおろし、メガネを上げる。

「安川。僕たちのネギに関する依頼は奴を一人前に育て上げることだ。そしてその中で最も面倒なのが奴に施すべき戦闘訓練」

「ああ、英雄の息子やもんなあ……。いろいろ厄介ごともありそうやし、確かに自衛の手段ぐらいもつといたほうがええやろうけど」

「それを僕たちが教えられるかといえど答えは否だ。僕は誰かに戦闘技術を教えるということに関しては、酷く不向きだからな」

「ああ、まあ犬神君は練習せんでも大半の格闘術はできるさかいなあ。技の習得過程なんて人に教えることはできひんやろうけど……。ほなだれに？」

そこまでいったときにマリーはようやく犬神の狙いに気づいたのか、若干呆れた表情で犬神を見つめ返した。

「もしかして……」

「ああ、奴に押し付けるぞ」

その言葉が紡がれた時、図書館島の方向から大きな銃声が響き渡った。

……↑……↑……↑……↑……↑……

そして、その頃図書館棟の地下では……。

「師匠……本当に僕は行かなくていいのですか？」

「ええ。君はまだまだ先でしょう。君の同級生が面白いことを考えているみたいですし、しばらくはラカンの弟子にお任せしましょう」

「そういつてフードをかぶつた人物は優雅に紅茶を口に含む。」

「さて、修行を再開しましょうかイエダニ君」

「僕の名前は猫谷ネコダニです!!」

……+……+……+……+……

「はあ……今日もたいしたことなかったなあ。ええかげんデス眼鏡が出てくるかと思つたんやけど」

人を撲殺できそうな巨大な本を片手に夜の闇を跳躍しながら、まんまと図書館から本を盗み終えたスパルタンVIは、優雅に大通りに降り立った。

この逃走劇はいささか張り合いがなさ過ぎた。こんな調子で犬神に勝てる力を手にすることができののかとVIはため息をつく。

この秘宝の所有権譲渡の契約を取り付けた当初は「あの狸の学園長に一泡ふかしたつたで!」と喜んでいたスパルタンVIだったが、ある戦いで敗北してしまつてからは貪欲

に、訓練のために、この行事に臨んでいた。

少年探偵犬神ゲル。彼の無敗歴に師匠以外で唯一泥をつけた男。その男に勝つためにVIは日夜泥棒に入り、魔法先生たちと戦うことによつて実践式訓練を積んでいた。しかし、その訓練が今は問題だった。

弱すぎる。この学園の魔法先生や生徒のすべてが彼の實力を大きく下回っている。そんな相手と何千何万回戦おうが結果は同じで、まったく訓練になつていない気がしなかつた。エヴァンジェリンあたりが出てくればあるいは？　と思いはするのだが『バカの相手は嫌いだ』の一言で見事に撃沈。同格のタカミチが出てきてくれれば御の字なのだがどうやら彼も自分の相手をしてくれる気はないらしい。

正直訓練の相手がいなくて伸び悩んでしまつてるのが今のスパルタンVIの現状だった。

「まあ、今はええか」

なかなか面白そうなやつと喧嘩ができそうやし。

口元に凶悪な笑みを浮かべながらスパルタンVIは長い杖をかまえて自分と対峙する真面目そうな顔をした一人の少年に目を向ける。

「お前か小僧？　英雄の息子いうんは。犬神君から話は聞いてるで」

「ネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします」

「はつまじめなやつぢやなあ。ええか一つ教えといたるわ」

スパルタンVIはそういうと、目札をしているネギに向かって一気に駆け出し蹴りを放つ!!

「!?」

まさか礼の途中に襲い掛かってくるとは思っていなかったのだろう。ネギが慌てて杖を構えるがその反応ではあまりに遅い。

「はあ!!」

しかし、スパルタンVIはわざと蹴りの速度を遅くし、ネギの杖による防御を間に合わせる。そしてその防御の上から強力な蹴りを叩き込みネギの小さな体を吹き飛ばした

「?!?!?!?!?!」

「戦闘中にあからさまな隙を見せたらアカンで坊主。本当やったら今ので一回死亡や」

「?!?!?!?!?!」
スパルタンVIはそう笑うと、大きく夜空へと跳躍! ネギとの戦闘を開始するのだつた。

6話・目標決定

凶悪な蹴撃がネギの体を吹き飛ばす。

「!?」

「!?」ネギはその不意打ちと同じ行為に驚きながらもなんとか対処。杖でその攻撃を受け
 「!?」井め、綺麗に着地することに成功した。

「!?」

「戦闘中にあからさまな隙を見せたらアカンで坊主。本当やったら今ので一回死亡や」
 「!?」そういつて天空に飛び上がるVIを見て、ネギは憤りを感じた。

不意打ち。それもかなり汚い方法で……だ。《立派な魔法使い》を目指すネギにとつ
 ては到底許すことのできない行為だ。

そのためネギは杖を構えながらも、なおも呪文を唱えようともせず怒りの声をVIにぶ
 つけた!

「ひ、卑怯ですよVIさん!! 人が礼をしている時に攻撃………へブツ!!」

しかし、VIはそんなことに気を使う人物では当然なく、ネギの怒声を無視してその顔
 に見事な飛び蹴りをヒットさせた!

「つて、はあ!？」

吹っ飛んでいくネギを見て思わず固まるVI。それはそうだろう。今の不意打ちで戦闘態勢になったと思つたら、いまだ言葉で説得しようなどと試みている人物なんてVIの記憶の中には誰一人としていない。この学園の先生や生徒ですらそんなことはしないのだ。

想像以上のネギの甘さに愕然としつつ、VIは傍らで控えて観戦していたヒメに半眼を向ける。

「なあ、姫ちゃん。お前は参戦せえへんの？ 正直こんなガキ相手にしてもあんまり価値無い思うんやけど？」

「私の仕事は観戦すること。ネギが危なくなつたら助けること。だから今はいい。まだネギは危なくないから」

「そら俺が手加減しとるからや。俺が本気出してこいつと戦つたら二分で百回殺せんぞ?」

「うう……話はちゃんと最後まで……」

そういつて立ち上がるネギに、VIはため息をついて瞬動を行う。

「へ!？」

このままではまともな喧嘩はできないと判断したVIはまずはネギの甘さを抜くこと

にした。

ネギの目前へと瞬間移動したVIはその額に強烈なデコピンを叩き込む。

ただのデコピンのはずなのに、まるでプロ野球のピッチャーが投げた硬球の直撃を受けたかのようにのけぞるネギ。そうして姿勢を崩したネギの足払いをかけネギの体全体を宇宙に浮かべた後、

「どっせえいいいいいいいいいい!!」

「うわああああああああああああああああああああああああああ!!」

力任せにネギの体を天空へと放り投げた。

「ええやろ、ネギ君。お前の話を聞いたろ。ただし俺に一撃入れることができたらやけどなあ」

VIはそういつて虚空瞬動を行い天空へと飛び出す。そして、杖を使い何とか落下を免れたネギの前に出現し再びデコピンで弾き飛ばした!!

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

そんな光景を時計塔で見ていたマリーは、顔に縦線を入れながら三白眼を犬神に向ける。

「なあ……犬神君」

「なんだ、安川」

「ネギ君一方的にタコなぐりにされてるんやけど?」

「当然だ。ネギは近接戦闘の手段を持たない魔法使い。VIは一流の魔法使いですら苦戦する近接戦闘のプロフェッショナルだ。勝てる要素がどこにある」

「ほななんでネギ君VIにぶつけたんよ!? 明日菜にばれたら怒られんの私なんやで!」

「そういつて顔に縦線をいれて、表情をひきつらせるマリーに犬神は眼鏡をきらりと輝かせてどや顔で答えた。」

「安川。奴は痩せても枯れても天才少年だ……この意味は分かるか?」

「ん?」

「マリーは突然そんなことを言ってくる犬神に首をかしげた。」

「要するに……奴は神様に愛されているといたいのだ。そう、まるで某めだかな箱が定義する《主人公》のようにな」

「……ほんまかいな」

「マリーたちの雑談をしり目に天空で展開される一方的な戦いは続く。」

……↑……↑……↑……↑……↑……↑……↑……

「はあはあはあはあ……」

ネギは杖の上で荒い呼吸をしていた。

はい……。早すぎる。

VIの足元には高速回転する車輪が二つ。おそらくは気を高速回転させて空に浮いているのだろう。そうすることによって作られた足場を使い、まるで地面にいる時と同じように瞬動を使う。速度だけでいうのなら、間違いなくタカミチすら超えるだろうという速度で、だ。

「ど、どうして話を……」

「坊主。お前に話すことを許した覚えはないで？」

瞬間。再びネギの目前に現れたVIはその額にデコピンを叩き込み杖からネギをたたき落とす。

「くっ!! 杖よ!!」

さすがにこの短い詠唱の魔法は成功し、ネギの杖は彼の手に収まった。だが、

「虚空瞬動もできひんのかいな？」

「!？」

瞬間！ 落下するネギの目前に現れたVIが、今までのデコピンとは違う膨大な量の気

が込められた左手を振りかぶっていた。

「これでも出力は低めや。死にはせえへんやろ。うけてみい!!」
「!?!」

そして、ふり抜かれた左手からはすさまじい気が放出され巨大な衝撃となりネギを打った!!

「VI!! 適当に右パンチ!!」

「ひ、左手じゃないですか!!」

律儀にツツコミを入れるネギを無視して、VIのはなった衝撃はネギの体を強打、その体を地面に勢い良くたたきつけようとした。

「八卦・巽・開。帝国式防御気弾。《柔法・気円》」

その時、今まで傍観を決め込んでいたヒメが動いた。その両手には気が握られておりそれを凄まじい勢いで落ちてくるネギに向かって投擲する。

「ふええ!! ちよ、姫ちゃん!?!」

「安心してネギ。痛くはない……はず」

自分に向かっての攻撃だと勘違いしたネギが悲鳴を上げるがヒメは特に気にした様子もなく、指を鳴らす。

瞬間!! その気弾はパンという音ともに見事に破裂し、気で生成された細かい網に変化

した!!

「ほお。便利そうな技やなあ」

一足先に虚空瞬動で降り立ったスパルタンVIは、その光景を見て口笛を吹く。

「まわれ」

そのVIの言葉を無視して姫はさらに指示をだし、天空に展開された網を回転。ネギの落下エネルギーを回転エネルギーに変換しつつその勢いを完全に殺す。

そして、それによってようやく呪文を唱える余裕ができたネギは杖を使い空中に浮き何とか怪我のないまま地面に降り立った。

「今のは、危なかった……」

「なんや？ 文句でもあるんかいな？」

「別に」

無表情のままVIにそういう姫を見て、若干悪いとは思っていたのかVIは目をそらしながらさうそうそぶく。しかし姫は特に言及する様子もなく、のんびりとネギのそばに歩いていき荒い息をしているネギの肩に手を置いた。

「ネギ。帰るよ。今回はネギの負け」

誰が見てもさうだっただろう。万人が納得するだろう圧倒的な敗北。犬神の目論見とは若干違ったが、まあそれでもいいだろう。これでネギも少しは実戦に対しての認識

が変わったはずだ。

姫はそう判断し、あとのことは犬神に任せて疲れ切ったネギを回収しようとした。

だが、

「そ、そんな!! 納得できないよ!!」

ネギの口からは、想定外すぎる言葉が吐き出された。

「はあ?」

自分の勝利にいちやもんがつけられ、明らかに機嫌が悪くなるVI。対するネギも一歩も引かないという姿勢でVIに立ち向かう。

「あんな不意打ちから始まって詠唱もさせてくれない戦いなんて卑怯じゃないですか!!

やり直しをしてください」

「ネギ、それはさすがに……」

ネギのあんまりといった態度にヒメは声だけ不快感を表す。どのような戦いだろうが勝負は勝負。負けは負けだ。おまけにVIはかなり手加減していた。本当なら初回からあの右パンチ（笑）を使ってネギを圧倒することもできただろうに、彼は始終威力の低いデコピンを使ってくれていたのだ。お礼を言う必要ならあるだろうが、文句を言う筋合いはまるでない。

ヒメはため息をつきながら、いくら大人びていても所詮は十歳だなど、自分のことは

盛大に棚上げしつづつため息をつきつづつネギをいさめようと口を開きかけた。

だが、その前に、

パンツ!!

鋭い音とともに、いつのまにか瞬動を使いネギの目前にやってきていたVIのビンタが、ネギに向かって飛でいた。

今までのデコピンとは違う気が込められた本気の一撃に、ネギはその体を吹き飛ばされる。

「!?」

そのまま建物に叩き付けられ、その衝撃で息が詰まるネギ。そのまま尻餅をつくような形で地面に落ちたネギは、何が起こったのか理解できず泣きそうになりながら目を白黒させる。そんな彼に向かってVIは今まで聞いたこともないような低い声でネギを怒鳴りつけた。

「オンマエ、何勝手なことぬかしとんのじゃ、コラ!!」

「ひっ!!?」

青筋を浮かべ、鬼神のごとき気をまき散らしながら近づいてくるVIに、ネギは悲鳴を上げて尻餅をついたまま無様に後ずさる。しかし、彼の後ろは彼がたたきつけられた壁でありそれ以上後ろに下がることは不可能だ。

ネギの顔に、絶望が浮かんだ。

「卑怯や? 不意打ちや? そんなもんでいちやもんつける気か!! ふざけんなや!!
喧嘩にルールもクソもあるおもとんのか、クソガキ!!」

そういうしながらVIはネギの襟首をつかみ持ち上げる。ネギは真つ青になりながらガタガタと震え、VIの怒りの表情を見つめていた。

「喧嘩するときに相手が『今から殴りますけどええですか?』とか『不意打ちするから頑張つてよけてや』とか言うおもとんのか!! 笑わせんのも大概にせえや!! 喧嘩はいつもどんな時でも真剣勝負なんや!! ましてや裏の世界に入つとる魔法使いや気力使いにとつては、命を懸けた戦いゆうんも少なくない!! そんな中でお前がゆうような礼儀正しい戦いができるおもとるんか!!」

VIは幼いころから戦場に立つていた。そして才覚をあらわし常勝無敗と畏れられた彼だったが、彼が生まれたときから最強だったかと問われれば彼の答えは否だっただろう。

彼は血反吐を吐くような訓練をしてこの強さを手に入れた。才能はある方だったらしいがそんな些末なことは戦場でなんの意味も持たない。才能があるということはつまり「訓練しないと強くなれない」ということなのだから。ガキであろうとなんであろうと、強くなければ生き残れない。弱さは悪である。それこそが戦場の本質だった。

そんな中で育ってきたVIにとって戦いとは神聖なものだし、どんな手段を使っても勝つということは当然のことだった。それを、ネギのような甘い理想論が真つ向から否定した挙句、まけたくせに偉そうにも抗議をしてきたのだ。彼の怒りはひとしおだろう。

「お前の言葉は軽いんや、ネギ・スプリングフィールド!! お前が何を目指しとるんかは知らんし、何をしたいんかもしらん!! せやけどなあ、オノレがやったことは許されへん!! 人の戦いバカにした挙句、卑怯やなんやゆうて負けを認めへんやと!? オノレいったいなに様のつもりや!! 英雄の息子やったら何してもええとおもとんのか!!」
そしてVIはネギに向かってこういった。

「ああ、すまん。英雄の息子やからかいな。お前の故郷はさぞ何やつても笑って許してくれるやさしい大人たちがそろっとったんやろ」

そういつて、ネギから手を離れたVIは、バカに仕切った嘲笑を浮かべてつばを吐いた後、ネギに背を向ける。そして、

「はっ。反吐がでんで」

ネギの故郷を唾った。

瞬間、ネギの頭の中から恐怖が消え去り、すさまじい怒りの炎が燃え上がる。

思い出されるのはあの雪の日。自分の故郷の住人達が永久石化され動かなくなった

気を込めた両腕の防御を軽々と無視して、衝撃をぶつけてくるネギのコブシ。VIは当然車にはねられたかのように吹き飛んだが、大してダメージは入っていないのか空中で姿勢を取り戻し、軽やかに着地する。

「はっ……。ええ顔になったやないか!! ネギ・スプリングフィイーイーイルドオオオオオオオオオ!!」

そして、愉悦の笑みを浮かべたVIは暴走状態にあるネギへ向かって跳躍、再び戦い始めるのだった。

……†……†………†……†………

ネギは意識を失った状態で暴れ続ける。

魔法の射手。白き雷。雷の暴風。風精召喚。武装解除。ネギが使えるおおよその魔法のすべてがVIに向かって飛来した!!

「はあ!! なめんなっ!!」

しかし、VIもこの程度ではやられない。ナギ譲りのバカ魔力によって作り上げられた、通常の威力よりもかなり高い威力を誇るネギの魔法を、両手から射出される気弾によつてことごとく撃ち落して行く!!

「VI!! 千烈拳!!」

空中で花開く殺傷能力抜群の花火たち!!

ヒメはその光景を見て慌てて虚空瞬動を使いネギのところへと飛んできた。足元にはVIと同じように車輪がついておりそれがヒメの飛行を補助している。

「ネギ、おちついて」

ヒメがそういつて捕縛用の気弾を放つが、

「……………!!」

ネギは全身を覆ったバカ魔力でその気弾を消滅させる!! ヒメの気弾に込められた気をネギの魔力が上回ったのだ!!

「……………鬱陶しい」

自分の気弾がはじかれたことに若干機嫌が悪くなったヒメは、その両手に膨大な気のためにいく。明らかに殺傷目的の高密度の気であったが、今のネギにはこれくらいしても大丈夫だろうとタ力をくくって、ヒメは容赦なくその気弾を放とうとした!!

「つて、ヒメちゃんあかんよ、そんなことしたら?」

「!?!」

しかし、ヒメの攻撃は後ろから伸びてきた手に両手をつかまれることによつて止められた。

「ふむ。僕は別にかまわないが？」

「犬神君余計なこと言わんとつて!？」

ヒメの後ろに立っていたのはVIたちと同じような方法で飛行を行う、犬神とマリイだった。黒い笑みを浮かべながら『殺れ』といわんばかりに首をかき切るしぐさをする犬神に、マリイの怒声が飛来する。

「ああ!! 犬神君!! なんや俺と勝負しに来てくれたんか!!」

そんな犬神たちを見て、ネギとの戦闘を一時中止しこちらに駆け寄ってくるVIに犬神は少しだけ微笑み、

「話しかけるな、コソ泥が。その程度のガキと拮抗した戦いしかできないようなしよぼいレベルの泥棒など……相手をする価値もない」

グサツ!?

犬神の言葉が容赦なくVIの脳天を貫き、VIの動きを一瞬停滞させる。

当然それを見逃すような状態のネギではなく、VIの懐に入り込んだネギは雷の暴風を至近距離でぶちこんだ!!

「うっぎやああああああああああああああああああ!!」

天高く飛んでいくVIを見てゲルは再び毒を吐く。

「ライバルなどと思ったことはないが……残念だ」

VI 関連で学園長からの依頼がなくなるからやろうなあ……。犬神の言葉に隠された真意を正確に悟りながら、マリーは特に何も言わずにヒメに説教を続ける。

「あのなあヒメちゃん。あんな状況で殺傷能力の高い技使ったらアカンよ。ネギ君怪我したらどうすんの？ 友達傷つけたりしたらあとあと後悔すんのは自分なんやで？」

「帝国での暴走した人を止める方法はあれだった」

「暗殺者時代のことは忘れてえや!？」

ツツコミを入れてもよかったのだが、実は今は犬神にとある作戦が決行中だった。不用意に口を挟んで失敗すると、あとで犬神が怖いので今は自重する。

そして、作戦は実を結んだ。

「ちよ、ちよっとまったりいいいいいいいいいいああああああああああ!!」

天高く飛んだはずのVIがいつの間にかこちらに戻ってきておりネギの懐を強襲!!

ネギの胸に片手を当て、その旨に爪を突き立てひねりを加えながらネギを吹き飛ばす!!

「VI破裏剣掌!!」

すさまじい回転を加えられたネギはまるで砲弾のように吹き飛び、時計塔の中にめり込む!! ラカンのオリジナルとは違い、幼く体の小さいVIのそれは単体ではそれほどの力を発揮しない。そのため敵を遠くに吹き飛ばした後、固いものに叩き付けることで破壊力を底上げしている。

「夜更かしは美容に悪いからな。何より僕がそろそろ眠い」

「つて、そんな理由やったんかい!？」

いまさら介入に理由を聞かされたマリーが愕然とする中、VIとネギの戦いは終幕を迎えていた。

…↑↑↑……………↑↑↑↑↑↑…

許さない許さない許さない許さない許さない!! 許さないぞ!! スパルタンVI!!

凄まじい怒りの感情に飲み込まれながら魔力を暴走させるネギ。しかし、VIは仮にも常勝無敗。あのジャック・ラカンの弟子である。犬神にたきつけられたためネギの戦いを早々に決めなくてはならなくなった彼にはもはや一分の隙もない。

「おもしろい戦いになりそうやったんやけどな……。まあ、暴走した奴に勝ったところでおもしろくもなんともないか」

VIは最後にさういうと、右手に全身の気を収束させていく。

「スパルタンシックスウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!」

「はあっ!! 動きが直線的すぎるわ、ガキンチョ!!」

VIは最後にさういうと、容赦なく右手を振りぬきこぶし型の気弾を飛ばした!! その

規模は今までの比ではなく、気弾はネギを容赦なく打ち据えた後、後ろにあった時計塔やその他の建物すら粉碎し地面に巨大なクレータを作り上げる!!

「VIインパクトおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

最後にそう名前を叫ぶと同時に気弾は大規模な爆発を起こしネギを飲み込む。そして……。

「まあ、加減はしたつたし、死んでへんやろ」

VIはそういってクレータに背を向ける。クレーター中央にはボロボロになったネギが横たわっていた……。

ネギ・スプリングフィールドVSスパルタンVI……勝者、スパルタンVI!!

……†……†……†……†……†……†……†……

……そのはずだった。

「まだ………だ………だ………」

VIが完全に油断して背を向けている時、ネギはヨロヨロと、しかし確かに立ち上がった!!

「負けるわけには………いかないんだ!!」

ネギの体はボロボロだった。魔力の暴走によつて魔力は限界まで消費され、体に至つては骨折や筋肉の断絶を起こしているかもしれない。顔も悲惨なくらいに腫れ上がつており、見るに堪えないほどの無残な状態になつていた。

立っていることすら奇跡……そんな状態でありながら、ネギはそれでも歩みを止めなかつた。

自分のための戦いだつたら今のネギはここまで食い下がることはしなかつただろう。彼はまだ十歳なのだ。負けて当然だし、重症といつていいほどの怪我を負わされているのだから泣いたつていい。諦めたつていい。しかし、彼は立ち上がった。この戦いはもはや彼のためなどではなくバカにされた故郷の人たちのためなのだから……。

「あやまれ……」

「な!？」

ネギはボロボロで魔力も微弱だった。しかし、今回はそれが功を奏した。ネギが弱り切つていたため気配は薄くなつてしまい、ネギがVIのすぐ後ろに近づくまでVIはネギの存在に気づくことができなかつたのだから。

「謝つてくださいいよお……」

しかし、ネギの体には力が残されていなかった。最後の一撃の足しになればとネギは右手に魔力を込めてVIの体を弱々しい拳で叩いた。

そして、この時事故という名の奇跡が起こった。

ネギが使える魔法は何も戦闘用の魔法ばかりではない。彼が使える基礎的な魔法の中には精神に働きかける魔法がある。何か使える魔法をもうろうとした意識の中で取捨選択してしまったネギは間違えて拳にその魔法をかけてしまった。

読心術という魔法を……。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

ネギは夢を見ていた。

煙が立ち上る血なまぐさい空間。真っ赤な夕日に無数の銃声がこだましている。

「トウジ……何をしている」

「いや殺してもうた人の弔いを……」

そんな中ネギは一人の少年を見ていた。軍服を着たネギぐらいの金髪の少年。その手には刃渡りが異常に長いサバイバルナイフと拳銃が握られており、軍服は鮮血に汚れていた。

「なあ、中隊長。なんで俺はこんなことせなあかんのかいなあ」

「ここが戦場だからだ」

「VIさんは？」

「もう帰った。ネギが眠りこけてからもう一日たっている」

「そう……」

ネギはそういつて首だけを動かし窓の外を見つめる。ネギの全身には包帯がまるでミイラもかくやといわんばかりにまかれており、首以外動かせないのだ。

「VIさんに悪いこと言ったな……」

あの夢はおそらくVIの過去なのだろう。そして、あんな過去を持つていた彼が、自分の言葉に何を感じたのかネギは大体わかっていた。読心術のおかげで理解できていた。

それはあれだけ怒るのも無理ないよねえ……。と苦笑交じりにつぶやくネギに、ヒメはボソリと声をかけた。

「ネギ。VIから伝言」

「なに？」

まさか、あれだけ怒っていたVIから伝言とは……。ネギは少し不安になりながらも姫の話の黙って聞く。

「あなたの過去を見たって」

「!!」

「『雪の日……大変やったな。まあ、俺もいすぎたわ。悪かった』だって」

「……………」

ネギはしばらく絶句していた。おそらく朦朧とした意識の中で読心術を使ったため、本来一方通行のはずの読心術が変質し、両方の記憶を交換してしまったのだろう。

あの雪の日の記憶を見られてしまい、若干慌てるネギにヒメはのんびりと話しかける。

「ネギ……負けちゃったね」

「……………うん」

「でもVIもゲルには勝てないんだよ？」

「世界にはまだまだ上がいるってことだね……………」

二人の間に沈黙が流れる。ヒメは黙ってネギを見守り、ネギは黙って何かを考えていた。

そして、

「ヒメちゃん。僕……強くなるよ。VIさんに負けないぐらいに。そしていろいろと学ぶ。本当の正義はなんなのか。何が正しくて何が間違っているのか」

「……………」

「今回VIさんは間違ったことは何一つ言っていないかった。でも、僕は僕が今まで信じてきたことのすべてが間違いだったとはどうしても思えないよ」

「……………」

「だから僕。もつといろいろな人の話を聞いて勉強して、よく考えて、VIさんみたいな自分の正義を見つけてみせる」

「そう」

ヒメはそれだけ言うと、ネギの目を覆うように、暗器を隠すためにわざと長くしている服の袖をネギの顔にかぶせる。

「私もまだ自分の正義見つけていないの。育ちが悪かったから、いまだに自分が道具だって感覚が抜け切れていないんだ」

「僕としてはヒメちゃんの過去が気になるよ……」

ヒメはそのネギのツツコミをスルーして話を続ける。

「だから、ネギと一緒に探すよ、自分の正義」

「……………うん」

ヒメの言葉を聞き、ネギは少しだけ微笑んだ。ようやく、すべてのスタートに立てた気がする。そう思いながら。

「でも今は寝ないとね……」

「そうだね」

ネギは最後にそう言って笑うと小さく寝息を立て始めるのだった。

「ネギ君をよろしく頼むぞ。六重殿」

「おう!!まかしときい!!」

こうして、ネギに一人目の師匠がつくのだった。

7話・桜通りのエターナルロリータ

「はあはあはあはあはあ!!」

出席番号16番、佐々木まき絵は夜の闇を駆ける。

「なに……なに? なに!! あれは!!」

運動部に所属していて体力は一般人以上に保有しているはずの彼女が荒い息で、そうつぶやく。敵はかなりの強者のようだ。

麻帆良を闇が包む中、彼女と追跡者の戦いは続く。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

夜の闇の中。麻帆良の建物の屋根に立った一人の老人がその光景を見ていた。
いま、少女が足をもつらせて倒れてしまったところであり、襲撃者は彼女の身に覆いかぶさろうとしている。

「ふむ……」

老人はそうつぶやくと、スツとその場から姿をけし、

「失礼。逢引にしてはいささか強引が過ぎるかとおもいますが?」
「!!」

襲撃者に襲われていた佐々木まき絵の目の前に出現！ 襲撃者を蹴り飛ばし彼女から引き離した!!

「マスター!?!」

襲撃者の後ろに備えていたロボットののような耳をした少女が襲撃者に駆け寄っていき。

「安心しろ。障壁のおかげで大事ない!!」

襲撃者はそういうと同時に、マントから顔をだし鋭い目つきで介入してきた老人をにらみつけた。

「確か……あの外道のところの執事だったか？ 金が絡まないと貴様らは動かないんじゃないのか?」

「あいにくと、あなたのやろうとしていることは現在面倒を見ているネギ様に深く関係しそうなことだったので、主人から介入しろと言われております」

老人……クラレンスはそう答えながら、おびえ切っていたまき絵の首筋に手刀を叩き込み、その意識を刈り取る。

「あと、学園長からあなたのクラスメイトへの魔法ばれを極力阻止するようにも言われ

ているので」

クラレンスはそつけなく答えながら、まき絵をやさしく横たえ自分の執事服の上着を重ねる。その動きの一つ一つは完璧に洗練されており、優雅に、美しく、気品あふれるしぐさであった。それだけで勉強になると襲撃者の従者である絡繰茶々丸は感心しながらも、主を守るために前に出る。

「やめておけ、茶々丸。お前ではこいつには勝てない」

しかし、彼女の主はそういつて彼女を端にどけた。そんな主に言葉に茶々丸は驚愕する。

自分は主を守るために作られた戦闘用ガイドノイドだ。一通りの武術はAIにインプットされているし、たとえ拳銃一丁でも一流の魔法使いとそこそこ渡り合える程度の実力は持っているのだ。

しかし、そんな彼女にも勝てないと彼女の主は言った。つまりこの老人が一流以上……全盛期の彼女の主と並び立つほどの強者ということを示している。

「なるほど、あなた直々にお相手していただけるとは……。光栄の極みではありますが、はたして力の大部分を封じられたあなたに、私を倒せますか？」

「無理だろうな。正直勝てる気は全くしない。あの合気鉄扇術の爺といい、お前といい、日本には面倒な気力使いが多すぎる……だから」

瞬間、彼の目の前に立っていた襲撃者は蜃気楼のように掻き消え、そしていつの間にかクラレンスの後ろへとやってきていた彼女はクラレンスの背中に氷の魔法を叩き込んだ!!

「多少の不意打ちぐらいは許してもらおう。この計画……失敗するわけにはいかんのだ!!」

氷の魔法によって立ち込める白い煙。その中から響き渡る声には必死さがにじみ出ていた。しかし、

「いやはや、おみごと。すっかり騙されてしまいましたよ」

「!!」

クラレンスはいつの間にか茶々丸の後ろに立っておりパチパチと手をたたいている。まるで襲撃者の努力をあざ笑うかのように……。

「しかし、不意打ちは我々忍しのびの専門分野にございます。次からは違う方法をとることをお勧めいたします」

「き、貴様!!? いったいどうやって!!」

確かに手ごたえはあつたはずだ!! と、襲撃者が慌てて魔法を叩き込んだ場所に目を向ける。いつの間にか白い煙が晴れており、氷漬けになった何かが姿を現していた。

それを見て襲撃者は絶句してしまう。

そこで氷漬けになっていたのは……………!!

まるで神の手によって作られたかのごとく、クラレンスに精密に似せられた、等身大の木像だった!!

「つて、なんだこの無駄なクオリティ!? 普通に丸太とかでよくないか!? なんで木像!?」

「マスター……………今はそれどころでは」

「くう!!」

突っ込みどころ満載なクラレンスの忍術に翻弄された襲撃者を、慌てて駆け寄ってきた茶々丸がいさめる。襲撃者は歯噛みしながらも懐からフラスコを取出し、地面へと叩き付けた。

「今日のところはこれで勘弁してやる!! 覚えていろよ!!」

たたきつけられたフラスコからは凄まじい量の煙が飛び出しクラレンスの視界を奪う。そして煙が晴れた後にはもう誰もいなかった……………。

「いやはや、やはり彼女は素晴らしいまでの……………」

クラレンスはそういったところで口をつぐみ、横たわっている佐々木まき絵へと歩み寄った。

どんな小さな痕跡も残すのは危ない。彼女を寮に送り届けてこそ彼の任務は完成さ

若干顔をひきつらせながらマリーは苦笑をうかべた。

あれからいろいろあり、今日から三年生。前期の様々な事件の後、ネギの格闘の指導に六重がやってきたり、たまくに明日菜が泊まりにやってきたりと、犬神アンダーグラウンドサーチは賑やかな生活を送っていた。

そして、何とか無事進級で来た明日菜とマリーは、正式雇用されたネギのもとでふたび学生生活を送ることとなった。

「千雨ええかげん慣れたらええのに。そんな悪いクラスでもないやろ?」

「うっせ。私は常識なしな奴らが嫌いなんだよ」

「あはははははははは……」

微妙に否定できないどころか、魔法使いがいるこの学園で常識を求めるのがむしろ難しいことなのだが、千雨は一般人なのでそんなことは言えない。

なので、マリーはあいまいに笑ってごまかすことしかできなかった。

「大体、ガキが先生なんてありえねーよ。労基法はどこ行つた?」

「いやまあなあ……でも最近はやつとこさ仕事に慣れてきたんか、かなり先生らしくなつて来とる……」

「今すぐ服を脱いでください!!」

「……………」

「なんか、私は寮に帰るに桜通りを歩いたんだけどね、突然ぼろくて黒い布を羽織った小さな陰に襲われたの……。そしたら、突然現れたすっごいおひげの御爺さんが助けてくれてねえ」

「ゆ、夢やんなあ?」

まき絵が手で示したひげの形に、あまりに思い当たりすぎる自分の知り合いを思い出しながら、マリーはとりあえずそう尋ねてみた。

「うん。夢だよ。だって私目を覚ました時には寮についていたもん。どうやって帰ったかがどうしても思い出せないんだけどねえ」

「……」

もうバリバリ本当の話臭いまき絵のセリフに、マリーは思わず顔をひきつらせた。彼女の脳裏には、気絶したまき絵をかかえながら窓から寮へと侵入する老紳士の姿が鮮明に浮かんでしまっていた。

「最近有名やんなあ。吸血鬼のうわさ」

と、とにかく話題をそらさな……。万が一にもその老人がその老人が自分の知り合いだと気付かれないマリーは、そう言って無理矢理話題を変える。

「まき絵もその話聞いたからそんな夢を見たんじゃないか?」

「うん。そうかも」

友人のアキラと亜子にそう言われて苦笑いを浮かべるまき絵。そして、まき絵が測定のためにその場を離れると同時に、マリーは近くに控えていたエヴァンジェリンを急襲。念のため確認を取りに行く。

「なあなあエヴァちゃん。桜通りの吸血鬼ってエヴァちゃんちゃうよな？」

「……………だつたらどうした？」

あれ、なんか若干機嫌悪い？

なぜだか親の仇でも見るような視線で自分を睨みつけてくるエヴァに驚きながら、マリーはそれでもめげずに話しかけてみる。

「いや、別にどーもせえへんけど、ネギ君になんかするんやったらやめといたほうがええで？」 犬神君が黙ってへんやろうし……………」

マリーの真剣に心配した表情をみて、エヴァはため息をつく。

これはどうも知らないな……………。と言う自分にだけしかわからない安堵を込めて、だ。

一応友人とは言えマリーも犬神の一味の一人ではあるので、何らかの妨害をしてくると警戒していたのだが、この口ぶりだと犬神とあのむかつく執事が動いていることは知らないようだ。

そう結論付けたエヴァは友人と戦わなくていいという事実にあ堵し、そしてそんな感情を抱く自分を『弱くなつたな』と嗤いながら警戒を解き、いつもの口調でマリーに話

しかけた。

「ふん。別にその程度ならどうとでもなるな。忘れたのか安川。私は伝説の吸血鬼だぞ!!」

「封印されてるんちゃうんかい!？」

「その封印ももうしばらくでとける……」

「???」

マリーはしばらくキョトンとした顔をしていたが、

「ああ!! 封印解く方法を学園長が見つ付けてくれたんやな!! よかったやん。これでようやく卒業やな!!」

「ああ……うん。まあ、なあ?」

ちよつとだけ言葉を濁してしまうエヴァに気づかず、マリーはにこにここと笑いながらエヴァの肩をたたいた。

「ああ、でも封印解けても卒業するまでは麻帆良にいてや。一緒に修学旅行にいこうや」
「ああ、わかってるよ」

若干顔を赤らめながらそう答えるエヴァにマリーは満足げに頷いた後、身体測定へと向かった。

「よろしかったのですか?」

「ふん。いまさら友をだますことに罪悪感を覚えるような柔い精神は持っていない」

背後に控えていた茶々丸にそう聞かれて、エヴァンジェリンは鼻を鳴らす。そして、冷たい声音で茶々丸に守備を訪ねた。

「そちらはどうだ？」

「博士に頼んで軍事研の方からミサイルランチャーなどの重火器を譲り受けました。迎撃の準備は万全です」

「そうか……」

エヴァはその答えに満足げに頷き、不敵な笑みを口元に浮かべる。

「犬神ゲル。今宵も邪魔をしに来るというのなら、いいだろう。完膚なきまでに貴様をたたきつぶす」

戦争だ……。エヴァのその小さな呟きはクラスメイト達の騒がしい喧騒にかき消された。

……↑……↑……↑……↑……↑……↑……↑……

「吸血鬼だと？」

「そうです!!」

その晩の犬神アンダーグラウンドサーチにて。夕食を食べ終えたネギは、自分の教え子たちから吸血鬼のうわさを聞き燃えに燃えていた。

「生徒の安全を守るためにもパトロールをするべきだと思いませんか!!」

「思わないな」

しかし、その熱意は犬神の一言によつてわずか数秒で粉々に打ち砕かれた!!

「……………即答!」

返答に0，1秒もかかつていない犬神の言葉にネギは一瞬フリーズしてしまつたが、そこは慣れれば何とやら。何とかツツコミを返すことに成功する。

「ふん。やるようになったではないか」

「いやそんなことで感心されても困るんですけど……。僕犬神さんから教えられたことつてツツコミのことしかないですよ? ツツコミスキルだけがガンガン上がつていつていような気がしますよ!」

「世の中に一番必要な技術がスキルアップしてよかつたじゃないか?」

「ツツコミがですか!」

マリーバリのツツコミを披露しながら犬神に食つて掛かるネギ。物覚えはええのは才能なんやろうけど……。才能の果てしない無駄遣いやなあ。と、若干呆れながら食器を洗い終わったマリーはその会話に参加した。

「ネギ君。ネギ君。思いつきり話ずれとるで？」

「はっ!? そ、そうでした!! どうして吸血鬼退治しないんですか!!」

マリーに面白いわれてなんとか自分を取り戻すネギ。そして犬神はいつものようにメガネを光らせながらネギにこう返した。

「きまつているだろう……金にならないからだ!!」

「力強い返事ありがとうございます……」

いや、もうわかっていましたけど……。と、若干へこみながらそれでもネギは食い下がる。

「でも犬神さん。もしかしたらマリーさんが襲われるかもしれないし、犬神さんも危なくて夜に依頼こなすことができなくなりますよ?」

「ネギ……」

しかし、犬神はいたって平然とした表情でネギの肩に手を置き、傲然と言い放った。

「正直……超・どうでもいい」

「超……!?!」

いつぞやのセリフと丸かぶりな犬神答えに愕然とするネギを後目に、犬神は肩をすくめながら玄関へと歩いていった。

「正直吸血鬼が暴れようが、超・知ったこっちゃないし、超☆どうでもいい。学園長の話

では今のところ死者も出ていないようだし、実害もない。だったらちよつと大きめの蚊に噛まれたと思つて割り切れればいいではないか」

「いや、蚊と吸血鬼はだいぶ違う思うんやけど？」

というマリীরツツコミを意に介さずに犬神は玄関で靴をはき外出の準備をする。

「行くぞ。クラレンス」

「御意」

「あれ、どつかいくん？」

そういつて玄関のドアを開けた犬神と宙からにじみ出るように出現したクラレンスに、マリールはそう尋ねた。今夜は依頼が入つておらずのんびりとする予定だったと思うのだが……。

「少し用事があつてな。人探しをする予定だ」

「ほな、私もついて行つて手伝おか？」

「あ、だったら僕も。ついでに見回りもしたいですし!!」

それを聞いて一応は好意で手伝いを申し出る居候と探偵助手。

しかし、

「別についてきてもいいが……」

犬神はそんな二人の行為の申し出にたいし、眼鏡をきらりと輝かせながら、

「僕はこの依頼の間始終不機嫌だぞ？」

一言……限りなく物騒な色を込めて言い返した。

「え……」

「始終？」

「始めから終わりまでだ」

その言葉にマリーとネギは顔を見合わせ、

数分後。

「あはっ♡いってらっしやーい」

ヒメを伴い笑顔で犬神を見送った。

「八つ当たりとかされとーないし!!」

「まったくですぬ!!」

「軟弱な奴らめ……」

「行ってまいります。ペコリーニョ」

「ふん」

そして、奴はやってきた。昨日のひげ紳士を伴った奴は、建物の屋根に立ちはるかな高みからエヴァを見下ろしていた。

エヴァはそんな彼らの気配に気づき、不敵な笑みを浮かべながら犬神を見上げる。

「来てしまったか……。犬神ゲル。今夜、お前の命は尽きることになるぞ」

重火器を無数に構えて戦闘態勢を取る茶々丸。エヴァもマントから無数のフラスコと試験管を取出し犬神に向かって構えを取った。

だが……。

「おい、その幼女。邪魔だ。どけ」

犬神の口からはとんでもない言葉が発せられるのだった。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

エヴァは犬神の暴言にしばらく啞然としながら固まった後、

「はあ!？」

思わず間抜けな声を上げる。しかし、そんな彼女を放置して状況はどんどん進んでいった。

クラレンスが男の目の前に出現し、ゲルはその後ろの道をふさぐよう瞬動で移動した。

「おい……無視か？ 完全無視か？」

「マスター。彼らは全く聞いていません」

なんだか取り残されてしまった茶々丸とエヴァを無視して。

「逃げ切れると……思われたことがすでに不快で腹立たしい」

男を追い詰めながら静かな怒りをはらんだ声音でそうつぶやく犬神に、男の顔はさらにひきつり、

「僕は僕の仕事を果たした。あなたにも、自分の義務を果たしてもらおうか？」

犬神の人殺しの視線を受けて、その恐怖は臨界に達した。

「あわわわわわわわわわわわ……」

もうめつたに聞けないような典型的な慌てふためいた声を上げる男。そんな二人の様子を見て、

「なあ、茶々丸、マリーを騙してまでこの場に臨んだ私の覚悟はどうなるんだ？」

「マスター。気を確かに」

色々無理不尽な状況にエヴァは嘆く。

「どうかお前たちは何しに来たんだ？ そいつは私の獲物なんだが？」

とりあえず状況把握がしたかったため犬神にそう尋ねるエヴァ。すると犬神はどす

黒い怒気をにじませながらこう答えた。

「こいつは僕の元依頼者だ」

「元？」

「成功報酬を払わずに僕から逃げ出そうとした身の程知らずな……元依頼者だ」

「ああ……なるほど」

男の命をドブに捨ててするような行為に、若干呆れながらエヴァは素直に身を引いた。

金がらみの話で犬神にケンカを売るほどエヴァは考えなしではなかった。犬神は金の話が絡むと20倍界王拳を使えるようになる男である。

「いや、マジで勘弁してください!! 依頼料はきちんと払いますから!!」

最終的に男は泣きながら土下座した。生まれて初めて見る男の本気の土下座にエヴァは若干引いてしまうが、犬神はいたって冷たい瞳で男を睨みつけ続ける。

「逃げたくせに?」

キュピーン!! 犬神の目が深紅に輝き、魔法世界の怪物みたいな殺気を放ち始める。

当然男は恐怖におびえガタガタと震え始めるが、ここで口を閉ざしたら終わると本能的に理解しているのか口だけはクルクルとよくまわりながら言い訳を紡いでいた。

「いや、なんとというか!? 今不況だし、株でミスつちやつたりパチンコで大負けしたりしちゃって……」

「いや、完全に自業自得だろそれ!」

訂正。言い訳どころか、思わずエヴァがツツコミを入れてしまうほどボロが出まくりだった。

「僕には……」

そして、犬神は男の言い訳をさえぎり、どす黒い言葉を解き放つ!!

「嫌いな人種が七億ほどいるんだが」

「七億!」

「人類の大半が嫌いではないか!」

男とエヴァのツツコミを無視して犬神は話を続ける。

「その最たるものが……貧乏人と、けち臭い金持ちと……」

そして、目元に影が入りその向こうから、狼のような人殺しの視線が男に対して向けられた!!

「謝罪で自ら、許しを請うものだ」

そして決め台詞。

「ドあつかましいわ!!」

「(イ)もつとも!」

「うをお!」

男はそういいながら飛び上がり、何故かエヴァすらも飛び上がった。というかさつきから空間を埋め尽くす殺気が尋常ではない。全盛期の自分ですら出せたかもわからないドス黒い殺気にエヴァは思わず顔を引きつらせる。

「だがお前にとつては幸いなことに、僕は私情で仕事はしない」
「常に私情でしているだろうが!!」

主に金のために。

エヴァのツツコミを華麗にスルーし、犬神はクラレンスに命じて男を引きずっていかせる。

「金がないなら別のもので返してもらおう。よかつたな。この世には金銭以外にも労働で支払う対価があつて」

「な、内臓系は嫌あああああああああああああああああああああああ!!」

うすら寒い笑みを浮かべて、どこぞのヤクザも真つ青な言葉をまき散らす犬神に、男は泣きながら悲鳴を上げた。

「失礼な。うちはそんな闇金テイストではない」

「おまえ、自分の顔見たことがあるか?」

そこで犬神はようやくエヴァのほうを向き一言。

「あれ? いたのか?」

「ずつといたよ!!」

ようやく本題である。

ちなみに、

「あの男はどこに連れて行ったんだ？」

「なあに。ちよつとうちの地下室に連れて行ったただけだ」

「地下室？ ものすごい内臓系の臭いがするんだが？」

「だからうちは闇金ではないといったはずだ。地下室にあるのはただの……」

「ただの？」

「人力発電機だ」

「……：そういえばマリーが言っていたな。うちの生活費では電気代だけが見たことな
いって……」

「うちはほら？ エコ発電だから」

「ずいぶんと人に厳しいエコだな……」

……†……†……†……†……†……†……†……†……†……

「それで？ お前はいったい何がしたいんだ？」

「私の目的はただ一つ。この呪いの解呪だ」

夜の闇の中、犬神とエヴァンジェリンが殺気交じりの視線を交換していた。

犬神はひどく鬱陶しそうに。エヴァはかなりの怒気をはらんで。

「それは困るな。大方あの《千の呪文》の血族のあいつの血を使つて魔力を回復したうえで、力任せに粉碎しようという考えなのだろう？」

「察がいいいな」

「エターナルロリーの考えることなどすべてお見落とした」

「どっちなんだ!! あと、その呼び方はやめろ!! 好きどころなつたわけじゃないんだよ!!」

エヴァの魂の叫びを聞きながら、茶々丸は犬神にいじられるエヴァンジェリンを記録していく。

殺気はあつても緊迫感はかなり欠けていた……。

「まったく最近の吸血鬼はこれだから困る。昔の吸血鬼はトマトジュースを飲んで血液の代わりにしたんだぞ。昔の先達たちを見習い仲良くやっていこうとは思わんのか？」

「そんなギャグ漫画の住人達と一緒にするな!! あと、私に呪いをかけた奴の息子じゃ

なかったら、私だってもう少し友好的に接してやったわ!!」

「できないことは口にするな」

「最初から全否定!?!」

「マスター。話がずれています」

「くぅ!?!」

犬神のイジリマシンガントークにちよつとだけ載せられてしまったエヴァは悔しそうに歯噛みをする。そのすがたはまるで、

「そう。一昔前の魔女っ娘物の敵役みたいな……」

「お前たちは、どうしても私のこと三流悪役にしたいのかあああああああああああああああああああ!?!」

エヴァの絶叫が夜の麻帆良に響き渡った。

数分後。

「まったく。突然叫びだしおって。ご近所迷惑だと思わんのか?」

「だれの……ぜいだ……」

「マスター。のど飴です」

色々と呼びすぎてしまい、のどを噎らしてしまったエヴァは肩で息をしながら座り込み、茶々丸にかいがいしく世話をしてもらっている。

「それで、お前はいつたいたいどうしてほしい？ ギャグ補正でそろそろのども治っただろう？」

「コマ割りが無いから不可能だ、バカ……。私とボーヤを戦わせろ。私が勝ったら奴の血を吸わせろ。その代り私が負けたらあのボーヤの修行を手伝ってやる」

「却下だ」

犬神はそういうとさっさと踵を返して、自分の事務所へと戻ろうとした。

「一応聞いておくが……。なぜだ？」

「僕の依頼はあいつを育てて一人前にすることだ。おまけに昨日のお前の行動を見る限り、お前は自分のクラスメイトを使ってあいつを追い詰めようとしているのだろうか？ だったらそれは看過できん。あのクラスへの魔法ばれの阻止も依頼の中に含まれているからな」

「そうか……。なら……」

戦争だ。

エヴァがそうつぶやき、背中を向けている犬神に向かってフラスコを構える。犬神もそれに反応したのかぴたりと歩みを止めエヴァのほうを振り向いた。

「初めに言っておくぞ。現状僕は確かに克蘭レスには勝てないが、負けもしない。昨日あいつとの交戦をひかえた貴様らが僕に勝てると思うのか？」

「貴様こそ。私たちが今日の間は何の対策も講じていないとでも思ったのか？」

エヴァと犬神の魔力と気が高まりあいぶつかり合う。ぎしぎしと空間が歪みあたりに暴風が吹き荒れ始める。

そして!!

「あの、犬神様」

「……………なんだ。茶々丸とやら」

「おい茶々丸!」

二人の戦闘をさえぎるように、茶々丸が二人の間に入り犬神に話しかけた。

「安心してくださいいマスター。私に妙案があります」

「妙案だと？」

「犬神様のデータはすべて今日の間インプットしておきました。おそらくはネギ先生との戦闘を許可していただけるかと……」

「はあ？ そんなことができるのか!」

エヴァの言葉に深く頷き、茶々丸は犬神に向かってこう言い放った。

「犬神様。ネギ先生と戦わせていただけるなら、それなりの報酬をお支払いします」

マリーの喉を嚙らしてまでの魂のツツコミにようやく満足したのか、犬神は地面に転がったメガネの回収しそこについた埃を吹き払った。

「さて、次の依頼の話だ」

「満足したんちやうんかい!!」

もう話が進まなかった……。

「あ、あの……犬神さん？ 吸血鬼にあつたんですか!？」

閑話休題がようやく終わり、まともに話すことになった犬神一行の会議はネギの第一声から始まった。

「無論だ。コンビニでトマトジュースを買っているとどこに出会ってな。最近はカゴメの野菜ジュースにはまってるって聞いたな」

「ま、マジですか!!」

「大マジだ」

「思いつきり嘘っぱちゃんか!!」

話を進める!!

「ほんで、その吸血鬼さんはいったい誰やったん？ やっぱり外部からの侵入者とか？」

「いや。あの封印された吸血だったよ」

至って平然と、きっぱりという犬神に、マリーは思いつきり縦線を入れる。無論犬神

はマリーがエヴァンジェリンと友人なのを知っているわけで……。

「いやいや……そこは躊躇おうや!! 仮にも私の友達が私を騙してまでなんかしたがつてんねんで!! おしえんの少しはためらうやろ!!」

「何を言っている? そんなもの躊躇って何になる。奴がここ最近の騒動を起こしているのは事実だし、お前に隠したところで結果が変わるわけでもない。だったら教えることを躊躇う理由がどこにある?」

「うっ」

至って正論。犬神の言葉にやや面をくらいマリーはひるんだ。

当然と言えば当然のことだった。本当に外部から吸血鬼が入り込んでいるなら麻帆良の魔法先生や魔法生徒が黙っていないだろう。なにより深夜にあのダイナマイトバカの大砲級拳銃の轟音が響き渡っているはずだ。それが無いということは、つまりは内部犯。それも学園長が手綱をとれないほどの実力者だということ……。

「はあ……。まあ、薄々感づいたけども……。『お前に真実を知る覚悟があるか?』とか、そういうセリフがあってもよかつたやん?」

若干ふてくされたマリー。犬神との間に緊張が走り若干のシリアスさが、

「KOKUGOO?」

し、シリアスさが……

「NO!! 誰が古き良き日本を学べゆーた!?!」

シリアスさが……出るわけがなかった。

まあ、そんなこんなでエヴァがマリーをだましたことは平然と流されてしまったが、そんなことはどうでもいい、というかよく知らないうちに命の危機を迎えた少年は見事に置いてけぼりを食らったわけで……。

「いやいや!! 二人とも何の話をしてるんですか!! と、とにかくその吸血鬼さんを捕まえたらいいんですよね!?! どんな人なんですか?」

「ん? なあに。ただの闇の福音だ」
ダイク・エヴァンジェル

「実家に帰らせてもらいます」

「あきらめんのはやつ!?!」

どこから取り出したのか風呂敷を担いでどこかに行こうとするネギに容赦ないハリセンの一撃。犬神アンダーグラウンドサーチに来てから自分では逆立ちしたって勝てない存在がいると知ったネギ。そのため世界の広さをいち早く知ったはいいが、あきらめ癖がついてしまっていた……。

「いやいやいや!! 無理ですつて!! 勝てないですつて!! 死んじやいますつて!! 相手はあの《闇の福音》ですよ!!」

「なんや、エヴァちゃんつて、そんな強いん?」

実はマリー、エヴァの本当の実力……というか全盛期の實力というものを全く知らなかった。もともと魔法使いとは若干縁遠い父を持つ彼女。しかも、その裏にかかわっている父親も旧世界の戦場ばかり渡り歩いてきたため、魔法使いたちの常識にはかなり疎かった。

そのため闇の福音といわれても『だーくえんじえる?』としか聞こえないのだ。

「まあ、そうだな。全盛期なら僕も少々苦戦するかもしれないといった程度の相手だ」

「いや、めっちゃ強いやんか!! え、うそ、あの子そんな強かつたん!」

驚愕の事実に愕然とするマリーに犬神は黒い笑みを浮かべた、

「まあ、ようするに……お前が友人を名乗るなど、三億年早いほど高みいる存在だということだな」

サクツ!?

マリーに七万のダメージが入った!!

物理的ダメージを伴った口撃を食らい額から血を流し倒れるマリー。そんな彼女にネギは泣きながら縋り付いた。

「だ、大丈夫ですかマリーさん!? 気をしっかり持ってください!!」

「まあ、そんな冗談はともかく」

「冗談では済まない感じのダメージですけど!」

閑話休題……?」

「でさあ、犬神君。なんでまたネギ君がエヴァちゃんと戦わなあかんの? しかもエヴァちゃんって犬神君と同じくらい強いんやろ? そんなんネギ君が負けるに決まってるやん」

そんな相手にネギをぶつけるなんて、ネギを育てるように言われた犬神としては最悪の選択肢のはずだ。現にクラレンスさんが通りかかって証言してくれたが、今まではちゃんと邪魔をしていたようだし……。

そんな風に考えたマリーの当然と言えば当然の疑問。だがしかし、その尋ねた本人のマリーはすでに答えがわかっているらしい。いつの間にかハリセンを持って、入念にストレッツチを始めている。そんなマリーをしり目に犬神はいつものように眼鏡を輝かせて一言、

「そんなもの……あのエターナルロリータから金が入るからに決まってるからに決まってるからだろう!!」

「やっぱりかあ!!」

もうある程度予想していたとはいえ、さすがしく言い切った犬神にマリーのツッコミが決まる!! もうテンプレといっていい展開にちよつと苦笑をうかべながら、ネギはため息をついた。

「犬神君……君はもうちよつと人情とか、優しきとかを覚えるべきやで？」

「SINZYOU？」

「NO!! なんてエンターテイナーやねん!!」

「あ、あの……僕は結局どうすればいいのでしょうか？」

もういつまでたつても話が進まない二人の掛け合いに、ネギはちよつと泣きそうになりながらそう尋ねた。当然である。このまま無駄な時間が過ぎていく内も、闇の福音が襲いかかってくるかもしれないのだ。その恐怖はひとしおだろう。

「ああ、安心しろ。契約で奴との戦いは次の満月。大停電の日と決められている。それまで奴はお前に指一本触れないし僕が触れさせない」

「そ、そうですか……」

ようやく安心できる要素ができたことに安堵の息を漏らしながらネギはため息をついた。これで次の満月の晩までは安心だと……。

だが……。

「でも犬神君。このままやとどつちかの依頼が履行できひんで？ ネギ君負けたらただではすまへんやろうし、ネギ君守つたらエヴァちゃんとの契約履行できひんし……」

「安川。僕を誰だと思っている。僕はプロフェッショナルだ。無論どちらの依頼も完遂する」

「どうやって?」

「なあに。要はネギが負けなければいい」

その言葉と同時に、犬神はネギの両肩にポンと手を置いた。

「僕が次の満月までにお前を死ぬほど鍛えてやろう。次の満月の晩大停電によって奴の力のほとんどが元に戻るが、すべてが戻るわけではない。僕が全力で鍛えれば何とか奴と張り合えるようにはなれるだろう……」

声音はいつもと変わらずとても平坦。しかし、その眼は「失敗は許さん」といわんばかりに殺気が込められ、ネギを睥睨していた。

「さあ。特訓は今晩からだネギ・スプリングフィールド。お前に地獄を見せてやろう」

こののちネギはこう語ったという。

吸血鬼に殺されたほうがましでした……と。

8話・明日菜参戦!!

それから三日たった女子中等部のお昼休み。

「で、あんなにネギがやつれているわけね……」

「まあ、そういうことや」

げっそりとした表情でふらふらしているネギを見て顔を引きつらせる明日菜。マリーはその言葉に苦笑を漏らしつつネギに向かって合掌した。

ゲルのもう特訓が始まってからまだ三日。そうまだ三日である。しかし、一度ゲルのしごきを受けたことがあるマリーだからわかる。

三日も受けているのによくもっているなと……。それほどまでに犬神のしごきは苛烈なのだ。

別に犬神は特別な訓練をしているわけではない。ただの組手を延々続けているだけである。しかも犬神自身は攻撃しない。触れることができれば合格という破格の条件である。

それでも、犬神を捕まえるということは文字通り雲つかむようなことなのだ。

「だって、脚力だけで分身の術とか、ポールをつかんで横向きに体固定したりすんねんで

？どこの雑技団やねん」

「それだけで金がとれるわよ!？」

「おまけに、見つけことすらできひんかったら飯抜きやし」

「虐待よ、それ!？」

「え、失敗したら飯抜かれるんは当然ちゃうん?」

「マリーしつかりして!! そんな当然、当然じゃないに決まっているじゃない!!」

ネギ（とマリー）の苦労がしのばれる話である。

おまけネギと犬神の組手は麻帆良全土で行われるのだ。真夜中の麻帆良を駆け巡り探すことすら困難な犬神を見つけ攻撃を当てなければならぬというのはどれほど困難なことか……。

「ふふふ。私を倒すためにずいぶんとがんばっているみたいじゃないか、ボーヤは」

「!!」

その時、突如後ろからかけられた声に明日菜とマリーはバツとふりむく!

そこには茶々丸を伴い今までの授業を屋上でサボっていたエヴァが立っていた。

「ああ、おはようエヴァちゃん」

「……マリー」

「お前……」

「え!? な、なんか間違ったこと言うた!」

しかし、そんなことは関係ないとばかりに、平然といつもと変わらない挨拶をしてくるマリリーに明日菜とエヴァは絶句する。

「おまえ……私はお前をだましたんだぞ? どうして怒らない?」

「え? ああ、なんや。そんなことかいな」

「そんなことって……」

お前たちはつくづく私の覚悟を踏みにじるのが好きみたいだな……。と、若干のため息をつきながらもエヴァは少し安心していた。この学校に入ってから初めてできた友人のマリリーに、敵意むき出しの視線を送られてきたら流石に多少の精神ダメージは免れなかっただろうから……。

「まあ、ネギ君殺されたら困るけど……エヴァちゃんそんなことせえへんやろ?」

「ふん。どうかな? 私は悪の魔法使いだぞ」

「またまたあ。女子供は殺さへんゆーとったやん」

「あんたたち……。女子中学生が殺す云々連発するんじゃないの……」

若干どころか、百パーセント物騒さで構成された会話を交わす二人に明日菜は顔に縦線を入れる。マリリーあんたは常識人じゃなかったの? と言いたげな雰囲気は明日菜は流していた。

「それに、私はエヴァちゃんを信じとるしな」
「……そうか」

マリリーの言葉に少し苦笑をうかべ、エヴァは物騒な空気を引つ込めた。

「ここは学校だ。わざわざ喧嘩を売るような態度をとることもないだろう……と。」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに……」

「ちや、茶々丸さんつてそんなキャラだったの?」

後ろで不穏な会話が聞こえた気がしたが……。エヴァは全力で無視する。

「それにしても……」

そこで、エヴァはようやくやく本題である人物に視線を戻す。

「頑張りすぎじゃないか? ぼーや……」

「ああ、まあ、なあ?」

微妙に言葉を濁し視線をそらすマリリー。そこには寝ぼけた頭で閉まったままの教室のドア突っ込んでしまい、額を強打しうずくまるネギがいて……。

「あれでは私と戦えんぞ?」

「いざとなつたら《テンションホルモン》を使うつて犬神君ゆーとつたけど……」

「もっているのか!?!」

「ううん。こういうたらあの幼女やつたら面白い反応をするやろうつて……」

「マスター落ち着いてください。まだ力は戻っていないでしょう?」

「離せ茶々丸!! あの外道をぶち殺してやらねば私の気が晴れんのだ!!」

閑話休題。

「まあ、犬神君が言うには次の満月までにはお前が手も足も出ないくらい強くしておくから楽しみに待っている! やって……」

「ふん!! 上等だボケ!! 首を洗ってまつているッ。と伝えておけ!! 行くぞ、茶々丸!!」

「はいマスター」

そういつてちよつと泣きそうになりながらその場を立ち去るエヴァたち。

「あれが真祖の吸血鬼?」

「ま、まあちよつと子供っぽいところがあるけどな……」

苦笑交じりに自分の友人を擁護するマリーに明日菜はため息をつくのだった。

……↑……↑……↑……↑……↑……

「で、どうするのよ、あんたは?」

「あははは……どうしましょう? 今のままじゃ犬神さんに殺されてしまいそうです

し」

その日の放課後、ネギとともに家路についた明日菜の質問に、ネギは苦笑交じりにため息をついた。基本的に自分のことを気にかけてくれる明日菜にネギは好意を持っていた。それはそうだろう。原作では明日菜はつらく当たってきたため初期のネギの心証は最悪もいところだったが、こちらの世界には明日菜以上に滅茶苦茶をやってくる怪物がいる。相対的に明日菜への評価が上がるのは当然のことだ。

「パートナーでもいたら話は別なんでしようけども……」

「パートナー？ それって、この前あなたのお姉さんが手紙で言っていた？ でもそれって要するに恋人探してみたいなものなんでしょう？」

明日菜は間違えて自分の寮室に送られてきた映像を映す手紙を思い出しながら、ネギに尋ねる。

「はい。僕もそう思っていたんですけど、クラレンスさんから聞いた話によるともともとパートナーとは後衛の魔法使いが呪文を唱える時間を稼ぐ前衛職のことだったらしいんですよ。そういった人と契約を結んで力を共有することで連携を取り戦いを有利に進めるとというのが本来の魔法使いの戦い方だったそうで……」

「へえ〜。でもそれって……」

「はい。前衛の方にはかなりの負担がかかりますから、僕みたいな素人の前衛を務めて

『なるほど……つまり兄貴はそいつに一撃入れてやりたいんだな?』

「そーなんだよ。どうにかならないかな、カモ君」

場所は移って女子生徒寮。明日菜の部屋へと移った二人と一匹は対犬神用の作戦会議を練り始めていた。エヴァンジェリンは? と聞くのは無粋である。先の恐怖よりまずは目の危機を乗り切るほうが先決なのだ!!

『ふふふ。だったら簡単さ兄貴!! この姐さんと仮契約をしちまえばいいのさ!!』

「ええ!!」

「な、何言ってるのよ、あんた!!」

飲んでいた紅茶を吹き出しながら驚くネギと、顔を真っ赤にしながら怒声を上げた明日菜。当然である。もともとは戦いのために儀式だったとはいえ、今は恋愛色が強いことにはなんら変わりはないのだから……。

『じゃあ姐さん、このままネギの兄貴を放っておくっていうんですかい? こんな十歳の子供が痛めつけられているのに姐さんは黙ってみていると?』

「うっ!!」

それを言われると痛い。第一彼女は犬神からネギを守るということを誓い、ネギのそばにいます。その割に彼女は今までネギを犬神から守れたことなんて一度もなかつ

た。なんという体たらく。なんという情けなさ。

それが負い目になっているのか思わずたじろぐ明日菜を見てカモはいやらしい笑みを浮かべ畳み掛けてくる。

いや、別に痛みつけられていませんよ!! というネギの言葉も今は届かない!! とどかないつたら届かない!!

『なあに。ほんのちよつと十歳のガキンチョと唇重ねるだけじゃないつすか!! ノーカンすよノーカン!! それとも姐さん……もしかしてキスしたことないのおく?』

「なっ!! あ、あるわよ!! キスぐらい!! 二万回ぐらいやってるわよ!!」

「明日菜さん落ち着いて!! あとそれ本当だったらかなり問題ありますよ!」

カモの挑発にやすやすとのつてしまう明日菜に、貞操の危機を感じたネギは慌てて落ち着くように言い聞かせてみるが、

『じゃ、問題ないつすね〜♪』

「いいわよ!! やつてやろうじゃない!!」

ささつと方陣をかくカモに乗せられ、ネギをガッツリわしづかみにして方陣の中に放り込む明日菜!

「ま、待つてください!! 僕と明日菜さんは教師と生徒でっく!!」

ネギの抵抗はむなしく、こうして一人の少年の初キスはついえたという……。

へと飛んでいく。

「まあ……貴様が来るのは予想外だったし、貴様を本格的に魔法にかかわらせるのはもう少し後の予定だったのだが……。僕の予定が狂った事情に関しては後でお前たちの体によつくり聞くとしよう」

ゲルはそうつぶやいた後、麻帆良の闇の中へと消える。

『お前程度が何人増えようが同じことだ。お前たち二人では僕にふれることすらできないだろう』

ブチッ!!

闇に潜み、もはやどこにいるかもわからない大神の言葉を聞き、明日菜の中で何かギレた!

「ジョートーよ、この外道!! 今日こそ吠え面かかせてやるんだから!! ネギ!! 呪文
お願い!!」

「あ、はい! 契約執行60秒間!! ネギの従者『神楽坂明日菜』!!!」
夜の追いかけつこが始まった。

そしてそれから数時間後。

「なるほどそういうわけで神楽坂がいたのか」

「は……」

月を背景に建物の屋根に立った犬神は息も絶え絶えになって倒れ伏した明日菜とネギに事情を尋ねていた。その右手にはがたがたと震えるカモが握られており、今にも背骨が握りつぶされそうな力で握りしめられている。

『だ、旦那……ギブ……ギブっ!!』

ちよつとしゃれにならなさそうな声音で犬神の手をタップするカモに、たまたまクラレンスと一緒に依頼をこなしていた最中に通りかかったマリイが、顔に縦線を入れてドーン引きしていた。

「犬神君。君そのうち動物愛護団体に訴えられんで……」

「知ったことか」

平然とマリイの言葉を切り捨てながら、犬神はマリイへ向かってカモを投擲。マリイは無事受け止められたカモはマリイの服にもぐりこみガタガタと震え始めた。

「おお。だ、大丈夫か？」

「あ、悪魔だ……。悪魔があのだ旦那には憑りついているんだ!!」

「あゝ。否定できひんなあゝ」

「聞こえているぞ、安川……」

若干虚ろな笑みを浮かべるマリリーの言葉を聞き、犬神は明らかに青筋を立てながらマリィを睨みつけた。

「さて、野菜……言い残すことはあるか？」

「で、できるだけ苦しくならないように殺してください」

「いいだろう」

「よくないよ!!」 犬神君やったらシャレにならんしな!!」

特筆することもなく特別なこともなく。ある意味予定調和といわんばかりに、気で強化すらしていなかったゲルにあつさり逃げ切られた二人。結局この日は一度も犬神にふれられないまま追いかっこは幕を閉じたのだった。

後日談。というか裏話。

『ところで姐さん』

「マリィでええよ」

『じゃあマリィの姐さん。あんたも胸にまだブラはいらねえと思うんだが?』

「……………」

『あ、あれ? 姐さん?! ちよ、まつ!! オレッチの関節をそつちには曲がらな……!!?』

そののち、カモを見た人間はいない……。

閑話・決闘前の日常

朝。

小鳥がさええずる爽やかな朝。カーテン越しに部屋を照らす暖かな日差しがマリーの目覚めを促す。

今日も一日いい日になりそうだ。そう思いながらマリーは目をさまし、

「グツモーニング！ マリーちゃん!!」

マリーの部屋に勝手に侵入してきた、不審者を一人発見した……。

「俺様参上♡」

赤い目を隠すマスクに、超人的ヘヤセット。風もないのになびく真紅のマフラーには実は針金がとおされているらしい……。

彼の名前はスパルタンVI。和が犬神アンダーグラウンドサーチのBOSS、犬神ゲルに何度となく挑戦し激闘を繰り広げ、

「……………」

るたびにボコボコにされて泣きながら逃げていくということを繰り返す、自称天才怪盗を名乗る生粋のバカである。

おまけにこの前は犬神に乗せられてまだ十歳のネギをタコなぐりにした経歴を持つ危険人物。現在はネギの体術の師匠として結構良好な関係を築いているらしいが、

「まあ、今はそんなことよりも……」

「？」

マリーの呟きに不思議そうに首をかしげるVI。マリーはそんな彼にカードから取り出したハリセンを使って、

「バツモーニング!!」

「レイトツツコミありがとう!!」

正面を向いているVIの顔が勢いよく横を向くぐらい、力いっぱい殴りつけた!!

……†……†………†……†………

「お目覚めすつきり?」

「ドツキリや!! なに朝っぱらから人の部屋に不法侵入かましとんねんコソ泥!!」

「ふっ……泥棒に何とは愚問の極み……。といたいところやけど、今日は泥棒としてやってきたわけやないからいわんとくわ」

「ほな、その悪趣味な格好は何でしてきたんや?」

「マリーちゃん。この格好結構気に入っているんやからけなすんはやめて。心に刺さる……」

そんな会話をしながら、マリーはボツサボサに寝癖のついた金髪にブラシをかけたいつものように後ろでまとめていく。VIはただらだと窓に座りながらその様子を見ていた。

見られて気になるなどマリーは言わない。どうせまだ話があるのだろうから、何を言ってもこのバカが出ていくことがないことぐらい知っているのだ。

「ほんで、ホンマいったい何しに来たんよ。言っとくけど私の部屋に金目のもんはないで」

「うん。虫かごみたいにくソ狭いしね。二畳って……」

「殺すで？」

「そんなことは君がねとる間に調べたからしつとるよ。根こそぎ」

「根こそぎ!?!」

「あと、君の胸にまだブラはいらんわ。それはチチとはよべへん」

「キシヤ———!!」

コソ泥に好き勝手言われてしまい猫のようにブチギレるマリーを無視して、VIは話を進めていく。

「今日やってきたんは他でもない……。うちの弟子がこまつとるようやったから力かし

たろうおもてな」

「ああ……ネギ君のことかいな」

VIが明かした事情によく合点がいったのか、マリーはカードにハリセンを収めた。まあ、といっても自分の部屋から不法侵入したことは納得できないが。

「そう!! うちの弟子が犬神君にいじめられて日々泣き寝入りしていると聞いた俺様はいても立ってもいられず、こうしてはるばると……」

「はいはい」

「ちよ、きいてえや……」

何やら語りだしたVIを無視してマリーはいつものようにマラソンを開始するため、トレーニングウェアを着こむ。そして、外にでるついでにネギを起こしといたろ。と思いい、ネギに会いに来たとつているVIをひきつれネギが寝ている部屋へと歩き出した。

そういうたら……昨日明日菜とめとったな。ついでにバイトやって起こしたろ。と、マリーは思考しながらソコソコ上等な木材が使われた部屋の扉の前にたつ。

結局昨日の訓練で疲労困憊した明日菜は、自力で寮に戻るほどの体力を回復するこ
とができずクラレンスに担がれてこの事務所に泊まったのだった。

「ネギ君。あんたのバカ師匠がなんかきてんで」

「マリーちゃん……俺になんか恨みでもあんの？」

『バカ』というところをひどく強調しながら言い切ったマリーに顔を引きつらせるVI。その二人が見たものは、

「はふう〜」

なぜか明日菜の胸に顔をうずめるようにして満足げに眠っているネギと、

「うちゅ〜」

寝ぼけているのかそれとも寝ぼけたふりをしているのかは定かではないが、ズボン半分脱ぎ、パンツを露出した姿でネギの額にキスをかましかけている明日菜の姿だった。

「……………」

マリーはその光景を見てしばらく無言になった後、

「よし異常なし」

「いや…………マリーちゃん。現実逃避してんと早いこと起こしたほうか二人のためやと思うけど」

なぜか晴れやかな顔をしてその光景を無視したマリーに、珍しくVIがそうツッコむのだった。

……………

「はあ？ おねえちゃんにとつたから、明日菜の布団にもぐりこんだん？」

「はい……。すみません」

「まったくよ。あんたのせいで最悪の目覚めだわ!!」

「でもせやつたらなんで私のところにはこーへんかったんやろ？」

「あ、言われてみれば……」

「決まっているだろう。貴様の貧相な体ではネギの姉の代わりは務まるまい」

「殺すぞ？」

「マリー……私が代わりにやる」

「ヒメちゃんが言うとしヤレにならへんな……。元暗殺組織の長の娘やし……」

「「そうだったの!？」」

「ゲル様……今日のご予定ですが」

カオス……。今の犬神アンダーグラウンドサーチの食卓の様相のことである。みんな好き勝手しゃべりながら朝食を楽しんでいる。

「それで、貴様はどうしてここにいます？」

「はっ!! そんなもんきまつとるやろうが。弟子を助けるためや」

「弟子？」

「あ、はい!! しばらく前から格闘術の訓練をしてきている六重トウジ先生です」

「NO!! ネギ君、俺のことは師匠とよべゆーたやる!!」

「あ、はい!! 師匠!!」

「ああ、ええなあその響き! もつかいや!!」

「師匠!!」

「わんもあ!!」

「師匠!!」

何か変なツボにはまってしまったらしいVIとネギを見て明日菜は顔を引きつらせる。

「ねえ……あの人って、もしかしてバカ?」

「もしかせんでもバカやで」

かなりひどいことを言う二人に鼻を鳴らしながら、犬神はさっさと食卓から離れた。

「まあ、そんなことはどうでもいいが……安川。依頼だ。ついてこい」

「へいへ〜い」

犬神に呼ばれてササツと朝食を掻き込み立ち上がるマリーに、ヒメは左手の袖口から取り出され『ジャキジャキ』物騒な音を立てて開閉する『首切りバサミ』を再びしまい、マリーの背中に飛びついた。どうやらついていくようだ。

「あ、だったら僕も」

「別についてきてもいいが……」

今日は休日ということであつて来ようとするネギを一瞥して一言犬神はつぶやく。

「今回の依頼は……浮気調査だぞ？」

「行つてらっしゃい!!」

ネギは即座に態度をひるがえし、食卓から断固として動こうとしなかつたという……。浮気調査に何か嫌な思い出でもあるのだろうか？

いやまあ、十歳なら浮気調査に参加したがるのではないのは当然ではあるのだが……。

「ふふん。そんな余裕かましててええんかいなゲル君！俺にはネギをお前に勝たせるための秘策があるんやで!!」

しかし、そんな犬神たちをVIは呼び止めた。

「秘策!?!」

「ちよ、そんなのあんの?」

今までゲルに負け続けたネギはもちろんのこと、昨日苦い敗北を味わつた明日菜もVIのその言葉に食いつく。しかし、

「いや、全然気にならないな」

一番食いつくべき犬神はそういつてVIの言葉を切り捨てた。

「……………」

もう唾然とした状態で固まる三人をしり目に、犬神はさつきと踵を返し部屋を出ていこうとする。

それに慌てたVIが慌てて言葉を重ねた。というか、かまってほしかったようだ。

「いやいや、もうこれが成功した君、俺に向かって『きやーん』しか言えへん様なすつごい策なんやで！ どうや、気になってきたやろ!! 教えたつてもええんやけど!？」

「いや、結構」

「はっはは!! 犬神君、それ以上は俺が泣くさかいにやめたほうが身のためやで!!」

そんな脅迫なのか懇願なのかよくわからない言葉を放ちつつ、VIは話を進めていく。ちなみに彼は血の涙を流しており、明日菜とネギはVIのことが非常にかわいそうに見えるらしい……。

「ふふふ!! 余裕かましてられるんも今のうちやで、犬神ゲル!! 新月の夜には気を付けることやな!!」

「師匠……それ捨て台詞」

「やっぱバカじゃない……」

仮にもバカレンジャーと名高い明日菜にすらそんなことを言われるVIに、もうネギは頭を抱えるしかなかった。

ちなみに、VIが先ほどにセリフを吐き振り返った時にはもうゲルの姿はなかったとい

本当は犬神をおびき出して家の外に出させるといふ段取りもあったのだが、犬神はVIのことをガン無視してさっさと仕事に行ってしまったので、その段取りはなかったことになる。

都合がいいと喜ぶべきか、相手にされなかったことを悲しむべきか、いまいちよくわからないことになってしまっていたが、まあそれは気にしないとVIは自己完結。ずんずんと事務所の中を進む。

「や、やつぱりこんな非人道的なことはやめましょうよ」

「あほかネギ!! 勝つためやったら何してもええんや!!」

「ダメだ……。師匠頭に血が上って声が聞こえていない……。あ、明日菜さん止めるの手伝って……」

「さあ、ネギ!! 手早く探すわよ!! 絶対あの外道ぎやふんと言わせてやるんだから!!」

「あすなさああああああああああああああああああああん?」

明日菜のまさかの裏切り愕然とするネギを後目に、VIと明日菜はゲルの部屋の前にたどり着いた。

「さて、ここやな!!」

「ええ、そのはずよ!! 昨日寝るときここに入ったのを見たもの!!」

そういつて、二人が前に立った扉は、

「「……………」」

とつてなし。鍵なし。何やら金属質な光沢をもつ、宇宙戦艦とかに使われていそうな自動ドア……。

「つて、なんでここだけSFチック!?!」

「だ、だいぶ前に家ごと事務所を吹き飛ばされたことがあるからその対策だつて……」

「ほんと何してんのよあいつは!?!」

ネギから聞かされた何やら物騒な理由に明日菜は愕然とするが、VIはそんなこと気にしない。

「ふふふ。ここが我が宿敵の巣……」

そういつてVIはドアの切れ目をまたぐように両手を配置した後、気だめいいっぱい強化した両手を使い、力づくでドアを開けようとする!!

「ふんがああああああああああああああああああああああああああああ!!」

五分後……。

びくともしなかつた扉の前で荒い息をしながらVIは一言ツツコミを入れた。

「あかんがな!？」

「しらんがな!!」

思わず関西弁になってツツコミを入れるネギをしり目に、明日菜は微妙に引きつった笑みを浮かべる。ネギから本気のVIは、大陸弾道弾級の威力を持つ攻撃をしてくると聞いていたのに、その力でさえなお開かない扉にあきれているのだ。

「つーか俺の気を込めた力でも微動だにせえへんってどういうことやねん!! 鉄でもないのでめっちゃ固いし!? なにこれ? アダマンチウム!？」

「も、もうあきらめましょうよ。犬神さんにばれたら確実に怒られますし……」

扉をくまなく調べてとんでもない事実を知ってしまったVIをしり目に、ネギはもうちよつと泣きそうになりながらVIの袖を引っ張った。ばれたら間違いなくろくなことにならないことは目に見えているのだ。ネギがおびえるのもわかるというもの、

しかし、VIはあきらめなかつた!!

「アホか!! あきらめたらそこで試合終了やで!! なあに、ドアが開かへんのやつたら違うところに道つくるのみや!!」

VIはそういった後、横に壁へと手を付けた。

「ま、まさか!？」

「ふはははは!! 甘いで犬神ゲル。ここの壁は普通の素材みたいヤシ、俺のパンチやったら一発や!!」

「やっぱり!? ダメですよ、ここ賃貸なんですから!! 明日菜さんも何か言ってくださいよ!!」

「やっちやいなさい!!」

「明日菜さん!! あなたそんなキャラじゃないでしょう!! どうしたんですか!?!」

ネギのツツコミファイバーが炸裂する中、明日菜はちよつと座った目でネギを見つめてこういった。

「ネギ……。外道にはね、人権はないのよ」

「しつかりしてください明日菜さん!! 今度人生相談に乗りますから!!」

どうやら明日菜は真剣に犬神のことが嫌いになったようだった……。

「おっしやいくでええええええええええええええええ!!」

「ああ、待つて!!」

ネギの制止も聞かず、VIが振り上げたこぶしは容赦なく部屋の壁につきたち、そして……!!

「壁の中にも金属が……犬神さん。シエルターでも作ったんですか？」

まるで建築物破壊用のハンマーで殴ったかのような巨大な穴が開いた壁からは、ドアと同じ材質の金属がのぞいていた……。その傍らには殴りつけた手が大変なことになるっているVIが……。

そんな光景にもう言葉もない明日菜とネギだった。

「く、くそ。このままやったら犬神君の弱点は探れへん」

「い、いやもう、師匠いいですって。格闘技真剣に覚えて《戦いの歌》完璧にしますから、もういいですって……」

「でも、ネギ……」

「明日菜さん。あなたにはあとでお話があります!!」

あくまで弱点を探ろうとするVIに、ネギはフルフルと首を振りやめるように頼み込み、反論しようとする明日菜にくぎを刺した。

これ以上家を粉碎されたら犬神がなんというかわからないかだ。

三人がそんな風にもめている時だった。

「ネギ先生」

「！！！！」

突如聞こえてきた呼びかけに、ネギたちは慌てて窓のほうを振り向いた。

その人物は二階に設置されている窓から、ヒョッコリという音が聞こえてきそうなほど気軽に顔をのぞかせていた。特徴的な緑色の髪と、能面のように動かないやけに整った顔をもっており、背中から凄まじい噴出音が聞こえるバーナーが出ている、

「茶々丸さん!?!」

「え、その背中なに!?!」

「え、ロボットやろ?」

驚いたように固まるネギと明日菜の二人にVIがツツコミを入れた。

「そ、そんな!! 茶々丸さんがロボットだったなんて!!」

「全然気づかなかったわ!!」

「いや、パツと見わかるやん!?! 関節とか耳とかメツチャロボット臭いやん!!」

今までとは立場を逆転させて漫才を始める三人をしり目に、茶々丸はある人物からの言葉を伝えた。

「い、犬神さん!!」

「なんだ、野菜……」

ネギが一步足を踏み出し、犬神はそれを受けて立つといわんばかりに静かに気を解放していく。

そして、

「お金払うから一撃入れさせてください!!」

「御意。クライアント」

ゲルは即座に瞬動でネギが持っていた封筒を奪い取り、その中の金を数えた。中身は二十万。ネギが犬神の仕事を手伝い、手に入れた報酬の約半分である。

そして、月明かりが照らすなか。ピタリと固まった犬神の背中にネギがポンとたたく。こうして、犬神の地獄の特訓は終了したのだった。

「なにかが……まちがってない?」

「明日菜……いまさらやで」

そんな光景を見ていた二人の言葉を聞き流しながら……。

後日談。

「で？　なんであんな面倒なことしたんよ犬神君。金で終わらしたんやったってことは、あんまり役にもたへん修行やったんやろ？」

「バカを言うな安川。あのタイミングだったから僕は金を受け取ったんだ。もつと以前だったら絶対に受け取らなかつたぞ？」

「へ？」

「考えてもみろ。ネギはまだ十歳だ。魔力うんぬん以前にまず体力が戦いを行うためには圧倒的に足りない。それを鍛えるために毎日追いかけてこをさせたに決まっているだろう」

「え？」

「それに《戦いの歌》をほとんど実践と同じ状況下で使えたんだぞ。VIと修行するときと比べて格段に早く操作方法を習得できたはずだ」

「……」

「それに追いかけてつこという遊びはなかなか頭を使うからな。追う側も追われる側も綿密に計画を立てて戦えばかなり有利に事が運べると学んだはずだ。ましてや、今回のエヴァンジェリン戦の戦場は麻帆良だ。追いかけてつことで僕を探し回つただろうから、麻帆良に地理、環境にはかなり詳しくなつたはず。これだけでもナギ・スプリングフィールドの呪いを解くこと以外自堕落に生きていたエヴァンジェリンとは大きな差が……」

そういつて、彼女は自分の体を見回す。まるで鎖が全身に巻きついていてるかのような魔力の檻。彼女はそれを握りつぶさんとばかりに握りしめる。

「待っている……ボーヤ。決戦の日は……は、は、はんつくしよん!!」

しかし、彼女がまどついていたシリアスな雰囲気は鼻水やら唾液やらをまき散らす盛大なくしゃみによって破られた。

吸血鬼自身のくしゃみによってだ。

「マスター。おうちに入ってください。まだお風邪をひいておられるのですから」
「うん。そうする」

熱のせいでちよつとだけうるんだ目をこすりながら、彼女は従者の言うことを素直に聞き、垂れた鼻水をティッシュでふき取りながらログハウスの中へと入った。

「申し訳ありませんマスター。私がもう少し気をつけていれば……」

「いうな、茶々丸。私の健康管理がずさんだったのがいけなかったのだ。は、は、はつくしよん!!」

「マスター。花粉症のお薬です……」

「うう、死ぬ。鼻水で窒息死する……」

お、鬼は不敵に笑いながら……自分の呪いを解くために戦う前に、自分の病気を治すために戦うのだ!!

インテールの少女。神楽坂明日菜。

彼女も犬神の訓練が終わった後、VIを師事して格闘術の鍛錬にいそしんでいた。どうやら今回の吸血鬼戦に参戦するようである。

彼女はネギを後ろに放り投げると同時に、ハリセンを振りかぶり、VIへと殴りかかる。しかし、VIはタカミチと同等の実力を持っている怪物である。訓練を始めて間もない少女の攻撃を喰らうわけもなく、あっさりとそのハリセン攻撃をよけ、伸ばされた彼女の手を取り、関節を決め、天高くぶん投げた。

「ぎゃああああああああ!!」

「失点やで明日菜ちゃん。素人があんま大ぶりの攻撃したらスキつくるだけやゆるーたやろ?」

VIがそういって、ネギのほうを振り返った時、

「来れ雷精 風の精!! 雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐……」

明日菜を投げたことにより若干のタイムロスをしたVI。その隙について完成させた今のネギが使える魔法で最強の威力を誇る魔法を、ネギは詠唱し終えていた。

「やばっ!」

「いっけえええええええ!!
ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス
 雷の暴風!!!」

巻き上がる、雷をまとった暴風。それがまるでレーザーのように一直線にVIへと延

び、彼の体を飲み込もうとする……だが!!

「はっ!! なーんて、いうと思っただんかいな!!」

瞬間、彼の拳にすでに貯められていた気が解放され、ネギの魔法をあつさり迎撃した!!

「ふきとべえええええ!! VIインパクト!!」

そして、相殺される魔法と気弾。凄まじい轟音。巻き上がる爆風。VIは中でも平然と仁王立ちしネギの様子を確認しようとした。その時!!

『カントゥス・ベラークス戦いの歌』!!」

「!？」

爆風に紛れ込んだネギは、昨日までは完成させていなかった戦いの歌を完全に制御しながら、VIへと強力な飛び蹴りを放ってきた!!

しかし!!

「はあ!! 不意打ちっていう選択肢はええけど!!」

そういつて、VIは瞬時に身をかがめネギの足を回避。そして目標を失い泳ぐネギの足を捕まえた!

「モーションがでかすぎんで。正面からやのうて後ろからやるべきやったな」

最後の攻撃をあつさり回避されてしまったネギ。しかし、その顔に焦りは見えない。

あった自販機から買ってきたスポーツドリンクを投げ渡す。

「ほれ」

「あ、ありがとうございます……」

「あんた……。こんな強かったのね。普段あんなにバカなのに……」

「明日菜ちゃん。俺のことどう思ってるの？」

自分の評価に低さに若干ショックを受けながら、VIは肩をすくめる。

もつとも今の彼をVIと呼ぶのはいささか語弊があるだろう。彼の姿は怪盗用の悪目立ちする格好ではなく、ヘアバンドをつけてジャージを着た普通の少年の服装だったからだ。

今の彼は六重トウジ。麻帆良学園中等部所属のただの学生である。

まあ、男子たちの間では女子中等部の武道四天王と対なす、麻帆良武道猛将などといわれているので、普通の学生というのはいささか語弊があるが……。

「ほんで、いちおう短い間で詰め込めるもんは全部詰め込んだつもりやけど……。お前としてはどうやねん、ネギ。あの吸血鬼に勝てそうか？」

VI……トウジの珍しく真剣な声音での問いかけ。ネギはそれに少し驚きながらも頷いた。

「勝ちます。魔力量も経験値も……。そして生物としての格も、何もかも勝てる要素がな

い勝負ですが……勝って見せます!!」

「……ええ覚悟や。見違えたでネギ」

ネギのはつきりとした答えに、満足したのかトウジは嬉しそうにネギの頭をなでる。そこにはちゃんとした師弟関係が見て取れて、

「あんたたち、ちゃんと弟子と、師匠やってんのね……。そっちのほうじゃ意外だったわ」「どういう意味や（ですか）!?!」

明日菜にそんな失礼なことを言われてしまい二人のとも、若干のけぞりながらツツコミを入れた。

準備は万端。気合は十分。あとは戦いするときがくるのを待つだけ……。

そのはずだったのだが。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

時間は流れて……。満月の夜……の前の夜。

マリー、ネギ、明日菜は突然犬神に呼び出しをくらい事務所へと集合させられた。

「ちよつと……。いったいなんなのよ。私たちに用事って」

「あの犬神さん。明日の対決の準備で僕も少し忙しいんですけど……」

若干呼び出しに不機嫌そうな顔をするネギと明日菜。それはそうだろう。マリーから命の危険はないといわれてはいるが、明日の夜は間違いなく死闘となる。彼らも彼らなりの準備を行い万全の態勢で臨みたいはずだ……。だが、

「黙れ。叩き潰すぞ」

「……………!!」

二人は犬神の一睨みによつて沈黙を余儀なくされた。不機嫌なのは犬神も同じだったらしい。

「あははははは……。ほんで犬神君。こんな時間に集合かけるなんてどないしたんや？」

ガタガタ震えながら泣き始める二人を隅へと逃がし、マリーは冷や汗交じりに犬神に問いかける。さすがは長年の助手!! あの、犬神に話しかけるなんて!! そんな感じの表情で、二礼二拍手一礼する明日菜とネギ。

私は神社か!? 安川大明神か!? マリーは激しくそうツツコミを入れたくなったが、さすがに不機嫌な犬神の目の前で漫才を繰り広げるのは気が引けたので、全力で本能を

抑え込む。

「なんだ、ツツコまんのか？ つまらんな」

「どないせえつちゆうねん!!」

しかし、犬神から自分の努力を全否定されてしまい結局は鋭いツツコミを入れることになってしまっているのであった……。

閑話休題。

そんな騒ぎはなかったことにして、犬神はさらつと要件を言った。

「エターナルロリが風邪をひいたらしい。このままでは契約が履行できない。お前たち。ちよつと行って看病して来い」

「え？ 風邪?」

「あの……私たちあの子の敵なんだけど?」

「何か文句でもあるのかジャリ二人?」

「ありません……」

人殺しの視線を向けてくる犬神に敬礼する二人。いつか犬神を倒すといっていた明日菜だったが、彼女が犬神に逆らうことはもう不可能と聞いていいだろう。

ちなみにマリーは?

「毎年毎年気をつけえゆうーとんのに……。またゲームで夜更かししよったな? あ、

茶々丸？ 悪いんやけどそっち行つてええ？ あんた一人やったら看病大変やろ。私もそっち行くわ」

意外と手際よくエヴァの看病の準備をしていた……。

…↑…↑…↑…↑…↑…↑…↑…↑…↑…

学園都市のはずれにある森の中。そこにある小さなログハウスがエヴァンジェリンのすみかである。学園の魔法先生や魔法生徒からは吸血鬼のすみかとして敬遠され、だれも近づこうとしないのだが……。いま、この家の中は結構賑やかなことになっていった。

珍しいことに、この家に三人もの客人が来たのだ。

「ホンマにもう!! あんたいつつもこの時期になると体調悪くなるんやから、体調管理には気をつけやつて去年も一昨年もいったやろ!! 何してんの!!」

「うう……すまないマリー」

そんなことをいながら、マリーが差し出したスプーンから弱弱しくおかゆをすするエヴァ。そんな光景を見た、ネギは、

「エヴァンジェリンさんって……結構子供みたいですよね」

一生懸命看病をしたのだが、性別の違いからほとんど役立たずとなってしまうたネギはそんなことを言いながら新しい氷嚢を作ってくる。

「見た目子供な分余計にね……」

ひらひらと体温計をふるい、少しそれを冷やしてからエヴァンジェリンに渡す明日菜。先ほど汗をびっしょりかいていたエヴァンジェリンの服を変えたり汗を拭いたりしたのは彼女だったりするのだが、その間ものすごく暴れたのでちよつとしたキズをいくつも作っていたりする。

「ほう……死にたいらしいな貴様ら!!」

「ほら、あばれたらアカン!!」

「ううう。明日覚えていろよ」

余計なことを呟いていた二人を目ざとく見つけたエヴァは、若干の怒りとともに立ち上がるとするが、マリーの手によってあっさりベッドに戻されてしまい、恨みがましい視線を二人に送るだけで終わった。

どうやら本気で、風邪にかかってグロッキーになっているようだ。

「本当にありがとうございます、マリー様。私も少し用事があったので助かります……」
今まで一人でエヴァの看病をしていた茶々丸はそういうと、制服を着こみペコリと一礼をした。

「つてのある大学病院に薬をもらいにいってきます……。本当なら昼間のうちに行っておくべきだったのですが、マスターのことが心配で離れることもできず……」

「ああ、ええよ。私もこの子に早いこと風邪治してほしいな。いってき」

「了解しました。マリー様なら安心して任せられます」

「安心できないものも何人かいるがな……」

「マスター……そんな照れ隠しを」

「貴様、茶々丸!! なおつたら、必ず博士に脳みその点検してもらうからな!!」

無表情のまま頬を抑える茶々丸に、エヴァはちよつと泣きそうになりながら怒鳴り声を上げた。そんな主から逃げるように……。しかし、かなり楽しそうにさつさと茶々丸は家を出ていく。なんやかんやで人間臭くなりつつある彼女だった。

「といつてもやることほとんどないけどな。服も変えたし、汗も拭いたし、体温は計ったし、おかゆも食べたし、あとは寝るだけやな、エヴァちゃん。どないする? 隣で子守歌でも歌つたらか?」

「さすがにそこまで子供ではないわ、馬鹿者……」

熱の為か羞恥心の為か。とにかく若干顔を赤く染めて、文句を言ってくるエヴァにマリーは肩をすくめた。

「はいはい。ほな私ら下におるし、なんかあつたら呼んでや」

そういつてひらひら手を振りながら、部屋を出ていくマリーたち。しかし、マリーは部屋を出てすぐに扉の前で待機した。

「どうしたんですか？」

「そんなところで、止まって」

「いや……なんかあつたらすぐに助けられるようにな」

平然とそんなことを言つてのけるマリーに、ネギと明日菜は感嘆のため息をついた。

「本当に友達思いね」

「マリーさんってすごいですよね……。エヴァンジェリンさんと友達つていうのもすごいですが、犬神さんの助手して、うちのクラスのツツコミ役して……」

そこまで言つてネギはようやく気付く。もしかして、うちのクラスのメンバーで一番すごいのはエヴァンジェリンさんや明日菜さんじゃなくて、マリーさんなんじゃ……。……。

「マリーさんって……もしかして超人ですか？」

「筋肉バスターなんてうたれへんよ？」

「「え!？」」

「私を何やと思つとるんや、二人とも!？」

そんなマリーの軽やかなツツコミを受けて、二人はなぜか恍惚とした表情になる。

「完成されたタイミング」

「ボケにあわせて調節された見事なツツコミの勢い」

「もう芸術ランクね」

「犬神さんが積極的にボケをかましてツツコミを受ける理由がわかります」

「二人とも、ずいぶんうちのボスに浸食されてる気がすんで……」

もはや元のキャラが形も見受けられない二人の行動に、マリーはやや頬を引きつらせる。

そんな感じに、エヴァンジェリンの看病は続いていく……。

……+……+……+……+……+……

それからしばらく経ったとき、

そろそろ氷囊が解けてしまっただろうと思ったネギと明日菜は、二階に上がってきてマリーがドアの前にはいないことに気づいた。

「あれ？ マリーさんは？」

「中に入ったんじゃない？」

二人はそういつて、エヴァンジェリンの寝室に入った。そこで……。

「あ……」

「寝ちゃってますね」

二人が寝室を除いた時、マリーとエヴァの二人は安らかな寝息を立てて眠っていた。エヴァはいつの間にか先ほどとは違うパジャマを着て、布団で横になっている。マリーはそのベッドにもたれかかりやすやすやと寝息を立てていた。

あたりには、おそらく再び汗でグッシヨリになってしまったのだと思われる先ほど明日菜が着替えさせたパジャマや、ぬるくなつた氷嚢。そして、汗を拭きとつたと思われるタオルが散乱していた。

「うなされていたんでしょね、エヴァンジェリンさん」

「私たちも呼ばよかつたのに……」

本当ならマリーもそうしなかつたのだろうが、あいにくとエヴァがうなされながらうわごとで、《千の呪文》サウザンドマスタの名前をつぶやいたため、彼女たちを呼ぶのは控えたのだ。エヴァとネギの父親の間に何があつたのかは知らないが、少なくともネギには聞かれたくないだろうな、と思つたマリーなりの配慮なのである。

「それにしてもこの二人本当に仲がいいですよね。クラス担任としてはうれしい限りです」

「たまに長谷川さんと一緒に話している時もあるみたいよ？ マリーはほら……賑やか

で明るくて、裏表のない子だからね……」

「うちのクラス全員がそんな感じでは？」

「ま、マリーはさらに別格なのよ!!」

勝手に別格扱いにされてしまったマリーは若干うなされてる気がする。それもそうだろう……。ただでさえ能天気さは麻帆良一といわれている3―Aの中ですら別格といわれてしまったのだ。これで彼女が起きていたら、大いにツツコミを入れたことだろう。

「じゃ……氷囊変えたら私たちもここにいよっか」

「はいー」

そういつて、エヴァの濡れタオルを回収し新しい氷囊を彼女の頭に乗せるネギたち。その後、彼らはじつとエヴァがうなされないか見守っていたのだが、何分彼らは10歳と中学生。すぐに眠くなってしまい、マリーの隣で彼女と同じようにすやすやと眠りの世界に入り込んで行ってしまった。

そして、それからしばらくして帰ってきた茶々丸はその光景を見て、

「……………」

無言で《ますたーの成長記録》に記録した後、優しく彼らの体に毛布を掛けるのだった。

後日談というか今回のオチ。

「ああ……マスター。あんなにマリー様と仲良くして……。で、ですがもしかしたらそっち関連の關係を持っておられるのでしょうか？　そうでないとあれほどの仲の良さの説明が……。マスター。それはいけません。私的にはありといえあればあります。が、やはり同性同士というのは非生産的ですし……。せめて、マリー様は本妻においてあとひとり、お婿様を取っていたただかないと……。」

「ちやくちやくまるく？」

「あ、おはようございますいますマスター。どうされたのですか？　そんなに憤られて？」

「きさまというやつはく!!　いったいどんな経験をしたらそんな風になるのだ!!　ええい、巻いてやる!　巻いてやるく!!」

「ああ、マスターそんなご無体なく」

「何やつとるん二人とも？　はよ、いかな学校に遅刻すんで」

「寝坊したああああああああああああああ!!」

ガイドノイド。エヴァンジェリンの従者……絡繰茶々丸。最近へんな方向に人間臭くなりつつあるちよつと変わったロボットである。

9話・深夜の激闘1

「杖持った？」

「持ちました!!」

「防具持った」

「ばっちりです!!」

「小細工よ用の道具は？」

「ぬかりありません!!」

「ほかは……」

「いい加減にしろ」

麻帆良の暗闇の中。大停電によって月の明かりしか光がなくなってしまった麻帆良に、一軒だけ電気がついた事務所があった。

犬神アンダーグラウンドサーチ。人に厳しいエコ発電によってこの事務所にはいつでも明かりがともっている。

そんな明るい玄関先では、何やら物々しい武装で身を固めたネギと、その少年をぺたぺた触りながら何やら心配そうにしている明日菜の姿があり……。

いつまでも不安そうにしている明日菜に対して、いかげんにエヴァとの待ち合わせ場所に行きたい犬神は、空手チョップを喰らわせ、明日菜の頭をまるで宇宙人のように平らにし、その眼を飛び出させた。

「つて、あすなさああああああああああん?!」

「安心しろ。みねうちだ」

「どの辺が!？」

「死んで無いだろ?」

「漫画だから死にませんが、通常の人間なら即死ですよ!!」

「あいにくここは小説だから漫画の原理は関係ないな」

「屁理屈コネないでください!!」

結局いつもの漫才に戻る二人をしり目に、マリーは苦笑いを浮かべながら明日菜の頭を横から押し、元の形に戻した。

「こ、ここはどこ? 私が高畑明日菜?」

「明日菜すっかりして……。籍入れるどころか告白すらしてへんやろ?」

記憶喪失ではなく都合のいいように記憶の改ざんをしている明日菜にツツコミを入れた。マリーはため息をついた。

「エヴァちゃんのことやからそんな無茶はしーひんとは思うけど、あんま危ないことに

本武蔵よろしく、遅れているのか？ と、いわれるとそういわけてもない。現在は決闘が始まる時刻の三十分前であり、まだまだ時間的には余裕があるほうだろう。

では、なぜ、彼女はここまで機嫌が悪いのか？ その答えは彼女の周りにあった。

「なんで屋台が出とるんじやあああああああああああああああああああ!!」

「マスター。落ち着いてください。口調が変わっています……」

煌々と照らされる自家発電による照明。もうもうと立ち込める焼きそばといった屋台料理の臭い。そして、騒がしく響き渡る客寄せの声。

「らっしやいらっしやい。焼きそばがおいしいよ」

クラレンスが普段めつたに聞けないような口調で客の呼び込みをやっている。

「つたく……なんで俺らがこんなことしなくちゃならねえんだよ」

「仕方ないですよ……。エヴァンジェリンさんたちの戦いを監視するならこういう形状を取らない限り却下だつて犬神君に言われたんですから……」

やたら可愛らしいエプロンをつけたジョニーとレイジーが焼きトウモロコシを焼いている。

「まったく!! ネギ君にもし無茶を試してみろ!! このわにやしがいぎのてつちゆい
を」

「ガンドルフィーに先生飲みすぎです!! さつきまで職務中つて言つて飲んでいなかっ

「たのにいつの間に一升瓶開けたんですか!？」

なにやら、カウンター席が作られた焼鳥屋の屋台では顔を真っ赤にしたガンドルフィーにと、瀬流彦が騒いでいる。

「私のどこがいけないっていうのよ!! やっぱりこの年になったら私は年増なの!？」

「刀子……少し落ち着け……」

その隣ではおそらく失恋したのだと思われる刀子に絡まれた若干困っている神多羅木がいて、

「ふおおおおお……にぎやかでいいのお」

「そうですね」

世界樹広場に設置された、いくつかの長椅子の一つを占拠した近右衛門と高畑は二人とも浴衣を着こんでおり、うちわを片手に将棋を打っている。

「どこの夏祭りだ!？」

「ちなみにこれで上がった収益の80パーセントは犬神君の懐に入るわ」

「楽しそうだなあ!! リリイ!？」

にやにや笑いながら、リンゴアメを差し出し『食べる?』と聞いてくる元クラスメイトにエヴァンジェリンは怒声を上げた。この女の名前は前園リリイ。レイジーたちと同じく個性的な先生がそろっている（悪く言えば癖が強すぎる）初等部の国語教師だ。

趣味は仕事をさぼって麻帆良を散歩すること。そのため彼女の授業の八割が自習である。エヴァとは同じ時期に麻帆良中等部で学生生活を送った一応の同級生だ。魔法先生に分類されているが、めったに働かないため実力は未知数。

「あら。私はあなたがからかわれる姿が大好きなのよ？ 楽しいに決まっているじゃない」

「だから私は昔からお前が大嫌いだったよ!! それよりいつたいこれはどういうことだ!?!」

「やあねえ。いい加減気づきなさいよ。大体犬神君のせいよ?」

「わかっているよ!! でも聞かずにはいられないだろ!?!」

まあ、つまりはそういうことだ。おそらく犬神は万が一の事態になった時、魔法先生と魔法生徒をエヴァとネギの戦いに介入させる気なのだろう。今回の犬神はエヴァとの契約によつて戦いの参戦を禁じられている。もし万が一エヴァが勝つても、彼はネギを助けることができないのだ。

だからこそ……祭りを装った姿で魔法先生を一点に集めた。そうすることによつて即座に戦力が動かせるように。

「ふっ。まあいい。どのような妨害をしてこようが、勝つのは私だ!!」

「……? 何を勘違いしているのかは知らないけど……まあ頑張つてね?」

の姿をしたVIⅡトウジである。そしてその後ろには見たことがない男子生徒が、三白眼になりながらVIにツツコミを入れていた。

「あの、後ろのかたは？」

「ん？ ああ、こいつは俺と犬神君のクラスメイトで……」

「魔法生徒兼少年探偵を務めさせてもらっている猫谷ねこだにコースケだよ。噂はかねがね先生に聞かせてもらっているよ、ネギ君。なかなか優秀な魔法使いだね」

そういつてネギに握手を求めてきたのは、蝶ネクタイをしめた犬神よりよっぽど少年探偵らしい少年、猫谷コースケ。《燃える天空》ウーラニア・フロゴシスを使いこなすことができる麻帆良の魔法生徒の中では最強とうたわれる天才である。

「ふん。イエダニ君ではないか？ 普段図書館にこもって修行しているお前が出てくるとはな。おおかた司書に何か言われたか？」

「僕の名前は猫谷だがね!？」

そして、犬神ゲルの永遠のライバル（自称）その二である……。つまりは全く相手にされていないかわいそうな人二号である。

「さて!?! 今ものすごい失礼なこと言われた気がするぞ!?!」

「薬はほどほどにしておけ」

「やってないぞ、そんなこと!?!」

ギャーギャーうるさく騒いでくる猫谷を完全に無視しながら、犬神はエヴァに歩み寄った。

「さて、セッティングは果たした。前金をもらおうか？」

「騙した……の間違いだろ？ これほどの魔法生徒や先生を集めて……」

「……何を勘違いしているのかは知らないが、僕がこいつらを集めたのは、あくまで後々知らせなかったことであちらとの契約を反故にされるのを恐れたからだ。今回の決闘でこいつらに手を出すように言うことは絶対にしない」

「……信用できんな」

不信任を隠そうともしないエヴァの視線に、犬神は少しため息をつきながら

「エヴァンジェリン……。確かに僕は外道で、金の亡者だ。だが……」

いつものように眼鏡を輝かせる。

「僕はプロフェッショナルだ。依頼人に嘘をつくようなまねはしない」

その言葉にある重みと真剣さを感じ取り、エヴァは少し目を丸くした後……ため息をついて警戒を解いた。

最近平和ボケをしていたか？ 私の目も曇ったものだ……。

エヴァは少しだけ反省をし、そして茶々丸に指示をだし、金が入った封筒を犬神に渡させる。

「あ、あはははは……。す、すいません。犬神さんがこんなことにしちゃって」

「いや。ボーヤが謝る必要はない。文句は後でちゃんと犬神にいつておく」

「よろしくお願いします」

……。

周りに展開する日本独特のお祭り風景のせいで、いまいち緊張感には欠けていたが

「さて始まってもうたね、たつみー。たつみーはこの戦いどう見る？」

「マリー。釘宮とかぶるからその呼び方はやめろといっただろう……。そうだな。魔力量から行ったらほぼ互角といったところだろう。エヴァンジェリンは満月により力がまし、学園結界のダウンによって電力に変換されていた魔力も戻ってきたとはいえ、所詮はいまだに封印状態。全快というわけではないだろうからな。まあ、それでも一般魔法使用と比べたらお話にならないような強大な魔力を保有しているわけだが……。対するネギ先生は十歳とは思えないほど強大な魔力を持っている。流星は英雄の息子。『バカ魔力』と呼ばれたサウザンドマスターの息子だといっておこうか。しかし、それでも十歳の子供の魔力だ。きちんと成長すればサウザンドマスターに勝るとも劣らないものとなるのだろうか、まだ発展途上の彼ではせいぜい現在のエヴァンジェリンと同等の魔力程度しかないといったほうがいいだろう」

「ほな、互角の戦いになるってことかいな？」

「いや。経験値の差は明白だ。ネギ先生もここ最近はかなり頑張ってきたようだが、エヴァンジェリンにはそれを超える『600年』という規格外な時間をかけて積んできた経験値がある。熱くなりさえしなければ、ネギ先生など軽くひねることができらう」

つまり、戦いの専門家の龍宮から見てもこの戦いは絶望的な戦いなのだろう。

「だがそれは……」

「うわ!? 犬神君!?! いつの間にかこっちきたんや!?!」

そんな辛気臭い雰囲気醸し出す龍宮とマリーの中央に、いつの間にか犬神が出現していた。

どうやら彼も解説席で試合を観戦するつもりらしい。

「エヴァンジェリンのペースさえ乱せればネギにもまだ勝機があるということだ」

「なんなんその自信? 勝算でもあるん犬神君?」

「ああ……とっておきを渡してある」

フフフフフフ……。ドス黒い笑みを浮かべてほくそえむ犬神。これには、マリーだけではなく会場で解説席を見ていたほかの魔法生徒や魔法先生たちもドン引きしたという。

「それにしてもなかなかいい体をしているな、龍宮とやら。僕の事務所で助手をしない

か?」

「え……」

「フフ。私は高いよ?」

「あれ? 私の衣食住がいつの間にかピンチ迎えとる?」

ついでにマリリーの雇用も危うくなっていたりするが、まあそれはどうでもいい話だろう。

……+……+……+……+……+……

「周りがうるさいがそろそろ始めるとしよう。まずは小手調べだ……。茶々丸」

「はいマスター」

解説席のうるさい声を完全に無視して（若干顔が引きつってはいるが）エヴァンジェリンは自分の従者に命令を下す。

茶々丸はその命令に呼応し、足に内蔵されたモーターやら何やらをフル回転させ、とんでもない速さでネギを肉薄する!!

だが……。

「私のこと忘れてもらっちゃ困るわね!!」

「!？」

今まで三白眼で祭りの様子を見ながら『これ全部ネギとおんなじ魔法使いなの?』若干のカルチャーショック(あつてる?)を受けていた明日菜がだったが、これでもちよつと前からネギと同じ訓練を積んできているのだ。茶々丸の攻撃にはしっかりと反応。カードから取り出したハリセンをもって茶々丸の攻撃を迎撃した!!

「流石です。明日菜さん……でも」

振るわれるハリセンはかなりの速度。非殺傷どころか『マジでダメージはいんのこれ?』といわんばかりの武器ではあるが、振るわれた速度が速度である。魔力で強化された明日菜の膂力で発生した剛力によつて振るわれたハリセンは、それなりの威力をもつて茶々丸に襲い掛かった。

しかし、魔力も気も使えない茶々丸はそれを補うための『超ハイパー五感』と『古今東西の格闘術格闘術・基礎く奥義編』のソフトがインプットされている猛者である。

茶々丸は完全にノーマークだった明日菜からの攻撃にも、慌てず騒がず冷静に対処する。

訓練したとはいえ所詮は素人。威力重視のため大振りかつ、横なぎになっていたハリセンを、身を低くすることで躲し、茶々丸は明日菜に向かつてさらに距離を縮める。

だが、

「フェイ……ントっ!!」

「!?」

即座にハリセンを投げ出し、カードの戻した明日菜はそこから体に重心を器用に入れかえ、明日菜に近づいていた茶々丸に痛烈な蹴りを叩き込んだ!!

「確かに私はただの素人だったけど、教えてもらったのは六重君よ。弱いわけがないでしよ!!」

「……なるほど。申し訳ありません少し見くびっていました」

身を低くしすぎていたせいで、明日菜の蹴りを物理的にかわすことが不可能になってしまった茶々丸は仕方なく明日菜の蹴りを受け止め、自分から後ろに跳ぶことで何とかその衝撃を回避した。

しかし、これによってふたたびネギとの距離は開く。前衛の役割である『魔法使いの詠唱の阻害』ができない。

「マスター。申し訳ありません。少し時間がかかりそうです」

「構わない。もともと、そんな安い形で決着をつけようなどとは思っていない」

エヴァはそういうと同時に無詠唱による魔法を発動、詠唱を開始していたネギに向かって魔法の射手を打ち込んだ!!

「魔法の射手・連弾・氷の17矢!!」

「くっ!! 明日菜さん!!」

「任せなさい!!」

しかし、ネギはいまだに詠唱を続け明日菜はそれを守るために答える。

しかし、その回答は不正解。

「なんだ……もううわりか?」

「え?」

エヴァンジェリンがそんなことを呟き、明日菜がそれに驚きの表情を見せる。そして、

「な!?!」

「覚えておけ。魔法の射手はある程度コントロールが効く。私ほど熟練したものになればお前をよけてボーヤだけ狙うことなど造作ない」

明日菜のところだけを大きく迂回し、そのすべてがネギへと直撃! あたり一帯を煙で覆い尽くした!!

「うそ!?! ネギ!!」

「ふん。つまらん」

慌てて着弾した方向へ走り出す明日菜を見て、エヴァは少しだけ鼻を鳴らす。

奴の息子ということで少し期待をかけすぎたか……。所詮は十歳のガキということ

だな。

エヴァンジェリンは内心の失望を隠そうともせず、頭を振った。とんだ茶番である。犬神が何を企んでいたのかは知らないが、その策を実行する前にネギが倒れてしまうようでは……。

エヴァンジェリンがそんなことを考えながら、ネギが倒れているであろう方向に歩き始めようとした……その時!!

「戦いの歌!!」

「なっ!!」

ネギがエヴァの真後ろに出現していたではないか!!

「まだ「入り」が不完全でしたから……ああいった爆風に紛れてしか使えないんですね。あれ」

「瞬動術か!?!」

VIが教えたのは格闘術のみではない。近接戦闘のスペシャリストを自負する彼はおそらくエヴァとの戦いに必要になるであろうすべての技術をネギに教え込んだ。

時間がなく、ネギも彼も仕事と授業があるため、修行内容は薄い感じになってしまっただが、犬神との追いかかけっこによって基礎力がつけられていたネギはその修行のすべてを吸収し消化した。

そこにはネギの天才性もかわってくるのだろうが、まあ今はそれは関係ない。

とにかく、今のネギは近接戦闘においてはそれなりに戦えるようにはなっていたのだ！

「だからこそ、茶々丸さんを抜いてどうやってエヴァさんに近づくかが僕の課題でした。だから、非常に申し訳ないことでしたが、明日菜さんを囮にして少しスキを窺わせてもらいました」

「なるほど……。魔法の詠唱も完全なダミー……。いや、わざと時間をかけて大呪文だと錯覚させた《戦いの歌》だな」

勝つために……。すべてを利用する。まるでVIのような戦闘スタイルにエヴァは思わず笑みを浮かべた。これはなかなか楽しめそうじゃないか。と……。

「じゃあ、エヴァンジェリンさん……。いきます!!」

ネギはそういうと同時に、左足を軸足に二連蹴りをエヴァに向かって放った!

「なめるな!!」

しかし、エヴァも古強者。魔法使いの間合いに入られてからの対処法などごまんと持っている。

「ふんっ!!」

「うわっ!!」

エヴァが取り出したのは一本の扇。エヴァはそれを緩やかに回転させながらネギの体を数か所強打し、その力を完全に掌握。最後にネギの体にやさしく手を添えて掌握した力を一気に上へと押し上げた！

「合気鉄扇術という。魔法がなくともこのくらいはできるようになってから近接戦闘を挑むべきだったなボーヤ」

華奢に見えるエヴァの体から放たれた、魔法としか思えないような圧倒的技量。それによつてネギの体は天高く打ち上げられ再びエヴァとの距離が開いてしまった！

「ネギ!!」

「させません」

爆煙の中で実はこつそりと反転し茶々丸の足止めをしていた明日菜だったが、ネギがあつさりと吹き飛ばされるのを見て、慌ててネギに駆け寄ろうとした。

しかし、今度は立場が逆転。ネギのもとへと向かいたい明日菜の目の前には茶々丸が立ちふさがり、明日菜の行動を阻害する。

「杖よ!!」

しかし、ネギは空中でも慌てず冷静に呪文を詠唱し杖を呼び出した。というかVIの特訓中は時計塔よりも高くぶん投げられたこともあるのだ。この程度の高さではビビらない。そして、その杖に乗って体勢を立て直し、一気に世界樹広場から離れていく。

「明日菜さん!! いったん体勢を立て直します。市街地に隠れてください!!」
「オツケー!!」

ネギの指示を聞いた明日菜はハリセンをカードに戻し全力で世界樹広場から離れる。むろん茶々丸やエヴァも二人を追撃しようとしたのだが、そこは犬神との追いかっこでかなり鍛えられた二人だ。茶々丸やエヴァの魔法をあつさりと振り切り、月明かりのみが光源の麻帆良へと消えて行ってしまった。

「ふん。いいだろう……。狩りを楽しむのもまた一興だ。いくぞ、茶々丸」
「はい、マスター」

長い長い麻帆良の夜は、始まったばかりである。

……†……†……†……†……†……†……†……†……†……

真っ暗な麻帆良の中を走り抜けながら、ネギ・スプリングフィールドと神楽坂明日菜とはとある裏路地で合流。そのまま走り続けてエヴァンジェリンの感知魔法につかまらないようにしながら、今後の予定を話し合う。

「で、ネギ……。これからどうするのよ?」

「初戦で大体の実力差はわかりました。これは犬神さんが言うように相手のペースを乱

したほうがいいですね」

「つまりこのままガチンコ勝負したらぼろ負けするってことね」

「オブラートに包んでほしかったですけど……まあ、そういうことです」

そう。原作とは違いネギはエヴァンジェリンとの実力差はきちんと理解している。

何せ日頃から師事している人間があつたタカミチと同格の怪物や、外道成分たつぷりのタカミチ越えの化け物である。

そんな教師たちに教えを受けているのに相手の実力を測れないようなら、ネギは天才の看板を下ろさなければならぬだろう。

そんなわけで相手のとの戦力分析を滞りなく済ませたネギは、弱者なりの勝ちを拾うために自分の手持ちの手札を思い出しながら、そのルートを考えていく。

詰将棋のように。複雑な迷路のように。難易度はかなり高いことには違いないが、犬神さんは必ず勝てるといったんだ。だったらそれに至る道がどこかにはあるはずだ、と……。

「僕たちが勝つために必要な段階は二つ。そして、第一段階で取れる手段は二通りです。第一段階はエヴァンジェリンさんを弱体化させること。もともと封印によつて15年間の学園生活を強いられていた彼女です。満月の夜十学園結界のダウンということが重なつて擬似的に復活を果たしていますが、それも薄氷のような危うい状態での復活。

何らかのイレギュラーによって、彼女の優位性が簡単に崩れる可能性があります」

「具体的な方法を上げるなら？」

「二つ目でベストなのは、学園結界の復活……ですが」

「無理ね。確かにそういうものがあるってことはゲルから教えてもらったけど、どうやって発動しているのかとかは秘密にされたし……」

「ええ。ですのでこれはひとまず置いておきます。二つ目で一番手っ取り早いのはエヴァさんの動揺を誘うこと……。犬神さんもこうなることは予測していたのか、僕に切り札を渡してくれました」

ネギがそういつて取り出したのは、プラチナの小さな指輪。そこには無数の文字が刻まれており、微弱な魔力を放っていた。

「……戦いに手は出さないんじゃないの、あのバカ」

「準備を手伝わないとは言っていない……。だそうです」

なんとという屁理屈。流石は外道の犬神ゲルである。

「で、これどうやって使うの？」

「さあ？ ゲルさんが言うにはこれをたたき割れば後は勝手にエヴァンジェリンさんが動揺してくれるっていましたが……」

まあ、とりあえず今は犬神さんを信じてこれにかけることにしましょう。ネギの覚悟

「お、おや？　なんや空中に出てきよったでたつみー」

「あの、だからその呼び名は……はあ、もういい。なんだろうな？　おそらくネギ先生の策だとは思うが……」

その光景は観客席からもきちんとしてらえられていた。魔法先生たちが飛ばしている無数の人工精霊からも映像はきちんと送られてきており、魔法生徒・魔法教師はもれなくその映像を目撃している。

そして始まるスクリーンの映像。最初はタイトルから。

『エヴァさんの……嬉恥ずかし初恋劇場でございます!!』

「「「「ぶふああああああああっ!」「」」」」

戦っているエヴァ、ネギを含め、その映像を見ていた魔法生徒魔法教師たちは一斉に嘔き出した。

な、なんだこの腑抜けたタイトルは!?!　と。

克蘭レスの声で挟まれる解説。最初のシーンはエヴァが崖から落ちるシーン!!

『ま、まさか!?!　犬神ゲル……貴様これをどうやって?!!』

何やら見覚え……というか、やたらと体験したことがある光景に顔をひきつらせながら、顔を真っ赤にした画面の中のエヴァンジェリンが慌てて映像を止めようと発生源を

探すか、

「フハハハハハハハ!! 無駄だ、エヴァンジェリン。僕が使ったのは壊れることよって発動する破壊型の魔法具。一度発動したら『タイムふろしき』で時間を巻き戻してもしない限り止めることはできない!!」

観客席でドス黒い笑みを浮かべエヴァンジェリンを嗤う犬神に、観客席にいた魔法生徒・魔法教師はドン引きする。しかし、その間にも映像は流れており、

『危なかつたなーガキ』

そういつて、がけから落ちていたエヴァンジェリンを助けたのは長身の赤毛の男性。サウザンドマスター。

『父さんじゃないですかあああああああああああああああああつ!!』

そんなネギの叫びが遠くから聞こえた気がしたが、今はそんなことは関係ない。

続く映像。変わるシーン。慌てて映像の発生源に飛んでいき、泣きかけながら指輪を何とかしようとするエヴァ。ポカンと口を開けたまま固まる麻帆良魔法関係者たち。その場に訪れたカオスに若干顔をひきつらせながら、マリーは改めて自分の雇用主の外道っぷりを再確認する。

『お前……誰だ。なぜ助けた』

『さあな。くうか?』

森の中での短い会話。それがどれほど少女の心を救っただろうか。麻帆良魔法関係者たちはいつの間にかその映像に見入り、感情移入していた。まあ、もつともこの思い出を持っていた本人はいま泣きそうになっているが……。

主に羞恥心で……。

『おい、貴様……私のものにならんか?』

再び変わるシーン。そこでエヴァンジェリンは顔を赤らめながら千の呪文の後ろを歩いそういつていた。その愛らしい姿に麻帆良魔法関係者から思わずため息が漏れ（なぜか主に女性）、こんな言葉が呟かれる。

「ああ、恋したんですね。エヴァンジェリンさん」

その声がどういわけか聞こえてしまったエヴァンジェリンは、「かはっ!?!」と思わず血反吐を吐いて倒れこむ。

やめてくれ……。あれは一時の気の迷いだっただ。私のキャラじゃないんだ。お願いだから許して……。これ以上悪の魔法使いとしてのプライドを傷つけないで……。と。

しかし、映像は残酷に続いていく。

『おいおい……。もう一か月になるぜ? 俺についてきてもいいこたねーぞ。どっかいけ』

『やだ。お前がうんと言うまで、たとえ逃げても、地の果てまで追ってやるぞ』

エヴァンジェリンの一途なセリフに悶える女性魔法関係者。男たちも一瞬ぼうっとしてしまつたが、すぐに正気を取り戻しあわてて彼女は悪の魔法使いだと思ひ込みなおす。

「ま、まったく。悪の魔法使いが千の呪文に惚れるなんて……つりあつていないだろ？」
そしてその意思を強固なものにするために、ボソリと男性魔法関係者の誰かが呟いた。しかし、

「何をおっしゃっているのですか!! 愛に善悪は関係ありませんわ!!」

「そのとおり。いまふざけたことを言ったのは誰だ? たたき切つてやろう」

高音・D・グッドマンと葛葉 刀子を筆頭に、女子から猛烈な反発を受けその意見は封殺された。外野がそんな事態になつていることも無視して、映像は続いていく。

シーンが変わり、舞台はどこかの砂浜。

『ついに追いつめたぞ、サウザンドマスター。この極東の島国でな』

そう発言するエヴァンジェリンは幻術によつて大人に姿を変えており、かなり色っぽい。男性の魔法関係者の好感度が上がる。興奮する男性たちを女性たちが白い目で見るのが印象的だった。

そのご、二人の芝居がかった言葉の応酬が続いた後、

おまけに、

『ふははは!!』

追い討ちとばかりにさらにニンニクを投下するサウザンドマスターに麻帆良魔法関係者たちはもうドン引きだった。

これが、自分たちが英雄とたたえた男の本当の姿か……と。

『ひ、ひいいいい!!? 私の嫌いなニンニクやネギ〜!!』

エヴァちゃんがネギ君目の敵にすんの、もしかしてネギが嫌いやからやるか? 一人的外れな予想を立てるマリィをしり目に、映像の中のサウザンドマスターは杖を使って落とし穴の中の水をかき混ぜながら高笑い。

『フフ……お前の苦手なものなどで調査済みよ』

強い匂いによって弱ったエヴァンジェリン。彼女は力の制御を失い思わず幻術を解いてしまった。

『ああ、ご主人の幻術がとけた!』

『わはははは!! 噂の吸血鬼の正体がチビのガキだと知ったらみんななんというかな?』

『やめろバカ〜!!』

しかし、その姿になってもいまだににんにくを増やし続けるサウザンドマスター。そ

の姿はまさに鬼畜外道である。

「ふむ。さすがはサウザンドマスター。感動した」

「君はそうやろな」

その映像に感銘を受けた犬神がそんなことを呟くのを耳ざとく聞きつけ、マリーは顔に縦線を入れる。

『ひ、卑怯者!! き、貴様サウザンドマスターだろう!!? 魔法使いなら魔法で勝負しろ!!』

ごもつとも。麻帆良魔法関係者が大きく頷く。しかし、ここでもサウザンドマスターの爆弾発言。

『——やなことだ。俺は、本当は5、6個しか魔法を知らねーんだよ。勉強苦手だな。魔法学校も中退だ。恐れ入ったかこら!!?』

不良然とした声音で、そんな誰にも自慢できないことを堂々と言い切るサウザンドマスターに魔法関係者たちはカクンと口を開け絶句する。まあひとりだけ、

「ぎやははははは!! いいこと言うじゃねえか!!」

「ちよ、先輩!!? 何言ってるんですか!!?」

と、笑い声をあげたものがいたが、それは誰なのかはいわなくてもわかるだろう。

『おいサウザンドマスター!! 私のかなにが嫌なんだ!?!』

『だから俺はガキには興味ないってば』

どうやら匂いにやられて思考回路がマヒしてしまったらしい。普段は絶対言わない直球での求愛の言葉をぶつけてくるエヴァンジェリンに汗をかきながら、サウザンドマスターは断りの言葉を紡ぐ。

『歳なのか!?! 歳なら百歳超えているぞ、私!!』

『じゃあオバハンだな』

『オバハンいうな——!!』

『落ちつけよご主人』

なんかもう必死すぎるエヴァンジェリンの言葉に麻帆良魔法関係者の心が一つになる。『なんてかわいいそうなの……』と。ちなみに現代のエヴァンジェリンは映像を止めるのに必死すぎとこのことには気づいていない。

『なあ、そろそろ俺を追うのはあきらめて、悪事からも足を洗ったらどうだ?』

『やだっ!!』

子供が駄々をこねるようにそう叫ぶエヴァンジェリンに「そこは、はいつていえや」とマリーは思わずツツコミを入れる。

『そーかそーか。じゃあ仕方ない。変な呪いをかけて二度と悪さのできない体にしてやるぜ』

『うっ?! なんだ、この強大な魔力は!!』

ようやく発動されるサウザンドマスターの魔法。しかし、それはまともな魔法ではなく子供にオシオキとして使うような魔法で……。

『ば、バカやめろ!! そんな力で適当な呪文使うな!!』

『確か麻帆良の爺が警備員ほしがっていたんだよね。え〜つと。マンマンテロテロ……長いなコレ?』

高まる魔力。上昇するバカすぎる雰囲気。露呈するのはサウザンドマスターのいいかげんな性格。

『あ、やめっ?! ひどいぞ、サウザンドマスター!!』

『ご主人ぴーんち』

にんにくに囲まれ魔力も練れず、レジストができないエヴァンジェリンにサウザンドマスターは容赦なく呪いをかけた。

インフェルナス・スコラスティクス
『登校地獄!!』

『いや——ん!! 好きなのがいいいい!!』

最後に出た率直な告白に、全麻帆良が涙したという……。

……†……†……†……†……†……†……†……†……

映像が終わった。誰にとつても衝撃的だった映像はその場に大きな爪痕を残した。魔法関係者の涙とか……。

ナギを知るがゆえにもう苦笑を浮かべるしかないタカミチと近右衛門とか……。

真つ白に燃え尽きてしまったエヴァンジェリンとか……。

「マスターにこんな過去があつたのですね!!」とかいいながら、その映像を永久保存する茶々丸とか……。

すぐく申し訳なさそうな顔で、気づかれない程度に物陰からエヴァンジェリンを見つめるネギと明日菜とか……。

そんな中、高笑いをしている人間が一人。

むろんこれを仕組んだ、犬神ゲルである。

「フハハハハハハ!! これで奴は怒りと羞恥心でまともな判断など下せまい!! さあいまだネギ!! そこで固まっているエターナルロリをボコボコにしてやれ!!」

鬼だ!? 鬼がいる!! 再び麻帆良魔法関係者の気持ちが一つになる。

闇の福音とかよりもこいつのほうが危険じゃね!? とも……。

「なあ、犬神君……。いつの間にあんなんとつたん。というか私ですらあんな過去しらんかったんやけど?」

「愚問だな。ネギとの決闘が決まった時からあいつの弱みを握るために四六時中クラレンスに見張らせていたのだ。そして、貴様が看病していた時にあのエターナルロリがうなされているとクラレンスから報告を受けてな。うなされていた時の夢を採取させてみたのだが、案の定ビンゴだったというだけの話だ」

「犬神君。倫理観って言葉しつとる?」

「僕にとつては『金』な言葉だな」

「さよか……」

もう言葉も出ないマリーであった。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

「マスター?」

それから約数分後。さすがにいつまでたつても動かない主が心配になったのか、茶々丸がその肩にポンと手を置いた。

「だ、大丈夫ですよ、マスター。きつと新しい、いい恋が見つかりますよ」

そんな人間臭いことをいながら不器用に主を慰める茶々丸。しかし、それは油である。火にそそぐと『爆発した!』と錯覚させる感じのあれである。

10話・深夜の激闘2

「リック・ラク ラ・ラック ライラック!! 闇の精霊29柱!!
魔法の射手!! 連弾・

闇の29矢!!」

「あわわわわわわわ……」
一方的に放たれる闇夜に溶け込む漆黒の弾丸。それらは隠れているはずのネギたちをしつかりと発見・追尾し、あっさりとネギたちの居場所を使用者に告げる。ネギは魔法銃で、明日菜はハリセンで、それらの攻撃を撃ち落とし、慌てて違う場所に隠れるために移動を開始した。

状況は完全に優勢。少なくとも二人はちよつとずつ目的の場所に近づいているし、その間エヴァに完璧に姿を補足された回数は皆無である。しかし、二人の震えは止まらない。

目の前に圧倒的な恐怖の権化がいるから……。

「わるい……はいねえ……がああああああ!!」

「マスター……それは違う鬼です……」

普段の愛らしさはどこへやら……。今や完全に悪鬼羅刹と化したエヴァンジェリン

が、ネギたちのことを血眼で探している。

「どどどどどどどどどどどど……どうすんのよネギ!? 確かに冷静さは失っているみたいだけど、完全に違う種類の強化（狂化?）フラグ立てちゃったじゃない!」

「そ、そんなこと僕に言われても!?! 大体犬神さんがあんな切り札きるなんて思っていなかったですもん!?! ふつう知っていてもきるのは躊躇いますよ、あんな手札!?!」

そんな風にもめながらも二人は足を止めることはない。この状況下で足を止めてしまえば、あの怪物につかまってしまうことを二人は本能的で察していた。

それほどの殺気、それほどの狂気がエヴァンジェリンからは放たれている。

ネギも明日菜も正直に言うところだが、家主の犬神がこの決闘を推奨している以上そんなことはできないことは明白だった。

だから二人は死ぬ気で走る。あの金色の鬼神につかまらないように。

そして、

「つきました!」

「(っ)(っ)ね!」

目の前にそびえたつのは巨大なレンガ造りの柱。車が通れるように設計されたそこは人が戦うには十分な広さを備えている。

麻帆良の大鉄橋。

学園都市の最端に位置するこの場所こそが、最後の決戦の場所である。

「行きますよ、明日菜さん。僕たちの持てる力のすべてをここで使います」

「ええ……」

並々ならぬ覚悟を秘めた声でそう言ったネギに、明日菜はいつもの明るい雰囲気を感じ、静かに頷く。

「犬神さんのために……僕たちを鍛えてくれたVIさんのために……そして」

ネギがそこまで言ったとき、

「みつけたぞおおおおおおおおお!! ネギ・スプリングフィールドオオオオ
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!!」

はるか遠くからエヴァンジェリンの絶叫が聞こえてきて、

「なにより……僕たちの命のために」

「ええ……」

二人は神妙な表情を霧散させ、ちよつとだけ泣きそうな顔でそうつぶやいたという……。

を止めた。

「なんだ？ もう追いかけてこはおしまいかな、ボーヤ？」

「あはははは……。そ、そろそろ体力も限界ですので……。それに、逃げ切っただけではあなたは完全に負けを認めることはないでしょう？」

「ふふふ……よくわかつているじゃないかボーヤ」

だがそれだけではあるまい。

600年の経験からくる圧倒的な戦略脳。それをフルに活用しエヴァンジェリンはネギたちがなぜここにきて戦う気になったのかを考えてみる。

初戦の手合わせはお互いの実力がどの程度かを計るため。さすがにネギごときに底を計られたということはないだろうが、今回の戦いでどの程度の力を使うのかぐらいは見切られてしまったはずである。つまりこれは必要な戦闘。納得はできる。

では今まで逃げていたのはなぜか？ 考えるまでもなく彼我の差に気づいたからだ。初戦の場で戦いを続けていけば、まず間違いなく負けていた。だからネギたちは逃走した。これもまた納得がいく。

では、ここで戦う姿勢を見せたのは？

逃げ回っているだけで戦力が上がるわけでもないし、格闘術の切れが上がるわけでもない。むしろ麻帆良中を長時間逃げ回った彼らの体力は相当数減っているはずだ。初

戦で戦ったときよりもむしろ優位性は減っているはず。

それでもここで事を構える気になったということとは、

「茶々丸……。気を付けろ。何か罠が張ってあるかもしれん」

「はいマスター」

「ちっ!!」

エヴァンジェリンの言葉を聞き、ネギと明日菜は舌打ちをしながら自身に強化の魔法をかけエヴァンジェリンと茶々丸に襲い掛かった!!

「やはりそうか!! だが甘かったな!! あると分かった罠など最早何の役にもたたん!!」

試験管を飛ばし、あたり一帯に探知の魔法をかけたエヴァンジェリン。茶々丸はそれを守るために鋼の体を使い明日菜とネギを迎撃する!!

しかし、

「なっ!?!」

「マスター!!」

エヴァンジェリンが試験管を放ったとき、突如として魔方陣が出現しエヴァンジェリンの体に無数の光の鎖を飛ばす。

まさか自分の足元にすでに罠があつたなどとは考えておらず、油断していたエヴァン

ジェリンはあっさりとそれにつかまり身動きを封じられてしまった!

「バカな!! 一つの間に!!」

「事前に、ですよ……。もつとも速効性の罠ではなく僕が発動するタイミングを自由にできる形式の罠ですけど!!」

ネギのその言葉と同時に茶々丸の足元にも魔方陣が浮かび上がり、彼女の動きを封じる。

「なっ!?!」

「ちなみにこの橋に設置してある罠の数は約七百あります」

「魔法による地雷原か?! 貴様……。いつの間にこれだけの魔方陣を!?!」

「時間はたっぷりあったんですよ、エヴァンジェリンさん。僕が格上のあなたに勝つために準備をする期間は」

言われてみればその通り。犬神と契約を結んだのはこの戦いのずいぶんと前。おまけに、その間ネギたちは修行にかこつけて麻帆良中を駆け回っていたのだ。小細工や罠を仕掛ける時間は確かに大量に用意されている!!

「だがボーヤ……。これだけで私に勝つたと思うのか?」

「思いませんよ。600年生きた吸血鬼にそんな甘ったれた希望を抱くような柔な修行はされていませんから。エヴァンジェリンさんのことです。おそらく結界を破る方法

ぐらいいくらでも持っているんでしよう。たとえば……茶々丸さんに科学的技術から結界を破ってもらうとか？」

ネギの予想にエヴァンジェリンと茶々丸は固まった。事実彼女たちの秘策はそれだったのだ。結界につかまった瞬間茶々丸は耳に内蔵されたアンテナをだし、結界をハッキング。それを数秒で打ち破ることができると。

「でも……それにしたって多少の時間はかかりますよね？ だったら……」

ネギはそういうと同時に右手を掲げてみせた。その手には膨大な魔力が収束されておりいつでも魔法の発動が可能な状態にスタンバイされている。

「な!？」

「雷の暴風……。さつき茶々丸さんと戦っている間に小声で詠唱させてもらってました。これを発動させるのとエヴァンジェリンさんが結界から抜け出すの……どちらが早いか言わなくてもわかりますよね？」

チエックメイト
完璧な王手。誰が考えてもこの状況からの逆転は不可能だ。

麻帆良中が、マリーが、真名が……VIでさえもネギの勝利は確定したと思っていた。

この状況から逆転できる存在などいない。

「くくくく……。さすがだな、ボーヤ」

もしそんなことができるならばそれは、

まだ10才。心優しい子供なのだ。だが、ここで撃たないとネギたちは負けエヴァンジェリン達に殺されてしまうかもしれない。だったら……。

「ためらいはしませんよ……エヴァンジェリンさん!!」

ネギは覚悟を決めた表情で手に待機させていた《雷の暴風》を解き放つ。

まるでレーザーのように伸びる雷と暴風の集合体。結界が壊れるころにはそれはエヴァンジェリンの目前へと迫っていた!! 一応ネギの手によってエヴァンジェリンを殺さないように加減されているとはいえ相手は対戦車ライフル級の威力を持つ中級呪文。食らって無事ですむはずがなかった。

このままでは直撃する!!

誰もがそう思ったその時だった、

ニウイス・テンベスターズ・オブスクランス

「闇の吹雪!!!」

エヴァンジェリンは無造作に手をふるうことで、そこから漆黒の暴風を出現させた!! 「えっ!?!」

ネギが唾然とした表情でそれを見て固まる中、エヴァンジェリンの発動した魔法は容赦なく加減された《雷の暴風》を食い散らかし、相殺。雲散霧消する!!

「確かに……私はこの戦いでは加減をするつもりだった。ガキは襲わんというプライドがあったし、発展途上のやつを事前に摘み取って悦に浸るような悪趣味な性癖も持って

「そ、そうそう。たまたま運が悪かったただけだって……。あのまま続いたらエヴァちゃん絶対に勝っていたわよ」

とりあえず、シヨックのあまり固まっているエヴァンジェリンを励ましてみた。

とうぜん敵にそんなことをされてしまい、プライドの高いエヴァンジェリンが耐えられるわけもなく、

「フフフフフ……………死のう」

「落ち着いてくださいマスター!!」

橋の欄干へと駆け寄り湖に飛び降りようとするエヴァンジェリンを茶々丸は慌てて止め、それに気づいた明日菜とネギもそれに急いで協力する!!

「笑えよ、茶々丸!! あんなに自信たつぷりに勝利宣言をした私を笑えよ!! 最終的に制限時間忘れて無様に負けてしまった私を笑えよ!! そしてその手を離せ、バカども!!

私はもう生きていける自信がないんだ!!」

「大丈夫ですよ、マスター!! 生きていたらきつといいことありますって!!」

「そ、そうですね、エヴァンジェリンさん!! 僕の血ぐらいなら死なない程度にあげますから!!」

「ほ、ほらネギもこういっているんだし!! それにエヴァちゃんさっきのかっこよかつたって!!」

「うわあああああああああああああああああああああああああああああん!!」

もう子供のように泣きじやくるエヴァンジェリンの様子に、全麻帆良が涙したという……。

こうして、麻帆良全体を騒がせた吸血鬼騒動は、最後の最後まである外道の少年探偵の手に踊らされる形で幕を下ろしたのだった。

《おまけ的な後日談》

エヴァンジェリンとネギの決闘が終わった翌日。

「エヴァちゃん!! 飴食べる?」

「エヴァンジェリン……たまには授業に出るよ」

「エヴァンジェリンさん? お体大丈夫ですか?」

「昨日の決闘で疲れただろう? お菓子買ってあげよう」

「……」

昨日の決闘についての清算を行うために麻帆良を歩いていたエヴァンジェリンに向かって、無数の好意的な声が飛ぶ。

そのすべてが、今までエヴァンジェリンを毛嫌いしていた魔法先生・魔法生徒から

犬神アンダーグラウンドサーチで、ネギが突き出した腕をエヴァがかみついている。いわゆる献血。魔力補給。

エヴァンジェリンがかけられた封印を解くために、死なない程度になら血ぐらいあげますよと了承したネギ。そして今日、この日、エヴァに血を吸わせる約束になっていたのだ。そして、

「では……ちゅう〜」

マリーと明日菜監視の下、それは行われる。

「うう……」

「ちゅう〜」

「……」

「~~~~~」

「ガタガタ!!」

「ちよ、エヴァンジェリンさん!? ネギがもの凄いや顔しながら、真っ白になっていつてるけど!?!」

「はっ!?! しまった!! あまりにおいしすぎてつい飲みすぎてしまった!!」

「ちよっとおおおおおおおおおおおおおおおおおお!?!」

その後、数分間……ネギは『献血怖い献血怖い献血怖い献血怖い』とぶるぶる震えて

「あんなことをしておいて、まだ報酬がほしいというのかこの外道が!!」
ネギの血によって、無事に封印が若干緩んだエヴァは犬神に払う報酬の相談をしていた。

「ほう?　つまり払わないと?」

「あたりまえだ!!　ひ、人の過去をあんなに大々的にばらしおつて……恥を知れ!!」

まあ、その怒りはごもつともやけど、エヴァちゃん……犬神君に恥なんて言葉は通じひんよ。

いろいろあきらめきつっているマリーは、内心でそう考えながら犬神がどう出るのかと、そちらのほうを見つめる。

すると彼は、視線に殺気を込めてひとこと、

「お前もうちのエゴ発電に協力するか?」

とだけつぶやいた。

「払わせていただきます!!」

「エヴァちゃん!!　うちの電気関係ほんまどうなつとんの!?!」

マリーがこの事務所での生活に、初めて恐怖をもった瞬間であった。

閑話・個性的な初等部教師たち

「きゃ〜!! 乱闘よお〜!!」

その日の麻帆良は騒がしかった。

女子校エリアの大通りで、武道関係部活どうしの乱闘が発生していたからだ。

「古菲部長と戦うのは俺たち柔道部だ!!」

「フザケンナ!! 俺たちボクシング部のほうがずっと前から古菲部長と戦う約束していたんだよ!!」

喧嘩の理由は見ての通り、中国武術研究会の古菲と戦うため。

別段珍しくもない。このエリアではよく起きていたこと。古菲はありとあらゆる格闘家を相手取つても平然と叩き伏せる猛者であり、そんな彼女の強さにあこがれて、武道関係部活のメンバーがこぞつて対戦を申し込むのだ。

当然彼女の体は一つしかないため、その部活の順番が巡ってくるまでにはかなりの時間がかかる。そのため、こうして順番争いを巡って部活同士の乱闘が常日頃から起こつてしまっている……のだが、

「た、大変!! 広域指導員の先生を呼ばないと」

一人の女子生徒がそういつて、駆け出しかけたときそれは現れた。

「かつ。バカガキどもが……。俺が久々にこつちに足を延ばした時に乱闘とは、思い知らせてほしいいな」

凶悪な笑みを口元に浮かべ、鳥のとさかのようにセツトされた髪を揺らしながら現れたのは、二メートルはあるであろう巨大で細身な……。しかし、鋼のような筋肉で包まれた男。

目には眼帯。片手に拳銃。着ている服は、前のあいた黒の皮ジャンとレザーパンツ。明らかに『何処のヤンキー?』といわれかねない格好をした男。そんな彼の後ろには、髪を七三分けにした、メガネをかけている真面目そうな男が立っていて、

「あ、ちよつと……。ジョニー先輩!」

慌てて男に静止をかけようとしていたが、

「この俺の射程範囲てのとくときろで罪を犯したことを……」

男はそんなこと一切気にせずに、

「後悔……。したくてもできないようにしてやる」

「ぐはっ!」

物理的ダメージを伴った凶悪な言葉を吐いた。その言葉を聞いて、七三分けの男の胃に凄まじいダメージが入り『あ、また僕が命がけでとめないといけないんだ……。』と

ちよつとだけ絶望する。

「そこまでだガキども」

「なんだこらあああああ!!」

そんな七三分けを微塵も気にすることもなく、眼帯男は乱闘に悠然と近づく。そんな彼に話しかけられ、乱闘をして気が立っていた少年(?)たちは殺気だった目を眼帯男に向けた!!

しかし、

「なんだとは、なんだこら? まったく見て分かんとは救いがたきバカどもめ」

眼帯男は凶悪な笑みを浮かべながら、何のためらいもなく、到底人間が扱いきれそうもない大口徑拳銃を少年(?)達に向ける!!

「広域指導員だ。つーわけで、死ね!!」

「死!? はあ!」

「ちよつ!? 先輩ストおおおおおおおッ!!」

「え? こ、広域指導員が『死ね』!」

七三の静止の声もむなしく、近くで乱闘を見ていた生徒たちの驚愕の顔も気にせず、眼帯男は拳銃をぶつ放しその場を阿鼻叫喚の地獄に叩き込む。

これが、麻帆良学園名物、最恐の広域指導員……『クレイジージョニー』と『苦勞人

「おうよ」

そんな状況であるのに、何故かふんぞりかえりながら懐に手を入れるジョニー。そんな彼を、レイジーはちよつと顔色を悪くしながら見つめていた。

「ほれ」

そして、ジョニーが取り出した始末書には、

『バカガキ複数……殺し損ねた。次は確実に殺す　　ジョニー&レイジー』

と、とんでもない内容が書かれた上に署名捺印が押されていて……。

学園主任は、しばらくの間、それを鋭い目で見つめた後、

「よし」

と、軽い声で自分の机にしまった。

「よし!? あれで!?!」

愕然とするレイジーをしり目に、学園主任……通称・主任はにやりと笑いながらふんぞり返っているジョニーを見つめた。

「それにしても……お前は相変わらず大馬鹿野郎だな。流石はダイナマイト」

「あん?」

主任の言葉に、ジョニーが片眉を上げるが、

「だが……そんな馬鹿は嫌いじゃないぜ」

主任のその言葉を聞き、ジョニーは満足げに笑みを浮かべ、

「へっ……。いきなり何言つてやがるオッサン。禿るぞ」

「へへへ。何となくだ気にすんな。あと俺は剃つてるだけだ、殺すぞ」

と、恥ずかしそうに笑いながらお互いのことをけなしあう。

それはまるで、大勢に歯向かい、我が道を行き、犯人を捕まえようとする刑事たちのような……。そんないい空気を醸し出して……

「え？　何この空気？　類友？」

思わずレイジーにそうつぶやかさせた。ちなみに……彼らがやったことは、大勢に歯向かう以前にただの犯罪である。もう、麻帆良にいなかったら懲役うん十年といわれかねないほどの……。

「つて、主任!!　ここは思いつきり説教するところじゃないんですか!!　なにわけのわからん物わかりのいい上司みたいな笑み浮かべてんですか!!」

「うっせえなくレイジー。大声出すなよ」

「出しますよ!!　始末書とか何か根本的に間違っていますもの!!」

ギャンギャン囁みついてくるレイジーに、立ち上がった主任は彼の肩を抱き込み話しかける。

「まあまあ、落ち着けよレイジー。ここだけの話な……」

そして、グラサンを光らせながら一言。

「おれ『なあなあ』とか『グレーゾーン』とか『玉虫色』って言葉が大好きなのよ。適当に生きようぜ」

「尊敬させてくれません主任?」

レイジーの皮肉もなんのその。主任はにやにや笑いながらレイジーの肩をポンとたたく。

「まあ、実際あいつと組んで三か月以上もった広域指導員はお前が初めてなんだ。今回は犯人グループに大した被害も出ていないみたいだし……」

「めちやくちやトラウマ植えつけていますけど、それは大した被害じゃないんですか?」

「まあ、そんなことはさておきだ……頑張っているお前にご褒美をやろう。新しいニックネームだ!!」

「ニックネーム? いりませんよそんなもの」

何やらやたらとハイテンションにそんなことを言ってくる主任に、レイジーは少し警戒の表情を浮かべた。こういう主任は、たいてい、ろくでもないことを考えている。

「何警戒してんだよ。今回はマジだつて。お前の新しいニックネームは……ゴクウだ!!」

「なんでそこでゴクウなんですか?」

「何言ってんだよ!! 超格好いぜゴクウ!! 元氣玉とか打てるかもよ? ほら、ともに叫ぼう!! 『オツス!! おらマチャアキ!!』」

「ま、まちや!!?」

結局主任のペースに流されてしまったレイジューは、大きくため息をつきながら肩をすくめる。

「もういいですよ……色々このままで。呼び方とかも……」

「おつ? そうか? 悪いな!! じゃあこれからも頼むぜ……」

そして、主任は再びレイジューと肩を組み、

「御供?」

「!?!」

なにやらニュアンスを変えてレイジューのあだ名を呟いた。

それを目ざとく察知したレイジューは

「今あだ名違いました!! ひとみごころ 人身御供のほうでした!! やっぱ僕は生贄ですか!!」

と叫びながら主任を怒鳴りつけたが、

「ははははははははは!!」

歩いているのだけにみえるのに、瞬動並みの速さで逃げていく主任に追いつくことな
どできず、レイジューの怒声は職員室にむなしくこだまするだけなのであった。

ジョニーは反論する。

「何が違うっていうんですか？」

「俺は……広域指導員だ」

「そうですね……残念なことに」

「つまり……俺が麻帆良での正義だ!!」

「あなたに關しては首肯しかねます」

「しろよてめ？　ぶつとばすぞ？」

若干そんな感じにもめつつも、ジョニーは主張をやめない。

「つまり……俺の弾丸は正義の弾丸!!　悪人にしか当たらない正義の弾丸だ!!　つまり

……当たった奴はすべて悪人だ!!」

「はああああああああああ……」

ジョニーの主張に、レイジーは大きくため息をつきながら一言、

「なわきやないでしょうがああああああああ!!」

「ごもつとも……」

まあ、ジョニーの主張もあながち間違つてはいないのだが……。確かに、ジョニーの拳銃にはジョニー我流の魔法が組み込まれており標的を、弾丸がホーミングする機能はついてる。まあ、あくまで我流なので精密さにはやや欠けるうえに、悪人限定で飛んで

いくなんて高度な機能は組み込まれてはいないが……。

「大体出てんじゃないですか被害者!! 無実の一般人に重軽傷者が20名!!」

「発覚してないだけで無実とは限らん。つーか直撃はしてなかっただろうが」

「巻き添え食らわせたならそんなこと関係ないでしょう!! 車両火災だって先輩が打った弾がタンクに引火して、ごほっ!? げほっ!!」

「どうやら興奮しすぎたらしい。むせかえってしまいうれいじーに、温かいお茶が差し出される。」

「れいじーさん。落ち着いてください。まずお茶を飲んで。ジョニーさんに挑むなら体制を整えてからでない」と

「ああ、ありがとうございます。モモさん」

「そこに立っていたのは金髪おさげの新任教師。れいじーが一目ぼれをし現在猛烈アタック中の可愛い系の女教師・モモだった。」

「ああ……お茶おいしい。おちつく」

「いちいちじじむさいわね」

「りりいさん……。お茶ぐらいスキに飲ませてあげましょうよ」

「ありがとうモモちゃん!! 僕の味方は君だけだ!! というわけで、週末あいてる?」

「うん。あいてない♡」

その言葉を聞くのと同時に、職員室に緊張が、

「えくまじでく。めんどうな。学園長に丸投げしておけ」

「了解」

緊張が……

「次こそ殺してやるぜえええええええええ!!」

「殺しちやダメですつて!!」

き、緊張が……

「私はまたVIが勝つ方にかけるから、モモチやんどう?」

「あ、あの……賭け事はよくないかと? 仕事しましょ?」

緊張が……走るわけもなかった。

こうして、麻帆良一の問題児たちが集まった初等部職員室の日常は、平和に騒がしく、過ぎていくのである。

11話・犬神の力

「前から思っていたんですけど……犬神さんってどの程度強いんですか？」

「ん？ いきなりどうした野菜？」

この物語は、ネギのちよつとした疑問から始まった。

時刻は日曜の夕刻。黄昏時。夕日に染まった麻帆良の整った街並みの中、犬神アンダーグラウンドサーチの面々……犬神、マリー、ネギ、ヒメが猫の入ったケースをそれぞれ一個ずつ持ちながら家路についていた。

いつものように大富豪の家から逃げ出した猫を捕獲し、犬神が黒い笑顔で今日の報酬のことを考えている時、マリー・ヒメと協力し、猫の捕獲に尽力したネギがそうつぶやいたのだ。

「犬神君のつよさ？ めちやくちや強いよ？ 犬神君は」

「いや、それはよくわかっていますけど……。でも僕犬神さんが戦っているところ見たことないし、やっぱり強さの実感が少ないというか……」

ネギ自身犬神がめちやくちや強いのは十二分に承知している。あれだけ滅茶苦茶なことをやっても、あのエヴァンジェリンが魔力復活まで手を出すことはないと言

し、麻帆良の優秀な魔法先生たちが手をこまねいているのだ。

つまり、それだけの実力者であつても不用意に手を出すことは憚れる相手ということなのだろう。

だが、ネギ自身その犬神の実際の強さを見たことがない。明日菜はいちど犬神とオカマ組長の戦闘を見ているが、ネギはその場にいなかった。しかも、あの時ですら犬神は本気を出していない。

本気の犬神の強さはいまのところネギは知らない。

だが犬神とスパルタンⅥの戦闘を見ている面々は……。

「ふむ……お前の疑問に答えるのは甚だ面倒だな野菜。正直答える気すら失せる」

「え？ どうしてですか？」

「だってそうだろう？」

犬神はそういつてメガネを光らせながら、諭すようにネギにいった。

「強さなんてものはいろいろある。賢さ、暴力、耐久力、魔力、気力、筋力、戦闘力、過負荷……。千差万別十人十色だ」

「犬神君……原作的にも雑誌的にも入ってたらアカンもんが入ってたような気がすんねんけど」

ジャンプとガンガンに怒られんで？

マリーのツツコミは綺麗に無視して、犬神は話を続ける。

「そんな中である一点の強さを計ろうだなんておこがましいことだとは思わんか？ くだらないことだとは思わんか？ 強さなんてものはその時の状況によって変動するものだ」

「犬神君は金がらみやと界王拳使えるさかいな」

「まあつまりはそういうことだ。ということでお前みたいの僕の恒久的実力を聞こうとすることはひどく無意味ということだ。それに……」

犬神はそこで言葉を切ると、メガネをきらりと輝かせて一言、

「僕は……お金さえ稼げればそれでいい!! 強さなんて知ったことか!!」

「力強い明言!」

くわっ?! つと、雰囲気爆発させながらそう言い切る犬神のある意味名(迷)言にマリーとネギは同時にツツコミを入れた。何気に息の合ってきた二人。犬神のネギツツコミ化計画は着実に進行しているようだ。

「でも……」

「まあ、どうしてもというのなら僕の強さを測ったなどとぬかしていたバカの言を借りて教えてやるが……」

あくまで食い下がろうとするネギに、犬神はめんどくさそうにため息をつきながらそ

力全開は見たことないし……。でも犬神君がそれなりの力を出して戦うことなんてそうあらへんし……」

「何を言っているマリィ。今日あいつの強さの片鱗を見ることができるかもしれないぞ？」

ネギの質問に答えてやりたいと思いつつ、それがどれだけ難しいか知っているマリィは《う〜ん》と腕を組んでうめき声を上げるが、エヴァはニヤツと笑いながらそれが存外簡単に解決することを教える。

「え？　なんでよ？」

「昨日麻帆良に送りつけられたんだよ……」

エヴァはそういいながら、一枚の封筒を取り出した。そこには角ばった文字で『S6』とかかれた特徴的なマークが刻み込まれており……。

この麻帆良で——連敗中とはいえ——高畑やエヴァを除くイレギュラー以外で唯一犬神とガチンコ勝負ができる男、
「スパルタンVIからの予告状が」

今宵の麻帆良は……嵐の到来が予想される。

……†……†……†……†……†……†……†……†……

「ところでエヴァちゃん。魔法先生しか持ってへんはずのVIの予告状をなんでエヴァちゃんが持つとるん？」

「……」

「エヴァちゃん？」

「マスターは学園長室からこれをパクってきたのです」

「ちよ、茶々丸!?! 言うなど言つたらうが!! はっ!?!」

「エゝヴァゝチャゝン?」

ちなみにVIの強さは?

「え? イージス艦6・5隻ぐらいやけど?」

「……だからなんで、イージス艦なんですか」

「きさまの強さなど12000コンプKで十分だ」

「銀魂!?! それもうただのコンプやんけ!?!」

……†……†……†……†……†……†……†……†……†……

『犬神君……きゃーん言わせたるさかいな!!　P S・今日図書館の魔導書適当にパクらさせてもらいます』

何とも力強い文字で書かれたその予告状を読んだあと、ネギは大きく息をすいこんで、

「P Sと本文、逆これ!!」

「いまさらやん」

「ね〜」

絶叫するネギの隣ではマリーとヒメがのんびりとお茶を飲んでいた。

場所は犬神アンダーグラウンドサーチ。久しぶりに届けられたVIからの予告状をネギが見聞していたところである。

「それにしても今回はえらい間が開いたな〜」

「ふん……おおかた野菜の教育に夢中すぎて忘れていたんだろう」

「い、いくら師匠でもそんなことはないと思うんですけど……」

鼻を鳴らしながら、興味が無いといわんばかりに冷蔵庫に向かう犬神にひきつつた笑みを浮かべてネギがフォローを入れるが、

……†……†……†……†……†……†……†……

その手には、二本の指に挟まれヒラヒラとはためく予告状。

「この僕を名指しにした挑戦状……」

そして、犬神はいつになくクールな笑みを浮かべながら、ぎゅつと予告状を握りつぶしながら、不敵な笑みを浮かべて言い切った！

「受けなければ……失礼にあたるだろう!!」

「!？」

久しぶりにかっこいい犬神の言葉。しかし、ネギはもう感動したりはしない!!

だってありえないから。ゲルがただ働きとかありえないから!! いじめっ子に人形を取られて泣いていた女の子に、なけなしのお金を渡されて「人形を取り返して?」と涙目で依頼されても「断る。貧乏人」とか言っちゃうクサレ外道なのだから!!

そんなゲルが……いくらか挑戦状といってもただで動くことなんてないのだから!!

「きよ……今日は地球最後の日だったり……へブヒ?」

顔に縦線をいっぱい入れながら覚悟を決めた雰囲気、恐れ戦くネギ。その脳天を拳骨で変形させたあと、犬神は平然とした表情で、

「依頼を受諾した。安川……野菜と助手の助手を連れていつものポイントで用意をして

おけ」

「あいあいさ〜」

「犬神さん……こんな離れたところにいて大丈夫なんですか？ 師匠との決闘はうけられたんでしょう」

ネギはVIからの予告状をポイッとその辺に捨てながら、マリーたちに背を向けるように立っていた犬神にそう問いかける。

「問題ない」

「いや……でも」

「奴の目的は僕との決闘だ。魔導書の窃盗を防ぐのは学園の魔法使いたちの仕事。が、奴らは確実に逃げられるだろう。僕らは魔法先生や生徒たちから逃げてきたVIを捕まえるだけでいい」

「逃げられるのは確定なんですわね」

「基本バカの集まりだからな」

「きよ、教師をしている方もいるんですからそんなことはないと思います……」

と、そこでネギの頭をよぎったのは初等部教師をしているというあのダイナマイトな危ない刑事^{デカ}。もとい、教師^{バカ}。

慌てて双眼鏡で図書館島のほうを見ると、そこには安全装置を外した大口径銃を片手にうろつく、眼帯をつけた危ない男が立っていて……。

「ああ……納得しました」

「ネギ君。それ十歳の子がする顔とちやうで？」

色々と達観してしまつた表情で目を細めるネギに、マリーは冷や汗をかきながらツツコミを入れた。

「でも……VIがこつちにくる確率はかなり低い。私がパツと見ただけでも魔法先生たちから逃げられる経路は738浮かぶよ？」

「うん？ ヒメちゃんがVIと犬神君との戦いみんなのはじめてやった？」

「まともに戦っているのは見たことがない」

ヒメの言葉に、そうやったかゝと頷きながら、マリーは犬神の代わりに説明を開始した。

「あのな……VIは犬神君のことを意識しすぎとるやんか？」

「はい」

それは自他ともに認めるところだったのか、ヒメとネギは迷うことなく首肯する。それを見て『六重君ホンマわかりやすいもんなく』とちよつとだけうつろな笑みを浮かべながら、マリーは説明を続けた。

「せやからVIは必ず私たちとこころに来る」

「どうしてですか？ 来たら負ける可能性があるのに……」

「そんな危ない橋を渡るの？ 理解に苦しむ」

「それら」

マリーが二人の質問に答えようとした時だった。

「俺が怪盗やからにきまつとるやる？」

瞬間、何かがとんでもない勢いで時計塔前の広場に直撃した!!

まるで大砲の直撃を受けたかのように、ひび割れ土煙を上げる石畳。その中央に立つのは、登場は本当にお久しぶりだった……

流線型に逆立った金髪に、風もないのになびくマフラー。そして、素顔を隠す紅い仮面。

明らかに悪目立ちしまくりな、悪趣味な格好をした麻帆良裏名物……怪盗スパルタン VI!!

「そこに壁あらば……あえて、挑まねばなるまい!!」

「ふん……。下らん。再び僕の糧となれ」

麻帆良体術最強の化け物と、バグに育てられた次代の英雄の資質を持つ怪盗が、今……激突する!!

……†……†……†……†……†……†……

「いや……というかさあ少年探偵」

そして、華麗に激しく登場を決めたスパルタンVIは、額に手を当てた後一言、
「こいや現場に!! 教師と三つ巴とかこう……なんかそういうロマンみたいなものがあるやろうが!!」

おっしやる通りで……と、VIの言葉にネギとマリーは顔を引きつらせる。

怪盗本人がそういうこと言うのはなんだが、セオリーを破つたのは犬神なので何も言
い返せないのだ。

「ところでわが弟子はなんでこんなところにおるんや? また単騎で俺と遣り合おうや
なんて百年早いぞ?」

「いえ……今回は師匠と犬神さんの戦いを見学しようかなつと」

「ほう……」

ネギのその言葉に、VIは少しだけ目を細めて犬神に視線を戻す。

「こら……ええ加減な戦いはできひんな犬神君。チヨイ今夜はガチでいくぞ?」

「かまわん。どちらにしろ結果は変わらんからな」

「はっはくん。ゆうてくれるやんか? セやけど今夜の俺様は一味違うんやで犬神君。
今夜勝つんはこの俺や」

瞬間、VIとゲルの姿がその場から幻のように掻き消えた!!

「え!? 師匠とゲルさんはどこに」

「どこを見ているボーヤ。むこうだ」

突然二人が消えてしまったのを見て、慌てふためくネギに突然声がかけられる。

「あれ? エヴァちゃんも見に来たん?」

突如として聞き覚えのある声が聞こえてきてさらに慌てるネギとちがい、マリーはその声の出どころを瞬時に聞き当て、空に目を向ける。

そこには予想通り黒いマントを羽織った金髪エターナルロリ吸血鬼……エヴァンジェリンが茶々丸を伴って浮遊していた。

「私だけではないぞ?」

エヴァンジェリンが指差した先には、長大な野太刀を伴った少女とライフルのスコープを覗きVIとゲルの戦いを観戦している少女の二人組が近くの建物に立っていて、

「あ、あれ!! うちのクラスの出席番号15番と18番の桜咲きさんと龍宮さん!」

「もとよりあいつらは裏の関係者兼実力者だからな。おおかたゲルとVIという好カードの戦いの解析をして自分の血肉にしたいんだろう」

「あの二人が来たつてことは古菲と楓も嗅ぎ付けとるんちゃうん?」

「古菲は何となく悟っているようだったが、あいつは一般人だからな。認識阻害の結界は越えられまいよ。楓は半分こつちに首を突っ込んでいるが、麻帆良の結界を抜くには

まだ至っていないからこっちに来るのは無理だろうな」

マリーとエヴァンジェリンの口からポンポン明かされてしまう自分のクラスの重大機密に、『あわわわわわ……』恐れ戦きながらネギはエヴァンジェリンがさした方向を見つめてみる。

「あ!!」

「いた……」

そして、ネギが驚きの声を上げると同時に同じタイミングで二人を補足したヒメがポツリとつぶやく。

彼らが見た先では、さまざまな建物の屋根に出現と消失を繰り返しながらとんでもない勢いで移動をしているゲルとVI。

「瞬動術の連続使用……。あんなに近くにいたのに入りも抜きもまったくわからないなんて……」

「まあ、あの二人は近接戦闘のエキスパートだからな。たかだか数日前に瞬動を完成させたボーヤでは捕捉は困難だろう」

私が解説をしてやる。

そういつてエヴァンジェリンはマリーたちの隣に降りてきて、小さな魔法円を作り出した。

ネギには互角の速さで追つかけてっこしているかのように見えたのかもしれないが、実際は違う。実はVIのほうが若干遅い。

その理由は彼の背中にあつて、

『荷物重つ……。調子に乗つて盗みすぎた』

もう『サンタクローズもびつくり』といわんばかりに膨れ上がった袋が、背中でピョンピョンとび跳ねるせいで、VIがいつものスピードを出せていないのだ。当然その中は麻帆良学園図書館島からパクってきた分厚い魔導書の数々。

その重さも伴っているせいか、現在VIは大幅に速度を減少。正直逃げ切るにはかなり厳しい速度にまで自身の速度を落ち込ませているのだ。

「返すか？ 土産が重そうだが？」

「!?」

その時、VIの内心を読み取りでもしたのか、VIの横に並ぶまでに追いついた犬神がそんなことを囁く。

「あほか!! 獲物はゲットかつ君から逃げきつてこそその怪盗や!! この程度ハンデのうちやで!!」

カソクソーチ!! えらく古い名前の技名を叫びながらさらなる加速をし、すぐに減速するVI。無理しまくっているのがスケスケだった。

「ふむ……。貴様に足りないもの、それは……」

その時、犬神が信じられない言葉を呟いた!!

まさかあれを言うつもりか!?! と、VIが愕然としてふりむくと、

「情熱思想理念頭脳……」

一息に言い切りながら瞬動でほんの少しずつ距離を詰める犬神。

「気品優雅さ勤勉さ……」

さらに微瞬動を繰り返し、VIとの距離をじりじりと詰める犬神。完全に遊んでいる。

「そしてなによりも……速さが足りない」

「えらいテンション低いなコルウア!?!」

まあ、そんな軽口をたたいたところでVIがゲルに追いつかれそうな事実は変わらさず、VIは泣く泣く荷物を捨てることを選択した。

もとより負けが込んでいるくせにハンデをつけようという考え自体が片腹痛いのだが、VIにそれをツツコむ人間はこの場にはいない。

だが、彼はスパルタンVI!! ただでは転ばない怪盗である!!

「シャーないわ!! 喰らえ!!」

そして、突如として立ち止まり完璧に勢いを殺したVIは自分に向かってツツコんでくる犬神に、持っていた袋をフルスイング!!

VIほどの実力者が重いと思ってしまうような重量を持った袋は、もはやそれ単体で凶悪な鈍器。ゲルの命を刈り取らんとする書籍のハンマーは、VIの筋力補正も加わりとんでもない速さで振るわれた!!

「いま必殺!!」涙の……盗難文化財アタック!!」

とんでもない轟音を伴い、振るわれた袋!!

しかし、犬神はマトリックスでもできねーんじやねーの? とおもわれるほどほげぞりそれを回避する!!

なんとひびきをカクツと後ろ向きに曲げ地面すれすれのところで倒れかけた上体を止めたのだ!!

尋常ではない筋力と、圧倒的な精密さをもつて統御された気を使わないとできない所業。それを見ていたある神鳴流剣士が感嘆の息を漏らしたとか漏らしてないとか、

「にやああああああああ!!」

そして、VIのほうも悲惨な目に合っていた。

VIのバカ力+とんでもない速さで振るわれた本たちの遠心力に本が入った袋が耐えきれなかったのだ。

つまり何が言いたいのかというと、

袋が見事に裂けてしまい、中に入っていた魔導書たちが流星のように夜空を飛行し麻

帆良中に飛び散ってしまったのだ。

VIは獲物が根こそぎ消えてしまったことに勿論涙したが、『泣きたいのはこつちじゃ!!』とその光景を見ていた近右衛門が、叫んだことを彼らは知らない（後日大規模な認識阻害結界を張って魔導書を泣きながら回収する魔法先生たちが見られたらしい）。

しかし、戦いはまだ終わっていない!!

「終わりだ」

「!？」

泣きながら『さようなら……俺の獲物たち』と黄昏ているVIに向かって、両手をポケットに入れたゲルから何かが飛来してくる!!

「つと!! デス眼鏡の技かいな!! 相変わらずやばいくらいの天才やな、犬神君!!」

VIはそう叫びながら全身に気を張り巡らせ、アツサリと犬神の見えない攻撃を受け止める!!

「師匠直伝!! 気合防御!!」

吹き荒れる衝撃波!! 粉碎される屋根瓦!! ナミダを流す近右衛門（修理費は麻帆良の年間予算から出されました）!!

「はっ!! どうや!!」

攻撃を完全に防ぎ切り、自慢げに胸をそらすVI。いつの間にか天高く跳躍をしていた

いダイナミックな感じになっていきますよ!」

錯乱しているのかネギの言葉に若干の不具合が見られるが、まあ仕方ないかとマリールとエヴァはそれを流し、ヒメは落ち着けと言わんばかりにネギの頭をポンポンと叩く。

「ドウドウ……」

「あのヒメちゃん……僕動物じゃないんだけど」

若干恥ずかしそうに頬を赤く染めながらそう反論するネギ。それでも少しは落ち着いたのか、先ほどよりだいぶテンションか下がった声で、エヴァたちに質問をぶつけた。

「それで……いったいなんなんですかあれ？ ただの衝撃波ってわけじゃないんでしょ？」

「ほう……気づいたか」

「ええ……まあ。龍宮さんたちの反応を見ていれば……」

ネギがそう言って視線を動かす。その先には信じられないといった様子でゲルを見つめる二人の少女の姿が見て取れて……。

「まあ、あいつら自身ゲルが本気で戦っているところを見るのは初めてだからな。あいつがあれを見せるのは本当に限られた相手だけだし……」

「だからあれはいったいなんなんですか?」

『へへへへ。それは俺たちが説明しますぜ、兄貴』

そんな風にひきつった顔で黄昏れるエヴァにネギは『そんなにやばいものなの?』と
言いたそうな顔で再び聞いたが、その答えは別のところからやってきた。

「え?」

「あ……」

「んあ?」

「なんだ?」

ネギ、ヒメ、マリィ、エヴァがそれぞれ今気づいたといわんばかりの表情でその声の
方を振り向くとそこにはニタニタとへんな笑みを浮かべた小動物が一匹座っていて
……。

「……」

『へへへ。兄貴ようやく帰ってきましたぜ……』

得意満面といった顔でそう言った小動物に対して、ネギはさわやかな笑みを浮かべて
一言、

「えつと……だれ?」

『ちよ!?! 兄貴!! 出番久しぶりだからってその反応はひどくないっすか!?!』

以前登場したときはマリィによってメキメキ折りたたまれてしまいうちに退場して
しまった、ネギの使い魔(?)。アルベール・カモミールがようやく再登場したのだった

「それはしらんが……もうVI逃がした方が安くつく気がしてきたな」

そのあまりに悲惨すぎる戦いの様子に、マリーとエヴァは思わず顔をひきつらせた。

『あれは赤き翼アラルブラのメンバーの一人が使っていたといわれる居合拳の強化版《豪殺・居合拳》でさあ！ 今はその英雄は死んじまって、使える人間はこの麻帆良にいる高畠・T・タカミチっておっさんだけで、これを使えたら魔法使いで言うところのAAランクは堅いとのこと……』

「そんなに?」

「まあ、あれはもとより究極技法と呼ばれる咸卦法というドーピングを使って筋力気力魔力をはね上げないと使えないものだからな。咸卦法が使えるだけでもAAは堅いという代物だ。そのランク付けもあなたがち間違っではない」

カモノの説明に補足を入れながら、エヴァはにやりと凶悪な笑みを浮かべる。

「だが、奴の異常さはそこではない」

「さようぞうで」

その時だった!! 突如彼らの後ろから声が聞こえてきたかと思うと、特徴的なひげをもつ紳士が忽然と彼らの前に姿を現したではないか!!

「「「「!?!?」」」」」

声の方向に振り向いたエヴァたちは見事に肩透かしを食らった状態になり、意地の悪

い声で『ホホホ』と笑うひげ紳士に若干三白眼になった瞳を向ける。

「クラレンスさん……からかわんとつてーや」

「いやはや申し訳ありません。魔がさすとはまさしくこのこと」

マリリーの取りあえずといった様子のツツコミに美しく頭を下げながら、説明を再開するクラレンス。

「ゲルさまは魔力が全くありませんので『本来反発してしまう気と魔力を融合しそれ自身の内と外にまとうこと』によって驚異的な身体能力を得る』咸卦法は一切使えません」

「え？ でも居合拳はそれが無いと使えないんじゃない？」

「別にそれが無いと使えないわけではないのです。圧倒的な燃費の悪さ、汎用性に低さを無視すれば身体能力を活性化させる『気』によって代用することも可能なのです。もつとも、それをしようとするれば咸卦法で使用する気の10倍の気力は必要です」

「まあ、奴はそれを無視しても問題ないくらいに気を持っているということだ。その気になれば本気で某野菜人になれるんじゃないかあいつ？」

エヴァの冗談交じりの言葉に、犬神たちの戦いを見ていたマリリーは思わず顔を引きつけさせる。

「いや……エヴァちゃん。それシャレにならんわ」

「なにを……」

その時!!

某漫画のごとく光に柱がVIに向かつて伸び、とんでもない火力で通った場所を焼く!!

「……………」

思わず無言になるエヴァとマリーの視線の先にはあの特徴的な構えをとる犬神の姿があつて……

「カメハメ波かよ!?!」

思わずそうツツコミを入れた二人は悪くないと思う。

…†…†……………†…†…

鼻先をかすめた気によつて作られた熱線に、VIは冷や汗を垂らしながらつぶやく。

「いやいやいやいやいやいやいやああああああああああ!! なにさらしてくれてんの犬神君!?! アウトやる!?! 版權的にアウトやるこれ!?! ガンガンとマガジンどころかジャンプにも喧嘩うてもうたで!?!」

「何をぬかしているのだ貴様。あれは僕のオリジナル必殺技《クワアメファアメファ》だ。妙な言いがかりはやめてもらおうか。ジャンプ? あいにく僕はジャンプSQ派だから何を言っているのかわからないな。某野菜人とかほんとに知らない。うちの居

「!?」

そこまで言われて、ネギはようやく犬神の異常性を理解した。

使えればまず間違いなく英雄と肩を並べることができるとは、通常の習得には血反吐を吐くような努力を伴うであろうそれらを、犬神はいとも簡単に使って見せた。それも彼の教え子と同じ中学生なのに……だ。

「いったい……なんで？」

「刀語……というライトノベルをご存知ですか？　ネギ殿」

克蘭レスの言葉に、ネギは首を振る。克蘭レスはその反応を見て予想通りといわんばかりに頷き、説明を開始した。

「そこのある特殊固有スキルに《見稽古》というものがあるのですがこれはありとあらゆる戦闘技術を見ただけで体得してしまうというスキルなのです。ゲルさまのあれはまさしくその劣化版といったところなのですよ。ゲルさまは一度相手の技を見ただけでそれを体得するまでに必要な努力と方法を見抜かれます。そして圧倒的な集中力によってそれらの努力を通常の1000倍という短時間で終わらせ自分の技にしてしまわれるのです」

文字通りの天才。その名にたがわぬ圧倒的な学習能力と、その学習能力に対応できるほどの化物じみた体。これが、犬神ゲルの強さの秘密。

その速さは尋常ではないが、思いつきり直線的な軌道を描きながら移動をするしかないこの縮地。本来長距離移動に使われるこれは、戦闘ではかなり不向き。

当然VIがそんなあからさまな失敗を見逃すわけがない!!

「はあっ!! 油断したな犬神君!! その技使ったんは初めて見るから、新しく覚えた技見せたくてはしゃいでもうたんか!?!」

にやつと笑うVIに、ゲルは少しだけ表情を動かし、気を足に貯め車輪状に変換しようとした。だが、そんな隙を見逃すVIではない!!

「VI!! 千烈拳!!」

無数に飛ぶ気弾! 千もの弾幕!!

一発一発が砲弾級の威力を持つVIの気弾に、犬神の体は殴打されあつけなく墜落する!!

「あれ? 今メツチャええの入りませんでしたか?」

あつけなく落ちていく犬神を見て、ちよつと拍子抜けしながら驚くVI。

だが、そんな中でも彼の体は動く!! 当たり前だ!! 今までどれだけ犬神に負けてきたと思っている!! 犬神が落ちた程度で油断はしない!!

VIは落ちていく犬神を追うようにダイブし、高笑いを上げる。

「来た。ついにこの時が来てもうたらしいで犬神君!! テンションあがってきた!!」

今日こそ俺様勝たせてもらうで!!　ワハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

落下中に二、三度居合コブシと気弾を交わしながら、VIとゲルは落ちていく。

そして、気力を足に貯め落下速度を若干犬神よりも早くしていたVIは先に地面へと着地し、左手で《適当に右パンチ》(残念なことに一応技名認定)をぶっ放す!!

「ちっ」

それを見て始終一貫して無表情だった犬神は、初めて面倒くさそうな顔になり舌打ちをした後、虚空瞬動を発動。大陸弾道弾のような威力を持った怪物気弾をあつさりとよけ、くるくる回転しながら地面へと着地する。

場所は、狭いどこかのバルコニー。その下には用水路が流れており、小さな橋がいくつか架かっている。

「ふっ……流石は俺のライバル。俺とここまで互角に戦ったんはお前だけや」

「今まで全敗しているくせに?」

「そんな過去の話は忘れました」

都合のいい記憶力を披露しつつ、VIはにやりと笑う。

「なぜならいまおれは……勝ちつつあるからです!!」

VIはそう言いながら、不意を打つように瞬動し攻撃してきたゲルをあつさりとよけ、バルコニーから飛び降り、用水路にかかった小さな橋に降り立った!!

(やっぱり……。さっきの気弾がきいとるみたいやな。動きにいつものキレがないで犬神君!!)

それは長年戦ってきたVIだからこそ気づいた違和感。犬神の瞬動の入りがほんのわずかだが雑になっているし、コブシに振り方が0, 001秒ほど遅い。

普通なら気づかないであろうその差違に、達人であるVIは気づいた。

そして、その遅れが達人同士の戦いでは致命傷であることも、彼は知っている!

「どないしたん犬神君? コーヘんのやったら逃げさせてもらうで!!」

そして、VIはバルコニーに立つ犬神を自分のそばに招きよせるために安い挑発で犬神をからかう。

より確実に、よりの確に……。犬神の攻撃をよけ、カウンターを当てるために!!

万全の状態の犬神だったら、それは不可能だったのかもしれない。だが、今の犬神ならそれは十分可能だと彼は踏んでいた。

そして、

「今回は俺の勝ちみたいやな!! ハッハッハッハッ!! どんなもんや☆」

やたらとうつとうしい笑い声をあげるVIを無視して、犬神はバルコニーから飛び降り、シックスの背後にあった橋の欄干に着地!! 鋼鉄製のそれをゆがませながら、『フーツ』と残心を行い、

「はっ」

「……………」

最後の攻撃をVIと交わす!!

普段より若干遅い犬神の裏拳をVIはやすやすとかわし、

「もろたで……………」

技後硬直に陥っている犬神に向かって、渾身の右ハイキックを叩き込んだ!!

「ウイーナアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!! 俺様っ!!」

英雄によって鍛えられた強力なVIの蹴りに、犬神はあっけなく吹っ飛び、用水路にた
たき落とされた。

そして、VIは用水路に流れる浅い川の中に倒れふし、起き上がってこることはなかつ
た……………」

……………

「す、すごい……………師匠。犬神さんに勝つなんて……………」

そのころネギたちは、ゲルたちが建物の影に隠れてしまったため、エヴァが作つてく
れた遠視魔法越しにその光景を見ていた。

その後ろには戦いの様子が気になったのか、ネギに対する魔法隠匿など二の次でやってきている龍宮や桜咲もいる。

「とうか、お前たち学園長の命令でばーやに対する接触はできるだけ遠慮しろと言われているんじゃないのか？」

「うっ……。仕方ないじゃないですか。気になったんですから」

「エヴァンジェリンこの映像録画とかしてないか？ 一般生徒に売ったらかなりの値段で売りさばけそうなんだが……」

「アカンよタツミー!! 魔法隠匿はどないしたん!？」

「銃士というのは金がかかるものなんだよマリー。弾薬代とか、弾丸代とか、新しい銃とか、甘いものとか、中学生なのに大人料金とられるとか……あとタツミーゆうな」

「最後の二つは明らかに不要やったよな、タツミー?」

あくまで呼び方を変えないマリーにため息をつきつつ、龍宮は至って平然とした様子で水筒を取り出し紅茶をみんなに配っているクラレンスを見つめた。

「それで? 宜しいのかなクラレンス殿。あなたの主がやられてしまいましたか」

「問題ありません」

「ああ……そうやな」

しかし、そんなことを聞かれてもいたって普通の様子で返事を返すクラレンスとマ

リーに、周りの人々は首をかしげた。

「なんだ？ ずいぶんと落ち着いているなマリー」

エヴァの疑問の声に、マリーは苦笑いを浮かべ、

「やって、犬神君が……」

タダで負けるわけあらへんやん。

マリーのその言葉はVIには届かず、浮かれきつた彼は何も知らないままに倒れた犬神に近づいていくのだった。

……†……†………†………†………

「ふふっ……。ついに……。ついに勝ってしまったですよ。あの犬神君に」

にやけきつた顔でそうつぶやきながら、VIは倒れ伏した犬神を見下ろす。

そして、

「やられ続けて幾星霜……。っ!! 初勝利!! 長かった!! だがようやく呪縛はとかれ、ここから新たな怪盗スパルタンVI伝説の幕が……」

そんな風にVIが調子に乗っているときだった、

「だが、盗みは失敗しているがな」

ジーが苦笑交じりに解説を開始した。

「君が来る前に犬神君から連絡があつてね。君をここにおびき寄せせるから適当に人員ここに配置しておけつて言われてね。まあ、さすがに犬神君が吹つ飛んできたときは驚いたけど」

「お前とまともにやると無制限一本勝負でなかなか決着がつかんからな。わざとやられてみたんだが案の定逃げなかつたな。スキ丸出しだ」

「くう〜っ!!」

悔しそうに口をへの字に曲げるVIを、犬神は『フンっ』と鼻で笑う。

「ま……泥棒のくせに自己顕示欲が強い怪盗の性質サガが敗因と言えば敗因だな」

「はっ」

「ここまで言われてはもはや悔しがることもできないのか、VIはいつもの不敵な表情に戻り、肩をすくめた。

「ホンで? くないすんねん犬神君。できれば逃がしてほしいんやけど?」

「御免こうむる。いちおうそいつらからも依頼をもらつていてな。おとなしくお前を引き渡す」

「そういうこと。じゃ、ついてきてほしいかな? 六重君」

犬神とレイジーの言葉に、VIは思わず顔を引きつらせる。

「それはやめてほしーわ、レイジー……。お前の相棒のおっさんバイオレンスすぎるし、刀子女史からかいすぎとるから、必ずシバかれる思うねん。せやからまあ……」

VIは最後にそう言うのと、機で強化されていなかったただの身体能力で両足を跳ね上げ、「へっ?」

後ろに立っていたレイジーをカニばさみすると、そのまま体を大きく前回転させレイジーの体をひっこ抜くように宙に跳ね上げた!!

「ぎゃあああああああ!!」

そして、そのままVIの体を支点に大きく回転したレイジーは、そのまま顔面から地面にたたきつけられ悲惨な悲鳴を上げる。

「今日はこの辺で勘弁したるわ!! 覚えとけ!!」

そして典型的な捨て台詞を残し、気が使えないはずなのにとんでもない速さで逃げ去っていくVIを見送る犬神たち。

「……あの、犬神君。彼を追ってくれたりしないかな?」

顔面から地面に思いつき叩きつけられてしまい、鼻血やら何やらで悲惨な状況になったレイジーは顔を上げ、犬神に頼んでみるが、

「御免こうむる。僕への依頼はVIの捕獲だ。捕獲の後逃げられたのはそちらの落ち度。僕の依頼はお前がVIに手錠をかけたことで完遂されている」

は、

「龍宮」

「なんだ？ 刹那」

「わたしは……『犬神さんみたいに強い人になって、お嬢様を守りたい』と、思つてこの戦いの観戦に来たのだが……」

桜咲はそこで一拍おき、

「ああいう人には……なりたくないな」

「それはとてもいいことだと思つうよ」

そんな風に若干黄昏ている彼女たちは、しばらくその場を動けなかつたという。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

後日談というか今回のオチ。

「おかしい……何度考えてもおかしい」

「どうしたの、ネギ？」

VIとの激闘が終わつた翌日。事務所の応接室で一枚の依頼書を見つめながらウンウンなるネギに、ヒメと遊びに来ていた明日菜が話しかけた。

「あー！ 明日菜さんにヒメちゃん。いや……実は昨日師匠と犬神さんが対決したんでその観戦をしてきたんですけどね？」

ネギはカクカクシカジカと明日菜に説明をした後に、麻帆良からのVI捕獲以来の書類を指差した。

「犬神さんがこの依頼を受けたときは師匠の挑戦状をうけとった後だったんですよ。でも、犬神さんはやたらと師匠の捕獲に乗り気でした。金の亡者の犬神さんがどうしてあんなに乗り気だったんだろうと思って……」

「金の亡者ってあんた……」

「ネギもだいたい口が悪くなった……」

やっぱり私たちのところで預かるべきかしら？ ネギのあんまりな言い方に、若干顔をひきつらせて再びネギの身元保護を思案する明日菜を横に、ヒメとネギは首をかしげていた。そんなとき、

「なんや……そんなことかいな？」

そう言うってマリーが巨大な箱を持って応接室に入ってきた。

「あ、マリーさん」

「そういうたら説明してへんかったな。クラレンスさんよろしゅう」

「かしこまりましたマリー様」

「うわっ!」

まるで空間からにじみ出るように現れた克蘭レスに驚く明日菜とネギをしり目に、克蘭レスはいつものように説明を開始する。

「スパルタンⅥからの挑戦状ですが、実はあれは仕事の依頼状なのですよ」

「はあっ!」

克蘭レスから聞かされたとんでもない事実、なにも知らなかった明日菜とネギは思わず固まる。

ちなみにヒメはそんなこともうどうでもいいといわんばかりに、マリーの背中に飛びつきおぶさられていた。

「Ⅵ様がゲルさまに挑戦をされ始めた当初、ゲルさまがあまりにⅥ様からの挑戦を無視しくもられたため、ついには『自分を捕まえてくれ……』と依頼料入りに挑戦状が送られてくるようになったのです。実は今回も封筒の中に報酬の入ったコインロッカーの鍵が同封されており『もはや本末転倒やん!!』と突っ込むことこそ愚の骨頂といった感じで、にとりかんともやれやれな状況なのですよ」

「あいつほんとにバカだったのね……」

「師匠……」

あんまりといえばあんまりな事実、顔に縦線入れまくりにネギたちにマリーが担い

だ箱の陰から出てきた犬神が、箱を指差しながら声をかけてくる。

「おい、喜べ野菜。今回の報酬はやけにレアな魔法宝具類だ。風の結界で覆われて姿が見えない剣まであるぞ」

「いやそれって、麻帆良から盗まれた宝具じゃないですか!？」

「どうかその剣、絶対にこの世界にあっちゃいけないものでしょう!？」

ネギと明日菜のツツコミを無視しつつ、報酬をもらった犬神はひとこと、

「労働の汗というのは……素晴らしいな。クラレンス」

「御意に」

クラレンスの右手にはいつの間にかつけられていた、やけに高級な装飾を施された指輪型の宝具が輝いており……

「「いや……おかしいやろうがああああああああああああ!？」」

マリー、明日菜、ネギのツツコミが、犬神アンダーグラウンドサーチの事務所に響き渡るのだった。

12話・修学旅行前

「ふふ〜ふふ〜♪」

「なんやネギ君？ えらいご機嫌やな？」

「あ、わかります〜？」

「そんだけ浮かれきつていたら誰だつてわかるわよ……」

ある麻帆良の昼下がり……。

VIと犬神の激闘を見届けた日の次の週。麻帆良の街並みをスキップせんばかりの勢いで歩いているネギに、一緒に昼食をとろうとついでにきていた明日菜とマリーはそう尋ねた。

彼女たちが訪れているのは女子中等部内部にあるとある喫茶店。ここはマンモス校である女子中等部の学食がパンクしてしまった時に使えるように設置されたもので、ちよつとおしゃれな気分で昼食をとりたい生徒たちがたむろする、オープン喫茶である。

今日のように雲一つない快晴だと、ここで優雅に昼食をしゃれ込む生徒たちも少なくはない。

「あ、そういえばエヴァちゃん。今思い出したんだけど」
「な、なんだ？」

そんな風にあいさつを済ませた後、コーヒを傍らに（ネギはミルクティーだったが）昼食をとっていた時だった。

ほかのメンツより早めに昼食を取り終えた明日菜がにやにや笑いながらエヴァに話しかけたのは。

「エヴァちゃん……ネギのお父さんのことが好きだったんでしょ？ どこに惚れたの？」

「ぶふうっ!!」

明日菜のとんでもない言葉に、エヴァは飲んでいたコーヒー（角砂糖大量混入物）を盛大に吐き出した後、ひきつった顔をするマリーを睨みつけ、『僕も聞きたいです!!』と言わんばかりの表情で目を輝かせるネギの襟首をつかみ締め上げた。

「だいたい……お前たちがあそこであんな魔道具を使わなければ!!」

「マスター落ち着いて!!」

「ちよ!!? ネギ!!? 大丈夫!!」

顔を真っ赤にしてそんなことを叫ぶエヴァと、青い顔で泡をブクブクと吐き始めるネギに茶々丸と明日菜があわてて止めに入った。

「はあ……。だが、奴は死んだ。十年前にな」

そして、ひとしきり騒いだ後、落ち着いたエヴァは何やら黄昏た表情になりながらため息をつく。

会いたいと待ち望み、呪いをかけられてなお心のどこかで慕っていた男が死んだと言われているのだ。彼女の気持ちをまだ十数年しか生きていないマリィや明日菜は推し量ることはできなかつた。

だが、

「まあ……。そんなへこむことないって。よーあることやん」

「そうよ。男なんて星の数ほどいるんだから」

「お前たち……。本当に中学生か？」

とりあえずは励まさなければならぬということには敏感に察知したようで、マリィと明日菜は口々にとんでもない言葉を発した。どこぞの昼ドラにでてきそうなセリフで、エヴァが若干ひいていたが。

そんな風に女子勢が雑談に興じる中、ネギだけが首をかしげてひとこと、

「え？ 父さんならまだ生きていると思えますよ？」

「「へ？」」

とんでもない爆弾を投下した。

その数分後。学園への帰り道、

「わはははははは!! そうかそうか!! 奴が生きていたか!! まあ、殺しても死なんよ
うな奴だとは思っていたよ!!」

「エヴァちゃん……その笑い方はちよつと」

まるでどこかの霸王のような笑い方をする（もしくは魔王）エヴァに『女の子なんや
から』と、マリーは自重を促す。

そんな彼女たちの後ろを歩いている明日菜と茶々丸は、ニヤニヤ笑いながら、
「うれしそうね」

「はい。あのようなマスターを見るのは久しぶりです」

エヴァのことを指差して、茶々丸のハードに映像を保存していたりする。むろんうれ
しさの境地にいるエヴァはそのことに気付いていない。

「すくなくとも僕は生きていますと信じています。だから僕は立派な魔法使いになって父
さんを探し出したんですけど……なにぶん手がかりがこの杖だけでして」

そんな風に笑うエヴァに、ネギも苦笑を浮かべながら自分の杖を示してみた。それを
見てエヴァはようやくそれがサウザンドマスターの形見だと気付き、目元の涙をぬぐ
う。それは笑いによって出たものか、うれし泣きの物なのかはネギにはわからなかつた
が、少なくともマイナスなものではないので特に何も言うことはなかつた。

「まあ、だとするならば今回の修学旅行はまさしく渡りに船だろう。ボーヤ」

「え？　なんでです？」

「うちのクラスは修学旅行先は十中八九京都だろう？」

委員長がお前に気を遣うだろうから……。エヴァのその言葉を無視して、ネギはキラッと目を輝かせた!!

「はいっ!!　そうなんです!!　正確な行き先は次の時間のクラス会議で決めますけど、目的地はハワイか京都だけですから半分の確率で京都!!　いいですよ、京都!!　日本最大の古美術・歴史建造物の宝庫!!　古都京都!!　一度でいいから行って見たかったですよ!!」

目を輝かせながらどこから取り出したのかも不明な大量のパンフレットを空中に広げ、京都に対する熱い思いを語りだすネギ。

マリーや明日菜はその光景に若干ひくが、エヴァだけは違ったようで、

「バカか貴様は!!　確かに京都は日本の和の精神の本家であり建築物の美麗さみやびやかさは他国の歴史的建築物にも引けを取らんが、それだけではない!!　まず挙げられるのはそこ特有のみやびやかさを重視する文化だ!!　舞妓や伝統芸能も根強く残っており、そういったやつらには気品がある。そのほかにも京都独特の食文化や、宝石のような菓子たち!!　それを語れぬようで京都好きを名乗ろうなど片腹痛いわ!!」

「むっ!! え、エヴァさんやりますね!!」

一息にそう語り『ドヤア』とばかりに胸を張ってくるエヴァに何やら戦慄するネギ。ツツコミをいれようかどうしようか迷ってハリセンを待機させているマリーが後ろにいるのが印象的だ。

「ふっ!! だてに十年間麻帆良に閉じ込められていないわ!! 京都は、私の『いつか行きたい場所ランキング!!』の、堂々の第一位だぞ!!」

「ゆーててさびしくならへんの? エヴァちゃん」

「ちよつと……」

マリーの半眼のツツコミに、エヴァは若干顔を赤く染めて目をそらした後、逆切れ気味にネギを怒鳴った。

「い、今はそんな話はしていないだろうボーヤ!! 京都にはサウザンドマスターとは縁が深いある男が住んでいるからそいつを尋ねたらいいだろう!! しかもそいつが管理している建物の中にはあいつの隠れ家があるからな!!」

「え!? 父さんの知り合いに、隠れ家!? そんなものまであるんですか!」

「京都は日本有数の霊地やからなく。そのの居を構える魔法使いも多いらしいぞ?」

まあ、あそこは関西……陰陽師の管轄やから、西洋魔法使いはめつたに入れへんねんけど……。

だよ？ 西洋魔法使いの父さんの栄光が一体どこまで通じるものなのか……」

「ネギ君……最近シビアになったな」

そんな風に落ち込むネギにひきつった顔でツツコミを入れながら、マリーは犬神アンダーグラウンドサーチの玄関のドアを開ける。

「おかえりなさいませ。マリー様、ネギ様」

「おかえり……マリー。ネギ」

「ただいまクラレンスさん、ヒメちゃん!!」

「あはははは……ただいま」

「ネギなにかあったの？」

「うん……。口は災いのもとっていうのを実感しているところ」
「？」

そんな風にへこむネギを不思議そうに見るヒメ。そんな彼女たちをほほえましそうに見つめながらマリーはクラレンスに重要案件を尋ねてみる。

「犬神君の修学旅行ってどこなん？ いや、まず間違いなくネギ君と同じ京都行くんやろうけど」

近右衛門の親書配達の依頼もそれを見越して出された可能性が高い。なにせ犬神はネギが一人前になるまで身の安全を保障する義務がある。ネギが京都に行くなら必ず

「え？」

相変わらずの無表情のまま、ゲルはとんでもない事実を暴露した。瞬間的に氷結し動きを止めるマリーとネギ。

そして、数秒後、先に復活したのはマリーだった。

「ちよ!! ハワイって……どういふことなん犬神君!!」

「安川……僕はな……ワイハーでワイハーまんじゅうを食べてみたいのだ」

「ないで!! ハワイ饅頭なんてないで、犬神君!!」

「では、フラダンスを習いに行きたいのだ？」

「『では』ゆーた!! しかも語尾が疑問形!!」

「ふっ……正直に言おう。僕はキラウエアを爆発させに行きたいのだ!!」

「犬神君やったらできそうで怖いわ!!」

「リア充……爆発しろ!!」

「違うもんが爆発しとるやろ!!」

「ちよ……犬神さん京都についてきてくれないんですか!？」

悪ふざけたつぷりに、ボケを連続して放つ犬神に、マリーは勢いよくツツコミを入れる。そんな二人を見てようやく復活したネギは、少し顔を悪くしながら犬神に食って掛かった。

「そ、そんな!! 困ります。僕今回の修学旅行で関西に親書を届けないといけなくなつて……犬神さんの護衛がほしいんですよ!!」

ネギの必死な懇願に、犬神は特に表情を動かすことなくコーヒーが入ったカップを傾け、中に入っていたコーヒートを飲み干す。そして、

「さて……次の依頼の話だが」

「待て待て待て待てええええええええええ!! いや、事情くらい説明してーや、犬神君!! 犬神君はネギ君が一人前になるまで面倒を見る必要があるねんで!!」

「では一つ聞こう安川……現状この麻帆良で今のネギに勝てる魔法生徒は何人いる?」
「え?」

マリーはそう問われて、思わず考え込む。

現在のネギの戦力は……瞬動術をはじめ、戦いの歌による身体強化によつてのクラスがB B。魔法の射手の威力がA。中級呪文保有数33。大呪文保有数3。そのすべてがVIに、戦闘に必要と言われネギが取りあえず習得したすべてだ。

実際戦闘で使えるかどうかと聞かれれば否。だが、その実力はすでに一般魔法生徒を大きく上回っているといつても過言ではないはずだ。

「犬神君……六重君……猫谷君……ぎりぎり高音先輩かいな?」

「僕の評価も大体そんな感じだ。連合の評価に換算すると魔法生徒としては破格のB B

Bといったところだろう。もう野菜の実力は一人前と言っても差し支えない」

「せ、せやけど……ネギ君は英雄の息子なんやから、それなりに危険な敵と戦うときも来るんちやうん？ それに、お父さん探すんやったらせめて戦時中の《千の呪文》くらいまで育てるんが筋ちやうの？」

「それこそ『知ったことか』だな」

ゲルは所長席に座りながら、某補完計画の首謀者のような腕の組み方をしてマリーとネギを見つめる。

「碓ゲ○ドウかいな!？」

「僕への依頼はあくまで野菜を一人前にすること。一人前の実力が付いたのなら、あとはどうなろうと知ったことではない」

犬神の底冷えするような冷たい言葉に、ネギは思わず顔を引きつらせる。まさかこんなところで切り離されるとは……予想外も甚だしい。

「え……ということとは、僕ここから出て行かないといけないんですか？」

「一人前になったらな。幸い神楽坂が面倒を見るといつてきているから、衣食住は困らんだろう？」

「ちよ、犬神君!! いくらなんでもそれは冷たすぎるやんか!!」

その言葉には、さすがのマリーも表情を変え、犬神を睨みつけた。

いくら鬼畜外道の犬神であつても、さすがに依頼を途中で放棄するようなまねをするとは思わなかつた。

そう言わんばかりのマリーの表情に、犬神は少しだけため息をつきながら、組んでいた腕を解いた。

「何も今すぐには言わん。それに……そのことはまだ決定していない。それを決めるための修学旅行だ」

「ふえ？」

「どういうことですか？」

首をかしげるマリーとネギに、

「わたくしが説明しましょう!!」

「?!」

今まで黙つてコーヒーをついでいたクラレンスが、瞬動でも使つたかのようにネギたちの前に転移してきた。

「つて、こわっ?!」

「クラレンスさん!! 移動のしかたが心臓に悪いです!!」

抱き合つてガタガタと震えるマリーとネギの言葉はオールスルーし、クラレンスは懐から巨大なホワイトボードを取出し手早く図を描いていく。

「いや……明らかにおかしい描写があったやん!？」

「クラレンスの懐は四次元ポケット……私入ったことある」

「マジで、ヒメちゃん!？」

ネコ型ロボットもびっくりな事実が明らかになったところで、図を書き終わったクラレンスは説明を開始した。

「今回の修学旅行は、ネギ様が一人前になられたか確かめるためのテストの役割を兼ねております。試験官は魔法先生二名を用意しております。無論ネギ様が知らない魔法先生ですので、協力を求めることはできません。本人たちにも決して正体を明かさないように近右衛門様から嚴重注意が行われています」

「!!」

突然言われたとんでもない事実にも、ネギは目を見開く。

「マリーもその話を聞いてようやく事態が呑み込めたのか、『いつから計画しとったんよ?』という雰囲気を含んだ視線をゲルに飛ばした。

「合格条件は、ネギ様が『クラスのメンバーに魔法ばれしないこと』『関西からの妨害をはねのけること』『無事に親書を送り届けること』でございませう。なお、試験官に含まれていない関係者の方になら救援を求めることは可能です」

「つまり……私、明日菜、タツミー、桜咲さんやったら救援を求めてもオツケーゆーこと

「？」

「やっとうぐ」

その言葉を聞いて、ネギは思わず安堵の息をついた。さすがに一人でやれと言われたらネギは完全に白旗を上げるしかなかっただろう。

「でも、試験が親書渡しって結構厳しくない？ 仮にも仲の悪い組織同士の仲取り持つんやし……」

「勘違いするなよ、安川。この親書渡しは、本来は『初めてのお使い』程度の難易度しかもたん」

「へっ!？」

犬神から発せられた信じられない事実には、マリーとネギの目が点になった。そんなマリーを見かねたのか、クラレンスがさらに補足を入れてくれる。

「現在の関西呪術教会の長は近右衛門殿の娘様の婿……つまりは義理の息子殿である近衛詠春殿でございます。婿養子である彼は元魔法世界の英雄……赤き翼に所属しておりネギ様の父上であらせられる《千の呪文》——ナギ・スプリングフィールド殿と旧知の仲にございます。よほどのことがない限り、ネギ様は手厚く歓迎されることでしょう。事前に連絡もいっていますし」

「そうなんですか!？」

「何より関西呪術教会は現在詠春殿を中心にまとまっており、反抗勢力などもはやスズメの涙。ゲリラやテロといったまねができるチームは皆無と行っていいでしょう。つまり、関西呪術教会の反抗勢力の妨害があつたとしても、せいぜい悪質な悪戯程度が関の山だと思われませう」

克蘭レスの冷静な分析に、ネギは思わずため息をつきながら、膝をついた。
さつきまでの気苦労はいったいなんだつたんですか？

ネギの脳裏に、今までへこみまくっていた自分が浮かび上がり、ちよつとだけうつろな笑みを浮かべる。

「まあ、一人前と認められるにはやや軽めな試験だが、麻帆良の連中もお前がエターナルロリと戦っているところを見ているからな。実力面からみれば申し分ないことは周知の事実だ。だからこそこのタイミングでの試験の実施が決定された」

「ゲル様がわざわざ遠くへと修学旅行に行かれるのは、いざというときに安易にゲル様を頼らないようにするためにございます」

「そうやったんか……」

克蘭レスの説明が終了し、マリーとネギは納得した風に頷く。そして、
だつたら初めからそう言つてよ……。とばかりに、恨めしげな視線を犬神に向けた。

「まあ、ワイハーに行きたかつたというのは本当だがな」

「……火山の話は冗談やんな」

「さて……」

「話そらさんとして!？」

そんないつも通りに犬神とマリーの掛け合いに、ネギは少し笑みを浮かべた。そんなネギをしり目に、所長席のデスクの引き出しの中から何かを取り出した犬神は、それをネギに向かって投げつける。

「ほれ、野菜。餞別だ」

「はい?」

キラキラと光り何かが放物線を描いて飛び、ネギが払げた手のひらに収まる。

その物体を掴み取ったネギは、自分の手に収まった物体——銀製のペンダントで、三つの五芒星が書かれている——を見つめて首をかしげた。

「なんですか? これ?」

「お守りみたいなものだ。持つておけ」

犬神がそう言うと同時に、マリーが恐れおのいた様子でそのお守りを見つめた。

「い、犬神君がタダで物を……しかも、神を信じてへんくせにお守りやつて!」

「安川……僕が神を信じていないといついった」

「いや、言つてへんけど普段の言動からしてそうやんか? 神をも恐れぬ所業しとるや

ん？」

「安川……………ここで僕の座右の銘を教えてやろう。『神の沙汰も金次第』」

「神すら金で動かす気かいな自分!？」

そんな風いつもの漫才モードに戻った二人をしり目に、ネギはゲルから渡されたお守りを握り締め、目を閉じる。

右も左もわからなかった自分に、自分を利用してしようとしている大きな力があることや、それに対抗できるように力をつけること、社会の厳しさを教えてくれた犬神アンダーグラウンドでの生活を思い出しながら。

「……………」

ああ、思い出せば……………

「……………」

……………ろくなことがなかったな。

反面教師であうわ、三十代モラトリアムを捕獲しなければいけないわ、見たくもない浮気現場の調査に向かわされるわ、たきつけられて怒り狂った最強の吸血鬼と戦わされるわ……………。

でも、まあ……………。

「楽しい生活だったんですけどね」

「ネギ?」

そんなネギの様子を不審に思ったのか、心配そうな声でヒメが話しかけてきてくれた。

「どうしたの?」

「……べつに」

そんなヒメの頭にポンと手を置き、ネギはにつこりとほほ笑んだ後、

「犬神さん!!」

大きな声で、マリリーのハリセンを食らっている犬神に話しかけた。

「……なんだ? 野菜?」

マリリーの一撃によって吹き飛んだ眼鏡を拾いながら、犬神はそう返す。その目には鋭い光が宿っており、ネギの一挙手一投足をじつと見つめていた。

「今までありがとうございました!! 試験……絶対合格して見せます!!」

ネギはそう言って、元気良く頭を下げた。

ほぼ直角。最大級の礼。

それを送ってくるネギを、犬神はしばらく無感動な目で見た後、

「ああ……がんばってこい」

いつものようにそっけなく、そう言葉を返すのだった。

彼としては、いくら近衛詠春の守りがあるといつても、10歳の弟子を一人敵地に放り込むのは忍びないと思つていたりするのだが、

「何をくだらないことを……。それにやつは一人じゃない。安川も神楽坂もいるし、何よりあの桜咲刹那もいる……。いざとなれば封印状態とはいえエターナルロリも参戦できるのだ。これ以上の盤石な布陣はないだろうが」

ネギの家主であるメガネをかけた鋭い目をした少年……。犬神はいたつて平然とした様子で、そう吐き捨て視線を手に持つていたハワイのパンフレットから一切外すことはなかった。

「なにより……」

「なにより?」

「ぶつちやけ、そろそろあいつの生活費が学園長からもらえる報酬に届きそうだからな。いい加減ほかのところに移ってもらわないと困ると思つたのだ……」

「きみゆーやつは……」

そんな犬神のあんまりな態度に、ドン引きする六重。そして彼の隣に座っていた毛先が遊んだ髪を持つ、蝶ネクタイをつけた少年探偵然とした恰好をする少年も、思わず顔を引きつらせる。

「君はホントに相変わらずだね……」

「何か言ったかイエダニ君？」

「僕の名前は猫谷だがね!! といか、君の口癖師匠にまで移ってしまったじゃないか!? どうしてくれる!!」

犬神の呼びかけにクワツと怒声を上げながら立ち上がったのは、麻帆良の魔法生徒一の実力を持つといわれる猫谷コースケ。原作者が猫田一にしようと思っただけ猫田一金五郎がもういたのでやめてしまったいわくつきのキャラクターである。

「なんか勝手にいわくつきにされた気がするが……」

「何を言っているんだネコダニ君」

「ダニじゃなくて谷!!」

「些細な違いだ」

「その些細の違いが、僕が人間かどうかの分水嶺なのだが!？」

犬神との会話の間は顔に縦線入れまくりの彼だが、実は本当に実力があり、炎属性魔法最強の《燃える天空》の完全制御をこの年ではたしていたり、図書館島の地下に住むある変態を師事して重力魔術を覚えていたりするのだが……。

「くそっ!! ハワイで吠え面かかせてやるからな!! じつちゃんの……猫田一家始まって以来の天才と呼ばれながら謎の失踪をとげたじつちゃんの・息子なのにパツとしなくてコンプレックスの塊で、でも乗り越えようとしてじつちゃんを探しに行ったきり音信

「ところでそのお守りのことだが、それは僕がある依頼主から無償で巻き上げた高価なお守りだ。命の危機に陥った時にこれを使え」

「あ、ありがとうございます……」

「ふむ。あと、修学旅行から帰ったら7万6500円払えよ」

「やっぱりお金とるんですか!？」

「当たり前だよ。この僕が無償で誰かに品物を送るわけがないだろう!!」

「そんな力強く言われましても!？」

いつもの犬神アンダーグラウンドサーチでの光景。しかし、犬神はいつもと違い片手にキャリアケースと、アロハシャツを着ていた……。

この格好を見たら十人中十人が「あ、この人ハワイ行くんだな……」と、わかる恰好をした犬神は出かける前にネギに渡したお守りの説明をしている。

その説明を聞いたネギは、昨日渡されたお守りを見て首をかしげる。

そのお守りにはきつちりと魔力が通っており、それなりに強力な魔法の品だということとはわかった。だが、犬神が渡してくれたム力つく半笑い顔がついた太陽の下に三つの五芒星がついているお守りなど、ネギは聞いたことも見たこともなかった。

「あと野菜……これはちよつとした忠告だが……」

「はい？」

犬神はそういうと、お守りをひっくり返したり回してみたり、光にかざしてみたり、拳の果てには火であぶってみたりして正体を割り出そうとしているネギに向かって、鋭い眼光を飛ばした。

「もし命の危険でもないのにそのお守りを使ったら……お前は世にも恐ろしい目に合うことになる……」

「よ、世にも恐ろしい目……」

こ、怖いものなしの犬神さんがそんなこと言うなんて……。

ネギはそう思いながら恐れおののく。

「い、いったいどんな目に合うんですか？」

そして、冷や汗交じりにそう尋ねたネギに向かって犬神は眼鏡を光らせながら一言……。

「まったく……野菜い……そんな恐ろしいこと僕の口から言わせるな」

そう答えた犬神の目は、完全に人殺しの目だったという……。

……†……†……†……†……†……†……

「しゅ、修学旅行まで絶対にあれに触れないようにしないと……。もし間違えて発動してしまつたら……。僕は、っ僕はあああああああああ!!」

「なあ、マリィ」

「なんやエヴァちゃん……」

そんな風にガタガタ震えるネギを見たエヴァは三白眼で、壁に刺さったくぎに掛けたペンダント型のお守りを見つめた。

「あれ……。もうお守りっていうか、呪いの品じゃないか?」

「エヴァちゃん……。私も思ってたんやけど、それはゆーたらアカン……」

何とも言えない空気のもと、二人はとりあえず修学旅行の準備のために明日菜や木乃香も誘つてシヨツピングへ行く相談をするのだつた。

だが、

「遅いぞボーヤー！」

ネギよりも早くにやってきていた強者が一人……。

「え、えつと……おはようございますエヴァさん」

「おはようボーヤー！ 今日はいいい修学旅行日和だな！ まあ、修学旅行にやってきそいな停滞前線やら雨雲は私が魔法で蹴散らしたんだが!!」

何かとんでもないことをさらつと吐いて『フハハハハハハ！』と笑うのは、みなさんご存知の吸血鬼真祖エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル。京都へ行くことを誰よりも楽しみにしていた、齢600の最強の魔法使いの一人……。

「やはり初めに行くところは清水寺か！ わかっている……わかっているな今回の修学旅行委員は!! 京都語るに当たってまずは清水寺といっても過言ではないからなあ!!」
目をキラキラさせながらタガが外れたかのように笑いまくるエヴァンジェリンに、いろいろと楽しみにして人へのことは言えないはずのネギですら若干引いてしまった。

「な、なんかテンション高いですね……エヴァさん」

「久しぶりのご旅行ですから……。おまけにお友達としてマリー様たちも一緒ですし」

「ああ……それで」

600歳の吸血鬼もかわいいところがあるんですね。と、何やらほのぼのとした空

気でいつものように着かず離れずついていた茶々丸と、ネギがエヴァを見つめていることなどつゆ知らず、エヴァはひとしきり修学旅行のしおりを絶賛した後、

「で？ ボーヤはいつたい何を持っているんだ？ やたらと濃い魔力の反応が……その物騒なお守り持ってきたのか」

「ああ……はい。まあ一応は」

若干胡乱気な瞳で、ネギを見つめ、そのカバンにぶら下がっているお守りを見て顔を引きつらせる。

使うタイミングを間違えれば犬神すら恐怖する世にも恐ろしい出来事が起こるお守り……。そんなもの修学旅行に持ってこられていい顔をする人間などいないだろう。

エヴァは信じられないといった様子で首を振った後、お守りをネギのカバンからむしり取った。

「あ、ちよ!?! 何するんですか!?!」

「うるさい。せっかくの修学旅行にそんな物騒ものを持ってくるな」

「いくら何でもひどすぎ……」

ネギはそこまで言いかけて思い出す。

犬神がやってきた数々の所業を……。

「……とは思いませんが」

「うわ、ネギ君早いね!? エヴァちゃんは……楽しみで眠れなかったの?」

「だ、黙れ!! 瀬流彦そんなじゃないわ!!」

よしよしと言わんばかりに頭を撫でてくる魔法先生・瀬流彦先生に、顔を真っ赤にしながら彼のすねをゲシゲシと蹴りつけるエヴァを見ながら、ネギは集まつてきた生徒たちの点呼を取っていた。

そして、

「あ、明日菜さん!! それにマリーさんも!!」

「おはようネギ! マリーに聞いたんだけどあんたまた厄介ごと頼まれたんだって? ピンチになったら呼びなさいよ?」

「あ、はい! でも、一番心配なのは敵のほうではなく味方の気遣いなんですけどね……」

「?」

「犬神君がお守り渡してきてん……」

「ああ……。頑張りなさい。ネギ」

「はい……。ありがとうございます。明日菜さん」

同情するようなまなざしを向けてくる明日菜やマリーの視線で、ちよつと泣きそうに

なったのはネギだけの秘密だったりする。

とにかく、これでネギのクラスは全員の人間がそろったことになる。

「は〜い。それではみなさん乗ってください〜い。席はしおりに載っている通りでお願いしま〜す。車両を間違えないように!!」

「ああ……ネギ先生今日も凜々しいですわ!!」

「委員長はホント犯罪者臭いよね〜」

「あらあら、あやかったら〜。在学中はつかまらないでね〜?」

「那波は意外と黒いことを言うな……」

「はあ……ネギ先生で大丈夫だろうか?」

「肉まんひとつもらうでござるよ〜」

「まいどありアル〜」

「これからも御ひいきにネ」

「あ、お姉ちゃんそっちは違うクラスの車両です!!」

「ほら、今日一緒に回りませんかぐらい言っつきなさいよ?」

「む、むりだよ。今日は自由行動でもないし……」

「まったく。では明日が勝負ということになりますね……」

騒々しい会話を繰り返しながら続々と新幹線に乗っていく生徒たちを一人一人確認

しながら、ネギは名簿にチェックを入れていく。
そして、

「よし……。相坂さん以外は全員集合つと。しずなせんせーい！ 3—Aそろいました
」

「はーい。わかりましたネギ先生」

こうして……。修学旅行が始まる!!

……+……+……+……+……+……+……

「なんやなんやこの騒ぎは？」

隣の車両から聞こえてくる賑やかな声たちに、新幹線の隣の車両で眠っていた帽子をかぶった金髪の男が目覚めます。

無精ひげに鋭い瞳。どことなくただならぬ雰囲気垂れ流す男ではあったが、その服装はなぜかボロボロでかなり情けない印象を受けた。

そんな男に、車内販売をしていた女性が申し訳なさそうに頭を下げ、苦笑を浮かべる。「も、申し訳ありませんお客様……。現在隣の車両は麻帆良学園都市御一行様の貸切となっております……」

「ネギ君大変やったな」

「あう。なんかいきなりついてなかったです」

「何へこんでんよネギ！ 修学旅行はこれからなんだからね」

「ん？ ネギ君なんかあったん？」

「な、なんでもないわよ木乃香!!」

「まったくボーヤは！ 私の初めての修学旅行なのだぞ！ そんなしみつたれた顔を私に見せるな!!」

「え、エヴァンジェリンさん……それはさすがにちよつと……」

車内販売の台車にぶつかられ、ますます今回の修学旅行に不安を感じるネギが泣きついたのは、五班と六班のメンバーがたむろしている席だった。

そこにいたのは、いつもの面々。

苦笑いを浮かべて頭を撫でてくれるマリー。ネギを叱咤し励ましてくれる明日菜。ほけほけした笑みでネギをいやしてくれる木乃香。へこむネギを鬱陶しそうに見つめて相変わらず辛辣な言葉を吐くエヴァンジェリンと、その後ろに影の様に待機している茶々丸（一礼してくれた）。そして、木乃香の隣に無理矢理座らせられ若干居心地が悪そうにしている刹那と、その刹那を強制的に座らせたのだと思われる一言も喋ろうとしな

いザジだった。

「あれ？ ほかの5班の皆さんは？」

そこでようやく三人ほど生徒が足りないことになったネギは、きよろきよろとあたりを見回し残り三人を探す。

修学旅行しょっぱなから行方不明とか真剣に笑えない。

「つて、あんたはどこに目がついてんのよ？ 本屋ちゃんたちなら……あつちでカードゲームしているわ」

「カードゲーム？」

ポーカーか何かでしょうか？

近代の遊びに若干疎いネギがそう首をかしげてそちらに向かうと、

「あ、ネギ先生!! やっほ〜」

「あ、先生もやる？」

「最近はやりのカードゲームです」

「魔法使つて戦うんだよ？」

「へ〜。魔法を……」

そこには色々な班のメンバーが入り乱れて可愛らしいキャラが描かれたカラフルなカードを使って戦いを繰り広げていた。

どうやら明石が出したきらきら光るカードがかなり強力なようで、相手の早乙女はだらだら冷や汗を流している……。

「楽しそうですね。若干冷や汗をかいている人もいますけど……」

「あはははは……お菓子かけてバトっているからね……下手をしたら今日の分のお菓子が全部パーに……」

「ほ、程々に楽しんでくださいね」

どうやら先ほどの戦いで大量のお菓子を取られたらしい。早乙女の目が若干涙目だったことに気づいたネギは、苦笑交じりに素晴らしいながらほかの場所も見回りするために次の車両へと移る。

「まあ……賑やかで楽しいし、確かにそんなにヘコんでも進まないか」

楽しんで修学旅行の時間を過ごす自分の生徒たちに励まされ、ネギは顔の笑みを取り戻しながらぐつと手を握りしめる。

「よくし!! 僕もめいいっぱい修学旅行を楽しむぞ!!」

『おいおい兄貴! 楽しむのはいいけど、あんま油断しねー方がいいぜ』

「え? なんでさ?」

どこぞのエロゲの主人公みたいな聞き方をしてくるネギに、カモは煙草を片手にニヒルに笑う。(完全にオコジョのためそんなに恰好はついていなかったが……)

『ジジイもゲルの旦那も言っていただろう？ もしかしたら道中に妨害が入るかもしれないって！ もしかしたらもう西のスパイが入り込んでいるかもしれないねーぜ!!』

「え？ スパイ!？」

ネギがそう驚いた時、

「うわわわ!! トイレトイレ!!」

一人の男が素晴らしいながら、麻帆良の車両に飛び込んできたのは。

「あ、ちよ!! 今日はこの車両は貸し切りで」

「すまん坊主!! 漏れそうなんや!! あっちの車両のほうが近いし堪忍してや!!」

「あ、ちよつと!!」

短い金髪を帽子からのぞかせたぼろぼろの服を着たオッサンがそういって麻帆良の車両内部に入り突っ切っていく。

それを見ていた生徒の何人かはぎよつとした表情になったが、マリーだけは大きく目を見開き固まった。

「なっ!？」

しかし、そんなマリーの様子に気づいた風もなく男はまるで瞬間移動したかのように向こう側の扉に出現した。

「「「え!？」」」

「ふう〜。もれるかと思つたで……」

まさか、ビタミン剤と騙されて速効性の利尿剤をのまされるとは……あんの白髪依頼者何考えトンねん。

トイレから出てきた帽子金髪ポロボロオツサン……略してボツサンは、そんなことを言いながら舌打ちを漏らす。

これからあの麻帆良生徒ばかりの車両を通つて、自分の車両に帰らなければならないことに鬱になった。

いくら破天荒の彼であつても流石に二回もあの中に突つ込むのは気が引ける。

それになんか見覚えのある少女……というか、であつた瞬間即殺されそうな少女が中にいたし、

「しゃーない。屋根に登つて迂回しよか」

男がそう決意して、新幹線のドアを穩便にあげようと張り付いた時、

「まて〜っ!!」

「ん?」

先ほど車両ですれ違つた赤毛の少年がどうしてこんな電車の中にいるのかわからないが、新幹線の車内を一直線に飛んでくるツバメを追いかけて走ってきた。

そのツバメは何やら上等な便箋を啜えている。どうやらそれが、少年がツバメを追う

理由らしかった。

「ふ〜ん……」

そのツバメが何か普通のツバメではないことを長年の経験で悟った男は、無言でそれを見つめた後、

「ほいつ」

「!!」

そのツバメが彼の横を通り過ぎる瞬間に、気で強化された手を一閃。それなりの強度があるはずのツバメの体を一瞬で粉碎し、バラバラに砕いた。

唾えていた存在がなくなりひらひらと宙を舞う便箋。男はそれを器用にキャッチすると、息を切らしながら追いついてきた少年に、微笑みながら便箋を渡す。

「うう……ありがとうございます……。って、あなたはさっきの変なおじさん!!」

「そうです……私が変なおじさんです!　って、ちやうわボケ!!　助けたたのになんやその態度!!」

何やら本場関西のノリツツコミを喰らった気がする……。

「あぶぶぶぶぶぶ!!　す、すいません!!　ちよ、ちよつと気を張っていてうつかり本当のことと言ってしまった!!」

「フオローになってへんで?」

「まったく。最近のガキは……。と、ボツサン（確定）はそんなジジ臭い文句を言いながらもネギに便箋を返し、首を横に振った。

「にしても少年……。こんな上等な手紙すぐにとられたらアカンで（俺なんかこんな便箋買う金すらないのに……）」

そんなボツサンのセリフに、ネギはしゅんと落ち込んだ後、ため息をつく。

「わかっているんですけど……。これ、ちよつと重要な書類で……。これを渡されたくないって人たちに狙われちゃんでいるんです……」

思わずそんなことを漏らしてしまった後、ネギはしまった!! といわんばかりの表情で口をふさぎ、カモは必死に動物のふりをしながらだらだらと冷や汗を流す。

ゆ、油断していた!! 親書を取り戻せたからといって油断しすぎてしまった!! も、もしもこの人が関西のスパイだったら（金髪碧眼だから十中八九ありえないだろうが……）!!

ネギの頭の中に大量の後悔と、悔恨の言葉が飛び回る。

しかし、覆水盆に返らず。時すでに遅し。

ネギが思わずこぼしてしまった言葉に、男はスツと目を細めネギを睨みつけると、
「重要書類って……。金目のもん?」

「違います!!」

目を？の形にして輝かせた。

しかし、親書は当然そんなものではないのでネギは即答してしまう。何となく、ネギのツツコミの瞬発力が上がったように思えるカモ。しかし、優しい彼はネギにそのことを教えることはなかった。

いや、だつてなんかいろいろ絶望しちゃいそうだし……。

そんなことはともかく、ネギの力強いツツコミまじりの否定にボツサンは『チツ』と舌打ちを漏らしたあと、興味なさそうに立ち上がる。

「まあ、そんな大事なもんなんやったらしっかり守りや少年」

「ええ……。それはわかっているんですけど……僕まだ素人ですし……。そんな僕に多大な期待寄せられても困るっていうか……」

何とも気弱な発言をするネギ。

原作でなら彼はやる気いっぱいなのだが、何せ今の彼は下手に現実が見える自分分たいたいする評価もシビアだ。

今の自分が一体どこまでできるのかをしっかりとわきまえて理解している。式神の存在を今まで知らなかった自分がどうして関西の魔法使いたちと渡り合っただけか……。ネギの冷静な部分があつさりと親書を取られてしまったネギに、そう問いかけてしまっているのだ。

そんなネギを見て、ボツサンはしばらく黙りこんだ後……。

「あきらめたらそこで試合終了やで？」

「!!」

そのオツサンの言葉に、ネギは目を見開き、うつむいていた顔を慌ててボツサンのほうへ向ける。

そこには、にやにや笑っているボツサンの顔があつた。

「俺実は名言売りしとんねん。俺が考えた名言を一言ずつ人に教えて励ましたつてんの。ちなみに一言2000円。ホンマはいまのもそうなんやけど、ここであつたんも何かの縁。特別に無料で聞かせたるわ」

「ほ、本当ですか!! ありがとうございます!!」

目をキラキラさせながらお礼を言ってくるネギに、ボツサンはさらに笑みを深くしながら大きく頷く。

「ちなみにほかの言葉もあるんやけど……ききたい? 次からは有料やけど」

「き、聞きたいです!!」

コクコクと何度も頷くネギに、男は次々と自称《俺が作った名言》を吹き込んでいく。もちろん一言につき2000円ずつむしり取つて。

ちなみにカモは日本に来たばかりなので、日本の名言はよく知らなくこの詐欺まがい

「……詳しく聞かせてもらおうか安川？」

「あ、あれ？」

怒り心頭といった様子で、式鬼に守られながら屋根に上がってきた、車内販売の売りに変装した千草の怒声を聞き、白髪の少年からとんでもない殺気が放出される。

今まで怒っていたはずのボツサンは、今度は逆にダラダラと冷や汗を流し始め、怒られる側へとジョブチェンジを果たしたのだった。

ネギの場合。

「敵を知り己を知れば百戦あやうべからず」

キリつとした顔で名言を言ってくるネギに、突然何言いだすんだ？ という表情をしながら明日菜は首をかしげる。

「いきなりなにいつてんのネギ？」

「えへへへへ！ 実はさっき親書を取り返してくれたおじさんに教えてもらったんです!! すごいんですよそのおじさん!! 含蓄のある言葉やためになる言葉をいっぱい知っていて……。しかも、そのすべてが一言2000円という低価格で教えてもらえて

……」

「へく。それ凄いわねネギ。名言売りなんていたんだ……」

明日菜はバカだったので、その名言の正体を知らなかった。

しかし、

「ネギくうん？　ちよつとそのオッサンがどこに行ったか教えてもらえへん？」

「へ？　この車両通るのは絶対嫌だから屋根伝いに三号車に戻るっていつていましたけ

ど……」

「あんの腐れオヤジがあああああああああ!!　ネギ君になにさらしてくれとんね

ん!!」

「うわっ!?　ど、どうしたんですか!?　マリーさん!!　落ち着いて!!」

車内中に響き渡るマリーの怒声を聞き、屋根で正座させられながら千草と白髪少年のステレオ説教を喰らっていたボツサンが悲鳴を上げて逃げ出したかどうかは、定かではない……。

桜咲刹那の場合。

「……なんで来ない」

ボツサンがツバメを仕留めた車両の一つ先の車両で待ちぼうけを喰らっていたりす

そんな風にも明日菜が安心してゐる目の前で、京都産の正体不明なジュースを飲んでゐた綾瀬夕映が唐突に口を開いた。

「はい、有名な『清水の舞台から飛び降りたつもりで……』の言葉通り実際江戸時代に234件の飛び降りが記録されていますが生存率は85%と意外に高く……」

「うわっ!! なんか変な人がいる!?!」

「夕映は神社仏閣マニアだからね」

「ほ」

一般女子生徒たちがぺらぺらと紡ぎだされる夕映の豆知識に若干引いている気がする……。まあ、知識欲旺盛な外国人二人組はかなり感心したようすで話を聞いているが。

ちなみに話しかけられたマリーは……。

「私のツツコミが的を射てへんかったやなんて……。鬱や。死のう……」

「落ち着きなさいマリー!! 生存率85%っていつでも残り15%は死んでいるから!!」

文字通り清水の舞台から飛び降りそうになっているところを明日菜に止められていたが……。

さらにエヴァンジェリンは……。

「う、うるさい!!」

先ほどと変わらないテンションでネギを拉致つて下へと急ぐクラスメイト達に苦笑をうかべながら、明日菜は何とか復活したマリーと、いつも通りほけほけ笑っているが、何かを探している様子の木乃香に話しかける。

「縁結びね……マリーや木乃香は興味ないの?」

「いまんところは特におらんなあ……。強いてあげるならネギ君?」

「よくよく考えてみたら五歳年下って結構な数値やと思うんやけど……」

「マリーは?」

「私は……小学校の時は親父に付き合わされて借金取りと命がけの追いかけてこしとつたし……。中学はいつてからは犬神君のところやしなあ……。そういったことはあんまり?」

「ああ……。あんたそういう人生歩んできたものね……。犬神は……言っていて思ったけどあれはないわね」

「まったくもつてその通りや……。というかあれを恋愛対象の一つに数えること自体人として間違つとる気がする」

「もう二人とも言いすぎやで? ええ人やんか犬神さん」

「木乃香……眼科に行つて」

そんな雑談を交わしながら三人が遅れて地主神社の境内にやってくると……

「えつと……ツツコミ待ち?」

「そんなこと言つてないで助けてくださいいいいいいいいい!!」

ひーん!! と泣きながらカエルだらけの落とし穴から、委員長とまき絵を引き上げようとしているネギの姿が見られた。

「ま、まさかこれが関西呪術教会の妨害?!」

「いやいや……。もしそうやったとしたら相当真面目ちゃうで関西呪術教会……」

シリアスな顔で愕然とするネギにそうツツコミを入れながら、マリーは三白眼になりながら二人の回収を手伝う。

「き、気を取り直して音羽の滝に行きましようか?」

そんな光景に若干顔をひきつらせながらとりあえず明日菜は先に進むことを促した。

なんか今日はカエルとやたら縁があるわねと思いつつ。知らぬは仏とはまさにこのことだった。

そして、音羽の滝に到着した麻帆良御一行。

「ここが音羽の滝です」

「うわっ!?! 結構こんどるな……」

「ど、どれが縁結びの滝なんですか?!」

「右から健康・学業・縁結びです」

夕映からそう教わり一斉に左端の滝へと殺到する麻帆良生徒たち。それを見てマリーはアマゾン川に生息するあの凶悪な魚を思い出したとかいないとか……。

「ちなみにユエユエ……その水筒はなんなん？」

「音羽の滝の水を持ち帰ろうと思いましたが……」

「一杯いくら位で売るつもりなん？」

「大体コップ一杯300円くらいでしょうか？ 京都に行けなかったクラスの生徒の何

人かにすでに予約をもらっています」

意外とちやっかりしている夕映だった。

だが、

「ね、ねえ……マリー。これちよつとまズくないかしら？」

「ふえ!？」

明日菜の震えた声を聴き、がつつり水筒に水を回収していく夕映からマリーはクラスメイト達に視線を移す。

そして、

「なんで、水でよっぱらつとんねん!？」

どこぞの駅で横になっている酔っぱらいのオッサンぽく倒れ伏すクラスメイト達が

いた。

「ま、マリーさん!! 屋根の上にお神酒が置いてあります!! これが滝に流れ込むようになっていて……」

「神様の酒をなんやおもとんねん関西呪術協会!!」

「ちよ、どうすんのよ!?!」

「チヨイ目立たん所に押しこんどこ!! こんなんほかの先生にばれたら修学旅行中止の上に停学やで!?!」

「わかったわ!!」

「了解しました」

「手伝いますよ!!」

キユポ。

「とか言いつつ酒入りの水をしっかりと確保するユエユエに脱帽した!!」

酔っぱらっていないメンバーが、若干困惑気味に総出で酔っぱらってしまったメンツを音羽の滝から引き離そうとした時だった。

「ああ? なんだ騒がしいな?」

「「げっ!?!」」

「あ、マリーちゃん、明日菜ちゃん、ネギ君。久しぶり」

生徒たちが羽目を外しすぎていないか監視に来た広域指導員の教師が回ってきてしまった!!

しかもその広域指導員が、

「じよ、ジョニー先生……レイジー先生……なんでここに？」

「ああ？ 初等部からの出向だクソが」

「手が足りないってことだったからね。『お前らむしろ麻帆良にいないほうが安全じゃね？』とばかりに送り込まれちゃって……」

二人の実態を知るネギ、明日菜、マリーは真剣に思った。

《学園長……援軍よこすならもつとまともな人にしてええええええええええ!!》と、

……†……†………†……†……

「ああん？ なんか酒くせえな？ まさか酒飲んでんじやねーだろうな!!」

「ちよ、先輩!!? 何嬉々として銃抜いてんですか!!? 麻帆良以外じゃ使っちゃダメですつて!!? でもあれ？ ホントになんかお酒臭い……」

「『あわわわわわわわわわわ………』」

なんというかもう停学の危機を通り越して命の危機だった。

さすが麻帆良随一の不祥事教師……ジョニー＆レイジー。京都に来てもエンジン全開だった。

「ちよ!? どないすんねん!? 新田やったらまだしも、ジョニー先生なんて話聞かずに発砲してくんで!」

（それがシャレで済まないのがほんとシャレにならないわ!!）

（僕遺書書いてきます……）

（諦めん!!）

いろいろ絶望した顔でそんなことを言つてどこかへ行こうとするネギを、マリーと明日菜は慌てて押しとどめる。

三人がそんな風に混乱の極みに至った時だった！

「ギヤース力騒ぐな酒がますぐなるだろうが」

「え!？」

「あ!!」

三人に救いの手が差し伸べられた!!

ジョニーとレイジーが見上げた先にいたのは、音羽の滝の屋根に上ったエヴァンジェリン。そこに胡坐をかきながら、先ほどネギが見つけた滝にお酒を流し込んでいたお神酒のタルを肘掛けにして座っているのだ。

「エヴァンジェリン!! テメエか酒飲んでんのは!!」

「別に問題ないだろう? 私の実年齢を知らんわけではあるまい。よつて私は酒を飲んでもセーフ!! こんなお神酒の聖地に来たんだ。飲まんのは逆に無礼だろう!!」

「おう。まったくだなロリババア。あとで俺にも一杯よこせ!!」

「お前にやるのはエターナルフォースブリザードしかないな……」

「ああん!? ンだところ!! やんのかこら!!」

「ちよ、先輩!? 生徒にケンカ売らないでください!! はあ……僕はもう何も言わないけど一応君は学生ってことになっているんだ。あんまり派手なことはしないでよ……」

「安心しろ。認識阻害くらいはかけてあるさ」

「ならいいけど……」

そういつてギヤーギヤーわめくジョニーをひずりながらレイジーは去っていく。幸いなことにそこらじゅうで寝転んでいる生徒たちには一切触れなかった。おそらくエヴァが丸ごと認識阻害をかけてくれたのだろう。

魔法先生すらだまし切る認識阻害。吸血鬼真祖の面目躍如といったところだろう。

「た、たすかった……」

「オオキニ、エヴァちゃん!! 助かったわ!!」

「ふん。こんなことで修学旅行がふいになってしまつては困るからな。べ、別にお前た

ちのためとかじやないからな!!」

エヴァに抱き付くことよって感謝を示してくるマリーに顔を赤くしながら、エヴァはそっぽを向く。

「あれがツンデレというやつですね!! 犬神さんに聞きました!!」

「あ、あれがツンデレ……。高畑先生にも通じるかしら?」

「マスター。ツンデレ乙」

「凍りつけえええええええええええええええええ!!」

がつつりその光景を見られて、あとで散々いじられることをエヴァンジェリンはまだ知らない……。

14話・修学旅行一日目 夜の部

「修学旅行初日から命の危機に陥るなんていったい何の冗談ですか？」

「まあ、その命の危機の原因は身内やけどな……」

「楽しい修学旅行になると思う？」

「血と絶叫の修学旅行になる可能性と五分五分ですね……」

修学旅行初日の夕方。嵐山の旅館にて。そこらじゅうから麻帆良生徒たちの騒がしい歓声が聞こえてくる中、ロビーに集まってヒソヒソと対談を開始したネギ、マリィ、明日菜、桜咲の四人は早速拳銃を抜こうとしていたダイナマイトバカの顔を思い出しながら大きくため息をついた。

酔っぱらった生徒たちをスネークも真つ青なスニーキングで、何とかバスに押し込むことに成功したマリィたちは、こうして無事に旅館につくことができた。

その際、ストーリーカーじみた手際で木乃香を付け回していた（一応念のために言うが……護衛のため）桜咲をレイジーたちが問い詰めたり、その際ジョニーが拳銃を引きぬき『死ぬストーリーカー』とばかりに発砲したためあたり一帯から観光客がいなくなったり（桜咲は間一髪で止めに入ったレイジーのおかげで無事だった）、その不祥事を聞きつけ

た新田が砂利の上にレイジーとジョニーを正座させて3時間ほど説教したり（よく聞くと新田はジョニーの学生時代の先生だったとか……）、まあ、いろいろあったところか下手をすれば大惨事間違いなしのこともあったが、マリーたちは無事に旅館につけたので一応無事だったことにしておく。

「それにしても桜咲さんが魔法関係者だったなんて驚いたわ……」

「私も……明日菜さんがエヴァンジェリンさんとネギ先生の戦いに出てきたときは新手のギャグかと思いましたよ？」

「私ってそんなに違和感あったの!？」

刹那からさらつとはかれた辛辣な言葉に、明日菜はギョツとしながら顔を引きつらせる。

「それにしても昼間のアレ……関西の差し金なんでしょうか？」

「間違いありません……。まあ、やる気あんのかといたくなるような気の抜けるものばかりでしたけど……」

さすがに昼間の間に調査しておいたのか、ネギの疑問には断言する形で桜咲が答えてくれた。その手には札が握られており、そこから吐き出される墨によって空中に無数のデータが刻まれている。

「新幹線でのカエルや、落とし穴のカエルは同じ式鬼で同じ術者が使ったものと思われ

ます。酒に関してはさすがに何とも言えませんが……設置されたのは大体昨日の深夜。私たちがやってくるタイミングに合わせて栓が抜けるように細工がしてありました。残留魔力も残っていたのでおそらく式鬼を使ってあそこに運び上げたものだと思われます」

「ほ、ほ〜」

桜咲から告げられる数々の情報に、ネギは思わず感心の吐息を漏らした。そんなネギの様子に苦笑をうかべながら、マリーは札を掲げた刹那の手を取る。

「せつなさんは頼りになるな〜」

「せ、せつ!?!」

「ほくんと。ネギとは大違いね〜」

「あぶぶぶぶぶ!?! あ、明日菜さん!! 自覚しているんですからこれ以上言わないでくだ

さいよ!!」

『あにき……。その発言は情けなきマックスだぜ?』

一気になぎやかになるメンツにやや面を喰らいながらも、刹那は若干頬をほころばせた。そういえば……。麻帆良に来てこんな会話をしたのは、一緒に仕事をした時に友人になつた龍宮以来……

『刹那〜。この前の仕事の報酬にあんみつをおごってくれる約束だったよな?』

『べ、別にかまわないが……あ、あんまり食べすぎるとなよ?』

『はははは! 刹那何を言っているんだ? ただでござってもらえるのにどうして手加減する必要がある?』

『……』

『それに……あんみつは別腹だ!!』

『……』

結局、その月の仕送りは龍宮のあんみつ代で消えてしまったり……。

「ああ……あいつが友人かどうかはかなり微妙だな……」

「ど、どうしたんですか刹那さん!? いきなり黒い笑みを浮かべて!」

「いえ……。気にしないでくださいネギ先生。ちよつと嫌な思い出を思い出してしまっただけです……」

フフフフフフ……。と、漆黒の怒気を垂れ流しながら笑う刹那に、ネギ・アス・マリートリオは抱き合いながらぶるぶると震えるしかなかった。

閑話休題。

「ま、まあ、そんなに心配する必要もないっちゃないですよね。犬神さんが言っていたみたいに、今のところ反抗勢力攻撃は悪戯じみたものが多いですし」

「ああ、そう言われたらそうやな?」

修学旅行前に受けた犬神の説明を思い出しながら、ネギとマリーは拍子抜けだね〜といわんばかりの笑みを交換した。

まあ、楽しい修学旅行に水を差されるのは若干業腹ではあるが、実力行使に出られて命の危機の陥るよりかはずいぶんとましだ。親書を届けてしまえば攻撃も収まるだろうし……あと少しの辛抱だと、マリーとネギは考えていた。(ちなみに明日菜は事情を少ししか知らないためとりあえず二人に合わせて笑っているだけだったりする)

「まあ、関西呪術教会の長もがんばっていますしね。そうそう簡単に大規模な邪魔なんて入りませんよ。ですが……」

「ですが？」

そんな二人の雰囲気にも水を差したのは、若干緊張した面持ちであたりを見回した刹那だった。

「ある人物を誘拐されてしまったら、こちらの優位性は一気にひっくり返されます」

「あ、ある人物!？」

「そ、そんな人がおるんかいな!？」

「え、え? ナニ? どこに話が飛んだの!？」

そんな重要人物がいることを今更教えられたネギとマリーは思わず唾をのみ、さつきまでの会話でさえついていくのがギリギリだった明日菜が若干混乱する。

「ネギ先生は学園長から聞いていませんか？ お孫さんのこと？」

「あー！ こ、木乃香さんのことですか?! 生物の不思議として教科書に載りそうな!!」

「ネギ先生!! この半年でいったいあなたに何があつたんですか?!」

ネギの口から吐き出された意外すぎる学園長デイスに少々おののきながら、刹那は気を取り直して話を続ける。

「ま、まあその木乃香お嬢様に関してなんですが……」

「「お嬢様？」」

「!？」

刹那が吐き出した少々普段の木乃香には似合わない敬称に首をかしげる3人を見て、

刹那は慌てて口をふさぎかけ……

「はい……そうです」

「いやいや今更でしょう？ どうせ説明するんだし……と思ひ直したのか、そのまま話を続ける。」

「木乃香お嬢様は実は関西呪術教会の長の実子。日本で有数の霊力……すなわち魔力を持つ大魔法使いの原石なんです……」

「「……」」

刹那から告げられたその事実、3人はしばらく固まった後……。

「ホンマに気を付けるんやで明日菜？ 危なくなったらすぐ叫びや？ 関西のほうも魔法の隠匿義務あるさかいに、ほかの班員が起きてくれたらさすがに強硬手段はとらへんやろうし……」

「もう……マリーは心配性ね！ 大丈夫よ！ ちゃんとやるから!! それに私だってエヴァンジェリンさんと戦う時に一通りの訓練受けたのよ?」

心配そうに何度も段取りの確認を取ってくるマリーに苦笑をうかべながら、明日菜は自分の部屋に入るために廊下と部屋を隔てているドアを開ける。

「それに、うちの班員は夜まで騒ぐつて息巻いていたからそんなにすぐには寝ない……」
わよ。といいかけた明日菜の目の前には、夕映によつて配られた酒入り音羽の滝の水を飲んで酔いつぶれているバカ4人が映つて……。

「……」

「……メツチャ爆睡しとるけど?」

「……何だよ……なんで私を飲み会に誘つてくれなかったの!」

「明日菜!?! 最近ちよつとおかしいで!?!」

犬神のせいとか何だか知らないが若干壊れつつある明日菜にツツコミを入れつつ、教師が見回りに来た時に不具合がないように酒の痕跡を始末するマリー。

「はあ……。めつちや深い眠りについとるみたいヤシ……コラ今日の援護を期待するん

は難しそうやな」

「マリー……一緒に寝てくれたりしない？」

「あいにく私も命が惜しいねん」

瀬流彦先生がこつそり教えてくれた情報によると、今日の見回りはジョニー先生とレイジー先生みたいヤシ……。

すでに立っていた死亡フラグに絶望しながら、マリーは大きいため息を漏らした。

「ま、まあ……今回も悪戯程度で済むかもしれへんし、そんな心配することもないやろ？」

「そ、そうね!! 大体女子中学生一人さらうのにそんなガチンコで来るとも思えないしね!!」

楽観的な意見を並べて、ハハハハハ! とわざとらしい笑みを浮かべるマリーと明日菜。それがどれだけむなししい行為かということに彼女たちは気づいているのだろうか？

「あ、ちよ……ごめん明日菜。チョイトイレ行きたくなくなったからちよつとトイレかしてくれへん？」

まあ、そんな二人の楽観的な意見を無視して、

「いいわよ。というかできるだけ長くいて」

まったく……うちのクラスの連中は。修学旅行やからってはいしやぎすぎやねん。おかげでウチに精神疾患の疑いがかかっとなるやないの……。さてさて……。時間もええ感じにたつたし、次あけたらあの幻覚は消えとるやろ。と、軽い現実逃避を終えた後、マリーは深呼吸しながら再びトイレのドアを開けた。

「はいっとりますええ。つて、なんでさつきは勢いよくしめたんや!! つてかあんだ誰や? 関西弁が聞こえてきたからお嬢様が来るおもてせつかくセツティングを……」

「ふんっ!!」

再び勢いよく閉められるドア。中からサルが何か言ってくるが、マリーは全力で無視する。

「マリー? さつきから何はしやいでいるの? トイレにゴキブリでも出た?」

「私もトイレ行きたいのですが……」

「そうやねん……かなり大きめやから、明日菜バ○サン買ってきてくれへん? 中にいるゴキブリ窒息死させたるから」

『人のことゴキブリ扱いつてどういう神経しとんねん最近のガキは!! だいたい、ここはホラーものの《ドア開けたら怪物がおつてそれに食われる》つていうシーンのテンプレートやろ!! 何でその怪物閉じ込めとんねん!! 空気読みや!!』

「なんで不審者にそんなこと言われなあかんの!」

トイレの内側からバンバンドアをたたいてくる不審者にそうツツコみを入れながら、マリーは敵……猿がトイレから出ないように全力でドアおをさえこむ。

「え？ え？ なに？ ゴキブリじゃないの？」

「あいにく私はゴキブリぐらいではビビらへんねん……。もつとグロテスクなものを見たことあるしな。具体的には犬神君の被害者とか……」

「もうそれグロテスクうんぬん以前に死体よね？」

「あ、安心し!! 今まで犬神君は殺人罪では捕まったことないんやで!!」

「ちよつと待ちなさい!! それ以外はあるってことじゃないでしょうね!!」

そんな雑談を交わしながら、マリーは明日菜にアイコンタクトを飛ばす。『多分木乃香を狙いに来た敵や!!』と。

明日菜はその視線に頷き、

「バルサンよりゴキジ○ツトのほうがよくない？」

「あれ!! 通じてへん!!」

『ちよ、そんな雑談してんとだしてや……。トイレつて密室やから地味に蒸し暑い……。』
「その着ぐるみ脱ぎーや!!」

ギャンギャンわめきながらどんどんトイレのドアをたたいてくる不審者の声を聴きながら、夕映はそのドアを抑えているマリーに視線を移す。

「不審者？」

「……………」

一瞬にして静寂を余儀なくされる明日菜とマリー。

し、しまった!! 夕映一般人だった!!

いまさらながらそのことに気づいた二人はだらだらと冷や汗を流す。その空気を察したのかトイレの中に閉じ込めた巨大猿も行動をやめて黙り込んだ。

そういうたら犬神君がユーとったな……関西も魔法隠匿には協力しとるって。

マリーはそこまで考えたとき、ある名案を思いついてしまった!!

「そ、そうやねん!! どっから入り込んだんか知らんけど、トイレの中に猿の着ぐるみ着た不審者はいつとって……」

「『なっ!!』」

中の不審者と明日菜が同時に驚愕の声を上げるが、夕映はそんなことには気づかなかつたよう不審者と聞いて顔色を変えただけだった。

「た、大変です!! すぐに先生たちを呼ばないと!!」

「そうやねん夕映。せやからちよつとひとつ走りして先生呼んできてくれへん? 私はこちらでドア抑えて、明日菜は部屋のみんなを避難させるし。あ、ちなみに呼んでくる先生はネギ先生やのーで新田先生呼んできて。こういった事態ではネギ先生よりそつ

『シヤレにならへん!』

「いややなく明日菜。関西弁になってんで?」

「どうでもいいわよそんなこと!?! どーすんのよ!?! どう考えても魔法バレの危機でしよ!?! おまけに呼んでくる先生一般人の新田に限定つて何考えてんのよ!?!」

『なっ!?! 来る教師も一般人なん!?!』

中のサルが慌てふためくのを聞きながらマリィは人の悪い笑みを浮かべながら、全身に気を巡らし更にきつくドアを抑え込む。

「明日菜よー考えてみ? 一応関西も魔法隠匿はしとんねんで? つまりこのままこいつの対応を一般人に押し付けてまえば、こいつは普通の不審者として警察いき……」

「はっ!?! なるほどそういうことね!! つまり私たちは自分たちの手を汚すことなく、これからの不安要素を排除することができると!!」

「そのとーりや!! ふはははははは! これで私らは簡単に勝てる! 勝利の女神も爆笑しとんで!!」

『またんかいいいいいいいいいい!!?』

合点がいったわ!! とばかりに目を輝かせる明日菜の同意を聞き、猿はトイレの中でさらに慌てふためいた。

『ちよ、ちよつと待ったりーな!?! え? え? マジで? マジでこのまま私警察に突

き出されるん!？」

「え?」

『うわっ!! 腹立つ!! 「いまさらなにってんのこいつ」っていう雰囲気はつきりと読み取れたことが腹立つ!!』

バンバンドアをたたきながら、猿からの必死の抵抗。

『いやいや、ここは木乃香お嬢様誘拐された挙句、敵と火花を散らす攻防戦をした後あえなく奪還失敗! 『木乃香……いま助けに行くからね!!』 エンドで終了ちゃうんかい!』

それがテンプレレートやろうが!』

「敵にテンプレ語られた!」

「しかも地味に自分の都合がええようにテンプレ改ざんしとるし!」

というかさつきからなんこの女? テンプレ好き?

マリーはそんなことを考えながらギャンギャンわめいてくる女の言葉を無視。さつさと決着をつけるべく明日菜に指示を出した。

「とりあえずさつき言ったように部屋のみんな外に出しといて!! エヴァちゃんや刹那ちゃんの部屋に放り込んでいたらあとは二人が何とかしてくれるやろ?」

「了解!!」

明日菜は元気良くマリーに敬礼した後、『なんかあつさりと片が付きそうね』とニコ

木乃香を守るためにパトロールに出ていたネギは、カモが登場してない間の苦勞話を聞きながら渡月橋を歩いていた。

「へへ。カモクンも大変だったんだね〜」

『そうなんだぜ〜。だから俺の出番がなかった原因は、決して俺の存在を作者が忘れていたわけでも、俺の存在がこの小説的にいらなかったわけでもねーんだぜ!!』

「何を、カモ君、君が何を言ってるのか分かんないよ。カモ君」

『いきなりエヴァネタはさむのやめてくれねーか、兄貴……』

いや、何か今言わないといけない気がして……。

ネギが大いに首をかしげながらカモに『電波が飛んできたんだよ』と弁明していると、きだった。ネギの頭上を、何かの影が横ぎった！

「ん?」

「なんだ?」

カモとネギが頭上を見上げると、そこには金髪に無精ひげを生やしたうさん臭いオッサンと、気絶していると思われる、彼の肩に担がれた浴衣姿の少女がいた。

ちなみに少女の浴衣は風圧にあおられて翻っており、彼女がはいているパンツが丸見えになっていたりして、

『うほっ!! いいパンツ!!』

「カモ君!?」そこに反応している場合じゃないと思うよ!」

二拝二拍手一拝をして拝み倒すカモにツッコミを入れながら、ネギは明らかに見たことある二人組を見て慌てて明日菜に電話をかける!

『もしもし、ネギ!?!』

「あ、明日菜さん!! 木乃香さん無事ですか!」

『そ、それが変なおっさんにさらわれちゃって!!』

遙か彼方から、「そうですね私が変なおじさんです! って、何言わせんねくん!!」と、ネギの耳に聞こえてきた気がするが全力で無視する。

「ついさつき僕の頭上を通り過ぎていきました!! すぐに追いかけてます!!」

『うん! わかったわ! 私とマリーは桜咲さんや瀬流彦先生に連絡入れてから追いかける! だから……ネギ、木乃香をお願い!!』

「任せて下さい!!」

友を守れなかった悔しさから、泣き声まじりになっている明日菜の声に、ネギは呪文を唱えその身に魔力の鎧をまとう。

「戦カントゥス・ベラーゥスいの歌!!」

そして、夜の追いかけてこが始まる。

右手に装填されているのは、破壊こそ絶対の力といわんばかりに火力を重視する西洋魔法！

「おいおい！」

ボツサンの顔がその光景を見て思わずひきつる。

しかし、少年は詠唱を止めることなく、情け容赦なく魔法を解き放った!!

ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス
「雷の暴風!!!」

轟音を立て、破壊をまき散らしながら、《雷の暴風》は男を直撃する！ 強力な破壊力を有する中規模魔法を食らった男の体は、まるで木の葉のように吹き飛ばされタイヤ張りの階段へと叩きつけられた！

その際木乃香は空中に投げ出されており、杖に乗った少年……ネギは難なくその体を掴み取り救出を成功させる。

「いや〜意外とうまくいったな兄貴！」

「風精にダミーやらせるっていうのはちよつと初めてだったからうまくいくかどうかはわからなかったけど、よかった……成功して」

ネギが視線を巡らせた先には、ネギの靴を履いたネギにそっくりな風の精霊がブンブン手を振りながら消えていく。

風の中位精霊を使って自分の複製を作り出す魔法。ネギはそれを使ってわざと足音

を演出し、敵に自分が後ろから迫っていると錯覚させたのだ。

そして、本当のネギは杖に乗り無音で空中を高速移動。敵が来ると思われるポイントに回り込んで呪文詠唱を終了させ、敵を迎え撃った。

VIによる教育を受けたネギにとってこの程度の作戦はできて当たり前のことになっている。

「さあ……旅館に帰ろうかカモ君。あ、途中で明日菜さんたち拾っていかないと……」

ボツサンを倒したことにより、安心した雰囲気の流れしながらボツサンが吹っ飛んだ地面から背を向けるネギ。

だが、

「おい………チヨイまでや」

『!?!』

後ろからボツサンの声が響き渡り、ネギが驚きながらふりむく!! そして……

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

電車にのりネギがたどりついたといっていた京都駅にやってきた明日菜、刹那は目の前で繰り広げられる光景を信じられないものを見るような目で見つめていた。

「ネギ……」

「あははははは……ごめんなさい明日菜さん」

そこには、

「負けちゃいました〜!!」

ネギの父親の形見の杖を取り上げ天高く掲げるボツサンと、ピョンピョン飛び跳ねながら必死に杖を取り返そうとするネギの姿があった。

「も、萌え〜」

「マリーさん!? 明日菜さん!? っている場合じゃないでしょう!」

若干壊れた二人のセリフに刹那が突っ込みを入れるなか、声に反応してふりむいたボツサンは、

「ゲツ!」

マリーの顔に視線を合わせると同時に、顔を思いつきりひきつらせる。

「あ……マリー。久しぶりやな」

「ああ、久しぶりやな……」

そして二人はにこやかな笑顔であいさつを交わした後、

「友達さらってどうすんの? とか、私を身売りするとか何考えトンねん? とか、そのかっこうを見る限り相変わらず借金取りから逃げ回っているみたいやな……とか、言い

たいことは腐るほどあるけど、まあ今はええわ。いまはとりあえず……」

マリーは手元に出現させたカードから、いつものハリセンを出現させ一言……つぶやく。

「死ぬ覚悟はできとるんやろうな？ クサレオヤジ……」

「いきなり父親殺害宣言!?!」

こうしてマリーは、自分を犬神アンダーグラウンドサーチに売り払ったダメおやじと再び対面することになるのだった。

……†……†………†………†………

そのころ……麻帆良生徒が泊まる宿では。

「あ、先生こつちです!! って、あれ？ マリーさんは？」

「あ、木乃香がどつかいっちゃって、明日菜と一緒に探してくるって」

「ゆえくはやくく」

夕映が新田先生を連れて帰ってきたトイレの前には、無理やり起こされたせいかわ、若干頭が痛そうなパルとのどかが座っており、トイレのドアを抑えていた。

「君がうちの生徒を襲おうとした不審者かね？」

「あ、いえ……これにはその……なんというか深い事情がありまして……」

「問答無用だ。夕映君。ジョニー先生を呼んできてくれ」

「わかったDEATH!!」

「あれ!?! なんか語尾が不穏になった気がすんねんけど?! 私一体どうなるん?!」

そして、修学旅行を襲撃した怪異・猿女は地獄を見ることが決定したのだった。

……†……†……†……†……†……

「お、お父さんですか!?!」

ボツサンに必死にとびかかりながら杖を取り返そうとしていたネギは、マリーの言葉に目を見開いた。

ボツサンはそんなネギの様子をみて、苦笑交じりに天高く上げていた杖をおろし、頬をかく。

「ああ……まあ、そういうことや」

「そ、そんな……どうしてマリーさんのお父さんがこんなことを!!」

「いや……ネギ君。娘売り飛ばすような男に常識求めるほうが間違っとなんで?」

「……」

『父と娘……因縁の対決!! なにが……いったいなにが、彼らを引き裂いてしまったのか!』というテロップが脳内に流れるネギに向かって飛来したマリーのツッコミが、そんなシリアス風味な空気を引き裂いた。

「ああ……そういうえば言っていたわね。犬神に無理やり売り払ったって……」

「なんてクズやろうなんですか!!」

「あれ? なんやろう……知らん所で俺の株価が暴落しとる気がする……」

「もともと売り払えるような株持ってへんくせになにユーてんねん!!」

女子中学生二人から向けられた絶対零度の瞳に、ボツサンことマリーの父親は若干黄昏た空気を醸し出すが、マリーの辛辣なツッコミが入り「それもそうやなくハハハハハ!!」と力強い笑みを浮かべながら元の雰囲気に戻る。どうやらかなり強靱な精神力の持ち主のようだ。

「ほんで……マリー。俺ちよつとこの子さうことが今回の仕事やさかいに、邪魔されるところちよつとこまんねんけど……」

「ふざけんといてや、クソオヤジ。その子は私の友達やねんから、さらわれたんを「ハイそうですか」って見逃すわけないやろ?」

ハリセンを構えながらマリーが吐き出したもつともな言葉に、安川父は、苦笑をうかべながら肩をすくめる。

「マリー……仮にも俺はお前の父親やで？ 信頼してーや。この子は絶対に悪いようにはしーひんから!!」

そして、キリツとした顔になり力溢れるかつこいいセリフを言ってくれた安川父。その姿は歴戦の傭兵を語るにふさわしいもので、体からは覇気が流れ出ている気がする。彼の本当の姿を知らない人間が見たらついうっかり信頼してしまいそうなほど彼の姿は決まっていた。(ちなみに、ネギと明日菜はだまされた)。

が、

「娘売り飛ばすような男にいまさら信頼があるおもてんのか!!」

「オウ、シット!!」

マリーの的確なツツコミによって、その覇気はあっさりと雲散霧消し、明日菜とネギから再び冷たい視線が向けられる結果に終わった。

「それに……どうせその仕事を受けたんも借金がらみやろ!! いったいいくら肩代わりしてもらえることになってん!!」

「……」

大きく顔をそむけ、マリーから目をそらす安川父。どうやら凶星だったらしい……。

「ふむ……ホナシャーないわ」

そして、安川父は視線をそらしながら肩を竦めた後、

「そーい!!」

「ぎやああああああああああああああああ!!」

ネギの杖を気で強化された腕を用い全力投球！　ネギの杖はお星さまになってどこかに行った……。

「そんな、ひどいですううううううううう!!」

「いや……魔法使いの戦力削るんは当然やんか……。はよ取りにいかへんと、誰かに拾われてどつかいつてまうで？」

「あうあうあうあ……」

杖を拾いに行きたい。でも生徒を助けないと。でも杖のない僕じゃこの人には勝てないし……。

そんな風に思考が堂々巡りになり混乱するネギ。

明日菜はそんなネギを見て、大きいため息を漏らしながら声を張り上げる。

「ネギ!!　早く杖とつてきなさい!!」

「え?　で、でも……」

明日菜の言葉に目を丸すクスネギに向かって、明日菜は元気よくサムズアップする。

「だてにエヴァンジェリンちゃんと戦ったわけじゃないのよ!!　マリーも桜咲さんもいるし……」ここは私たちが何とかするから!!」

信頼している明日菜の力強い言葉に、ネギは一瞬の逡巡のあと、

「わかりました！ 杖を見つけたらすぐに戻ってきます!!」

ネギ今の自分に使えるせい一杯の身体強化を足に施し、その杖が飛んでいった方向へと駆けて行った。

そんなネギを見送った後、明日菜は最近Ⅵとの修行中にさせるようになった大剣を、刹那は長大な野太刀を取出し安川父に向かって切っ先を向ける。

「おお……なんや。物騒なモン持つてるやんか……。まあ、それでもガキに負けるつもりはあらへんけど」

安川父はそんな二人の様子に口笛を鳴らしつつ、位置関係的には彼の背中の後ろになっっている段の頂上に、気絶したまま倒れている木乃香を親指で指差す。

「あの子を奪還できたらお嬢ちゃんたちの勝ちや。まあ、こつちも仕事やさかいにて加減はしーひんけど？ かまへん？」

「上等よ!!」

「お嬢様を守るのが……私の使命です。邪魔をするというのはのなら、押しとおります!!」

明日菜はネギからオートで供給される魔力を、刹那は長年の研鑽で手に入れた気を、体中にはりめぐらせて力に変える。

マリーも二人と同じように気を体中に張り巡らせて戦闘態勢をとるが、その視線はほ

揺れがその付近を襲う。

そして、

「え!？」

安川父に直撃した大剣……ハマノツルギが安川父の頭部を直撃した中央から砕かれ、へし折れた! それを見て明日菜は大きく目を見開く。

「ああ……マリーから聞いたことない? 《豪気功》ゆーてな。俺の気力運用はちよつと特殊やねん。体や気を流し込んだ物質を硬化させる気力運用なんやけど……。さてここで質問や、お嬢ちゃん。ターミネーターに対して木製の椅子を力いっぱい叩き付けたらどうなるやろ〜か?」

木製の椅子はターミネーターの耐久度に耐えられず壊れる……。

「正解。まあ、今の現象はそれとおんなじ現象やと思つてくれてええよ?」

「……どんだけ固いのよ!？」

「計ったことはないけど、ダイヤモンドの億倍ぐらい?」

安川父が提示したでたらめな数値に明日菜は思わず顔を引きつらせる。

「ほな、まあ……一人退場ゆーことで」

「!!」

そして、そんな明日菜のスキを安川父は見逃さなかった。予備動作が全く分からな

い、信じられない速度で振るわれた安川父の回し蹴り!! 明日菜はその姿にゲルの姿をかぶせてしまう。

……やっぱり、この人があのクサレ外道の師匠だわ。

自分のこめかみに向かって振るわれた、ダイヤモンドの億倍固いといわれる足によって行われた回し蹴り。

詰んだ……。

明日菜は瞬時にそう判断し、思わず目を閉じる！

だが、

「なんでやねええええええええええええええええええん!!」

「秘剣・百花繚乱!!」

瞬動で二人の間に無理やり割りこんだマリーがハリセンをふるい、刹那が安川父の頭に向かって遠慮容赦ない連続斬撃を叩き込む!!

「おっ!」

刹那の攻撃はとんでもない硬度を持つ安川父にはあまり通じなかったようだが、それでも若干ひるませることに成功。その隙について、マリーが父親と同じように豪気功を流し込んだハリセンで彼の足を迎撃し、弾き飛ばした!

「!?!」

そこで明日菜は……信じられない光景を目にする!!

「イツタ!? 脛しばかれたし普通にイツタ!!」

「ものすごい隙だらけですね……」

「あたり前やん。このクソオヤジがしばらくの間クールキャラになれとつた方が間違つとんねん……」

どうやら豪気功が流し込まれた攻撃によって安川父にダメージが入ったようだ。足を抱えて激痛にのた打ち回る安川父をしり目に、刹那は半眼になりながら呆然としている明日菜を回収、マリーは父親の頭部に向かつて遠慮なくハリセンをふるう!

「つて!?! のわああああああああああああああああ!?! いやいや……マリー。ここはお父さん見逃してくれるところやない?」

もう殺意が限界まで含有されたその一撃を察知し、慌てて階段を転がり落ち回避する安川父。その顔は限界まで血の気が引いており、マリーが放った一撃が一体どれほどの恐怖を安川父に与えたのかを物語っている。

「安心しーやクソオヤジ。私の豪気はまだ練りが甘いせいで、あんた殺すところまで至ってへんみたいやし……。しこたま殴られても死ぬ可能性はないで?」

「い、いや……確かに攻撃は通じひんけど殴られたらそこそこ痛い……」

「あんたに捨てられた私の心のほうがよっぽど痛かったし……甘んじて受け入れてー

や。クソ」

「親父すらぬけっ……ブヘラッ!?」

備兵時代の安川だったら激痛ぐらいでギヤーギヤー騒ぐことはしなかったのだろうが、あいにくと今の彼は傭兵でもなんでもなく借金にまみれた小汚いオッサンだ。前線を退いてしばらくたっていたので痛みに対する耐性が下がっているうえに、自分に制裁を加えているにはもう罪悪感しかいだけない捨ててしまった娘……。

彼が反撃することは……なかつたらしい。

「うわ……」

「ま、マリーさん……怒るとあんなに怖いんですね……」

悲鳴を上げながら『助けて!!』という父親の声を無視して、淡々と豪気功を流し込んだハリセンをふるい続けるマリーに明日菜と桜咲は戦慄し冷や汗を流したという……。

ちなみに……

「うくん。うくん。鬼が……鬼がおる〜」

マリーが安川父を殴りつける音が響き渡るたびに、階段の上にはいた木乃香が寝返りを打ち、うんうん言いながらうなされていたらしい……。

……†……†……†……†……†……†……

後日談。

・マリーたちが戦っている時の、宿屋のとある一室……。

「はっ!? 安川……まさか、暗黒面に落ちたのか!？」

「アナキン・スカイウォーカーですね。わかります」

一人の吸血鬼とガイドノイドがそんな会話を交わしていたとかいないとか……。

・戦いの後のマリーたち。

「それにしても木乃香無事でよかったな」

「イエス・アイマム」

「ネギ君も杖見つかったみたいやし……」

「イエス・アイマム」

「……なあ、二人とも……」

「い、イエス・アイマム!!」

なんかもう顔を引きつらせながら、うなされる木乃香を抱えガタガタ震える二人を見て、マリーは大きなため息をつく。

「まずは……お話から始めよか？」

「そ、それは某魔法少女みたく……『すこし……頭冷やそうか?』てきな?」
「ちやうわ!」

「も、もしくは……同魔法少女のSLB的なあれですか!」

「そんなうてへんし!! ていうかセツナン何でしつとんの!」

結局二人の態度は宿に到着するまで治らなかつたという……。

・戦いの後……戦場にて。

「安川……」

なかなか帰ってこない仲間を迎えに来た白髪少年は、そこで今回の計画で最も信頼している人物が倒れているのを発見した。

その男……安川父はどういうわけか頭に無数のたんこぶをつけ、それでたんこぶタワーを建設しながら気絶しており、その背中には油性ペンで書いたと思われる大きな文字で落書きがされていた。

『私は可愛い可愛い、美人すぎて目がくらんでしまうような娘を捨ててしまった悪い子です。とても反省しています』

背中に書かれた文字を読み、めつたに動かなかつた少年の顔に明らかな縦線が入る。

「……今ほど、君をこの計画に誘ったことを後悔したことはないよ、安川」

「うわあ……誰がここまでやらはったんやろ。さすがの私もこもまではしませんわ
〜」

白髪の少年についてきた眼鏡の二刀流少女のドン引きした声をバックに、夜は静かに
更けていった。

・京都市内警察署にて。

「あんまり頑固だとこつちもそれ相応の態度をとらないといけなくなるよ？ あ、かつ
丼食べる？」

「いや……せやからちよつと言えへんていうかなんて言うか……。ていうかかつ丼は
さつきももらいました……」

「まあ、君が認めたくないのもわかるけどさ……。あ、かつ丼食べる？」

「いや……せやからもらったって」

「ふくん……。かつ丼食べる？」

「つて、さつきからなんやねんあんた!! そんなに私にかつ丼食べさせたいんか!! か
つ丼食べたなら何でも話すおもとんのか!?!」

「ああまあ……。それは……。かつ丼食べる？」

「誰かアアアアアアアアアア!! チェンジイイイイイイイイイイイイイイイイ

イイ!! もしくは通訳呼んでええええええええええええええええええええええ!!」

おそらく今回の話で一番不憫だった、硝煙くさいボロボロの原作キャラが捕まっていた……。

15話・修学旅行二日目苦労人レイジーの修学旅行

修学旅行二日目……。

ポロっポロになったスーツを着たままレイジーは目を覚ました。

「んあ……」

体中に走る鈍い痛み。まあ、これはいつもどおりなので無視するが、問題なのは彼の腹部にやたらと重たいものが乗っかっている気がするのだ。

宿のカーテンから差し込む光をまぶしく思いながら、レイジーは腹部に乗った重たいものはねのけ勢いよく起き上がる！

「いったいなんだ……つて、聞くまでもないか」

レイジーが素晴らしいながら暗い笑みを浮かべ、自分の隣へと視線を向けると、そこには!!

寝る時でも眼帯を外そうとはしない、トサカ頭の不良教師が豪かいな寝相で眠りこけていた。

彼の名前はジョニー。レイジーの胃に穴をあけてくれそう……彼の人生で最悪な部類に入る仕事の上司……。

ネギは犬神アンダーグラウンドサーチの最重要保護対象だったはずだ。それからわざわざ離れたほうがいい事態なんていったい何があったんだろう？ と。

もつとも、マリーがネギから離れたのは別に大した理由ではなく、いつの間にかネギがフラグを立てていた宮崎のどかに気を使ったただけなのだが……。

閑話休題。

「ほんで、そつちはネギ君の援護体制大丈夫なん？ 昨日は結局こーへんかったけど？」

「ああ……。昨日はマリーちゃんたちが捕まえた不審者を新田先生に任されてね……。まさか放っておくわけにもいかなかったし」

「ああ……。確かにあのお猿のオネーちゃん色々やつてきそうやったしな……」

「いや……。ジヨニー先輩が彼女を撃ち殺さないように見ていないといけなくて……」
「……」

思わず沈黙を余儀なくされるマリーから、とてつもない同情の空気が流れってくるのを感じ、レイジーは思わず目元を抑える。

何となく心の汗が流れそうで……。

そんな時だった……。

「おいレイジー!! 3—A委員長からタレこみだ!! 教師が生徒と不純異性交遊してんだと!! 見つけ出してぶち殺すぞ!!」

「ちよ!! 先輩!! こんな一般の往来でなにいつてんですか!!」

トイレから帰ってきたジョニーが拳銃片手にそんなことを叫んでくるのを聞き、レイジーは慌てて個人用の認識障害をかける。

これでクレイジーなジョニーの発言はほかの人々に認識されなくなった。レイジーはため息まじりに腰を上げ、愚痴を聞いてくれたマリリーに一礼をする。

「じゃあね!! マリリーちゃん!! 僕ちよつと先輩を止めてくるから!!」

レイジーがそう片手をあげマリリーから離れようよしたその時だった、

ガツ!! という音がなりそうな勢いで、マリリーがレイジーの袖をつかみ彼の進行を阻む!!

「え? え? なに!?!」

あまりに勢いよく止められる偽たため、腕の骨がゴキユツ! とちよつとやばそうな音を立てたが、レイジーはもうその程度の痛みには慣れたので、とやかく騒いだりしない。

むしろマリリーがレイジーを強引に止めたことの方が問題だった。

マリリーは基本的に荒っぽいことをしないから、うちの怪物のような止め方はめつたにしないのに……。

レイジーがそう思いマリリーを見つめると、

「なあ……先生。ちょっと話したい事実があるんやけど……」

マリーは青い顔をしながら、ひきつった笑みをレイジーに向けてきた。

「多分……その不純異性交遊の相手、ネギ君と本屋ちゃんやねん……」

「いつ!？」

数分後。幼い少年と生徒の青春を守るため、マリーとレイジーが泣きながらジョニーと戦う光景が京都中で見られたとか見られていないとか……。

……†……†……†……†……†……

メガネをかけた七三分けの青年と、金髪を後ろでまとめた女子中学生が、泣きながら殺傷能力100%の弾丸の雨をよけまくり、トサカの不良教師と戦う光景を見て某有名コーヒーチェーン店でコーヒを飲んでいた白髪少年は思わずこう漏らした。

「ふむ……ハリウッドの撮影かな？」

「いや……どう考えても阿鼻叫喚の地獄に落ちいっとんねんけど……」

車に巨大な風穴があき爆発する。それを見た青年と少女が泣きながら、呆然としているその車の持ち主に土下座するのを見て、少年のブレイクタイムに付き合っていたオツ

「?」

突然廊下から響き渡ってきた苦惱の声に、レイジーは眉をしかめながらその声の方向へと歩き出す。

大方また3—Aが騒いでいるんだろう。まったくあのクラスは……。

おかげで僕が今日一体どれだけ胃に負荷をかけたと……。

若干恨みがましい思考に陥りながら廊下の角を曲がり、苦惱の聲が響いてきた方向に顔を出す。

そこでは……

「だれも僕に告つたりなんか……」

「え!? こゝ、告つた!」

「え——!? それホントネギ君!? だ、だれからされたの!」

なにやらうっかり口を滑らせてしまったネギが、3—Aのメンバー複数に問い詰められているところだった。

「またネギ君の告白騒動か……」

昼間にもそれに巻き込まれてしまった記憶を思い出し、レイジーの体から大量の怒気が噴出される。

そりやネギ君には教師っていう立場があるんだから、それ自体はあまりほめられたこ

とじゃないけど……仮にも彼は10歳。ましてやいろいろいわくがあつて、無理やり教師という立場をとらされたに過ぎない子供だ。多少の青春ぐらいは目をつぶろうというのが麻帆良教員たちの総意だ。

だが、どうやら彼の教え子の何人かはそうではないらしい。

「反応から見ると……どうやらその筆頭はあの委員長みたいだね」

黒い笑顔を浮かべながら、レイジーは慌てふためく委員長に近づいて行つた。

そして、

「委員長？」

「あ、レイジー先生!! 聞いてください!! 教師と生徒の淫行が……」

「ああ……。うん。今朝のタレこみも君だったんだね? もうそれはいいからちよつと

こつちに来ようか?」

「あ、あれ!! 何で首根っこ掴まれているんですの!?!」

「大体噂には聞いていたけど君ちよつと犯罪者臭がするから……。そこらへんも踏まえ
てちよつとOHANASSIしようか?」

「発音が不穏な気がします?」

「大丈夫大丈夫……。これは教育的指導だから。決して僕の私怨とか憂さ晴らしとか関係ないから? ホントだよ?」

「れ、レイジー先生!? なんかに黒いです!! ちょ、あなたたちも助けて……つて、なんで目をそらすんですかあああああああああああああああああ!?!」

先ほど委員長とネギ君の相手が誰なのか騒いでいた面々は、ガタガタ震えながら目をそらし、どす黒い気をまき散らすレイジーの被害を受けないように脱兎のごとく逃げ出しました。

そして彼に引きずられていく委員長に、無言のまま十字を切った後、黙祷を捧げるのだった。

そんな光景を廊下の影から見えていた明日菜と刹那は、

「れ、レイジー先生……色々とまつていたのね」

「ふ、普段怒らない人が怒るとあんなに怖いですね」

「こ、今度からレイジー先生はあんまり怒らせないようにしようね……」

「はい……」

お互いに血の気の引いた顔で視線を交わしながら大きく頷いた。

……†……†……†……†……†……†……†……†……†……

『燃えたよ……。まつ白に……。燃えつきた……。まつ白な灰に……』

レイジーの説教を喰らい、廊下でがつくりとうなだれ正座をさせられている委員長の背中にはそう書いてあった。

そんな彼女に『反省中』の看板を掛けたレイジーは、先ほどより少しましになった顔色でふたたび旅館を巡回する。

昨日の襲撃の件もあるので、この巡回の手を抜くわけにはいかない。

要所所で得意魔法である認識障害の発展系魔法をかけながら、小さな神殿を作り上げていくレイジー。それによつてこの旅館は、麻帆良にかけられた認識障害と同じ効果を持つ力に覆われていく。

ジョニー先輩のしりぬぐいをするために、この魔法だけはぐんぐんスキルが上がっていったからな……。

この魔法の腕が上がった理由を思い出し、目元に心の汗を浮かべるレイジー。実は認識操作系の魔法を操らせれば麻帆良にかなうものがないほどの実力を持つ彼だったが、彼の魔法が使われるのはいつもジョニーが起こした不祥事の後始末の時だったため、その真の実力はあまり正確に認識されていなかったりする。

それはともかく……。

こうして宿全体に認識障害の神殿の設置をすることに成功したレイジーは、一息つきながら近くの自販機でコーヒーを買おうと、その足を玄関近くに設置してあった自販機

コーナーへと向ける。

「あれ？」

しかし、レイジーがたどりついた自販機コーナーの中にはお気に入り銘柄のコーヒーが置いていなかった。

「困ったな……。僕あれじゃないとちよつと落ち着かないのに」

別にコーヒーにそこまで入れ込みがあるわけでもないが、やつぱりストレスをため込んだ胃のためにもいつも愛飲しているコーヒーを彼は飲みたかった。

レイジーはしばらく自販機の前で悩んだ後、

「あ、そうだ。旅館の前にもコーヒーがあつたよね？」

旅館内の自販機より若干高いが、たかだか10円20円の差だ。財布に深刻な打撃は与えないだろう。

「だったら……」

そう思いレイジーは玄関へと足を向け、

見てしまった。

「……」

猫をかばい、魔法を使うことによってワゴン車を吹き飛ばすネギと……。

「……………」

それを玄関の陰に隠れながらしつかりと激写している朝倉の姿を……。

レイジーはその光景を見てしばらく固まった後……。

「あつれ〜。おつかしくなく。疲れて幻覚でも見ているんだろうか？ ははははは。あのネギ君があんなにあつさり魔法バレするわけないしね。うん。きつとこれは悪い夢なんだよはハハハハハ」

もうストレスが限界に来たのか、虚ろな笑みを浮かべながら現実逃避するレイジー。

その後彼は、もう疲れたといわんばかりに部屋にこもり布団の中にもぐりこんだ。

壊れきった笑みを浮かべるレイジーの精神状態が不安になったのか、廊下に放置されていた委員長が『だ、大丈夫ですか？』と声をかけてくるがそんな言葉はもうレイジーには届かない。

こうして、ネギの魔法バレはレイジーの胸の内に秘されてしまう。

そのため、この後起こった馬鹿騒ぎを麻帆良魔法関係者たちは止めることができない

そうして身だしなみを整えたレイジーは、自分の部屋から顔出し廊下で繰り広げられている……

「……………」

「……………あ……………」

3—A六人によるバトルロワイヤルを目撃した。

枕と浴衣で武装した3—Aの生徒六人。長瀬楓、古菲、明石裕奈、佐々木まき絵、長谷川千雨……そして、

「れ、レイジー先生……………」

夕方の説教地獄を思い出したのか、顔を青くして固まる雪広あやか。

レイジーはその6人を見て少しの間固まった後、

「……………何しているんだい君たちは？」

若干呆れをにじませた声色で6人を詰問した。

その時だった!!

「逃げるアル、楓!!」

「あいあい〜」

古菲が突然レイジーに枕を投げつけて逃走!! それに楓が続く!!

「あちよ!?!」

「とういわけなんです……」

「まったく！ 3—Aのバカ娘どもは!!」

ヒーンとロビーで泣きながら正座させられている委員長の悲鳴をBGMに、レイジーと新田は顔を突き合わせて3—Aが何かをやらかしているあたりをつけ作戦会議に入っていた。

「とりあえず今手が空いている先生たちに協力してもらって、3—Aの子たちを捕まえてきます」

「あ、だったら僕も行きますよ新田先生。一応この時間帯は僕が巡回する予定の時間ですし」

ため息まじりに立ち上がる新田を見て、レイジーも思わず立ち上がる。いくら社会人となり教師になったとしても、学生時代さんざん怒られた新田にレイジーはいまも頭が上がらなかつた。

げにおそろしきは学生時代のトラウマだね。と、ややひきつった笑みを浮かべて新田に対して腰が低くなってしまう自分を自嘲するレイジー。そしてその顔は、

「いや……レイジー君、君には」

新田のとんでもない一言によって……

「話を聞いて3—A鎮圧に向かった……ジョニー先生の捕獲をしてもらいたい」

さらにひきつるのだった……。
楽しい楽しい修学旅行の夜が、
血も凍るような恐怖の夜へと変貌した瞬間だった。

16話・修学旅行二日目 恐怖の夜

「落ち着け……。落ち着くんだけレイジー。be COOLだ!! 大丈夫僕ならやれる!!
あの鳥頭が通りそうな場所を正確のトレースし、待ち伏せ。背後から奴の後頭部に必殺の一撃を叩き込めば……。うん。そうだ。自信を持ってレイジー……。僕ならきつと殺れる!!」

「あの……。同僚の方を止めに行くだけですわよね?」

新田に「地獄へ行ってください……。と、同義の指示を出されたレイジーは一人ロビーで頭を抱えながら、対ジョニー用の作戦を練っていた。

……。というかもう、まごうことなき殺人計画だった。

うちの学校……。もしかしていろんな意味でヤバイ? といまさらながら、そのことを悟った委員長こと雪広あやかは、ひきつった顔をしながらとりあえずレイジーにツッコミを入れた。

マリーさん。仕事して……。と、内心で悲鳴を上げながら……。

「ん? ああ、委員長……。いたの?」

「いないと色々問題あるのではないでしょうか?」

一応罰則なわけですし……。という委員長のツツコミを聞いて、「ああ……」そういえば、といまさらながら委員長の状況を思い出すレイジー。

そして、しばらく委員長を見つめた後……。

「ねえ……委員長。マリーちゃんの居場所って知ってる？」

「え？ マリーさんの部屋なら知っていますけど……」

「ちよつと案内してくれない？ イロイロな意味で危険人物を捕まえないと……さらにイロイロな意味でまずいんだ」

『『イロイロ』言いきな気がしますが……。ちなみにどれくらいヤバイんですの？』

「某魔法少女がバインドというダメ押しをかけて「すこし……頭冷やそうか？」と言って天地魔闘の構えをとっている時ぐらいヤバイ」

「それもバッドエンド一直線ですわよ!？」

どうやら委員長は、管理局の白い悪魔を知っているっぽかった。

……†……†……†……†……†……

「いませんわね……」

「どこ行ったんだらうね？」

というわけで、委員長の罰則を超法規的措置で解除したレイジーは、委員長の案内に従いマリーたちが止まっているはずの部屋へとやってきていた。

しかし、そこにいたのは……吸血鬼のくせに何故か爆睡しているエヴァと、自動人形然とした雰囲気で服の下から伸ばしたコンセントをつないで目を閉じている茶々丸。そして、寝ているエヴァの上に正座で座り込み、何やら怪しい中継をしているテレビのほうを見ながら、目をかつびらいたまま鼻提灯を出しているザジだけだった……（下にいるエヴァはどうやらうなされていようで「ううう。なぎくやめろ。そんな、三メートルもあるにんにく持てるわけないだろう」とか言っていた。いったいどういう夢を見ているのか非常に気になる……）。

「まあ……理由は大体予想がつくけど……」

大方ネギ君と一緒に襲撃の警戒にでも当たっているんだろう。

だが……。

「ああ……どうしよう。ホントこれ死んだかもしれない……」

「何度も聞きますけど、御同僚の方を止めに行くだけなんですわよね？」

「委員長……この夜が終わったら、この手紙をモモちゃんに……」

「変な死亡フラグ立てないでください!？」

結局目的の人はいなかった部屋を後にしながら、二人がそんな雑談を交わしている時

だった。

「あ……委員長さん。レイジーさん」

「あ」

「ね、ネギ先生!!」

二人の目の前に、何故か目が若干死んでいるネギが現れた!!

「あれ? ネギ君? 君マリーちゃんと一緒に警備に出てたんじゃ?」

「なっ!?! ま、マリーさんがネギ先生と二人つきりで……あんなことやそんなことを!?!」

「委員長……ちよつと黙ろうか?」

あと耳鼻科言ったほうがいいよ? 顔を真つ赤にして怒り狂う委員長に三白眼を向

けながら、レイジーはネギと目線を合わせるように身をかがめた。

「で? どうしたの……はっ!?! まさか、もうすでにジョニー先輩の被害を!!」

ネギが涙を流しながら、壁に巨大な穴をあける弾丸から逃げ回っている光景が、はつきりと思い浮かんでしまい、レイジーは思わず真つ青になった。

しかし、

「いいえ……」

事態は、

「今から僕は」

「？」

レイジーの、

「レイジー先生とキスをします」

「はあ？」

度肝を抜く方向へ転がっていく……。

……†……†……†……†……†……†……

その頃の悪役たち……。

「ちよく!! 自分ら……ノンビリしてんと、コタロー風呂に入れるん手伝ってーや!!」

「ちよちよ……千草ねエ、シャンプーのあわ目にはいっとる!!」

「うっさいな! 黙って洗われときっ!! ホンマなんや臭うおもたら、一週間も風呂入ってへんとかどういいう神経してんの!?!」

「俺は狗族やから、水にぬれるんが苦手なんや!!」

「はいは〜い。それ関係ありまへ〜ん。犬でも泳ぐのが好きな奴はおるんです〜」

「そんな人間が勝手に思ってるだけやろ!?! 泳いだる犬も実は「ちっ……勝手に水中に放り込みよって……。餌もらえるから仕方なく泳いだるけどな、いつかしばくぞハ

「ゲ」か思つとるわ!!」

「ちよ!!」 犬のイメージ壊れるようなこと言うのはやめてえや!!」

風呂場からギャーギャー聞こえてくる言い争いを完全に無視しながら、休日のオツサンよろしくごろんと寝転んだ安川父は、テレビをみており……引きこもり少年っぽい雰囲気を出したフェイトは、ネットサーフィンをしていた。

ここは天ヶ崎千草が借りて住んでいる小さなアパート（いまだき陰陽師では食っていないのだ……）。ILDKとかなり狭いこの部屋に計画実行メンバーがのんびりとした感じで集合していた。

今日の襲撃はお休み。イロイロとチームプレーが乱れてしまった一味の仲間意識を強めるため、お泊まり会を実施中だった。

ちなみに、二刀の神明流剣士月詠は、しばらく前までは、昨日のうちに隠し撮りしていた桜咲刹那の写真を「ハアハア」と鼻息荒く眺めていたが、

「ああ……あかん。もう我慢できひん……ちよつと抜いてきます」

とかいつて、どこかへ行ってしまった……。

極力関わり合いになりたくない空気を発していたので、だれも止めることはなかったという……。

まあ、そんなこんなで修学旅行組とは違い、平和な夜を過ごしていた襲撃組。

そんな時、突然安川父に向かいパソコンの電源を落としたフェイトが突然話しかけてきた。

「なあ……安川」

「ああ？　なんやフェイト？」

珍しく自分から話しかけてきたフェイトに若干驚きながら、安川父は身を起こす。

「僕もそろそろ……苗字がいると思うんだ」

「？　苗字って……アーウエルンクスちゃんかい？」

「違う……。あれはシリーズ名だ。あと僕はあの名前が嫌いだ……」

表情を動かさないフェイトが、珍しく眉にしわを寄せてそう言ったため、真剣に嫌なのだということを安川父は理解した。

「ほんで？」

「だからちよつとネットでかつこいい苗字になりそうなのはないかなと調べていたんだが……」

「お前そんなん調べてたんか……」

てつきり計画のことでも調べてたんかとおもたで……。

あきれた霧囲気を出す安川父を無視し、フェイトは先ほど印刷したウイキペディア先生のあるページを安川に見せつけた。

「これ!! 僕の名字はこれがいい!!」

「どれどれ……」

そして、そのページを見て、

安川父は固まった……。

それはとある車を解説したページで……。

「意味は全然違うけどなんかいいだろ!? 語呂的な何かがいいだろ!? だから僕は今日からフェイト・テストタロ……」

安川父は最後まで言い切らせなかったという……。

「いろんなところから苦情来るから……お願いやからやめてください」
こうして、フェイトの名字補完計画は夢物語として終わった……。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

「レイジー先生とキスをします」

ネギからの衝撃の告白から数秒後……。

「ふ……」

「ふっ。」

かわいらしく首を傾げるネギに、背後から立ち上るヤバい感じの闘気……それを感じて恐れおののくレイジーという図が、そこにはあった。

「ふざけるんじゃないですわああああああああああああああああああああ!!」

委員長火山大噴火の瞬間だった。

「どどどどどどどど、どうして、私じゃなくこんなさえない地味でさえない男にキスの申し出をしていらつしやるのですかネギ先生!!」

「委員長……ちよつと後でお話があるよ?」

さすがにそこまで言われて怒りを感じないレイジーではなかったが……。

「くっ!! ま、まさか男に……男に負けるだなんて……納得いきません!!」

まあ……委員長の気持ちもわかる。正直僕も相手がネギ君じゃなかったら、相手を正気に戻すために思いっきり殴りつけているもん……。

鬼子母神どころか阿修羅のごとく怒り狂う委員長に、レイジーはやや引きながら思わず後退する。

「今の私は……阿修羅すら凌駕する存在です!!」

「自分で言っちゃったよ……」

「決闘ですわレイジー先生!!」

!!

だが、敵もさるもの。

レイジーたちが転がったように見えた方向に銃口を向けることなく、実際レイジーたちが飛びのいた方向へと銃口を向けてくる。

「くそっ!!」

再び発動されるレイジーの魔法。今度は不可視の魔法障壁。

認識阻害に比べるとはるかに劣る腕前ではあるが、それでも普通の魔法使いと比べると一級品とっていいほど強固なそれらが、まるで城壁のようにレイジーたちの前展開された!!

これで何とかしのげるか!?

レイジーが冷や汗を流しながら、床に転がった瞬間に敵の銃の引き金が引かれた!

ドンっ!!

腹に響く大砲のような音。それと同時に射出されるは、死の音楽を奏でる螺旋回転をする弾丸。

空間に螺旋の衝撃波を刻みながら飛来するそれは……レイジーの張った障壁をやすやすと食いちぎった!!

「っ! まだだ!!」

まだ障壁は残っている！

レイジーの叫びとともに弾丸は二枚目の障壁へと食い込み……破壊。

三枚目……破壊。

五枚目……破壊。

八枚目……破壊!!

次々と粉碎されていく自分の障壁に、ダラダラと冷や汗を流しながらそれでもレイジーは弾丸から目をそらすことはなかった。

そして……障壁が20枚目に到達した時、ようやく弾丸は動きを止めた。

「っ!!」

しかし、レイジーは油断しない。彼は即座に委員長を抱えたまま床を転がり廊下の角へと転がりこみ、その身を潜ませた!!

瞬間！ レイジーの障壁がダメ押しとばかりに放たれた連射された三発の弾丸によつて、完膚なきまでに打ち砕かれる!!

「ちよっ!!? なんか小説が違いますわよ!!?」

「委員長!! 今はメタなネタやっている場合じゃないから!!」

しかし、その時レイジーは気づいてしまった。委員長が突然今までのふざけた（彼女はいたって真剣だったのだろうが……）雰囲気をし、ある一点を凝視しながら固まっ

に脳みそをスカスカにしたわけではないようだ。

だが……。

「危機は去っていないんだよね……」

あのとさかの鳥頭のことだ。式神の見分け方なんて微塵もわからないだろう。だったらどうするか？

答えは簡単だ。ネギ君に出会ったら遠慮なく脳天をぶち抜けばいい。それで式神になつたら偽物。ならなかつたら本物だ。

信じられないかもしれないが……あの敵はそれを遠慮なく実行するだろう。

危険だ……。ダラダラ流れ出る冷や汗を止めることなくレイジーはそうつぶやく。

ただでさえ敵のターゲットにはバカ騒ぎをしている3-Aメンバーも含まれているというのに、その上ネギまで守らなくてはいけなくなつた。だが、そんなこと知らない敵は待つてはくれない。下手をすればこの修学旅行……惨劇の夜となつて終わる。

正直僕一人じゃ手に余る。桜咲さんたちにも力を借りようか？　と思つたレイジーだが、考えてすぐに首を横に振り、自身の考えを否定した。

無理だ。あの子たちはただでさえ戦力不足の状況でプロを相手に戦つて木乃香ちゃんを守っている。年上として教師として、これ以上仕事を押し付けることはできない。だが、だったらどうする？

教師のレイジーも実は魔法使い。

そして、ネギ先生は魔法美少年（超重要）。そして先ほど見たネギ先生の偽物は実は関西の魔法使いたちが放ったと思われる刺客で、その見分けがつかないからあの銃撃教師がネギ先生ごと殺しかねない……と。

正直に言おう。誰が信じるんだそんな話。と、委員長は思った。

だから委員長は、毅然とし態度でレイジーを睨みつけ、

「ぜひともあの人の捕縛に協力させて下さい!!」

力強く言い切った。

……いや。だってねえ。ネギ先生の危機って聞いたらいてもたってもいられませんもの。たとえその話が妄想臭くたって、確かに先ほど銃撃受けたし。ええ、修学旅行の平和のためにも、ネギ先生の平穩の為にもあんな危険人物には沈んでいただかなくては いけません。

そ、それに……これを機に魔法を知った私はネギ先生と急接近！ フラグですわね!!
わかります!!

そんな下心を滲み出しながら、頬に両手をあてクネクネともだえる委員長。正直レイジーはそれを見て「人選ミスったかな……」とつぶやくが、あいにくとネギとの妄想空間に入っている委員長には届かなかった。

「で、いったい私は何をすればいいんですの!!」

「うん。とりあえず、魔方陣を敷くから僕とキスして仮契約を……」

「フンっ!!」

レイジーの顎を雪広あやか流合気柔術・天地分断掌が襲った。

「ちよ……委員長。ツツコミにしてはテンションが低い……」

不意打ちを食らったためかなりダメージが入ったレイジー。口の端から血を流しながら取りあえず弱々しい抗議を試してみる。

「まさか中学生に手を出すとは。レイジー先生変態だったのですね……」

「君にだけはいわれたくない……」

ぎりぎり歯ぎしりするレイジーを絶対零度の瞳で見る委員長。計画は発動前から困難を極めた……。

「でも……そっちの方が魔力供給楽だし、これ終わったら契約切るからそこまで過剰反応することないよ? 最悪血液でキスの代用をしてもいいし」

もつとも、この血液契約は物質的なつながりだけをつなぎ、魔法で重要視される心理パスが若干甘くなるので魔力供給の効率がかなり下がるのだが、まあ、今回は最低限の防衛力と身体性能を発揮してくればいいので、レイジーはそれで妥協することにする。

「いやですわ……。血液で契約を交わすなんて、なんか呪いみたいじゃないですか」
「……」

しかし、委員長はしつかりと断った。どうすりやいいのさ……と、レイジーは思う。
「ちなみにネギ先生に頼まれたらどうする?」

「血液だろうが、ファーストキスだろうがすべてをささげて見せますわ!!」

「……」

レイジーはちよつとだけ泣きたくなったらしい……。

……†……†……†……†……†……†……†……†……†……

「仕方がない……。論点を変えよう」

「どうするんですの?」

「力が足りないなら防御を固めればいいじゃないか!!」
「?」

首を傾げる委員長に、レイジーは一つの魔法具を渡した。

「これは……」

「僕謹製の障壁の腕輪。これは相手の攻撃のオートで反応して数百枚単位の多重障壁を

張るものなんだ。まあ、一回限りの使い捨てだからコストパフォーマンス悪すぎて作るのやめちやっただけど……」

「そんな貴重なものを私に？」

くれても大丈夫なのか？ と首を傾げる委員長をさえぎるように、レイジーは手を突き出した。

「委員長……これを渡すということは、つまりそれだけ危険な目に合うってことなんだ」
「……」

ゴクリ……。レイジーが今まで見せたことのない真剣な表情をしていることに気がつき、委員長会思わず息をのむ。

「それさえあれば先輩の弾丸は何とか防げる。だから君は作戦開始と同時に全力で先輩の懐に走りこんで、先輩をさっきの合気柔術で倒すんだ！」

レイジーが言う倒すとは《戦闘で敵を倒す》的な倒すではなく、引きずり倒す系の倒すだ。

それによりある程度の行動を阻害さえしてくれれば、あとはレイジーが何とかできる！

「ほんと気を付けてね!! 殺されそうって思ったらすぐ逃げてね!! 泣いて謝ってもあの人のことだから嬉々として撃ってくるからね!! いいね!? わかった!!」

「あの……何度も何度も聞きますが、その人教師なんですわよね？」
何度も何度も念押ししてくるレイジーの姿に、委員長は若干ひいたという……。

……↑↑↑……………↑↑↑↑↑……

それからしばらくして、ジョニーをフルボッコにするための罠をレイジーと一緒にりに来た委員長は、旅館の床に取り外し可能なビニールテープで魔方阵を敷いていくレイジーを「そんなもんで魔法使えるんですか？」と胡散臭いものを見るような瞳で見えた。

「それにしてもごめんね委員長……。こんなことに巻き込んで」

「いえ、気にしないでください。ネギ先生の為です」

「……うん。その言葉を聞くとほんとにお礼を言うのが馬鹿らしくなるよね？」

「いったい何歳離れていると思ってるのさ？ 愛に歳の差は関係ありませんわ。と、そんなバカバカしい言葉を交わしつつ、レイジーは着実に魔方阵を完成させていく。

「大体……皆さん犯罪者犯罪者と言われますが、私のネギ先生に対する愛は限りなくピュアな愛ですわ!! 男の汚いロリコン趣味と一緒にしないでください!!」

「ええ〜」

「なんですかその明らかに信じられないといった顔は!?」

だつて君、言動と行動が一致してないじゃないか……。と、レイジーは心の中で漏らす。おかげで今日自分がどれだけ苦労したと思つてゐるんだ……。と。

「おまけにこんなバカバカしい行事にも参加してゐるし……。なんなの君たち? 10歳の子供の唇を喧嘩してでも奪いあうつて、バカなの? ショタコンなの?」

「失礼にもほどがありますわよレイジー先生!」

レイジーの言葉に縦線を入れながら、ツツコミを入れた後、

「わたくしはあくまでネギ先生の貞操を守るために参加したのですわ! キスなんでものはみじんも興味がありませんの!!」

「へ〜」

もう白々しいほど、信じていないレイジーの相槌が入り委員長は若干ひるむ。

「くっ……。それに、先ほども言ったように私のネギ先生に対する愛は限りなくピュア! プリキュア並みのピュアハートですわ!!」

「その例えはさすがにどうなんだろう……」

いろんな業者から苦情が来そうだけ……。レイジーはそうツツコミながら魔方陣を張り終え、「確かこの辺に……」とつぶやき懐から何かを取り出す。

「それに、私はどちらかという……姉? いえ……母!! みたいなポジでネギ先生を

見守りたいのであって、決して異性としてどうこう言うつもりは……」

「委員長。ちよつとこれ見てくんないかな？」

「っ!？」

そして、レイジーは自分の懐から取り出したものを委員長に見せつけた。

それは昨夜、とあるオコジョが「コアなファンに売れるぜ……」とほくそ笑みながら盗撮していたのを、レイジーが没収した……ネギ先生の、入浴写真。

数秒後。レイジーは鼻血で人が空を飛ぶ歴史的瞬間を目撃し、全財産を支払ってでもその写真を買い取ろうとする変態を何とかあしらいなから、

「ダメだこいつ……早く何とかしないと」と、何度もつぶやくのだった。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

ジョニーは魔法によつて強化された脚力を使い、廊下を爆走していた。

今夜は獲物の多い日だ。彼は内心でそうつぶやきながら、確かに笑う。獲物を狙う肉食獣の瞳で……嗤う。

バカ騒ぎしている3-Aの武力による鎮圧。そして、おそらくネギのダミーを大量に

「ああ？」

ジョニーはその人物を認識し、少しだけ眉をしかめる。

こいつは確か、先ほど新田のクソジジイにつかまって正座させられていた3—Aの委員長……名前は、雪広あやかだったか？

こいつ、委員長のくせに罰則から勝手に抜けだしてきたのか？ いい度胸してんじゃねえか……。俺も昔は新田相手にいろいろやったもんだぜ……。と、若干過去を懐かしみ、委員長のことを見直しつつ、

「しるかよ。死ぬ」

安全装置を完全に外した銃口を平然と向け、引き金をあつさりとはひく！

彼にとって生徒の粛清は、もはや呼吸するのと同義。たとえその生徒に感心したとしても粛清しないということには決してならない！

だが、そんなことは委員長を送り込んだ人物は百も承知だったようだ。

「!？」

ジョニーが次に見た見た光景は、自分が放った弾丸に何ら怯えることもなく突っ込んできた委員長の姿だった。

それと同時に、いつのまにか彼女が身に着けていたブレスレットが光り輝き、彼女の目の前に数百枚近い障壁を展開する!!

「っ!! レイジー………テメエか!!」

その障壁を見た瞬間、《認識制御》や《多重障壁》といったいやらしい魔法で自分の肅清を妨げる後輩の顔がジョニーの顔に思い浮かぶ。

そう言えば先ほどの方陣もどことなく後輩の癖が残っていたような気がする。まさかこんな素人相手に仮契約したとは思えないが、かなり強力な自作魔法具を渡していることは先ほどの障壁展開でわかる。

額に青筋を浮かべ怒声を上げるジョニーだが、委員長はそんなジョニーを気に留めることなく突撃を続けた。

弾丸が障壁に食いつき、先ほどと同じ光景が展開される!

凶悪な破壊力と、規格外の大きさを持つ弾丸は再び魔法具の障壁を信じられない枚数食い破るが、それでも多重障壁によって相互強化されたレイジーの障壁をすべて破壊するには至らなかった。

空中で止まる弾丸。それを弾き飛ばしながら前進する委員長の目の前にはまだ相当の数の障壁が残っている。

「ちっ」

障壁に物を言わせた体当たり狙いか? ジョニーはそうあたりをつけ銃の弾倉を召喚魔法で呼び出しつつ、二歩ほど飛び跳ねるように後退する。

障壁とは本来攻撃を受け止めるのではなく、ねっとり絡みつき減衰させるためのものだ。だが、あの後輩は長年自分の弾丸を止めつづけたせいか、やたらと固い障壁を張るようになった。

それを使って攻撃することにより、女子&一般人の為気力や魔力が使えない……といった、攻撃職不足を補う気なのだ。とジョニーは長年一緒にやってきた相棒の思考回路をそう読む。

だが、頭脳戦においてレイジューはジョニーの何枚も上手だった!!

「残念でしたね先輩。捕まえましたよ!!」

「っ!」

突然聞こえたレイジューの声にジョニーが目を見開くのと同時に、彼が見ていた景色が一変した。

ジョニーの目の前にはまだ数メートルは距離があつたはずの委員長が出現しており、彼の足を払い、手刀によって体勢を崩させまるで合気道のようにジョニーの体を宙に浮かせていた。

雪広あやか流合気柔術。雪月花!

まるで地獄から響き渡ってきたかのような怒声を上げつつも、ジョニーはあっさりとお捕縛魔方阵につかまり、ダメ押しとばかりにかけられた儀式転移によつてはるか彼方へと飛ばされた。

こうして、麻帆良の修学旅行は平和を保たれたのだった。

《後日談》

超危険分子の排除に成功し「今日から普通の修学旅行だ!!」と、レイジーが泣いて眠りについたり、

3-Aが新田により鎮圧され、クラス全員でロビーでの正座をさせられたり、

結局ネギの唇は原作通りに宮崎のどこによつて奪われ、委員長が発狂しかけたりした

……

その翌日。

朝早くに扉がノックされる音を聞き「こんな早くに……誰?」と、眠たい目をこすり、若干不機嫌そうな雰囲気垂れ流しながらドアを開けたレイジーは、そこで信じられないものを目にした。

「……なんで、忘れていないの?」

「愛の力ですわ!!」

ジョニーとの戦闘で精神的にかなり負荷をかかっていたレイジーだったが、仕事は忘れていなかったのかジョニーの撃退に成功した瞬間に、委員長に当て身を当て即座に気ぜつさせ記憶消去の魔法を施した。当たり前だ、彼はふつうの魔法先生。魔法の守秘義務ぐらいは守る。

今回の雪広あやかを巻き込んだ件は、超法規的措置みたいなものでほんの少しだけ記憶消去をかける時を先延ばしただけなのだ。

ただ、だからこそ、彼は委員長に変な後遺症が残らないように慎重に、かつ二度と魔法について思い出さないように入念に記憶を改ざんした。洗脳じみて嫌なため、あまり使わない十八番の《認識制御》すら駆使してまでも……だ。だというのに、

「せっかくネギ先生との重要な糸が繋がったのに、それを逃すなど神様仏様が許してもこの雪広あやかが許しませんわ!! さあ、レイジー先生!! 私に魔法を教えてください!!」
そして、強くなった私はピンチのネギ先生の前にさっそうと現れますの! 『助けにきました! ネギ先生!!』そんな私の健気な姿を見て、ネギ先生はわたくしの虜に……ああん。そんなネギ先生……まだそれは早いすわ」

最終的にどこか遠いところに行って悶えている委員長をみて、レイジーの脳裏にこんな思考がよぎる。

《悪霊よりもたちの悪い存在に憑りつかれた……》と……。
レイジーの明日は……オコジョか？ 魔法先生か？ どっちだ!!

17話・修学旅行三日目 厄介な依頼

安川マリーはのんびりと朝食をほおぼりながら、じつとある光景を見ていた。

「ん？ どうしたマリー？ なんかつたか？」

「いや……」

隣で焼き魚を食べていた長谷川千雨にそう尋ねられても、上の空といった様子でとある一点を見ていた。

視線の先にいるのは苦勞人ことレイジー先生。そして、

「師匠、ご飯のおかわりはいかがですか？」

「……」

「あら師匠！ こんなところにご飯粒が!!」

「……」

「師匠!! 今日の修行はいつたいいつにしたしましょう？」

「……」

なぜかレイジーの世話をひたすらに焼きつつ、チラツチラツと擬音が聞こえそうなわざとらしい視線をネギに向けている委員長だった。そう、まるで「修行ってなんなん

すか？」とネギに聞いてほしいといわんばかりに……。

まあ、それはいい。いや、シヨタコンの委員長がシヨタではないレイジーの世話を焼いているという事態はかなり異常なのだが、まあいい。修学旅行の空気が何らかの化学反応を起こして委員長を発狂させた可能性がある。

問題なのは、それを受けているレイジーの姿だった。

やつれている……。それも、物凄く。

なんかもう、ちよつとした拍子にミイラになつていまうんじやないかというほどのやつれっぷりだ。

昨日の晩バカ騒ぎがあつたんはしつとるんやけど、その時になんかあつたんやろか？と、マリイは思考する。大方ジョニー関連だとは思うのだが、それだと委員長の態度が納得いかないし……。

マリイは必死に無い知恵を絞り状況の解析を行ったあと、

「まあ、ええわ」

「マリイ……。何を諦めたのかは知らないが、私の直観が、きつとそれで不幸になる人間がいるつて告げているんだが……」

結局結論を出す前に諦めてしまったマリイの言葉を聞き、長谷川は顔をひきつらせながらそうつぶやくのだった。

いろいろの場所から湧き出るカエル。大量のカエルが詰められた落とし穴。こっそりとお神酒を混ぜられた滝。

「……」

トイレに拉致られた猿女。頭にたんこぶピラミッドを作りぶつ倒れる自分の父……。

「なあ……セツナン」

「はい？　なんですかマリーさん？」

一通り襲撃内容を思い出したマリーは、三白眼になりながら刹那に視線を向ける。

「あれ相手にシリアスになっている私らって……実はものすごいカッコ悪くない」

「「……………」」

マリーの気がついてはいけない事実の指摘に、今まで襲撃に対処してきたネギ・明日菜・刹那はピシッと氷結し、

「マリーさん」

「マリー」

「マリーさん……」

同時に、絞り出すようにこうつぶやいた。

「「言わないでください……心がへし折れます」」

「ああ……なんか、ゴメン」

何度も何度も言うようだが……マリーは犬神によってネギのアシストをするように指示されている。当然その中には魔法ばれ防止も入っているわけで……。

「アカン……このまま修学旅行を続けたら、私犬神君に殺されてまう!」

「マリー……否定できないからやめて」

「アプブブ。もうすでに朝倉さんにバレちゃってますし、そのことがばれたらもう本気で……」

命の危機!?! 犬神の恐ろしさを知るマリー・明日菜・ネギたちは顔を見合わせてガタガタと震える。

そんな三人の態度に、刹那は顔に縦線を入れながらドン引きした。

「いや……さすがにそれは言い過ぎでは?」

「せつちゃん……あの三人何であんなにこわがってるん?」

「お嬢様……。世の中には死んだ方がましと思うほどの制裁を加えてくる存在がいるんですよ?」

「地味にセツナンもそうおもっとるんやんか!」

「セツナンいうな」

ギャーギャー内輪でもめはじめる魔法組に、好奇心旺盛なハルナが話しかけてきた。

「なにになに? 何の話?」

「ああ……修学旅行から帰った後、マリーの雇い主さんに怒られないためにはどうしたらいいか話し合っていたところよ」

「雇い主さんってあのメガネかけた目つき悪い男子？」

「い、犬神さんでしたっけ……」

「のどか、知り合いなのですか？」

それに乗っかるように会話に入ってくる夕映やのどかに、明日菜とマリーはため息をつきながら肩をすくめた。

「ちよつとネギ関連でマリーが仕事言いつかっていてね……」

「このままやとその仕事失敗しそうやから、若干へこんでんねん」

「修学旅行に来てまで仕事ってどんだけ仕事熱心なのその人？」

「仕事熱心というか……」

金の亡者なんやけどな……。マリーがそう言いかけて顔に苦笑を浮かべかけたときだった。

突然マリーの携帯がけたたましい音を立ててなりだした!!

「ん？ 誰やこんな時に……」

エヴァちゃんか千雨かいな？ この場にはいない自分の友人たちの顔を脳裏に浮かべながら、マリーはポケットから携帯を取出し、

「!?」

氷結した。

「ん? どうしたのマリー?」

恐怖の表情を浮かべるマリーに気付き、ハルナは不思議そうに首をかしげながら近づいてくる。ほかのメンバーも大体似たような感じの反応を示した。

しかし、違う反応を示した人間があと二人いた。

ネギと明日菜だ。

彼らはマリーのただならぬ様子に何かを感じ取ったのか、ツツツ……と冷や汗を流しながら一歩二歩と後退し、

「い、犬神君からや……」

その名前を聞いた瞬間、脱兎のごとく逃げ出した!!

『とてつもなく失礼なことをされた気がしたのだが……気のせいだろうな、安川?』

「ああ……。き、気のせいやで!! 気のせい!!」

数分後、泣き叫ぶ二人をとらえて何とか連れ戻したマリーはひきつった笑顔で、電話の相手に言葉を返す。

というか犬神君の携帯電話、国際電話機能あったんやったんやな……知らなかったわ。と、妙なところで感心しつつマリーは電話相手の用件を聞くことにした。

ま、まさか朝倉にバレたところはバレてへんやろうけど……。マリーが犬神に聞こえないように生唾を飲み込み、明日菜とネギが地面に跪き神様に助けをこう。

そして、

「そこまでこわがられる犬神さんっていったい……」

「え？ 鬼畜外道ですけど？」

「せつちゃん……」

「それは社会的に存在を許されていい人なのでしょうか？」

「あわわわわ……。そ、そんなに悪い人じゃなかったような？」

「「本屋ちゃん（宮崎さん）……脳外科行つて!!」」

『どうやらワイハーから帰ったらO☆H A☆N A☆S H Iの必要があるようだな?』

別にバレなくても死刑宣告は受けなければならなかったらしい……。犬神の最後通告を聞き四肢を地面につく三名。

そんな彼らをしり目に、電話越しに犬神はとんでもない言葉を言い放った。

『それより安川。野菜も神楽坂もいれば遺伝子の神秘的近衛の護衛は十分だろう？ だから貴様には違う仕事を頼みたい』

のやかラ、見つからなくても文句いわんといてや?」

『馬鹿もの……それを何とかするのがプロフェッショナルだ。僕の助手ならそのくらい
の逆境ぐらいいはねのけろ』

「いや……そんな無茶な」

京都がどんだけの広いとおもてんのよ……。マリীরその反論が紡がれる前に犬神
の声が重なった。

『師匠にも言われただろう? おまえはマゾに……Mになるの……』

「ふんっ!!」

携帯を地面にたたきつけて強制的に会話をたたき切ったマリীরは、犬神の口から出た
師匠ごと、自分の父親の顔を思い出し額に青筋を浮かべる。

ほんまあの腐れ親父が……。まだ木乃香をねらつとるんやったら今度こそ血祭りに
したるわ……。と、内心で気炎を上げながら。

そんな時だった。

「マリীর? こんなところでどうした」

「今日はネギ先生と一緒に木乃香さまの護衛をするのでは?」

話しかけてくる人物が二人いた。

「あ。エヴァちゃんに茶々丸さんやん? どないしたんこんなところで」

「こんなところでも何も……ここはもとより私たちが来る予定だった映画村だぞ？」
「え？」

マリーが視線を上へと向け、あたりの様子を確認するとそこには確かに映画村の看板が。

「いつの間にこんなところにきとつたんや……」

「というか……旅館からふらふら歩いてここまで来るおまえの脚力が気になるんだが」

どう考えても間に瞬動使っているだろ……。そんなエヴァの突っ込みにアハハハと笑いながらマリーはとっさに目をそらす。

そ、そういうえば何かでかいブレーキ音やら走行音が聞こえたから、縮地つかって一気に距離稼いだ気が……。

携帯片手に歩いたところで危険はないが、どうやら交通機関に多大な迷惑をかけていたりはしたらしい。

「後でレイジー先生に連絡入れて認識改ざんしてもらわな……」

「お前がいったい何をしたのかは気になるが……まあ、友達のよしみで聞かないでおいでやる。それよりマリー、お前は どうしてこんなところにな？」

「いや、それがな？」

エヴァにそう尋ねられマリーは今までの事情を事細かに話し出す。別に隠すこと

もないのでかまわないだろうという判断をしてだ。

だが、その時マリイは予想だにしていなかった。

マリイが出した菊池のお嬢様の写真を見て、

「ああ……。そいつならさつき映画村に入ってたぞ？」

「へ!？」

エヴァから信じられない情報が告げられることなど……。

……†……†……†……†……†……

エヴァから情報をもらい映画村に入ることになったマリイは、昔の衣装を着てにぎやかに歩く人々を眺めながら、ターゲットがいないか気を配っていた。

「菊池商会……? おいまさか……」

そんなマリイと一緒に付いてきたエヴァは、マリイに渡された写真とプロフィールを見て眉をしかめる。

「ははは……。説明するまでもなく『コッチ』関係のお嬢様や」

マリイがほほを斜めに走る傷を表すかのように親指を下に振るのをみて、エヴァは三白眼になった。

「ヤクザの娘か……。なんでそんなのがまた家でなんか。まさか親に暴力をふるわれて
いるとか?」

「いや、それは一回目にこの依頼を受けた時に犬神君に聞いたんやけど、『あり得ない』
やって。なんでも『悪いことはしてるけど……。悪い奴らではない』やって」

「なんだその矛盾は」

エヴァと茶々丸は主従そろった動きで小さく首をかしげた。

……+……+……+……+……+……

その頃の菊池商会では……。

「くみちよおおおおおおおおおおおおおおお!! なんでまた俺たちにお嬢を探しに
行かせてくれないんすか!?!」

リーゼントのチンピラが血の涙を流し悲鳴を上げ、

「くつそ……この前お嬢をトランクに詰めてきたクソ野郎にまた頼むなんて……。何考
えてんだオジキいいいいいいいいいい!!」

眼鏡をかけた理知的なイケメンヤクザが、血を吐きながら床をのたうちまわる、

「組長! 今からでも遅くありません!! おれたちも一緒に京都へ!!」

そして、筋骨隆々とした大男が、血の涙を流しながら壮年の男に向かって叫んだ。

「やかましいわああああああああああああああああああああああああああああ!! 京都なんて遠すぎるだろうがああああああああああ!! それにてめえら、行っている間の仕事どうする気だ!!」

そんな情けない部下たちの姿を見て、豪華な机に座りふんぞり返っていた壮年の男……菊池組組長は怒声を上げた。

「「んなもん! お嬢に比べたら塵芥つす!!」」

「はあ食いしばれえええええええええええええええ!!」

声をそろえて言いきった流血トリオに、鬼の菊池の鉄拳が飛んだ。

数分後。

「だいたいテメエらはガキ一人いなくなつたぐらいでギヤースカ騒ぎすぎなんだよ。対処はプロに頼んだんだ。また無傷でかえってくるだろうさ」

「そんなこと言つて!! お嬢のこと心配してんのはわかつてんだからね!!」

「ツンデレもたいがいにしてくださいよ組長!!」

「このシャイボーイ!!」

今まで向けられたことのない類の視線を向けられ、若干ひるむエヴァをしり目にマリーと茶々丸はひそひそと会議を始める。

『やはりここは蝶ネクタイ型変声機……』

『いえいえ……追跡眼鏡をも捨てきれません』

『ボードなんてええな……。ああ、でもここ映画村やから近代コスプレないんやつた』
『では妥協案としてコナン君のご先祖様のコスプレを……』

『それももう限りなく、ただの昔の一般人だろうが!!』

そんな不穏な会話が聞こえてくるのを見て、何やら大切なものを失いそうな気がしたエヴァはあわてて二人の間に割って入った。その時！

「あ?」

「ん? どないしたんエヴァちゃん?」

「マスター。町娘がいやなら大奥の衣装を頼んできますか?」

「あんな動きにくい服誰が着るか!! じゃなくてあれだポケロボ! マリー!!」

エヴァが指さした先には、

「あ……」

遊女のコスプレをした、マリーが持っていた写真に写っている少女が立っていた。

搜索中の家出娘……菊池サヤカ嬢その人だった。

……を」

マリーの警戒心むき出しの忠告を、エヴァは苦笑交じりに否定しようとお嬢様の方へ視線を動かし、

固まった。

「いや〜ん」

そんなふざけきつた、拒絶の言葉を言いながらひじをわきにつけて手を振る……いわゆるお嬢様走りと言われるはしり方をするその少女の速度は……軽く瞬動に匹敵していたからだ。

「は？」

なんだあの理不尽？ 初等部のグラサン不良教師でも魔力によるアシストがあつてあの速度を出せているんだぞ?! と、そんな今までの魔法に正面からケンカ売っているとしか思えないその少女の速度に、エヴァはカクンと口を開き間抜けな表情を晒しながらマリーの方を見る。

「あ……あれは？ 人間？」

「疑問に思つてるところにこの事実を告げるんは申し訳ないけど、気の強化すらしてへんからな。あれで……」

「な……なんだそれ?! ニュータイプか？」

そのころの原作組は……。

「お嬢様!! こちらに!!」

「あつ! せつちゃん!」

「ちよ!! すごつ!!」

「とうか……入場料払えです」

木乃香を抱えて大跳躍をかます刹那を、パルと夕映が呆然と見つめるているなか、電柱に立った人影は不吉な笑みを浮かべながらその光景を眺めていた。

「映画村……おもしろいところに逃げはつたなく刹那先輩は。仕事以外でもしおうてみた
い人やわ〜」

そしてその人影の保護者役を任された、近くの屋根に座っていたボロイ服を着たおっ
さんは……

「zzz……。はっ!? ふえ、フェイト!? ね、寝てへん、寝てへんで! これはあれや
……あの、その。目エ閉じることによって周囲の気を、研ぎ澄まされた感覚で探るゆ
〜ぎやあああああああああああああああ!!」

その数分後……趣味の悪いおっさんの石像が、とある家屋の屋根から発見されひと騒
動起こったりしたが……まあ、話の進行には特に関係ないことなのだろう。

「くっ……。まだ追ってくるなんて……。京都まで来るなんてしつこいわよ〜」

「こつちだつて好きでやつとるんちやうわアホおとおおとおおとおおとおお!!
せつかく修学旅行に来たのに、その自由時を間潰してまであんた追いかけてるんやで!!
せやからおとなしく捕まってえや!!」

憤怒の形相でそう怒声を上げるマリーをしり目に、サヤカはフルフルと首を振りながらさらに加速する。

「それは……。できないわ。あなたも知っているでしょう。私は……。お父様たちが反省するまで家に帰るわけにはいかないの!!」

「まったく……。いったい何を見たというんだ!!」

相手はヤクザの娘だ。ちよつとした悪行程度なら見慣れているだろうし、日常茶飯事のはず。そんな相手が家出をしてまで反省を促すようなことを、菊池商会はしたというのだろうか？

自身も深い闇に身を置いていたため、エヴァの脳裏にいやな予想がかすめていく。

麻薬や銃の密売程度ならかわいいものなのだが……。エヴァがそう覚悟を決めたときだった。

「あ、あなたは初対面の人ね……。だつたらわかるでしょう……。私は、私は……。命をかけてあの人たちに反省を促さないといけない。それがあの人の娘に生まれた……。私の役

目だから」

「いや……わからんな。一体お前は何を見たんだ」

「何を……違うわ。私は何も見ていない。ただ知ってしまっただけ……お父様が……お父様たちが……」

サヤカは眼もとから真珠のような涙をこぼしながら、

「ヤクザだったなんてええええええええええええええええええええええええ!!」

ドグボワシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!! と、なんとも形容しがたい轟音を立てながら茶々丸ごとずっこけるエヴァを見て、マリーは若干遠い眼をして立ち止まり、サヤカは驚いた顔をして停止した。

「……え? そこののか?」

「……そこに気づかずその年齢までですか?」

そして地面に倒れ伏したまま、ぐったりとした声を出すエヴァと茶々丸のツツコミにサヤカはフルフルと首を縦に振る。

「英語で言うと8・9・3」

「それは数字だああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

もう魂の叫びと言っていていいほどの怒声を上げながらガバツと立ち上がるエヴァに、命

の危機を感じたのか、サヤカは再び泣きながらとんでもない速度で逃げ出す。

エヴァと茶々丸はそれをしばらく茫然と見つめた後、「私も初対面の時はあんな感じやっただなく」とたそがれた笑みを浮かべたマリリーに質問した。

「なあ……マリリー。まさかあいつ……」

「ああ……うん。基本的に麻帆良でも見かけへんほどの……もうギャグとして消化できてまうほどのド天然やで？」

エヴァがこの依頼の難易度の高さを思い知った瞬間だった。

……†……†………†………†………

その頃のネギたち……。

「おれもう……お婿に行かれへん」

「……」

結界に閉じ込められ、何とか脱出手段がないかどうか探していたネギと明日菜は、とある藪に隠れてさめざめと泣いている少年を発見した。

「うう……千草ねえちゃん何考えとんねん。いくらなんでもあそこは……あそこは洗ったらあかんやろ。あかん……思い出したら鬱になってきた。死のう……」

でもない速度で走ることによっておこる疾風によって巻き上げていた。

「くっ……。マジで早いんやけど!? 気で強化されているうちらとおんなじ速度って、
どんだけ早いねんあの天然!!」

金髪碧眼に、今日はどこかのロックバンドのボーカルのようなボーイッシュな服装の
安川マリィ。

「茶々丸……。これ以上の加速は可能か?」

麻帆良の制服を着こんだメカメカしい関節を持つ少女に肩車された、金髪幼女（見た
目は）……。エヴァンジェリン。

「できないこともないですが……。これ以上の速度となるとカーブの際のドリフトができ
ない可能性が出てきます」

淡々とした口調で答えつつも、その表情にはうつつとした驚愕が浮かんでいるメカ
少女……。絡繰茶々丸。

麻帆良ではかなりの実力と機動力を持つこの三人の目の前では、遊女のかっこうをし
た一人の少女がお嬢様走りでも爆走していた。

「ひくん。もういいかげん諦めて〜」

「冗談やないわ!! この依頼失敗したら犬神君に殺されんねんで!! あと……。金持ちに
負けてたまるかああああああああああああああああああああ!!」

「マリーさん……」

「おまえ……思いつきり私情が入っているぞ」

ヤクザをしている父親を改心させ、真人間に戻すために家出した菊池サヤカ。どういうわけか素で瞬動並の速度をたたき出すびっくり一般人で……マリーたちを苦しめる超ド級の天然少女だ。

「くそっ……。このままでは埒があかん!! マリー、私たちは別ルートであの娘の行きそうな場所へと先回りする。お前は常にあの娘を追いかけてプレッシャーをかける!!」

「了解や!!」

いつまでたっても縮まらない双方の距離に業を煮やしたのか、とうとうエヴァが戦略の指示を出した。

いくら魔力を大半封じられているとは言っても、彼女は600年の歳月を生きた最強の魔法使いの一人だ。その気になればただ速いだけの小娘ひとり捕まえるぐらいなど、ちよつとした戦略さえ用いれば造作ない。問題なのは、ただの一般人に本気を出すなどという情けないマネ……彼女のプライドが許すかどうかなのだが、

「あれはもう一般人ではないと認定する!!」

「マスター……開き直りましたね」

自分の下から聞こえてくる呆れがにじんだその声を全力で無視して、認識阻害の結果

を自身にはったエヴァンジェリンは、茶々丸に指示をだし映画村の空へと舞いあがった！

「ほなっ……こつちも行くでええええええ!!」

バーナーを背中から突出し、凄まじい噴出音とともに飛翔した二人へ数秒間の間視線を送った後、マリーは体に均等に分配していた気力をすべて足へと移動させ、

「豪・瞬……動っ!!」

地面をける瞬間に、爆発させた!!

しかも、彼女が爆発させた気は通常の瞬動で使うような気ではない。

豪気功。流し込んだ物質や纏った体を極限まで硬質化させるこの気功は、瞬動に使えば通常の反発力の数十倍というとんでもない力を足に伝播してくれる。

当然それによって得られる加速は通常の瞬動をはるかに上回り、

「うらああああああああああああああああ!!」

「ひいっ!!」

サヤカが思わずビビるほどの速度で、彼女を肉薄した!!

だが、彼女も伊達に実家のヤクザ達の追手を振り切っていたわけではないらしい。

「きやああああああああああ!!」

甲高い悲鳴を上げながら、彼女はたどり着いた十字路の角をつかみ、足を滑らせるよ

うにスライドさせる。

人間ドリフト。壁の角をつかんだ腕を支店に鮮やかに弧を描いた彼女の体は、瞬動並の速度で動いているとは思えないほどきれいに方向転換を果たした。

それにマリイは反応できない。当たり前だ。通常の瞬動の数倍の加速ということは、それに比例して通常の瞬動の数倍小回りが利かない。

鮮やかに曲がったサヤカとは対照的に、マリイの体はそのまま直進。十字路をとんでもない速度で通り過ぎてしまった。

だが、

「かかった!!」

「!?」

マリイの顔からは不敵な笑みがこぼれている。それもそのはず、なぜなら彼女は、

「とらえたぞ……小娘ええええええええええ!!」

一人ではない。

天から飛来するのは制服を着ている少女と、黒いドレスのような服で身を固めた幼

……少女!!

彼女たちは、見事なカーブを決めた後さらに加速しようとしていたサヤカの前に降り立ち、完全にその進行方向を塞いだ。

そう、先ほど天を飛んで先回りをするといっていたエヴァと茶々丸だ!!

「あう……」

目元に涙をにじませながら、あわてて反転を行うサヤカ。しかし、そこには再び豪腕動を行い、十字路の中央で仁王立ちしていたマリーの姿があった。

「さあ……。もう逃げられへんで天然金持ち!!」

「マリー……。それだとちがう意味に聞こえる」

「マリーさん……。いい加減ツツコミに戻ってください」

味方のはずの二人の辛辣なツツコミを完全に無視しながら、マリーは降伏を呼びかける。

「さあ、大人しくお縄につきや! ほんま悪いようにはせーへんから!!」

「そ、そんなこと言つて……。この前私のことを殴りつけたあげく、せつまいトランクに詰め込んで私を搬送したじゃない、あなたたち!! 信用なんてできません!!」

「お前ほんとは何やってんだよ、マリーイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

「ちよ、ちやうよ!? やったん犬神君やで!」

その光景がまざまざと思ひ浮かんだのか、エヴァは思わずドン引きしながらツツコミを入れ、マリーはあわてて弁解を開始した。しかし、それが致命的な隙となった。

「だから……。逃げさせてもらいます〜!!」

「委員長おおおおお!!　お願いですからとち狂ったこと言わないでください!!　私とお嬢様は女同士です!!」

「え……。私とやったら嫌なん?　せつちゃん……」

「え……」

何とも反応に困るセリフを木乃香から聞き、見事に氷結する刹那をしり目に委員長は感涙した。

「わかりましたわ刹那さん!!　木乃香さんは私に任せて、刹那さんは存分に敵とお戦いになってください!!　あなたたちの逃避行……必ず成功させて見せますわ!!」

「え……。あ……。う……。あう……。もういいです」

なぜかすべてをあきらめきったような表情でうなだれる刹那だったが、燃え上がる委員長は気づかない。

こうして、半分魔法に片足を突っ込んでいた委員長はものの見事にどつぷりと魔法の事件にかかわることになるのだった。

そして現在、月詠がだしたCGの妖怪軍団から逃れるために、彼女たちは安全そうな城郭の天辺へと登っているのだったが、

「おやおや……。こんな素人さんがナイトとしてついてくるやなんて、ちよつと予想外やな?」

「ああ、刹那先輩ほんまにええわあ〜」

しかし、相手は顔を上気させ蕩けたような笑みを浮かべながらもその攻撃を回避。飛び跳ねるように刹那の間合いから離れると、まるでコマのように体を一回転させ神速の剣をふるう!!

「ぎんくう〜せ〜ん」

「くっ!!」

大ぶりの野太刀は大技を放った後の隙がデカイ。そのため、刹那は剣と自身の体に気を通し、何とかその攻撃をしのぐしかなかった。

当然そのようなラグを、敵が見逃すわけではない!!

「にとーざんてつせ〜ん!!」

瞬動によって即座に距離をつめ、敵が放ったのは叩きつけるように放たれる双の斬撃。夕風の耐久力と刹那の気によってその攻撃にはなんとか耐えることができたが、刹那の体は大きくはじかれ、彼女の体橋の欄干へと押し上げる。

「くっ!! こんなことしている場合ではないのに!!」

「いややわ〜先輩。私と戦っているときにほかのこと考えんといってくださいよ〜。目の前で堂々と浮気されんのはさすがの私も傷つくわ〜」

「ふざけたことを……」

ぬかすな!! 二刀の短い間合いで斬りかかってくる敵から、何とか夕風の力を最大限に振るうことができる間合いをとるため、欄干を激走した刹那。彼女がそう吐き捨てようとしたときだった。

「あ、あれ!! あれ見て!？」

「城の上にだれか?」

「あれも劇か?」

「お姫様と、着くずれした遊女……ユリユリしい展開はご褒美です!!」

なんか、いろいろな意味で聞き捨てならない言葉を聞き刹那はあわてて城の方へと背を向けた。

「お嬢様!？」

「あら、よそ見はあきまへんで?」

「くっ!!」

隙を見せた瞬間、再び間合いを詰めてきた敵に舌打ちを漏らし、刹那は何とか意識の先をその光景へと向けることに成功した。

木乃香をかばい屋根に上った委員長と退治するように、無数の影が城の屋根には存在した。そして、その影のうちの一つが……人間では到底扱えそうにない長弓を持った鬼だったのだ。

「聞いとるか？ お嬢様の護衛桜咲刹那!! この鬼の矢がお嬢様をびったり狙っとんのが見えとるやろ!! お嬢様の身を案じるなら、手は出さんととき」

明らかな脅迫。それを聞いて刹那はほぞをかんだ。

お嬢様と私を分断することが敵の狙いか!! 敵にとつては幸いなことに観察の時間は十分あった。今日のお嬢様の護衛が私一人だということは容易に看破できたはず。迂闊だった!!

内心で自分の甘さを呪いながら、刹那は泣きそうな顔で剣と木乃香を一瞬だけ見つめた。

自分の存在理由は木乃香の護衛。それ以上の目的もそれ以下の理由も彼女には存在しない。だからこそ、彼女にとつて剣を捨てるという子とは木乃香の護衛を行う手段を放棄し、自分の存在意義を否定することを意味する。

だが、

「このちゃん……ごめん」

やはり……木乃香の命には代えられなかった。

苦渋の決断。守ることの放棄……破ってしまった約束。そのすべてが刹那の脳裏をかすめ、刹那に剣を捨てさせようとする。

そのスキにも月詠は斬りかかってきており、状況を聞いていたとは思えない、先ほど

と変わらない鋭さを持ったその二刀は、正確に刹那を両断しようとその脅威をふるい、
ゴツ!!

凄まじい轟音と共に、城に何かが着弾したことによって停止させられた。

「はっ?」

はからずしも月詠と刹那、二人同時に発せられた声は二人の意識が完全に戦いから外れてしまったことを示した。

何かが着弾したのは城の屋根。ちょうど先ほど木乃香を狙っていた弓を持つ鬼が立っていた場所だった。

現在はそこからはもうもうとした粉塵が上がり、それを見ていた千草と白髪の少年が啞然とした様子でそこを見つめている。

それからしばらくして、城の屋根からは誰かが泣き声のようなものを上げるのが聞こえた後、ドンツ!! という、衝撃とともに再び何かが飛翔。大砲の弾のようにお空の彼方に消え去った。

はっ!! といったように意識が戻ったのか、白髪の少年は「ルビカンテ!!」と声を上げながら、粉塵の中に突撃。

そして、その次に意識を取り戻した千草はコホンとその場の空気をとりなすかのよう
に咳払いした後、

千草は舌打ちをしたい気持ちをごらえ、自分と白髪の少年の式鬼を操り二人を何とか城の屋根へと追い込んでいく。

それにしても予想外やったわ……ただの学生がここまで粘るとは。普通やったら鬼見た瞬間腰抜かしてお嬢様差し出すおもたんやけど。

それだけ強固な絆が気づけているクラスメイトを少しだけうらやましく思いながら、千草は仕事をしつかりこなした。

「さあ、もう逃げられへんで？」

「くっ!!」

じわじわと式鬼たちの包囲網を縮めることによつて、彼女たちを完全に城の屋根へと追い込むことに成功したのだ。

「さあて……聞いたるか？ お嬢様の護衛桜咲刹那!! この鬼の矢がお嬢様をびったり狙つとんのが見えとるやろ!! お嬢様の身を案じるなら、手は出さんととき」

そして、下で戦っている刹那に向かって千草は遠慮なくこの言葉を告げた。

彼女にとつて、いまから達成しようとしていることは悲願と言つていい。もう一般人に対する魔法隠匿や、卑怯卑劣などといったことを気にかけるつもりも余裕も彼女にはないのだ。

だからこそこの脅迫。この、悪役つづりを千草は發揮していた。

長かった……長かったでここまで来んのは。味方のはずの安川に計画邪魔されたり、陽動の囮役になったはええけど便所に閉じ込められてもうて、あげくの果てにトリガーハッピーなトサカ教師の的にされてもうたり、ゆることきかへん犬耳小僧（あまりに生意気すぎて萌えなかつたので減点）風呂に入れたり……踏んだり蹴つたりやつたからな。

内心でそう考えサメザメとした涙を流す千草に、隣に立っていたフェイトは思わず合掌する。安川を引き入れたのは自分の為、何気に責任を感じていたりするのだった。

「さあ〜!! さっさとお嬢様渡してもらおか、フハハハハハハ!! よーやく悪役らしいことできとんで、これ!! 私かっこよーない、なあ?」

もつとも、その気持ちは千草の言葉を聞きすぐに消え去ってしまったが。

フェイトが三白眼で高笑いをする千草を眺めながら、ルビカントに待機継続の命令を下そうとしたその時だった。

空から人が着弾ふつてきした。

「はっ?」

はからずしも下の二人と同じ反応をとってしまうフェイトと千草をしり目に、その間は弾丸でもちよつと出せないような速度でルビカントに直撃。

グベフラファア!? と、ちよつとお目にかかれなような悲鳴をルビカントにあげさせ

ながら、その鬼の巨体を遠慮なく轢きつぶした。

「あいたたたた……。あれ？　なんでこんなところにこんな不細工な着ぐるみが？　屋根の上ならだれもいないと思っただのに〜」

不細工で悪かったね……。フェイトが氷結した思考でかろうじてそう答えたが、鬼を轢きつぶした人間……遊女の衣装を着た金髪の少女には当然届かない。

彼女は自分の周囲を確認し、自分の足元で目を回した鬼がいることに気付いた後、

「まあ……ひどいけが!!　誰にやられたんですか?」

「お前だよっ!!」

かなりすつとぼけたことを言い出したので、フェイトと千草は思わずそうツツコミを入れた。

「え?　そんなまさか……確かに私この人にぶつかりましたけど、私みたいな軽い美少女がこんな大きな人にぶつかったぐらいでここまでの被害が出るわけないじゃないですか?」

「それは音速を超えて突撃してこなかった時の話やろうが!」

「というか、今この子……自分のこと美少女って言わなかった?」

　　どんだけ自画自賛しているのき……。という、フェイトの呆れきった声を聴くことなく、何かを察知した様子である方向を見据えた少女は、ギャンギャン喚く千草を無視し

て泣きそうな顔になった。

「あう……あれ使つてもおつてくるなんて。もう私のことは諦めてくださいイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

少女はそう叫びながら涙を流すと、自分の両足に再び気を装填。

「あ、ちよ、まつ!?!」

「ちよ、やめて!! ルビカンのライフはもう0よ!!」

ニコニコしちやう動画で最近手に入れたネタを披露し、少女を制止しようとする千草とフェイト。

しかし、天然少女は聞く耳持たない。彼女は自分の下に鬼がいることを忘れているんじゃないかと錯覚してしまうほどの容赦のなさで、再びあの化物加速を手に入れるための気の爆発を行った。

「縮地・无疆!!」

再び響き渡る轟音。砲弾のように飛び出す少女。粉碎される屋根瓦。屋根をぶち抜き下の階へと落ちていく弓持ちの鬼……。

「ルビカントエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

フェイトは自分の愛鬼が、情け容赦なく止めを刺されたのを見て思わず絶叫を上げながら屋根に空いた巨大な穴に飛び込む。

安川来てからえらい丸くなったなああの餓鬼……。そう思いながら、千草がその中を覗き込むと、そこには倒れ伏した巨大な鬼の頭を持ち上げ必死にすがりついているフェイトの姿が……

「ルビカンテ……死ぬな!! 傷は浅いぞ!!」

『いえ……。気休めはよしてください、フェイトさん……。俺には分かる……。これは致命傷だ』

「そんな……。ルビカンテ、そんな気弱なこと言うなよ!! 僕と一緒に……。世界征服してくれるって約束だったじゃないかああああああああああ!!」

『フェイトさん……。今のあなたなら俺がいなくても立派にやっていける。ふふつ、私は本当ならもつと早くに帰るべきだったんだ。でも、あなたが心配でついこんなに長居をしてしま……。』

というか、寸劇を繰り広げていた……。ちなみに鬼の発言はプラカードである。

「つて、なにしとんのやあほどもおとおおとおおとおお!! だいたい鬼は死んでもといた世界に帰るだけで本当の意味で死ぬわけちゃうやろ!! そして、そのプラカードどこから出したんや!？」

なんかもうやる気あんのか? と言いたくなるような光景に頭痛を覚えた千草は、即座に鬼のプラカードから視線を外し、怒声を上げる。

そんな千草の態度に、半分消えかかった鬼とフェイトはやれやれと言わんばかりに顔になって一言。

「まったく……千草さん。舞台の幕が下りていないのに興奮なことは言わないでくれ」

『だからあんたはいつまでたつても千草なんだよ……。中途半端にでかい数字になっているんじゃないやありません。ちなみに、プラカードはエリザベス印のブランド品です』

「ぶつ殺したるか、アホ二人組!! さらっと私のこと全否定しとるんちゃうわ!!」

ちなみにこのやり取りは、フェイトが安川父に『ええ陽動になるで?』と半笑い交じりに仕込まれたものだったりするのだが……千草がそれを知るのはいもう少し先になるだろう。

とにかく、千草はそんなバカ二人を計画に引き込んでしまった昔の自分を内心でののしりながら、こちらを見て呆然とするお嬢様と遊女のかっこうをした少女に視線を合した後、

サツ。と、胸の前で腕を十字になるように突出し一言、

「タ〜イム!!」

今度は本気で泣きそうになった千草だった……。

「もう……今日はお開きにするか」

「はい。うちもあの屋根にいる三人回収して退散しますわ。ついでに石になってもうた人を回収せなあかんし」

「むしろその人大丈夫なのか？」

「デフォでギャグ補正がかかる人やから大丈夫や思います……」

「そうか……」

二人はポツリポツリと会話を交わした後、再び無言になり、

「なんか……すまん」

「謝らんとって下さい。よけい惨めになります」

お互い苦勞してんだな……と、ちよつとだけ共感を覚えた。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

ネギと明日菜はさめざめと泣いて首をつろうとしていた少年を救出したあと、休憩所に合った自販機からジュースを買い、少年に与えて彼の愚痴を聞いていた。

「おれは嫌やゆーたんや!! 風呂なんかに入らんでも死なへんやんか!! それやのにあのクソババアは、無理やり風呂に俺を放り込みよつて……」

「わかります分かります!! お風呂なんて入らなくても死にませんよね!! あ、でも女性にその物言いはだめですよ?」

「ちよつとあんたたち……人間としての最低限のエチケットとしてそれはどうなのよ?」

風呂嫌いな少年二人が意気投合し、怒涛の不満を漏らしているのを聞きながら明日菜は思わず顔を引きつらせる。

「ところで小太郎君……君つてもしかして、木乃香を狙っている一味?」

「ん? そうやで?」

「否定しないの!?!」

「してもシャーないやろ。こんなところにおける人間には、巻き込まれたか、結界はった張本人かの二択しかないんやから」

言われてみればその通りのだが、なんともさばさばしすぎていて逆に納得がいかない明日菜は、少しだけほほを膨らませながら手に持っていた缶を傾けジュースを口に含む。

「じゃあ僕たち襲わなくていいの?」

「ああ、かまへんかまへん。お前みたい弱い奴と喧嘩してもおもしろなさそうやしな。それにこの結界は起点壊さん限り解けへんようになつとるし」

それを見ていたエヴァンジェリンは……。

「ふふふふふつ……どうやら少しO☆H A☆N A☆S Iが必要なようだな、近衛詠春!!」

「ひいっ!!」

ちよつと人には言えないくらい凶悪な笑みを浮かべて、追従者二人をビビらせていた。

……†……†……†……†……†……†……†……†……†……

「狗神!!」

「魔法の射手!!」
サギタ・マギカ

漆黒の狂犬と、閃光の矢が激突し衝撃波をまき散らす。

「戦いの歌!!」

「っ!! 身体強化まで……おまえ、バリバリの近接系やないか!!」

「こう見えても、ね。戦闘訓練してもらっている師匠が近接大得意だったんだよ!!」

おかげで魔法は独学だけど……。内心で「あれっ? 僕って本当に魔法使い?」と首をかしげながら、ネギは素早く瞬動を行い小太郎の眼前へと出現。魔法の射手が事前に

装填されていたコブシを小太郎に向って叩きつける!!

「はっ!! 甘いで!!」

しかし、そのくらいは小太郎も予想していたのか、ネギが瞬動に入った時点で彼も後方へと瞬動。再出現したネギと大きく距離をとりながら、事前に配置していた狗神たちを、一斉に襲いかからせる。

「くっ!! 解放!!」

だが、ネギも何の保険もなしに近接戦を行うほど無謀ではなかったのか、舌打ち交じりに遅延設定をかけておいた魔法を発動。彼の周囲に30枚近い障壁が展開され、なんと小太郎の攻撃を防ぎきった。

「はっ!! やるやないか!! お前が弱い言ったことは謝罪するわ」

「こつちこそごめん小太郎君。君はその年としては十分強い……」

まあ、もっと強い人知っているから純粋に強いつて誉められないんだけど……。自分の脳裏をかすめる麻帆良の強者たちにほほを引きつらせながら、ネギは丁寧に頭を下げ、謝罪の言葉を述べた。そして、

「まあ……今回は痛み分けてことで、仲直りしようか小太郎君?」

いい加減無駄な魔力放出も控えたいし……。と、考えながらネギは小太郎に向って握手でも求めるかのように手を差し出した。しかし、

「はあ？ 何ゆーとんねん」

「へ？」

その願いは、凶悪に笑う小太郎によってすげなく断られた。

「せっかくこんなおもしろい戦いができとるんや!! もつと楽しもうや。なあ、ネギ!!」

その言葉と同時に、小太郎のからだに変化が起きる!!

髪の毛が伸び、八重歯が突出す。体にまとう気は何倍にも大きくなり、金色の体毛が彼の体を覆った。

ネギはその光景を茫然と見つめながら、一つの言葉を思い出していた。

ウエオ・ウルフ
人狼と……。

「こっからが本番や、ネギ・スプリングフィールド。俺の全力全開で……お前を叩き潰す!!」

先ほどとは比べ物にならないほどの圧倒的な迫力と気力。小太郎から発せられる鮮烈なそれらに、ネギは思わず後ずさる。

それが双方の命運を分けた。

唐突に吹いてきた暴風が、数歩下がったネギの鼻先をかすめる。

「え？」

その風の発生源は人の形をしていた。

よほど急いで走ってきたのか乱れに乱れた金色の髪を翻し、遊女の衣装をはためかせる女性。

それは、音速などというものを軽々と突破してそうな、信じられない速さでネギの隣を通り過ぎ、

「え？」

「なっ!？」

直線状にいた小太郎をひきつぶした!!

「ブフアラグフアラバア!？」

「ゴ……ゴめんなさ……い……」

ドップラー効果を伴い瞬く間に見えなくなってしまう女性。その場に残ったのは茫然とした様子で固まるネギと、下駄の跡を頭や背中に付けぐつたりと地面に倒れ伏す獣人の少年だった。

このときネギは何となく悟った……。あ、これたぶん犬神さんが一枚かんでいるんだ

な……と。

こんなデタラメですべてを滅茶苦茶にするような真似、あの人の関係者じゃないとできない……と。

奇しくもその予想は当たることとなる。

なぜならその直後……憤怒の形相で鳥居の中を爆走してきた見覚えのある三人をネギが捕捉したからだ。

「それホンマなんかエヴァちゃん?! この先にあの鍛えた人がいるって?」

「ああ……。間違いない。あいつはかなりのお節介やきだしな。たとえヤクザの娘とはいえ、家出したガキを見逃すなんて真似はしない! せめて一人で生きていけるように基礎的な技術を身につけさせるついでに、気力運用を教えてしまったんだろう!!」

「なんとというか……ここまではた迷惑なお節介は初めて見ますね」

そんな雑談を交わしながら、こちらに近づいてくる三人——安川マリー、エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル、絡繰茶々丸のただならぬ様子にネギは思わず、その場を飛びのいた。

「あ、あの!?!」

「ごめんネギ君!! 後にして!!」

「今忙しいのだボーヤ!! 後にしろ!!」

「jud. 生徒の仕事の疎外をするなど、信じられないほどのダメ教師ですね……以上」
「相変わらず仲いいですねお二人とも!! 後茶々丸さんが疲労のあまりとんでもない
キアラ憑依させている気がするんですが!?!」

重力制御とかできませぬよね?! ネギがそうツツコミを入れたが、今の三人には聞
こえない。

三人はそのまま直進し、地面に倒れ伏している小太郎を、

「ごめん!!」「グボツ!!」

マリーは遠慮なく踏みつけ、

「通路で寝転がるな!! 通行の邪魔だろうが!!」「ウゴツ!!」

わざわざ茶々丸から飛び降りたエヴァが踏みつけ!

「絡繰茶々丸。得意技はBダツシユです」「うぎやああああああああああ!!」

再びエヴァを肩車した茶々丸が車輪で轢く!!

「もうやめて!?! コタロー君のライフはゼロですよ!?!」

今まで喧嘩をしていたネギがそう悲鳴を上げるほど、その光景は悲惨だったらしい。
というか、後者の二人は明らかにワザとだった。

三段落ちというものがあつてだな……。と、ネギの脳裏にはなぜか勝ち誇った顔を
した犬神の顔がよぎる。

しかしコタローの受難はまだ続く。

「あ、そういえばネギ先生……火急的にお話ししたいことがあります」「バフツ!?」

何と、何かに気付いたと言わんばかりに戻ってきた茶々丸が、再びコタローを車輪で轢いたのだ。

「広域センサーでこのあたり一帯を検索した結果、あそこの鳥居に結界の形成源となっている呪が刻まれています。それを粉碎すればおそらくこの結界は解けますよ?」

「5秒以内の解け!! こんな閉じた結界の中で、あの女と延々追っかけっこするなんて私たちには耐えられんぞ!!」

「ではそういうことで。絡繰茶々丸……得意技は二段ジャンプです」

「ほなジャンプせえや!! カルボナラっ!!」

言いたいことだけ告げた後、再びあの遊女の追撃に移った茶々丸は、当然と言わんばかりにコタローを轢いて行った。

「……………」

三人の暴風雨が過ぎ去ったあと何となく集まってきた明日菜とカモを伴い、ネギは無言で地面に倒れ伏したまま動かないコタローを見つめる。

意識は失っていない。さすがは獣人、なかなかタフなようだ。

だがしかし、精神面は体ほどタフではなかったようで……。

「えっと……コタロー君」

ピクン……。ネギの声を聞きコタローの方が少しだけ動いた。

「い、今は……話しかけないほうがいい？」

ネギの問いかけにコタローはしばらく無言になった後、

「……………」

ほんの少しだけ首を縦に動かした。

「えっと……じゃあ、もう僕たち結界出て先に行くけど、落ち着いたらまた話しに来てね。愚痴ぐらいなら聞いてあげられるから」

そんな想いやり溢れるセリフを残し、ネギは明日菜と協力し茶々丸が教えてくれた呪いを破壊。あつさりと結界から抜け出した。

数秒後、ネギたちの背後から聞こえてきた小さな嗚咽は……もうちよつと余りに痛々しすぎて聞いていられなかったという……。

……†……………†……………

ちなみに……とある巻き込まれ型ヒロインは？

「あわわわわ……ど、ど、ど、どうしよう!? 慰めたほうがいいのかな? でもこれ

「ん?」

「あれ?」

聞き覚えのある声を聞き、二人は思わず立ち止り振りかえった。

するとそこには、朝倉やその他大勢（パル・夕映・のどか——どうやら慰めるのはやめて合流したらしい）と刹那を伴った木乃香が満面の笑みを浮かべながらこちらへと駆け寄ってきていた。

「聞いて〜や、明日菜〜!! 映画村でめっちゃすごいアトラクションがあつてな!」

「いや……それよりも木乃香、あんたなんでここに!」

修学旅行中は危険だからここには近づかないんじや? そういう疑問を総括した視線を木乃香に話しかけながら、明日菜は刹那へと向けた。

『申し訳ありません……。映画村で少し襲撃されて、このままではしのぎ切れないと一時的に避難を。外よりこちらのほうが安全そうでしたし』

『そうですか。ところでそのプラカードはいったい?』

『ノリのいい鬼にもらいました。そういうネギ先生は?』

『明日菜さんが侍な蜘蛛さんからもらいました』

『なるほど……お互いいろいろとあつたようですね』

「あの……内緒話をするにはプラカードはあまりにも不向きでは?」

刹那とネギのともんでもない会話を見た夕映が思わずそうツツコミを入れるが、二人はもういろいろ諦めきつているのか、それを鼻で笑いながら一言、

「夕映さん……ツツコミならもつと早い段階で入れてほしかったですね？」

「そうですね。特に私たちでは処理しきれそうにない、あのカオスティック追いかけて組に強烈なのを……」

「あんなの相手にしたら私程度では処理落ちするです」

地味に自分の実力を把握している夕映だった……。

閑話休題。

「まあとにかく……。ここならある程度長の目が届きますから、見える危険なら対処してくださいるはずですよ。何せこの長は日本最強の剣士で、木乃香お嬢様の……」

クラスメイトと合流したことにより、刹那と木乃香が先頭に立ち、他のメンバーを誘導していく。

さすがは地元というべきか、二人はこの急な階段から目を離し明日菜たちのほうを向きながら歩いているのに、特に階段に足を引っかけるといふミスをする事なくするすると登って行った。

そして到着した頂上で、

「……お父う……ええ」

刹那は思わず氷結し、木乃香は思わず両手で口を覆った。

「え？ なに!？」

「何か緊急事態が!？」

二人の不自然な態度に何かを感じ取った明日菜とネギは、あわてて二人と同じ弾まで駆け上がりその光景を目撃する!!

「ええ!？」 コラ聞いてんのかサムライマスター!! 貴様が余計なお節介やいたせいで、私の修学旅行が丸一日つぶれたんだぞ!! どうしてくれる!! どうしてくれるううううううううううううううううう!!」

「ちよ!？」 エヴァちゃんストップストップストップ!! めっちゃタップしたはるから!!

もう全面降伏したはるから!!」

「マスターどいて……そいつ殺せない」

「茶々丸はもう黙つとき!!」

「いやあああああああああああああああ!？」 師匠! しなないで!!」

なぜか怒り狂ったエヴァンジェリンが、眼鏡をかけた中年男性を地面に引き倒し馬乗りになりながら顔を殴打していた。

さすがにこの光景には引き、頭を冷やしたのかいつも通りのツツコミに戻ったマリ-

があわててエヴァを引きはがそうとしている。

その隣にいる茶々丸は自分の眼球に搭載されたカメラを駆使し、怒り狂ったエヴァンジェリンをしつかり激写。「ますたーの黒歴史」というファイルに貯蔵している。

その隣では先ほどコタローやら何やらを轢きつぶした《轢き逃げ女王》が泣きながら中年男性を励ましていて……。

「……」

その光景を見ていた五人は思わず無言になった後、

「よし皆さん。旅館に帰りますよ」

「はい」

「あれ!？」

大いに何も知らないメンバーを混乱させたという……。

18話・修学旅行三日目 お守りの力

「い、いや〜……情けないところをお見せしてしまったね。関西呪術協会へようこそネギ先生。私がこの長の近衛詠春です」

「え……えっと、あんま無理しなくていいですよ近衛さん……」

「ん〜よんだ？ ネギくん？」

「木乃香、今そんな典型的なボケやっっている余裕はないから……」

エヴァが一通り憂さを晴らしてから数時間後。

関西呪術協会の長・近衛詠春は某明治剣客浪漫譚のラスボス的な包帯まみれの男になりながら、必死にネギを出迎えてくれた。

もう見ているだけで痛々しかったので、ネギとしてはもう親書とかそんなのはいいから安静にしてほしかったのだが……さすがは大人といったところか。やせ我慢はお手の物のようだ。

「ささ……立ち話もなんですから早く上に、オポファ!？」

「長あああああああああああああああ!？」

「あらら……お父さん」

……どうやらやせ我慢できないほどの甚大なダメージを被ったらしい。血を吐きながらぶつ倒れる詠春を見てネギは思わず顔をひきつらせながら、責めるような視線をエヴァに向けた。

「だ、だって私のせつかくに京都旅行が……」

「いや……別にエヴァちゃんは手伝わんでもよかったんやで？ 犬神君に仕事頼まれたん私だけやったし」

「ば、ばかつ!! お前が苦勞しているのに私一人で修学旅行が楽しめるわけないだろう!!」

「エヴァちゃん……」

「ふん!!」

「ああ……やはりマスターとマリー様は。い、いけません……やはり非生産的すぎます」
エヴァのセリフにほんわかとした笑みを浮かべるマリー。それを見て顔を真っ赤にしてそらしたエヴァは正直ネギから見てもかなりかわいかったが……。

「長つ!! しつかりしてください……長ああああああああああああ!!」
「お父さん……はよ立って。やせ我慢気づかれるって……」

「ふつ……。わかつているよ木乃香。あの川を渡ればいいんだろう？ あ、なんだガトウ。こんなところにいたのか……」

「長ああああああああああああああああああ!! それきつと渡つちやいけない類の川です!! カンバツク!! カンバツクです長ああああああああああ!!」

関西組（木乃香・刹那・詠春）をカオスワールドに叩き込んだ本人なので、あまり順当に評価できないネギだった……。

…†…†……………†…†…

「まあそれはともかく……やはりサヤカ君に追手がかかっていたか」

数分後。どうにか三途の川から生還を果たした詠春は、ネギ達ご一行と追いかけて組を本殿へと招待し盛大にもてなしていた。

親書の受け渡しも大体終わり、後は楽しむだけという段取りだったのだが……ここでようやく追いかけてこ組の決着をつけることとなる。

「私としては、正直受け渡しは反対だ。仮にも彼女の父親は……その、なんだ……アレなのだろう?」

「普通にヤクザといえ……。変に気を使うと余計卑猥に聞こえる」

「ひ、卑猥なんかじゃありません!! ただちよつと悪いことをしているというだけで本

「当は心優しい人なんです!!」

「心優しい奴はヤクザなんてしてない……」

犬神アンダーグラウンドサーチ事務所に突貫してきたオカマヤクザの顔を思い出しながら、明日菜とマリーは、必死に父親をかばおうとするサヤカに思わず突っ込みを入れる。

だが天然少女サヤカには届かなかつたらしく、彼女はさらにまくしたてた。

「で、でもやはりヤクザは悪いことだから……何とかやめてほしくて。だから家出したんです!!」

「私としても彼女の意見には賛成だ。まさか娘の家出程度ですぐに看板をたたむとは思ってはいないが、きつかけ程度にはなるはずだ。一人の男が真人間に戻る可能性があるなら、私は喜んで彼女の援助を続ける」

先ほどとは違い毅然とした態度でマリーとエヴァに言い切った詠春。エヴァはその言葉を聞き思わず舌打ちを漏らした。

「チツ……偽善的なセリフだな。さすがは英雄」

「なんとでも言ってくれエヴァンジェリン。私はこういう風にしか生きられない……」

苦笑いを浮かべ返事を返した詠春を見ながら、マリーは思わず顔をひきつらせた。

「いやいや……私もその意見には大賛成なんやで? めっちゃ正しいこと言ったはる

し、あの天然も本気で親のこと考えとるからこんな行動をとったんやろう、と。だが、今の彼女にとってそんなことは重要ではない。

今の彼女にとって重要なことは……このままでは犬神からの依頼を失敗し、修学旅行から帰ったマリーに地獄の制裁が待っているということだった。

『一週間メシ自腹は固いやろうな……。うう……。月末やら修学旅行やらで小遣いピンチやのに……』

か、彼女にとってはこれでも十分地獄の責苦なのだ!!

かといって、犬神もいない状態で大戦の英雄《サムライマスター》近衛詠春を倒せるとはマリーも思っていない。

さてさて……。どないしよ。と、マリーが完全に八方塞がりな状況に頭を抱えたときだった。

「ふむ……では詠春殿。その信念を曲げてしまうほどの材料があれば取引に応じていただけのすな？」

どこからともなく、執事服を装備した特徴的なひげを蓄えた紳士が現れたではないか!!

「っ!? クラレンスさん!!」

「お久しぶりですマリー様。里帰りで近くを通りかかったので少し顔をのぞかせてみた

ら大変なことになっておりましたので、出すぎたまねかと思いましたがお助けさせていただきます。ただきましよう」

犬神アンダーグラウンドサーチの陰の実力者にして、随一の不思議人間。クラレンスの登場だった。

彼は、登場すると同時に真っ白な紙袋を懐から取り出し（どう考えても懐から出るようなサイズではなかったが、余計なことでもツツコミを入れると危なそうだったのでマリーは全力で無視した）詠春に近づいて行った。

「取引？ たとえどのような条件を提示されようが私の意見は……」

クラレンスの体の陰に隠れた紙袋は、マリーや木乃香達の目からは全く見えない。ただ、ガサゴソという音が聞こえたので、その紙袋から何かを取り出したのはわかった。

それを見て詠春は思わず氷結し、わなわなと震えだしたではないか!!

「そ、それをどこで?!」

「なくに。あなたの部屋から出てきた猫が持ち出していましたので、紳士として見逃せなかつただけですよ。なかなかいい趣味をお持ちのようで」

「くっ……」

「さて……紳士としてこれを隠蔽するのはやぶさかではないのですが、あまり強情にな

長と呼ばれたエヴァにボコボコにされた人にも聞いたが、この本山にはられた結果は麻帆良にはられたもの以上に《侵入者の排除》に主眼を置かれたものらしかった。サウザンドマスター並みの実力でもない限り突破するのはまず不可能だろう、と誇らしげに言っていた長の顔が浮かび、ネギは久しぶりに心からの安堵を覚えている。

思えば修学旅行中は生徒の身の安全やら、教師の仕事やらで心休まる日はなかった。今はゆっくり羽を伸ばしても罰は当たらないのではと思つたのだ。

「いや〜。ここにきて正解でしたね〜。お茶がおいしい……」

「ネギ先生……ジジ臭いですよ」

温かいお茶を飲みほっこりしているネギを見て、刹那は顔をひきつらせながらそうツツコミを入れた。

「ああ、刹那さん！ 長さんとの話は終わったんですか？」

「ええ……。どうやらもう隠しきれないと思われていたようで、近日中に木乃香お嬢様魔法について話すと」

「木乃香さんもこっちの方へ仲間入りですか……」

自分と同じような複雑な事情を抱える彼女の参入は、東西問わずにかなりの影響を与えることになるだろうからあまり手放しで喜べることはないのだが、今は純粹に祝おうと思うネギ。

だから彼は、今は笑顔を浮かべて「おめでとうございます」とだけ言っておいた。

「ええ……ですが手放して喜べることだけでは」

「理解していますよ。でも……」

顔に真剣な色を宿し、眉間にしわを寄せる刹那に苦笑を浮かべながら、たまには教師らしいことでも言うかと思つたネギは、刹那にポイツとコップを投げ渡しながらお茶の入つた急須を差し出す。

「たつた一人で麻帆良に来た僕とは違つて、木乃香さんには刹那さんがいるじゃないですか？ 危なくなつたら刹那さんが木乃香さんを守ればいいんですよ」

「っ……はい……そうですね」

珍しくいいこと言つたネギに少し驚きを示したあと、刹那は苦笑を浮かべてネギの隣に座り急須へとコップを差し出した。

「ああ!! 桜咲さん何抜けがけしてんの!？」

「へっ!？」

しかし、その光景を麻帆良の姦し娘どもは見逃さなかつた。真つ先に気付いたパールが怒声を上げると同時に、ノリのいい朝倉や酔っぱらつているとしか思えないハイテンションな木乃香が乱入。

ネギの周りが一気に混沌に包まれる中、のどかだけはオタオタとしていただけだつた

向かう先は台所。そこで酔い冷ましの水をもらうつもりなのだ。

「それにしても、木乃香もこつちくることになつてんな……。犬神君が何て言うかは知らんけど、親の意向が変わつたわけやし依頼失敗にはならへんやろ」

多分……。学園長の度量にほんの少しだけ不安を覚えてはいるマリーは最後に小さく付け足した。そして、もしも失敗ということにされたときの犬神の荒れようを考慮し、ほんの少しだけ、豪気功の習得を真剣に行うことを考え始める。

「でも、豪気功の師匠も犬神君やねんな……。もう詰んだやん私……」

お先真つ暗とはこのことだ。修学旅行から帰つたらおそらく黒い笑顔を浮かべた犬神が待っていることに違いない。そんなくだらないことを考えながら、割と本気で怯えた表情をしたマリーだったが、廊下の壁に設置された一枚の引き戸が目に入りそのくらしい思考を断ち切る。

「おお……。あつたあつた。半分酔つてた長さんの話やつたから結構信憑性低かつたんやけど、ちゃんとつけたわ〜」

どうやら台所についてらしい。今は宴会用の料理の後片付けをしているはずなので、あまり迷惑にならないようにと、マリーはゆつくりとその引き戸に手をかけ扉を開けた。

「すいませ〜ん。ちよつとお水を……。もらえ……。ます？」

そして、マリーはその中の光景を見てしまう。

「なんや……これ?」

まるで生きているかのような生々しい姿のまま固まってしまった、料理人や給仕係の石像を……。

「これ……まさか、石化魔法!？」

その時だ。背筋に悪寒が走るのを感じ、マリーは懐からカードを取り出す。

「出でよ!!」
アデアット

「遅いよ」

しかし、相手はマリーの数段上をいく使い手だった!!

振りぬかれたコブシは音速を超えてでもいるのか、凄まじい衝撃波を伴いマリーの体を打ち据える!!

「がっ!？」

廊下から吹き飛ばされ庭にたたきだされたマリーだったが、とつさに豪気功を部分的にかけ、なんとか致命傷は免れた。しかし、立ち上がるには少し休息が必要なくらいのダメージは受けていた。

当然、敵がそれを待ってくれるわけがない。

「安川と同じ力を持っているというのはかなり面倒な戦力だからね……。ここで君の戦

力を削らせてもらうよ？ 安川マリー」

庭を囲う漆喰の壁にたたきつけられたダメージが抜けきらぬ体を叱咤し、必死にもがきながら立ち上がるとうとするマリーに向かって、敵は無慈悲に呪文を唱える。

「ヴィ・シユタル・リ・シユタル・ヴァンゲイト……」

「くっ……」

せめてもの抵抗として、マリーは己がアーティファクトをふるった。犬神と契約することによって手に入れた……マリーにはいきすぎた驚異の能力を持つハリセンを。

「なん……」

「災いの眼差しで射よ……」

豪気功を込められたハリセンは、まるでダイヤモンドのごとき硬度を持ちその力をいかに発揮する。

すなわち……絶対必中属性!! 大阪人のあくなきツツコミ精神が生み出した最強の能力……《魂のツツコミは外れない》という理不尽すぎるギャグ補正が宿ったハリセンは、唸りを上げて敵に襲い掛かった。

「でやねえええええええええええええええええええええええええええええん!!」

「石化の邪眼!!」

障壁を無視するような形で問答無用で殴りつけられた敵。ハリセン自体はただの紙

拒否する刹那をたきつけて、今すぐ魔法バレをする約束を取り付けた明日菜。彼女は木乃香を伴い長い長い廊下を歩いていった。

修学旅行はなんか見えないギャグ補正的な何かの力によってあまり大事には至らなかったが、今後こんな事態がないとは言えない。だったら、木乃香にはある程度自衛の手段を身につけてもらって何も知らないうちに巻き込まれるなんてことにならないでほしい、と明日菜は考えたのだ。

だからこそその魔法バレ推奨なのだが……。

「うくん。やっぱり十年來の友達（注・物の例えです）のしらない一面を見ると結構驚くものね……」

「何の話しとるん明日菜？」

「ああ、気にしないで!! すぐに気にならなくなるから……」

「明日菜がすごい不穏な言葉を発しとる……。はっ!? これはまさか親友が何らかの理由で裏切つて私が Nice boat になるフラグなんとちゃう!?」

「ふふふッ……。そうよ木乃香。私実はあなたのこと……。昔つから大嫌いだったのよ!!
つて、何言わせんのよ!? 思わず悪役みたいなセリフいっちゃったじゃない!!」

「の、ノリツツコミやて? 関西人でも選ばれたコメディアン……。大阪人しか使えへん伝家の宝刀を見事に使いこなすやなんて、神楽坂明日菜……。恐ろしい娘!!」

「あの……もういいでしょうか？」

そんな嬉しはずかしコメディトークを繰り広げる二人がたどりついた部屋では、刹那が顔をひきつらせながらいつ話したらいいんだろう？ とタイミングを計っていたり

……。

「ああ、ゴメンせつちゃん。まった〜？」

「ええ……ほんと待ちましたよ？」

「明日菜〜。せつちゃんが私に嫌味言つてイジメはる〜」

「今回は木乃香が悪い……」

「あまりの四面楚歌に全私が泣いた〜」

そんなことはともかく
閑話休題。

「実は……お嬢様にお話したいことがあります」

「ん〜？」

体面に正座の状態で座った刹那の態度に、木乃香は珍しく驚きを示しただけ真剣な顔になった。

刹那の雰囲気から、彼女が大切な話をするのが理解できたからだ。

「それは……せつちゃんがずっと麻帆良で私のこと無視し続けていたことと関係あるん？」

「うっ!？」

「私が必死に仲直りしようとしてなのに、顔も合わせてくれへんかったことと関係あるん?」

「……」

「私が影で泣きながら『悪いことしたんやろか?』と必死に自分の行動を思い返すことになったんと関係あるん?」

「……………うう」

「こ、木乃香!?! もうやめたげて、桜咲さんのライフはもうゼロよ!?!」

意外と怒っていたらしい。ニッコリとした笑顔でどす黒い気を垂れ流し、刹那を責める木乃香に明日菜はひき、刹那はもう泣きかけだった。

「はあ……。まあ、そこらへんの事情はあとで聞くとして、これだけは聞かせてせつちゃん」

「は、はい……。なんででしょう?」

次は何を言われるのだろうか? と、びくびくしながら木乃香の断罪の言葉を聞く準備

をする刹那に向かって、木乃香はいまにも泣き出しそうな不安がにじみ出た笑顔で刹那に問いかける。

「せつちゃんは……。私のことが嫌いやったから、私のことを避けてたん?」

「それは絶対にありません!! 私はいつでも、このちゃんところが大好きや!!」

その笑顔を見て、その痛々しい木乃香の姿を見て、刹那は自分の本音を包み隠すのも忘れ思わずそう絶叫した。

その後、瞬時に頭から蒸気を噴出し顔を真っ赤にしたが。

「あ……」

「おやおや……」

刹那の勢いのいい告白を聞き、木乃香は少し呆然とし明日菜はにやにやとした笑みを浮かべた。そして、

「うん……。それだけわかったら、私はもう何もいらんわ」

目元にうれし涙を浮かべながら、明日菜ですら見たことがない安心しきった笑顔を浮かべた木乃香に刹那と明日菜は思わず言葉を失った。

その笑顔があまりに輝いて見えたから。

だが、

「無粋なのはわかっているけど、こっちも時間がないんだ……割り込ませてもらうよ?」

ほんのりと温かくなった空間は、この場には絶対に現れてはいけない最強の襲撃者によって引き裂かれた。

篡奪。追撃が行われないように、体を凄まじい速度で回転させ明日菜と刹那を同時に殴り飛ばした!!

「がっ!？」

「あつうう……………」

気や魔力で強化されているはずの二人の体が、砲弾のように吹き飛び壁にたたきつけられる。しかも、それによって与えられたダメージは尋常ではなく、二人がすぐに戦線復帰するのは無理そうだった。

「バカな……………いったいどんな力をしているんだ!？」

「安川の防御を貫けるぐらいだといっておこう……………もちろん君たちの同級生ではなく、僕たちの仲間の方だ」

刹那はその言葉に驚愕の表情をうかべた。自分の太刀の一撃すら平然と食らい弾き返したあの防御力を突破するだけの脅力があるだ?! と。そして、刹那は悟る……………自分たちを戦闘不能に追い込んだ一撃は、少年にとってはできるだけ手加減して打ち込んだものだということを。

勝てない……………。本能の段階でそれを悟らされた。自分がこの少年と戦えば、まず間違いない命を落とすと、自分の体を構成する半分の野生の血がそう警鐘を鳴らす。

だが、

「いや、いいお湯だったね、カモくん」

「兄貴にしては珍しく風呂で女の子とバツティングって事態にはならなかったしな。……チツ」

「カモくん聞こえているよ?」

最後に暗い表情になってあからさまな舌打ちをするオコジヨ妖精に苦笑を浮かべながら、ネギはのんびりと本殿の廊下を歩いていった。

この山では少し遅れた桜が満開になっており、まるで優しい吹雪のようにその花びらを降らせていた。

日本でしか見られない耽美の世界だよね。その光景にちよつとした感動を覚えながら、ネギはふとその場で立ち止まりゆっくりと桜観賞に入る。

「あにき。こんなところで花なんて見てないで、さっさと女の子の所へいきましようや」

「カモくん……君ももうちよつとこういうった物に感動する感性を持つたら女に子にもてるかもよ?」

「桜つてきれいですね、兄貴! 俺心洗われる気分つす!!」

桜に顔があつたら間違いなくひきつらせていたであろうカモの豹変に苦笑を浮かべながら、ネギはひらひらと目の前に降ってきた桜にゆっくりと手を伸ばし、

「それにしても静かつすね。桜観賞にはもってこいですけど」

カモののんびりとしたつぶやきを聞き固まった。桜が手をよけてあらぬ方向へと降っていくが今はそんなこと気にしていられない。

そう。静かすぎた。

雰囲気から予想するに、この神社は落ち着いた日常を送りあまり物音も立てないのだろうが、それにしたって人がいれば自然と物音は発生するものだ。

ましてや今この神社にはネギが連れてきてしまった3—Aのメンバーだっている。静かとは言えなくもない環境を作ることにはできるかもしれないが、完全な静寂が訪れるわけがない。

しかし、今この教会からは物音ひとつ聞こえなかった。

そう。まるで、何もかもが固まり動かなくなってしまったかのように……。

「カモくん！ 何か変だ!!」

「え？ 何がですかい？」

いまいち事の重大さを理解していないカモの問いかけを聞き流し、ネギは自分の武器を呼び寄せるために手を掲げ、

「杖よ!!」

疾走を開始した。

を借りて、何とか生徒を守りつつ麻帆良へ連絡を取るのが最善だ。

だから彼はこうして走っているのだが、

「皆さん!!」

ネギが勢い良くあけたふすまは、自分の生徒たちが止まっているはずの部屋の物。

しかし、そこにいたのはいつもの元気な生徒たちではなく物言わぬ石像だった。

「……………」

守れなかった生徒たちに、自分のあまりのふがいなさに……そして彼女たちの姿にかぶる、故郷の人々の姿にネギはしばらくの間絶句した後、

「くそっ!!」

怒声を上げて近くにあった柱を殴りつけた。

それだけで、何とかこらえることに成功した。

「兄貴……………」

「カモくん。一刻も早くここから離れる。石化させたということは、敵はまだこちらを殺すつもりがない可能性が高い。だったら、石化させられた人たちは命の危険はないと考えることができる。でも石化してしまった彼らが砕けてしまつたらもう元に直すことはできない。だったら、ここで戦闘がおこる可能性を一割でも減らしたほうが賢明だ

!!」

「なるほど。こちらも大した威力だ。さすがは千の呪文の息子といったところだね」
「!?」

敵から放たれた信じられない言葉に、ネギは思わず目を見開いた。しかし、すでに放たれた魔法はそんなことでは止まらず、一気にフェイトを飲み込もうとする!!

「だが、所詮はこの程度。父親とは比べるべくもない」

フェイトはそうつぶやくと同時に無造作に腕をふるった。その腕が通った後には、砂によつて作られた魔法の射手が五つ整列している。

「なっ!?!」

「西洋魔法!?!」

しかも、使い手はあまりいとされる土魔法!! その存在に目を見開くネギたちをしり目に、フェイトは無造作に指をパチンと鳴らしその射手たちに命令を下す。

「撃ち落とせ」

それだけで、たったそれだけで……ネギの雷の暴風はたった五つの魔法の射手によつて食い荒らされた!!

「そんな!?!」

雷の暴風と激突するかのように食いついた砂の射手は、瞬く間に暴風の壁を貫き、内側から雷の暴風を破壊していく。

数秒もしないうちに雷の暴風はその存在を維持できる形状を失い、雲散霧消して消え去った。

「将来はなかなかの人材になることは違いないけど、今の君では僕に勝つことは不可能だよ。今を見てわかっただろう。今の僕と君とでは天と地ほどの違いがある」

圧倒的な、絶望的なその光景に、ネギは思わず棒立ちになり、

「くっ……!!」

歯を食いしばって再び杖を構えた。

「……まだ戦うのかい？」

「あいにくと……逆境に慣れていまして」

そう。こんな状況は麻帆良で腐るほど味わってきた。スパルタンⅥしかり、エヴァンジェリンしかり、犬神ゲルしかり……。

だが、ネギはその相手たちに知恵と努力で食らいつき何とか食いさがってくることのできたのだ。

この少年を出しぬけない道理が一体全体どこにある!!

「ふむ……。なるほど、なかなかいい師匠に恵まれたらしい」

そんな風に戦意を失わないネギを見て、フェイトは何かを感じ取ったのか少しだけ感心したような声音で呟きながら、

「だが、わざわざ君の食いさがりに付き合う必要は感じないねネギ・スプリングフィールド。僕の目的は達成したから」

「!？」

そう切り捨てさつさと水のゲートで転移を行い、ネギたちがいた部屋から消え去った。

「そんな!？」

「くそっ!! ぬかった……。木乃香の嬢ちゃんがもういねえ!!」

カモの絶叫にネギは思わず顔から血の気を引かせた。先程は明日菜と刹那が殴り飛ばされるのを見て思わず頭に血が昇ってしまい、確認するのが遅れてしまったが、ここにいるはずの近衛木乃香はすでにその姿をかき消してしまっていた。

おそらくネギが到着する前にすでにさらわれていたのだろう。そんな事実は今更気付いた自分に舌打ちをもらしながら、ネギはあわてて壁にもたれかかって動けずにいる二人の生徒に近づいて行つた。

「明日菜さん!! 刹那さん!! 大丈夫ですか?! 今すぐ治療しますから待っていてください……あと、この後結構無理なお願ひすると思うんで、治療が終わるまではゆつくりと体を休めてくださいね!!」

刹那は頭に血が上っている様子で「お嬢様……お嬢様っ」とうつろに呟いている。こ

れは回復させたら独断専行しかねないと判断したネギは、先に明日菜へと駆け寄り彼女の治療を開始した。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

「こんなところにいたのかい、安川？」

関西呪術協会にて、作戦の無駄を省くために脅威とすら認識できなかったネギを無視し逃走を開始したフェイトは、ともに協会に侵入したはずなのにいつの間にか姿を消していた相棒を発見し安堵の息をついた。

相棒——安川父は、堀に向かって胡坐をかいて座っており無言のままある一点を見つめていた。

「一体どうし……」

いつ何句真剣な様子の彼の姿に疑問を覚えたフェイトはとりあえず疑問を解消するために質問を飛ばそうとして、

「……」

口を閉じた。

なぜなら安川父が見つめていたのは、ネギパーティーの中では真つ先に石化されてし

まった安川マリーの石像だったからだ。

「聞くまでもないことや思うけど……これ、お前がやったんか？ フェイト」

「……ああ。そうだ」

すまない。そう言おうと思ひ安川父に近づこうとしたフェイトに、

「近づくな!!」

安川父の怒号が飛んだ。

「っ……」

「……すまん。覚悟はしとったんや。おれは父親失格やし、いまさら何したところで娘に顔向けできひんのやから多少の敵対ぐらいはやったろやんけって、開き直った気でいたんや。でも、驚きやな……おれは意外と」

人の父親しとつたらしい。最後にかすれた声で漏らされたつぶやきに、フェイトは思わず息をのんだ。

その声は、今までフェイトが聞いたことがないほど……弱々しかったから。

「今のおれはお前に何するかわからへん……。すまんなフェイト……俺はここでリタイアや」

「……そうか。残念だ」

無表情の中に、どことなくつらそうな雰囲気をはじめながらそうつぶやいたフェイ

明日菜と刹那……二人の治療を終え、刹那を落ち着かせたネギが開口一番に言った言葉がそれだった。

今は少しでも戦力がほしい。だからネギは、真っ先に思い浮かんだまだ合流していない関係者の名前を挙げ二人にそう提案した。

あの犬神に鍛えられたマリリーならこの状況でも生き残っている可能性が高い。そうならば、少なくとも三人で戦うよりは楽な状態で戦うことができるはずだ。

だから三人は関西呪術協会内を疾走した。頼りになるもう一人の仲間を探すために。だが、ネギたちの希望は儚く崩れ去った。

「よお……遅かったな、坊主ら」

「そんな……」

「うそっ!!」

「マリリー……さん」

三人が見たのは他のクラスメイト達と同じように、命が感じられない石像となったマリリーと、彼女を守るように仁王立ちしていた安川父の姿だった。

「あんた……まさかあんたがマリリーを!」

「っ!! お、落ち着いてください明日菜さん!!」

「そ、そうです姐さん! あのおっさんは気力使いであつて魔法使いじゃねえ。石化魔

法なんて高度な魔法は使えねえよ」

その光景を見て、頭に血を上らせた明日菜が大剣状態のハマノツルギを召喚し、安川父に飛びかかる。ネギとカモはあわててそれを制止し、明日菜に彼には不可能だということを言い聞かせた。

「ああ、そうや。ようわかったなポーズ」

「では、あなたはこんなところで何をしているのですか？」

対照的に、安川父に対する警戒を解かないが冷静な様子の刹那の詰問に、安川父はなぜか照れるように頭をかいたあと、覚悟を決めたかのように肩をすくめて返事を返した。

「なあに……俺も所詮は人の親やったゆー話や」

娘こんななされてもあいつらに協力するゆーことは……どうしてもできひんかったん。

安川父から告げられた意外な言葉に、ネギと刹那は少し驚き明日菜ハツとした顔になって、ばつが悪そうに振り上げた大剣を下した。

「つまり……あなたはもうこの戦いに参戦はしないと？」

「お前たちに協力もできひんけどな。こう見えても雇われの身や。勝手に戦線離脱はしても、まだ契約切れてへんやつに牙をむくほど落ちぶれてもおらへん」

傭兵仁義を通す。あくまでそういった安川父にネギと刹那は少しだけ残念そうな視線を送り、明日葉は「くそっ……ちよつとカツコイイじゃない」とちよつとした病氣オシロコをこじらせかけていた。

「わかりました。それだけでも十分な収穫です……」

「ですがネギ先生……このままでは」

「戦力が足りひんやろうな。俺が言うのもなんやけど、あいつらは強いで？」

今まで敵だった安川父からの忠告に、ネギは少しだけひるんだ後、

「それでも、木乃香さんを見捨てるなんてことはできません」

しつかりと……安川父にそう答えた。

「はっ。そうかい……」

安川父はその答えにほんの少しだけ笑うと、ネギの胸元を指差した。

「あきらめるな。屈するな。それができたものにだけ、未来は開かれる」

「……それも、誰かの名言ですか？」

「阿呆。これはちゃんとおれの言葉や……。応援はできひんけど、せいぜいおもしろいもん見せてくれや」

安川父は最後にそう言い放つと、マリーの周りに結界用の札を張り付け彼女の石像の安全を確保。それが大体終わった瞬間、瞬動によってその場から姿を消した。

「……行きましょう。明日菜さん、刹那さん」

「はい」

「わかっているわよ……」

安川父を見送った彼らは、マリーにも同じように「必ず助けます……」と告げた後、関西呪術協会本山を飛び出した。

……†……†……†……†……†……

その頃のエヴァンジェリン。

「うう。のみすぎたく……目が回る。はく」

「マスター……お願いですから今は吐かないでください」

「そ、そんなこと言っちゃって……うっ」

「ちよ、マス……」

オヴオロロロロロロロロロ……。

割とシヤレにならない密度の茶々丸の殺気をくらっていた……。

……†……†……†……†……†……

はあはあはあ……。荒い息を吐きながら、関西呪術協会敷地内の森を一人の少女が駆け抜ける。

「な、なんなのですか、あの少年は……」

小さな体を必死に操り、図書館探検部によつて鍛えられた四肢を駆使し、つつかえつつかえでありながらも順調に森を走破していく少女の名は綾瀬夕映。フェイトの石化攻撃から唯一逃れることができた、麻帆良の一般人組の一人だ。

「人を石化させる攻撃……。瞬間移動じみた動き……。まるで三文ファンタジーの中に紛れ込んだみたいですよ……」

彼女がそう言つて、地面から突き出た巨大な木の根を飛び越えたときだった。

「んおっ？」

「え？」

木の根の先に突然出現した巨大な何かに彼女はぶつかつてしまい、その動きを止めた。

「ひ……ひはひ」

思いつきりぶつけてしまった鼻を抑える夕映に、その人影は申し訳なさそうに手を伸ばす。

「いや〜悪い悪い嬢ちゃん。怪我ないか？」

「あ、はい……………ご親切にどうも」

夕映は彼の手を取ろうとして、そちらに視線を向け……

「っ!？」

「ん? おお……………そういうたらおれこの姿やったな」

氷結した。

なぜなら、故に手を差し伸べてくれた人物は、

体長三メートル弱はありそうな巨体。人ではありえない赤銅色の肌。額からはえる三本の角。耳まで裂けた巨大な口と、化物じみた鋭さを持つ両眼。右手には人では到底操れそうにない巨大な棍棒。そんな特徴を備えた、

鬼だったからだ……………。

「どうやら召喚される場所ミスってもうたらしいな……………。俺は昔からそういう調整が苦手だから……………」

「ああ……………ああ……………」

独りごちるように顎に手を当てつ眩きを漏らす鬼だったが、今の夕映にそんな人間臭い彼の動作を観察している余裕はなかった。

物語の中でしか見たことがない幻想種。人にあだなし害をなす、最凶の存在。

「まあ、知られてもうたからにはしゃーない。悪いんやけど、死んでもらうで？ 嬢ちゃん」

そんな鬼に、お手軽感覚で殺気を向けられてしまった夕映にはもう、反撃する気力も逃げる気力も出すことはできなかつた。

「安心し。痛みはない。そんなもん感じひんくらの速度で沈めたるから」

鬼は最後に軽い口調でそう言うと、右手に持った巨大な棍棒を振り上げる。それを見た夕映は思わず目をつぶり、

パンツ!!

森の中に響き渡った、あまりにも軽薄な破裂音を聞き再び目を開けた。

「やあ……バカリーダー。大丈夫だったかい？」

「ニンニン。無事で何よりでござる」

「あらく!? 今の本物の鬼アルか!？」

そして、夕映が目を開けた先に映っていたのは、

かまえたスナイパーライフルから硝煙を立ち上らせる龍宮真名と、チャイナ服を着た長身の長瀬楓。そして、上半身が消し飛び粒子となって消えていく鬼を驚いたような顔で見ている古菲がいた。

「さて……。次の敵はいつたいたいどこかい？」

息を内心で着いた。

修学旅行中に何度も対峙した三人。神楽坂明日菜、桜咲刹那、ネギ・スプリングフィールド。このメンバー以外の増援は認められへん。どうやら時間がないおもて、増援呼ぶよりも木乃香お嬢様の奪還を選んだみたいやな。

いい選択だと千草は思う。だが、今の自分にとってはそちらの方が好都合だ、とも彼女は思った。

「天ヶ崎千草!! 明日の朝にはお前をとらえに増援部隊がやってくるぞ!! 大人しく観念しろ!!」

そして刹那から告げられたその言葉に千草は一層笑みを深くした。

なぜなら、彼女は言外にこう告げたからだ。『今すぐやつてくる増援はいない』と。

だったら千草には負ける気は全く起きない。なぜなら、この夜の数時間さえ稼げれば千草は日本全土をの魔法使いを敵に回しても圧倒できる力を入れることができるのだから。

「ははははははは!! お笑い草やな桜咲刹那。そんなで間に合う思とんのか?」

「なにっ!?!」

「どっどっどっどっど!!」

額に青筋をうかべこちらに向かって剣を構える刹那を挑発しつつ、千草は一枚の札を

木乃香に張り付けた。

「まあええわ。そんなことより、今はアンタらの相手が優先やしな……。とりあえずは」
誰を足止めに当てようか？ そう思い振り返った千草の眼には、

「はあはあはあはあ……」

何やらものすごい興奮した様子で、刀を構えている月詠の姿が目映って……。

「……………」

「……………（フルフル）」

無言のままフェイトに視線を移した千草は、いつのまにか月詠からかなりの距離をとった彼が「あきらめろ……」と言わんばかりに首を振るのを見て、大きくため息を漏らし、

「殿は月詠さんと……」

「はいっ!!」

「え、ちよ……さすがにその相手は!?!」

もう、明らかに性的に興奮している様子の月詠にドン引きした様子の刹那が、初めてそんな声をあげた。千草としてもなんか一人の剣士の貞操が危ない気がしないでもないのだが、『相手は敵やし……ええよな。氣い使ったらんで』と自己完結。結果一人の少女が新しい扉を開いてしまっても千草は何の責任もちません。

「お嬢様の力でも借りよか？」

「っ!!」

自分が何かされると分かったのだろう。猿鬼の腕の中で暴れる木乃香。しかし、相手は人外の式神だ。高々中学生の少女一人が暴れたぐらいで、その拘束を解くような柔な存在ではない。

「オン……」

そして、それと同時に千草が唱えた呪文によって、無理やり魔力を引き出された木乃香の体がエビぞりにのけぞった!!

「木乃香っ!!」

「お嬢様!!」

親友二人が悲鳴のような叫び声をあげるのに対し、赤毛の少年は冷静に状況を分析しているのか辺り一帯に出現した東方風の魔方陣に息をのんだ。

「これはっ!？」

「東洋流の召喚術だアニキ!!」

「気づくのが遅いわ」

にやりと千草が笑うのと同時に、その魔方陣からはすさまじい数の鬼が出現し始める

!!

「っ!? うそでしょ……」

「お嬢様の魔力を使つて手当たり次第に呼んだのか!？」

顔から血の気をひかせる三人に向かつて、千草はさらに絶望的な言葉を告げる。

「計130体の鬼神どもや。トイレに閉じ込められた恨みで出血大サービスしたつたで。感謝しーや」

「千草さん。警察に放り込まれたことは怒っていないのかい?」

「……あと百体ぐらい追加してもええやろうか?」

フェイトの言葉によつて額に浮かばせる青筋をさらに増やした千草は、有言実行とばかりにさらに百体の鬼を呼び出した。

「まあ、月詠さんにも鬼どもにも……殺さんようにだけはゆーといたるわ。ほな、さいなら」

その言葉と同時に、木乃香を抱えた猿鬼とフェイトを伴い千草は飛翔し天へと消える。あとには、無数の鬼と狂気の剣士に囲まれたちっぽけな三人の子供だけが取り残された。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

「で……………これどうすんのよ!」

原作のようにパニックになることはなく、しかしそれなりの冷や汗をかく明日名の詰問を聞きネギはとりあえず時間を稼ぐために、

「兄貴時間がほしい!! 障壁を……………」

「もうやってるよ!! 風花旋風・風障壁!!」
フランス・パリエース ウェンティ・ウエルテンティス

「なんや久しぶりに呼ばれたおもたら相手はおぼ……………って、きけや!」

台詞の途中で立ち上がった童卷の障壁。それによつて声を遮られてしまった鬼が「俺の……………おれのターンやったのに!」と絶叫するが、障壁に守られたネギたちには当然届くわけもなくその声はむなしく虚空へとこぼれました。

そんな中、障壁に守られた明日菜たちは頭を寄せ集めて簡易作戦会議を行い始めた。

「とにかく……………これからどうしましょう?」

「……………二手に分かれんのがベストだろうな」

「なっ!」

カモの言葉を聞き、刹那と明日名は思わず絶句する。しかし、ネギだけはその作戦に頷いた。

「確かに……………そのほうがまだ勝ちの目がある」

「どういうことですか?」

鋭い視線をネギにぶつける刹那。どうやら木乃香を攫われてしまい少し気が立っているようだ。

「僕たちの目標は鬼の打倒ではなくの木乃香さんの救出です。端的に言ってしまうえば、戦闘をする必要すら皆無です」

「だったら話は簡単だ。できるだけ戦闘をする手間を省いて、木乃香の嬢ちゃんをさらったやつらから木乃香の嬢ちゃんをさらい返せばいい」

「っ!! そうか……だから二手に!!」

「え、え? どういうこと?」

成績が悪い明日菜だけが理解できていないようなので、今度は刹那が懇切丁寧に説明を開始する。

「いいですか明日菜さん。さっき言ったように私たちの目標は敵の打倒ではなくお嬢様の奪還です。だったら、この鬼たちを無視して、飛行魔法が使えるネギ先生たちは先に進み、お嬢様を追いかけていけばまだ相手のたくらみがうまくいく前にお嬢様を奪還できる可能性があります。しかし、それでは鬼の追撃を受けてしまう。だから、ここで二手に分かれて、お嬢様の奪還組と……鬼の足止め組みに分かれればまだ少しは勝ちの目があると言っているんです」

「え? でもそれじゃあ……」

木乃香を奪い返せるまで、この場に残った人間は鬼と戦い続けなければならない。

「仕方がないことです……。少ない戦力でこれだけの相手と対峙しようなんてことを考えると、これしか道は……」

つらそうに言葉を吐き出すネギの姿に、明日菜は悔しそうにほぞをかんだ。

言っていることはわかる。木乃香を救うためには、ネギが提案した作戦がベストなのだ。でも、足止めに残った人がこれだけの数の鬼を相手に生き残ることなんて……できるわけが、

「あ……」

その時だった、ネギの肩に乗っかっていたカモから、そんな間の抜けた声が漏れたのは。

「なんなのよエロがも!!」

「ちよ!! この状況で罵倒とか普通にやつあたりにはしか見えませんよ姐さん!! じゃなくて、兄貴!! これってどう考えても命の危機ですよね!」

「え? ええ……まあそうだけど」

殺さないようにとだけは言われているらしいが、それだつてどの程度守られるかわからない。見た目が凶悪な姿をしている鬼たちが殺さないように痛めつけるなんて繊細なまねができるかどうかも怪しいとネギは思っていた。本人たちが聞いたら間違いな

「神明流は退魔の剣やで鬼さんら……」

狂気の剣士——月詠はくすくす笑いながら剣に気を通して行き、

「魔力で作られたもんを切るなんて造作ないわ」

その双剣を振りかぶった、

その時。

「せっかちな眼鏡剣士……わざわざそんな面倒なことせんでも出ていったるわ!!」

気よって作られた衝撃波が、竜巻の障壁を見事に粉碎しその射線上に立っていた鬼たちを消し飛ばした!!

「なっ!?!」

その射線はちょうど月詠をも貫く線を描いていたが、月詠は本能でその一撃を察知していたのか、何とか紙一重で回避に成功する。

しかし、その威力はまざまざと感じ取れたのだろう。50近い鬼たちを一撃で消し飛ばしただけでは飽き足らず、背後にあつた森まで根こそぎ粉碎したその攻撃を見て、月詠は目を大きく見開き、その攻撃を放った人物を凝視する。

「いったいどつからきはつたんですか? いままで、先輩らの近くにはいはらへんかつたおもうけど……?」

「はあ? どつから来たやと……。そんな決まつとるやろ?」

その人物は、まるで爆発するように一気に拡大霧散した竜巻の残滓をまといながら、
「師弟愛の力によって、はるばるハワイからやってきた……」

不敵に、豪胆に、

「スパルタンⅥ、只今参上!!」

己が名前を高らかに謳いあげる。

『はくん。仮にも麻帆良以上の結界に守られとる呪術教会の結界を抜くような奴が、突然関西の反乱勢力に力かしたいうんは、なんかきな臭いな……。まあ、そこら辺調べるんは本拠地の人に任せよか。とりあえずは……お説教やな』

事情を聴き終わったVIは、苦笑をうかべながら肩を竦めて自分を呼び出したお守りをトントンとたたいた。

『お前な……そんな大事になつとるんやつたらもつと早くにこれ使えや。そうしたら、木乃香の嬢ちゃんさらわれることすらなかつた思うで?』

『え? そ、そんなこと言われてもこれがなんなのか僕聞いていませんよ!!』

ネギが不満交じりの抗議の声を上げるのを聞き、VIは驚いたように口をぽかんとあけ、

『あく。犬神君の仕業やな……。あの金の亡者にしては珍しくハワイ旅行を純粹に楽しんでつたみたいやし……。大方召喚されて邪魔されんのがいややったんやろ』

『え? 何そのホラー? 犬神さんが旅行楽しむなんて……幻覚でも見ていたんじやないんですか?』

声を合わせて同時にそういつたネギと明日菜のシンクロした意見に、VIは思わず顔をひきつらせながら話を続けた。

『このお守りは最近アリアドーネで開発された最新の召喚魔法具や。まだカタログにも

載ってへん、機密品なんやで？」

『なんでそんなもの犬神さんが……。ああ、やつぱりいいです。どうせ黒い理由があるんでしよう？』

『……ほんでな』

『否定しないんだ!?!』

ネギの鋭い指摘にVIは一瞬だけ言葉をとぎらせた後、何事もなかったかのように説明を続ける。

『この魔法具の特徴的などころは……。《状況にぴったり合った援軍を、使用者の知り合いの中からオートで選別》することや。つまり、今回の場合は少数で大多数の足止めが可能なユニット……。つまり、お前がしつとる中で一騎当千の強さを誇る最強の俺様と呼ばれたわけやねん!!』

ドヤア……。と言わんばかりの表情で、鼻を膨らませながら胸を張るVIに苦笑をうかべなたあと、ネギは真剣な表情になってVIに問いかける。

『ですが師匠、今回の鬼は200近くいるんですよ？ 師匠一人ではやはり無理が……。僕たちの中で誰かひとり、残していった方がいいんじゃない？』

しかし、ネギの提案をVIはネギの目の前でストップと言わんばかりに手を広げること
で無理やり断ち切る。

『阿呆……。聞いた話やと、その白髪は間違いなく別格の実力者や。そんな相手とケンカすんのにみすみす戦力減らすような提案すんな』

それにな……。そうつなげたVIは不敵に笑いながら、体中に気を満たし戦闘態勢を整えていく。

『自分に心配されるほど俺はまだ落ちぶれてへんで？ 鬼二百やつて？ はっ。俺倒したいんやつたらその100倍は用意せえへんと話にならへんな』

その言葉と同時に、全盛期のエヴァンジェリンを彷彿とさせるほどの（もつとも彼女の場合は魔力だったが）気を左手に貯めはじめたVIを見て、ネギたちは啞然とした後、あわてて進撃の用意を開始した。

……†……†………†……†……

自分の砲撃にうまくまぎれて敵の追撃を開始し始めた弟子たちの背中を見送った後、VIは気や殺気でネギたちを追わないように牽制した鬼たちへと視線を戻す。

何より注意すべきは鬼とちやうけど……。内心でそうこぼしながら、さらにVIは視線を移し自分に向かって剣を構える双剣の退魔士へと焦点を当てた。

興奮している。それも信じられないほどに……。

やたらとエロく見えてしまうのは彼女が美人だからなのだろうか？ だとしたらなかなか不憫なビジュアルであるといわせてもらおうが、VIだけはその興奮の理由を正確に見抜いている。

強い奴と戦える。命のやり取りができる。こいつはそれを恐れることなく……むしろ歓喜へと変えることができる人種だ。しかも、戦闘狂などという生易しい言葉など、突き抜けてしまうほど壊れてしまった……

「俺とおんなじ……奴やな？」

「あはっ……。同族にこんなところで会えるやなんて思ってもいませんでしたわ」

白銀の刃を陶醉したような表情をしながら、口から出した赤い舌でペロリとなめる剣士月詠。その笑みは明らかに壊れきった笑みであるのに、VIは畏れることも、気持ち悪がることもなかった。

「はっ……メインデツシユを変えてくれたようで何よりや。あんな未完成品より、俺の方がうまそうやろ？」

VIは……月詠以上の歓喜の笑みをその顔に浮かべていたのだから!!

「俺らも忘れてもらったたら困るでニイちゃん」

「鬼の底力みせたるわ」

そう言って一斉に武器を構える鬼たちも、彼女との戦いを行うことと比べるとずいぶ

んと安っぽいものを感じる。

だからVIは肩をすくめただけで、鬼たちに対する返事を終わらせた。

「剣士以外やつたらかまへんで。適当に狩れや」

代わりに彼は見えない誰かにそう言い放ち、瞬動で月詠に対して突進を仕掛ける!!

それと同時に『かなわないな……』という声が聞こえたかと思うと、信じられない精密さで降り注いだ無数の弾丸が、VIに飛びかかろうとしていた鬼たちに風穴を開けた!! 「なんや!?!」「術式処理された弾丸やと!?!」「狙撃や! 撃ち手探し出せ!!」と、弾丸によって倒れた同胞たちに驚きながらも、冷静に対処を開始する鬼たちをしり目にVIのコブシと月詠の剣が交錯する!!

「世界最強——ジャック・ラカンが弟子、スパルタンVIこと……六重トウジヤ」

「神鳴流異端剣士。掃討双刀……月詠言います。以後よしなに」

たがいに名乗るはおのれの称号。古臭いかもされないが、二人にとっては大事なことだ。なぜなら、

「今から自分を倒す相手の名前を、知らんゆーのは寝覚めが悪いやろ!!」

圧倒的な密度の気と、鋭い刃物のような気が激突する! それによって辺り一帯には爆風が吹き荒れ、周囲を固めていた鬼たちごと森の木々を薙ぎ払った!!

ほんの少しでも回避が遅れていれば、自分の首は飛んでいた。それくらいの予想がつか程度には彼は冷静さを保っていた。

「元・世界最大の暗殺者組織《帝国》……カイザー皇帝が娘。安川姫」

その大ばさみの持ち主は、冷厳な瞳でコタローを睨みつけながらネギにひらひらと手を振った。

「ネギ……助けに来たよ」

……†……†………†……†………

「ネギ……次何をするべきかは、わかってる？」

「え……それ以前に何でヒメちゃん!?!」

てつきりクラレンスあたりが来るものと予想していたネギは、予想すらしていなかった援軍の登場にコタロー以上に度肝を抜かれた!

「……私じゃ、だめ?」

「ダメっ!!」

チツ……。と舌打ちを漏らし、眼をそむけるヒメ。マリーなら無条件で許してくれるようになる愛らしい瞳をネギに向けたヒメだったが、残念なことにその瞳は年上（ゲル

を除く)のみに効果を発するものであつて同年代のネギにはどうも通用しないらしかつた。

「出番がなかったから……」

「メタな発言はやめて!!」

「私にも活躍の場があつていいと思つた……」

「それもメタだから……」

「このままでと某吸血鬼の天敵さんみたいになつてしまふ……」

「姫神さんを馬鹿にしてるの!?!」

某科学と魔術が交差しちやつた世界で、不遇な扱いを受ける初期ヒロインの一人の顔を思い出しながら怒声を上げるネギに、ヒメは軽く肩を竦めた後ほんの少しだけ真剣な色かにじみ出た言葉を一つだけ告げる。

「安心してネギ。この程度の相手……クラレンスが来る必要もない」

そのセリフに反応したのは、当然のごとくネギではなくコタローだった。

「はっ……タメの嬢ちゃんが、不意打ちきめられたからつてずいぶんいきがつてくれるやんけ!!」

額に青筋を浮かべながら、先ほどの恐怖はどこへやら……瞬動を駆使し無数の狗神を従えながら、コタローは突撃を開始。凄まじい速度でヒメへと近づき、至近距離で気力

全開のコブシを叩き込まんとする!!

だが、

「八卦・坤・開。帝国式歩法術影弄^{かげろう}」

コタローのコブシが突き刺さった瞬間、ヒメの体がまるで幻のように掻き消え、

「なっ!?!」

「暗殺者相手に何度も後ろを取られるなんて……関心しない」

再び背後に現れたヒメの大バサミによる挟撃がコタローに向かって襲い掛かった。

今度は肩を狙った斬撃。致命傷はギリギリ回避できるだろうが、格闘家の彼にとつて片腕を失うことは死亡することに等しい。

「があああああああああああああ!?!」

技後硬直で動かない体から気を噴出させることにより無理やり体勢を入れ替え、何とかその攻撃を回避するコタロー。

しかし、ヒメはそんな無様な回避しかできなかったコタローを追撃することはなかった。まるでいつでも殺せるといわんばかりに……。

「わかったでしょうネギ? 心配する必要なんて皆無」

「……わかった、ヒメちゃん。無理しないでね?」

ネギはそういうと、明日菜と刹那を伴い急ぎ儀式場へと向かう。コタローは彼らを止

めることはなかった。

先ほどの攻防で明らかに格上とわかったヒメ相手にそんな余裕を見せることはできなかったし、なにより……。

「じょーとーやないか……」

自分を侮られたことに……そして何より、侮られるような態度をとってしまった自分に激しく腹が立ったから。だから!!

「ほんまは女に本気出すんはポリシーに反するんやけど……すまん。全力で叩きのめす!!」

「無理。暗殺者を名乗る相手にそんな甘いポリシーを語りかけている時点で、貴方は戦士失格……」

女だろうが男だろうが、子供だろうが老人だろうが、私たち暗殺者は差別しない……。等しくただ殺す。

ヒメはへらへら笑いながらも暗殺者としては一流だった（人格面はゴミ屑以外の何物でもなかったが）父親からの唯一の教訓を思い出しながら大バサミを構える。

「私は育ちが悪いから……ついうっかり殺してしまっても、文句はいわないでほしい」

そしてヒメは手刀にした手を前に構え……

「八卦・巽・開。帝国式攻撃気弾《豪法・無音針》」

まるで何かを投げつけるようにその手をふるった。

……自分の真横の茂みへと。

「は？」

何しとるんや？ とコタローは首をかしげるが、

「おっと？」

「きゃつ!!？」

茂みの中から軽い驚きの声と、少女らしい甲高い悲鳴を上げて二人の人物が飛び出してくるのを見て驚愕の表情をうかべる。

「まさか気づかれてしまうとは……うかつでござった。流石は帝国創始者皇帝カイザーのご令嬢といったところでござるか？」

「その動き……甲賀忍者？ 時代遅れの忍こつとうびんがこんなところに何の用？」

「うくん。拙者意外と寛大なつもりでござったが、どうやらそうでもないみたいでござる……」

少し怒ったでござるよ？ 細い瞳をほんの少しだけ見開きながら、抱え上げていた少女を下ろしたチャイナ服の長身の女性——もとい、少女……長瀬楓は手元に、手品のように素早くクナイと手裏剣を出現させながら、ヒメとコタローに対峙した。

「一応あれは拙者たちの担任でござってな。ピンチとあつては、みすみす見逃すわけに

もいかなかったので援軍に参ったのでござるが……」

「じゃあ仲間？」

それは悪いことをした。あとでマリーに怒られる……。そんな風にどこか外れた心配をしているヒメに向かって、

「いいや……そうではござらん」

楓はとんでもない速さでクナイを投げつけた!!

「っ?」

姫はその攻撃にほんの少しだけ驚いた様子で、目を見開きつつ再び袖口から飛び出させた大バサミでその一撃を迎撃。あっさりと弾き飛ばした!!

「……何のつもり?」

「いや、拙者たちはネギ坊主の味方ではあっても、そっちに味方にはなりえないということござる」

楓はそう言いながらホケホケした笑みをひっこめ、鋭い眼光が宿った瞳で姫を睨みつける。

「《帝国》は依頼さえあればどんな対象でも殺す凶悪な暗殺者集団でござる。その殺しに貴賤はない……といえは綺麗に聞こえるでござるが、ようは金さえもらえればどんな奴でも殺す無差別殺人集団でござる。そんな輩を束ねていた皇帝の娘を……たとえネギ

坊主本人が《友人》と言っていたからと言って、みすみす見逃すほど忍びは甘くないでござるよ……」

そう言いながら、クナイを構える楓に対し「どうやら勘違いされているようだ……」とようやく気付いたヒメは若干困ったように一言、

「どうすれば、危なくないと思ってくれる?」

しかし、その質問の返答はそっけなく、

「そうでござるな……とりあえずは」

冷たいものだった。

「拙者を無傷でとらえて見せたなら、考えないでもないでござる」

その言葉と共に、楓の体が無数に分かれた!! いや、無数に出現した!!

「っ!?」

忍術の固有技能……影分身。その威容に驚愕のあまり氷結したヒメとコタローに、楓はいつものようなのんびりとした笑みに戻りながら名乗りを上げる。

「甲賀中忍・長瀬楓……足止めと、試し。時間が惜しいので両方同時にやるでござるよ。まとめてかかってくるがいい」

今ここに、バトルジャンキーと暗殺者……そして忍者のバトルロイヤルが幕を開ける。

計算高い打算が脳内を飛び回る中、フェイトは自然体にしか見えないリラックスした体勢で千草が行っている儀式をぼんやりと眺めていた。

しかし、

「ここは神聖な場だよ？ 不意打ちというのは少々無粋じゃないかな？」

「!？」

ひどく落ち着いた声音とともに、フェイトは突然自分が立っていた棧橋をふみならした。いや、そのような生易しい光景ではない。フェイトはたったそれだけの行動で、数百人の人間は乗ることができる棧橋を踏み抜いたのだ。

飛び散る木片はまるで散弾のような速度と殺傷能力を持ったまま棧橋の下へと飛来。そこに隠れるように、杖に乗り超低空飛行で飛行していたネギを容赦なく打ちすえかける！

「風花・風障壁!!」

しかし、ネギもその程度の予測は働かせていたのか、自分の前方にトラックの衝突すらはじき返す強力な障壁を展開。木片の散弾をはじき返した後、フェイトが踏み碎いたことにより空いてしまった、棧橋の大きな穴から杖に乗ったまま飛び出した。

「棧橋の陰に隠れて奇襲をかけようというのはいい判断だったよ、ネギ・スプリングフィールド。だが、そういった行動は敵の索敵能力がどの程度なのかを知ってからやる

しき交じりの視線を向けるがフェイトはいたって平然とした顔で、その体を殴りつけた！

「がっ!!」

砲弾のように吹き飛び、棧橋にたたきつけられる明日菜。それを見たネギはあわてて呪文を唱え、棧橋に手をたたきつけた。

「風花旋風・風障壁!!」

それと同時に突発的に発生する巨大竜巻の目くらまし。障壁というよりこちらの視界を奪って体勢を立て直すのが目的といったところか？

幼いなら幼いなりに、足りない戦力を補うためのこざかしい戦い。フェイトはそんな戦い方をするネギにほんの少しだけ感心した感情を向けながら、

「石^{カコン、オンマ、ベトロ、セオース}化の邪眼」

その戦略を容赦ない力技でたたきつぶした!!

閃く閃光が風を吹き飛ばし、棧橋を石化粉碎。すさまじい轟音を立てながらネギたちがいると思われる場所を大きくなぎ払う。

「……」

風の代わりに今度は、自分が石化した棧橋が落ちる水しぶきで視界を奪われてしまったフェイト。しまった、やりすぎた……。と、内心ほんの少しだけ自分の自重のなさを

責めながら、のんびりとネギたちが出てくるのを待つことにしようと、フェイトが棧橋の腰をおろしかけた時だった!!

「っ!!」

「?」

背後から上がる千草の声にならない怒声。それに、思わず振り返ったフェイトは今度こそ目を大きく見開いた!

「返してもらいます!!」

「……せつちゃん?」

そこには、まるで天使のような純白の羽を広げ、近衛木乃香を儀式場から引き剥がした桜崎刹那の姿がそこにあつたからだ。

「くそっ……」

珍しく表情を動かし刹那に向かってあわてて魔法を発動させようとするフェイト。しかし、

「やせなこよ」

「っ!!」

自身の背中に向かって放たれた雷の暴風を即座に感知した彼は、その射線上に千草がいるのも確認し、舌打ち交じりに詠唱していた魔法を破棄。無詠唱で強化された障壁を

展開しその攻撃を受け止める。

「ネギ・スプリングフィールドっ!!」

「引っかかったね……」

右腕に閃光がかすったのか、わずかに手を石化させながらも、不敵な笑みを浮かべたネギが明日菜に肩を貸されながらフェイトに向かって対峙した。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

時は数分前にさかのぼり……。

「どうしましょう……儀式始まつちやっています……」

「それもかなり進んでいます。もう一刻の猶予もないです」

湖の様子を、湾岸の茂みで観察していたネギパーティーの面々は、自分たちが予想していたよりも進んでしまっていた事態に焦りを覚えながらも、このまま戦ったとしても勝てないということはきちんと理解していたのか、ほんの少しの小休止を兼ねた作戦会議へと入った。

「戦つたらまず勝てません。これはもう自明の理ですよね?」

「だとしたら木乃香嬢ちゃんの奪還が最優先だが、ただでさえ格上の相手を出し抜くの

によって、不意打ちという要素を考えさせないようにする。僕たちはしつかりとした戦力を足止めにつかつたから、まさか全員で来ているとは思っていないことも逆手に取ったね。次に魔法無効化の剣を持つ彼女を不意打ち用のコマとしてさらに切り捨てる。そうすることによって、不意打ちで使える駒は彼女一つだと錯覚させ、さらにさっきの切り札発言をすることによって僕たちにその一撃が渾身の攻撃だと誤認させた。そういうすることによって僕の警備が緩んだすきに……」

「刹那さんに木乃香さんの奪還を頼んだんですよ……。どういうわけか君は、僕に対してかなりの警戒心を抱いているみたいだったからね」

あれだけの戦力を呼び出したのにまだ鬼を追加させたり、足止め役として月詠やコタローを各地に配置したフェイトの態度をネギは不思議に思っていた。自分で言うのもなんだが、自分達はまだまだ未熟だ。今のフェイトならまず間違いなく片手であしらう程度のことはしてくるだろう。

だが、フェイトはあくまで過剰なほどの防衛網をしき、ネギたちの来訪を警戒した。まるで、それだけの戦力差を覆す何かを、ネギたちのだれかが持っているかと警戒しているかのよう。

「実際誰を警戒しているのかはかけだつたんだけど、この中で一番ネームバリユーが大きいのは《英雄の息子》である僕だ。だから初めの囹は僕にして、一気に警戒度を釣り

上げたただけど……どうやら正解だったみたいだね」

不敵に笑いながら、そう告げるネギを見てフェイトはネギの評価を改める。

父親のようなめちやくちやさはないが……これはこれで十分脅威となりえる存在だと。

「それにしても……桜崎さんにあんなかくし芸があつたなんて」

「明日菜さん……せめて隠し玉っていつてくください」

「あの羽いつモフモフできるのかしら？」

「明日菜さん……モフモフの前の僕がガチガチになりそうです」

「え……ガチムチ？」

「……………泣いていいですか？」

一瞬自分の感覚が狂つたかと思つてしまうほど情けないやりとりをしているが、とにかく彼は脅威になるとフェイトは思った。

「認識を改めようネギ・スプリングフィールド。君はれつきとした脅威だ……だからここ」

完全にたたきつぶす。

フェイトがそう言つて魔力をためるのを見て、ネギは不敵な笑みのまま。

「だが断る！」

「い、犬神さん……」

感極まったネギが、その人物の名前を呼びながら涙を流した。そんなネギを見て人物は、

「ああ……野菜。一ついいか？」

「は、はい!!」

優しげな声をかけネギに近づき、

「よくも僕のハワイ旅行を邪魔してくれたな？」

「あれ!! この状況での第一声がそれ!! って、へぶっ!!」

とんでもない気が込められた右ストレートによって、ネギの顔を打ち抜いた!!

……†……†………†……†……

いきなり助つ人にぶんぐられて、顔を大きく陥没させながら吹き飛ぶネギを見てフェイトは思わず氷結する。

え? と発言するような形で中途半端に開いた口が何とも間抜けな雰囲気醸し出していた。

「…………ネギいいいいいいいいいい!!」

あわてて吹っ飛んだネギのもとへ走っていく明日菜。そして、ぐったりと倒れ伏すネギの体を抱え上げた後、

「だめだわ!!」

「一撃で!?!」

文字通り白目をむいて気絶しているネギを見て、そう絶叫を上げた。意味不明すぎる事態に思わず声を上げるフェイト。そんな彼らの寸劇を無視しながら犬神はマイペースに語りを始める。

「まったく貴様というやつは……。飼い犬に手をかまれるとはまさにこのことだな。いつも仕事ばかりしていたからたまには事務所全員の休暇も兼ねた長期の学校行事に参加するのも悪くないとふと思つてしまい、久しぶりに年相応に楽しんでいた僕の青春を叩き潰すのに足る正当な理由があつたと?」

「ネギが死んだわ!!」

そんな犬神の質問にネギが答えられないと告げる明日菜に対し、犬神は『うむ』と一つ頷いた後、

「この人でなし!!」

「自分で言うのか!?!」

「馬鹿者。外国人の貴様にはわからんかもしれんが、これは日本の様式美だ。実際ネギ

が死んだわけではない」

そういう犬神の背後では、必死の形相をした明日菜がネギに対して人工呼吸をしていたりするのだが、

「……」

フェイトの必死の訴えがこもった視線を真正面から受け止めながら、犬神はその視線を封殺した。この男、確信犯だ。

「さて、見たところ貴様がこの状況にネギたちを追い込んだ主犯に見えるのだが……」

犬神はそれだけ言うとフェイトをジロツと睨み付け、

「ふむ。なるほど……確かにこれはネギの手に余るか？」

ある程度フェイトの実力を見破った。その言葉に表情の変化が乏しかったフェイトの顔が驚きの顔に代わる。

まさか底が見破られたと思ってはいないが、少なくとも本気を出していない……また、本気を出せばネギを圧倒する程度の実力があることは見破られている。

犬神の冷徹な態度のほんの少し気圧されながら、フェイトはコブシを構え体にインストールされている拳法の構えをとる。

「犬神ゲル……だったかな？　確か僕の調べでは現在ハワイに行っている、外道少年探偵で、金がかかっていると動かないと聞いているんだけど？」

「その金がかかっているからこうして動いている。クライアントは麻帆良の学園長で、僕は契約期間中に起るその野菜の脅威の排除を依頼されている。当然、今回のことも見過ごすことはできない」

面倒なカードを切ってくれるじゃないか、麻帆良。

遥か東で拠点を構えるタヌキジジイの写真を思い出しながら、フェイトは内心で舌打ちを漏らした。

「ならば引いてはくれないかな？ 君が麻帆良に出された報酬の三倍……いや、四倍だ

そう」

「ちよ!？」

背後で人工呼吸していた明日菜が思わず恐怖にひきつった声を上げる。大方ゲルが平然とその話に乗っかると思ったのだろう。

ゲルは殺気がこもったどす黒い視線を明日菜に向かって飛ばした後（明日菜は冷や汗をかきながらネギの人工呼吸に戻った）、鼻を鳴らしてその話を蹴り飛ばす。

「僕が麻帆良から払われる予定の報酬は3000万だ。早々ホイホイと出せるわけがない……」

「手持ちは12000万だ。ギリギリだがかまわないかい？」

「わが命に代えても、クライアント」

「やっぱ裏切るんじゃないのおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

明日菜の魂のツツコミ。しかしゲルには届かない。彼の両目は完全に《?》の形になつており、文字通り金に目が眩んでしまつていた。

バカな冗談は置いて
閑話休題。

「とまあ、そんな冗談はさておいて……」

「ホントに冗談なんでしようね!」

「当たり前だ。こんなところで野菜を売ったら麻帆良で依頼が入らなくなるだろう」

「ネギに対する情とかではないのは分かっていたけど、せめて契約は破らないのがプロフェッショナルだとか言つてよ!」

真剣とかいてマジと読む。そんな目をした犬神がさらりと告げた裏切らない理由に、明日菜は思わず怒声を上げる。

「ふむ。ところでうちの助手はどうした? こんなことになっているのに来ていないとは職務怠慢だな。いろいろとオハナシしないといけないことがあるからつれてこい」

そんないつもの空気へと周囲が変わり始めたときだった。ゲルがふとした様子で思ひ出した風に告げたその質問に、空気が一気に凍りついた。

「……どうした?」

不思議そうに首をかしげる犬神。明日菜は似合わない動作をする犬神からダラダラ

と冷や汗を流しながら目をそらす。

犬神は次に刹那へと視線を戻すが、こちらも同じように目をそらした。どうでもいいがスカートで空を飛ぶのはどうなのだろう? と、刹那痴女説を心の片隅の止めながらゲルは再びフェイトへと視線を戻し、

「ああ。彼女なら申し訳ないけど、石化魔法で行動不能になってもらったよ」

ほかのメンバーが「うわっ……こいつ言いやがった!？」と、ある意味度胸があるフェイトの行動を驚きと恐怖と共に、ほんの少しの関心を込めた吐息でほめたたえる中、

「……………」

犬神だけは……先ほどのふざけきった殺気とはまるで違う、鬼気と言つていいほどの凄絶な殺気をフェイトにぶつけた。

「……………ああ、そうか。よくわかった」

ネギへの人工呼吸をつづけて、何とか呼吸を再開させた明日菜の肌が泡立つ。刹那の腕に抱かれた木乃香は本能的に強く刹那を抱きついた。直感的に……ここから先はかなり凄惨な戦いになると悟ったのだろう。

「神楽坂……桜咲。その役立たず二人を連れてさっさと逃げろ。仕事の邪魔だ」

そして犬神はそれだけ告げると、全身の気を高速回転させ瞬く間に戦闘態勢を整える。

「悪いが……お前たちに気を使う戦いができそうにない」

そう言つて、ポケットに手を入れながら半身の構えをとる犬神に、事態がようやく呑み込めたフェイトはあわてて転送のゲートを千草の足元に出現させる。

「っ!? なんや新入り? いったいどうなつてるんや!？」

「千草さん……悪いけどここは逃げてください」

あなたをかばいながら彼を抑えきる自信がない。フェイトが言外にそう告げるのを聞き、千草は驚愕に目を見開き……水のゲートの中へと消える。

「……理由を聞かせてもらおうか?」

そして、それを見届けたフェイトはそれだけ言うと、冷や汗を流しながら犬神へと振り返り質問をぶつめた。

彼の背後では翼を広げた刹那がネギや明日菜を回収し、はるか彼方へと飛び去つて行くこうとしているが、今のフェイトにそれを止められる余裕はない。

目の前に、信じられないほど凶悪な殺気を垂れ流す敵が立っているからだ。

「理由? 決まっているだろう」

犬神はそんなフェイトに簡潔な事実を告げる。

「安川^{あれ}は僕の所有物だ。生涯最低賃金で働かせる代わりに、生涯守り通すと命にかけて誓つた」

それは、自分の命を救ってくれた安川父との契約。安川マリーの身の安全を一生涯守り続けるという、命を懸けたたがわぬ契約。

犬神ゲルは外道である。だが、それ以前に彼はプロフェッショナルでもあった。

「受けた仕事は決して失敗しないのが僕の流儀だ。話を聞くにおそらく永久石化ではないのだろうか……だからと言って」

そこで犬神は瞬動を使い、不意打ち気味にフェイトの前へと出現した!!

「っ!!」

見えないほどの速度でポケットから打ち出される両のコブシ。フェイトはそれを大きく身をのけぞらせることで何とかかわすが、それが生み出した光景に思わず顔をひきつらせた。

ゴツ!!

そんな形容しがたい轟音と共に、フェイトの背後にあった湖が……裂けたのだ。さながら十戒が如く巨大な二つの滝となった湖。その光景はどこかで見たことがあった……。

あれはたしか、自分の主が見せてくれた先の大戦での光景。一人の英雄が使いこなし、たった一人で軍勢を蹂躪した究極武術。

「豪殺・居合拳!!」

「僕の所有物モノに触れた罪を……ただで見逃すわけにはいかない」

それだけ告げると犬神は大きく身をのけぞらせて回避をおこなったために姿勢が崩れているフェイトに向かって、気によって信じられない威力まで昇華された蹴撃を叩き込む!!

「がはっ!?!」

人間の攻撃とは思えない、砲撃の着弾でもうけたのではないかと錯覚してしまう衝撃と轟音。それが自身の体から発せられたとフェイトが認識した瞬間、彼の体は天高く打ち上げられていた。

「僕の機嫌を損ねるバカは……」

犬神は自分が引き起こした信じられない光景を、鼻を鳴らして淡白に見詰めた後、
「僕に蹴られて死ぬがいい」

宙をうかぶフェイトに向かって気力を使った高速跳躍を行い、追い打ちをかける!!

21話・終わる騒動

ゴツ!!

あれからずいぶんと離れたというのに、いまだに巨大な激戦の音が響き渡ってくる湖を振り返り、翼を広げた刹那は思わず冷や汗を流した。

「まだ決着がついていないって……あの白い少年、犬神さんと戦りあえているのか!」

信じられない実力だった。下手をすれば大戦の英雄たちに匹敵するほどの実力を持つ（後で聞いたが下手をしなくても持つていたらしい……）犬神と拮抗することができるとの實力。正直あのまま犬神を呼ばないまま戦っていたら勝てたかどうか首をかしげざる得ないと刹那は思う。

「刹那さん……大丈夫? 重くない?」

「な、なんともないですよ」

「せつちゃん……顔ひきつってる」

そして、自分の両足に石になりかけているネギを抱えてつかまっている明日菜の質問に刹那はさらに顔をひきつらせた。正直に言うのは失礼なので控えたが……かなり重い。

別に明日葉が重いとかそういうわけではなく、彼女が抱えているネギが重たくなっていつているのだ。それはそうだろ。ネギの体は人体から石になりつつある。重くなるのは当たり前。そこに人間二人を抱えて、なれない翼での飛行……。明らかに刹那の積載量を超えていた。だが弱音を吐くわけにもいかなかった。一刻も早くあの戦場を離れ木乃香を安全な場所に、ネギを治療できる場所に連れていくためには自分の翼による飛行が必要不可欠なのだから。

リアル子泣き爺を背負った気分を味わいながら、刹那はやせ我慢交じりに笑みを浮かべて。

「大丈夫ですよお嬢様……。この呪われた翼で誰かを救うことができるのなら……」

刹那がそう言った時だった。

「せつちゃんのあほ!!」

「え? お、お嬢様!?!」

突然の木乃香による罵倒を受け刹那は目をむき慌てふためいた。

な、なんか嫌われるこというてもうた!?! と、混乱のあまり素の口調に戻って内心慌てふためく刹那。そんな刹那に対して、木乃香は目に強い光を宿し刹那のほほを両手で挟んだ。

「なんでそんなこと言うんよ。私はせつちゃんのこと大好きや。やから、そんな自分を

不幸にするようなことは言わんとつてえや！」

刹那は、木乃香の怒りの原因がわかりほんの少し安堵の息をもらす。しかし、いくら木乃香の言葉であっても幼少時代に刻まれたトラウマはそう簡単に氷解するものでもなく、彼女は苦笑交じりにあきらめの言葉をもらした。

「で、でもお嬢様……私の翼は呪われた翼です。白い翼は不幸を呼ぶと……だから私は故郷にいられなくなつて」

「せつちゃん……」

諦観の笑みを浮かべる刹那に、木乃香はさらに言葉を重ねた。

「そんなことあらへんよ。その翼……白くてきれいで、まるで天子様みたいで——私はせつちゃんのこと、もっと好きになつたよ？」

木乃香のその言葉に、刹那は大きく目を見開き……先ほど言われた言葉が信じられずさらに木乃香の瞳を見つめ、

「ん？」

その瞳に一点の曇りも偽装もないことに気付いた後、

「このちゃん……」

「なに？　せつちゃん？」

「……………」

のどを詰まらせながら、声を震わせながら、

「ありがとう……。私のことを好きでいてくれて」

「うん。せつちゃんもありがとうな？ 私のことを助けてくれて……」

涙を流しながら、ようやく今までのお礼を言うことに成功したのだった……。

ちなみに、

「あの……わたしもいるんだけど？ って聞いてないか」

「あの……僕も死にかけているんですけど？」

「あれ？ ネギ起きたの？」

「はい……」

「体大丈夫？ どんどん石になっていつているけど」

「むしろ犬神さんに殴られたときのほうが痛いです……」

「うん。まあ、それは仕方ないからとりあえず置いておくとして……」

「そうですね、置いておくとして……」

「……………よそでやってっ？」

先ほどのほのぼのとした空気とは若干違う桃色の空気を放ち始めた頭上の二人に、

を見せずただひたすらコタローだけを狙い撃ちにしてきていた。はじめのうちは「狙いがそろっただけかいな？」と楽観的に考えていたコタローだったが、さすがにここまで来ると疑念の声を上げざる得ない。

「え？ 何を言っているでござるか？」

「バトルロイヤルでは複数人で組んで強い相手一人をたたくのが鉄則。だから敵だろが一時的に手を組む必要がある」

「いやいやいやいやいや！ 自分で言うんもあれやけど、お前ら俺より強いやろうがあああああああああ！ 一人でも十分勝てるやろ!？」

そう。原作で圧勝した楓は言うに及ばず、ヒメに至っては初めのあいさつ代わりの攻撃を回避することすらコタローにとっては命がけだった。

そんな二人を相手取って、たった一人で立ち回らないといけないとか何の悪い冗談だとコタローは思う。

「ハハハっ!! コタロー殿。バトルロイヤルでは弱者は真っ先に狩られるものでござる」

「たまたま狙いが一緒なだけ。結託しているとか失礼なことを言うのはやめてほしい……」

「さつきと言っていることが全然ちや……うぶっ!？」

というわけで、万に一つの奇跡も起こらないままコタローはあっさり二人の波状攻撃の前に散り、きれいに弧を描きながら吹っ飛んだあと地面にバタリ。返事がないただの屍となつてしまった……。

「ふっ……またつまらぬ物を倒してしまった」

「必殺完了」

実は仲いいんじゃないだろうか？ と錯覚してしまうほど見事な決めポーズをとる二人。だが、やはり二人は敵だつたようで……。

「では、決着をつけるとするでござる」

「望むところ」

ひとしきりポーズをとつて満足した二人は、即座に顔を引き締め互いに相対した。

先ほどのコタロー戦とは一線を画した、濃密な殺気と闘気がぶつかり合う。

「……無傷で拙者をとらえる気はござらんか？」

「仕方がない……。あなたは強すぎる」

「そういつた考えが危険だからネギ坊主の隣にはいてほしくないのよござるよ暗殺者」

人を傷つけることを、殺すことを、仕方がないと割り切り平然と行う人種。忍も人のことを言えた義理ではない職業だが、今は現代。殺しがものをいう時代は過ぎ去つたはずだ……。だつたら、

「ここで更生させてやるでござる暗殺者。全力をもってかかってくるでござる」
「もとよりそのつもり」

互いの体に気を満たし、ヒメは無音かつ透明な気を、楓は鋭く変幻自在な気を練り上げあたりに放出する。

決戦の準備はできた。後はどちらかが初めの動作をおこなうことで、勝負の火ぶたはあつさりと落とされる。それを理解している二人は、慎重に体重をベストなものへと変更しながらジリジリと気をぶつけ合い、

ヒメが数ミリ足をずらしわずかな地面の擦過音を響かせた瞬間!!

「ひめちゃん。無事〜」

「よゆ〜。楓お姉ちゃんに手伝ってもらった」

「馬鹿レツドではござらんか? 無事でござったか?」

「え!?! なんで楓ちゃんいるのよ!?!」

空から利那たちが飛来してくるのを確認し、まるで先ほどまでの空気がウソだったかのように殺気と闘気を霧散させた。

ル」

鬼の掃討をあらかた終えた龍宮と古菲は、味方であるはずの鬼すら巻き込む苛烈な戦いの観戦にまわっていた。

「いやいや、あれランクになられるときすがの私もてこずるからやめてほしいんだが……。というかあの月詠という少女はよくVIの動きについて言ってるよ、うん」

「manaはあの二人とやりあうなら勝てるアルか？」

「厳しいな……。いろいろ小細工して特殊な弾丸があつて五分五分つてところだろうか？」

それほどまでに激突している二人の近接戦はランクが高かった。苦手な距離のないガンナーを自負する龍宮ではあつたが、さすがにあそこまで近接戦闘に特化した相手と戦うとなるとかなりの苦戦を強いられるだろう。

「だが、もうそろそろ決着だな」

「ん？ そうアルか？ いい勝負しているように見えるが……」

「確かに技術的な実力では拮抗しているが……」

武器が悪かつたな……。龍宮がそう漏らした瞬間に、シックスの拳が月詠の剣を殴り折った。

「あややく。案外あつけない結末どしたな」

「そうやな……。次はちゃんとした剣で戦えることを望むで、月詠ちゃん」

「はー……」

「ごちそうさまでした。満足げな笑みを浮かべ、とろけるような微笑みを浮かべて礼をした月詠の体に、VIの巨大な気弾が叩き込まれる。

「VI——インパクトオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

巨大な光柱と見まがわんばかりの気弾。相手が敗北を認めたからといって容赦はない。敵である限り確実につぶす。それがVIの戦い方であり信念だ。月詠もそれを理解しているだろう。だから彼女は何も言わず、その気弾を無防備に受け地面にたたきつけられた。

激震と爆発。気弾はそれをとんでもない規模で発生させ、観戦していた龍宮と古菲は思わず自分の顔をかばうように腕を突き出してしまう。

そして衝撃が収まったころには、

「はあくさいこうやー」

とろけきった顔でボロボロになった月詠が気絶していた。戦闘のせいで服はボロボロになっており肌がかなりの面積露出している……。そんな状態でそんな顔をしているとなると、その……。

「エロいな」

た。

押されているのはフェイト。曼荼羅状に配置された魔法障壁によって通常の魔導師とは比べ物にならないほどの防御力を有している彼だったが、犬神の攻撃はそんな障壁など当然と言わんばかりにぶち抜きかれに直接ダメージを与えてくる。

そのため、フェイトは現在ずいぶんとダメージを負っていた。おまけにその機動速度は豪気功でも使っているのか、信じられないくらい鋭く早く、フェイトが放つ攻撃をやすやすとかわした。

豪瞬動。マリィが使った豪気功の反発力を使い瞬動以上の速さを出す高速移動術。

マリィはいまだに使いなれておらずその加速に振り回されたが犬神は違う。かれは、豪瞬動を見事に使いこなし、入りも抜きもフェイトにすら悟らせない安川父しかできなかった完全なそれを披露していた。

その光景を見たフェイトは思わず舌打ちを漏らす。安川が言っていた厄介な人間とこのころはいつか……と。

これだったらあの金髪の少女に危害を与えなかったほうがまだ良かった、と自分の失策を悔やみながら、今更そんな事を言っても仕方がないと分かっている彼は、犬神が攻撃をかわした際の隙を突き、一気の天へと駆け上がる。

「逃がすと思つて……」

「逃げるわけじゃないさ」

その行為を見てフェイトが逃げを打ったともったのか、犬神は拳に気力をため気弾放出の用意をとるが、フェイトは突然宙で止まりクルリと犬神のほうへと向きなおった。

「ただ、魔法使いはやはり遠距離で戦うのが本領だからね」

犬神がその言葉にピクリと眉を動かさず、豪瞬間を持つて加速。足に気力の車輪を顕現させフェイトと同じように宙へと舞いあがろうとする。だが、

「遅いね」

ホ・モノリトス・キオーン・トゥ・ハイドゥ

冥府の石柱!!

フェイトが発動させた無詠唱の魔法が、空間をひずませ巨大な六角形の石柱を無数に出現させ、湖に向かって降り注がせる。

「さあ、これをさばけるかな? 犬神ゲル」

まるでどこかの悪役のようなセリフを吐くフェイトを、犬神はじつと見つめた後。

「ふん。なんだその程度か……」

「っ!!」

フェイトの魔法を鼻で笑い、足に出現させた気力の車輪をかき消した。

そして湖の上に立った犬神は初めに襲いかかってきた石柱の一本を悠然とよけると、

「ふっ」

小さく鋭い呼吸音とともに、湖につきたち直立した石柱を駆け上がり始めた！

「っ、そうくるか……だがっ!!」

石柱の表面を爆走し、天へと座する自分へと進撃を開始した犬神を見て、フェイトは驚きの声を上げながらも冷静に、出現したほかの石柱たちへと指示を出す。

それについて針の穴を通すかのように犬神を狙う軌道へと落下の方向を変える石柱。しかし、犬神はそれをもともせず、次々とよけてはその上に乗り爆走を続けた。

二本目は上体をのけぞらして、眼前を通り過ぎ去ったあとにその底へと飛び移りさらなる跳躍。

三本目と四本目はほぼ犬神の進行方向をふさぐ形で襲いかかってきたが、気によって強化された拳を振るい瞬時に粉碎。それによってできた破片を足場に軽やかに宙を登っていく。

最後の五本目は、破片を足場に飛び回る犬神の体をとらえきれずあっさり外れただけの足場として犬神に利用される情けない結果となって終わった。

まるで地上にいるかのように、相手の攻撃すら足場にして優雅に宙を舞う犬神。その姿にフェイトは舌を巻きながら、

「だがこれで最後だ」

五本目の石柱の頂点へとたどり着いた犬神に、

ミツレ・グラディー・オブシディアン
「千 刃 黒 耀 剣」

大質量の黒剣の弾幕を放出した。

「終わりだ、犬神ゲル……その狭い足場で、これをさばききることはできない」

もしできるのなら……君の実力は英雄クラスだ。

フェイトが内心でそう告げた瞬間。

「ふうー」

犬神は黙って自分の拳をズボンのポケットへと収め、そして、

「豪気功・気弾・居合拳複合技……」

不吉な言葉を小さく漏らし、

「七条星槍・豪殺拳」

そっけなく言葉が吐かれると同時に、巨大な七つの閃光が一つへと束ねられ巨大な光

柱となり漆黒の剣へと襲いかかった。

居合拳によって加速され、豪気功によって鋼のごとく硬度にいたったが気弾。その威力はまるで隕石のごとく、漆黒の剣戟たちを瞬く間に蹂躪していく。

「なっ!?!」

啞然とするフェイトの頬をその気弾の熱量がかすめる。ジュツ、という不吉な音を立てた頬にフェイトはあわててその光柱から距離をとり、

「……君は化け物か？」

ばらばらと降り注ぐ黒い剣の破片を、いつの間にか気力の車輪を再出させ空を飛びながら、うつとうしそうに打ち払っている犬神を見てそうつぶやく。

「化け物？ 僕みたいなかわいい少年を捕まえて失礼なことをいう奴だ……」

しかし、犬神はそんな言葉にすらほんの少し不機嫌になっただけのリアクションしか見せず、

「僕はただプロフェツショナルだ」

自分がやったことがどれほど常識はずれなことをかをしつかりと認識しながらも、ふてぶてしくそう言い放った。

そんな犬神の態度に、フェイトは苦々しいものを感じながら、

「仕方がない……この勝負、君の勝ちであすけよう。君に勝てるような装備も今は持っていないしね」

「なにを……」

突然のフェイトの敗北宣言に、犬神は眉をひそめ逃げるつもりかと思いきや再び拳をポケットに入れる。

技の初速はこの居合拳のほうが早い。フェイトが逃げようとしても必殺の一撃を叩き込む自信が犬神にはあった。

だが、

「っ！」

犬神は気づいた、空中で自分が足蹴にした石柱や岩の破片が、無数に湖の中へと飛び散りすさまじい飛沫を跳ね上げていることに。

「まさか」

犬神がある可能性に気づき、保険とばかりに居合拳を放つが、遅い。

跳ね上がった水のしぶきはまるで天へと駆け上る雨のようになりながら、犬神たちへと到達し居合拳の軌道をずらした。それにまぎれてフェイトは水のゲートの魔法を發動。瞬時に転移を行い犬神の視界から消える。

『僕の名前はフェイト……覚えておいてくれ犬神ゲル。この借りは必ず返す』

最後のそう言い残し、水が再び落下を開始し犬神の視界から消えた時にはフェイトの姿はそこにはなかった。

犬神はそれを見て周囲にフェイトの魔力がないか探ってみるが、あいにくと発見はできない。犬神はその事実小さく舌打ちを漏らした後、

「mission failed……」

ずいぶんと久しぶりだな……と、苛立たしげにそうつぶやいた。

「安川……」

「はいっ……」

ぞっとするような、冷たい声で犬神が自分の名前を呼ぶのを聞きマリーは号泣しながら正座する。

そこでマリーは犬神から簡潔な今夜の事件の説明を受けた後、

「どうやら相当な数のクラスメイトに魔法がばれたようだ……」

説教タイムへと突入した。

「そうなん……でもそれは今夜の出来事やし、話聞く限り石化しとった私にはあんまり関係ないかなって……」

「ほう？　つまり貴様は朝倉のことは知らないと？」

「……………」

「いっそひと思いに殺せつ……。マリーはぎりぎりとかかってくる犬神からの重圧に耐えながら、必死に歯をくいしばった。

「まったく、情けないにもほどがあるな。仮にも僕の会社の人間がこれほど役立たずな馬鹿だったとは……。助手の助手のほうはまだ活躍したぞ？」

「……………」

黙って犬神の小言を耐えるマリー。そんな彼女の姿を見て、犬神は小さくため息をつ

いた後、

「はあ、まあ……お前がこうして無事に目を覚ましてくれてよかったよ」

「え？」

普段の犬神からは考えられないくらいやさしい声音で、マリーにそう言ってくれた。

「え、え？ 犬神君？」

「ん、なんだ？」

「もしかして……心配してくれたん？」

マリーの質問に犬神は小さく首を傾げた後、

「当り前だろう？ 何を言っているのだ貴様は。お前は僕の大切な助手だぞ？」

犬神がそっけなくいてくれた言葉に、マリーはしばらく啞然とした後、

「あ、あはははは……。そっか、うん。おおきにな」

小さくはにかみながら、恥ずかしげにほほをかいだ。その顔はともうれしげで、そしてとても、

「それにお前が起きなければいったい誰がこの請求書の金を払うと思っっているのだ？」

「え？」

と、とても、

「せ、請求書って……」

「お前の石化治療費に決まっているだろう？」

「え、え……関西のほうを持つてくれるんと」

「あいにくあちらも財政難らしくてな。仕事を失敗した護衛に出す金はないそうだ

……」

と、と、とても……。

「とりあえず……三週間飯抜きから始めてみようか、安川」

「……………」

とても真つ黒な、絶望に染まっていたという……。

……+……+……+……+……

後日談。というか、今回のオチ。

翌朝、マリーの石化は刹那とネギと契約した木乃香のアーティファクトによって治されたと分かったマリーが、怒り狂いながらハリセン片手に犬神を追い回す光景が見られた。

ネギと明日菜は現在詠春に連れられナギの隠れ家へ向かっている。一応そこにはエヴァも同行していた。どうも恋している相手の住処が気になるらしい。

木乃香と刹那は今まで一緒にいられなかった時間を埋めるかのように、関西呪術協会内を一緒に回っている。めったに帰ってこない地元の思い出の場所巡りでもしているのだろう。

ただ、今朝がたになって刹那がネギを教会の裏へと連れていくのを見たマリーは気になつてこつそりあとをつけてみたのだが、

『ネギ先生……。今回は非常事態でしたから、お嬢様との仮契約を許しましたが、これに機にお嬢様と仲良くなつて、男女関係的な意味で仲良くなろうとしているのなら……。』
そこで刹那はぞつとするような低い声でネギを、

『それ相応の覚悟をしてから望んでくださいいね?』

脅していた……。どうやらこの世界の刹那のネギに対する好感度は、木乃香に対して仮契約を許すほど高くなかつたようだった……。『

そんな風に思ひ思ひの修学旅行最終実を過ごした彼らは、ようやく日常(?)の象徴である彼らのクラスメイトと合流する。

そして、

「それではみなさん! お家に帰るまでが修学旅行ですよ!!」

「「「「「は〜い!!」」」」」」

修学旅行は、終わりを迎えた。

閑話・クラレンスの里帰り珍道中でございます

「ん〜？ なに読んでんの犬神君？」

危ない修学旅行から帰還し、いつもの業務形態へと戻った犬神アンダーグラウンドサーチで、助手どころか掃除婦がやってそうな家掃除をしていたマリーは、珍しく犬神が依頼状以外の文章を読んでいるところを発見した。

「ん？ ああ、僕らの修学旅行に合わせて里帰りしているクラレンスからの手紙だ。筆まめなのか続々ときていてな」

「あの人故郷なんてあったんですね。てつきり霞から生まれてきたものかと」
「てつきり、崑崙山の住人とはかり思っていた」

「思いつきり仙人やん、それ……」

年少組二人も興味をひかれたのか、修学旅行のお土産整理をやめて手紙へと寄つてくる。そして三人はその手紙へと視線を落とし、

……†……†……†……†……†……†……

「「……………」」

その手紙を読み思わず無言になる三人。マリーは顔をひきつらせ、ネギは何とも言えない顔をして、ヒメは飽きたのかマリーの背中にぺたりと張り付く。

「……………なあ、犬神君。これ、チャクラとか木ノ葉とかいろいろアウト臭い単語が載ってんねんけど」

「続報も続々きているぞ?」

「まじで?」

…†…†……………†…†…

里帰り二日目。

私はとある森の中を歩いておりました。私の今日は山間の隠れ集落でこのような道でしかたどり着けないのです。

そんな時、

「お待ちいただきたい」

「ん?」

一人の少女の甲賀忍者が現れました。

「こうがにんじやは なかまになりたそうなめで こちらをみている。

「見てないでござる……。犬神アンダーグラウンドサーチの関係者殿とお見受けするが？」

「いかにも。私あちらの事務所で執事をさせていただいているクラレンスと申します」

「甲賀中忍、長瀬楓でござる」

「すこしお話よろしいかな？」

「楓殿はそう言つて、私に話しかけた後、なかまになりたそうな……。」

「してないでござる!!」

「大方修学旅行でのヒメ様関連の話でございましょう?」

「……………」

「ならば話など聞かず監視をされればよろしいではないですか。私たちが、ヒメ様をどのように扱う人間なのかを」

「こうがにんじやは なかまに なった。」

「……………」

「ふははははははー!」

里帰りを始めてから三日目、わたしは薄暗い洞窟の中にいました。

何者かがわたしの旅の仲間である楓殿をこの洞窟に拉致監禁してしまつたからです。私はあわててその洞窟に急行しそこで懐かしい顔に出会つたのです。

「久しぶりだなクラレンス……」

「彼女を開放していただきたい、伯爵」

その人物は漆黒の服をきて、好々爺然とした優しげな頬笑みの中に、飢狼のような凶悪な光を宿す瞳を隠した、

「から没落し、今やすっかり人間の手先になり下がってしまった、悪魔のヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン元伯爵」

「黙っていてもらおうかクラレンス!!」

なぜでしょう? 正確に相手の立ち位置を紹介しただけなのにひどく怒られてしまいました。

「ふふふ……。今日私がここに来たのはほかでもない、里を抜けた貴様を始末するためだクラレンス!!」

「もう数世紀も前の話でしょうに……。全くあなたは律義な忍びだ」

「忍でござるか!?! 悪魔なのに!?! そしてクラレンス殿、何歳なのでござるか!?!」

楓殿が何か騒いでいる気がしますが、気にしません。

「くっ……。まあ、今はいいでござる。それよりクラレンス殿、早く逃げるでござる!!
こいつ、かなりできるでござる!!」

「執事である私に女性を見捨てて逃げろと? それはできません」

わたしはそう言いながら楓殿が不安を覚えなないように微笑みかけました。

「なぜなら、そのようなことたとえ雇用主が許してくださっても」

私の脳裏のゲル様が「いらん、捨ててこい」といつています。

「私の執事の師匠……セバスチャン殿がお許しになれませんので」

「セバスチャン!? え、それって黒……」

「いくぞクラレンスうううううううううううううううううう!!」

「多重・影分身の術!!」

激闘の火ぶたが切つて落とされようとした、その時!

「ふっ……。ヘルマン待て」

「その男は」

「我々、スライム三人衆の獲物だっ!!」

「っ!!」

見慣れた3人のスライムの少女忍者が、私の前に姿を現しました。

て倒れていなかった黒焦げの木に背中を預けたヘルマン殿でした。

「わたしは……」

そう言つて体を起こそうとした時、私はすべてを思い出しました。

自分が暴走してしまったことを、ヘルマン殿が命懸けで暴走してしまった私を止めてくれたことを。

「……もうしわけありません」

「礼など言うなクラレンス。私は貴様と全力で戦うためにこうしたに過ぎない」

今日はもう戦えないだろう。また明日、仕切りなおそう。ヘルマン殿はそう言つて、傷ついた体を引きずりながら去って行きました。

私はいまだに私を心配そうに見ている楓殿に笑いかけます。

「申し訳ありません……女性に暴走して傷を負わせるなど、執事以前に紳士として失格です」

「ほんとでございますよ……」

彼女はそう言つて少しきこちない笑みを浮かべた後、

「でも、戻つてきてくれてよかつたでございます」

彼女がそう言つてくれるのを聞き、私は少しだけ安堵の笑みを浮かべて再び眠りにつきます。

「ええ。情けない話ですがわが師匠の話以外はすべてフィクションです……」

「え？」

今度はマリーたちが固まる番だった……。

マジでいたんだ……セバス・張。

マリーとネギの脳裏に「あいやくそりやいくらなんでも失礼アルよ」と笑う胡散臭い中国人の顔が流れて行った。

……†……†………†………†………

後日談、というか今回のオチ

《とある麻帆良の裏事情》

「これ……何じやと思う？」

「悪魔……ですわね？」

クラレンスが事務所に帰ってきた数時間後、たまたま学園都市の周囲を見回りしていた魔法先生たちが、頭に巨大なたんこぶを作って気絶しているスライム娘三人と、伯爵級悪魔一体を発見することになるが、それはまた別の話……。

《楓の場合》

「あ、マリーどの!」

「ん? どないしたん楓?」

翌日、休みが明けてマリーが学校へ登校してくると、どういうわけかひどく興奮した様子の楓がものすごい勢いで詰め寄ってきた。

「く、クラレンス殿は今どこ在宅か!!」

「え、ええ。まあ、依頼入ってへんし事務所にははると思うけど……なんかあつたん?」
「何かあつたではないでござるよ!! あれほど熟練の忍びが近くにいるならなぜ教えてくれないでござる!! さ、さっそく修行をつけてもらいにいかねば!!」

いつも飄々としている楓らしくない興奮した声音でそうまくしたてると、楓はすぐさま窓からジャンプ。軽やかに地面に降り立って、犬神アンダーグラウンドサーチへと爆走していった。

「……………い、一応楓にあつたことも本当やったんや」

「あの、どうでもいいですけどこれサボタージユですよね?」

目の前で生徒が堂々と逃げ出したことにショックを受け、出席をとっていたネギはほ

んの少しだけ泣きながら、遠慮なくマリーの出席簿に「遅刻」のハンコを押した。

《とある師匠の親族関係》

「ん？ 古菲、手紙でも来たん？」

昼休み。普段は元気に遊びまわっているチャイナ娘が、おとなしく机に座って一枚の紙を読んでいるのを見て、マリーは好奇心が混じった質問をしながら紙を覗き込んだ。

だが、その紙の文体はすべて中国語で書かれており、今のマリーに読むことはできない。

「ああ、これアルか？ うちのおじさんが元気でやってるかってって、時々手紙をくれるアル」

「ふくん。ええおじさんやん。名前は？」

「セバス・張」

マリーの顔が盛大にひきつった。

閑話・13 番疑惑

ヘルマン襲撃フラグが主人公たちの預かり知らぬところでへし折られてから数日がたった。マリーとネギが学校での用事を終え、犬神アンダーグラウンドサーチに帰ってきただけのことだ。

犬神アンダーグラウンドサーチに珍しいお客様が来ていた。

「あれ？ タツミー？」

「龍宮さん？」

「やあ、マリー。ネギ先生。お邪魔させてもらっているよ？」

玄関でクラレンスに出迎えられた二人は、いつものように応接室へと一応足を運び、犬神に帰ってきたことを告げようとした。そんな二人を出迎えたのは、いつものように犬神ではなく、褐色の肌を持つ、どう見ても自分と同一年には見えない体をした（スタイル的な意味でも身長的な意味でも）、ニヒルでクールなスナイパー。

マリーの同級生にして、ネギの教え子である龍宮真名が犬神アンダーグラウンドサーチに客として訪れていた。

「タツミーが犬神君に依頼って……めずらしいやん？ たいがいの厄介事やったら自分

で何とかできるやろタツミー？」

マリーが驚いているように龍宮は裏の世界で名の知れたガンマンだ。戦争ランクの厄介事でも生き残ることに主眼を置けば鼻歌交じりに切り抜けてくる実力を持っている。ネギもその片鱗を修学旅行で十分に見ているうえに、師匠であるVIからは「あれは遠距離戦闘でやりあったらおれでも苦戦するレベル」と教えてもらっている。マリーと一緒に不思議そうに首をかしげていた。

そんな二人の態度に龍宮は苦笑を浮かべながら、クラレンスが出してくれた紅茶を口に含んだ。

「あいにくと今回の厄介事は人手が必要だな。こうして金で雇える絶対安心な傭兵を求めているわけさ」

「そういうわけだ安川。仕事が入った」

龍宮が返答を返すと同時に犬神から一枚の書類がマリーに向かって投げられる。マリーは不意打ち気味に渡されたそれをあわててそれをキャッチし、その内容に目を通した。

「ん？　この人って……」

そこには書類上の年齢よりも若く見える幼児体型で童顔の、スーツを着たかわいらしい先生が、アイスを至福といった様子でなめている写真が載っていた。

「そういうリリー先輩は何か知っているんですか？」

「当り前よ。あんたみたいな下心があるやつと違って、私はほら……聖人君子的美女だから？　モモちゃんも安心していろいろ話してくれるわよ？」

「どの口が言ってますか!？」

我慢しきれなかったレイジーの突っ込みにも内心で同意しつつも、マリーとネギの視線はリリーへと移した。

「で、どんな感じなんですか？」

「そうね。とりあえず過去を話す前の基礎知識として、狙撃が信じられないくらい上手いわね」

「それ教師に必要なスキルですか？」

真っ先に挙げられた彼女の意外な特技に、ネギは思わず顔をひきつらせた。だが、
「そこはまあ……この魔法先生だし？」

もとより戦闘能力をかわれて集められた教師だっている。モモはその点きちんと教員免許を持っているのでまだましな方だろう。

「ほらうちのジョニーとか見たら大体わかるでしょう？　あいつ教員免許持っていないけど戦闘能力一点張りでうちに入ってきたからね？」

「ああ……それはよくわかります。あれ？　そう言えばジョニー先生は、今日はどちら

に？ 首輪外れていますけど大丈夫なんですか？」

「ネギ君……その首輪って僕のことじゃないよね？ ねえ？ ねえ！？」

顔をひきつらせながら、何度も何度も訪ねてくるレイジーが若干怖かったので、マリーはネギから彼を遠ざけながらリリイに話の続きを促す。

「んで、なんで狙撃がうまいのかって……彼女、ここに来る前NGO団体カンパヌラエ・テトラコルドネス《四音階の組み鈴》に所属していた凄腕スナイパーなのよ。当時は名前を明かさず裏で暗躍しながら、紛争の原因になった人物の狙撃を専門としていたらしいわ」

ニヤリと笑いながら、リリイが次々と信じられない過去を暴露するのを聞き、ネギとマリーは思わず顔を見合わせた。

「あら？ 信じていない顔ね？」

「いや……でも」

「いくらなんでもそれは信じられないというか……」

マリーもネギも仕事で何回かすれ違ったことはあるが、モモは初等部の不良教師どもの清涼剤みたいに平凡な先生で、仕事も熱心に行い生徒たちからの人気も高い。そんな人が、紛争地域で暗殺を生業にしていたといわれても……。

「正直納得できません……」

その気持ちはレイジーも同じだったのか、彼も三白眼を向けながらリリイに疑いの視

「といっても確証はない。だからこうして監視している……」

にわかには信じがたいその事態に若干テンパってしまっているマリーに、龍宮は苦笑をうかべる。

「あの人は、『狙撃手は顔がばれては活動しにくい』といいつて、活動中はずっと仮面で顔を隠していたからな。おまけに本名の方も伏せて活動している徹底っぷり。カンパヌラエ・テトラコルドネス
四音階の組み鈴は当時13人の狙撃手を抱えていたから、本人はそのコードネームを使つて《13番》サーティーンと名乗っていたが」

こんなところで教師をしているなんて、私も声を聴くまでは正直信じられなかったよ。と、龍宮は苦笑をうかべつつモモを移したスコープから目をそらさなかった。

「でも、なんで今になってそんな人探そうとおもたんよタツミー?」

話を聞く限りずいぶんと昔のことのようだし、いまさらそんな過去を掘り返されたところでモモは喜ばないと思う。マリーはそう思い龍宮の真意を尋ねた。

「……一つは、お礼を言いたいから、かな? あの人は私に狙撃を教えてくれた恩人だ。あの人の指導がなければ、恐らく私はあの戦場で生き残れなかった。そしてもう一つ」

龍宮はそこで言葉を切り、一枚のカードを胸の谷間から取り出した。

「それっ?! パクティオーカードですか!」

そのカードを見てネギは驚きの声を上げ、マリーもぼかんと口を開けたが、

が経っていないかった彼女は、前線に出ることなく、13番サーティーンのもとで狙撃の訓練に励んでいた。

彼女を拾った魔法使いは「本当は女の子にこんなこととしてほしくないんだけど……」と何度も訓練をやめるようにアルカナを説得しようとしていたが、それは13番サーティーンが突っぱねていた。半魔族である以上いずれば必要になってくる技術だと。

そんな彼女が狙撃の練習に使っていたライフルをばらして整備している13番サーティーンに、マナは確かこう話しかけたはずだ。

「なんで13番サーティーンの名前はNo.13なの？ 本名じゃないんでしょう？」

不思議そうにパクティオカードを掲げて尋ねてくるアルカナに、仮面をかぶった13番は確かに苦笑をうかべた気がした。

不気味な目も鼻も口もない不気味な白い仮面をかぶった彼女。とはいえ、この仮面はハンドゥス・マギクス魔法世界で買った高品質なものだそうで、外の光景はしっかり見えているらしい。それどころか、狙撃に必要な《スコープ機能》や《風力観測機能》までついている優れもので、我ながらいい買い物をしたと13番サーティーンは自慢気に語っていた。

「それはね、私が私の名前は常に13番サーティーンであれと思っっているからよ」

「……よくわかんないんだけど？」

子供に早かったかしら？ と、13番サーティーンがつぶやくのを耳ざとく聞きつけたアルカナは

思いつきり頬を膨らませる。そんな彼女のしぐさに微笑ましいといわんばかりの笑い声を漏らしながら、彼女はアルカナの頭に手を置きさらさらと流れる黒髪を優しくなでてくれた。

「私にとつては、このコードネームは偽名以上の意味を持つよ、アルカナ」

人を殺して人を守る。邪道すぎる正義の体現者。自分たちはどこまでいつても薄汚い人殺しだ。だが、

「一発の弾丸でしか、変えられない世界もあるわ」

この時の13番の言葉はどういうわけか当時のアルカナの心に響いた。そして、

「それに本名を愛している人しか知らないっていうのは、なんかロマンチックじゃない？」

次に13番サーティーンが自慢げに語った言葉は本気でうらやましかった。

「わ、私もそんな風になれる？ なれる!？」

「うくん。アルカナはもうちよつと大きくなつてからかな。いろいろと」

「さ、13番サーティーンだつてペタンコのくせに!!」

「わ、私は他に魅力があるから大丈夫なの!!」

そんな風に騒がしく喧嘩をした時間も、アルカナであったマナには宝石のように輝くまぶしい時間だった。

彼女はあまりに戦場で人を殺しすぎたから、もしも彼女の正体が割れてしまったら狙ってくる人物はそれこそ1000や10000では効かない。

狙撃手でありながら最も大きな戦果をもたらしたらしい続けた怪物。四音階の組み鈴のサーティーン番。カンパヌラエ・テトラコルドネス

彼女が首領暗殺を行ったことで、数百の紛争が終わり……数万人近い敵が死んだ。彼女はそういう伝説を残す狙撃手だった。ヘッドショット

だから本来ならこんなところで教師をすべき人物ではない。軍をやめたとしても彼女は嚴重に保護され四音階の組鈴の幹部として名を馳せるべき人物だったはずだ。カンパヌラエ・テトラコルドネス

だが、

「戦場に絶望してしまった兵士は、戦場で戦う兵士の上に立つべきではありませんから……」

そう言ったモモの脳裏によぎるのは、自分のスコープの中で死んでいたあの男。自分が愛して、アルカナが慕った正義の味方を目指した男の最後……。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

あの時彼女は彼を救えた。自分の仕事を放りだし、彼が戦っていた敵の頭を打ち抜け

ば確かに彼を救えた。

だが、彼女がその時狙っていたのは彼女が戦っていた紛争地域を裏で操り、多額の金を手に入れていた武器商人。その商人はひどく慎重で、その場で暗殺を失敗してしまえば、次にチャンスが訪れるのは数十年後といわれている怪物だった。

だから、狙撃を失敗するわけにはいかなかった。

彼女は彼を助けなかった……。

そして、商人の頭を撃ち抜き戦場を混乱させたあと、モモは彼のもとに訪れた。全身に弾痕や炎属性魔法による火傷をおいながら、彼はモモの接近に気付くと確かに笑みを浮かべながら、

『よくやった……かつこよかったぞ』といったのだ。微塵も自分を恨んでいない発言だった。間接的に自分を殺した相手に、恨み言ひとつ言わずに死んでいった。

狂っていると思ってしまった。モモは確かにその時、自分が誇りに思っていた立場をそう思ってしまった。

愛した男を殺したのに、その男に怒鳴られずらしなかった戦場を。愛した男を見殺しにしたのに、よくやったと仲間たちがほめたたえるその戦場を。彼女は確かに、狂っていると思ってしまった。

もう銃は……握れなかった。

『ああ……そうじゃな』

学園長も思うところがあつたのか、モモの言葉に同意して念話による通信を切つた。モモはそれを確認した後、近くにあつたベンチへと座り空を仰ぐ。

「うん。見ているコウキ？ 私は結局あの戦場に何も残せなかつたけど、あなたが残した光は今も立派に育っているよ？」

愛した人の願いをかなえられず、すべてから逃げてしまつた狙撃手は、せめて未来に何かを託そうと今日も人を導く仕事を続ける。

……†……†………†………†………

後日談。というか……。

「元氣だしーなタツミー。きつとそのうち見つかるつて！ 世間は狭いいうし」

「そうですよ龍宮さん！ そんなに落ち込まないでください!!」

「……ああ、そうだな」

龍宮の調査が空振りに終わった翌日、さすがにかなり期待していたため落胆が隠しきれない龍宮の隣では、事情を知るマリーとネギがステレオ放送で彼女を励ました。

あの後諦め悪く、情報をくれたリリイにも確認を取りに行ったのだが、

「え？ あんな与太話マジで信じたの？」

といわれ、とどめを刺された。あの時あの先生を殴らなかつた忍耐力を褒めてほしいとマリーは思う。

というわけで現在龍宮は落ち込んでいた。いくら励ましても少しだけある影が消えない龍宮の姿を見て、マリーはしばらく熟考した後、

「せや、落ち込んだ時はなんかパーッとおいしいもんでも食べに行こうや!! なんやったら私が奢んで？」

「ほう？ それはあんみつでもいいのかな？」

「詳しく話を聞かせていただきましょう？」

「あれ？」

しかし、マリーの話に食いついたのは龍宮だけではなかつた。どういうわけか先ほどまでいなかつた利那が龍宮の隣に立っており、キリリツとした表情で乗つてきたのだ。

「え、え？」

「せつちゃん、突然走り出してどないしたん？」

「あ、お嬢様！ 今マリーさんが食事をおごつてくれるという話をしています……」

「え、ちょ!？」

「なになに? マリーにしては珍しく太っ腹じゃない?」

しかも、どこからともなくやってきた木乃香と明日菜が合流してきてからはもう大変だった。

「飯がただで食えると聞いて……」

「マリーと一緒にご飯が食えると聞いて!」

「マリー様が太っ腹すぎると聞きまして……」

「ちよつとおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

あれよあれよと集まってくる3-Aメンバーたち。お前ら登校はどうした? と言われそうな勢いで集まってくる。

「宴会ならウチを使えばいいネ! 超包子はいつでも宴会受付中ヨ!!」

——うちならあんみつも出せますよ?

「さてマリー。まさかここまでお膳立てされて、いまさらダメとは言わないよな?」

ニタリという擬音がびったりな、いつもにニヒルな笑みを浮かべる龍宮にマリーはしばらくプルプルと震えた後、

「や、やったらああああああああああああああああ!! 全員分奢ったらええんやろうがああああああああああああああ!!」

「「「キャ——！！ マリーふとっぱら——！！」」」

わっしょいわっしょいと、やけっぱち気味のマリーを胴上げする3—Aメンバーズ。千雨や夕映辺りはアホくさ……といわんばかりに傍観しているが、一応宴会には参加する所存らしく自分たちの手帳を開いて予定を確認していた。

その傍らでネギが、

「ちよ、みなさん！ 迷惑ですから！ 学校に遅刻しますからアブアブアブアブ!?!」

と必死に諫めようとしているが弾き飛ばされて、あまり効果をなしていない。

そんないつもの風景に、龍宮は珍しく声を上げて笑った。そんな彼女の隣を、一人の小柄な女性教師が通り過ぎる。

そして、

「おおきくなつたわね。アルカナ」

「!?!」

龍宮があわててあたりを見廻しても、その教師は人々の雑踏に紛れて見つからなかった。

だが、龍宮はその言葉と言ったのは誰なのかを悟り、

「はい。あなたのおかげです」

と、言つて小さく頭を下げた。

22話・怪奇!? 麻帆良に住む幽霊少女!!

漆黒の夜の帳に包まれた、麻帆良学園中等部。

本来なら宿直の魔法教師以外誰もいてはいけない校舎を、一人の少女が走っていた。
またまた、佐々木まき絵だった。

「な、なんで私ばかりこんな目にいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

つい少し前に吸血鬼に追いかけられる悪夢を見たばかりだというのに、ほんとに自分
は付いていない。と、内心で愚痴りながらそれでも足を止めないまき絵。それはそう
だろう。何せ彼女は現在、正体不明の物体に追いかけてられているからだ。

『まったく、ださ〜い……』

ビクリッ!! と、背後から聞こえてきた声にまき絵の肩が震え、無言のままさらに足
を速く動かし始める。

『夜……学校……こわい』

背後から聞こえてくる声はだんだんと切れ切れになつて薄れてくる。

に、にげられた? と、まき絵が安堵の息をつきほんの少しだけ走る速度を緩めた時
だった!!

修学旅行が結局あんな結果に終わってしまい、ネギの独り立ちはとりあえず見送られることとなった。

と、なると、必然的に問題になってくるのは、修学旅行前に犬神が愚痴っていたネギの生活費なわけで……。

「学園長から『あんな敵に狙われているのだからネギの護衛代をふやしてくれ』といって、多少の改善はみられたがやはりまだまだ貴様の生活費が火の車であることに変わりはない」

「はあ……なんかすいません」

「というわけで……貴様には今まで以上に積極的に仕事を手伝ってもらう。働かざる者食うべからずだ」

「が、がんばります!!」

マリーとクラレンスは別件とのことで、現在この場にはネギと犬神しかいない。

ガッツポーズをとるネギを満足げに見詰めた後、犬神はいつの間にか設置されていたくすだまの紐へと手を伸ばした。

「では、今回野菜にやってもらおう仕事を教える。今回の仕事は……これだっ!」

犬神はそういった瞬間、目も覚めるような速さでひもを引きくすだまを割った。

その中から出てくる巨大な紙。そこにはおそらくクラレンスの直筆と思われる達筆

な文字でこう書かれていた。

『除☆霊!!』

「……………じよれい?」

探偵はどこに……。内心でもつともなツツコミを入れつつ、ネギは思わず沈黙した。

「なぜ僕たち少年探偵が除霊などするのか? おまえはそう思っているところだろう。では野菜。なぜ僕たちのところにこんな依頼が来たか、わかるか?」

犬神の質問にネギは少し考えるようなそぶりを見せた後、

「実は犬神さんが大妖怪《カネノモウジャー》という妖怪で、目には目と言わんばかりに頼まれ……………」

瞬間、ネギの額に犬神の貫手が刺さり、ネギの頭から大量の血液を噴出させる。

ぎゃー!? とのたうちまわるネギをしり目に、犬神は嘆かわしいといわんばかりに首を横に振り背中を向ける。

「当然その手のプロたちが軒並み手を挙げ、さじを投げたからだ。まったく、最近の連中はプロ意識が足りなくて困る……………」

「ようするに、にっちもさっちもいなくなつて何か一周まわつてしまった挙句トチ狂ってしまったため、うちに相談が来たわけですね」

「ようするな。真打登場といえ」

と浮きながら彼らを見つめていた。

「よ、よろし。ネギ先生はなんだか私のこと見えるみたいだし……こ、こんどこそ!!」

そして、彼女は物陰から飛び出し二人のあとをつけていく。

ふわふわと浮いている、足のない脚をしつかりと動かしながら。

さらにその背後では、白い少女には気づかず、これまた犬神とネギのあとを追っていた一人のパパラッチの姿が見えた。

「自分のクラスが幽霊騒動が起ころ中、家主の犬神と何やら怪しげなことをしに行くネギ先生……くくくつ。これは何やら、スクープの予感っ!!」

麻帆良のパパラッチと名高い少女……3—A所属朝倉和美は不敵な笑みを浮かべながら写真を一枚とっておく。

まさかその写真の中に、真っ白の少女の影が映るとも知らずに……。

…†……†………†……†……

そのころの3—Aでは？

「ほんとに幽霊なんていたのか、まき絵」

「ほんとなんだって!! 私見たんだって!!」

「でも実際これだけ探してもいないわけだし……」

雇われた魔眼持ちのガンナーと退魔剣士が、いつまでたつても見つからない幽霊に業を煮やし、クラスメイト達に再び聞き込み調査を行っていたりした……。

……↑↑↑……………↑↑↑↑↑……

「………廃校ですか? 麻帆良にしては珍しいですね?」

「もともと男女合同高等部だった校舎だ。麻帆良が大きくなるにつれて男女は分けられる形になり、新しい校舎もたった。だから古い校舎はこうして打ち捨てられたわけだが……」

そこで犬神は言葉を切り、不気味に眼もとへと影を落とす、

「本来ならこの後者は新校舎ができたときに取り壊されるはずだったのだが、そこである問題が起きた……。そう、魔法先生たちですら何ともできないある問題が」

「そ、それが今回の依頼にあった幽霊さんですか……」

「そういうことだ。この校舎もずいぶん長い間放置してあったせいか、その筋ではかなり有名な場所だぞ? その名も……」

「自殺の名所へと変貌していたのだっ!! (田中信夫風)」

「そういうのってなんで、断言調なんでしょね……」

犬神の最後だけ気合いが入った説明に、なんかもういろいろとダメだろと思いつつネギは突っ込みの仕事をしておく。

「そんなありがちかつ、ありきたり話信じられるわけじゃないですか……。麻帆良の先生たちがなんとかできなかつたのもほかの理由ですって。聞いた話だと、ここの土地の利権者さんなんか学園関係者じゃないみたいですよ……」

なんでも、麻帆良が立つ以前から世界樹を守ってきた一族だとかどうか……。以前犬神とケンカしたことがあるらしく、「この世界は俺のなんだ——おれこそが最強オリ主だ!! イレギュラーは引っ込んでろ!!」とか言つて犬神に襲いかかったところ、あっさり撃退。粉碎玉砕大喝采されたあげく「人に厳しいエコ発電」をすることになってしまったらしい。

「それとももしかして、犬神さんは霊とか信じている人だったり……って、それこそ愚問ですわね」

どうせ信じていないからこの依頼を受けたんだろうと思つたネギは、ため息をもらしながら肩をすくめた。そんなネギに犬神は一つ頷いた後、

「ああ、確かに愚問だな」

「え？」

「信じる信じない、いるいないの議論は僕にとつては些事にすぎない。僕にとつて重要なのは『いる』と思っっている人間は、金を出すとということだっ！」

「すいません……議論の観点が初めから違つたんですね」

ずけつと言ひ放たれた犬神のセリフに、ネギは再び顔に縦線を落としました。

「さて野菜。さつさと探して、幽霊ぶつ殺して帰るぞ」

「犬神さんなら本気でやりそうで怖いんですけど……」

二人はそんな会話をしながら、一足飛びでとじられた校門を飛び越え校舎の中に消える。

しかし、二人は気付かなかつた。

二人のあとを追いかけて、一人の幽霊少女と、一人のパパラッチ少女が学校に潜入してくるなど……。

だぼーっと机に座ってすくすく日々だけを過ごしてきた。

正直さびしがりやで怖がりな彼女にとつて、その人生はかなり苦痛だったようである。彼女自身も自分を認識できる人間を求めてさまよっていた。

そんな時だった。彼女のクラスに赴任してきた子供の教師が、まるで自分が見えているかのような言動をとったのは。

もしかして私が見えているの？ さよはその反応にわずかな希望を見出し、しばらくの間その新任教師をつけていた。

そして、今日も彼女はその新任教師——ネギに自分の存在を気付いてもらうためにこうして苦手な怖い廃校に足を踏み入れたのだが……。

「成せばなる!! なさねばならぬ何事も!!」

「はあ、そうですか。いただきます」

この廃学校に入った瞬間どういうわけか自分の御同輩たちに大量に囲まれてしまい、「あたらしいなかまだく!!」と言われワツショイワツショイ御同輩たちに担がれ、こうして空き教室の一つへと案内されてしまっていた。

「いや、にしてもこの学校以外にも御同輩がいたとは……拙者感激でござるよ」

先ほどからこちらに話しかけてくれるのは、落ち武者の幽霊のイバさん。落ち武者という特性上戦闘能力が非常に高く、この学校にやってくる拝み屋を次々に撃退する崇り

のプロフェッショナルらしい。

「ごめんねくさよちゃん。今ちよつと仲間候補が三人も来たから立て込んでいて。これ終わったら四人の歓迎パーティを開こう」

そう言ってくれたのは鼻から常時鼻血を流している青年は西村さん。昔この学校で番町をしていて、不良同士の抗争によって命を落としたらしい。といっても、今は不良の雰囲気など微塵も見せない気のいいお兄ちゃんだが。

「ちよつと西村君！ 雑談してないで早く持ち場ついて……そこお!! 吉村家の墓石はこつちじゃなくて二階だつて何度言えばわかんのだ!! ここに置く墓石は喜代田家の墓だつて言つてんでしようが!!」

怒声を飛ばしながら何やらお化け屋敷のようなセットをほかの幽霊たちに組ませているのは、元医師の加藤さん。

なんでもこの学校が立つ前に立っていた病院で医療ミスをしてしまい、責任をとつて首をくくつたらしい。といっても、いまは医師の姿なんて微塵も見えない完全なドカタの現場監督だった。

そんな風になぎやかな幽霊たち。さよは今までの自分の幽霊人生とは明らかに違う、彼らの生活を見てほんの少しだけ羨ましく思った後、

「で、皆さん何しているんですか？」

音にほんの少し震えた後、そーっと教室の扉を開き中を確認する。

「……誰も、居ないですね」

そして、やはり何もいなかった教室に安堵の息をもらしそのことを犬神に報告しよう
と振り向いた瞬間！

「あれ？」

そこにいたはずの犬神の姿はきれいさっぱり消えていて、

「え、ちよ……犬神、さん？」

だらだら冷や汗を流すネギがそうつぶやくのを聞き、廊下の壁に就いていた人の顔の
ようなシミが、にやりと不気味な笑みの形へと変形した……。

……†……†………†……†……

「おおく。なんか雰囲気あるね……」

麻帆良のパパラッチこと朝倉和美はシャツターチャンスを逃さないために、カメラを
構えながらゆつくりと犬神とネギが入って行った廃校を回っていた。

どういうわけか、あの二人の姿は見失ってしまったが校舎そのものはそれほど広くな
い学校だ。歩いていればまた出会えるだろうと、3—A特有の楽観論を展開しつつ朝倉

い!!』

「ええ……………」

百鬼夜行と言わんばかりの幽霊軍に追いかけられた、真つ白な幽霊少女が姿を現したら反応に困らざるえない朝倉だった。

…↑…↑……………↑…↑…

ネギは現在非常に困っていた。

犬神とはぐれてしまった。幽霊に対する対抗手段もわからない。

この状態で依頼完遂は可能かといわれると答えは否なわけで、

「う〜ん」

この状態でネギが取れる手段は三つ。

①・独力で除霊

②・犬神を捜索

③・このまま帰る

「ん。③にしておきましょう。まだ死にたくありませんし。犬神さんなら一人でも除霊ぐらいしてくるでしょう」

齢だった。

「いや、幽霊としては怖がられるのは本懐なんだけど……なんか、地味に傷つくね？」

「西村君鼻血出てるし」

「きみなんて人型じゃないじゃないか？」

後ろから聞こえてくる聞きたくもない幽霊談議に再び鳥肌を立てながら、ネギは魔力によつて強化された足を使つて全力で逃げる。

「ま、まじでいた!! ほんとにいたああああああああああああああ!!」

いやいや幽霊とかほんとにないわ。とか、きつと何かの感違いだろう? とか、往生しまつせ。とか、思つたりしてすませんでした!! 全身全霊で土下座しますから今すぐここから出してくださいいいいいいいいいいい!!

ネギが内心でそう叫んでいることなどつゆ知らず、というか知っていたとしても反応を変えることなく、

「まああああああああああああああてえ」

「逃がすかつ!!」

「やつ!」

次々に壁から染み出すように姿を現す幽霊たち。その数に際限はないのか、ネギの背

24話・爆走？ 疾走？ 大暴走？ 逢魔が時の幽霊 レース

「なななな、なんでこつちくんのよおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「なななな、なんで逃げるんですかああああああああああああ!!」

「幽霊に追いかけられたらそりや逃げるでしょ!!」

「だったら私も連れて行ってくださいいいいいいいいい!! 私も追いかけてい
るんですうううううう!!」

「あんたどう見ても後ろの連中の御同輩でしょうがっ!」

幽霊学校にネギたちをつけて侵入を果たした朝倉和美は、現在……絶賛逃走中だっ
た。

なぜなら彼女の背後には、

「まてえええ」

「なんでにげるのおおお」

「こつちへおいでよおお」

「めちやくちや悪霊じゃないあんなもん!」

「わ、私は違いますよっ!! 私はずだの地縛霊なんです!!」

「霊って時点であたはついでいぢやない!!」

落ち武者やら白衣を着た首をくくった男やらが……半透明な姿で追いかけてきていたからだ。

「そ、そんな!! そうだ!! 実は私あなたのスタンドなんですよ!!」

「だったらなんとかしなさいよ!! クレイジーダイヤモンドでもキングクリムゾンでいいからそれっぽい力使ってあいつら蹴散らしてよ!!」

「意外と要望がクレイジー!! そんなすごい能力使えるわけないぢやないですか!!」

そして朝倉は、ギャーギャー言い合いながらなんやかんやで成り行き上一緒に逃げることになってしまった、幽霊少女——相坂さよをじつと見つめて一言。

「つて、あれっ!! あんたうちのクラスの幽霊ちゃんぢやない!! なんでこんなところにいるのよ!!」

「いま!! 今気づいたんですか!!」

「いや……何となくわかっただけだし。あんたこの前姿を見せた写真かなり映り悪かったし……」

「うっ。し、仕方ないぢやないですか。幽霊になった時、よほどの技術を持たない人じゃないとあんな感じに映っちゃう特典がついちゃったんですから」

「特典っていうか呪いよね、それ」

「うう……人がせつかくオブラートに包んで言ったのに!!」

あやまって!! 割と真剣により良い土下座を追求しつつ謝ってください!! とキャンキャン吠えるさよに若干和むことよって、朝倉の記者としての冷静な判断力がだんだん戻ってきた。

「それにしてもあんたなんで追いかけられたりしていたの? 縄張り荒らしたから怒られたとか?」

「そんな原始時代のお猿さんみたいな理由で襲われたりしませんよ」

そして、現代社会のヤクザや警察を、全員を敵に回しかねない発言をするさよに（割と縄張り意識が強いイメージがある職種を上げただけで他意はありません）、思わず顔をひきつらせました。

「私しばらく前までは仲間として歓迎されていなんですけど、あの人たちが『ちようど人間が入ってきたからとり殺して仲間にしよぜっ!!』とか言っているのを聞いて、あわてて危機を知らせようと……」

「へえ……」

この子、意外といい子じゃない。朝倉はさよの発言を聞き彼女の評価を上方向へと上昇させる。

写真写りやらクラスで起こしたポルターガイストやらで彼女のことは悪霊か何かだと思っていたが、どうやらそういうことでもないらしい。

「まあ、あなたが出した血文字やら宙を舞い飛ぶ机やらでうちのクラスはパニックだけどね」

「あう……。すいません、何とか誤解を解こうとして力んだらあんなことに」

力んだだけであれか……。と、朝倉は思わず冷や汗を流した。一瞬ネギたちのような魔法使いの仕業かと思つてネギ先生にも話を聞きに行つたのだが、学生用の軽い机とはいえあれほどの数を一気に飛びまわらせるのはかなりの魔力が必要と言つていた。

もしかしてかなり霊格とか高い子なのかしら、とにわか知識でさよの力について予想を立てつつ朝倉はとりあえずとつぶやく、

「あれ……。どうすんの?」

「どうしましょう……。結界張つたとかいってしまいましたしもう外には逃げられ」

さよととりあえず今後の相談をしながら、廊下の角をまがった時だった。

「げえっ!」

二人は同時に女子生徒らしくない悲鳴を上げあわてて足をとめた。なぜならその廊下は行きどどまり。階段も渡り廊下もない完全な袋小路だったからだ。

「そんな!」 建築法ちゃんと仕事してよ!! 非常時用の非常口ぐらい残しておいてよ

!!

「廃校にそんなことを求められても困るでござる」

「っ!!」

朝倉がそんな悲鳴交じりの抗議をあえても状況は変わらない。彼女たちは後ろから聞こえてきた声に、だらだらと冷や汗を流しながらゆっくりと振り向く。

「え、えつと……イバさん。見逃してくれたらうれしいかもです?」

「おねがうい、イケメンの落ち武者のお兄ちゃん」

「ふむ。そんな風にほめられたのは初めてでござる。これはますますお二人を我々の仲間に入れて拙者のハーレム要員に」

「だめだこいつ。早くなんとかしないと……」

何やらトチ狂ったことを吐き散らす対拝み屋用戦闘員・落ち武者IBA!! の発言を聞き、白い目でイバを見つめる麻帆良の女子中学生二名。

彼女たちの刺すような視線と、周りの幽霊たちの白けきった視線に耐えきれなくなつたのか、血色の悪い顔を真っ赤に染めながらイバは腰に下げた刀を抜刀する。

「せ、拙者のころは、一夫多妻制は普通だったもん!! 拙者悪くないもん!!」

なんか泣きながら突撃してくるイバ。だが、その切っ先を向けられた朝倉たちはその突撃をとめるすべがない。

「さよちゃん!!」

何か打開策はない!? と、朝倉は全身全霊を込めてさよにそう尋ねるが、

「朝倉さんっ!! 死んだら一緒に麻帆良回しましようね!」

「あきらめないですよっ!? もっと熱くなってよ!!」

どうやら幽霊と生者の文化の壁は厚かったらしい……。

もうだめだっ!! と朝倉は思わず目を閉じた、その時、

「うぼふあ!?! って、どうしたでござる西村くん!?!」

「「え?」」

突如下の階から半透明の男が飛び出し、イバの顎を強打。その突撃をとめさせた。

突然の不意打ちにさすがに驚いた顔をしたイバだったが、その攻撃に使われたものの正体が同僚の悪霊だと知ると目を大きく見開き、何が起こったのか尋ねる。

「いや……それがイバさん。僕たち小さい方を先に落とすために大きいほうが合流しないよう時間稼ぎしていたんだけど。ごめん……」

そして、イバの問いかけに答えるべく振り向いた西村の顔は、

「ひい!?!」

「彼……とめらんない」

幽霊であるイバですらビビる凄惨な顔をしていた……。

その瞬間、廊下の床がまるで砲弾にぶち破られたかのように爆散し、辺り一带に土煙をまき散らした!!

「うぐあ?」

何が起こったのか分からないイバは、生前の癖でつい自分の顔をかばうように腕を突き出してしまふ。

そして土煙が収まり、イバがあわてて腕を下げ、手に持った刀で土煙を切り払うと、そこには、

「ふん。知らないうちにパパラッチがメンバーとして増えてるな?」

「あ、あれ? 朝倉さんだけ? も、もしかして私も抹殺対象にはいつていたりしません!?」

朝倉にかばわれるように抱きしめられたさよに、恐怖と畏怖の視線がこもった目でみあげられる、

「さて貴様ら。除霊のお時間だ」

幽霊の西村にアイアンクローをして「イダダダダダダ!?」と悲鳴を上げさせている大きい方の侵入者、

「僕のおいしい金づるとなるがいい」

犬神ゲルが立っていた。

ものすごい罵声を浴びせられ小一時間ほど説教されてしまった。お詫びとしてネギはタイムを取るのに協力した。

「おかしい……なんか心霊現象に溶け込んでしまっている気がする」

怖いうんぬん以前にここの幽霊はフレンドリーすぎる気がするんだ……。とネギは独白を漏らした。

「と、とにかくいろいろやって疲れちゃった……。とにかく今は休憩」

ネギはそう漏らしながら、近場にあつた教室の扉を開いた。

そこに掛けられた「準備中」の看板に気づくことなく……。

そして、

「えっ？」

「「あ」」

ネギはそこで、幽霊らしい衣装に着替えている男性幽霊や墓石を移動させている女子バレー部の格好をした女性幽霊。お化け屋敷のようなセットを組むため忙しく働いているその他もろもろの幽霊たちを目撃した。

「え……えっと、幽霊？ バイトの人とかではなく？」

一応皆さん半透明の意志薄弱そうなっピジュアルだったが、彼らがやっていることがあまりに人間くさくて思わずそう尋ねてしまうネギ。

を悟ったネギは、若干腰が抜けかけている体を引きずり何とかこの場から逃げようとするが、

「逃げないで? 怖がらなくて大丈夫だから」

まるでこちらを見ているかのような花子の発言に、ぴたりと足を止めるしかなかった。

「いや〜ごめんね? 久しぶりに人間が来てくれたからみんなはしゃいじやって。あ、私花子。よろしくね?」

「ず、ずいぶんフレンドリーな幽霊ですね」

「ああ、あと『トイレの』はつけないでね? 違うから!!」

「言われると機嫌が悪くなるのだ」

メンゴメンゴ。と言いかけない軽さで話しかけてくる少女の幽霊に若干ひきながら、ネギはあわてて頭を下げる。

「こ、こんにちは。ネギ・スプリングフィールドと言います」

「かっこいい名前ね。外国の方?」

につこりと笑った花子の笑顔はとても無邪気で綺麗だった。

だがなぜだろう? 自分の背中の悪寒が止まらない……。そう思ったネギは本能的にじりじりと花子から距離を取ろうと画策する。

「でねえ、ネギ君。私あなたにひとつお願いがあるんだけど……」
「な、なんでしよう？」

逃げる隙はないか、じつと観察を続けるネギに対して花子はほんの少し顔を赤らめた後、

「あの、わ、私と……と、友達になってください!!」

「はい？」

突如出されたミヨウチキリンなお願いに、ネギは思わず聞き返してしまうが、

「やったー!! はいだって!!」

「オメデトウ!!」

「オメデトウ!!」

「アリガトウ!!」

どうやら聞き取り間違えられてしまったらしく、花子が仲間の幽霊たちをハイタッチを交わしてまわるのを見てネギはあわてて訂正を入れた。

「ち、ちがいますよ!!? 今のは聞き返しただけですからっ!!?」

「え? だめなの!!?」

「涙と鼻水すごいですよ!!? だ、だめってわけでもないですけど!!?」

なんかもう顔じゆうから、洪水と勘違いしかねない量の液体を垂れ流す花子にどん引

きししながら、ネギは流されるままにOKを出してしまい、

「やった!!」

「とうとうこれで99人目だぜ!!」

「くすだまわる? くすだま!!」

幽霊たちがそんな風に心底楽しそうにはしやぎまわる姿を見て、なぜか釈然としないネギ。とはいえ、喜んでいる人々に水を差すのもあれかと思ひ、彼らに近寄って一緒に祝おうとした瞬間だった。

「じゃあ、ネギ君」

「え……………」

先ほどまで喜びでいっぱいだった花子の雰囲気突然激変するのを感じ取り、ネギは思わず自分の歩みを止める。

そして、

「せっかく友達になったんだから」

振り返った花子の顔を見て、ネギはため息をもらし自分のうかつさを呪った。

なぜなら彼女の顔は、罨にはまった哀れな獲物を見つめる、狡猾な猟師の顔をしてい
たから…………。

「自殺して、早く幽霊になってよ」

「ホント僕って馬鹿ですね……」

幽霊がいた話は本当だった。だったら、そこに住んでいる幽霊たちが生者を次々と自殺へといざなう悪霊だということも、すべて事実ということだ!!

花子の顔を見た瞬間、脱兎のごとく駆け出すネギに花子の声が追撃してくる。

「どこいくの？ ネギ君……」

せつかく友達になったのに？ そんな声しか聞こえないがネギははつきりと理解していた。

花子の顔が不気味な捕食者の笑みに変わっていることを。

25話・幽霊秘術・脳内催眠!!

脱兎のごとく逃げ出したネギの足は魔力で強化されており、通常ならありえないほどの速度でネギの体を加速させている。しかし相手は幽霊。重力のくびきや物理法則から逃れた彼らにとってネギ程度の速度なら追いつくことは割とたやすいらしかった。

その証明とばかりにうすら寒い笑みを浮かべた花子がネギの隣へにやってきて、平坦と併走し始めたのを見て、ネギは思わず悲鳴をあげかけたが、

「くっー!」

さすがは犬神に鍛えられただけあつてか、ネギは必死にそれを押し殺し魔法の杖を手にとろうとした。

だが、

「あまいわね。ポルターガイスト」

「ちよ、汚い!! さすが幽霊超汚い!!」

「ちよ、勘違いされるようなこと言わないでよっ!!」

ネギが手に取ろうとしたナギの形見である杖は、花子が放った念力によってあっさり奪われ、はるかかなたへと投げ捨てられた。

「大体ネギくん……君一生懸命逃げているけど」

一体どこに逃げる気なの？ 花子の言葉が突然ネギの心に突き刺さる。

今まで何も感じなかった花子の言葉が、突然ネギの心に響き渡った。

「あうっ!？」

精神干渉系の魔法!？メルディアナで習った特定の魔法を食らった時のダメージに

酷似したその現象に、ネギはすぐさま花子が何をしているのかを感じ取った。だが、

「村が襲われ親しい人たちはほとんど石に、助けてもらったお父さんすら居場所が分からないって言うのに、一体どこに逃げるというの?」

わかったことと抵抗できることは別問題だ。

「本当はお父さんも死んだんじゃないかって君を捨てたんじゃないの? お母さんだっていないでしょう?」

「そ、そんなことはありません!! お父さんはきつとどこかで……それに、今の僕はひとりじゃない!!」

「ほんとうに? 君がこんな絶体絶命なピンチに陥っているというのに、誰一人として助なんて来ない状況で本当にそんなことがいえるの?」

「……………」

ネギの心の隙間を広げるように、まるで流水のように流れ込んでくる花子の毒。それ

はだんだんとネギの心にしみわたっていき、彼を孤独の海へと沈め始める。

「あうあ……」

「かかったぞ!!」

「花子ちゃん必殺トラウマアタック!!」

「おれもあれで自殺すること決めたんだよな」

「いいな。拙者たちすでにその時死んでいたから……」

「きうつ!! 口惜しいっ!!」

なんか背後で幽霊たちが騒いでいる気がしたが、そんなことが気にならないくらいにネギの心は孤独へと沈んでいた。

「でもここにいればもう大丈夫よ? みんな一緒だから……体のくびきから放たれて、自由になるのよ。ネギくん……」

花子がそう告げてネギの頭を抱きしめた瞬間、ネギの体からカクンと力が抜け落ちその目がうつろなものへと変貌した。そして、

「はい……わかりました」

花子の言葉を、肯定した。

……†……†……†……†……†……†……†……

(いや〜よくきくなく。頭の中での催眠術)

花子は内心でそんな事を思いながら、指にくくりつけた紐とその先端に付いた五円玉を眺める。なんとも古典的な催眠技法だったが、割と残念なことに、これは花子の霊力で作られた一種の魔法具なので、割と簡単に人間を催眠状態に落とすことができる。

花子……：たちの悪いことに、多数の人間を自殺にいざなつたことにより悪霊たる彼女の霊格は格段に上がってしまった。

「え——といったわけで、友達の輪拡大成功!! 屋上の飛び降りポイントに一名様ごあんなくい!!」

「ひゅーひゅー!!」

「はーなーこ!! はーなーこ!!」

「よっ!! さすがトイレの!!」

「みんなありがとう!! 後トイレのつていったやつあとで締めるから〜!!」

どういうわけかやたらハイテンションに話を進める幽霊たち。そんな彼らの声援にこたえつつ花子はうつすらと額に青筋を浮かべ、自分の禁句が聞こえたあたりを睨み付ける。

本当にいつもと変わらない、ただの仲間を歓迎するかのような歓声だった。だが、

「ふむ? ハンマーか?」

「「え?」」

突然彼らのとなりの壁から声が聞こえてきたかと思うと、

「あうあ……は、花子殿……」

「い、イバさん!?! どうしたのその傷!!」

まるで建築物破壊用のハンマーで何度もぶつたたかれたような傷を負った、イバがその壁から顔を出した。

「い、今すぐ逃げるでござる……。わ、我々がケンカを売ったのは」

化物だ。イバがそう言葉を締める前に、すさまじい轟音とともに壁が粉碎されイバの体は砲弾のように吹き飛ばされる。

「きゃあああああああああああああ!?! イバさあああああああああああああああああ
あああん!」

信じられない光景に花子が悲鳴を上げる中、崩れた壁から姿を現したのは、

「さて、亡霊ども」

眼鏡をかけた絶対零度の瞳をもつ、

「もう一名様は、案内不要だ」

もう顔をひきつらせまくりの朝倉とさよを伴った犬神ゲルだった!!

「ん？ 幽霊だが？」

「いやいやいやいやあああああああああああああ!? なんで《気》も使わずに幽霊を素手で持っているんですか!? 非常識にもほどがありますよ!! 除霊したことないって言っていましたよね!？」

退魔の剣なんてものもあるのだから、気を使えばある程度幽霊にダメージを与えられるかもネギ自身は思っていたが、残念なことに幽霊をつかみ取っている犬神の手には微塵も気は感じられなかった。そんな状態で幽霊なんてつかみとれるわけがないのに……。

周りの幽霊もネギの意見には大賛成だったのか、だらだらと冷や汗を流しながらがくと頷いている。

「何をばかなことを言っている野菜。そんなこと決まっているだろう」

そんなネギの抗議をさも当然と言わんばかりに聞き流しながら、

「幽霊の定義はなんなのかは知らんが、要するにそれは死んだ人間が魂か思念だけ残した、中途半端な残りかすだろ？」

「「残りかすって!?!」」

たった一言でその場にいる全幽霊を敵に回した犬神にがく然とするネギと幽霊たち。そんな彼らの反応を無視して犬神は話を続行する。

「そんな不完全な存在モに、肉体に魂完備のパーフェクトボディであるこのぼくが、後れを取る道理がない!! よって、その気になれば幽霊にだって触れるし攻撃だってできるに決まっている」

そういつた犬神は実演しようといわんばかりにそのあたりを浮遊していた魂型の幽霊にアイアンクローを決めた。

「大体こんな奴らに気を使うのは燃費が悪いからな。何事もエコロジーだ野菜」

「こ、この人へ理屈で常識超越したああああああああああああああああああ!!」
してエコロジーの意味わかってるんですかああああああああああああ!!」

「ああ、ネギ先生的にもこれは非常識なんだ……」

「怖かったです! めちゃくちゃ怖かったですうううううううううう!!」

そんなネギの絶叫を聞き朝倉は思わず顔をひきつらせて、そのそばにいたさよは泣きながら朝倉にすがりついていて。大方この幽霊と間違われて犬神に襲われでもしたのだろう……。

「ところで野菜、先ほど貴様死にそうになっていたみたいだが僕の聞き違いだよな?

まさか僕の部下ともあろうものが幽霊にそそのかされた自殺を選ぶなんてしないよな?」

「は、ははははははは! な、何を言っているんですか犬神さん!! 当たり前だのクラッ

カーですよ?」

「そのネタはひどく古いぞネギ」

「だから冷や汗をかきながら必死に否定の意を示すネギ。しかし、

「なんてことしてくれるのよ……せつかくネギくんも私たちの仲間になってくれる気でしたのに!!」

「のおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

怒りに満ちた花子の言葉がネギの努力を台無しにした。

人殺しの視線を向けてくる犬神から必死に視線をそらすネギ。だが、

「ん? 待てよ? 幽霊なら食費とかいらんな……」

「え、えつと……じよ、冗談ですよね!!」

割と冗談に聞こえない犬神のつぶやきを聞きつけネギは思わず冷や汗を流した。

その時、

「もう……邪魔しないでよっ!!」

ヒステリーを起こした花子がポルターガイストを使い、犬神に向かって巨大な壁の瓦

礫を飛ばす。が、

「ふん」

犬神はそれを歯牙に賭ける様子もなく片手の一振りで粉々に粉碎した。

「あわわわわわわ……」

「いつから麻帆良は万国びつくり人間ショーの会場になったの？」

なんてことを言いつつもしつかりその写真をカメラに収める朝倉に脱帽しつつ、ネギはとぼつちりを恐れそそくさと朝倉たちのもとへ逃げる。

ネギ・スプリングフィールド。この半年近い時間で危機回避能力が異常に高くなった少年……。

「どうして、どうしてこんなひどいことをして私たちの邪魔をするのっ!!」

「人を自殺にいざなうような幽霊にひどいなんて言われる筋合いはないな」

「犬神さんが正論を言っている!?!」

サラツと花子の抗議をたたきつぶした犬神の意外すぎる一般論にネギは愕然とし、

「えっと……むしろ正論言っただけで驚かれる犬神君で、一体全体どういう評価受けているの?」

我がクラス担任でありながら、赴任してきた当初とは違い割と酷いことをサラツと言うようになったネギに朝倉はやや引いている。

「ところで朝倉さんそちらの方は？」

「ほらほら、うちのクラスにいたじゃない欠番。あのこ」

「ど、どうも。相坂さよって言います」

「ああ、これはご丁寧にどうも。クラス担任をさせていただいているネギ・スプリング
フィールドです」

「社会人のあいさつも板につき始めているねネギ先生」

苦勞しているんだね。正直10歳児が出すようなあいさつ文ではないよ? と思いつつ、朝倉は今回の事件の真相を話し始めた花子に、カメラのフラッシュを向けて、「ひどいこと? 何を言っているの? わたしはただ……友達百人作りたいだけなのよっ!!」

思わずガクツとずっこけてしまい、パパラッチとしてはあるまじきブレだらけの写真
を撮ってしまった……。

「私としたことが……」

「げ、元気出してください朝倉さん! あれはさすがにずっこけますっ!!」

「ところで相坂さんも幽霊しているってことは現世に未練があるんですよね? どんな
未練なんですか?」

「え、えつと……友達もつとほしいかなって」

「離れて朝倉さん!! 犬神さん、こつちに撃ち漏らしが!」

「ち、ちがします。生きている方殺したりしませんよ!!」

何やら背後で多大な勘違いが起きている気もしたが、犬神は特に気にすることもなく

花子の話に耳を傾けた。

「私は昔体が弱くて（中略）、やっと体が治って、友達百人できるかな？ と学校へいったらクラスメイトからのイジメに（省略）……その他いろいろ紆余曲折があったせいで私は、《アイ・キャン・フライ》とこの学校の屋上から飛び降りてしまいましたとき」とさつて……日本昔話じゃないんですから」

意外と軽い感じでめられた話にネギは思わずツツコミを入れる。

「で、死んだはいいいけど未練たらたらで幽霊していたら……ここで私は彼らに出会った」
花子が霊力で出現させたモニターに出てくるのは先ほど犬神に蹂躪されたメンバーたち。

「元医者のか藤です。医療ミスしてここで首くくりました」とあいさつしてくる顔色が悪い白衣の男性。

「落ち武者のイバです。ここで腹切りました」と、ぺこりと頭を下げたのは髪をふり乱した鎧武者。

「番長の西村です。ここで他校の不良にボッコボコにされました」最後に挨拶してきたのはここにこことした笑みを浮かべた鼻血を流した男子生徒。

そのほかにも人型の物や魂型の浮遊霊たちが続々と集まり、口々に花子の来訪を歓迎してくれた。

「ここにいる幽霊さんたちはみんなフレンドリーで、幽霊になりたての私にやさしく接してくれたわ。そう……私はここで生前手に入れられなかった友達を手に入れたの。ならっ!! いっそこで友達100人作ってから、成仏してやろうって決めたのよっ!!」

「せめて、入学者百人いなかったから自殺とか、話をひねれなかったのか。ホントありがちな話で聞いて興奮させるランクだった……」

「ちよい!!」

そんな彼女の必死な叫びを金にならんからと切り捨てようとする犬神の口を、ネギはあわてて封じる。

「まあ、要するに幽霊でもいいから友達がほしかったと?」

「そう!!」

「だ、だったら別に殺さなくてもよかつたんじや……」

「さよちゃん。ああいった悪霊は生来ヤンデレの性質を持っている物だから」

「むしろ病んでいますよね? そして死んでいますよね? ヤンデルどころかシンデルですよ?」

朝倉が得意げに披露するにわか知識にツツコミを入れつつ、ネギは犬神の沙汰を待つ

た。そして、犬神は、

「まあ、脳みそがないせいで頭が馬鹿になっているようだが」

「バカにしてるの!?!」

「あ、朝倉さん! 私バカになっていませんよね?!」

「ん〜? どうだろうネギ先生?」

「テストしてみないことには何とも……。文化祭終わったらさよさん用のペーパーテストでも作りますか?」

「そこ、黙れ」

いい加減シリアスな空気がキレたのを悟ったのか一気に雑談モードに入る三人を一睨みし、犬神は、

「だったらこんなところでうだうだしていいいで、さつさと成仏したらどうだ? あの世に行った方が幽霊たくさんいるだろう。いま生きている人間と今まで死んだ人間、どっちの方が多いと思ってる?」

「「「……………」」」

犬神がサラツと告げた驚愕の新事実には、幽霊たちの間で木魚の音が鳴り響き、

「「「ほんまや!?!」」」

チーンという音とともにその意見が正論だということを知った。やはり脳みそがな

くなり若干思考が短絡になっていたらしい。

「ごめん……盲点だった」

「つか、成仏ってどうやんの?」

「除霊ってなんか怖いしね……変な光線撃ってくる人いるし。魔法の射手だっけ?」

「西村君何か知っている?」

「したことないからちよつとわからないな……。未練がなくなったらいけるんじゃないかと?」

一気に成仏シフトへと移り変わる悪霊たちの姿に、ネギと朝倉はじつとりとした視線を向け、さよだけは何かを言いたそうにうろろうとあたりを浮遊し続ける。

そんな中、犬神は黒い笑みを浮かべて、

「金はあるか?」

「え?」

一斉に振り向く幽霊たちに犬神は怖気づくことなく一言、

「僕は金で動く探偵だ。金さえ払ってもらえるなら協力するのはやぶさかではないが?」

「え、じゃあ……」

花子はしばらくの間、悪霊のみんなと目を合わせた後、

「あの、いろんな宗教があのお世を定義していますけど、日本で一番信仰されている仏教流なら『輪廻転生』が採用されて、常に死んだ魂は転生し続けているわけですから、あのお世へ行っても幽霊の友人には会えないかと……」

「あ」

「そ、それにあの人たちはあらゆる宗教で嚴重に禁じられている自殺をしたわけですし、もしかしたら地獄に行く可能性も無きにしても非ずかな〜って」

「……」

さよの予想を聞いたネギと朝倉は、ダラダラと冷や汗を流しながら犬神を見るが、
「ぼくは成仏を手伝うといったが、その後友人ができることを保証するとは言っていないぞ?」

二人の視線に気づいた犬神が、背中を向けたままサラツとそのことを告げるのを聞き
二人の顔色は一気に悪くなった。

二人は何となく察したからだ。今の犬神がものすごく黒い笑みを浮かべていることを……。

「さて、帰るぞ野菜」

「い、いえっさ〜」

悪魔がいる。ここには幽霊よりも悪質な悪魔がいる……。

一般人三人の内心など知ったことではないといわんばかりに、犬神は今日も探偵業に勤しむのだった。

26話・学園祭前日!!

深夜、麻帆良学園女子中等部。本来ならだれもいないはず（中略）。
女子生徒たちが集っていた！

「そこっ!! もっと静かにやって!!」

「あ、やばっ。ペンキ切れた」

「今から買い出しできる!？」

「こんな時間に空いてる店なんてないって〜」

「コンビニは!？」

「ペンキなんて売ってるの？」

「学園祭特別セールってことで出店に必要なものはたいてい揃っているらしいよ?」

「ちよ、だれか行ってきて!!」

「私と美空ちゃんが行ってくるわ! そっちのほうが早いでしょ!!」

「あすなく新田先生に見つからんようにな〜」

「うう………なんでぼくまで」

というか、追い込まれていた。

学園祭前日。3―Aの出し物であるお化け屋敷はまだに完成の目を見ていなかった……。

「つたく!! だから言ったんだよいつまでものんびりしてないでさっさと作れつて!!」
「まあまあ、そう言わんとつてえや千雨。それに抗して夜中に学校にもぐりこんで作業すんのも学園祭のだいご味やんか」

「おかげで私は明日寝不足だけだな!!」

そんなクラスメイト達の騒ぎの端では、お化け衣装制作のため必死にコスプレ衣装を作っている千雨とマリーの姿があつて。

「はい、委員長の分の型紙」

「ちつ……くそつ。あいつなんでこんなスタイルいいんだよ」

「それ千雨が言う?」

型紙を見て忌々しげに舌打ちする千雨の胸部あたりと、自分の胸部を比べて見事にへこむマリー。その傾斜にはエベレストと平原位の差があつた。

「くう……私か手まだ成長期やし」

ちよつとだけ泣きそうになりながら、暗闇の中型紙を渡すマリー。そのとき、

「新田が見回りに来たよつ!!」

ともに深夜の学校に侵入し出し物の制作にあたっていた3―Bの生徒がひっそりと

ドアを開け報告してきた。

「「「っ！」」」

「ありがとうございます！ みなさん!! 隠密ソフトCパターンで」

「「「サー！ イエツサー!!」」」

まるで軍隊のような統一された行動を見せ、瞬く間に出しのものセットの裏に隠れるクラスメイト達。用意を一日ほど放り出して楓に訓練してもらった成果が表れている(のちにこの話を聞いたネギが「本末転倒では？」とあきれていた)。

「……だれも、おらんようだな」

懐中電灯を片手にやってきた新田が教室中を照らす。セットの裏に隠れたメンバーたちはその光にあたらさないようさらに自分たちの体を密着させる。

千雨とマリーも例外ではなく、二人がぎりぎりは入れる小さなセットの身を縮ませなんとかその懐中電灯サーチライトをやりすごした。だが、

「「「……………」」」

隣のセットに隠れていたネギが、一緒に隠れていた宮崎の胸へと盛大にダイブする光景を見て、割と真剣に痴漢がいると新田に告げるべきかどうか悩んだらしい……。

そして新田が過ぎ去った時、

「宮崎さんなんてウラヤマ……もとい、破廉恥なまねを?! わたくしが変わってほしい

「ち、千雨……大丈夫なん?」

「ふふふふ……これが大丈夫に見えるのかよ……つておらああああ!? とつと服の採寸出せて言ってるだろうが鳴滝姉妹!!」

「ひくん!! ごめんなさいいいいいいいいい!!」

「ふむふむ。あの子からは私と同じにおいを感じる……そう、締め切りに追われた芸術家のおいが」

「何を言っているのですかパル? 徹夜明けでどうとう頭がおかしく……」

「何ってんのよ夕映。私が徹夜程度でどうこうなるとでも? こんなもん昔のメ切守るためにやった一週間不眠のDEATHハイクと比べたら……」

「ああ、そうでした。あなた元から頭おかしかったですね……」

そんな中、自分たちの部活の用意もしないといけない面々があわてて荷づくりを開始し教室を飛び出していく。

「じゃあ、私たちはそろそろ行くね!!」

「私も早く絵を完成させないと……」

「時間ができたら帰ってくるから!!」

「で、できるだけ早く帰ってきてくださいね!」

さすがの委員長もこれを止めることはできなかつたのか、若干涙目になりながらその

メンバーを見送る。

その中にはマリーとネギ、そしてアスナと刹那、木乃香の姿もあって、

「ほな、委員長！ 三時間ぐらいしたら戻るし!!」

「また様子を見に来ますね〜」

「わかりましたわ！ みなさん、お気をつけて!!」

委員長の見送りの声を背後に受けつつ、5人はほんの少しだけ魔法や気で脚力を強化し中等部校舎の廊下を疾走した。

「それにしても犬神さんを含んだ裏関係者全員に招集とは珍しいですね?」

「なんやよつぼどでかい事件でもあるんやろうか?」

「なに? 裏関係者全員召集ってそんな珍しいん?」

「まあ、普段はよつぼどのがない限りシフト製で麻帆良の魔法関係者が全員集まることはめつたにありませんから」

「へ〜。じゃあ、もしかして今麻帆良にいる魔法使いの正確な人数って刹那さん知らなかつたりするの?」

「少し数が多いですからね。学生も含めればそれこそ数百人単位ですし」

「……ほんと、なんでそんな状況なのに私魔法に気付けなかつたのかしら……」

明日菜が首をかしげ、ネギたち関係者が苦笑しながら通り過ぎた掲示板には一枚の紙

にくらいポーンと言う軽い音ともに吹き飛んだ。

そして、

「ぎゃー。ちよーいたーい」

なんて軽い声とともに、右手に持った先端が折れ曲がった金属バットを世界樹の枝にたたきつけるように突き刺した。それによってあっさり落下を免れた彼は、まるで軽業師のようにバットを支点に体を回転。あっさりと枝の上へと体を戻す。

「んで？ 依頼者殿はいつになつたら姿を現してくれるのかな？」

「いつまでも私たちを監視したところで、それほど興味深い結果が出るとは思わないのだけれど？」

『あいやく。これはまいったネ。いやいや違うんだ。ちよつとこちらでも用事が出来てしまつてネ。そちらに迎えに行けないから代わりの者を使わせただけネ』

そう言つて世界樹の枝に降り立ったのは、漆黒のボディを持つグラサン装備のいかついアンドロイド。ロボット研が生み出したロボット兵器T—ANK—α3。通称田中さんとして慕われている、脱げビームを放つ欠陥兵器さんだ。

『さてさて、君たちがここにきてくれたことを考えると、『新生・帝国』は私の計画に協力してくれると踏んでいいのかな？』

「協力？ 違う違う。俺らはあくまで金払われたから派遣されてきただけ。給料分の仕

事はしなつてな」

「もともと帝国はそういう組織よ？ 依頼は選ぶな、殺す対象を選ぶな、依頼されたなら何も考えず、ただただそれを遂行し人を殺す機械となれ」

『……なるほど。偉大なる帝国暗殺者の父、《処刑人》ジルドレの教えが根付いているわけネ』

田中越しに聞こえてくる声は、二人の返答に若干の苦笑をにじませながら一枚の紙を二人に渡した。

『だがまあ、こちらでの殺しは厳禁だ。それに計画発動まで行動は控えてもらいたい。ばれたらいろいろと面倒だからネ』

二人がのぞきこんだ紙には今後の予定と計画が書かれていて、

『では私は行くよ。計画発動までは、せいぜい学園祭を楽しんでいってくれネ』

田中は二人がそれを一瞬で暗記し、紙を解読不能なランクまでに引き裂くのを確認した後、さっと世界樹から飛び降りた。

突然世界樹からアンドロイドが降ってくるのを見て驚く一般人たちを見降ろし、枝の上にとった二人はのんびりと学園祭の熱気に包まれる麻帆良を見つめる。

「といわれてもね〜」

「どうするの兄貴？」

「というか、肉体構造的に明らかに本物がおるんやけど、魔法使いが変なもん輸入してへんやろうな?」

「はははは、さ、さすがにそれはないかと……」

辺りに設置された巨大なモニメントや、出し物用の動く模型やロボットを眺めながら明日菜、木乃香、刹那、ネギ、マリィは早朝の学園都市を駆け抜けていく。

アスナは美術部へ、木乃香は図書館探検部。ほかのメンバーは魔法使いの召集に駆り出されている。

「そういえば明日菜さん、タカミチとのデートの件、どうなったんですか?」

「おお、そうやった!!」

「うまくいったんですか?」

数日前明日菜が話していた、憧れのタカミチとのデート計画を思い出したネギが明日菜にそう尋ねる。それに乗っかるように目を輝かせたマリィと刹那がその話題に食いつき、木乃香はやや心配そうな顔で明日菜を見つめた。

そんな四人を振り返り、アスナはほんの少し顔を赤らめた後、

「えへへへへ。○」

右手でオツケーマークを作った。

「やったじゃないですか!!」

「いや〜心配してたんやで？」

「アスナ今年も誘われへんかったらどうしよ思たわ〜」

「よかつたですな明日菜さん」

□々にお祝いの言葉を告げてくるメンバーたちに、アスナはほんの少しだけ顔を赤らめた。その直後、

「よかないわよおおおおおおおおお!? 当日どんな顔して会えばいいの!? オツケーもらつてから六の食べ物も喉を通らないしいいいいい!!」

「あわわわ……」

「てんばつてますね……」

「肝心なところで明日菜はヘタレやしなあ……」

「本人の前でその評価つてどうなんよ木乃香……」

目をぐるぐるまわし意味もなくじたばたともだえる明日菜の姿を見て、各々苦笑を浮かべるメンバーたち。そんな五人に向かって、

「何をしている貴様ら。早く集合場所に行くぞ」

「おはようございます、皆様がた」

「……あ!!」

街頭にもたれかかるように立っていた犬神と、その隣に極限まで気配を薄め佇んでい

たクラレンスがでむかえてくれた。

「ちよつとゲル! またネギを変なことに巻き込む気じゃないでしょうね!!」

「それに関してなら安心しろ、今回こいつを事件に巻き込むのは僕じゃなくて学園長だ」
「全然安心できないんだけどっ!」

シレッと告げられた「巻き込むけど何か?」宣言に食って掛かる明日菜を、木乃香はここにこ笑いながら止める。彼女の祖父に対する絶対的な信頼があつてこそその行動だろう。

「おはよく犬神君、クラレンスさん。こんな朝早くに大変やね?」

「なに、大したことではありませんよクライアントの娘さん。これも仕事ですの」

「い、犬神さんが丁寧語使っている!」

「そらまあ、木乃香は金落としてくれる相手の親族やし……」

「うしろ。少し黙れ」

そしてありえないものを見たときと戦慄するマリーとネギの発言を聞き、犬神は人殺しの視線で二人を黙らせた。

「ほな、わたし等はここです」

「あんま無理しないようにね!!」

「は〜い!!」

「あ、お、おはようございます!! 正式な挨拶が遅れてしまって……去年麻帆良に着任した魔法教師の……」

「ネギ・スプリングフィールドですね」

「話はいろいろと聞いていますよ。エヴァンジェリン戦のときは……その、災難だったね」
比較的好意的な挨拶と、犬神のもとにしていることに対しての同情が含まれた視線を向けられネギは思わず顔を引きつらせる。

「さて、クライアント前置きはあとにして今回ぼくたちを呼びだした理由をお聞きしたいのですが」

「まあ、そう急ぐでないよ犬神君。今日は君たちに紹介したい人物もおるしな」

「？」

学園長はそういうと、早急にお金の話に移りたい犬神を制し後ろの方を手で示す。

「本日づけで着任した新しい魔法生徒じゃ。君たちのよく知っている少年じゃぞ？」

瞬間、階段で構成された広場の頂上に位置する広場から一人の少年が飛び降りてきた

!

「とうっ!!」

「うわっ!?!」

「なかなか凝った演出ですね」

「わざわざ空中三回転ひねりを決める理由がわからんけど……」

空中でアクロバティックな動きをする黒い影の出現に驚くネギと、目を見開く刹那、そして呆れるマリリーという三段落ちが決まった後、飛び降りてきた人影は中央踊り場に降り立ち一言、

「よお、久しぶりやなネギ……俺っ！ 参上!!」

ピコピコ動く犬耳となびく漆黒の学ランをはおり、犬上小太郎……再び参上!!

27話・学際前日の一悶着

ネギはしばらくの間その少年を見つめ続け、

「……………」

「ん？」

「な、なんやネギ？」

「……………」あつ、こ、小太郎君じゃないか!! どうしたのこ
んなところで? 元気してた?」

「おま、忘れてたやろ!! 俺のこと絶対忘れてたやろ!!」

ようやく何かを思い出したという顔をして盛大に目を泳がせながら挨拶してくるネギを見て、小太郎は思わず食って掛かった。

「おまえはホンマに……ホンマにアレやな!! 俺になんか恨みでもあるんか!」

「いや、関西で僕たちの敵に回った君がそれを言うの……」

「んなちつさいこと、いつまでもネチネチ根にもつとるんちやうわ!」

ちつさいことかな? と、割と真剣に死にかけて修学旅行を思い出しながら首をか
しげるネギを放置し、小太郎は涙を流しながらこぶしを握り締める。

「大変やったんやぞ？　ホンマ大変やったんやぞっ!!」

「いったい何が？」

「何がって全部やボケえ!!」

怒声を上げていきり立つ小太郎は一気呵成に今までの苦労話をしてくれた。

「なんや関西でおとなしく捕まっとならああの白髪のがキがまた現れて『ネギ・スプリングファイルドを暗殺したいんだが力を貸してくれないか？』いいよるし。俺が『コブシ交わした人間をそんな汚い殺し方したないっ』て、それ断つたら変な悪魔のおっさんけしかけてきて半殺しにされて……。それでもおまえに危機知らせようとして何とか子犬に変化して麻帆良にもぐりこんだはいいものの、嵐に巻き込まれてあっさり気絶。目え覚ました時は一般人の千鶴姉に拾われてワンちゃん扱いされとるし、回復がてらに様子見して悪魔襲来を警戒してたはいいものの、いつまでたつても悪魔こーへんしっ!! その間に千鶴ねーちゃんや夏美ねーちゃんに正体ばれてもうてまた一悶着あるし!! 結局魔法使いに保護されて懲役がてらここの生徒になつたはイイもののやつぱり悪魔はこーへんしっ!!　もうどうなつとんのやこの学園都市はっ!!」

悪魔？　小太郎の言葉に本当に何のことかわからないネギは盛大に首をかしげるが、いろいろとクラレンスから聞いている犬神は「フンっ」と鼻を鳴らし軽く流し、張本人のクラレンスはいつも通りのポーカーフェイスで沈黙を貫く。そんな犬神たちの態

度を見て長い付き合いのマリーは「あつ、こらなんか犬神君たちがしたんやな……」と直感で悟り、ヒメは元より興味が無いのかマリーに肩車をされながら世界樹広場を飛んでいた小鳥を「食える？」と言いつつじーっと眺めていた。

当然魔法先生たちも麻帆良結界の外で爵位級悪魔が何者かに粉碎されていたことは知っているので、犬神メンバーズの態度を見ていたい何が起こったか悟るが、

「さて、旧交を温めることはもう済んだかの小太郎君？　もうそろそろきみたちに頼む仕事について話したいのじゃがの？」

誰かが犬神の被害にあうのはもういつものことすぎるので軽く流して、話を進めた。

……+……+……+……+……+……+……+……

「えーっと、つまりどういうこと？」

「クラレンス。今北産業」

「学際期間中世界樹魔力めっちゃばねえ。

そのせいで、世界樹周辺に常時惚れ薬魔法発動中。

このままじゃ生徒の青春やばいから、告白ブレイクして青春ブレイクしようぜ。

今(ハハハ)」

「四行やん。しかも本末転倒やし……」

「いや、そうだったのはクラレンス殿の説明が悪かっただけじゃしな!」

クラレンスの説明を聞き、マリーは思わず三白眼になって学園長を睨み付ける。そんなマリーの視線に学園長はあわてた様子で手をブルブルとふるい否定の意を示した。

「とにかくじゃ! 学際期間中は世界樹周辺で起こる告白沙汰に警戒をしてほしいのじゃ!! マリー君も嫌じゃろう? もし万が一にも犬神君に冗談交じりの告白をされて、犬神君にガチボレしてしまつたら」

「魔法先生に魔法生徒のみなさん! 頑張つてこの仕事全うしましょう!! 生徒の青春がかかつとるしな!!」

「これは怒るべきところか?」

「いえ、当然のことだと思えますけど?」

「まあそうだな。僕もあいつが変な感じになつたらツツコミがいなくなつて困る」
「困るのそんな理由なんですか!」

「だがとりあえず野菜はうちの地下で人に厳しいエコ発電な?」

「そして理不尽な八つ当たりされた!」

ひどいです。おさきまつくらです、と悲鳴を上げるネギを無視して、犬神は学園長に肝心な話を持ちかける。

「さてクライアント。この依頼の報酬についてですが」

「……ボランティアではだめかの」

「帰るぞ、安川、野菜、助手の助手、クラレンス」

「わあ!?! まったまった!! 冗談!! 冗談じゃから!!」

割と切実に犬神やVIが出した被害のせいで財政難の麻帆良だったが、近衛門は涙をのんで先ほどの発言を冗談だったことにする。

「では、まずは詳しい契約内容のほうを……」

その言葉を聞き即座に戻ってくる犬神の姿に麻帆良の魔法教師たちは若干呆れながら、

「ん」

グラサンと髭が特徴的な魔法教師——神多羅木が指をパチンと打ち鳴らす。

瞬間、彼の手元から見えない疾風の刃が飛び出し、虚空にいた何かを切り裂いた!

「っ?! 無詠唱!!」

「ああ、そういえば野菜はまだ習得していなかったな。よく見ておけ、ここの教師たち最近はやたら役立たずだったが、魔法の腕だけは超一流だ」

「一言余計だぞ、犬神」

男子中等部で歴史教師をしている神多羅木は苦笑を浮かべながら、犬神にいつものよ

うに注意をする。

「それにしても人払いの結界を抜いてくる生徒がいるとはな？　手ごたえからして機

械っぽかったが？」

「うちの生徒は優秀なのが多いからね〜」

「追いまししょうか？」

「任せる。ブラックリストに載っておる生徒なら適当にわしのところに連れてきてくれ」

了解しました。と学園長の言葉に返答した一人の魔法教師と、二人の魔法生徒がその場から姿を消す。その振る舞いに犬神が言ったようにかなりの手練れだと感じ取ったネギは、感嘆の息を思わず漏らした。

僕が知らないことはまだまだたくさんあるんですね……。と、内心でそうため息をつきながら。

それはともかく、

「では皆の者。今日は解散としよう。詳しい警備のシフトはまた追って伝える」

「そうですね、ではクライアント」

「ん？」

「契約内容と報酬の話は、これからあなたの部屋ですることにしませう」

ネギはため息交じりに学園祭期間中の予定表を開く。

「それにしてもどうしよう……予定が」

「ああ、そういえばネギ先生クラスの人たちともけっこう約束していましたっけ？」

「律儀やなくネギ君は。去年の高畑先生なんて広域指導員の仕事で忙しいから、時間が空いたらふらつとやってくる程度やったで？」

マリーと刹那はネギの態度に感心したような雰囲気話しかけながら、ネギが開いた予定表を見る。

「……………」

そして、そのほとんどが女子との予定と埋まっているのを見た瞬間何とも言えない顔になって、

「たらし？」

「いえ、女子中学の先生なのですからある程度は仕方ないかと……」

「いや、でも割とネギ君狙っている奴らがおるのがたち悪いな」

「委員長さんとか大丈夫でしょうか？」

ぼそぼそとかなり失礼な会話をするマリーと刹那に、ネギは思わずズドンと落ち込み、小太郎は鼻を鳴らして吐き捨てた。

「女との約束ばかりやないか。見損なうでほんま」

「なっ!!」 仕方ないじゃないか!! 僕女子中学の先生なんだから!!」

そんな小太郎にいい加減限界が来ていたネギが食ってかかり、そのまま子供の喧嘩へと発展しかけた時だった。

ドカッ!! という、轟音とともに一人のローブを着た少女がネギたちのすぐ近くに立っていた屋台に突っ込んできた!!

「なっ!!」

「なんや!!」

驚くネギと小太郎。しかし、刹那とマリーはフードから覗いた顔でその人物がだれなのかいち早く察したようで、小さく首をかしげながら疑問をぶつける。

「あれ? チヤオ 超? なにしとんのこんなところで? 工学研のロボットでも暴走したん?」

「それ割とシヤレにならないから、冗談でも言うのはやめて欲しいネ」

マリーが声をかけたとおりの顔が、少女がフードを取り払うことで表れるのを見てネギも驚きの声を上げた。

「超さん!!」

「やあネギ坊主に、刹那さんマリー。たすかたネ。ちよと助けて欲しいネ。怪しい奴らに追われてるよ!!」

「ええ!!」

鋭くしつつ杖を構える。それを見た小太郎は歓喜の声を上げ自分の手に気を装填した。
「うらっー！」

そして気合の一喝とともに、気が装填されたコブシで使い魔を力任せに殴りつける。
その一撃によってきれいに上半身が消し飛ぶ使い魔。「すごい」と、その光景に小太郎の強さを改めて再確認しつつネギは呪文の詠唱を開始する。

「!?」

使い魔たちもそれに気付いたのか、とたんに超へと向けていた狙いを、ネギへと変え襲い掛かってくる。砲台役をつぶすのは戦闘の基礎だ。だが、

「なんでやね〜ん!!」

「斬空閃!!」

マリーの豪気功で強化されたアーティファクトはりせと、刹那の神鳴流剣技が使い魔たちへと襲い掛かり、ネギに襲いかかろうとしていた使い魔たちを殲滅した。

だが敵もさる者。伏兵でも仕込まれていたのかネギの足元に落ちた影から一体の使い魔が姿を現し、

「異・開。帝国式攻撃気弾《薄刃蜂蛸》ウスバカゲロウ」

マリーと離れてネギの護衛に回っていたヒメの一撃によって、役目を果たすことなく消え去った。

そして、ネギはその間に呪文の詠唱を締めくくり、

『つて、兄貴やべえ!! こんな真昼間に魔法を使うのは……』

「大丈夫だよカモ君」

マリーの胸元から姿を現したカモの注意の声が飛ぶが、ネギは自信にあふれた声とともに魔力を放つ!

「魔法の射手・連弾・光の17矢!!」

「つて、どつからでてきとんのやあああああああ!!」

『メメタア!?!』

解き放たれた閃光の矢が瞬く間に空をかけ漆黒の使い魔たちとキレたマリーによって天高く投げられたカモを蹂躪する。

割とシヤレにならない悲鳴をカモが上げていた気がするが、セクハラしたことは確かなのでネギは黙って手を合わせるだけでカモの追悼を終わらせた。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

ポンポンと上がる花火にまぎれて、自分の使い魔を打ち果たした魔法が爆発する。その光景を見てなかなかうまい策を考えるとほぞを噛みながら、使い魔の行使手は念話通

信で仲間にはほどの光景を伝えた。

『今のは』

『魔法の射手!?!』

『どうやら敵にも西洋魔法使いがいるようだね……』

『17体の使い魔が一瞬でやられたところをみるとかなりの手だれのようですが?』

『ふむ。要注意生徒の補導だけだと思っただが、結構厄介なことになってきたなこれは』

上司が漏らした困惑の声に、行使手は小さく頷きながらあらかじめ待機させておいた予備選力の使い魔四体に新しい指示を出しておく。そして、

『だが、だからと言って諦めるわけにもいかないからね。とりあえずもう一度仕掛けて様子を見るよ。遠距離攻撃シフトに切り替えてくれ。前衛は私と貴音君の使い魔。佐倉君は様子を見つつできそうなら捕縛魔法を頼む』

『はい』

おおよそ予想通りの指示が出たのを聞き、使い魔四体は無言で行動を開始する。対象を速やかに捕縛するために。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

「あいやくたすかたネ。恩にきるよネギ坊主」

追跡を行っていた使い魔を撃退したことにより余裕が生まれたネギパーティーたちはとりあえず超に事情を聴くため小さな裏路地へと姿を隠していた。

「そんなことより超さん、いったい誰に追われているんですか？ 学園結界のおかげでこの学園にはめつたに敵対勢力は入ってこないのに」

「え、えつとそれは〜」

ネギの質問に若干目を泳がせる超。その態度を不審に思ったネギがさらに質問をぶつけようとしたとき、

「しっ。ネギ先生。どうやら敵に捕捉されたようです。手だれの気配が三つほど、こちらに近づいてきます」

刹那が何かに気付いた様子でネギの質問を中断させる。どうやら直感的に敵の接近を悟ったようだ（後ろでマリーが「ニュータイプ!？」と驚いているが今は放っておく）。そのあとに続くように暗殺者として鍛えられた感覚を持つヒメと、人間とは比べ物にならない鋭さをもつ、獣の五感の小太郎が補足した。

「距離は右から50・80・70や」

「足音からして二人は中高生程度の女性。もう一人はかなり鍛えられている成人男性。足運びからして男性のほうはたぶん近接型魔法使い。あと、空気の流れから足音を立て

ていない人型の何かが四体。たぶんさっきの使い魔と同じ型の使い魔」

「もうあんたらそれで飯食っていけるんとちゃうん……」

割と人外じみたスペックを披露する二人にあきれるマリーだったが、今のネギたちのとつてはありがたい情報だ。

とりあえず敵が近づいてくるというのなら、

「先手必勝。雑踏にまぎれて瞬時に決めるよ」

「おっしゃ、任せとけ」

「近接型のほうは私に」

「屋根の上。念のため私も登る」

「マリーさんは超さんの護衛をお願いします」

「了解」

瞬く間に役割分担を終えた4人はこちらに向かってくる敵と相対するために行動を開始する。

左右の壁を交互にけりつけ鮮やかに屋根へと登る刹那と、極限まで気配を殺し一気に壁を駆け上がるヒメ。

小太郎はぎりぎりまで姿勢を低く保ちつつ疾走し、人ごみの中へとまぎれ、逆にネギは天高く舞い踊り敵の死角へと入りこむ。そして、

『戦いの歌』!!」

身体強化を瞬時に済ませると同時に、

「っ!?!」

使い魔を四体が離れていき、無防備になっている女性魔法使いに向かつて、犬神は知らない最近無詠唱で行えるようになった魔法を発動させる!

『風花・武装解除』!」

「ちっ!」

杖を弾き飛ばされ舌打ちを漏らす女性。しかし、ネギがかなり加減をしたためか他の武器ははじかれていない(さすがに公衆の面前でいきなり裸にするのははばかられたのだろう)。ならばとばかりにポケットに手を突っ込み予備の杖を取り出した彼女は、同じように向詠唱で発動できる魔法を、ネギにお見舞いしようとした。

ところで、

「え?」

「なっ!?!」

自分たちが戦っているのが、先ほど世界樹広場であった魔法先生と生徒だと分かりあわてて詠唱を中断し、啞然とした顔で互いを見つめた。

当然その光景はほかの場所でも展開されており、

「にしてもこれ何なんでしょうか？」

「御守りみたいなもんやって超言ってたけど」

「うう……嫌な思い出しか思い出せません」

「あの時は頭すごい勢いでへこみましたからね……」

「どうやったらお守りとそんなスプラッタ現象が結びつくんか、わからへんねんけど？」

超に渡された懐中時計のようなお守りに戦慄していたりした……。

……+……+……+……+……+……

その頃の超は、

「で、超さん。どうでしたか？ ネギ先生は」

「思った以上にいい奴だったネ……。仲間に引き込めればいいんだが」

巨大な飛行船の上に乗る、五人の人影が麻帆良祭を見下ろしている。

まがった特性金属バットを持つ金髪の少年と、黒く長い髪をなびかせる美しい少女。

眼鏡をかけたマッドサイエンティストに、それに作られたアンドロイド。

そして、

「さて、始めるヨ。ここから世界を変えていく」

自称・未来から来た火星人。

彼らがこの麻帆良祭に嵐を呼びこむ張本人たちになるとは、麻帆良の防衛をつかさどる魔法使いたちは知らなかった。

28話・第78回麻帆良祭、開幕!!

「で、なんでぼくたちはこんなところにいるんですか？」

「決まっているだろう野菜」

魔法先生たちとの会合を終え、麻帆良祭当日を迎えた犬神アンダーグラウンドサーチ。

彼らはどういうわけか麻帆良の中心である世界樹のもとに集っており、各々『必勝』の文字が書かれた鉢巻きを頭に巻いている。

「はい、これネギ君の分な？」

「あ、ありがとうございます……じゃなくて、何なんですかこれ!？」

マリーに渡された鉢巻きを、つい反射的に受け取ってしまったネギはあわててそれを地面にたたきつけツツコミを入れる。

麻帆良に来てから一年と数カ月……その時間によって鍛えられたネギの直感が彼に警鐘を鳴らしていた。なんか巻き込まれてはいけない事態に巻き込まれかけているとっ!!

「決まっているだろう野菜。麻帆良祭には優勝することによって賞金が出るイベントが

多数出展されている。つまり」

しかし、ネギは気付いていなかった……。犬神のもとにいった時点で、もうこうなることは決まっていたのだと、

「僕たちの稼ぎ時だ!! これよりわが犬神アンダーグラウンドサーチは全力をもつて麻帆良祭で出る賞金のすべてをかつさらうべく……。どこへ行く気だ野菜？」

その言葉を聞いた瞬間脱兎のごとく逃げ出すネギの眼前に、犬神が瞬動術で現れる。「うっ!!」

出現した犬神が放つ人殺しの威圧感に、思わず足を止めるネギ。しかし、ここで彼は止まるわけにはいかなかった。

これから始まる学園祭を楽しむため、何より自分と一緒に回ることを楽しみにしている生徒たちのために、ここで犬神に仕事を押し付けられるわけにはいかないのだから!! だからネギは、必死に抵抗の言葉を口にした、

「こ、こんな人たちと一緒にいられるか?! 僕はひとりで祭りを回る!!」

「この状況で死亡フラグを立てたことは感心に値するな。さて、では回収してやろう」
ボグシヤワツ!? という、人の顔面が出てはいけけない擬音とともに天高く舞いあがるネギ。今年の流行語はここから生まれたりする、

「軽く、三回転はしとったな」

「というわけでみんなくネギ先生つれてきたで〜」

「でかしたマリー!!」

落ち込むネギを引きずってお化けやしき前に現れたマリーに、ネギを狙う女子生徒たちが歓声を上げた。

「うわ、マジで完成度高いな……。というか、普通の遊園地とほとんど遜色ないで」

さすがは無駄な廃スペースク持ちたち、と自分のクラスメイト達に戦慄にするマリーをしり目に、ようやく現実へと戻ってきたネギは自分のクラスの前にできている長蛇の列を見て感嘆の声を上げた。

「すごいですね。こんなに人気が出るなんて。ちよつと意外でした」

「もくネギ先生。そんなこといいから入って入って!! ネギ先生なら優遇しちゃうよ?」

「私は?」

「ごめん、並んできて?」

「クラスメイトも優遇してえや!」

3—Aメンバーの幸運娘桜子がシレッと返した言葉に突っ込みを入れるマリーに「よつ、ナイスツツコミ!!」とサムズアップをする弱小バスケット部員裕子が笑いかける。

「まあまあ、それも冗談だからマリーも入った入った!」

二人はそんなやたらとノリノリの妖怪に仮装した少女たちに連れられお化け屋敷の中に入る。そして、

「ようこそ！ ドキッ!? 女の子だらけのお化け屋敷へ!!」

「どこのイメクラやつ!? (ですかっ!?)」

不穏すぎるお化け屋敷の別名を聞き思わず勢いのいいツツコミを入れてしまった……。

…+…+…+…+…+…+…+…+…

何のかんのお化け屋敷を楽しんだ挙句、自分の生徒たちに服を剥かれかけるというセクハラ恐怖体験を経験したネギ。

そのご、明日菜の胸に飛び込み発展途上の双丘をもみしだくという、とんでもハプニングが起こってしまい明日菜に殴り飛ばされるといふ事件はあったが、ネギは順調に学園祭午前の部を消化することに成功した。

そして、お化け屋敷で合流した裏関係者たち——明日菜、木乃香、刹那を仲間に加えたネギたちは、マリーが出場する予定の賞金がかかったツツコミ大会（お笑い研主催）へと足を運ぼうとした。

だが、

「あう?」

「あらら〜」

突然力が抜け倒れかけた体を明日菜とともについてきていた木乃香に受け止められたことを機に、ようやく自分がかかり疲労していることに気付いた。

「どうやら疲労をごまかす魔法を若干使っていたのが悪かったらしい。それによって必要以上に疲労に対して鈍感になってしまっていたようだった。」

「さすがに10歳に徹夜はきつかったみたいやね〜」

「まあ、それ以外にも祭りではしやぎすぎたゆーんもあるんやろうけど?」

「あんた全然疲れた様子見せなかったから気付かなかったじゃない。もっと自分を大切にしないさいっ!」

「あうう……すいません」

心配した様子でネギを怒る明日菜と、苦笑を浮かべる木乃香に癒されはしたもののさすがにこのままではやばいということで、マリーの提案でネギは医務室を訪れることになった。

「私たちは自分の部活の出し物あるし」

「ネギ君のことよろしゅうなせつちゃん」

「お任せくださいお嬢様」

「ゆつくり休むんやで？ 私の賞金のことは気にせんでええしな？」

「はい……ありがとうございませう」

口々にお見舞いの言葉を告げて医務室を出て行った三人を見送り、刹那に次の用事（12:00からのプチ雑学クイズ大会）時間がきたら起こしてくれるように頼みこんだ後、ネギはゆつくりと目を閉じた。

そして、

「あ……ありのまま 今 起こった事を話すぜ！ 『僕は目を閉じたと思っただけのまにか夜になっていた』。な……何を言っているのかわからねーと思うが、僕も何をされたのか わからなかった……。頭がどうにかなりそうだった……。催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……」

「いや兄貴……それ普通に寝過しただけなんじゃ」

「……………」

先ほど医務室を訪れて（どうやらここの女性保険医に可愛いがつてもらおうことが目当てだったらしい……）ネギを起こしてくれたカモからの珍しいツツコミに、ネギはしばらく固まった後、

「どどどど、どうしよう刹那さん!? 起きて!! 起きてください刹那さんってばあああああああああああ!」

「んあ、むにや……ね、ネギ先生い……いいいいいいいいいいいいいい!!」

ネギにたたき起こされた刹那は、若干寝ぼけた声を上げたものの、医務室の外が真っ暗になっているのと時計を見た瞬間事態を把握した瞬間、一気に真っ青になり悲鳴を上げた。

「よ、夜の8時って!? す、すみませんネギ先生!! 起こすって、起こすって約束したのに!」

「どどどど、どうしましょう!? 今日の予定全部すっぽかしちゃいました! あんなに予定びっしりだったのに全部すっぽかすなんて……。それに、その中には犬神さんの……」

そこまでいって事態の深刻さを再認識したネギの血の気は、もう紙と見まがわんほどの白い色合いへと変化してしまう。

それはそうだろう。仮にも犬神がかなり本気を出してやる気な麻帆良祭賞金イベント全制覇。それを寝坊なんて理由ですっぽかしたなんて彼にばれたら、

「ひ、人に厳しいエコ発電で許してくれるかな?」

「兄貴、兄貴……たぶんだみ声で生コンクリート出されると思うぞ」

「……………」

カモの割とシャレにならない予想にもうネギは絶望するしかなくなる。だがそれ以上、

「あの、先生……宮崎さんとのデートの約束は？」

「……4時」

「……………」

勇気を出して自分を麻帆良祭めぐりに誘ってくれた、自分を好いてくれている読書好きの少女の顔を思い出し、ネギは再び泣きそうになり、

「ふふ……もうだめだ。カモくん……ちよつと人ひとり吊るされても大丈夫なくらい丈夫なロープ用意して？」

「はやまんな兄貴いいいいいいいいいいいいいいいい!!」

暗くい声音でうつろな笑みを浮かべてどこかへ行こうとするネギに飛びつき、カモは必死に思いとどまるように絶叫する。

「あ、安心してくださいネギ先生! 私にいい案があります!!」

「だめそう?! なんかだめそう!!」

「とりあえず片っ端からこの部屋の机の引き出しあけてタイムマシンを探しましょう!!」

「そしてやっぱりだめだったあああああああああああああああ!?!」

なんだかもう混乱のあまりキャラずれどころかとんでもないことを喚き散らす三人。
そんな時だった、

刹那のタイムマシンという言葉に反応し、ネギの懐に入っていた超からもらった懐中時計が、

カチツ!!

「「?」」

やけに耳に残る音を立てて針を動かしたかと思うと、

「あれ?」

「え?」

「なっ!?!」

突然医務室の窓から日光が差し込み、賑やかな昼間の喧騒が漏れ聞こえてくる。

そして、

「それではこれより、第78回・麻帆良祭を開催します!!」

外から響き渡るアナウンスを聞き、三人は思わず顔を見合わせ、

「「どうなってんの!?!」」

この異常事態に疑問の声を上げた。

29 話・麻帆良武道大会開幕!!

「野菜の様子がおかしい?」

「せや」

犬神からのミツシヨンである賞金獲得を済ませ、右手に綿菓子、左手にたこ焼き、頭にお面、着ている服は浴衣です。と、完全にお祭り装備で夜の学園祭を楽しんでいたマリーからの報告に、同じく男性用の浴衣を装備して縁日風の区画の射的で商品を根こそぎ制覇。屋台のおっさんを号泣させていた犬神は首をかしげながら、クラレンスへと視線を向ける。

「そうなのか?」

「確かに、ネギさまはいつの間にか忍術を覚えておられたようですが」

「え? 忍術?」

「はい。今日は世界樹の警備を龍宮さんとしていたかと思うと、違う場所で宮崎さんとデートを行い、さらに同時刻に観光船の上で夕映さんと一緒に恋ヴァナをしていたようですが」

「ああ、なるほど。だからクラレンスはネギが影分身したものだと思ったんだな」

「……いやいや、それ以前にクラレンスさんはそれだけの人数のネギ君どうやって確認したんよ?」

「それはまあ、このようにして」

瞬間、クラレンスの周囲にズラアアアアと現れる50人近いクラレンス達。周囲の客たちはぎよつとした顔で立ち止まり、客にまぎれていた魔法関係者たちは思わずため息をつき天を仰ぐ。

「安心してください、CGです」

「普通ならそれではごまかしきれへんねんけどな」

マリーがあきれるさなか、クラレンスがシレつといった言葉を真に受けさせられた観客たちは「なくんだ、CGか」「さすが麻帆良、俺たちにできないことを平然とやってのけるしてのける」と言いながらどこかへ散っていく。

「まあ、あいつが影分身を覚えていようが水分身を覚えていようが、臙分身を覚えていようが僕にとつてはどつてもいいな」

「ああ、やつぱり?」

「きつちり賞金も取つたみたいだし、なんら問題はないだろう?」

それよりも、だ。と、犬神は言いながら最後の射的用の銃にコルク玉を込めながら、声を小さくする。

「僕にとつて重要なのは、これから始まる大会だ」

「ああ、麻帆良格闘大会？　でもあれ、体育祭のウルティラ麻帆良と比べたらめっちゃちつさい大会やん？　賞金かてたかが知れてるみたいやし」

それだったら、まだマリーが今朝勝ち抜いたツツコミ大会のほうがいい賞金を出していた。漫才研究会は意外と大きなサークルだったりするのだ。

「ん？　何だ安川、まだ知らなかったのか？」

「え？」

犬神がそう告げると同時に気力で強化されたコルク玉が最後の商品を見事に爆散させ「ん？　気を強くこめすぎたか」と犬神の首を傾げさせ、射的屋の店主の顔を青くさせている傍らで、50人近い分身を煙のようにかき消したクラレンスが一枚のチラシをマリーへと出してくる。

「こちらでございませう」

そう言つてクラレンスが差し出したチラシにマリーは目を通し、
「なっ!？」

その激変具合に、驚きの声を上げた。

書かれていた大会の内容はまあいい。格闘大会だ。どこまで行つても大した違いはない。だが、問題はその賞金で、

「これはっ……」

賞金、1000万。通常の学園祭では考えられない規模と金が動く麻帆良祭であつても、ちよつと考えがたいほどの金額を提示してきた格闘大会。

パワーアップどこの騒ぎではない、明らかな異常事態だった。

そしてその主催者は、

「ちよ、犬神君……これっ?!」

超包子オーナー、超鈴音。学園祭前に学園長から「なんか起こすかもしれないから注意してね♡」と言われて思わずイラついてしまった原因を作った彼女の同級生だ。

つまり、この大会は確実に超の何らかのたくらみである可能性が高くて、

「ちよ、犬神君?! やばいってこれ!! 絶対なんかあるって、やめたほうがええって!!」

あわてて犬神を棄権させようとするマリーだったが、

「安川、一体何の話をしている? やめる……だと?」

犬神の瞳は、

「むしろその逆だ馬鹿者、この大会は何としてでも僕たちが勝つ。そうすることによって超の計画を事前にたたきつぶせるかもしれないのだぞっ!! すべては麻帆良のため、この学園祭を守るために行うのだっ!!」

「そういうまじめなセリフは目の形を『?』から戻してからいえや!!」

しり目に電車の混雑のせいで大会開始ギリギリに到着した犬神ご一行は、即座に舞台へと駆け上がり予選会場へと足を踏み入れる。

予選の内容はAとHのグループに分かれてのサバイバルマッチ。別れたグループ内で生き残った二人が本選へとコマを進めることができるらしい。

「あれ?」

「マリー」

そんな犬神たちをしり目に、今回は観客サイドへと回ったマリーは楽しい娯楽ができたと喜びつつ格闘大会の観客席へと歩を向けたのだが、

「ヒメちゃん。どないしたん? 『ネギに暇ができたらしいから一緒に回ってくる』って言うとったのに?」

「そのネギがあそこにいる」

「え!?!」

マリーがあわてて格闘大会の舞台へと視線を向けると、

「はっ!!」

裂帛の気合とともに、強烈な蹴りの一撃で自分の身長の数倍はある巨漢を吹き飛ばすネギの姿が見えて、

「つて、おいしいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!? なんでいんの!!? 明らかにチャオ

がやばいってわかってるやん!」

「ほかにも……いるよ?」

「なっ!」

驚いたマリーがほかの舞台にも視線を向けると、

「ほあちゃー!!」

「いや、楽でいいな」

華麗に舞う古菲が鮮やかな一撃で格闘男子たちを吹き飛ばすのを龍宮がのんびり眺めていたり、

「おらああああああああああ!! これでもないやああああああああ!!」

6つ身分身!!」

「おお、なかなかやるようになったようでござるな。では次は12人で♡」

「くう!?! おれはまだ8人が限界やああああああ!?!」

明らかに格闘対決していない楓とコタローがいたり、

「でりやああああ!!」

「神明流徒手空拳術基礎・活身衝」

気力と魔力で強化された、セーラー服の見知った同級生たちが無双していたり、

「ぐあ……」

「さすが……デス眼鏡」

「ははは、その呼び方はやめてくれないかな？」

「ふははははは、いぞタカミチ。もつとやれ」

マリーには見えない遠距離攻撃によつて次々と学生を沈める大人げない広域指導員と、吸血鬼がいたり、

「……めつちや豪華な布陣やん!？」

正直これだけの戦力が同時に会することなど、実力者が多い麻帆良にしても珍しいことなのでは? と思つてしまう。

「つて、そんなん言つてる場合やなかつた!? ネギくーん!! みんなつ!!」

マリーは一瞬茫然とした後、あわてて会場のほうへと声を上げる。

「あれ? マリーさん?」

「なくにマリー? あんたも観戦に来たの?」

絶対優勝するからねくや、クラスのほうどうなつた? とか、思い思いの声をあげてくる知り合いたちの言葉を完全に無視して、マリーは力いっぱい声を張り上げる、

「今すぐその大会棄権するんやつ!!」

「「はあつ!?!」」

何言つてんだこいつ? と知り合い連中が首をかしげた瞬間、

「その大会……悪魔が参戦しとる!!」

マリーがもう絶叫した瞬間、格闘大会の会場に、

ゴバアツ

!!!!!!!!!!!!!!

という、通常ならちよつと考えられない衝撃音とともに激震が走った!!

その震動に! 啞然とする参加者一同。そんな彼らをしり目に、

「安川」

激震の震源地であるAグループの会場から、ぞつとするような冷たい声が聞こえてきた。

「その悪魔とは、僕のことではないだろうな?」

「自分の胸に手を当てるまでもないやん!! 周囲見てからそういう不満は漏らしてえや!!」

マリーが思わずツツコミを漏らすさなか、どういいうわけか水しぶきに包まれていたAグループ会場の飛沫は晴れ、その会場の惨状を表した。

犬神が立っていた。それはいい、どちらにしろそれほどの実力者が見えないAグループでは当然の結果と言える程度の出来事だ。だが問題なのは、

とはいえ、このままネギと闘えないというのは若干惜しい気がした彼は、

「後ネギくん、実はこれは噂なんだが……この大会の最後に優勝した人物は、イギリスからやってきた赤毛の10歳の子供——ナギ・スプリングフィールドという少年だったという話だ」

「っ!？」

ちよつと汚いかな〜と思いつつも、ネギが必ず食いつくであろう情報を提供しておく。

「だから、ちよつとがんばってみることも悪くないんじゃないかな?」

「……」

タカミチのその言葉に、ネギは思わず握り締めた自分の拳を見つめる。

「……」

そしてしばらく思い悩んだ後、

「そう……だね。ゲルさんにぶつかったら即座に棄権すればいいだけだし」

「……」

やる気は出たようだが地味に弱腰は治っていないネギに、タカミチは思わず顔をひきつらせた。

《処刑人》ジルドレを殺した凶悪犯。

「……」

そんな凶悪犯を見て犬神は、

「ふむ、ちなみに教えておくとお前の情報はもう学園長に売っておいたぞ」

「しよっぱなからその話題か?! 相変わらず変わってないな!!」

なんというか……平常運行だった。

「にしてもあつたのはジルドレの事件以来だったな。うちのヒメさんが無茶しちやつて……(づ)めん」

「まったくもつてその通りだ。処刑人一人の死体を片すためにまさか事務所ごと爆破されるとは思っていなかったぞ。弁償しろ」

「いやいや、あれはもう君の管轄だし……さすがに弁償は今の帝國的にちよつと……」

帝国の暗殺者たるもの、死してなお痕跡を残すべからず。という、教育をヒメが実行した結果ダイナマイトを全身にまかれて爆発四散させられた自分の師匠の葬送方法を思い出し、サデイストは思わず顔をひきつらせる。

「最近帝国あてに依頼がなかなか入ってこなくてさ。うざい人だったんだけど、カイザーが優秀だったんだな」と思い知らされる日々が続いているよ」

「弱音か？」

「まさか。暗殺者は道具だぞ犬神君」

珍しく驚いたような犬神の言葉にサディストはニヤリと不敵な笑みを浮かべ、ふざけきった態度で肩をすくめる。

「おれたち暗殺者は拳銃と同じさ。ただ殺せと言われた対象を殺す道具。そこに私情はないし、信念もない。ただ対象が真っ白になるまで殺すだけさ」

「そうか。ではとりあえず一言だけ言わせてもらおうぞ」

「ん？ なんだ？」

そして犬神は鋭く目を細めて、

「僕の仕事のじやまをするなら……それ相応の覚悟をもってこの学園祭に臨むといい」

「仕事って？」

「最優先事項としてあげられるのは……」

貴様らによる殺人の阻止。犬神が教えた依頼内容にサディストはほーと感心したような息をもらした。

なるほど、うわき通りこの学園はかなり優秀なようだ……。自分たちが侵入したことを割り出すだけでなくもつとも最善と思われる人材にすでに動きを封じるように命令しているとは……。

だが、

「了解。わかったよ……。今回人は殺さない。マゾミちゃんにもそう言うておく」

サディストは意外とあっさり、まるで何のこだわりも持つていないと言わんばかりに犬神の脅しをあっさり飲んだ。

「？」

今度こそ本当の驚きの表情を顔に浮かべる犬神に、サディストは苦笑を浮かべながら立ち上がる。

「おいおい、俺らは暗殺者だぜ？ 快樂殺人犯とはちがう。依頼されなきゃ殺しはやらんさ」

「ではなぜ貴様ら、こんなところにいるんだ？」

犬神の問いに、立ち上がったサディストは背を向けながら一言、

「企業秘密」

とだけ答えて、さっさと控室を立ち去った。

そんなサディストの意味深な態度に首をかしげていた犬神だったが、

「ん？ まてよ？ あいつが殺ししないというのなら僕は何もしなくてもこの依頼分の金が転がり込んでくることに……」

そこまで考えた後、やたら機嫌の良さそうな顔でにやりと笑った。

どうやら犬神にとってはサディストが黒幕に命令されていることよりも、自分の手元

「小太郎君……墓石は御影石でええかな？」

「すでに葬式の準備されてる!？」

あんたツツコミ役ちやうかつたんか!?! といきり立ちながら、小太郎は龍宮神社内に設置された木製のリングに上った。

「どうやら僕の知り合いたちにかなり失礼な態度をとられたらしいな」

「ほんまやで。あんだけ言われるとか一体あんた何したんや?」

「大したことはした覚えはないぞ? 僕はビジネスをしただけだ」

シレッと大ウソをつく犬神の態度に若干納得いかないものを感じながら、小太郎は我流の構えをとる。

「あまあええわ。おれは決勝でネギに会うって約束しとんねん。悪いけど瞬殺させてもらうで」

「あいにくとぼくにも負けられない理由がある」

具体的にいうと金のために……。

割と最低な理由で負けられない犬神だったが、金が絡んだ犬神は常時界王拳状態だ。モチベーションですら小太郎のはるか上を行っている犬神に負ける要素は一切ない。

「とはいえ、今の僕はちよつと機嫌がいい小太郎少年……」

犬神の機嫌の向上は、先ほどの働かなくても金が入ってくるという事実を知ったおか

げだったが、さすがにそれを知らせるのは小太郎にも、会場にいる接戦を期待している観客にも酷な事実だろう。

「だから、三分ほど遊んでやろう」

そう言つて犬神が構えたのは、

「なっ!!? あれは……八極拳!?! しかもかなり構えが整つてるアル!?!」

専門家である古菲が思わず感嘆の声をもらすほどの美しく完成された八極拳の構え。

「こい、我流では絶対に越えられない壁を見せてやろう」

「はっ……上等!!」

瞬間、いつの間にか審判を担当していた朝倉の「始めっ!!」の言葉と同時に、小太郎の姿が瞬時に掻き消え犬神の目前へと再出現する。

圧倒的に格の違う、二人の『イヌガミ』の戦いが幕を開けた。

30話・麻帆良武道会。激戦!! 第一回戦!!

ツツツ……。と、自分のほほを一筋の汗が伝うのを感じる。

一体どれだけの時間睨みあったことだろうと小太郎は、今までとは全く違うこの闘いの風景に戦慄を覚える。

犬神との戦いが始まってからすでに5分が経った。しかし、小太郎は未だに犬神に攻め込むことができないでいた。

隙が、見えないのだ。

どれだけ犬神を観察し隙を見つけようとしても、襲いかかったとたん自分の体に彼のコブシが直撃し自分が敗北するビジョンしか浮かばない。

圧倒的に格が違う相手。そういう敵とは何度も対峙してきたし、そして何度も生き延び勝利してきた。

だが、今対峙している犬神からはそんな奴らとはまた次元が違う絶望的なまでの格の違いが感じられた。

たとえるならザトウクジラと沖アミ。微生物とゴジラ。それほどの格の違いを小太郎は犬神に感じていた。

だが、

「はっ……」

「ほう」

それでも小太郎は笑った。そんな小太郎に少し感心した様子を見せる犬神。そして、犬神は汗にまみれながらも不敵な笑みを浮かべる小太郎に疑問をぶつける。

「なぜ笑っている？ 格の違いが分からないわけでもあるまい」

「わかつとる。この五分間でそのことはよー思い知ったわ。けどな」

小太郎はそこで構えをとり、気力を全開までため狗神も召喚できる数だけ呼び起こす。

「あんたが強いゆうことは、あんたとの戦いはおれの貴重な体験として力になってくれる。こんなうれしいことがほかにあるかいな」

「……いい覚悟だ」

負け惜しみでも、やけっぱちでもない。真実強さのみを求める小太郎の言葉に犬神はさらに笑みを深くする。

対する小太郎は、もはや戦力の温存やペース配分など考えていない。まかり間違つて犬神に勝てたとしても、次の戦いには絶対に出られないであろう程の、限界ぎりぎりの気力を開放していく。

まるで跳ねるように地面を踏み再び瞬動にはいる小太郎。今度は迎撃するつもりなのか、犬神の手に爆発的な気が圧縮され、チャージされる。

「その男の名は李書文。その二つ名は」

小太郎の突撃他犬神へと肉薄する。

しかし、犬神は迎撃しない。いつまでたつても迎撃行動をとらない犬神に小太郎は小さく首をかしげながら、

呼吸の音が聞こえるほど近くに、接近を果たした。

そして、小太郎は無防備に侵入を果たしてしまう。超近接型拳術《八極拳》の間合いへと……。

瞬間、小太郎の体に凄まじい衝撃が走った!!

観客席にまで響き渡りそうな轟音。おまけに、その轟音によって舞台の土台に無数の亀裂が入り次の試合では絶対に使えなさそうな惨状にまで舞台を粉砕する!

そして、

「があっ……」

小太郎の体がぐらりとかしぎ、ぼろぼろになった舞台へと倒れこむ。

を持っていたため解説役として大抜擢された豪徳寺と、機械的に進行を進めることができる茶々丸だ。

その隣では半眼になった千雨が首をかしげながら、先ほどの摩訶不思議な光景に何とか納得できる理由を見つげるために豪徳寺の解説をおとなく聞いていた。

「いえ、技そのものはさほど特別なものではありません。あれは中国武術の基礎の一つに数えられる『崩拳』と呼ばれる拳打ですね」

「ですが、村上選手はその一撃で倒されてしまいましたか?」

「だからこそすごいのですよ。八極拳の使い手の中で歴代最強とうわさされる男『李書文』と呼ばれる格闘家がいるのですが、今のは恐らくその再現を狙ったものなのでしよう。八極拳の極地に至った彼は、牽制の一撃ですら相手を沈めて見せたという逸話が残っています。おそらく犬神選手はそれを再現できる実力……もしくは、それ以上の実力を持つからこそあの技法を披露したのでしよう」

この大会、もしかしたら彼が一人勝ちするかもしれませんよ? と、割りとシヤレにならない豪徳寺の言葉を聞いた選手たちは大いに顔をひきつらせた。

…↑…↑…↑…↑…↑…↑…↑…↑…↑…

『さくて!! 順調に試合が消化されていく中、数々の名シーンが生み出されてきましたね!! 解説の豪徳寺さん、やはり選ぶとするならどのシーンですか?』

『やはり初戦の『无二打』は最高でしたね。あれこそ武術の最高峰。男のロマンであるわけです!』

そんな風に会場に設置されたモニターから解説が流れ出てくるのを聞きながら、小太郎は黙って会場の外へと足を向けていた。

人ごみにまぎれて消えようとする彼に、

「どこへ行く気だ?」

「っ!?!」

一人の声がかげられる。

「なんや? 犬神のにーちゃんかいな」

あわてて振り返った小太郎は、声を掛けてきた人物の顔を視認しほんの少し安心した顔で吐息を洩らす、

「大方野菜に慰められたりしたら……とか考えていたんだらう? 安心しろ。あの空気

読めない野菜はみじん切りにしておいた」

「ネギにいったい何したんや!?!」

そして、割とシャレにならない犬神のセリフに小太郎は思わずツツコミを入れた。

「ほかの試合、見ていかないのか?」

そして、再び掛けられた犬神のまじめなセリフに小太郎は思わず黙りこむ。

「はっ……。負け犬がいつまでもほかの人が戦っている光景みるんだだけつらいかわかるやろ犬神のにーちゃん。せやから、ほっといてんか?」

若干やさぐれた感じを醸し出しながら、再び人ごみにまぎれて消えようとした小太郎に、犬神は、

「犬上小太郎。おまえはまだまだ強くなれる」

「……」

「だが今のままではだめだ」

「っ!?!」

「まともな師もいない人間の、我流でいいなどという言葉はただの負け犬の遠吠えだ。貴様はいつまでそんな地位に甘んじる気だ」

「……」

「なるほど、貴様が人に教えを請うのは性に合わないという気持ちはわかる。格闘技を正式に習うと攻撃の方が決まってしまう自由に戦えないというデメリットも確かにあるだろう。だが」

だからと言っていつまでも一匹オオカミを気取っているようでは、貴様は絶対に僕に

は勝てない。

犬神から告げられたその言葉に、小太郎の我流に対する信念がぐらつく。

「せやけど、どこにおるんや……。俺みたいなはぐれもんで混じりもんな奴を受け入れてくれる師匠なんて……。どこに」

小太郎がそう漏らしかけた時だった。

「そんなもの知らんな。自分で何とかしろ」

言うだけ言ってさっさと帰ろうとしている犬神の背中がふと目に入って……。

「……」

先ほど犬神は八極拳を使ったが、別に犬神は八極拳専門の拳士ではないという。どちらかというところオールマイティな攻撃を行う拳士だそうで……。

「なあ、犬神のにーちゃん。そこまでいうんやったら……」

俺を弟子にしてくれへんか？

小太郎が告げた懇願に、背中を向けていた犬神は、

「……………ふっ」

計画通り……。と言わんばかりに、ゆがんだ笑みを浮かべるのだった。

そのころ、観客席では。

「っ!?!」

「ああ? どうしたんだマリー?」

千雨の隣に立っていたマリーがまるで背中につららを突っ込まれたかのように震えた。

「いや……なんか、一人幼気な少年が犬神君の罾に引っ掛かったような気がして」

「はあ?」

千雨の「なにいつてんだこいつ?」と言わんばかりの視線がとても痛かったらしい……。

……+……+……+……+……+……

そして、そんな外野のやり取りなど知らぬうちに、

「……うくむ。どうやらかなり厄介な相手臭いでござるな?」

「それはこつちのセリフだけ? ま、雇い主にしつかりやれって言われているからな……給料分の仕事はさせてもらうさ」

激動の第一回戦の、さらなる伝説が生まれようとしていた……。

「さくつて、選手のお二人は舞台へどうぞ!!」

そう言つて舞台上に上つたのは二人の間。

一人は完全に中学生じやないだろお前……といわれかねない長身をした忍者娘。

もう一人は先端がひん曲がつた金属バット（ガンダリウム製？）を持つ、金髪の青年。身長が忍者娘に匹敵するため恐らく高校生だと思われる。

「一方は麻帆良随一にマイナー同好会『おさんほ同好会』に所属する、ハッチャケすぎな双子の面倒を見るお姉さま！ 第一回戦では影分身なる珍妙な技を使い数多の武道家たちを翻弄した『忍……者？』長瀬楓選手!!」

「……あさくらああ!! 誰がマイナーだ!!」「お、お姉ちゃん落ち着いて……」と、朝倉の紹介に観客席から抗議の声が上がるが、そこはプロ朝倉。当然スルーして先へと進める。

「もう一方は完全に外部からの参戦となります！ 名前は佐渡ヶ島サディスト!! SM が似合いそうな名前だああああ!! 予選では大ぶりなバットによる一撃必殺であったという間に進出決定！ その豪快なバットさばきで、忍者楓をとらえることができるのか!?!」

「忍者じやないと言っているでござるに……」

「いや……楓ちゃん。割とマジで忠告してあげるけど、本気で隠すきあんの?」

クラスのだれもが思っているツツコミをサディストは思わずつぶやくが『さて、何の

「ことごとござろう?」と楓は往生際悪くしらばつくれる。

「それにしてもおぬし……」

「ん? なんだい?」

騒がしく続く朝倉の解説を完全に無視した様子で二人は和やかに会話を交わしている。

その姿はまるで十年來の親友のようにも、血でつながった姉弟のようにも、心でわかりあっている恋人のようにも見えた。だが、

「それではっ!! はじめ!!」

朝倉が告げた試合開始の合図と同時に、その二人の關係に抱いた印象のすべてが錯覚だったと観客たちは悟った。なぜなら、

ゴツ!! と言う轟音と共に、彼女たちが立っていた舞台の一角が砕け散らせながら二人の姿が消え、見えない激突が何度も起こり、弾丸や小石が雨のように撒き散らされ舞台一帯が蹂躪されたから!

そして、二人が再び出現したときには、

「まさか、隠しておいた暗器まで出さねばならぬとは……やはりおぬし」

「へえ、気づいてたのかい? まあ俺は近接専門だからほかの奴等よりも血の匂いが濃いいしね。裏関係者ならすれ違っただけで警戒される因果な職業だよ」

気で強化された手甲を粉碎されながらも、何とかサデイストのバットによる一撃を防ぎきった楓と、

バットを振り切った体勢で、不敵に笑うサデイストの姿が舞台中央に現れていた。

二人ともすでに小さな傷を体のあちこちに作っている。

それが、試合が始まってからわずか数秒の間の激闘を示していることを観客たちは本能的に悟る。そして、

「え、えつと……なにが?」

正確な情報をできるだけ多くを信条とする朝倉ですらそう言うことしかできなかつたことを皮切りに、

「う、うおおおおおおお!?!」

「なんだ!?! なんだいまのおお!」

「この大会見に来てよかつたああああああ!!」

まるでアニメ化漫画を見ているような冗談みたいな達人同士の戦いに、観客たちのポルテージは見る見るうちに上がっていく。

舞台上立つ選手二人はその歓声を聞きながら、

「甲賀中忍……長瀬楓でござる!」

「わりいな、こつちにや名乗りの習慣がないんだ。まあとりあえず、あんたが思うように

? 茶々丸さん」

「ああ、はい。私にはハイパースローカメラが搭載されていますので。ついでに言うとお石も飛び交っていました」

「小石の方はおそらく楓さんが使った忍術。気で強化された、日本の羅漢銭と呼ばれる『指弾』を呼ばれる武術でしょう。達人の死弾の初速は弾丸の約2.5倍といわれており、また発砲音もしいたため達人は『静かなる弾丸』と言われ畏れられたそうです。それに対してサデイスト君が行ったのが」

そこで豪徳寺は言葉を止めると、本当に信じられないといった様子でのひきつった声で、

「バットで打った弾丸での迎撃です」

「……バットで?」

「はい……バットです」

「……普通に投げた方がいいのでは?」

「私もそう思いますが、なぜか彼は弾丸をバットで打っていますね……」

彼ら二人は知らない。サデイストがもうちよつと絶望するくらいにノーコンだということを。それこそ「素人でも簡単に扱える!!」が売り文句の銃を使ってもなぜか的の数メートル右に曲がってしまうほどに……（あれを見た元帝国構成員たちは「むしろ

「双方未成年でござるが……」

「こまかいことはきにしな〜い」

そんな会話を交わしていても、二人の戦いは熾烈を極めていた。

サディストが勢いよくバットをふるえば、その攻撃をやすやすとかわした楓がそのバットの上ののり、

しかしその瞬間、バットに流し込まれた気が刃物のように鋭くなり楓の足を切り裂こうとする。

楓はそれを瞬時に察知し、軽く身をひるがえすことよって回避。置き土産といわんばかりに右手から手裏剣型の気弾を放出しサディストに向かって投擲する。

楓がいなくなったことにより軽くなったバットを振り回し、サディストはその手裏剣たちをかき消す。本人としては打ち返すつもりだったのだが、そこらへんは相手の気弾だ。自由にできないことなど承知の上。

だからサディストは、砕け散った舞台瓦礫を蹴り上げ、

「おらっ!!」

豪快にバットで打ち据えた。

弾丸とほぼ遜色ない瓦礫の砲弾。それは空中で動きが取れないはずの楓に向かって一直線に突き進み、

「ふっ」

楓が行った虚空瞬動によって易々と躲された。だが、そんなことはサディストとしても承知の上。

「ほう」

楓が感心したような息を漏らし見上げたのは、先ほど自分が打ち上げた瓦礫たちを足場に楓がいる天空へと登ってきたサディストの姿。

虚空瞬動は使えないのか？ それとも何かの為に手札を切らないでいるのか……。これほどの戦いになってもいまだに冷静な部分を残すサディストの戦略に、楓は武人として思わず感嘆した。

「どうした？ 死ぬぜ？」

だが、そんな楓の態度もサディストにとっては関係のないこと。あっさりとして楓のもとにたどり着いた彼は、豪快なバットの旋回を行い楓の脳天を打ち据えようとする！

再びの虚空瞬動。楓の姿が消えた。そして、目標を見失ったサディストのバットはその後ろにあつた瓦礫を粉碎し、

「おっと？ 力入れすぎた？」

破片すら残さず粉碎した。

今はこの場に姿が見えないが、暗殺者特有の勘で空を舞う瓦礫の上に立っているサデイストに何らかの指示を出していることが見て取れた。

おそらく、暗殺者であり表に世界に出たがらない彼を無理やりこの大会に出場させたのも彼女だろう。

いったい何が目的？

ヒメが無表情の下でそう考えている中、

「おゝつと、足が滑った〜」

「なっ!？」

何ともわざとらしい悲鳴を上げながら、はたから見れば真剣に足を踏み外したようにしか見えない体勢でサデイストはあっさりと空を飛ぶ瓦礫から墜落。当然のごとく緩衝用の水の中へと落ちてしまい、そこで水死体のようにプカンプカンプカと浮かび始めた。

「「えっ?」」

試合を見ていた誰もが思わず魔の抜けた声を上げた。戦っていた楓自身、信じられないといわんばかりの顔をして水上に浮かんでいるサデイストを凝視していた。

とはいえ無情にもカウントは取られ、

「え、えつと……10です」

おおおおおおおおお……。朝倉が告げた何とも言えない微妙な声に、地の底

から這い出るような声で観客たちはため息を漏らした。

そのころ、パソコンで試合風景を見ていた超は、

「もうちよと、もうちよとうまくやれたダロ!! わざと負けろとは言ったけどそこまでわざとらしくやれとは言っていないネ!？」

「ちや、超さん! 落ち着いて! 落ちついて!？」

なんかご乱心中だった……。

31話・なんか最近僕……影が薄い気がするんですが？

激闘に次ぐ激闘で（まあ、いまはとある選手の自主脱落によってかなり冷え込んでいるが）かつてないほどの熱気に包まれる麻帆良武闘大会。

そのチケットを握って会場へひた走る二人の少年がいた。

「くそっ……犬神君のやつ。俺がて大会でたかったのに！」

「明らかに事前調査をおこたった君のミスだろうに……いつまで文句言っているんだい？」

「あほっ!! 俺のスタイルはな『調査なんて不要！ すべては力で押しとおる』なんや!!」

「だったら力だけじゃどうにもならないことが分かっていい経験になったね」

片方は怪盗スタイルではなく学生スタイルのスパルタンVIこと六重トウジ。もう一人は三白眼になって後悔をいつまでもやめないトウジを睨みつける猫谷コースケだった。

実はこの二人も本当なら麻帆良武闘大会へと参加する予定だったのだが、『お前らと戦うとなると無制限一本勝負でめんどくさい』と考えた犬神の画策により、大会予選が

戦いの舞台へと登ったネギは、周囲からの爆音のような歓声をきいた。

もりあがっているなくと、はたから見ればのんきな感想を抱くネギ。しかし、彼の内心はそんなに余裕があるものではなかった。

「さあ、ネギくん……始めようか」

なぜなら眼前でポケットに両手をつまんでいるタカミチが、やたらとやる気溢れる声でそう言ってきたから……。

「いやいやタカミチ？ なに？ なんでそんなに本気なの？ え？ 僕何か悪いことした？」と、割と本気でおびえるネギ……。犬神と暮らすうちに絶対強者には無条件でおびえてしまうということを細胞単位で刻みつけられてしまった……。

そんな哀れな少年ネギの内心などつゆ知らず、タカミチは穏やかな笑みを浮かべながら一言。

「仮にも六重君に鍛えられたんだ。奮戦を期待するよ」

瞬間、解説を終えた朝倉が元氣よく「始め!!」と手を振りおろした。

瞬間、ネギの背筋につららでも突っ込まれたかのような悪寒がほとばしった。

そして同時に彼の耳がとらえる、何かが飛来する空気を切り裂く音。ネギはその音の方向に向かってVIとともに鍛え上げた直蹴りをたたきこむ。

だが、

「っ!? 押し返される……!?」

見えない何かはしつかりとネギの蹴りに迎撃されながらも、その威力を殺すことなくネギのけりを弾き飛ばした。あわてて瞬動し回避するネギ。

しかし、ネギが瞬動を行った先にはまるで予想していたといわんばかりに、すでに不可視の攻撃が飛来している。

「(こんど)っっっ！」

だが、ネギも伊達にVIに鍛えられていたわけではなかった。瞬動に使った魔力の残り香を強制的にかき集め、無詠唱を発動。雷属性の魔法の射手を両足に装填し、

「雷纏 前撃!!」

サバットの基礎技。大したこともない前蹴りだ。だがしかし、そこにはふんだんな魔力を注ぎこまれた雷の射手が装填されており威力は先ほどのけりの比ではない。

こんどこそ、不可視の攻撃は消し飛ばされた。

そしてその瞬間、

「戦いの歌!!」

ネギの遅延呪文が発動し、ネギの全身をつつみこんだ。

それと同時に足をおろしたネギは瞬動を開始。タカミチの眼前に出現し、

「驚いた、まさか(こんど)まで成長しているとは」

だがまだ遅い、と、ネギに向かって再び不可視の攻撃が襲いかかった。だがそれはネギも織り込み済み、

「多連瞬動!!」

「なっ!？」

一度目の瞬動で鮮やかに天を舞い不可視の攻撃をかわすネギ。そして二度目に行つた虚空瞬動で天を仰いだタカミチの死角に回り込む!

「フリードリッヒ・フックステ雷纏旋撃!!」

当然死角に回り込まれたため反応が遅れてしまうタカミチ、そのすきを狙つた雷光を伴うまわし蹴りがタカミチの懐に突き刺さる!!

しかし、

「いや……さすがに驚いた。あれほどおびえていたのに、よくもまあこれだけの動きができるものだ」

さすがはナギさんの息子だね。と、嬉しそうにはほほ笑むタカミチとは対照的にネギは盛大に顔をひきつらせていて、

「そ、そういうタカミチは何で無事なの?」

そう、タカミチはあれほどの蹴りをくらつてな小揺るぎ一つしていなかったから……。

「ん？ なに、人よりちよつと頑丈なだけさ」

そううそぶくタカミチの体からは、魔力とも気ともとることができないあいまいで——しかし膨大な力があふれ出していた。タカミチの両手はすでにポケットから出され、胸の前であわされている。

咸卦法——究極技法と呼ばれる、最強の身体強化。

「さあて、第二ラウンドだ。初撃は手加減してあげようネギ君。よけるよ？」

……+……+……+……+……+……

「いやゝ。再び凄まじい攻防が展開されていますね！ 本当に解説になってよかったです！」

「ところで豪徳寺さん。先ほどタカミチ先生が使っていたあれはいつたい？」

タカミチの不可視の攻撃を軽やかにかわすネギを見て興奮した様子の豪徳寺に、茶々丸は「仕事しろよ」と言わんばかりの質問をぶつけた。

だが、その質問に答えたのは豪徳寺ではなく、

「居合拳。無音拳とも呼ばれる超高速のパンチやな」

横にできていた人込みをかき分け現れたVIだった。

「六重君!? こんなところで何しとんの!？」

「何だマリー? 知り合いか?」

当然そんな突然の闖入者に驚きを漏らす観客たち。一番近くにいた顔見知りであるマリーがツツコミを入れるが、VIは気にしないとばかりに解説を始めた。

「居合拳いうんは要するにズボンのポケットを刀の鞘に見立てた抜刀術や。そのため弾丸のような速さで拳打を打つことが可能になり、その勢いで敵に向かって拳圧を飛ばすことができる」

そこで六重は言葉を切り、

「厄介な技やで……。相手が飛ばしとるんは遠当てみたいな気とは違う、単純な物理現象である拳圧。感知が非常に難しいいうえにかなりの速度で飛んで来よる。見切るのは至難の技やで」

その点俺の弟子はよーやってるな。と、VIが自慢げに語った時だった。

ゴツ!! という衝撃とともに、会場一帯が揺れ動き、

「「「は?」」」」

タカミチとネギの戦いを見ていた観客たちは、舞台上で起こった余りの光景に思わず絶句する。

陥没したのだ。まるで巨大な隕石の直撃でも食らったかのように舞台の床に、人間二

人分ぐらいの巨大なクレーターができていた。

その近くでは、ネギがへたれこんでいて……。

「豪殺・居合拳!!」

だから冷や汗を流しながら、以前犬神が見せたあの対艦砲撃クラスの拳圧を思い出した。

……………†……………†……………†……………†……………†……………†……………

ドンドンドンっ!! 背後から迫る衝撃を足音に、ネギは必死に瞬動を繰り返し、回避を続ける。

その背後に回るのは、ネギを追いかけるように斜め下に向かっただの攻撃を繰り返したタカミチ。

「もうやめて!! 龍宮神社の地盤のライフはもう0よ!!」

「まだだ、うちの神社はまだ終わらんよ!」

「たつみー!? いったいどこからわいて出たの!?!」

なんてやり取りが朝倉といつの間にか舞台に巫女装束になって舞台上がっていた龍宮が交わしていたが、かまっている余裕はネギにはなかった。

「どうしたネギ君？ 逃げてばかりでは勝てはしないぞ!!」

「タカミチどうしたの!? ホント今悪役にしか見えないよ!」

「僕は気づいたんだネギ君……ああ、あれだけはしゃいでも大丈夫なのか、と」

「絶対だれか参考にしちやいけな人参考にしちやつたよね!? だれ!? だれなの!? 犬神さん!? それともVI師匠!」

なんかタカミチがしばらく会わない間に歪んでしまっている気がしなくてもないネギ……。そういえば最近前髪の生え際がだんだん後退してきたような？

ネギが現実逃避交じりにそう考えた時だった、

ゴツツツ!!

「なにか言ったかなネギ君？」

「な、何も言っていないですサー!!」

なんか居合拳の威力が三割増しあがった気がした……。

「あ、あかんってエヴァちゃん!! あれネギ君死んでまう!? 死んでまうって!」

当然あの威力を知っているマリーは慌てふためき、選手控室へと突撃。この試合を止めてくれそうな（犬神は「かまわん、殺れつ」とヒメに言った前科があるので除外）エヴァの元へと走ったのだが、

「安心しろマリィ。友人の息子と戦えてずいぶんとはしゃいでいるようだが、タカミチもきちんと手加減している。その証拠に見ろ、あいつはいまだに横方向にあの拳打を打っていない」

「どういふこと？」

「言葉そのままの意味だ安川」

解説をしてくれたエヴァには悪いが、マリィの頭は割と残念な感じだった……。そんなマリィにいつの間にか補足説明を入れてくれたのは、

「って、犬神君!？」

「高畑教諭は観客に気を使って斜め下のうちおろしでしか居合拳を使っていないんだよ。万が一にも観客に被害が出ないようにな。つまり、それだけの気遣いができる程度の冷静さは残しているというわけだ」

「な、なるほど!!」

ほな安心やね! とマリィが一心地着いた瞬間、

「まあ、といつても威力が落ちているわけではないから食らったら即死だがな」

「全然あかんやないか!？」

二人が同時に告げた真実に、マリィは思わずツツコミを入れた。

当然舞台を飛び回っている間にそんな話を聞いたネギはたまったものじゃない。顔が先ほどよりもさらにひきつっており、もうピカソの絵画に出てきそうな感じまで歪んでいた。

「ゲルニカっ!？」

「こわっ!？」

その顔を見て思わずビビるタカミチだが攻撃の手は緩めない。まるで大砲のような轟音とともに射出される巨大拳圧。ネギは再び紙一重でかわし、瞬動を使い距離を取ろうとするが、

「ぐっ!？」

突如飛来した拳大の拳圧に打ちすえられ、思わず瞬動を止めてしまった。

「しまった!？」

気付いた時にはもう遅い。まるで弾幕のような拳大の居合拳の連打がネギの体に叩き込まれる。

「ぐあっ!？」

「ネギ君!？」

吹き飛ばすネギに朝倉の悲鳴が聞こえる。そんな生徒の心配そうな声に、ネギは必死に足に力を込め何とか場外を免れるが、

父を捜す。その一念を胸に一心に強さを追求していた少年の姿はそこにはなく、そこには強い人間の暴力におびえる一人の少年が残されていた。

そう……犬神は教育を間違えていた。

確かに自身の強さを知るのは大切なことだ。負けるとわかっている戦いに撤退する勇気も時には必要だろう。

だが、今のネギ君はそれすらできていなかった。ただおびえ、勝てないとわかるとすぐに諦め、すぐに絶望した。

あまりに絶対的すぎる犬神の存在がまだ発展途上のネギの「もつと上へ」という向上心を摘み取ってしまったのだ。

犬神の言ったとおりだった……と、タカミチは試合前待合室で犬神が話した自分の過ちを思い出していた。

『僕は少し厳しくしすぎた。もとよりああいった奴を育てるのにふさわしい人格をしていないことは承知の上だったが、それは言い訳にならん。プロとして本当に反省している』

ネギを正しく導けなかったことに、ネギを正しく育てられなかったことに、あの神をも恐れぬ傲岸不遜な少年が初めてタカミチに頭を下げた。

『だが今更僕はこのスタイルを変えるつもりはない。だからこそタカミチ……お前に協

力を申し込みたい』

そして彼はそう告げると、この試合でタカミチがネギに対してすべきことを教えてくれた。

タカミチはその言葉を思い出しほんの少し苦笑を浮かべる。

犬神君……君は自分のことをけなしていたが、僕は思うよ。

君は立派な、教育者だ……と。

「ネギ君……この程度かい？」

そう思いながら、タカミチは倒れ伏したまま動こうとしないネギに話しかけた。

「君が目指した父という壁は、君がたどり着きたい父親という男の影は、こんなところで敗れてしまってもいいものだったのかい？」

瞬間、ネギの体がピクリと動き、

「つああああああああああああああああああああああああああ!!」

普段はめつたに上げない怒声交じりの絶叫を上げ、軽やかに立ち上がった。

驚く朝倉に、満足げなタカミチ。

立ち上がったネギはそんな彼らを見て、一言。

「タカミチ……結着をつけよう」

今まで見たことがないほど、精悍な顔つきをしてそう宣言した！

辺り一帯に焦げ臭いにおいが漂い始めたのに気付いた彼は、辺り一帯を見回し確認して、

「なっ!？」

ネギの両足が、赤く発熱していることに気付いた。

「なんや、あれは!？」

対して、全く驚いていないのは選手席に控えていたエヴァのほうだった。

「ふはははははははは！ よくやったボーヤ!! 修業の成果が表れたらしいな!!」

「修業?」

「ああ、修学旅行から帰ってから定期的に魔法の面倒を見てやっていたんだよ。お前たちでは魔法についてはそれほど学べないからとな」

「ちよ、きーてへんねんけど!？」

何やら重要なことを軽々と流されていたと知ったマリーがあわてて事情を聞こうと食ってかかるが、

「なんか犬神にひと泡吹かせてやりたかったらしいぞ?」

「ほう……」

エヴァのその言葉に反応した犬神がぞつとするような声音でそう漏らすのを聞き、思

だ！

ネギはそう言い聞かせ、攻撃動作に入ったタカミチに向かって一直線に駆け抜けた！
「アンフェール・シャッセソテ」
「悪魔・飛翔撃!!」

飛び上がり、強力なけりを放つネギ。

「ライダーキック……やと!?!」といつの間にか観客席にいた小太郎が目を輝かせているのが見えたが、とりあえず無視!

しかし、攻撃の発動はタカミチのほうが早い!

「豪殺・居合拳!」

しかし、ネギの攻撃が到達する前にタカミチの攻撃が発動した。

轟音を立て、唸りを上げ、再びネギに襲いかかる対空ミサイルのようなタカミチの攻撃。
ネギはそれを、

「うわああああああああああああああああああああああああああ!!」

真つ向から迎え撃った!

空中で激突するネギと拳圧。それは一瞬の拮抗を見せたが、

「っ!?!」

ネギの蹴りが、タカミチの拳圧を食い破りタカミチの元へと襲いかかった!

着弾! そして轟音!!

今度こそ土台が真つ二つになつた舞台が音を立てて崩れさり、見ていた麻帆良土木研究会が号泣する。

そんな中、爆音と同時に上がった土煙の中から出てきたのは、

「しよ、勝者！ ネギ先生!! ネギ先生が勝ちました!!」

埃だらけになりながらもしつかりと解説の仕事を全うした朝倉と、ぼろぼろになりながらも嬉しそうなネギ。そして、どこか満足げな表情をして舞台上に倒れているタカミチだった。

「う、「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おとおお!!」」

熱いバトルを制したネギに、観客たちから惜しめない拍手が送られる。

そんななか、解説の仕事を思い出した豪徳寺に対し茶々丸が質問をした、

「先ほどの勝負、いったい何がネギ先生の勝因だつたと思われませんか？ 豪徳寺さん」

そうですねくと、豪徳寺はしばらく考えたが、

「ライダーキックは少年のロマンですから。ここで負けるわけがないでしょう」

この意味不明な解説に、なぜか多くの男子生徒が首肯を示したという……。

「あ、やつぱり二人もおんなじような気配を？」

「お前たちいったい何を話しているんだ？」

「明日菜さん？」

「そうアル、そうアル」

どういうわけか、今まで見たこともないハイレベルな戦いを繰り広げる二人の戦いをみているにもかかわらず、どんどん三白眼になっていく三人に、エヴァンジェリン、刹那、古菲は不思議そうに首をかしげる。

そんな三人に対し、ネギたちはあわてて何でもないといいながら内心でこう思っていた。

『『なぜだろう？ この戦い、ものすごいどっちらけた感じで終わる気がする……』』
三人の経験からくる一種の予知は、たがうことなく的中することになった。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

鋭い激突を繰り返す二人。その二人が交わす高度な戦略性をはらんだ拳打や蹴撃。プロの格闘家が見たら、自分の才能のなさに思わず首をくくってしまおうと思われるほどに二人の戦闘は凄まじかった。

だが、彼らはその口でこんな会話を交わしていた。

「というわけで、私はネギ君のお父さんの友人で、ネギ君にお父さんのとある伝言を教えるためにこの大会に参加したのです」

割とあっさりりと正体をばらしたクウネル・サンダースこと、大戦の英雄のひとり——アルビレオ・イマ。

ここで真剣に戦つては無駄に力を消費しすぎると判断したのか、彼は戦闘がはじまると同時に割とあっさりりと犬神に自分の素性を暴露してくれた。

そんな話を聞きながらも、観客を飽きさせないために戦いをするふりをし続けて話を続けるゲルとアルビレオ。なかなかエンターテイメント精神あふれる姿だ。むろんこの試合をこつそりとみている超は「本当に助かったネ……」と、あっさり大会を盛り下げてくれたサディストを睨みつけながらそう漏らしていたとかいけないとか……。

とにかく、アルビレオが説明を終えたとき犬神は小さく「なるほど……」とつぶやきを漏らした。

あれ？　もしかして、いけちゃったりします？　と、予想よりも意外とあっさり引いてくれそうな犬神の姿に、クウネルは思わず足を止めてしまう。

その時、

「っ!？」

ゴツ!! という轟音とともに、戦車が放った砲弾と遜色ない衝撃波を放つゲルの豪殺居合拳がアルビレオの体をかすめた。

タカミチと同じように観客に気を使ってゲルが横方向にそれを打てないのが幸いした。もし、殴り付けられるように横方向に放たれていたらさすがのアルビレオも一撃食らったかもしれない。

「……なぜ?」

「なぜ? だと? わらかないのか? ならば大戦の英雄よ、貴様にひとつ教えておくことがある」

驚いた顔で立ち止まるアルビレオに合わせて犬神も一度瞬動をやめ姿を現す。

観客たちはなんだなんだと、突然戦闘をやめ話合いの体制をとる二人に首をかしげ成り行きを見守った。

「貴様の事情は分かった。貴様の言動から推察するに貴様はこう言ったことを素直に話す人物ではないだろう。そんな貴様が正直に自分の事情を話したのだ。そこにはそれ相應の誠意が含まれていることを察することができる」

犬神が珍しく他人をべた褒めするのを聞きマリーは驚き、どこか見覚えのあるフード姿の男と犬神の評価を聞きようやくアルビレオの顔を思い出したエヴァが小さく首をかしげ、

「だがしかし、貴様が見せたものは本来の誠意とは大幅に違う」

「ほう？ では本来の誠意とはなんですか？」

「決まっている」

そして、会話の流れから犬神が何を言いたいのか察した二人はとりあえず物理的な突っ込みを行うべくハリセンと魔法薬を用意した。

「ずばり、誠意とは——金だ」

「対戦相手になにいつとんのじゃあああああああああああああああああ!?!」

ずけつと犬神が信じられないひとことをはいた瞬間、マリーのハリセンが気円斬張りの回転をして犬神に直撃。そのメガネを吹き飛ばした後、エヴァの氷結魔法が発動。犬神を氷漬けにする。

「おやおや……」

そんな犬神の様子にアルビレオは苦笑を浮かべるが、

「……ふん。でだ」

割とあっさり氷を砕いて出てきた犬神に今度は顔をひきつらせた。

「貴様は僕の敗北に対して金は用意できているんだろうな？ 金さえ払うなら僕はいくらでも負けてやる。だがしかし、今回の大会の賞金は1000万円だ。それだけの額を用意できる保証が、貴様にあるのかっ!! 英雄!!」

なんか最後にかっこつけて主人公を問い詰める敵役みたいな雰囲気醸し出す犬神だが、ぶっちゃけ言っていることが最低すぎてあまり人の胸を打たなかった。

そんな犬神の信じられない外道っぷりにアルビレオは、

「……犬神さん。あまり大戦の英雄をなめないでいただきたい」

「なに？」

なぜか不敵な笑みを浮かべると、

「わがサンダース家には、代々伝わる秘伝の交渉法があります!!」

そのせりふを聞いた瞬間誰もが悟った。

あ、これダメっぽいフラグだと……。

「というか貴様……サンダース家ではなく、イマ家だろうか？」

「ゴロ悪いから駄目です。今の私はクウネル・サンダースですから問題ないです。と、そんなことはどうでもいいですね。ではいきますよ、サンダース家に伝わる秘伝の交渉法!!」

犬神の突っ込みそサラツと流した後、アルビレオ改めクウネル・サンダースはキリツとした顔になり、

「とりあえず賞金全額からスタートで!!」

割とあっさりと賞金を譲った……。だが、

とあるPCルームにて、超と葉加瀬がPCを使い情報操作を行っていたが、

「……博士。情報操作はどうなっているネ?」

「み、見ないほうがいいですよ」

そういういつも葉加瀬はちゃんとPCを超に見せてくれた。

葉加瀬が見せてくれたのはとある巨大掲示板。そのコメントを見ると、

62:以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

ちよ、ファンタww

63:以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

いつからこの試合がガチバトルだと思っていた?

64:以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

なん……だと!?

65:以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

誠意とは金だキリッ(・ω・) 名言だよな

66:以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

そうだね迷言だね

67：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします
 おまえ、それ上げるならコツチだろうが　っ「わがサnder家には代々伝わる秘伝の交渉法があります!!」

68：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

お前ら……こいつらが消えたり現れたりしてるの完全無視なの？

69：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

あれ？　この書き込み前にも見たような……

70：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

イザナミだ

71：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

なぜ唐突にナルト？　ジャンプスレ行け。俺今スパゲッティ食べてたら歯が真っ黒

になつて大変なんだから！

72：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

▽71

イカスミだ

73：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

あんな超人的な戦闘を見て。こんなときどうしたらいいかわからないの……

74：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

◇73

アヤナミだ

75：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

あれって魔法じみて見えるんだけど？

76：以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

◇75

イザナミだ

ちよつと見ない間に超たちの情報制御を外れて、大会の異常事態がイザナミのせいになつていた……。それを見た超は、

「……」

「あ、ちや、超さん!? どこ行くんですか!？」

「もうヤダ……オウチカエル」

「落ち着いてください!!? まだまだ試合あるんですから、これからですって!!」

なんだかいろいろな意味で心を折られかけていたという……。

「それにだ」

血を吹き出しのたうちまわるマリーを、そのうちギャグ補正が何とかするだろうと完全無視し、犬神は言葉を続ける。

「もし万が一……億が一、兆が一」

「そんなにネギ君が勝つ事態があり得へんのか……」

「野菜が勝つたとしても、賞金は僕のもとに転がりこませるしな」

「……………」

犬神のその不吉なせりふに、賞金を手に入れたネギが何をされるのだろうかとちよつとだけ怖くなるマリー。

「僕のもの僕のもの、助手のもの僕のもの、居候のものは全ぶ僕のもの！ 森羅万象、世界のあまねくすべてが僕のもの！」

「ジャイアニズム!? どこの英雄王やねん!？」

「ふん。僕は英雄王ゲルガメツシュらしいからな。このくらい言ってもばちは当たるまい」

「は？ なにいつてんの？」

「さて、ではまず手始めに図書館島へ行ってみようか」

「あ、ちよ、犬神君！ まってえや!!」

閑話・第四次図書館島戦争

麻帆良学園都市の特徴的な施設の一つである図書館島。

そこには戦前に集められた古今東西の古書・貴書・珍書が集められているとされている、国会図書館にも匹敵する巨大図書館。

だがそれは実は表向きの話。

図書館島のさらに深いところでは、表には出せない魔がかかわる書物——いわゆる魔導書が収蔵されているのだ。

その魔導書たちを防衛するため。そして、一般人が誤ってそんな危険な書物が収蔵されている場所に迷い込まないようにするために、図書館島には危険なトラップの群れが幾重にも設置され、人々の進入を拒んでいた。

そんな危険な図書館島最深部を、一人の少年が駆け抜けていた。

漆黒の体に張りつくような特徴的な衣に、まるで人の骸骨を模したかのような不気味な仮面をまるで祭りのお面のように斜めにかぶったその少年は、図書館島の罠たちを鮮やかにかわし、ただ一直線に目的へと向かって駆け抜ける。

少年の脳裏に浮かぶのは、数時間前にかわした自分の依頼主との会話。

この程度で、このハサン・シックスを止められるとおもたんか！

少年は内心でそう嗤うと、駆け抜けていた巨大な書棚から跳躍！ 一気に結界の上空へと躍り出た！

それと同時に彼の右手から何かをはじくような音が響く。それは小さな小石。何の変哲もない只の小石だった。

しかし、少年の卓越した技量から放たれたその小石の一撃は、まるで弾丸のような速度と破壊力を小石に与え、

「ふっー」

狙いたがわず、四方に配置された結界の起点となる宝石を粉碎する！

その数秒後、少年は鮮やかに魔導書が安置された部屋へ降り立ち結界の起点となっている最後の巨大宝石を打ち崩さんとした。

まずは結界の強度を試すために、先ほどと同じように小石を放つ。

しかし、今度の結界は見事に小石の一撃を弾き飛ばし、攻撃を感知したためしかけを発動させる。

結界の方式はいわゆるセンサー型だった。まるで宝石と魔導書を囲い込むように発動したそれは円弧状の魔力帯を無数に生成し、それにぐるぐると不規則な回転運動をさせ侵入者の接近を阻む。

ただのセンサーと侮るなかれ。その魔力帯には物理的な破壊力も与えられており、侵入者がその帯に触れてしまうと、刃物のように鋭くとがれた魔力帯が侵入者の体を輪切りにする。

だが、少年——ハサン・シックスはそんな魔力の絶対防壁を見てもなお不敵な笑みを崩さなかった。

「さて、仕事にかかろか」

シックスはそういうと、斬撃があふれかえる死の檻の中へと無造作に足を踏み入れた。

当然のごとく乱回転する帯が少年に向かって襲いかかるが、

「はっー」

かわす、よける、回避する!!

まるで舞踏のような滑らかな動きを披露し、時に身をそらせ、時に倒立し、時に地を這うように身を低くし、時に小石を飛ばし結界に自分の位置を勘違いさせ、少年は鮮やかに殺人結界をかわしてのける。

そのすべてが紙一重。常人なら数度にわたり全身を切り刻まれているはずだが、シックスの身のこなしを見る限りそんな危なっかしさは微塵も感じられなかった。

まさしく、踊るような回避術。潜入を生業とし、それを極めたものだけが披露できる

芸術的な舞踏。

某動画サイトに投稿すれば『シックスはダンスやっているからな!!』という弾幕が吹き荒れないほど、その舞踏は完成されていた。

トシヨカントウナイトフィーバーだ。

そしてとうとう、シックスは結界の中央——魔力帯が通らない安全圏へと侵入を果たし、

「ふっ……他愛ない」

ゆつくりと、結界を壊すために宝石へと手を伸ばした。

だが、

「っ!」

瞬間だった。シックスが宝石へと触れた瞬間、不可視の砲撃がシックスの手を襲い宝石と台座もろともシックスの腕を粉碎した!

「ぐああああああ!」

突然走った激痛に悲鳴を上げるシックス。そして、砲撃が飛んできた方向へと視線を向け、

「地を這う虫ケラ風情が。誰の許しを得て面を上げる?」

ることすら許されず、次の衝撃がシックスに襲いかかった!

それでも、死に際にシツクースの鋭い視力が確かにその衝撃を放った敵を捕らえた。漆黒の髪を逆立て、冷酷な瞳を眼鏡の奥からのぞかせる少年の姿を！

しかし、それはあまりに遅すぎた。いつの間にか数十近く放たれていた見えない衝撃は、風を切り裂きながらすでにシツクースが回避不能なところまでに迫っていて、

「あれを……恐れる必要はない、やとつ!? ぐあつ!?」

シツクースはあえなく衝撃に粉碎され、それと同時に突き立つ無数の衝撃たちが図書館島に激震を走らせ、シツクースが立っていた場所に粉じんを巻き上げる！

そして煙が晴れたころには――

「貴様は僕を見るに値わぬ」

全身のあちこちをあり得ない方向に折り曲げ、無残な姿で倒れ伏すシツクースの姿があった。その首は衝撃を放った少年が言うように、顔が大地に向くように強制的に折り曲げられていて……。

「虫ケラは虫ケラらしく、地だけを眺めながら――死ね」

冷厳な瞳で少年は己が住みかに侵入した不屈きものを見下ろした。

少年の名は――英雄王・ゲルガメツシュ。この図書館島の主にして、この世のすべてを手にした王――。

「あ、犬神く〜ん！ あの動画大好評だよ!! とところでギャラはあの動画で上げた収益の10%でいいんだよね?」

「無論だ。きちんと払えよ?」

「なんや肩持つと思つたらやつぱりそんな理由かいいいいいいい!!」

図書館島に軽快なハリセンの音が響き渡ったことは言うまでもないだろう……。

ちなみに、

「あいたたたたた。犬神君のやつ本気で殴りよつて……木乃香ちゃんに治してもらわへんかつたら死んでたで」

「いや……というかあの惨状、普通に考えたら即死だろう」

のちにこの映像を見に来た一人の男子生徒が、何かを思い出したのか幻痛を訴えたり、

「きゃー!! 高畑先生カツコイイ! きゃああああああああああ!!」

「あ、あの、明日菜くん……そんなはしやがないで。恥ずかしい……恥ずかしいからっ!!」

年甲斐もなくノリノリで役を演じてしまった成人男性が、顔を真っ赤にしてデート中

の生徒を映像から引き離したりしていたらしい。

『はあ？ 何その自意識過剰なセリフ？ 死ねば？』

当時彼が住んでいた町で最も可愛いといわれていた同い年の少女だけはどうしても振り向かせることができなかった。

天魔はそれが悔しくて悔しくて、必死になつて自分を磨いた。彼女に振り向いてもらえるように体と特典でもらつた能力を鍛え、ナンパな行いは鳴りをひそめた。

当初は持つていた男女に対する扱いの差は徐々に平等に近づいていき、神にもらつたチート能力によつてもともとカリスマも高かつた彼は瞬く間に町中から頼りにされる男に育つていた。

だが、それでも彼女は振り向いてくれなかった。

そんな彼女を振り向かせるために必死に努力をし続けとうとう17歳になつた天魔に、ある日一人の友人がつぶやいた。

『お前、あいつのことホント好きだよな。あんだだけ報われない恋しているっていうのに……尊敬するわ』

天魔はそこでようやく自分が彼女に抱いている感情が、彼女の鼻を明かしてやりたい對抗心ではなく、ただ彼女に振り向いてほしいだけの恋なのだと思ひついた。

それから数週間後、天魔は勇気を出して彼女に告白した。

彼女はひどく驚いた様子でその告白を聞いた後、泣きそうな顔で返事を返した。

『ごめん……なさい。私はね……もうすぐ消えるの』

『っ!』

彼女は未来を見る力を持っていた。そして幼少のころから彼女はとある未来を見続けていた。17歳になった自分が、白い閃光に貫かれ花弁になって消える光景を。

『本当は私にない未来を持つているあなたが羨ましかったの……私よりも長く生きられるあなたが妬ましかったの。本当は私、あなたに好きになってもらえるような女じゃないの』

泣きながらそう告白する彼女を、天魔は思わず抱きしめた。

そして驚き慌てふためく彼女に、天魔は固い誓いを交わす。

『ふざけるな。こんなところでお前が死ぬか。お前は俺が惚れた女だ。だれよりも強く……優しい女だ。そんな女がこんなところで死んでいいわけないだろう!!』

それでも、もし……お前を予知どおりに殺そうとするやつがいるのなら。と少年はそこで言葉を切り、強く少女を抱きしめた。

『俺がお前を、守ってやる!!』

その時、少女は初めて天魔に対して嫌悪以外の表情を見せた。

それは情けなく崩れた泣き顔だったが、その泣き顔は天魔にとっては何よりも美しいものに思えた。

だが、
『創造主の掟』
コード・オブ・ザ・ライフメイカー

その数日後。とある森で正体不明の敵に襲われた天魔は敗れ、少女は予知の通りあつさりその身を貫かれて消えていった。

『あ、ああ……』

『ごめんね、天魔……きちんと守られてあげられなくて』

地に倒れ伏した情けない天魔に向かって、消え行く彼女は儂い笑みを浮かべて謝罪を告げる。そして、

『大好きだったよ……』

『っ……!!』

それを遺言に、彼女は世界から消滅した。

『恋人だったのか？ だが落ち込むことはない人間の少年。所詮はただのまがい物。厄介な能力を持っていたので消えてもらったが、気に病むことはない。あれは本来実在しない存在なのだから』

そう告げながら姿を現すのは原作で敵の幹部だった、黒いローブの男——デユナミス。

そんな彼の姿を見て、あの白い一撃が何だったのか天魔は悟る。そして、

『師匠……ありがとうございます』

そしてその日は、師匠からの旅立ちの日——師匠から免許皆伝をもらっていた天魔は今日から、本格的な完全なる世界コスモエンテレケイアとの戦いへと入る。

『正直復讐なんてやめて俺の後を継げと言つてやりたいが……お前はもう止まれないんだろう?』

『……すみません』

『いいさ。弟子の生き方に口出しできるほど、できた人間じゃねえしな』

無精ヒゲをジヨリジヨリとこすり、煙草をふかした白衣を着るメガネの角付きおっさんは苦笑とともに煙を吐き出す。

『餞別だ。持っていけ……』

『なっ?! 師匠……これは!』

『出所は聞くなよ?』

師匠が渡してくれた地図はいまだに水面下で《完全なる世界》とつながっていると思われる組織たち。

ぱつと見ただけで数千近くあるその情報にはメガロメセンブリアの判とともに『超重要機密』の文字が躍っている。

『応援も何もしてやれねえダメな師匠の、せめてもの手向けだ。復讐が終わるかあきら

めるかしたら、また俺のところに戻しに来い』

『……ありがとうございます。師匠』

天魔は泣きながら深々と頭を下げ、師匠に別れを告げた。

それから数時間後、天魔がいなくなった師匠の研究室には一人の男が立ち寄ってきていた。

『いったか』

『ガチでお前なこと恨んでいるっぽかったぞ？ いいのか？』

『いいも悪いもない。私は仕事をしただけだ』

『かつ……それもそうだな』

だからこそ、あいつの復讐は無駄なんだけども……と、師匠は煙草をふかしながらメガネをはずす。

『さて、次はどの街を消せばいい？』

『……頼りにしているぞ？ 零・アートル』

その呼び方、俺に似合わないからやめろって言っただろう……。と、師匠は真紅に燃える瞳をメガネの下からさらした。

……†……†……†……†……†……†……†……

『どうして!? どうしてなんですか師匠!! どうしてこんなことに……』

『どうしてか? はっ……きまってるだろう』

原作知識を頼りに、フェイトをとらえようと京都を訪れた天魔。そんな彼の前に立ちふさがったのは、真紅のローブに仮面をつけた不気味な魔法使いだった。

天魔は持てる力のすべてを使い真紅の魔法使いと対峙。辛くも打ち倒しその胸に轟き渡る雷の神槍を叩き込んだ。

だが仮面の下の男の顔は……彼をここまで育ててくれた、師匠の顔で。

『俺はお前の敵だったんだよ……それ以外にここで戦う理由があるのか?』

『じゃあ、じゃあ……全部偽物だったんですか。俺があなたと共に過ごした日々も、あなたが俺に与えてくれた優しさも……全部、全部ウソだったというんですかっ!!』

『ああ……あれな』

泣きわめきながら問いをぶつける自分の弟子のほほに、死にかけて彼は優しげな微笑みを浮かべて触れる。

『うそじゃねえ……うそじゃねえんだよ……。あの時は本当に楽しかった』

『っ!!』

『ほんと……なんでこんなことになっちまったんだろうな? あのままお前が俺の研究

どり着いた。

だが今までのように何かをしようという気は起きなかった。

ただ惰性で、原作に関係ある場所へと足を向けてしまっただけだった。

そんな彼に、一人の少女が話しかけてきた。

「ちよつと、お兄さんどうしたの？ 大丈夫？」

「……あ？」

突然かけられた声に天魔は顔を上げる。

そこにいたのは、

「どうしたの？ 死んだ魚みたいな目してるよう？」

原作では元気印が目立っていた、ラッキー少女こと椎名桜子だった。

「そう……義理のお父さんが」

「ああ……」

いろいろと限界が来ていた天魔は、つつい椎名の優しさに甘えてしまい今までのことを話してしまった。

まあ、さすがに魔法やら人死にやらのことは言えなかったので大体のところをあいまいにぼかしたが、話の概要ぐらいは伝わったと思われる。

そんな話を聞いた椎名は、

「でも、最後にお父さんは笑っていたんだよね？」

「ああ……」

「そのなくなつた恋人さんも？」

「まあ……一応」

「だつたらさ……」

あなたはその人たちに向かつて、胸を張つてもいいんじゃないかな？

椎名のその言葉に、天魔は大きく目を見開いた。

「いつか死ぬって思っていたその女の人はきつとあなたが守ってくれるって言って、安心したと思うし……あなたのお父さんはあなたみたいな子供ができて本当に良かったって思っていたと思う」

「……なんで、おまえがそんなことわかるんだ？」

「わかるよ。……だつて」

そこで桜子は言葉を切ると、

「今日そのクレープ屋さんがクレープを二割引きで売ってくれていたんだよ！」

「……はあ？」

意味がわからない。そう首をかしげる天魔に苦笑を浮かべた後、椎名は続けた。

少年はとうとう裏路地の一角へと追い詰められてしまう。左右後ろは巨大な壁。前方にある出口の十字路にはデュナミスと彼の影魔法で作り出された数体の悪魔が立ちふさがっている。

「私もお前も……この戦いで大切なものを失いすぎた。いかげん決着をつけよう……夜神」

「もとよりそのつもりだ。かかってこいよ、クソ野郎」

天魔は、疲れきった声で提案してくるデュナミスに答えを返し、袖口から二本の隠しナイフをとりだし両手で構える。

「……あいつの戦闘法か」

「ああ、そして今は俺の戦闘法だ！」

「まったく……あいつは貴様に肩入れしすぎた。貴様の命を助ける代わりに、引退したはずだったあいつがまた戦場に引きずり出されたんだ」

いつもどおりな平たんな声音。だが長年彼を恨み続けていた天魔にはわかる。その声に若干の憎しみがこもっていることが。

「俺のことが憎いのかよ？」

「貴様は私が憎くないとでも？」

「ああ、憎いよ……でも、俺はもうそれだけでは戦わないって決めたんだ」

「なに?」

デュナミスの疑問の声に、天魔は不敵な笑みを浮かべる。

「俺の両肩には、今まで俺を支えてくれたすべての人たちの思いが込められている」

恋人だった少女、アリアドネーで出会った人々、敵だったけど自分を愛してくれた師匠……。そのすべてが天魔の脳裏によぎり、決意を固めさせる。

「そんな人たちの思いが俺を支えてくれている。だからそんな人たちを消させないために、デュナミス……俺は何度でも、お前の前に立ちふさがれることを決めた」

「……私を倒しても」

「無駄だって言うんだろう! だろうな……お前のボスはお前みたいなやつをいくらでも作り出せるんだから!」

「っ!?!」

なぜそれを知っている!?! と、デュナミスの口が動きかける。だがその前に、

「だとしてもかまわない。あんたみたいなやつがいくらでも現れるんなら、おれが何度でもたたきつぶす。お前の黒幕があきらめないなら、今度はそいつを叩き潰す。いいかよく聞け……」

そこで天魔は大きく息を吸い、

「俺が生きている限り、あの人たちを犠牲にするお前たちの計画は絶対叩き潰す!」

天魔はそういうと同時に駆け出しデユナミスに向かって突撃する。デユナミスもそれに即応し悪魔たちを前に出し詠唱を開始した。
熱い激戦の火ぶたが切つて落とされる！

そう……この物語は、

「デユナミスウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!」

「ヤガミイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

運命に翻弄された、一人の転生者の物語……。

「ん?」

ではない。

「ね」

「……」

瞬間、二人の目の前を一匹の黒ネコが通り過ぎ、

「邪魔だ。どけっ」

「ぶっ!?!」

天魔はまるでダンプカーにひかれたかのような衝撃を伴うひざ蹴りをくらい、何者か

に轢かれる。

白目をむいて気を失う天魔。それを踏みつけネコの追撃を行う少年少女……。

そう、この物語は、

「犬神君犬神君!! いま私らものすごいフラグへし折った気がすんねんけど!!」

「些事を気にかけるな安川! 僕らの大事(捕獲依頼されたペットの猫)は目の前にある

!!」

麻帆良学園都市でひたすら金を稼ぐことに執着した……とある外道の少年探偵の物

語!!

……†……†………†………†………

後日談というか今回のオチ。

『あの……デユナミス様。これどうします?』

「……ころ、す?」

『いや、さすがにそれはどうかと……空気読めてませんって』

気絶した天魔を困ったように見下ろすデユナミスと使い魔たちが、ひそひそと相談し

合っていたとかいないとか……。

「にしてもこの事務所ツリーなんてあったんやな……。犬神君のことやからてつきり持ってへんもんやとおもてたのに」

驚くマリーの言葉に飾りつけをしていた二人は全く同時にうなづいた。

「僕たちも物置でこれ見つけた時はびっくりしましたよ。まあ、せつかくあるんで飾り付けしようかって話になってこうして引つ張り出したんですが」

「……」

「……ヒメちゃん。お願いだからナイフつるすのやめて」

「……ネギが言ったようにキラキラしているものだよ?」

「うん。でも増すのはクリスマスっぽさじゃなくて物騒さだから真剣にやめて」

「どうやら飾るものまでは見つからなかったらしく、代替の飾りはネギとヒメの自前のものようだ。」

そんな微笑ましい二人の様子にほっこりしながら、マリーはとりあえず事務所へと上がり、

「いや〜にしても盛り上がりすぎてきたな。親父とおったときはクリスマス中もヤクザ相手に逃走劇繰り広げとったから、まともに祝ったためしないし……。ちよつと豪華な料理でも作って……」

プチャパーティでもみんなでやるか? マリーがそう言いかけた時だった。

く。

「だが、うちの担当のサンタクロースもそろそろ歳だな。毎年この季節になると持病のぎっくり腰が発症してしまい仕事ができないそうなんだ。というわけでここ数年の麻帆良地区のプレゼント配達はすべて僕が請け負っている」

「……ねえ、犬神さん。それってもしかしてサンタとちがつて、ただの仕事さぼりしたいだけのおっさんでは?」

何となくネギの脳裏には安楽椅子に座ってゲハハハハハまたさぼってやったぜ! と笑いながら、のんびり過ごしている白いおひげのあくどそうなおっさんの姿が思い浮かんでしまった……。

だがそんなネギの疑問に犬神はきらりとメガネを光らせた。

「野菜……実は僕にとつては、依頼をしてきたサンタクロースがパチモンだろうが本物だろうが、そこは重要なことではない」

「え、そうなん?」

「ああ。僕にとつて重要なのは」

そして犬神はいつものように、

「その偽物だか本物だかわからないサンタクロースが、僕がプレゼントを配ればきちんと金を払うということだ」

「初めから論点が違った!」

て言うかサンタクロースからも金取ってんの!? サンタから金もらう子どもなんて聞いたことありませんよ!? とギャーギャーわめく二人を無視して、犬神はさっさと時計塔から飛び降りる。

「では行くか。麻帆良は広いから二手に分かれるぞ。クラレンスと助手の助手は向こうのほうを。野菜と安川は僕についてこい」

こうして……犬神アンダーグラウンドサーチの長いクリスマススイブが始まった。

——明石裕奈の場合の場合——

「あれ? これって裕奈の名前やんか?」

「あ、ほんとだ。明石さんのプレゼントですね?」

「何だ知り合いか?」

「クラスメイト(教え子)だって、前に言ったやろ(でしょ)!!」

相変わらず人の名前を覚ええない犬神に抗議をしつつ、マリーとネギは女子寮の明石裕奈部屋の前に立った。

「にしてもそのプレゼントえらい大きい? 一体裕奈何頼んだんよ?」

部屋にたどりついたときに犬神が白い袋からとりだした巨大なプレゼントに、マリーは少しだけ顔をひきつらせながら、正体が気になったのか聞いてみる。

「ん? 確かこいつのプレゼント依頼は……」

犬神がそう言って一枚の紙を袋から取り出しマリーとネギに渡した。

「なあ……犬神くん。その袋って……」

「子供たちの夢や希望が詰まっているのであって、断じて四次元につながっていたりしないからな?」

「もう認めてるようなもんやと思うねんけど……」

「もしかりにつながっているとしてみてもそれは四次元ではなく、英雄王の蔵の中だ」

「前のネタまだひっぱんの!」

先ほどからどれだけプレゼントを取り出しても、微塵も形を変えない丸い袋の正体にマリーが気付きかけていた時だった。

「……」

「ん? どないしたんネギくん?」

なぜかとっても微妙そうな顔をして紙を見つめているネギに気付き、マリーも裕奈の願いが書かれている紙へと視線をむけなおした。

そこにはかわいらしい文字で、

『お父さん♡』

と書かれていて……。

「ファザコンここに極まりやな……」

「い、いや！ 普通！ 普通のことですってこれっ!!」

「黙れ同類」
ファザコン

ぐはっ……。と、割と切実に同じ願いをかこうかどうしようか迷っていたネギが喀血しながらぶっ倒れる。そんなネギを完全無視する形でマリーはこのプレゼントに対する疑問を続けた。

「それにしても犬神クン？ これ一体どないするん？ まさか本気で明石教授を連れてくるわけにもいかへんやろ？」

マリーが言うように、明石裕奈の父——明石教授は麻帆良の大学教授にして裏の社会ではかなりの實力を持つ魔法先生だ。

普段は情報操作や、情報統括など裏方仕事が多いが、少なくともタカミチとともに前線に出られる程度の實力は持っているとかいらないとか……。

流石にそんな相手を、娘のお願いだからといって誘拐まがいのまねをして連れだせるわけもない……。ので。

「安心しろ安川。そちらはすでにフォロー済みだ」

「?」

首をかしげるマリーをしり目に、犬神はそのプレゼントの包装を解く。すると中から現れたのはっ!

「あ、明石教授?!」

なんと先ほど話題にあげた明石教授本人だった!

「マジで!?! マジで誘拐してきたん!?!」

とうとう犬神くん犯罪者!?! とマリーが慌てるのをしり目に、犬神は呆れたように溜息をもらし、

「安川……よく見てみろ」

「え? あ!?! これ偽物やんか!?!」

そこまで言われてようやく明石教授が微動だにしていないうことに気付いたマリーはそれが本物と見まがわんばかりの完成度で作られた、偽物だということに気付いた。

「クラレンス自信作——等身大明石教授抱き枕だ」

「この形で!?!」

「ちなみにこの抱き枕は、本物の抱き心地と体温すべてが完璧に本物と同じだ」

「うわっ、ほんまや何これ!?! 人造人間のほうが近ない!?!」

「というかここまで本物に近いと逆に猟奇的じゃないですか?」

割と真剣にひと肌の温度を感じる明石教授抱き枕にマリーは思わず戦慄し、ネギは思わずドン引きする。

そんな二人をしり目に犬神はその抱き枕を部屋の前に放置するとさつさと歩きだした。

「さあ、さつさと次へ行くぞ安川。まだこの抱き枕はあと数件に配らないといけないからな」

「あと数件って?」

マリーがそういうと同時に犬神が袋から取り出したのは、

——タカミチ抱き枕とナギ抱き枕。

「誰がお願いしたんか、透けて見えんな!」

「というかエヴァさんまだ諦めてなかったんですね!」

その抱き枕を見た瞬間、マリーとネギは即座に二人の生徒の顔を思い浮かべたという……。

——近衛木乃香の場合——

「さて、実はこいつも抱き枕にしようと思ったんだが」

「そういうたら、セツナン抱き枕はなかったな?」

明日菜の部屋の前にタカミチ抱き枕を設置した後、同室の木乃香のプレゼントの話になったマリーとネギは、一体どうするんだ?と言わんばかりに犬神を見つめた。

当然木乃香の願いは『せつちゃん!』なのだが、

「ふむ、最近関係が改善されてきたせいかわいつかからもこんな願いがあつてな」

そう言つて犬神がとりだしたのは一枚の紙。桜咲刹那のお願いだ。

それをマリーとネギが覗き込むとそこには、

『お、お嬢様と仲良くなり……や、やつぱりいいです!』

「シャイすぎるやろ!」 お願いまでこんなんかいな!」

「というかこれはり出した時点で結構隠す気ありませんよね!」

そんな風に二人が刹那に対してダメ出しをする中、犬神だけが冷静にこのプレゼントを用意する算段を付ける。

「というわけで、もう面倒なので本人同士をプレゼントにすることにした」

「は?」

マリーとネギが首を傾げる中、犬神はごくごくわずかな量の殺気を部屋の中にいる木乃香へと向けた。

常人なら気付かないどころか、達人ですら「気のせいか?」と無視してしまいそうな

微弱な殺気。

だが、

「お嬢様に何する気だ貴様ああああああああああああああああ!!」

「ええええええええええええええええええ!!」

どんな感覚器官をもっているのか、それを敏感に察知した刹那が自分の部屋から飛び出しこちらに向かって走ってくるのを見てマリーとネギは思わず引く。

「も、もしかして常に木乃香さんの部屋の様子を探っているんじゃないや……」

「ストーリーカーも真つ青な手口やな……。気配察知とか達人にしかできひんストーリーカー方
法や」

「お前ら、あいつがストーリーカーだということはもう確定なんだな」

三人がそんな会話を交わしている間に、もう悪鬼がごとく顔をゆがめた刹那が間近まで迫っていて、

「ふむ」

犬神はその姿を見て「頃合いか」と、小さくつぶやくとその場から即座に瞬動。刹那の眼前に出現する、

「なっ?!? サンタ……クロース?!?」

目の前に突然現れた珍妙な存在に刹那が度胆を抜かれるなか、

「メリークリスマス」

「ぶっ!?!」

犬神サンタは容赦なくコブシを振りぬき、刹那の鳩尾を一撃。一気にその意識を刈り取る。

「……よし、ミッションコンプリートだ」

「ここまで暴力的なサンタは初めて見ました」

「というかセツナン……全然メリークリスマスちゃうやろ……」

殴られた衝撃で口からいろんなものを吹き出していた刹那にちよつとだけ同情するマリー。そんな彼らを見捨て、犬神は気絶した刹那を包装紙とリボンで包み『私がプレゼントです♡』の張り紙をして部屋の前に放置する。

「さて、次へ行くか……」

翌日。部屋の前に置かれたプレゼントに真っ先に気付いた明日菜が、勢い余って木乃香の分まで開けてしまい、中で結構悲惨な状態で気絶する刹那を発見した。そしてしばらくの間、明日菜は刹那にちよつとよそよそしくなり、刹那が仲の改善のために泣きながら奔走することになるが……そんなことはこの外道サンタにとっては知ったことではないので華麗に無視することにした。

——龍宮真名の場合——

『金』

一文字だけ書かれた簡素なそのプレゼント要求に、マリーとネギは絶句する。

そんな中、なぜか犬神だけは満足げな笑みを浮かべて、

「ふっ……。その実直さ、嫌いではないぞ」

と、袋から取り出された札束を、

「……」

自分の懐にしまい、

「ほら」

部屋の中には自分の財布から一円玉だけを投げ入れた。

「さて、次だ」

「……………」

無論、マリーからの無言の一撃が、犬神のメガネを吹き飛ばしたことは言うまでもない。

そこには五月らしい丸い文字で、

『みんなの願いが叶いますように』と、率直に書かれていた。

「……」

瞬間、マリーとネギの目から滝のような涙があふれ出す。

「そやんなあ……そやんなあ……五月ちゃんはそういう子や」

「あれ? なんでだろ……涙が、止まらない」

いろいろ外道すぎるお願いで疲れていたのか、なかなか胸の中の感動が去らない二人を放置し、犬神は五月の元へと近づく。

「ふん。お前は相変わらずだな……まあ、だからこそ僕はお前を認めているわけだが」

「え?」

何それ、新手のホラー? と言わんばかりに涙を一気にひっこめ驚く二人に「後で話があるからな?」と人殺しの視線を投げかけた後、犬神は懐から取り出した手帳をページ破り、そこにさらさらと文字を書き込む。

そしてそれを五月の手元へ置き、袋から取り出した毛布を五月にかけた後、

「さて、ミッションコンプリート作戦完了だ。帰るぞ」

「はーい」

何やら満足げな笑みを浮かべる犬神に苦笑を浮かべた二人は、元気良く返事を返し外

道サンタにつき従い麻帆良の闇の中へと消えた。

その数分後、何やら温かいことに気付き目を覚ました五月はいつの間にかかかってい
た毛布に驚き、

……ああ。毎年毎年ごくろうさまです。

と、手元に置かれていた小さなメモ用紙を見て少し微笑む。

そこには達筆で機械的な文字でこう書かれていた。

『プレゼント配達完了。メリークリスマス優しき料理人どの。』

Byサンタクロース一同』

お仲間増えたんですね？

いつもとは違うサンタクロースの後ろの文字に少し驚きながら、今年もいいクリスマス
スだったと、彼女は優しく笑うのだった。

33話・始まる終わり——文化祭最終日!!

文化祭最終日である三日目の朝。

犬神アンダーグラウンドサーチは今日も今日とて通常営業。依頼を受けた迷子猫の搜索をしていた。

そして、

「ミッションコンプリート
作戦完了だ」

「はあく疲れた……」

とある建物のバルコニーにて、何とか捕獲することに成功した。

「なあ、犬神君……。私ら何でこんなことしてんの？」

「ん？ 仕事だからに決まっているだろうが」

「そうやのうて……なんで学生のお祭りである文化祭期間中も仕事してんねんと聞きたいんや、こらあああああああああああああああ!!」

マリリーの怒声ももつともで、眼下通りでは学園祭期間中はずっと行われているロボットや仮装衣装のパレードが続いており、それを楽しそうに見る観光客や学生たちが出店の料理を片手にお祭りを楽しんでいる。

そんなみんなが楽しそうな中、マリーは汗だくになって猫を探していたわけで、

「まちがつとるやん!?! 明らかに何か間違えてるやん!?!」

「何を言う安川。仕事に祭りもくそも関係ない。関係あるのはそう……祭り期間中は客から特別手当が取れるという一点に尽きる!!」

「また金の話かい!?!」

君ホンマ学生としてまちがつとんで!! と怒声を上げるマリーをしり目に犬神は悠々と片手に捕まえた猫を揺らしながら、さっさと事務所に向かつて歩き出す。

「まあ、学際期間中はその分依頼が減るがな。おかげでもう学際期間中に頼まれた依頼がなくなった。午後からはフリーだぞ?」

「ほんま!?!」

「ここでウソについて僕に何の得がある?」

特にないので犬神の言葉が事実だと悟るマリー。そして、

「よっしやああああああああああああああああ!! これでもまた学祭楽しめるうううううううううううううううう!!」

それがよっほど嬉しかったのか、歓喜の涙を流しながらガッツポーズをする。そんな大げさな態度をとり、天を仰いだマリーは、

「……なあ犬神君」

「何だ安川」

「空からネギ君が降ってくんねんけど?」

「なに?」

マリーの言葉にほんの少しだけ興味を覚えたのか、犬神は猫をがっしり捕まえたまま空を見上げた。

「きやああああああああああああああああああああ!!」

「おいおいおいおい、まじかよおおおおおおおおお!!」

「うっひよおおおおお!! リアルパラシュートなしスカイダイビング!!」

「はしゃいでいる場合ですかパールううううう!!」

「にんにん」

「こんなときでも平常運転やなく楓」

「お嬢様ももうちよつと慌ててください!!!」

「あれ……何でしょう。長距離時間跳躍したせいかな、なんか……気持ち悪い」

「ちよ、しつかりしなさいネギ!! って、あそこにいるの犬神じゃない!? ちよ、助けな

さい犬神いいいいいいいいいいいいいいいい!!」

のどか・千雨・パール・夕映・楓・木乃香・刹那・ネギ・明日菜といった3—Aパーティーが上げる悲鳴が空にたなびく。

そしてその最後あたりに自分の名前が載せられるのを聞き、犬神はしばらく考え込んだ後、

「さて安川。依頼人の元へ行くぞ?」

「え、あの……助けへんの?」

「あのメンバーは最近エターナルロリに鍛えられて、やたらと耐久度増したからあの程度の高さから落ちた程度では死なんだろう。というか、野菜さえ無事なら後は割とどうでもいい」

「ひどくない?!」

「それよりも僕にとつて大切なのはこの猫を引き渡すことによつて発生する料金だ」

「君はホンマにブレへんなあ!」

マリーはクククククと不気味な笑みを浮かべる犬神にどん引きしつつ、犬神に反抗して3-Aパーティーを助けようとするが、

「何をしている?」

「ぶっ!?!」

どういふわけかそれを犬神に止められ、腹パンを一撃くらい気絶してしまった。

「貴様がいる、いないとでは特別手当の額が違うのだ。この後助手の助手とも合流するからさっさと来い」

「なんじやろう犬神君……安川君の態度がやたら悪いんじやが」

「いろいろあるんですよ学園長。クライアント少々お待ちください。今更生（物理）させませんで」

「いらん!?! いらんから!?!」

「マジすいませんでしたあああああああああああああ!?!」

それから数時間後。祭りを全力で楽しむために街へ繰り出そうとしていたところで学園長の呼び出しをくらったマリーは、不機嫌全開で学園長に無言の抗議を行っていたが、犬神がゴキゴキと手を鳴らし始めたのをみて顔から血の気を引かせながらジャンピング土下座する。

「それで、今回の依頼は何ですかクライアント?」

「うむ……とうとう超鈴音チャオリンシエンが動き出したらしい。彼女の目的は学園都市全土を魔法陣

に見立てて発動する認識阻害とは全く逆の魔法——全世界に対して行う《強制魔法認識魔法》ということが判明した」

「っ?! それって……」

「魔法を全世界にばらす……ということですか」

学園長が告げた超の目的に、マリーは息をのみ犬神は冷静に考察を口にする。

「でも、そんな大規模な魔法、いつたいどうやって発動させるつもりなのです? 確かに魔力と方陣の下地は麻帆良の土地を使えば代用可能ですが、それを使うにしてもそれ相

応の依り代ざいりようが必要では？」

「おそろくタカミチ君が調査しておった麻帆良地下に封印されておった鬼神を機械制御して操り、術式の素体にするものと思われておる。鬼神の数は最低でも六体。さらにそれを補助する目的で造られたと思われる機械の兵団が約2500体ほど確認される」

「かなりの戦力になるますね。麻帆良に存在する戦力で防ぎきれますか？」

「そこで、わしはとある策を弄しようと思うておる」

「策？」

何やら複雑な話を始めた犬神と学園長をマリーはぼかんと見つめている。何気に馬鹿レンジャー予備軍のマリー。ボケには鋭い反応を返せるが、ちよつと複雑な話になると付いていけなってしまう。

つまり、現状マリーは超退屈だった。

というわけで手持無沙汰になったマリーはのんびりとした様子であたりを見回し、

「ん？」

「ちよつと……ちよつとこつち来い!!」

何やらすごい形相で学園長室の扉の隙間から中を覗き込みマリーを手招きする千雨の姿を確認し、マリーは思わず顔を引きつらせる。

今回のイベントにて悪役となる、超一味が集っていた。

「諸君、私は戦争が好きだ」

諸君、私は戦争が好きだ

諸君 私は戦争が大好きだ

殲滅戦が好きだ

電撃戦が好きだ

打撃戦が好きだ

防衛戦が好きだ

包囲戦が好きだ

突破戦が好きだ

退却戦が好きだ

掃討戦が好きだ

撤退戦が好きだ

平原で 街道で

塹壕で 草原で

凍土で 砂漠で

海上で 空中で

泥中で 湿原で

この地上で行われるありとあらゆる戦争行動が大好きだ

戦列をならべた機械兵の一斉発射が轟音と共に敵陣を吹き飛ばすのが好きだ

空中高く放り上げられた敵兵が効力射でばらばらになった時など心がおどる

戦車兵の操るティーゲルの88mmが敵戦車を撃破するのが好きだ

悲鳴を上げて燃えさかる戦車から飛び出してきた敵兵をMGでなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだった

銃剣先をそろえた歩兵の横隊が敵の戦列を蹂躪するのが好きだ

恐慌状態の新兵が既に息絶えた敵兵を何度も何度も刺突している様など感動すら覚える

敗北主義の逃亡兵達を街灯上に吊るし上げていく様などはもうたまらない

泣き叫ぶ捕虜達が私の振り下ろした手の平とともに金切り声を上げるシュマイザーにばたばたと薙ぎ倒されるのも最高だ

4. 8t榴爆弾が都市区画ごと木端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚える

露助の機甲師団に滅茶苦茶にされるのが好きだ

必死に守るはずだった村々が蹂躪され女子供が犯され殺されていく様はとて

も悲しいものだ

英米の物量に押し潰されて殲滅されるのが好きだ

英米攻撃機に追いまわされ害虫の様に地べたを這い回るのは屈辱の極みだ

諸君 私は戦争を地獄の様な戦争を望んでいる

諸君 私に付き従う大隊戦友諸君

君達は一体何を望んでいる？

更なる戦争を望むか？

情け容赦のない糞の様な戦争を望むか？

鉄風雷火の限りを尽くし三千世界の鴉を殺す嵐の様な闘争を望むか？」

「戦争！ 戦争！！ 戦争！！」

「よろしい ならば戦争だ」

それらを一息に言いきった後、満足げに頷いた超は、

「こんな感じに楽しんでいこうと思うのでそこるところよろしくネ！」

「つーかよくあんな長い演説文覚えたな」

「お兄様よく見て？ 演説中長がちよつとだけ消えたりしていたわよ。あれきつと時間

跳躍してカンペ見に行っていたんだわ」

超は意外とよく見ていたSMブラザーズにさすがネ、と感心の声を漏らし、

「せっかく私が時間をかけて作った渾身の力作なんですから、カンニングなんかに使わないで下さいよ!」

「あはははははは! まあ、かたいこと言うんじゃないネ、葉加瀬」

にこにこ笑いながら、不満の声を漏らす葉加瀬の肩をたたきその声を軽く流す。そして、飛行船に設置されたスパコンに接続し意識をネットの海へと移した茶々丸に話しかけた。

「さて茶々丸。用意はいいかな?」

『jud. 率直に申しまして、絶好調と判断できます——以上』

「さすが博士と私の最高傑作!! ノリが良くてグツジョブネ」

サムズアップして茶々丸をたたえる超に、スパコンにつながれた画面の中に顔を映し出した茶々丸はほんの少しだけ微笑む。

『それにしても超さん。あなたのほうこそどうされたのですか? 今になってずいぶんとはしゃいでおられるように見えますが?』

「……そう見えるか?」

『ウイ。機械的に申し上げますと——そう判断できます』

「……あの後輩たち再登場の機会あるんだろうか」

『そればかりは原作者様の気分しだいかと……』

再び雑談に入りかけてしまうと話が進まないで、

「ふむ、なぜ私のはしゃいでいるか……力」

とりあえず超は軌道を修正しておく。

「なんとというか、私もそれ相応のシリアスな態度をもってこの戦いに臨むつもりではあつたんだヨ」

『そうなのですか？』

「そうなんだヨ。だがまあ、麻帆良武闘会を見て少し気が変つてネ」

超はそういうとほんの少しの間目を閉じ、何かを思い出すかのようにつぶやいた。

「この二年は本当に夢のような日々だった。友人ができて、日々を平和に過ごせた。資金集めのためのはじめた中華料理屋を、屋台から店にしてみたり、工学研と協力してロボット作ったり、軍事研の依頼受けてネタ兵器作ったり。まあ、かなり充実した日々だったんだヨ」

そんな中で、と呟く超の脳裏によぎるのはいつでもどこでも騒がしかった自分の友人であるクラスメイト達の顔だった。

「私は人生を生きる上で最も重要なことを学ばせてもらった……。そんな私が最後の最後で、しみつたれたシリアスを演出するのははたしてどうなんだろうと……。そう思っただけヨ」

『……その学んだことは、いったい何なのですか?』

「決まっているだろう?」

茶々丸の質問に、超は満面の笑みを浮かべて答える。

「何事をするにも——全力で楽しむ!!」

「クク……確かに。あのクラスではそれが真理だな」

それに同意を返してくれたのはクラスメイトのとある狙撃手。彼女は自分の愛用ライフルを磨きながら、小さく苦笑を浮かべていた。

「さて、あちらの準備も整ったようだし——はじめようか」

麻帆良湾岸線に続々と集まるロープ姿の学生たちを見て、超は集まった仲間たちに指しを飛ばす。

「SMブラザーズ。麻帆良高戦力部隊は相手にしなくていい。君たちは『犬神級』だけを相手にしてくれ」

「了解」

「マナ。代わりに君には麻帆良の高戦力部隊の掃討を行ってもらうが、構わないネ?」

「むしろ私が犬神君を落としてあげてもいいよ?」

「クク、期待はしないで待っておくヨ。茶々丸……学園結界のシャットダウンのタイムングは?」

『0. 000000001秒単位のズレすらありません。完全に掌握しています』

「葉加瀬。田中さんや鬼神兵たち——そして秘密兵器の様子は？」

「オールグリーン。異状なしです!!」

「よし諸君……」

そこで超は言葉を切り、

「最後の祭りの始まりだ!!」

指揮者のように両手を振りおろす!!

34話・開戦!!

学園生徒の腕に覚えがある者たちに各々武器が支給され、生徒たちがそれぞれの防衛拠点へと配置を済ませた時だった。

イベント開始までまだ時間がある。だがしかし、準備ができている敵を待たせて白けさせるのも良くないだろうと、超は不敵に笑いながら手を振りおろした。

それと同時に湖面を切り裂き、姿を現す大量の、グラサン装備をした機械仕掛けの兵士たち。工学研の汗と涙の結晶!! Thank you こと田中さんが強大な重火器をもって出現したのだ!!

『おお!? 何だあれ!?』

『おいおい、今年のイベントかなりガチだな!!』

『あれが火星のロボット軍団!?!』

生徒たちは突然現れたロボットたちに驚きながら、各々しつかりと魔法具を構え迎撃の態勢をとっている。それでこそ麻帆良の生徒だと、超はその光景を見て笑った。そんな時、彼らの声を切り裂くように一つの張りのある声が麻帆良全土に響き渡った。

『お〜つと!! 敵の火星ロボット軍団がイベント時間を無視して奇襲を仕掛けてきたよ

弾丸が地面に突き立つ衝撃によって湖周辺の浜の砂が巻き上げられ一瞬煙幕に近い状態となり、防衛隊の視力を奪う。

そして、砂煙が落ち着いたとき……そこにあつたのは!!

「な!?!」

「!!」うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「!!」みんなああああああああああああああああ!!」

パンツ一丁に剥かれた男子生徒と、下着一枚まで服を吹き飛ばされた女子生徒の群れだった。

当然男子の何人かは涙を流しその光景を拝み倒すが、それを見た女子生徒たちによって袋叩きにあうという同仕打ちが続出。戦線は見事に崩壊する!!

『——そのロボットが使う攻撃のすべては学際期間中噂になっていた脱衣光線。いわゆる『脱げビイイイイイイイイイム!! (??▽?) vドヤツ』だ。けがをする危険はないから安心してくらってクレ』

「うおおおおおおお!!」なんてことしやがる麻帆良最高の頭脳!! 腐れありがとう
「ギィ」

「さすが超鈴音!! 俺たちにできないことを平然とやってのける!!」

「そこにしびれる憧れぶっ!!」

人類○完計画とかそういった感じの計画を担っているらしい、人類最後の砦かもしれない発令所だ。

そのオペレーター席に座るのはヤツパリどこかで見たことがある制服を着た、葉加瀬・茶々丸の二人。

その背後には赤いジャケットを着て髪を下した超がたたずんでいた。後ろに流れるBGMはかの有名なあれだ。

「冷却終了」

葉加瀬がブラインドタッチで操作端末をたたきながら、状況を開始する。

「右腕の再固定完了、ケイジ内全てドッキング位置」

「了解、停止信号プラグ排出終了」

「了解、エントリープラグ挿入」

「脊椎伝導システムを解放、接続準備」

「プラグ固定終了」

「第一次接続開始」

「エントリープラグ注水」

「主電源接続」

「全回路動力伝達、問題なし」

「了解。第二次コンタクト——入ります」

「A10 神経接続、異常なし」

「LCL 転化率は正常」

「思考形態は日本語を基礎原則としてフィックス、初期コンタクト全て問題なし。双方向回線開きます、シンクロ率平均41.3%!! ハーモニクス全て正常値、暴走ありません」

「いけるナ」

そこまでの報告を茶々丸と博士から聞き、赤いジャケットを着た超はにやりと不敵に笑う。

「発進、準備ダ！」

「発信準備。第一ロックボルト解除」

「回路確認、アンビリカルブリッジ移動開始！」

「第二ロックボルト解除。第一拘束具、除去します」

「同じく、第二拘束具除去。一番から十五番までの、安全装置を解除！」

「解除確認、現在零号機より陸号機の状況はフリー」

「外部電源、充電完了!!」

「外部電源接続、異常なし」

女子からの肅正である……。

そしてそれをカメラで見ている超は、

「いや、苦勞してとったかいがあつたな〜!!」

「まったく……あれだけ自然にあのセリフ言えるようになるまで、何度リテイクさせられたことか」

『名演技でしたよ、博士』

飛行船の中でプチ打ち上げをしていた……。

35話・踊る麻帆良大防衛線!! 世界樹魔力だまりを封鎖せよ!!

湖上に6体のエヴァンゲリオンならぬエヴァンジェリオンが射出されたとき、麻帆良学園結界維持班では。

「第七障壁突破されました! 信じられません……人間離れした速度でこちらのシステムを侵食されています」

「36782ケタのパスワード解析されました! 最終防衛ライン強制的に開かれます!!」

「馬鹿な……連合のハッカーは化け物かっ!」

「ふざけている場合ですか明石教授!!」

サポートをしてきていた魔法生徒二人からステレオの説教をくらい、たはははと明石教授は苦笑を浮かべる。

「とはいっても、鬼神を使うってわかった時点である程度ここが落とされるのは分かっていたしね。おまけに相手は麻帆良最強の頭脳と、狂気のマッドサイエンティスト鳳凰院凶真——もとい、あの葉加瀬だよ? 科学サイドに多少の魔法要素をくみこんで尋常

じゃない防御力を誇るうちも、さすがにあの二人が全力出してハッキング仕掛けてきたら分が悪いつて」

「で、ですが!？」

「それに安心して……。ここはもとから落とされても問題はないところだから」

「え!？」

驚く二人をしり目に、明石教授はいつものようににこやかな笑顔を浮かべて背後に座ってだらけている女性教員に視線を向けた。

「だったよね、リリイくん？」

「だとしてももうちょつと頑張つてほしかったですけどね……」

おかげで私の出番が速くなったじゃないの……。と、その女性教員——初等部のサボリ魔リリイはだるそうにあくびをしながら、オペレーター二人にが座る場所の中央に歩み寄り、

「よつと」

「っ!?! なにするんですか!？」

なんと、この場所からネットにつながるコードを何のためらいもなくひきぬき、そのうえ主電源のコンセントまで抜いてしまった。

「うっさいわね……。これからここから指示出すんだからいつまでもネット回線につな

いでおくわけにもいかないでしょう？　ハッキングされて私の策が相手に流れたらどうすんのよ？」

「え？　え？」

「それじゃあ、明石先輩——私はいつも通りやりますんで、フォローお願いします」

「わかったよ、軍師殿」

苦笑を浮かべながらも、明石がきちんと了承したという言質を取った後、リリイは完全に魔力で動く広域念話通信補助用の魔法具を起動させる。

「さあて、麻帆良の裏関係者のみなさ〜ん。こちら学園結界維持班です。皆さんもお気づきだと思いますが、先ほど我らが頼り切っていた学園結界が落とされてしまいました。これにより湾岸に現れた鬼神——通称エヴァンジェリオンは自由に学園内を闊歩することができるようになります」

そんな絶望的な状況を語っているにもかかわらず、リリイの声はいつも通り平坦なままだった。

「だけど……まさか本気でこれで終わったなんて考えている人はいませんよね？」

そして、その後リリイがつづけた言葉に、麻帆良裏関係者たちの無言の同意が返ってくることを、オペレーターの二人は感じた。

「だったら話は簡単ね。徹底抗戦よ、捨て駒ども、私がこれから指示を出すからその通り

麻帆良沿岸線を防衛していた生徒たちは、じりじりと自分たちが押し込まれていること感じていた。

ただできえエヴァンジェリオンの砲撃で大規模に戦力を削られてしまった彼らだ。元より数において圧倒的に押されている上に、地力が違う鬼型決戦兵器まで出てこられては、不利な戦いになるのは自明の理だった。

「くそっ!! なんとかか……何とか押し返せないか!!」

「左舷! 弾幕薄いぞ、なにやってんの!!」

「うるせえ!! 人手が足りてねえんだよこっちは!!」

そんな風にうまくいかない状況に、生徒がじりじりと焦れ始めたころだった。

「おい、学園都市のほうから何か……」

「……!?」

一人の生徒が何かに気づき、何か嫌な予感を感じ取った（この麻帆良学園生徒は特別な訓練を受けています）生徒たちは本能的に前線から逃げ出し、田中たちから距離をとる。

AI制御の田中たちは特に何も考えず、追撃を仕掛けるために逃げ出した生徒たちを追おうとするが——その時だった、

ゴッ! とともに、ゴガッ!! とともに取れる轟音が、麻帆良湾岸線すべてを揺らす!!

犬神の居合拳が麻帆良湾岸線を広範囲にいたって、熱烈に打撃したのだ!!

「!?!」

味方であるはずの生徒たちの背筋にすら震えを走らせる強烈な不可視の打撃。当然その対象だった田中たちも無事では済まず、見事に粉碎さればらばらの破片になって辺りに飛び散る。

そして、それと同時に学園都市各所に現れる、魔法関係者たち。

彼らは信じられない超常的力をふるい、次々と生徒たちを苦戦させていた戦力を駆逐していく!

「な、なんだ!?!」

突然の、桁外れの実力を持つ存在たちの救援に、学園生徒たちは目を白黒させる。その時、

『さくって皆さんお待ちかね!! ヒーローユニットの登場だ!! ヒーローユニットに関しては先行配布されたパンフレットをご参照ください!!』

司会の朝倉はそう叫びながら、先ほどの砲撃を行った人物として犬神を大写しでモニターに映す。

「ヒーローユニット?」

「なんだそれ?」

「まって、今パンフレット開くわ!!」

と、次々とパンフレットを開きヒーローユニットの実態を確認していく学園生徒たち。

いわく、イベント開始後、ピンチになったときに現れる学園防衛最高戦力。

いわく、彼らは一騎当千の実力を持ち自分たちを助けてくれる。

いわく、彼らはあくまで開催者サイドなのでポイントは入らないので安心してくださ
い♡。

などなど……。とりあえずそれでヒーローユニットに関しての知識を手に入れた学
園生徒たちは、

「うおおおおお!! すげえええええ!!」

「さすが学園祭ラストイベント! 味な真似してくれるぜ!!」

「うおおおおお!! 刀子女史じゃねあれ!! おみ足ゲツトおおおおお!!」

「あの人らについていけば万全だな!!」

「ばか、あんな化け物連中の近くにいるも点数は稼げねえ!! 他いくぞほか!!」

一気に勢いを盛り返し始めた!!

ら、チャオは映像を葉加瀬にかえした。

「どうしますかチャオさん? どうやら敵は持久戦に持ち込んでタイムアップを狙うみたいですよ? おまけに、この後は犬神さんの砲撃の第二波が待っていますし」

葉加瀬が次に渡してきた映像には静かに気を高め、再び砲撃体制に入る犬神の姿があった。

狙いはおそらく鬼神。あれを削ってしまったえば超の計画は著しい打撃を受けることになる。敵もそのことは分かっているのだろう。確実に一撃で鬼神を撃滅できる犬神の砲撃で、一気に勝負を決めることを狙ってきた。

だが、

「まだまだ……甘いネ、学園都市」

超がそうつぶやいた瞬間、犬神が突然砲撃体制を解き飛び上がる!

それを見て画面の端に移っていたマリィが驚いた顔をしていたが、次の瞬間どこからともなく飛んできた何かが、尖塔の屋根に着弾し屋根を粉碎! 辺り一帯を粉じんで見えなくするのを見てその驚きをさらに深めた。

そして、粉じんが晴れたころには、

『悪の幹部ユニット——佐渡島サディスト推☆参!!』

ぱちりとうウインクしながらチャオたちが見ている映像に向かってカメラ視線を送

なかつたりする二人は、無言のまま敵と相對する。

いつも通りの超然とした様子で、世界最高峰の暗殺者に狙われているにもかかわらず微塵も動揺した様子を見せない犬神。そんな彼に、サディストは思わず苦笑を浮かべた。

「君は本当に相変わらずだね。今回割とガチだから、前回みたいにおれたちの依頼者ほこぼこにして依頼取り下げさせるなんて真似は出来ないよ?」

犬神の暗殺依頼を受けた際のお話だった。

『おれたちは拳銃だ。おれたちを止めたいのならそれを使っている依頼者に、止めてくれって頼むんだな』といったもの決め台詞をサディストがはいてみたところ、『ふむ、ではそうしよう』と答えられて、三分ほど戦闘をした後犬神はまんまとサディストから逃走。

その数時間後半死半生の体になった依頼者から『い、依頼中止じゃ!? 犬神様を怒らせてはならん!!』と泣きながらの依頼中止宣言があったという——誰にとつても損にしかならない(サディストたちはただ働き、依頼者は殴られ損。唯一犬神だけがその依頼者から迷惑料として大量の金をせしめたそうだ) 思い出したくもない事件だった。

だが、今回それは通じない。超は上空数3000メートルの位置を飛行する飛行船の中、そこに行くためにはかなりの手間と労力が必要だ。だが、犬神と相對する自分はそのように油断することなく、犬神を逃がすつもりはない。

だが、

「いいのか？ 真つ先に僕のところに来て？」

「なんだって？」

「麻帆良には僕クラスの实力者があと——4人いるんだぞ？」

犬神が告げたように、現状麻帆良には彼に比肩しうる能力者たちが4人在籍している。

A A A所属。高畑・T・タカミチ。

犬神アンダーグラウンドサーチ所属。クラレンス。

学園都市男子中等部所属。スバルタンVIこと六重トウジ。

同上・広域殲滅型魔法使い。猫谷コースケ。

犬神だけにかかわっている暇はない。そいつらが本気を出せばあの程度の霊格の鬼神なら、瞬殺とは言わなくとも、危なげなく倒すことができるはずだ。

だが、

「はっ！ それこそ心配ご無用だぞ、犬神君」

しかし、そんな犬神の揺さぶりを受けてもサディストの不敵な笑みを変らなかつた。

「うちの雇い主はちゃんとそのあたりのことも考えているから」

その言葉を言い放つと同時に、サディストの姿が消え、

二人がそんなことを言い合いながらそれでもやはり危なげなく、田中さんたちを掃討していた時だった。

「おいお前ら、なんか来るぞ!」

「っ!?!」

学園生徒の一人が忠告の言葉を飛ばしてくれたのを聞き、二人はその生徒が指さした方向へと視線を向ける。

そしてそこにはっ!

『我々は、力あるものが、力なきものをものを襲うとき、現れるであろう。たとえその敵がどれだけ大きな力を持っているとしても!!』

巨大な多脚戦車に乗った、フルフェイスの仮面と漆黒のマントで身を包んだ細身の田中さんの姿があつた。その戦車の周囲にはどこかで見たことあるというか、その格好の人物の周りになんかいないといけないと思ってしまうバイザーを付けた普通の田中とはちよつとだけ見た目が違う田中たちが数体いて……。

『力あるものよ、我を恐れよ。力なきものよ、我を求めよ。世界は我々黒の騎士団が裁く!!』

そう言って格好をつけた田中がばさりとマントを広げその体をさらす。それと同時

『いいじゃんか、今日のところはさ……ハッピーエンドってコトで』

「なんでそれ知ってるんだあああああああああああああああああ!?!」

A：超監修だからです。

『今日のところはさ……ハッピーエンドって』

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおお!?!」

若き少年時代のかっこを付けたセリフを連呼され、羞恥心に悶えたタカミチは何の手加減もなく豪殺居合拳をぶっ放す!

しかし、田中はそれを軽々とよけ、お返しとばかりに、

『雷の斧!』 つばい、電撃を放った!

胸に書かれた名前は《こずもえんてれけいあー》。謎テロップは“完全なる世界”。
完全なる内輪ネタだったという……。

36話・黒い歴史と超の努力

麻帆良学園都市上空にて、

『雷の暴風（に似たレーザー）!!』

「豪殺・居合拳!!」

どこかの有名な人たちを足して五で割ったようなスペシャル田中と、スーツを翻し、天を舞う高畑先生が激闘を繰り広げていた!

「お、デス眼鏡!!」

「デス眼鏡もヒーローユニットだったか!」

「すげー!! あれ、格闘大会でやってた居合拳だろ!? どうやってあそこまで威力だしてんだ!」

下でそれを観戦していた生徒たちは、普段自分たちの脅威となる広域指導員が本気で戦う姿を興奮気味に応援している。

それはそうだろう。何せここでタカミチが田中を倒してくれないと、次にあの田中の餌食になるのは自分たちかもしれない。ここでタカミチに勝ってもらわないと彼らとしても困るのだった。

『いいじゃんか、今日のところはさ……』

可及的速やかに、勝負をつけることにする！

『ハッピーエンドってコトで？』

「だ・ま・れ!!」

七条大槍無音拳!!

スペック自体はさほど高くない田中はそれをよけることはできない。

だから田中は、

『すっ……』

「!？」

あえて目を閉じた。

なんだ!? 何かの罠か!? と高畑が警戒する中、田中はぼそりと一言、

『落ち着け、落ち着くんだ詠春!! 心頭滅却すれば火もまた涼し——ぶっ!』

「……………」

そんな戯言を吐きながらあっさり居合拳の濁流にのまれ、路地裏に墜落していく田中の姿に高畑は思わず無言になる。そして、

え、詠春さん……なんか、ごめんなさい。と在りし日の詠春の姿を完全にネタにした

田中に、思わず戦慄を覚えながらとりあえず西に座する最強の剣士どのに頭を下げてお

た。

「ふむ……ビジュアル的にはエヴァンゲ○オン初号機ですか？　なかなか凝ったことをなさる」

あのアニメのように獣のような低姿勢で滑らかに走るその田中に、感心したような吐息を洩らしながら、クラレンスは袖口から棒手裏剣を取り出しそれを投擲。

一本二本とエヴァアへと襲いかかるそれは、

「ほう……」

バシッ！　バシッ！！　と、硬質な音を立て突然虚空に出現した六角形の半透明な障壁によって防がれた！

『A・Tフィールド!?』

それと同時に田中の胸の装甲を開けてくる薄型モニターが、驚いた顔をしている、先ほどエヴァンジェリオンが発進したときの映像の舞台になった場所で待機していた超たちを映し出した。

「むふ」

その画面に気付いたクラレンス。彼は少しうなづいた後、手裏剣での攻撃を二回三回と繰り返し試みる。

そして当然と言わんばかりに、A・Tフィールドのはじかれる手裏剣。それとともに

声を上げるモニター。

『無駄よ。A・Tフィールドがある限り』

『使徒には……届かない』

再び画面に現れる超と葉加瀬に「芸細かいですな」と感心した風にもらしながら、クラレンスはほかにどんな反応が返ってくるのか試してみることにした。

・パターンその1

忍具を使った爆発でエヴァ田中を包みこんでみる。

だが田中はさすがにA・Tフィールド（もどき）持ち。この程度ではびくともしないのか、炎の中から悠然と姿を現す。

だがモニターに映っていたのは、

『エヴァ、再起動』

『そんな……動けるはずありません』

『まさか……』

『暴走……』

『勝ちましたね』

『ああ……』

なんか余裕たっぷりとした笑みを浮かべた超一行だった。

クラレンスはそれを見て、

「では次に行きましょう……」

何事もなかったかのように流す。

パターン2

暴走状態にもかかわらず銃的な何かを取り出したエヴァが、クラレンスを狙うがクラレンスが逃げ回りそこから発射される弾丸——時間跳躍弾を平然と回避しまくっていた時だった。

再び映像が入り、

『目標をセンターに入れてスイッチ……目標をセンターに入れてスイッチ……』

「それ当たらないフラグではありませんかな？」

超が真面目腐った顔でカチャカチャ引き金を引く光景が流れ出したとか、いないとか……。

パターン3

クラレンスが勝負を決めようとい、A・Tフィールド（もどき）を忍術で平然と切り裂き、田中に迫った時だった。

『逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだああああああああ!!』

どういわけかカッターナイフみたいなものを武装して、クラレンスにカウンターを決めようとする田中。

しかし、クラレンスは歴戦の忍。

「申し訳ありませんが、遅すぎますぞ」

彼はエヴァ田中の攻撃を平然とかわし、逆にカウンターをたたき込んでその首を刈り取る!!

そのとたん再び電源が入ったモニターに悲痛な顔の葉加瀬の姿が映った。

『シグナルロスト……エヴァンゲ○オン初号機……完全に沈黙しました』

こうして、エヴァン○リオン初号機は大した活躍もできないままクラレンスに倒されてしまった……。

E D

だが、沈黙したエヴァ田中はそれだけでは終わらなかった。

突然、モニターに電源が再び入り、何かの映像を映し出したのだ！

「っ!？」

珍しくその光景に驚くクラレンス。そして、映し出された光景は、

「おめでどう……」

「おめでどう！」

「おめでとさん!!」

「めでたいですね！」

「おめでどう」

「お・め・で・と・う」

「おめっとうっ」

「くあくわつくわ!!」

「おめでどうでござる」

龍宮が、葉加瀬が、マリーが、ネギが、犬神が、姫が、S Mブラザーズが、超が、楓が——皆が口ぐちに祝福してくれる。

クラレンスは思わずそれに涙を流し、

「あ、ありがとうございます」

と、深くこうべをたれたあと、

「さて、では超殿を探すのでしょうか」

紳士としてネタに付き合った彼は、その映像を最後まで見ることなくサツサと踵を返した。

その背後の映像の締めは、変わった髭の執事だと彼自身が知っていたから……。

オマケ

タカミチに渾身の力作をたたきつぶされ、ふてくされながら帰ってきた超は「もう一つの力作はどうなっている？」とクラレンスとエヴァ田中が戦っている路地の監視カメラをハッキングしその映像を見た。

「あくやっぱり負けてしまったカ」

「あの二機は試作段階の機体でしたからね。ほかのネームドよりかははるかに機能も少ないし、ボディーも弱いですからしかたないですよ」

やはりといていいのかなんというべきか、首を落とされ戦闘不能に陥っている田中の姿に、超は小さく嘆息した。

だが、画面はきちんと残っており超の力作はちゃんと流れていた。

このためだけにわざわざ犬神に金払ってスタッフを集めてもらったかいたがあつたというものだ！ と、超はちよつとだけ得意げな顔をしながら監視カメラで胸の映像をクローズアップ。

そして、

『おめでとうございます！』

「……………」

この映像を撮影した時は別件の仕事でいなかったはずのクラレンスがトリを務めて映像が終わるのを見て、超と葉加瀬の二人は思わず沈黙した後、

「……………あつ!! 超さん! ここにも! この映像にまで映っています!!」

「ちよ、魔法世界のモブにまぎれてるじゃないか!! どうやって割り出したネ!!」

「ぬああ!! 全滅、全滅です超さん!! あの人が映っていない映像が一つもありません!!」

「ひいつ!!」

ネタとして取って置いたすべての映像にクラレンスが映っていることを発見し、ちよつとだけあの老紳士が怖くなった超だった。

37話・魔法少女(?) になってよ!!

『僕と契約して魔法少女になってよ?』

「くどい! ならないと言っているでしょう!?!」

魔力だまりにて無数の閃光がひらめく中、その閃光よりも早く激突する二つの影が戦っていた。

“ひとつは胡散臭い目と口と耳を装備している《QB》田中。その体からはどこことな
く胡散臭い悪役チックな空気が流れだしている。”

“もう一人は長大な野太刀を構え斬りかかる妙齢の美女——葛葉刀子。こう見えて
バツイチである。”

「何ですかこの余計なこと言っているテロップは!?!」

『願いから産まれるのが魔法少女だとすれば、謎テロップは呪いから産まれた存在なん
だ』

「そんな物騒なものなんですかこれ!?!」

空中に浮かぶ青い枠で囲まれた文字群に激怒する刀子に、意味不明なことをいうQB
田中。

しかし、二人の手が止まることは一切ない。

岩をも断ち切る剣戟で刀子が切りかかれれば、QB田中は鋼の手で応戦。断ち切られるか断ち切られないかというぎりぎりの力加減で、斜めに構えた腕の上に刀を滑らせその斬撃を受け流し、

気を雷に変換した斬撃を刀子が飛ばせば、近くにいたノーマル田中を投げつけ雷にぶつけ相殺する！

「つて、仲間じゃないんですか!?!」

『もちろん、無駄な犠牲だったら止めただろうさ。でも今回、田中の脱落には、大きな意味があったからね』

「つくづく腐つてますね!?!」

〃このQB田中のOSはネームド田中の中でも屈指の外道っぷりを発揮するようインプットされています」

「そしていらぬですよこの無駄解説!?!」

どちらにしろ斬りますし。と刀子は刀を構え再び一気呵成に斬りかかる。

先ほどの攻撃から、やはりこの田中もほかの田中と同じように主要部分は機械でできている、と刀子は考察する。なぜなら、刀子の雷の斬撃を彼はよけるでも受け流すでもなく、味方を投げつけての相殺によって回避したからだ。

おそらく直撃どころか、かすることすら危ぶまれるのだろう。何せ相手は、

「機械なんですから!」

機械……それも精密機械の塊であるロボットは、いくら魔法で動いているといつても必ずどこかで電気的処理を行っている。

それに高圧の雷撃に匹敵する刀子の雷鳴剣を叩き込めれば、このロボットは必ず落ちる!

先ほどまでの闘いから、素早くそう判断した刀子は、瞬動によつて瞬時にQB田中の背後にまわり、

『なっ!』

「沈みなさい」

背後からの斬撃。QB田中は反応が遅れ防御が間に合わない。

つまりのその胴はガラ空き。刀子はそこに、

「雷鳴剣!」

稲妻をまとつた斬撃を叩き込んだ!

『っ——』

悲鳴も上げられず、体にめり込んだ刀の切っ先から膨大な電流を流しこまれ打ち震えるQB田中。それはしばらく抵抗するかのようになり刀子に手を伸ばそうとしたが、

「ふん」

刀子が剣を引き抜き、斬岩剣によって手を切り飛ばすことにより無力化される。
そして、

『まったく……ひどいことをするね』

最後にQB田中はそれだけを絞り出して、倒れ沈黙した。

「く、苦しい戦いでした……」

主に精神的に……。と、刀子は思わず嘆息をもらしながら刀を鞘に納める。

主戦力をつぶしたからには、再び生徒たちの援護に戻らないといけない。だが、今だけは少しだけ休みたい気分だと彼女は思った。

「まったく……悪ふざけにもほどがありますよ」

それとも、祭りならばあのくらいのテンションでいなければいけないのでしょうか？
と、ちよつとだけ若い超のテンションについていけないかと、刀子が苦笑を浮かべる。

そして、

「ま、まちなさい！ 落ち着きなさい私！！ 大丈夫、私だってまだまだ十分若いはずですよ！！」

脳裏をかすめた「年には勝てない……」という言葉在必死に否定しながら、刀子は勢

い良く首を振る。その時だった、

彼女がそれを目撃したのは。

「っ!?!」

突如街に落ちる影からにじみ出るように出現した、無数のQB田中の姿を!

『『『無駄な事だつて知ってるくせに。懲りないんだなあ、君も。代わりはいくらでもあるけど、無意味に潰されるのは困るんだよね。勿体ないじゃないか』』』

「なん……ですかこれは!?!」

突如出現した異常事態に、刀子が思わず固まる中、突如出現したQB田中は、

『『『まったたく、後処理するこつちの身にもなつてくれよ』』』

「なっ!?!」

突如、倒れ伏したQB田中に群がりその体を分割解体——その後、むしゃむしゃと食べ始めた。

そのあまりの光景に、刀子どころか戦場の空気が一瞬固まる。

そんな中、平然と仲間を食べ終え、

『『『きゅっぶい』』』

と光景に似合わないかわいらしい声を上げるQB田中達の頭上に謎テロップが出現した。

“このQB田中達は特別な訓練を行った後、専門家の指導のもと共食いを行っています”

「どんな専門家!？」

後ろに本物がいるような気がしてならないテロップの文字に学生たちは戦慄するが、特にアニメをたしなまない刀子は素直にツツコミを入れた。

だが、そんな余裕がある光景はここまでだ。

『『『さて——僕と契約して魔法熟女になってよ!!』』』』

「っ——!!」

怒りの沸点を一気に越えかける刀子だったが、ここでキレるわけにはいかないと必死に自らを抑え込む。

なぜなら、このQB田中の実力は単体でならはるかに刀子に及ばないものの、数がそろったというのならかなりの脅威になるくらいあったからだ。

現在出現しているQB田中の数は約20。数の暴力で押し込まれば、さすがの刀子もかなり危険な数。おまけに彼らの頭上には、

“このQB田中達はミサカネットワーク（本当は普通の電磁ネットワーク）によってつながっています、とミサカ10345号は、なんでこんなめんどくさいことをしないといけないんだ？ という内心を必死に押し隠し仕事に邁進します”

「故にこのQB田中達はすべての感覚を共有し、あらゆるフォーメーション攻撃、20体によるすきのない視覚、同時ジェットストリームアタックが可能です。と、ミサカは12387号はミサカにはない機能の数に驚愕をしつつ仕事を遂行します」

と、わけのわからないテロップが出ていて、

「つまり——あなたたちは初めからそうやって——徒党を組んで戦うようにできていたんですね!!」

こうなると厄介どころの騒ぎではなくなる。たとえ刀子が彼らの弱点である稲妻の剣を振るえるといっても、それはあくまで単体攻撃。

「ここで広域範囲を砲撃する決戦奥義を使えばあるいは?」ということも考えられるが、それをしてしまうと周囲にいる生徒たちを巻き込んでしまう。

「やるしか……ないんですね」

だから刀子は覚悟を決め、刀を構えた。

行うことはいったって単純。広範囲攻撃を使わずに、QB田中を一体ずつ斬り捨てる。

今の刀子にそれ以外の手段はとれない。だから刀子は必死にタイミングをはかった。

一瞬の隙が敗北につながる。彼女はそれを理解していたから、剣士としての感覚を、鋭く、細く……鋭敏に研ぎ澄ましていき、まずは一体、確実に屠れるタイミングを計り、

『僕と契約して魔法少女……魔熟女になってよ。ぶっ』

聞き覚えのある声とともに、

『『『うわあああああああああああああああああ!?!?』』』』

QB田中達が吹き飛ばされる音と、逆巻く暴風の音が聞こえてきて、

「え?」

刀子は思わず目を開く。

そしてそこにいたのは、

「よう、葛葉——危なかつたな」

突風の障壁を展開し、刀子を守ってくれた人物がいた。口元にくわえた煙草から紫煙をくすぶらせながら立つ男は、漆黒のスーツとグラスンをかけた渋い男性——それは、

「か、神多羅木先生!」

「立てるか?」

「っ!? そ、そこまで世話を焼いていただかなくて結構です!」

「そうか? それはすまない」

いつの間にかへたり込んでいた自分の姿を指摘され、成人としては結構恥ずかしかった刀子は照れ隠しに怒鳴りながら、あわてて立ち上がり足などについた土を払う。

そんな刀子の態度に神多羅木は苦笑を浮かべつつ、風の防壁の向こうでこちらを睨みつけているQB田中達を見つめる。

「さて、いろいろめんどくさそうだが……他の場所も心配だ。さっさと片付けるぞ」「言われなくても!」

そして、神多羅木がフィンガースナップの構えとすると同時に、刀子もしつかりと自身の刀を構えなおし、その切っ先をQB田中達に向けた。

VI追撃戦や、学園防衛のときはよくこの二人はペアとなつて戦っていた。

近距離戦闘のエキスパートである刀子と、無詠唱風魔法の達人である神多羅木は戦闘における相性非常に高く、二人でペアを組めばタカミチにすら引けを取らない戦果をあげることにすらある——麻帆良裏の名物コンビの一つ（ちなみに名物コンビはいくつかあるがその中には『ジョニー&レイジー』がいたりするのでその色物性は推して知るべし）。

いつも背中を預けている温かみを感じ、刀子が内心で感じていた先ほどまでの悲壮感はどこかへ消えてしまっていた。

神多羅木と一緒になら、どのような状況でも切り抜けられる。今までの経験から刀子はそう確信している。

「ちくしょー!! 何だあのグラヒゲっ!! かつこいいじゃねーか!!」

「カッブル気取りかチクショー!! いいなあ、ヒーローユニット本気でいいなあ!!」

「に、憎しみで人を殺せたら……」

「かわれ! 刀子女史の隣、代わってくれ!! お願いします、土下座でも何でもしますから!!」

「……」

な、なんだか周りが騒がしい気がします……カップルとかそういうのではありませんよ!! あくまで仕事仲間としてベストなパートナーというだけであって、恋愛感情とかそういうのは、

「? どうした刀子? 顔が赤いぞ?」

「え? な、なんでもありません!」

そんな風に周りの生徒たちにおおられ若干混乱する刀子に首をかしげながら、神多羅木は後ろを振り返りこちらにヤジを飛ばす生徒たちに一言。

「悪いな餓鬼ども。刀子の隣は大人の特権だ。もう少しでかくなつてから出直すんだな」

「「ちくしよおおおおおおお!!」」

「ちよ!! 何言っているんですか神多羅木先生!」

「なに、学園祭だ。このくらいノリでいかないな。それにお前、また彼氏に逃げられたんだって? 二日目に大分荒れていたとシスター・シャークティーから聞いたぞ? だったら今恋愛話はご法度だろ?」

「ぐう……。あ、ありがとうございます……」

細やかな気づかひもできるし、仕事仲間としては文句ないですし、性格はマイペース
 だけど誠実だし。ほんと……。何で結婚しないんでしょねこの人は。と、刀子は内心首
 をかしげながら、突風の壁が解除されると同時に、

「斬岩剣!!」

『!!!』

一刀のもと、QB田中の一体を切り捨てる。

他のQB田中達もあわてて応戦しようとするが、

「遅い」

刀子に襲いかかろうとしたQB田中達は後方に控える神多羅木からの正確無比な風
 の斬撃による援護攻撃によって見事に両断された。その間にも刀子はすでに別のQB
 田中へと向かっており、剣を受け止めようとしたQB田中に、

「雷鳴剣!」

『!!』

稲妻の切っ先をぶつけ雷を流し込み沈黙させる。

「頼もしいな」

「どっちがですか?」

れる」

「仕様です。それに一応(???)にしておきました」

「三ヶタの時点であまり気を使ってくれてくれている気がしないんだが……」

”

テロップはどこか不満げな様子で沈黙を現す表示をした後、

「龍宮真名(7?) 狙撃ング」

「怒ったのか!? 自分の仕事にケチつけられて怒ったのか!？」

本気で謝るから表示元に戻してくれ!! と、龍宮は小さく懇願しながら狙撃銃を構え、前線を切り開く女剣士に照準をあてる。

「悪く思わないでくれよ葛葉先生。これも仕事でね」

いい思い出作りができそうなじれたい友人以上恋人未満の二人に詫びを入れつつ、龍宮は銃の引き金を引く。

銃に走る火薬が爆発したときの衝撃。長年の経験からその感触に狙撃の成功を確信した龍宮。だがしかし、その視線を外すことは決してなかった。

狙撃は成功するまでが攻撃だ。特に相手は飛び道具が通用しないと豪語する神鳴流。最後まで油断はできない。

だがしかし、神多羅木が来たことで優位な立場に立てたこともあり、高揚しているの

か刀子が狙撃に気付いた様子はない。

いけるか? 龍宮がニヒルに笑いながらそう漏らしかけた時だった。

パン! という軽いおとともに、何か側面から龍宮の弾丸を打ち抜いた!

「っ!?!」

驚く龍宮に視界の中で、弾丸がその効果——時間跳躍減少を発動し、不発のまま消える。

一体何が起こった!?! と驚く龍宮。その時だった。長との連絡用に耳につけていた

インカム。

『こんにちは、アルカナ』

「なっ!?!」

懐かしい声が響き渡った。

この声は、間違いない……あの人だ!!

それを確信したとたん、龍宮の体に鳥肌が走る。だが、それは恐怖によるものではない、

「やはり……あなたがそうだったんですね? モモ先生」

彼女が抱いた途方もない、歓喜によるもの!!

『違うわ、アルカナ……今の私は13番よ』
サードティーン

麻帆良の舞台裏のさらに奥にて、最強とうたわれた狙撃手が姿を見せた。

38話・眠り姫だな、ガン〇〇

とある麻帆良学園都市の裏路地にて、

「くっ……」

ガンドルフィーニは魔法先生のなかで初めての敗戦、逃走をしまっていた。

だが彼を責めることはできない。何しろ彼が相手をしているのは、超が作ったネームド田中のなかでトップスリーの性能を誇る田中。

その名も、

『私の名は、グラハム・エーカー』

「!?」

『君の存在に心奪われた男だ!!』

相手の素敵に引つ掛かってしまったのか、再び目の前に姿を現す鬼面の田中。ガンドルフィーニはそんな彼の支離滅裂な言葉に舌打ちをもらしながら、

「くるなら……いっつ!!」

迎撃の体制をとった!

敵が片手に出現させた銃を構えこちらの額をカーソルしてくる。

当然食らうわけにはいかない。こちらも片手に持った銃の銃口を向けその攻撃に応戦する。

『人呼んで——グラムスペシャル!!』

「なめるなあああああああああああ!!」

そして先ほどから苦しめられている信じられない高速変態機動によって、裏路地を縦横無尽に飛び回りながら正確にガンドルフィーニを狙ってくる敵に対して、彼も己の銃とナイフを使い次々と弾丸を迎撃し、発動し、次々に空間を飲み込む漆黒の時間転移魔法をかううじてよける。

このようなやり取りをしてもう何時間経つただろうか……。と、ただでさえ集中力を必要とする敵と戦っていたため、擦り切れ始めた神経を感じながらガンドルフィーニは思わずそう考えた。

この敵に対して神経がすり減るのは、何も彼の高速駆動についていくためだけではない。

そう、理由はそれのほかにも、

『身持ちが堅いな、ガンダム!!』

「……気持ち悪いことを言うんじゃない!!」

先ほどからこの田中が告げる意味不明な言葉が原因だった。

「大体誰なんだこのセリフを言っているのは!? 思いっきり男の声だぞ! それに私は既婚者だぞ?!」

「A:人呼んで……グラハム・エーカー!!」

「鬱陶しいわ!!」

突然空中に現れた青枠のテロップを怒声交じりの銃撃でかち割るガンドルフィーニ。普段の彼なら決して見せない、戦いでは致命的なスキなのだが、どうやらそんな事がないならなくらいに怒り狂っているらしい。

「くそっ……。なんで私がこんな奴と戦わねばならんだ」

家で待つてくれている妻と娘の顔を思い出しながら、早急にこの変態田中から離れたいと願うガンドル。だが、

『軍人に戦いの意味を問うとは、ナンセンスだなあっ!!』

「……」

ブチイッ!! とガンドルフィーニの中で何かが切れる。

「お前が言うなあああああああああああああああああ!!」

怒りのあまり体内の魔力を全力放出するガンドルフィーニ。後先考えていない冷静な彼らしくない光景だが、暴走状態の魔法使いは限界を超え大幅な実力の拡張が行われる。

その際ちよつと魔力が金色になったり、放出された魔力が炎のようにみえたりしたので、

「すわっ!!? ガンドルフィーニがスーパーサイ○人に!?”と勘違いされ、学園祭終了後彼は小学生たちに「やっつてやっつて! スーパーサ○ヤ人やっつて!!!”せがまれることになるが、今の彼は関係ない。

ガンドルフィーニは拡張された魔力によって、身体強化を究極になるまで施し、

「しねッ!!」

『っ!?!』

瞬動をはるかに超える速度でグラハム田中に襲いかかる!

しかし敵もさる者。その高速の攻撃に見事反応したグラハム田中は、

『好意を抱くよ。興味以上の対象だということさっ!!』

「だから気持ち悪いと言っているだろうがああああああああああ!!:」

即座に反応し、腕の中に変形格納されていたブレードを出現させ、ガンドルフィーニのナイフの一撃を受け止める。

しかし、ガンドルフィーニも負けてはいない。ナイフとブレードがぶつかった場所を支点に大きく回転するかのようには身をひるがえしたガンドルフィーニの蹴りが、グラハム田中の後頭部を狙う!

まさしく歴戦の猛者——麻帆良の魔法先生の名にふさわしい鮮やかな攻撃。先ほどの田中なら、決して反応できる速度ではない。

だが、

『そんな道理、私の無理でこじ開ける!!』

「なっ!?!」

田中は突然首をもぎとり、自分の手に抱えることによつてあつさりガンドルフィーニのけりを躲した。

「そんなのありかあああああああ!?!」

『人呼んで、グラハムスペシャル!!』

「頭もいだけだろうがあああああああ!?!」

何やらドヤ顔で偉そうなことを言ってくるグラハム田中に叫ぶガンドルフィーニ。

しかし、田中の猛攻はまだ続く!

『どれほどの性能差であろうと! 今日私は阿修羅すら凌駕する存在だ!!』

「なっ!?!」

頭を再び元の位置に戻したグラハム田中は、片手のブレードとライフルをフルに使い、ガンドルフィーニに間断ない連撃を加え始める!

銃弾がナイフで切られれば接近し、ブレードで切り付け、

猛攻に耐えられなくなったガンドルフィーニが距離をとれば、信じられない連射性能の精密射撃を実現したライフルによって、ハチの巣にする！

「舐めるなああああああああ!!」

しかし、ガンドルフィーニも普段と比べて大幅な実力アップがなされている。グラハム田中の猛攻を受けながらも彼は必死にそれに応戦し、隙を見て自らの魔法や弾丸斬撃を叩き込み続ける。

もはや常人の目では負えないほどの速度で行われる戦闘。

目撃者たちはこの光景を見て、

「いつからおれたちはDBの世界に紛れ込んだんだ?」

と、驚いたようだが、そんなこと知らない二人は自らのしのぎを削りあいながら敵との交戦を続けていく。

『やはり私と君は、運命の赤い糸で結ばれていたようだ! そうだ、私と君は戦う運命にあった!!』

その戦いのさなか、突如何かを言いだしたグラハム田中に舌打ちをもらしながら、

「なにを!」

言っている!? と言いつつ、絶対聞く気がないガンドルフィーニはその顔面に向かって銃弾を叩き込むが。これまたあっさりふせがれてしまう。

『ようやく理解した！ 君の圧倒的な性能に、私は心奪われた！ この気持ち…まさしく愛だ!!』

「あ、愛い!？」

突然の告白に度肝を抜かれるガンドルフィーニ。しかし、そんな告白を無視してグラハム田中は告白を続けた。

『だが愛を超越すれば、それは憎しみとなる！ 行き過ぎた信仰が内紛を誘発するようにな!!』

「今それ関係あるのか!？」

『そうしたのは君だ、ガンダムという存在だ！ だから私は君を倒す。世界などどうでもいい…:己の意思で!』

「このっ!!」

自分のツツコミをあっさり無視して独白を続けるグラハム田中に、ガンドルフィーニは明確な殺意を覚える。

『とくと見るがいい…盟友が造りし、我がマスラオの奥義を!』

だがしかし、次の瞬間に起こったことはその殺意以上にガンドルフィーニに驚きを与えた。

「なっ!？」

突如、グラハム田中の背中から深紅の粒子が飛び散り、彼の体を赤く染め上げたのだ！

『トランザム!!』

そう叫んだ瞬間、グラハム田中の移動速度が残像を残すほどの速度へと変貌する！

「ばかなっ?!? ここにきて……さらに戦力を上げた?!?」

『驚いてくれたようだな——なんとという僥倖！生き恥を晒した甲斐があつたというものだ!!』

グラハム田中の変化はその変色だけではない。武装はどういうわけかブレード一本に変わっておりそれ以外の余計な装備はすでに彼のもとから離れ地面に落下し打ち捨てられている。

『斬り捨て……御免!!』

「くっ?!?」

通常なら遠距離攻撃手段を失った戦力ダウンと取るべき行い。しかし、これほどの速度で斬撃を打ち込めるなら、むしろ対人戦闘での遠距離など彼にとつては敵が眼前にいるのと変わらない。

武装を捨てたことによりさらに体が軽くなった彼は、もはや残像すら残さない速度でガンドルフイーニにきりかかり、

「馬鹿なツ!? 私のナイフがっ!!」

ブレードを受け止めようとガンドルフィーニが構えたナイフごと、彼の体をたたき切る!

「くそっ!」

しかし、ガンドルフィーニはまだあきらめていなかった。斬られる前に身を浅くそらした彼はスーツを着られただけでダメージを免れることに成功し、あわてて予備のナイフを取り出し構えなおす。

だが、

『これが私の望む道——修羅の道だ!!』

「っ!!」

トランザムを使ったグラハム田中は、もはやガンドルフィーニに勝つ機会を与えることすらなかった。

『そうだとも。この戦いは——最早愛を超え、憎しみをも超越し…宿命となった!』

「ぐあああああああああああああああああああ!」

ガンドルフィーニの前進に、深紅の軌跡を描いた神速の斬撃が無数に叩き込まれる。

“ちなみに剣には安心安全に非殺傷設定が組み込まれているのでご安心ください。

あと、技が九頭龍閃に似ているかもしれませんが全く別物ですのであしからず。ミス

気を失ってもまだツツコミを入れてくるガンドルフィーニに『ふむ』と呟き、グラハム田中はその腹部に漆黒の弾丸を押し当てる。

それと同時に発動した時間跳躍魔法がガンドルフィーニの体を包み込み、彼を三時間後の未来へと飛ばした。

そして一人残った田中に、

“さあさあ、ミスターブシドー!! あなたの敵は倒せたのですし、今度は生き残った麻帆良の魔法先生たちを!!”

と、謎テロップが次なる獲物に向かわせるため彼をけしかけようとするが、

『興が乗らん!!』

“へ?”

グラハム田中はそう言い捨てると、どこかに向かつて飛んで行った。

途中ドップラー効果を伴ったグラハム田中の声で、

『ガンダムっ! ガンダムっ!! 私はガンダムっ!! グラハムガンダムっ!! 阿修羅

……スペシャル!!』

と、どこかのニコニコする動画で上がっていたらしいネタが聞こえてきたしたが、

“……”

期待を裏切られた謎テロップとしてはそんなことは意外とどうでもよく、

“ふっ……邪険にあしらわれるとは。ならば君の視線をくぎ付けにする！　みるがいい、盟友が作りし謎テロップの奥義を!!”

と、ちよつとだけ彼のセリフを言ってみたかった謎テロップはこれ幸いとばかりにその文字を表示した後、満足げに消えるのだった。

39話・オール・ハイル・ルルーシュ!!

『弾けろっ……ブリタニア!!』

「御免こうむる!」

真紅にカラーリングされた真紅の田中が、明らかにヤバそうな音を立てる右腕でアイアंकローをかまそうとしてくる。

VIはそれを長年の戦闘経験の勘で「くらったらやばい!」と悟り、瞬時に瞬動。真紅の田中から距離をとり、

「VIインパクト!!」

右手に装填した巨大な気の塊を、腕を振るうことよって射出する!

だが、

『輻射波動!!』

「なん……だど!」

その真紅の田中はそのままVIの気力砲へと手をかざし、右手に機能を立ち上げた!

瞬間、その右手から空気をゆがめる半透明上のエネルギーフィールドが発生し、見事にVIの砲撃を止め切る!

「んなあほな!？」

『負けない……私の、紅蓮式なら!!』

「中に誰か乗ってるんか!？」

中には巨乳の小人でもおるんか!? と、とちよつとだけ攻撃することをためらいつつ VIはわずかに視線を周囲へと走らせる。

そこは阿鼻叫喚の地獄と化していた。

『ニホンポポポポニツポンポン!! 合衆国につぼんぼん!!』

何やらどこかの動画で見たような気がする歌を歌いながら、全力全開で腰を横振りする仮面の田中が乗った多脚戦車を中央に置き、

『四聖剣は偽名に非ず!』

「この剣は安心安全の非殺傷設計となっております」と、謎テロップによる謎の技術設定を伴いながら暴れる四人の剣士型田中。

『許せない、皆の気持ちを踏みにじって……ユーフェミアっ!』

と、なんかパツとしないどこかの組織のリーダーを思わせる声の田中が絶叫して、生徒に振り返りにあつていたり……。

最後のはともかくほかにも何体かいる黒のバイザーをつけた田中たちはほかの田中たちとは一線を画する力を持っており、だんだんと生徒とVIたちによる世界樹防衛戦線

を後ろへと押し込み始めていた!

「なんなんやこいつら!」

「超鈴音がいつていたスペシャルユニットたちだろ!! くるってわかっていたんだ……いまさら慌てる必要はない!!」

「そう言われてもやな……」

おれは集団戦苦手なんやで? と、猫谷にVIは思わずつぶやきながら、苦笑交じりにコブシを構えた。

もとより彼の戦闘スタイルは素手による近接格闘。多人数を相手にした集団戦ではあまり力を発揮しないスタイルだ。

気力砲撃による大規模範囲攻撃ができないわけではないが、あれも師匠やソコソコ魔力が高い魔法使いたちに比べると、いささか攻撃範囲は劣る。

しかも、VIが現在最高威力とするVIインパクトを防ぎきる個体がいるとなると、

「やばいな……守りきれへんぞー!」

VIのその言は、すぐさま現実となり、

「っ!?!」

「なんだ!?!」

VIたちの周りで戦っていた生徒たちに襲い掛かった。

漆黒のバイザー田中たちが銃を構え乱射を開始する。

そして、その弾丸は生徒たちに着弾すると同時に真つ黒な球体に変貌し生徒たちを包み込む！

「あれは!?!」

「なんや!?!」

驚くVIと猫たちの眼前に謎テロップと、リリースからの通信が同時にVIたちにその正体を教える。

「あれは失格弾——弾丸が着弾した生徒を法律上ルールの死亡扱いとし、強制的に失格部屋へと叩き込みます」

『さつき、脱落間際のタカミチさんから連絡入ったわよアンタたち。その弾丸の正体は時間跳躍弾。くらわないでね？ 喰らったら学際が終わる三時間後にタイムスリップ』

「くっ!?! なんてことだ……ここにきてさらに奥の手を切るのか!?!」

苦手な戦場。くらえば即失格の弾丸。押され始めた生徒たち。

そのすべてがVIたちに対して不利な状況を提示してくる。

この場所の世界樹防衛戦線は、通常ならもう持たない——確実な敗戦へと空気の流れが傾き始めていた。

だが、

「はっ……。オモロイやないか」

そんな状況にもかかわらず、VIは不敵な笑みを浮かべた。

「VI?」

「コースケ。大規模破壊用の上級呪文や。いけるな?」

「あ、ああ!! だが、周囲を巻き込まない破壊となると、『燃える天空』ではない、まだ慣れていない重力魔法での上級呪文になるし、詠唱も長く」

「かまわへん」

不確定要素を不安そうに述べる猫谷を、VIは笑いながら一蹴する。

「俺を誰やと思てんねん?」

瞬間、VIは勢いよく地面を踏みつけ、

「喀っ!!」

『!!!』

震脚による衝撃と路面破壊。そして、裂帛の気合いによつて発動された衝撃によつて、強制的に田中たちのセンサーをマヒ。その行動を一時的に中断させる。

「お前ら……下がれ」

「なっ! だが六重……」

そして、彼はそれによって何とか田中の猛攻から逃れることができた学生たちに、後ろ下がるように親指を立てながら示す。

当然、共に戦つてきた生徒たちは抗議の声を上げた。

VIの独壇場になることを——ではない。

あれほど強力な田中全てを、VI一人が引き受けるということ悟つたが故の、警告交じりの抗議。

一人では、絶対どうにもならないと。

だが、

「おいおい、みくびんなやお前ら」

VIは笑つた。

「俺は麻帆良最強——」

になる予定の男……。と、ボソリと付けたしながら、VIは笑う。

「大怪盗——スパルタンVIやで？」

瞬間、戦車の上に載つていた仮面の田中が哄笑を上げた。

『ふははははははははは!! 愚かな——戦術が戦略に勝てるものか!!』

そんな田中のセリフに、

「おいおい、お前——」

縫い付けられ、気を失っている姫と、

「あなたが遅いから——姫様、負けちゃったじゃない」

それをなしたと思われる、ゆびの間にナイフを挟み込んだ黒く長い髪を持った美女が、凶悪に笑いながら待ち構えていた。

「あつ……」

なんだ？ と、ネギは思わず絶句する。

先ほどまで一緒にいた姫が。麻帆良祭と一緒に楽しんでた姫が。綿あめを食べてそのおいしさに絶句していた姫が——ネギの脳裏に浮かんで消え、

「何をしている」

「ん？ なにつて？」

戦争だけど？ と、美女が答える前にネギは瞬動を使い飛び出す、

「ヒメちゃんに——何をしているんだあああああああああ!!」

許さない！ 久しぶりに怒りに染め上げられた思考の中で、はつきりと相手に対する殺意を抱きながら魔力を放出するネギ。

敵はその魔力にわずかに顔をゆがめつつも、

「残念。計算通りよ？」

「っ!？」

まるでそれを待ち構えていたといわんばかりに、右手をふるう。

はさまれていたナイフにはすべて気が通っており、鉄すら裁断する切れ味を誇っている。

喰らえば命はない。ネギの冷静な部分がそう判断を下し、彼の前進から冷や汗を噴出させた瞬間、

「ネギ坊主!」

クリーム色の布の槍が、そのナイフたちを迎撃しネギを刻む軌道上から弾き飛ばした

!

「っ!」

驚く女性の眼前には、褐色の肌をした小柄な女子生徒——古菲。そして、

「落ち着くでござるネギ坊主。致命傷は避けられている。多少血の気はひいてござるが

——命に別状はない」

姫を救出し、分身に預け木乃香のもとへと送らせた楓がいた。

「それにこの女はきちんと超殿から言い含められているはずでござるよ。殺しは厳禁——

——と」

「ふん。そうよ。いい囨になると思ったからやっただけで、本当ならあそこまでやる必要はないのよ」

女に殺されかけ、一周回って冷静になったネギの耳には、先ほどの鬼気迫る声ではない、若干疲れがにじみ出た女のあつげらかなとしたため息交じりの肯定だった。

え？ なに？ なんてこんな空気激変してるんですか!？ と、ちよつとだけその変化についていけないネギが目を白黒させているうちに事態は進む。

「まあ、登場は何事もインパクトっていうし？ 依頼主が言うにはその子供だけが依頼主に勝てるやつだっていう話だし？ ここはちよつと無理してでも止めた方がいいかなって思つて、姫様痛めつけちゃったんだけど——」

なんでかな……。さっきからジルドレに斬られた傷がうずくのよね……。と、ちよつとだけ後悔したような顔で独白する女をしり目に、楓と古菲は背後にかばう文系連中とネギに告げた。

「いくアル！」

「行くでござる」

「で、でも!!」

あんな凶悪な人、任せるわけには——！ と、ネギは教師としての責務を果たそうとするが、

「ネギ坊主——大局を見失つてはいけないでござる」

「超のことよろしく頼む——ネギ坊主にはそういつたはずアル！」

っ——！ と、二人の生徒に諭されたネギは、思わず息を飲み、

「必ず——勝つてください」

「当然！」

力強く返事を返してくれた二人を信じ、彼は杖にのり空へと飛び立った。
そして、

「甲賀中忍——長瀬楓」

「古家、第126代目が娘——古菲アル」

「暗殺者には名乗の習慣がないんだけど」

依頼人からは盛り上げろって言われているしね。と、幹部ユニットと英雄ユニットの戦いを映すためにやってきた、超お手製の宙を飛ぶカメラに気付いた女はため息交じりに肩をすくめながら名乗りを上げる。

「《元・帝国》所属。最高の暗殺者《S Mブラザーズ》の妹——ノゾミよ」

マゾミって言ったたら殺すからそのつもりで。と、最後にそうつぶやきながら、

「シっ!!」

「吧っ!!」

楓が投げってきた手裏剣を投げナイフによって弾き飛ばし、その隙に接近してきた古菲に強烈なけりを叩き込み吹き飛ばす。

自身の体に宿る気を全力で放出し、瞬間的に漆黒田中諸共四体の田中を弾き飛ばし、
「回天!!」

『『『なっ!? バカなっ!? 貴様は恐れを知らんのか(いろいろな意味で)!!』』』』』

某忍者漫画の絶対防御風に体を高速回転。さらにその田中たちを弾き飛ばし、

「VI——万烈拳!!」

『『『ぐう!?!』』』』

VIがその後隊と戦っているうちに、後ろに下がり再び陣形を立て直している生徒たちや、詠唱を続けている猫谷に襲い掛かろうとした田中たちに向かい、鋭い気弾の弾幕を張る。

『ニッポンニッポンニッポン!! なかなかやるな! ニッポンポン!!』

「なあ、思うんだがああ、の機体だけ絶対壊れてないか!」

「あほコースケ! そんなツツコミしてる暇があるんやったらさっさと呪文おわらせえ!!」

いまだに戦車の上で踊りを止めることがない仮面田中に、猫谷の絶叫がぶつけられるが、一応劣勢のVIはそんなことにかまっている余裕はない。

啖呵きるんはかつこよくいけたんやけど……やっぱりちよつと無理あつたかいな?

と、VIは今の状態にわずかながらに彼らしくもない後悔の念を浮かべた。

この四聖剣とそのリーダー。紅蓮式式に比べるといささかスペックは劣るが、それでもこれだけの数がそろえば十分VIと渡り合える性能だ。しかも、リーダー機によって出される指示は常理的確なうえに、変幻自在の連携攻撃まで取ってくる始末。

この上なくVIにとっては戦いにくい相手だ。

それに、

『紅蓮を、なめるな!!』

「なめてへんやろうが!!」

その攻撃が終わった瞬間、後詰めとして襲い掛かってくるこの真紅の機体に至ってはVIにはやや劣るとはいえ、チームプレイの連携交じりとなるとVIに匹敵する戦闘能力を発揮していた。

そしてその強さを支える要因は、

『扇！ 次はB4に移動！ 紅蓮を全力で援護射撃!! タスケテータスケテテ!!』

『了解した!』

地味に指示を出しているあの仮面田中のせいだ。あの田中——ふざけたダンスだけをしているように見え、地味に先ほどから細やかな指示を出してバイザー田中たちの統制をとっている。

その指示の一つ一つが、VIのすきや油断をつくる確かついやらしいものばかりでっ!!

「ああ……鬱陶しいわああああああ!!」

斜め後ろから放たれる時間跳躍弾の連続攻撃を虚空瞬動で何とかかわしたVIは、天へと上り、

「潰れろっ!!」

『っ!?!』

後方で指揮を執っている仮面田中に向かい、気が装填された左手をふるおうとして、

『おはようございしました』

「っ!?!」

天から降り注ぐ、オレンジ色の塊に押しつぶされた!

「なっ……オレンジい!?!」

『オレンジじゃないんです……ゼロおおおおおお!!』

それはオレンジ色の球体装甲に身を包んだ、巨大な田中!!

『受けよ忠義の嵐!!』

「くっ!!」

上方からの落下打撃により、VIを見事地面にたたきつけたその機体はさらに追い打ちをかけるべく、高速回転しながら地面に倒れ伏したVIに襲い掛かる。

『記憶せよ、ジェレミア・ゴッドバルドを! お前に敗北をもたらした、記念すべき男の

名だ!!』

「残念やけど——」

すでに先約が入ってんねん!! と、VIはその攻撃はすでに予想していたVIは、今度は腕に装填していた気を放出。足の代わりに両手を使った瞬動で、鮮やかに宙を舞い、

「VIインパクトっ!!」

『爆散?!』

その一撃をわりとあさりくらったオレンジ。だがしかし、その機体はいまだに健在。高速回転しながら多脚戦車の前へと降り立ち、

『ゼロお!!』

『ほう、久しぶりですね、まだ軍におられたのですか。しかし、今あなたに関わっている時間はないんですよ、オレンジくん』

『オ、オ、オオオオオオオオレンジだとお?!? 死いねえ!!』

「なかよくせーや!?!」

何かもめだした仮面田中とオレンジ田中に思わずツツコミを入れてしまう。

そして、それがVIの致命的なミス。

『『『『すべては——合衆国ニッポンポンのために!!』』』』』

「っ!?!」

VIがツツコミを入れたすきを突くために、一斉に攻撃を仕掛けてくるバイザー田中たち。

「おいおいおいおい！ なんツ―ことすんねん!! 相手が突っ込みいれてるときは攻撃したらアカンゆう法律ルールを知らんのか!? 変身中のヒーロー攻撃するようなメンタリテイを恥じろ!!」

『ふははははははは！ 撃つていいのは撃たれる覚悟のあるやつだけだ!!』

「お前は撃つてへんやろ!? 撃つてんのバイザー達やんけ!?!」

『そう、そしてそのバイザー達を散々使いつぶしてぼろ雑巾のように捨ててやる!!』

「おい、あいつあんなこと言ってるけど!?!」

『ニツポンポンポンニツポンポン!!』

「きけやつ!?!」

そんなネタ発言は一切考慮された様子はなく、バイザー田中たちは一直線にVIに向かって襲い掛かってくる。

だが、猫谷の詠唱はまだ続いている。

VIはあと少しだけ、時間を稼がなくてはならない。

だから、

「はっ……。これは今度犬神君と戦うときのために取ってきたやつやけどな……」

いのよね……」といって、愛用していた銃と全く同じものだ。

おそらく13番サーティーンもこれを使っている。龍宮が持つ狙撃手独特の直感が、そのことをはつきりと教えてくれていた。

だがしかし、13番サーティーンはアルカナが弾丸を一発装填する間に三度——アルカナと同じ銃を使い弾丸を放った。

それは、アルカナと13番サーティーンの間には筆舌に尽くしがたい絶対的な実力の壁があることが示している。

だが、

「負けるわけにはいかないんだよ」

ニヒルでクールな笑みを浮かべながら、アルカナはそれでも銃を構える。

この機会を逃せば、彼女はもう二度と13番サーティーンとして自分の前に現れることはないだろう。

彼女の弟子として、彼女の友人として、彼女の恋敵として——長年彼女を追い続けていたアルカナだからわかる、そのことにほぞをかみながら、

「負けるわけには……いかないんだよっ!!」

アルカナは物陰から飛び出し、銃を構え、

引き金を、引く!!

く躲しながら、

「ほい」

『っ!?!』

再び襲いかかってきたバイザー田中を、VIは瞬時に打撃する!!

「犬神君はリアルな格闘技の境地を見せてくれよったけど……。それやったらおれはフィクションの格闘技の境地を見せなあかんよな?」

何せ俺はあいつのライバルなわけやし? とうそぶきながら、VIはひたすら打撃する。

紅蓮式式を、四聖剣を、さえないリーダー機を、オレンジを、見えないほどの速度で打撃する!!

合掌から、伸び上がるように放たれる一切無駄のない拳打。あらゆる筋肉の動きから無駄がそぎ落とされ、ただ敵を打撃するためだけの一撃! 犬神に敗北したときから——いや。ムンドゥス・マギクス魔法世界から旅立つ際に、師匠と行った模擬戦で敗北してしまい、師匠に気持ち良く見送りさせてあげられなかった時から、鍛え上げられた一撃。

あるマンガから得た修行法をつづけ、最近ようやく10発に一回は音を引き裂けるようになり始めたそれは、この戦闘によってようやく形となり実を結ぶ。

背後には無数の腕を持つ観音像。

もうお分かりだろう。

そう、この技はジャンプ愛好家であるVIが最も格闘技の完成系に近いと評したあの老人の技。

たとえ犬神であろうとも、そうやすやすと複製できないであろう長年の研鑽がものという必殺技！

その名も！！

「百式観音！！」

原作通り念能力ではないため観音自体は動かない。単なるこけおどしではあるが、こういう技は気分が大事だからと自己完結。

そう思っている間にも、VIの体は無意識のうちに打撃を続ける。

長年、祈りをささげ気で強化されていないコブシで岩を打撃し、祈りの体制に戻り、又殴る。

ひたすらそれを続けたVIの体は、もはや対象を殴りつけるに至るまでの動作が反射といつていい速度で身についており、そこには一切のタイムラグも存在しない。

音を引き裂く拳。

音を置き去りにする拳。

そんな速度で放たれる、不可避の強力な拳打の嵐に、田中たちはなすすべもなく吹き

『触るなゲスが。腕立て伏せでもしている!!』

「っ!？」

瞬間、仮面の一部がスライドし田中の瞳を晒す。そこに刻まれるの模様は羽ばたく鳥。

ギアスの模様。

「つて、んなあほなああああ!？」

ええええええええええ!?! と、驚くVIの眼前に謎テロップが出現する。

“この能力を複製するためだけに作られた超様謹製《無駄に洗練された無駄な魔改造シリーズその①》——強制ギアス。彼の瞳には考えられる限りの強制契約の魔法がかかっており、その瞳と目を合わせたものは一度だけ彼の言うことを聞かなければいけません。効果持続時間は30分です!!”

「ふざけんなあああああああ!？」

VIが思わずそう叫ぶもはや手遅れ。彼の体は自分の意志に反して素早く地面に両手をつき、

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

腕立て伏せを開始する。

その姿はもう、隙とかそんな生易しい言葉では言い表せないほど隙だらけで……。

『お前の世界は俺が否定する……』

「くそ……」

先ほど吹き飛ばされた田中たちも、続々と再集結し始めていて、

『消え失せろっ!!』

「くそおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

今のVIにはもう……なすすべはなかった。

「あのさ……僕を忘れていないかな？」

そう。VIには。

『っ!?!』

突然かけられた声に、仮面田中は慌てて振り向くがもう遅い!

「VI……盛大に巻き込むけど、まあ、お前なら大丈夫だろ？」

「え、ちよ!?! まっ……たすっ!?!」

燃える天空に匹敵する、千の雷に匹敵する、重力魔法の最上級呪文の詠唱を終えた猫谷は、すっかり忘れられていた憂さを晴らすごとく、情け容赦なく手に持った杖をふ

るった!

「《飲み干す黒孔》!!」

瞬間、仮面田中の中央に小さな黒い点が生み出され、

『ぐあああああああああああああ!!? ナナリイイイイイイイイイイイイイイイイ!!』

『ルルーシユウウウウウウウウウウウウウウウウ!!』

『ゼロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

多種多様な悲鳴を上げる田中たちを、その黒い点が見る見るうちに吸い込み粉碎していく!

その姿はまさしく小型ブラックホール。その中央では急速圧縮され粉みじんに粉碎された、田中だったものたちが納められていることだろう。

そして、当然それは至近にいたVIまで巻き込みかけて……。

「ちよちよちよちよちよちよ!?! 死ぬ死ぬしぬしぬしぬううううううう!?! コースケ、コースケ!?! もうええんちやう!?! もうええんちやうん!?!」

仮面田中がいなくなったために、ギアスの効果がなくなったVIは、必死といった様子で地面に指を突き立て抉り取り、必死に地面に縋り付いていた。

そんな六重の姿を猫谷は一瞥した後、

「ああ、もうちよつと待て。まだ全部吸い込み切れてないから。あと五分だけ……」

「ふざけんなあああああああああ!? あっ」

瞬間。運悪く、重力に耐えきれなかったVIが継り付いていた地面が地球から剥がれ落ち、VI諸共漆黒の点へと飲み込まれた。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ……」

そんな切ない悲鳴を上げて消えてなくなるVIの姿に、そばで観戦していた麻帆良生徒たちは得体のしれない悪寒を感じたという……。

その後の麻帆良祭期間中、VIを見た者はいない。

そして、この祭りが終わった数日後、どういうわけだか猫谷に麻帆良から金一封が送られていたりするが、それはいろいろな意味で蛇足なので詳しくは書かないでおこう。

40話・不死身。不老不死！ スタンドパワーツ!!

一部のネーム度田中の手によって劣勢に追い込まれている麻帆良ヒーローユニットたち。

そのヒーローユニットの一部である、明日菜と刹那も

「くっ!! 何よ、この敵は!?!」

「斬ってもすぐ復活してくる!?!」

苦戦を強いられているヒーローユニットの一つだった。

『貧弱! 貧弱う!!』

金色の服をまとい、逆立った金髪をひるがえす田中は、そんな明日菜たちをあざ笑いながら、

『WRYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY!!』

そのコブシを明日菜たちに向かって振りかぶる!

「明日菜さん!」

「わかってる!」

刹那と明日菜は今までの戦闘経験から、そのコブシをくらってはいけないことを知っ

ていた。

故に彼女たちはその場を勢いよく飛びずさり、そのコブシの範囲外へと飛び出す！
そして、よけられた田中のコブシはそのまま地面へと叩きつけられ、

「っ!？」

コブシがたたいた場所を中心に、大地を——瞬く間に凍りつかせた！

「気化熱制御による、瞬間氷結能力!!」

「面倒な能力ね」

先ほどのこの攻撃を武器に受けてしまった明日菜は、危うく大剣を自分の腕ごと凍りつかされそうになったことを思い出しほぞをかむ。

そして、

『おれは……人間をやめたぞ、J O J O おおおおお!!』

「ジョジョって誰!？」

先ほどからなぜかこの田中が連呼する摩訶不思議な名前に、明日菜は思わず突っ込みを入れた。

なぜか刹那が盛大に目をそらしている気がするが、些細な問題だと思いたい……。

そんな時だった、

「苦戦しているようだね。明日菜さん、刹那さん」

「っ!?!」

突如響いてきた聞き覚えのある声に、明日菜と刹那は思わず目を見開く。

「あんた!?!」

「超鈴音!?!」

そしてその声が聞こえてきた方向を振り向くと、そこには不敵な笑顔を浮かべた超がたたずんでいて、

「おっと。ここでも私と戦おうとしても無駄だよ。これはホログラムだからネ。攻撃は一切効かない……」

「このっ!! よくもネギいじめてくれたわね!?!」

「天誅天誅!?!」

「つて、相手が痛がらないからつて好き放題殴るのはさすがにやめてくれないか!?!」

サンドバック扱いカ!?! と、割と容赦ない嫌がらせをしてくるクラスメイト達に若干ひきつつ、超はドヤ顔で解説に入る。

「君たちが今戦っている機体こそが、私たちが作り上げた（私は関与していませんよ!?!」

と後ろで葉加瀬の抗議の声が上がった）、最強にして、最終の田中!! その名も《はきけをもよおすほどのじゃーく》ネ!!」

「ちよつと? さつきから思っていたんだけど、なんでそこで幼児発声なのよ……」

かっこ悪いわよ? と、おせっかいな忠告をしてくる明日菜に超はため息交じりに肩をすくめつつ、

「まったく明日菜……。お前が、おまえみたいな馬鹿レンジャーにもちゃんと読めるようにした私の配慮を馬鹿にするの力?」

「ちよ、どういう意味よそれ!? さすがに私だつてこの程度の漢字ぐらい読めるわよ!」
「では、《吐き気を催すほどの邪悪》って書いてみるといいネ」

「見ときなさいよ!」

——吐きけをもよおすほどの牙悪。

「惜しい!!」

「あれ、違った!」

「ちなみに、これが今他の場所を攻めている田中の機体名なんだが……」

そう言って、超が手で示したところには、再び青粋謎テロップが、

“おれがガンダムだ!!”

「間違えたね」

「「どうやったら間違うんだ(のよ)!」」

「こつちが正解ネ」

“阿修羅をも凌駕する存在”

「さて明日菜！ お前にこれが読めるかっ!!」

「……」

「あすなはめをそらした!!」

「ちよつとだけポケモンの技に見えますね」

「《にらみつける》食らった時の反応はむしろこれにしたほうがいいと思うネ」

冷汗をダラダラ流しながら必死に超の追及をかわす明日菜を生温かい目で見つつ、刹那と超の二人は漸く本題に戻る。

「先ほども言ったようにその機体は最強だ。私が持てる技術力のすべてをその機体に注ぎ込んだ。故にその機体のスペックは」

瞬間、今まで超の後ろでおとなしく待機していた田中が突然J O J O立ちでポーズを決める!!

『不死身!!』

『不老不死!!』

『スタンドパワー!!』

「を、完備した機体となっているね!!」

「『そんなの再現できるならもつと他のもの作れたでしょうが!』」

究極の才能の無駄遣いね! と明日菜は思わず絶叫する。

「これに勝つにはそれこそ高畑先生級の実力者でないは無理! だが、その高畑先生はすでに脱落済み。犬神は帝国の暗殺者によって足止めされているし、他の実力者たちも他のネームド田中によって抑えられているね! 援軍は絶対に臨めない!!」

「くっ……」

「君たちは決してこの機体には勝てない!!」

「そんなことっ!!」

やってみないと、わからないでしょ!? 明日菜が自分を奮い立たせるために、そう絶叫しようとしたときだった、

『^{モンキー}猿が人間に追いつけるか——!! お前はこのD I Oにとつてのモンキーなんだよおお

おおおお!!』

「……」

明日菜は一瞬絶句し、

『明日菜ああああああああああああああ!!』

そこだけしつかり自分の名前を叫ぶD I O田中に、

「っ!!」

ブチイツ!! と、盛大な音を響かせながらキレる。

「誰が猿だああああああああ!!? ていうか、なんでそう呼ばれているの知ってん

「いや、ちよつとお得意さまからの依頼の電話だ。ハイ。いつもご利用ありがとうございます。犬神アンダーグラウンドサーチです」

「またあ? これで五回目だよ? 早めに終わらせてね?」

「イヤ、攻撃せえや!」

ち、力を出し切って戦っていた?

「そんな調子でもう六回目やん!? 戦闘やめんの!? 君ら本気で戦う気あるん!?」

塔の頂上で盛大なツツコミを入れるマリーに対し、塔の壁面へと気で両足をはりつかせたたずむ二人は、やれやれといわんばかりに肩をすくめ苦笑いを返す。

「おいおい、マリーちゃん。そりや俺たちは仕事に対してはいつでも真面目だよ。でもさ、俺犬神君の相手をしろとは言われているけど、犬神君を倒せとは言われてないんだよね」

「こちらも同じだ。麻帆良防衛に協力しろとは言われているが、こいつを倒せとは言われていない。むしろこいつ級の戦力をここで貼り付けにしている時点で、今回払われる労働の対価には十分な働きだと思おうが?」

「仕事に対して真面目なんちゃうんかい!」

明らかにめんどくさいといわんばかりの返答を返した二人の顔面に、マリーの豪気功アーティファクトによって固められたハリセンがめり込む。

めがああああああああ!! とサディストあたりは壁面でのた打ち回っているが（何気に高等技能）、犬神の方は豪気功であっさり防いだのか、いつものように眼鏡を吹っ飛ばすだけの結果で終わった。

「何をする安川。正直お前の豪気功最近形になり始めたから、そのツツコミ僕じやなかったら軽く頭がザクロになるクラスの威力は秘めているぞ」

「こわっ!? えっ!? わたしいつの間にそんな成長した設定になってんの!?!」

メタな発言はやめろ……。と、犬神がわずかに呆れた様子で鼻を鳴らし、涙をぼたぼた流しながらも何とか復帰したサディストに視線を戻す。

「まあ、というわけで、今回はお互いの利害も一致したし大人しくこのままバトって時間切れまで待つか」

「そ、そうだね。そっちの方がお互いの為だね。君と戦うのは割と本気で怖いし」

君の恨みかうと後々にされるかわからんし……。と、割と本気で呟いているように聞こえるサディストの肯定。

正直マリ―としては、世界最高の暗殺者にここまで言わせる犬神の方に多大な問題がある気がしてならなかったが、

「いや、でも下でみんなあんな頑張ってるのに……」

「知らんな」

「犬神君だけ、って、はやいつ?! 私抗議一蹴すんの早すぎるよ犬神君!」

「給料分の仕事はしている。そういつたはずだ安川」

「おうふ……」

「そういうやこういうやつやった……。と、いまさらながらに自分のボスの本性に絶望するマリー。」

「ごめん、みんな……。私ではこの鬼畜外道を説得することはできひんわ。と、さめざめと泣きながらマリーは心の中でこの戦いを潜り抜けているクラスメイト達に詫びた。

だが、

『麻帆良祭運営委員会からの重大なお知らせ!! 超鈴音を発見・打倒した方には一万ドルの賞金が授与されます!! なお、これには一般の方——ヒーローユニットの皆さんも参加が可能です!!』

瞬間、時計塔に凄まじい激震が走り、その長大な塔を真つ二つにへし折った。

豪殺居合拳による打撃だ!

「えっ……」

当然その突然の事態に驚いたのはマリーとサディスト。

そして、二人の視線はそのとんでもない事態を引き起こした悪魔へとカーソルされ、「事情が変わった、サディスト」

腕を突き出す。

瞬間、疾走の勢いを保った明日菜がその勢いを利用し、背中に背負うように構えていた大剣を振りぬいた!

D I O 田中を真つ二つにせんと、振り下ろされた大剣。しかし、その剣はつきだされたD I O 田中の腕に阻まれ、

「っ!?!」

その腕を縦に一刀両断! だがしかし、鋼の体で編まれたその腕が生み出す凄まじい抵抗で、その体験はD I O 田中の本体まで届かず腕のひじ辺りまで食い込んだ後完全にその勢いを殺された。

そして、

「それ一体どんな機能なのよっ!?!」

『最高にハイってやつだあああああああ!』

『『最高にハイ』? 変わった名前ね?』

「明日菜さん! それ技名じゃない!?!」

真つ二つに切断された腕の切断面から無数のコードが伸び出し見る見るうちに、反対側の切断面へと癒着。あっさりと元の形状に戻っていく光景を見て、明日菜は思わず舌打ちし、

「っ!?」 しまった……剣が抜けない!!」

そのコード達の拘束によって、微動だにしなくなった大剣に思わず悲鳴を上げる。

『J O J O オ……おれがおまえならいつまでもおれの手に触れていないがね』

「っ!?!」

瞬間、D I O 田中の腕にとらえられていた大剣が、瞬く間に真っ白に染まり始めた。気化熱による瞬間氷結現象。それは、大剣を持つ明日菜すら食らおうと、大剣を見る見るうちに侵食していく。

だが、

「かかったわねアホが!!」

『なにっ!?!』

「明日菜さんそれ死亡フラグ!?!」

アスナのあんまりなせりふに丁寧なツッコミを入れつつも、いつの間にか姿を消していた刹那が天空から飛来し一直線にその刀を振り下ろす!

その背中には純白に羽。それによって、人に不自由を強いるはずの天空であるにもかかわらず、刹那はまるで鳥のような爆発的な加速を得て、矢のように一直線にD I O 田中に襲い掛かる!!

アスナの大剣をとらえているせいで今度はD I O 田中の動きが阻害される!

そして、

『ザ・ワールド
《世界》!!』

ッバ

ンツ

——という効果音謎テロップを背後に従えたD I O 田中の胸に輝く、学園祭期間中しこたまお世話になった見覚えのある時計が埋め込まれているのを見て、二人の絶望の予感——確信へと変わった。

4 1 話・そして、時は動き出す

もうそろそろ割り出しかけているわね……。と、モモこと13番は、だんだん狙いが正確になり始めたアルカナの狙撃に舌をまいた。

風を切り裂き飛来する弾丸。その一撃は彼女がいるとある建物の屋上から、5メートル右にそれ、その隣にあつた建物を直撃。無駄な時間跳躍の繭を形成した後すぐに消える。

「さっきまでは10メートル単位だったのに、一気に距離を縮めてきたね」

さすがは私の教え子。13番はそう言つて嬉しげに笑いながら、ある札が巻かれた銃弾を数発、装填する。

それは、一枚数十万する転移魔法符。本来なら人間を違う空間へ瞬間移動させるものだが、

「私の札は特別製よ、アルカナ」

そう告げ、13番はライフルのスコープを覗き込み、自分が持っている銃と同じ銃を油断なく構え、こちらに向かつて狙いを修正してこようとしているアルカナをターゲット。

だが、

『残念……外れよアルカナ』

!?!

ハッキングされ乗っ取られたアルカナのインカムから、信じられない13番の言葉が漏れ出し、

「しまっ!?!」

突如、空間に描き出された魔法陣から吐き出された弾丸たちを見て、アルカナは自分の失態を悟る。

「転移魔法符を使った全方位狙撃!?!」

『ご名答。さすがに実際に見てそれに気づけないほど馬鹿じゃなかったみたいね』

古菲の拳打すら避けきった動体視力を駆使し、何とか雨のように降り注ぐ無数の転移弾丸を躲すアルカナ。その視界の端で、転移弾の流れ弾が先ほど射出した時間転移弾を打ち抜き爆散させるのをとらえながら、アルカナはインカムに向かって絶叫する。

「今までの弾丸も全部転移魔法符を使った転移狙撃か!?! 私に狙撃位置を知らせないために!?!」

一枚数十万もするんだぞそれっ!?! と、割と切実に絶叫するアルカナの声に、インカムの向こうの声は苦笑を浮かべる。

『アルカナには教えたはずでしょう？ 私たち狙撃手は、自分の居場所が知られてしまえばおしまいの。だったら、居場所は絶対ばれないように、命をかけて工夫を凝らすべきなのよ』

金を惜しんで、命を危険にさらすなんて言語道断。覚えておきなさい。と、昔のように訓辞を垂れる13番の声に、アルカナは思わず舌打ちをもらし、

『それに、私は今大人だし？ 転移魔法符ぐらい大人買いができるんだよ！』

「私も早く大人になりたいよっ！」

『え？ でもアルカナ……実年齢は』

「年のことは言うな!!」

余計なことをいいかけた13番にくぎを刺しつつ、

「……だが」

『?』

「今の攻撃ではつきりした。あなたの居場所が!!」

『……え!!』

反撃ののろしを上げる！

……†……†………†………†………

場所は移り、麻帆良世界樹防衛戦線。

『ザ・ワールド
世界!!』

そういつて、バ——
——ンツという効果音を背景にジヨジヨ立ち
を決める金色田中に、

「そんなの勝てるかああああああああああああ!!」

「うわっ!!? どうしたの刹那さん!!?」

刹那は思わず理不尽すぎる田中の性能に絶叫する。

「時間停止能力とか……いくらなんでも勝てませんよ!!?」

『ほほう。つまりそれは私に対する敗北宣言ととつていいのだネ?』

「黙れ似非チャイナ!!」

『私だけひどく対応悪くないカ!!』

いい加減なくヨ!! と、ちよつとだけ半泣きになりつつも、超は絶叫した刹那に得意げな顔で説明を始める。

『これぞ私の最高傑作! 無駄に洗練された無駄な魔改造シリーズその②』ザ・ワールド『世界田中』

!! さすがにスタンドの再現までは無理だったが、時間停止能力はすでに実現された技術があたからネ。実験段階のとき使っていた基礎的な時間制御機能がある《カシオペア

(未完)》を、遠慮なく搭載!! 原作D I O級の時間停止能力が発動できるよう、三日三晩かけて徹夜で改造を施した……ん、おや誰か来たようだ?』

「え?」

そういつて、突然ホログラム撮影機の撮影圏外に出て行ったのか、姿を消す超。だがしかし、その音声はしつかり拾われていて、

『どうしたネ、葉加瀬?』

『いえ、ちよつと聞きたいんですけど……本気でカシオペアつんじやつたんですか?』

『当たり前ネ! 私はネタには妥協を許さない女ヨ』

『ええ、それはもう今回の件で腐るほどわかつたんですが、でもおかしいですね? カシオペアつて確か結構貴重な、それこそ試作品であつてもそこそこ重要な作戦に使える、大変重要なアイテムだつたと思うんですけど……。何でそれネタのために投下しちゃつているんですか? ん? みんなで大切に使用していきましようつて、作戦始める前に約束しましたよね?』

『え? あ、えと……それは』

『言い訳はいいんですよ? 正直に答えてください』

『——うう』

『だいじょうぶです。オコリマセンカラ』

『う、嘘ダ!? 絶対今おこてるネ!』

『だから怒っていませんって……。私はただ理由を私にもわかりやすく説明しろって
言っているだけなんですよ超さん』

『——う、うるさいね博士のバーカバーカ!! 男のロマンは博士には一生わからないネ
!!』

『あ、ちょよ、待ちなさい超さん、話はまだ終わってませんよっ!!』

『仲良くしなさいよっ!!』

何やらホログラムの向こうでもめている敵陣営に、思わず突っ込みをりれる明日菜と
刹那。だがしかし、

『おれは「恐怖」を克服することが「生きる」ことだと思う。世界の頂点に立つ者は!ほ
んのちっぽけな「恐怖」をも持たぬ者ツ!』

「くっ!?!」

「来たわねっ!?!」

D I O 田中は止まらない!!

神楽坂明日菜は動かない!!

「きやつ!?!」

いや、動けない!! それは、D I O 田中が、カシオペアの機能を使い、瞬時に時間を

停止。その停止された時間の中で、明日菜を勢いよくなぐりつけたからだ。

「明日菜さん!?!」

戻る時間に、置き去りにされた刹那は突如勢いよく吹っ飛んだ明日菜に、思わず悲鳴を上げる。

そして、こちらを睨みつけつつも悠然とジョジョ立ち態勢で、

『ウゲエエエエエエエエエエ!』

「え!?!」

いや、違った。DIO田中は突如として顔を抑えながら態勢を崩し、もだえ苦しみます。

何があったんだ!?! と、刹那があわててDIO田中を注視すると、DIO田中の顔には、小さな亀裂が入っていた。長年の経験から考えるにその傷はおそらく、強力な鈍器のようなもので一撃された時の傷。

まさか、明日菜さんが!?! と、そんな傷を残せる人物を一人ぐらいしか知らない刹那はあわてて吹き飛んだ明日菜のほうへと視線を送る。

そんな刹那の視線に気づいたのか、明日菜は壁にもたれかかりながらも不敵に笑った。

「な……なんとか、時間が動き出す前に一撃できたみたいね」

それは、明日菜の魔法無効化体質が起こした一種の奇跡のようなものだった。彼女の魔法無効化能力が、時間制御に使われている魔法的要素を一瞬無効化し、DIOの時間停止能力から一瞬だけ明日菜の拘束をのがれさせた。

だが、

『カエルの小便よりも……下衆な！ 下衆な咸卦法なぞをよくも！ よくもこのおれに！ いい気になるなよ！ モンキー!!』

DIO田中はそれぐらいでは倒れない。それどころか明日菜に入れられた亀裂を見る見るうちに修復し、

『WRYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY!!』

ノックアウトされた明日菜にとどめを刺さんと、凄まじい速度で襲いかかる！

だが、

「させない!!」

『っ!』

その進撃は、翼を振わせ凄まじい速度で突っ込んできた刹那の剣戟によつて止められる！

「明日菜さんはやらせない!!」

『………礼儀を知らんものは、生きる価値なしだな!!』

瞬間、刹那の眼前からD I Oがきえる。

「!?」

どこへ行った!? 刹那は慌てて敵を探し、この危機的状況を何とか打開しようとしたが、

「っ!?!」

自分の足元に降り立った影が、だんだんと大きくなっていつているのに気付き愕然とした。

まさかっ!?

いやな予感を覚え、天を仰いだ刹那が見たものは、

『ロードローラーだ!!』

多脚戦車を担ぎ、刹那に向かって振りおろしてくるD I O田中の姿!

「くっ!?! 多脚戦車だろうが!?!」

とっさにそう突っ込みを入れつつ刹那は鞘におさめた状態で腰だめに構え、神鳴流奥義の発動を狙う。

この存在はどれほど強くどれほど再現率が高くとも、所詮は超が作った模造品。この攻撃の後にくるものは、原作を知っている者なら誰でもわかる。

ゆえに刹那は、迷いはしなかった。自分が使える奥義の中で、最も手数が多いあの斬

「そして——時は動き出す」

聞き覚えのある声とともに、突然出現した手に襟首を掴まれ体勢がいつの間にか変わっているという珍妙な体験を刹那はした。

驚いて目を開くと、そこは今まで刹那たちが戦っていた広場ではなく、その広場を見渡せる建物の屋上。

そして、自分の襟首をつかんでいるのは、

「あ……」

「遅くなつてすいません。刹那さん……」

赤毛を翻し、身の丈に合わない長大な節くれだつた杖を持つ、一人の少年。

「ネギ・スプリングフィールド……ただいまより戦線に復帰します」

そして、右手に持つ懐中時計が光り輝き、

『なあつ!?!』

スプリングフィールドザ・ワールド

「英雄 世界!!」

広場の多脚戦車の上にジョジョ立ちしていたD I O 田中に数百近い雷の《魔法の射手》が叩き込まれる。

いかにあの金色の悪の王を模造した田中とはいえ、所詮はただの機械。さすがにあらゆる機械の鬼門である電撃の雨を隙間のある関節部分に間断なく叩きこまれてしまつたら、無事では済まない!

そして、

『WRYYYYYYYYYYYYYYYYYY!』

悲鳴なのか怒声なのかよくわからない悲鳴を上げ、

『YYYYYYYYYYYYYYYYYY……』

沈黙した。

「てめーの敗因は、たったひとつです、D I O。たったひとつの単純な答え……あなたは僕を怒らせた」

生徒を殺されそうになった事実には、ネギはただ静かに怒りに燃えた言葉を黒こげになつて沈黙したD I Oに、背を向けながらぶつけた。

そんなネギの姿に、刹那はしばらくの間放心した後、

「ネギ先生……ノリノリですね」

「だ、だってせっかくD I Oがいたんですよ!? このくらいの特権は許してくれてもいいじゃないですか!？」

どうやらあの奇妙な冒険を知っているらしいネギが必死になって言い訳するのを見つつ、刹那は思わず安堵の息を漏らした。

大げさかもしれませんが……世界は救われたんだッ!! と、おもいながら。

……†……†………†………†………

「あれっ!? まだ終わってないんだガ!？」

と、葉加瀬に正座させられた超が、思わずそうツツコミを入れたことなど知らずに……。

4 2 話・過去の清算

裏路地という狭い空間で、無数の閃光が入り乱れる。

手裏剣型の気弾。気をまとったチャイナ。鋭くとがれた投擲ナイフ。

それらが放つ閃光によって、鮮やかに彩られた裏路地。だがその美しさとは裏腹に、そこはまさしく、

「ぐっ!?!」

「古菲!」

「よそ見をしている暇があるの?」

戦場だった。

再び自分に向かって吹き飛ばされてくる古菲をあわてて受け止めた楓に対し、ノゾミは容赦ない追撃を加えてくる。

《《薄刃蜉蝋》》

「………楓」

「っ!!」

気を失いかけている古菲の警告に、楓は瞬時に反応し虚空瞬動。軽やかに天へと舞い

上がる。

その直後、無音の刃が、二人が今までいた場所を引き裂いた。

「あら、うまくよけたわね」

まずいでござるな……。思った以上にこの御仁……。つよい!! と、余裕あふれる上から目線で、見事に自分の攻撃をよけた楓をほめるノゾミの姿に、楓は思わず冷や汗を流した。

たしかに、世界最高の暗殺者という呼び声はだてではなかったらしい。犬神やVIたちのような派手な攻撃技はないが、姫が何度も使っていた帝国の基礎的気力運用法や、瞬動に使う気の調整。身のこなしや投擲ナイフさばきなど、基礎的な技術の水準が他の戦闘者と比べると、段違いなまでに高い。

そのことからわかることは、

「あなたは……。いったいどれほどの努力をしてきたのでござるか!」

「え? さあ……。帝国に入ってから訓練していない時間以外があまりなかったから、正直どのくらいといわれても形容しようがないわね」

寝る時であつても食事の時であつても、訓練する方法はいくらでもあるんだから。と、ノゾミは告げた。そして、

「それに、私には兄さんみたいな才能がないからね。そのくらいしていかないとおの

い。

だが、その里親はしつこく彼らを追ってきたので、

——殺した。何のためらいも覚えなかったという。今度はノゾミも協力し、近くに落ちていたガラスの破片でその里親をめった切りにしたらしい。

そうして、ことをいたしてしまい、物言わぬ死体に変わった里親の前に途方に暮れた様子で、どうしよう？ うなだれている二人の前に現れたのが、

『死体に……子供？ 死体あさりの類か？』

全身に傷を負ったロングコートをまとうグラサンの巨漢——処刑人ジルドレが通りかかった。

とりあえず金を奪おうと彼に襲い掛かった二人は、割とあっさりジルドレの手によって返り討ちに会い、事情を洗いざらい吐かされた。

『なるほど、クズだな』

そして、事情を聴き終わったジルドレは、ノゾミたちと彼に殺された里親をそう評した後、

『行く場所がないならおれについてくるか？ もつとも、俺がいる場所もお前らと変わらん層の集まりだが』

『？』

『おじさん……いつたどこに連れて行ってくれるの?』

『《帝国》——俺たち、暗殺者たちの暗殺者による暗殺組織だ』

その時、ジルドレは彼らの新しい親となった……だが。

『やあ、ジルドレ! 見て見て! あんたの言うように俺らちゃんと殺したよ?』

『あんたが言うように仕事を選ばず、黙ってこなした。《帝国》のトップ——皇帝を殺し

たよ? だからほら』

ほめてちようだいよ? と、告げた兄弟に帰ってきたのは……殺意が混じった、ジル

ドレの鉄拳だった。

それから数か月後、帝国のクーデターに参加した暗殺者たちを殺して回るジルドレの暗殺依頼が、仲間の暗殺者からだされた。だからノゾミたちは、

……†……†………†………†……

「ジルドレを殺したのよ……」

「っ……」

ノゾミの凄絶な過去に、楓は思わず絶句する。

そんな楓にたいし、ノゾミはどこか壊れた笑みを浮かべながらナイフを構えた。

「わからないでしょう？ あなたたちは、全然私の気持ちが変わらないでしょう？ 私もおんなじよ……。あなたたちのような日向で生きてきた人間の気持ちが変わらない。どうして暗殺者がダメな職業なのかわからない。私たちにとってはもう、人殺しは立派なライフワークよ。それをよりうまくより確実のこなすため、修行を続けることのがいけないことなの？」

言ってみなさい。たぶん理解はできないけど……。と、不気味に笑いながらこちらに近づいてくるノゾミに、楓は動けなかった。

気圧されてしまった。戦う気力が奪い取られてしまっていた。

だってそうだろう？ こんな人の形をした化け物相手に——
「いったい、どうやって戦いを成立させろと……!?!」

超はなんて無茶な依頼をしたのだと楓は思った。この人間に人を殺すな？ 馬鹿な依頼だ……。殺すこと以外でしか問題の解決にしか当たれないこの人物が、そんな言葉を理解しているとは到底思えなかった。

だから楓は動けず、

「いいの？ 死んじやうわよ？」

「!?!」

やすやすと、ノゾミの接近を許してしまう。そして、

「そう、諦めたのね。じゃあ、死になさい？」

「くっ!!」

楓の動体視力ですら認識できないほどの速度で振るわれたナイフが、彼女の頸動脈へと一直線に伸び、

「申し訳ありませんが、人の弟子を勝手に殺すのはやめていただきたい」

「!?!」

楓の視界を、漆黒の燕尾服が覆い隠してくれた。

「あな………たは!?!」

「最近楓殿の稽古をつけることになりました。一応師匠となつたからには、弟子が殺されかけているところを黙ってみているわけにはいきませぬまゐ」

その燕尾服の主は、どこことなく優雅さを感じさせる深い声音で苦笑をうかべ、

「わが師匠——セバス・張に怒られてしまいます」

「セバス・張!? 名にそのパチモン黒執——じつ!？」

瞬間、ノゾミの背後に現れていた燕尾服の主——クラレンスの分身が瞬時に現れ、ノゾミの意識を、首トンの一撃で刈り取る。

首を手刀でたたいて意識を刈り取るあれである……。

いや、あれ、ファンタジー格闘技であつて、実際にやろうと思つたらそれこそ首をもぐほどの腕力が必要などという本末転倒な技なのでござるが。

なんでできんだ……。と、割と真剣に引く楓を振り返り、

「ご無事でしたか、楓殿」

犬神アンダーグラウンドサーチ最後の職員が、ようやく再登場を果たした。

……†……†……†……†……†……†……

アルカナは、自分が見定めた敵がいる場所へと次々と時間跳躍弾を送り込む。

もはや遠慮はしない。出し惜しみもしない。全力全開の、彼女の持てる技術すべてを使った狙撃銃の速射攻撃。

しかし、敵は最強のスナイパー。そんなアルカナの速射にもすぐに反応し針を通すような弾丸送りによって、彼女の速射弾を空中で次々と打ち落とす。

だが、

「その迎撃は、私の考えが正しいことを示しているんだろう——13番!!」

先ほどまでは十発に五発は見逃されていたアルカナの弾丸が、今やそのすべてが迎撃されている。

それはすなわち、アルカナの弾丸が着弾するとまずい位置に、13番がいるということ!!

「あなたがいる位置は、麻帆良初等部の屋上で正しかったんだ!」

『どうして……わかったんですか?』

インカム越しに聞こえてくる声にはまだ感情の乱れは見えない。まだまだ余裕があるということだろう……さすがは私の自慢の師匠だ。と、アルカナは少しだけ誇らしげに笑いながら、引き金を引き、言葉を続ける。

「さっきの転移符を使った転移弾。あの中の一発が私の弾丸を撃ち落としたことですべてがわかったんだ。あなたはプロにして一流の狙撃主だ。そしてプロゆえに、無駄な弾丸は使わない。そんなあなたが、今まで戦い続けて大体の実力がわかった私に対して、確実によけられるとわかっているのに転移弾を送りつけるなんて……らしくない。そこで私は気づいたんだ。あなた他の目的は、私を転移弾で仕留めることではなく、そう見せかけることによって自分に直撃する弾丸を事故に見せかけて排除し、さらに私が撃

13番はスコープの中から突然消失したアルカナの姿に、思わず舌打ちを漏らした。
そして、

「転移符。弾丸用じゃなくて自分用ね！」

「私は若いからな。あなたみたいに大人買いはできない。でも、少ないなら少ないなりに、使いようはあるんだ」

「うそをつきなさいよ……この若作り」

「年のことは言うなといったはずだが!？」

怒声交じりに背後から聞こえてくる声に、振り向くような愚行は侵さなかった。

13番は即座に持っていたライフルを捨て身軽になり、瞬動。その場から瞬時に飛び退く。

そんな彼女の後を追うように、

「相変わらずいい勘をしている！」

漆黒の繭が連続して生み出され、屋上の一角を飲み干した。

撃ち手は——決まっているわね。と、なんとかその眉たちの追撃から逃げ切った13番は、童顔に似合わない獣のような笑みを浮かべながら、弾丸を放った主に目を向ける。

両手にオートマチック銃を握った、懐かしくもあり、別人のように育った驚きもある

——元弟子。アルカナの姿へ、

「ようやく、追いついたぞ」

仮面はもう……かぶっていないんだな。そうやって笑うアルカナ——龍宮真名に、1

3番——十三階百々は答える。

「ええ、教師をするのに、あの仮面は必要ないから」

懐かしむように告げた龍宮の質問に返したのは、もう昔とは違うという決別の言葉。だが、それでも真名は嬉しそうだつた。

長い間……隠れちゃっていたからね。と、そんな真名の姿に百々は思わず苦笑を浮かべた。

……†……†……†……†……†……†……†……†……†……

過去の清算はいつかするべきだつたと百々は思つてはいない。自分みたいな薄汚れた女は、彼女に見つからないまま一生を過ごしていたほうがいいと思つた。だが、今回の事件で自分は真名の担当を学園長に命じられてしまった。

いつたいてうして？ 百々はこの配置を聞いたときは烈火のごとく怒り学園長に食つて掛かつていた。

守つてくれるのではなかったのか？ と、隠し通してくれるのではなかったのか？と。

だが、そんな彼女の叱責に帰ってきたのは、

『百々先生。教師とは生徒を導く立場にいる者のことじゃ。決して、生徒から逃げ回るような人間を、教師とは呼ばん』

学園長からの目が覚めるような痛烈な叱責だった。

『初等部の学生たちから聞いておるぞ？ 君はいつも優しく、いつも頼りになる憧れの先生じゃと。じゃがな、その生徒たちの大半はこうも語っておったのじゃ。自分たちを見てくれてる気がしない……と。まるで遠くにいる誰かの背中をいつも見つめてるようじゃと』

そんな学園長の言葉と、生徒たちの思ったままの言葉に、百々は愕然とした。

『確かに君の過去は重い。わしらにはどうすることもできん。だからわしらは君の存在を隠し、臭いものにふたをするような対応したできんかった。じゃがの、今の麻帆良は違うのじゃ……君の過去を清算できる存在が、確かにこの学園都市には存在しておる』

そして、そんな学園長の発言を聞き真つ先に思い浮かんだのが、

『アル……カナ？』

『……百々先生。これはネギ君と同じように、わしから君に出す——教師になるための

最終課題じゃ』

思わずといていい様子でつぶやいた百々の様子に、学園長は今までの厳しい詰問するかのような表情をけし、微笑んだ。

『自分の過去に——決着をつけてくるといい』

……↑↑↑……………↑↑↑↑↑……

そんな学園長の言葉を思い出し、百々は自分の眼前に立つ真名に告げる。

「アルカナ……私はね。もう戦場あそびで戦える気がしなかった」

「知っている。部隊長に聞いたよ」

「私はね……あの人を殺してしまったの」

「知っている。あの人の死んだ状況から見て、あなたがそう思っていることも推察できた……」

「そう。じゃあ質問するわね……アルカナ」

そんな私を探し出して、あなたはいったい何がしたいの？ と、百々は魂を絞られるかのような葛藤の中で、真名にそう質問する。

恨みを晴らしたい——という線は絶対がない。それは、狙撃手としての師匠だからこ

そ彼女が一番理解していた。そういう風には、アルカナは絶対に考えないと。

狙撃手となるには優しすぎる少女だったから……彼女は決して、自分を恨んだりすることができないだろうと、百々は知っていた。

だったらどうして、あなたは私をこうまでして追いかけるの？

そんな百々の問いかけに、

「そんなの、決まっている」

真名は答えた。

「あなたに返さなきゃいけないものがあるからだ」

そして彼女は両手に持つ二丁拳銃を百々に向け、

「あなたに、伝えたいことがあるからだ！」

引き金を引いた。

瞬動によつてその軌道から逃れる百々。しかし、真名も瞬動を行い完全に百々が射線から逃れることを許さない。

「やめておけ13番！ ここは私に苦手な距離はない。対するあなたは狙撃専門の銃撃者。この距離で私に勝てる手段を、あなたは持っているかないだろう!!」

だからこそ、真名はこの距離までやってきたのだ。ロングレンジでは決して勝てない大先輩を打倒するために、銃撃者としての恥も外聞もかなぐり捨てて、彼女の姿が、呼

吸が聞こえる距離までやってきた。

いい判断よ、アルカナ。そんな真名のせりふを聞き、百々は思わず笑みを浮かべる。本当に、いい子に育ったわ……と。だが、

「舐めないで。小娘風情が」

「っ!?!」

瞬間だった、真名のほほをかすめ、一発の弾丸が彼女の後ろにあつた落下防止用のフェンスに激突したのは。

そして、その着弾点を起点に、

「っ!?! これほっ」

漆黒の繭が出現する！

「時間跳躍弾!?!」

「大変だったわよ？ あんまり激しい衝撃を与えると暴発しちゃうから、ぎりぎり暴発しない程度の衝撃を、弾丸が生み出す衝撃波を使って与え続けて弾丸の勢いを殺し、私のところに落とすのは」

「っ!?!」

信じられないといわんばかりの顔でこちらを見つめる真名の姿に、百々は思わず舌を出して笑った。

る。

いかに早打ちの達人であろうとも、羅漢銭の射撃速度を凌駕するのは物理的に不可能なのだ。

だからこそ、真名はこの羅漢銭で古菲との高速連続格闘を制することができたわけだが……。

「くっ!」

この場でその情報は、真名の危機的状况を的確に表しただけだ。

だが、

「負けるわけにはいかないんだよ!!」

真名はそれでも抵抗する意思を消さなかった。

「ごめんね、アルカナ。あなたの事情を受け止めてあげられる勇気が、まだ私にはないの」

だが、百々はそんな真名の主張を泣きそうな顔になりながら粉碎した。

「だから、ごめんね。さようなら」

そして、百々は羅漢銭を放つ。弾丸は先頭の最中に奪い取った時間跳躍弾。

よけられるような攻撃ではない。自分の銃撃では間に合わない。それを悟った真名は、瞬時に両手の拳銃を捨て、

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

懐から取り出した物体を、決死の覚悟で百々に投げつけ、

「っ!!」

時間跳躍弾が、自分の体に着弾したのを感じた。

…†…†……………†…†…

漆黒の繭が、真名を包み込むのを見て百々は思わず泣き笑いのような顔でそれを見つめた。

「ごめんね、アルカナ……情けない師匠で、本当にごめん」

今の自分は謝ることしかできないから。結局逃げてしまい、学園長の課題をこなせなかった自分は、もうこの学園都市を去るしかないから。だから百々は、必死に真名に向かつて謝罪を繰り返そうとして、

「謝るな!!」

「っ!」

繭から聞こえる真名の叱責に、思わず息をのんだ。

「何様のつもりだあなたは。この勝負の勝者にでもなったつもりか!」

「え……で、でも!!」

「この戦いは……私の勝ちだ!」

そういつて、繭越しに真名が指差したところへ、百々は視線を向ける。

「……あつ」

「わかったか? 私はちゃんと、あなたに返すべきものを返したぞ!」

そこには、彼女が最後に投擲した一枚のカードが、百々のズボンのすそに突き刺さり、彼女をそこに縫いとめていた。

「いいか、それは……コウキの形見の品の中に《13番へ》と、書かれて残されていたものだ! あんたのために用意されていたものなんだ!」

「……なにを」

「よく見てやってくれ!!」

真名の必死の呼びかけに、百々はおぼつかない手つきでそのカードを掴み取り、

「っ」

驚きとともに悟った。

「この……カードは」

「ああ。あんたと結ぶために作られた……本契約のカードだったんだ!!」

そのパクティオーカードは、仮契約を本契約にするための契約カード。それが示す意

味は、

「コウキは、一生あんたと一緒にいるって……あの戦いが終わったら、そういうつもりだったんだよ!!」

「……」

「そんなコウキが、あんたに向かって恨み言を言わなかった理由がわかるか!!」

「……!!」

「自分がいなくなった後も……あんたに幸せになつてほしかったからだよ!!」

「うう……!!」

百々は思わず座り込んでしまった。

百々は思わずうつむいてしまった……だつてそうだろう。

こんな情けない泣き顔……弟子の前じゃ見せられない!! そんな気持ちでいっぱい
の百々に対し、真名は小さく笑いながら話しかけた。

「こんど、墓参りに来てやってくれ……。コウキの墓はあいつの実家だった龍宮神社で
管理しているんだ。そして、言ってやってくれ」

黒い繭はどんどん小さくなっていく。だが、真名の声には焦りは見えなかった。

もう、言いたいことは言えたから。伝えたいことは伝えたから……そして、それを相

手はちゃんと受け取ってくれたから。真名の声は、それを悟っているものの声で、

「あなたは今、とても幸せだと……」

「うん……きつといく」

涙でにじむ視界と、ふるえる情けない声だったが……百々はなんとか、そう答えることに成功した。

それを満足げに見つめた真名は、

「ああ、まってるよ」

そういつて、3時間後の世界へととんだ。

43話・蘇る魔法世界の危機

「くっ!!」

「逃がさん。疾くと犠牲になるといい……僕の金づる」

「御免こうむる!?!」

真つ二つになった時計塔から数キロ離れた家屋の屋根たちを、すさまじい速度で二つの影が交差し離れる。

その光景はさながらDB。そのうちシユピーン・キュイーンというSEが聞こえてきそうだ!!

「つて、あれホンマに人類の戦いなんか!?!」

それこそドラゴンボールにしか見えない、天空に出現した二人が分身したかのような速度でゴブシヤバットを高速で交し合う光景に、完全に観戦ムードとなっていたマリイは、

「安川マリーはクールに観戦するぜ……」

「いかないんだな、お前は……」

「いや、だってあんなんついていけるわけないやん……」

サディストは突然やる気を出し界王拳状態に突入したゲルの姿に思わず舌打ちを漏らした。

まったく、あの一文を入れたのは朝倉ちゃんかな？ それとも、麻帆良の不敗の軍師殿？ どっちにしる余計なことを!!

おかげで犬神とだからなら戦いながら、祭り終了まで適当に時間をつぶすということができなくなった。それどころか、犬神は確実にこちらを捕まえて拷問にかける気だ。

あいにくこちららも暗殺者。今回の仕事は本業ではないとはいえ、依頼主の秘密をばらすような低い暗殺者モラルは持ち合わせていない。だがそれは裏を返せば、拷問にかけられてしまってもプライドが彼に秘密を明かすことを拒否するということ……。犬神が行う拷問が凄惨を極めることは必定だった。

負けるわけにはいかない……。負けたら死ぬよりつらい目に合う……。

だつたらどうする？ サディストは自分自身に自問自答する。

はつきりと認めよう——現状の自分では犬神には勝てない。

彼の暗殺の依頼を受けた時は、SMブラザーズ二人でかかって何とか追いつめることができた。つまり、自分の半身であるマゾミ（ノゾミよお兄様？）といって、脳内に現れた彼女がサディスト殴りつけていった）がないこの状況では、犬神には決して勝てない。

現状で勝つことは不可能!!

だが、

「だったら現状を変えればいい……」

現状では勝てないのがわかってるなら、現状でも勝てるようにすればいい。

どうするのか？ 漫画やアニメではないのだ。この瞬間に自分の戦闘能力が突如上がる可能性は絶対はない。

なら、

「相手を弱くしたらいいだろう!」

瞬間、サディストは低く落とした体制からバットをふるい、下から上にかけて一直線に跳ね上げるような軌道を描かせる。

「何のつもりだ?」

そんな下らん攻撃を? 犬神は言外にそう告げながら、バットが狙っているとと思われる顎を守るように両手を交差させ防御態勢をとる。

その両腕には豪気功がかかっており、サディストのバットの一撃をやすやすと防ぎとどめた。

だが、仮にもサディストは世界最強の名を関する存在。

その打撃は重く、完全に犬神の防御を実現させはしなかった。

「そこを狙うか!!」

サデイストの強力なけりをくらい、粉々に砕け散りながら天高く舞う犬神のメガネを見て、エヴァンジェリンは思わず感嘆のうめき声をあげた。

「確かに盲点だった……。ほかの戦闘でもあまりそういつた選択肢はとらないから、思いつかなかったが……。メガネキャラはメガネを砕かれたら弱くなるにきまつてる!!」

「いや、エヴァちゃん……。それ思いつかんかったんじゃなくて」

誰もが汚いと思うから普通はやらへんだけなんと……。と言いかけたマリーに、エヴァは、

「はあ? 何言ってるんだマリー? あの外道にはどんな戦術を取ろうとも《汚い》のそしりは受けないんだぞ? 世界の常識だ。覚えておけ」

「犬神君の外道っぷりはすでに世界まで広まつてんの!?!」

悪党の誇りはどこ行つたんや!?! と、ちよつとだけ目が逝つちやっているエヴァンジェリンの主張に突つ込みを入れつつ、マリーは、

「でもエヴァちゃん……。考えてみて?」

「ん?」

その戦術の有用性を、

「犬神君はあんだけ動くんやで? 戦闘中メガネ外れることもあるやろう。それやのに

通り過ぎたのを見計らい、

「死ね」

「捕まえるんじゃないの!?!」

いまだに屋根に残るサディストの上半身を、豪気功交じりの足で踏みつけようとしたので、あわててサディストは上げた両足を高速回転。

さながらカポエラのような連続蹴りを牽制として放ちつつ、犬神を一時的に遠ざけ、なんとか自分が立ち上がる時間を作り出す。

そして、立ち上がると同時に……。

「あ、あの……。君ほんとにメガネ必要なの？ もし必要ならニュータイプの類なの？」
 「何を言う。だいたい眼なんか見えなくなっただけで困らんだろう？ 敵の攻撃なんてものは、敵が放つ気配や攻撃の風圧、場の雰囲気などでなんとなくつかめるだろう？」

「なんとなくでミリ単位の回避されてたんだ僕の攻撃!?!」

やはりニュータイプか貴様!?! と、驚くサディストに、ゲルはフムと頷いた後、

「ニュータイプ風に言うなら……《たかがメインカメラをやらただけだ!》状態だな」
 「いいやがったよ!?! 誰もが思ったけど言ったらまずいかなって思っていたことを言いやがったよ!?!」

そんな風に世界の理不尽を嘆くサディスト。自分も大概理不尽な存在だが（おもに銃

撃関係に関して)、彼の理不尽さは他の追隨を許さないと……。

だがそんなふざけきった空気も、

「ふむ。ではそろそろ時間もないことだし、決めさせてもらおう」

「え？」

さらにふざけた理不尽な暴力によって途切れる。

技を放つためか、天高く舞い上がった犬神は下に位置するサディストを打撃するため、彼が立つ建物ごとロックオン。

「豪殺居合拳・豪気功コラボレーション——」

「ちよ、え……まっ!!」

犬神のポケットの収められた拳に、信じられない量の気がチャージされるのを見てサディストは思わずひく。

「おいおい、わかっているのか犬神君!! この下には……巨大な地下空洞が!!」

しかし、そんな物知ったことではないといわんばかりに犬神は迷うことなく拳をふるい、

「億条流星——無音拳!!」

流星の直撃に匹敵する打撃を、億近い数叩き込む!!

突如、激震とともに崩落を開始し、地上の空を地下空間にお届けする屋根を見て目を見開いた!!

「なあっ!?!」

上で騒ぎが起きているのは知っているが、まさか数百メートル地下にあるこの空間までぶち抜く攻撃が大地に叩き込まれるなどアルビレオは一切予想していない（当たり前）。

当然彼は慌てふためき、氷の棺を傷つかせるわけにはいかないと思いだした瞬間、

「お、おとおおとおおとおお!!」

自分の全魔力を使い重力魔法を発動。なんとか落石による棺の崩壊を阻止した。

だが、

「い、いったい誰が!」

「ふむ。なんだここは?」

アルビレオの受難は、

「……ほ、本気出しすぎじゃないかな犬神君!」

「黙れ。僕が正義だ」

始まったばかり……。

当然突如増えたツツコミの声に、犬神は思わずといった低で驚き、

「貴様は麻帆良武闘会で戦った……激安先生!!」

「そのネタはもういいでしょう!! それよりいったいこれはどういうことですか!」

こんなことをすれば学園長が許しませんよ? と、アルビレオが内心で、「多分無駄だろうな……」と思いつつ、一応この施設を壊されなかったための予防線を張ってくる。

当然、金に目がくらんだ犬神にそんな脅しなんか通じるわけもなく、

「安心しろ。学園長との契約書にはきちんと書いてある。『なお、この契約書に記載されている金即位事項以外の麻帆良に対する被害に関しては、当事務所は一切関知しない』と」

『契約書ちゃんと読まんほうが悪いんぢやいまつか?』っていう、ヤクザバリに悪質ですわね!」

というか、いくら学園長でも地下数百メートル近い位置にあるこの地下室まで地盤ぶち抜かれるなんて考えてもいませんよ!! と、アルビレオは魔力でがれきを必死に支えながらツツコミを入れるが、当然犬神は聞く耳を持たない。

なぜなら彼の眼前には、

「さて追いつめたぞ金づる」

「くっ……」

百万ドルの価値がある、金のなる木が存在するのだから。

「貴様もさすがにここまで来て逃げようとは思うまい。さあ、おとなしく僕の糧となるがいい!!」

「え、笑顔が怖すぎるよ犬神君!」

ゾーマ様でも裸足で逃げ出しそうな真黒な笑みを浮かべる犬神に、逃げ場はないとわかっていても本能的に逃走を選ぶサディスト。そんな彼に犬神は思わず舌打ちを漏らし、

「仕方ない」

殺す!!

「いやいや、殺しちやダメでしょう!」

「ん? なんだいたのか激安先生。人の心をそうポンポン読むんじゃない」

「ノリませんよ!! ノリませんからね!」

「それは……フリ?」

「違いますからね!」

チツ……ノリの悪いやつめ。と、アルビレオの必死のツツコミに舌打ちを漏らしながら、

「ふん。そこか!!」

すか!?!」

「うん、はい」

何やらやかましく抗議を開始した黒ローブに対し、犬神は情け容赦なく洛星居合拳を三連打!

何の遠慮も見せないままに、黒ローブを頭から地面にめり込ませたっ!!

「なぎいいいいいいいいいいいいいい!!」

「ちよ、おまつ……創造主に乗っ取られてるつつても、い、一応英雄である俺の体だし、もうちよつと優しく」

「やかましい。貴様など知らんし、体など知ったことか。あの賞金の話が出ていったいいくら時間がたったと思ってる。もうすでに超が見つける人間がいるかもしれない。そうなればもらえる賞金は一気に減額……」

「え、ちよつとまつて!?! 魔法世界の危機そんな理由でタコ殴りにされてんの!?!」
黒ローブがそう言っと思わず身を跳ね上げた時だった。

『ちや、超鈴音が見つかりました!! 上空千メートル……飛行船の上です!! なお、超氏をみつけた那波千鶴さんには後程金一封を……』

という、アナウンスが聞こえてきて……。

「……………」

あたり一帯に沈黙が下りた。そして、

「さて貴様ら……覚悟はできているんだろうな？」

「え、ちよ……ちよつと待てよ？ 俺たち何も悪くないつて!! 俺たち巻き込まれただけ……」

瞬間。麻帆良地下にあつた遺跡の一つが、激震とともに崩落した。

……†……†………†………†………

その頃、魔法世界のオスティア跡地にて。

!?!? ライフメイカー 創造主の霊圧が……消えた!?!?

白い髪と肌をした少年が、愕然とした顔で氷結し、

「ぎゃああああああああああああああああああ!!」

!?!?

悲鳴とともに、転移魔法によって彼の眼前に創造主が現れた。

「は〜は〜!!」

そして、荒い息をつく自分の主を、少年が心配そうに見つめた後、

「なんだあの化け物は!! 麻帆良あんな化け物飼っていてよく無事でいられるな!!」

「……」

なんだ、また犬神君か。と、割とあっさりスルーして自分の仕事に戻った。

「ほらほら、主様も。休日からそんなごろごろしている暇があるなら散歩にでも言ってきてください。そこにいられると邪魔ですから」

「扱いぞんざいすぎねえか!？」

魔法世界の明日は、どっちだ!？」

44話・終る闘争

朝倉からの超の位置情報を聞いたネギは即座に杖を使い上空へと登った。

だが、

「くっ!! こんな時に?!

当然、そうやすやすと超のところへはたどり着けない。すさまじい速度で上昇するネ

ギだったが、突如背中に走った悪寒を敏感に感じ取った彼は、即座に杖を急停止、

「光の精霊セブテンドリーギンタ スピリトゥス・ルーキス 9 7 柱!! 集い来たりてコエウンテース サギテント、イニクム 敵を射て!! 魔法の射手サギタ・マギカ 連弾セリエス・

光の97矢!!」

悪寒を感じる方向へ、光の雨を叩き込む!!

「「!!」」

着弾。轟音。ネギの攻撃は確かな成果を上げた。だが、

「茶々丸さんの姉妹機ですか!?

敵はその程度では沈まなかった。茶々丸よりわずかに小柄なバーナーが噴き出す翼を付けた少女型アンドロイドたちが、漆黒の繭を生み出す特殊弾頭を手にもつミニミから射出し、ネギが叩き込んだ光を迎撃。瞬時にかき消す。

「ここから先は通しません」

「落とさせていただきます」

「事ここに至っておきながら、今更やってきてお説教など、ずいぶんどのんびりとした教師と判断できません——以上」

「相変わらず一人だけ危ないのがいますね!？」

さくつと人の心をぶつ刺していくのやめてくださいよ!？」と、ちよつとだけ口が悪い茶々丸姉妹機に閉口しつつネギは、今度は無詠唱で叩き込める限界数まで展開した魔法の射手を発動しようとするが、

「いつから……空の敵が私たちだけだと勘違いしていた?」

「なん……だ?!」

ネギが愕然とした瞬間、空を漆黒の津波が覆った。

その正体は、

「田中さん!？」

『どうも、田中バーナードです』

「バーナーがついているからですか!？」

じゃあ、姉妹機は茶々丸バーナードですか!？」と、驚くネギを放置し、

「私たちまでダサイ名前と呼ばれてしまったではないですか!——以上」

『ぎやあああああああああああ!?!』

なぜか同士討ちを始める超機械兵たち。突っ込みどころ満載すぎる光景に、ネギのS AN値はがりがり削られていく。

「はっ!?! これはまさか超さんの作戦!?!」

「いいえ、多分違うと思うんですが……」

「!?!」

ネギがそのことにようやく気付いた瞬間、彼の眼前を白い何かは横切り、

「っ!?!」

「沈め……神明流奥義・百烈桜花斬!!」

無数の花弁となつて散る百の連撃が、上空でネギの上昇を邪魔していた田中たちをわずかながらに蹴散らしてくれる!

「刹那さん!!」

「先ほどの借り、これで少しは返せましたかネギ先生?」

「私もいるわよ!」

その言葉とともに落ちてきたのは、鎧姿の少女剣士——明日菜だ!

彼女は一刀のもと近くにあった田中を一体両断し、

「も、もうちよつと右!」

「わ、わかってるって!？」

おそらく彼女を運んできたのだと思われる、ネギの生徒——春日美空が騎乗する箒の上へと降り立った。そして、

「あ、ちよ……落ちる落ちる!? ちよ、明日菜やつぱり降りて!? あんたが乗ると箒の調子がすつこい悪い!!」

「この高さで降りられるわけないでしょ!? 根性見せなさい根性!!」

「箒に無茶言わないですよ!？」

……なんだかもめていた。

あ、明日菜さん……。助けに来てもらえたのはありがたいんですがもうちよつと後先考えましょうよ……。と、内心で思ってしまったネギ。というか、しばらく前に刹那と模擬戦をしていた彼女はかなりの高さまで飛んでいたような気がするのだが……。

まあ、今はそのことはいいい。問題なのは、

「きたったでネギ!! って、俺出番これだ——!？」

小太郎まで上空の戦いに参戦したのに、いまだに機械の壁が厚く超へと続く上空を封鎖していることが問題だった。

「いったい……何体いるんだ!？」

「一匹見かけたらたくさんいる感じの黒い虫ぐらの数です」

「それももう無限に等しいと思うんですが!？」

生きる化石扱い!? と、驚くネギをしり目に三体いた茶々丸の姉妹機のうち一体が、こちらにミニミミを再び向けながら、

「降伏してくださいネギ先生。悪いようにはしません」

「くっ……」

手詰まりとなったネギパーティたちに降伏を進めてくる。

ほかの仲間たちはまだ諦めず戦ってくれていた。だがしかし、この状況では圧倒的に火力が足りない。ネギにはそれがわかっていた。

だが、

「諦めるわけにはいかないんです……」

ネギはつぶやく。

「生徒が間違ったことをしたのなら——正してあげるのが教師の仕事ですから!!」

魔法使いとしてではなく、一人の教師として——ネギは超の行いを、許すわけにはいかなかった。そんなネギの返答を聞き、

「残念です……」

「っ!!」

茶々丸姉妹機三体は手荷物機関銃の引き金を無造作に引き、

『——よく言った、ガンダムうううう!!』

「「っ!?!」」

突如突っ込んできた、鎧武者のような姿をした漆黒の田中が放つ斬撃によって、姉妹機の一体が撃沈。

引き金は、火薬に火をつける前に、止まった!

「何者!?!」

『私の名はグラハム・エーカー。かつてガンダムを超えようと愚行を繰り返した男だ。そして、わが機体の名はマスラオ改め——スサノオ!!』

そう告げた瞬間、その珍妙な田中はネギのほうへと振り返る。

「え、え!?! ぼ、僕ですか!?!」

当然扱いに困るネギ……。敵が突然敵を攻撃した上に自分を守ったら、それは誰だつて驚くだろう。

というか、ガンダムってなんですか……。というネギの内心が田中には届かないため、その珍妙っぷりはさらに加速していく。

『未来への水先案内人はこのグラハム・エーカーが引き受けた! 行け、少年。生きて未

来を切り開け!!」

「え? ええ……」

『何を躊躇している! 生きるために戦えと言ったのは、君のハズだ!! たとえ矛盾を
はらんでも最後まで存在し続ける、それが、生きることだと!』

いや言つてませんし……。というネギのツツコミはやはり届かない!!

だが、

『トランザム!!』

突如真紅に輝きだしたグラハム田中が、三倍の速度で動き周囲の田中や茶々丸姉妹機
をとんでもない速度で蹴散らし始めたのを見て、ネギはどうとう覚悟を決めた。

「じゃあ……ちよつと行つてきます!!」

「え、ちよつと待つてネギ!? あんな変なの私たちに任せていく気なの!」

「せめて、せめて連れて行つてください!! 私たちではなくあのへんなのを!」

「そうやでネ——(時間的諸事情によりカット)」

必死にこちらを引き留めてくる教え子たちに(「ライこら!! 俺の扱いがぞんざいす
ぎるやろ!! なんや!! 俺のことそんな嫌いか!」と小太郎の怒声が聞こえてくる気が
するがきつと幻聴だとネギは自己完結する)、ネギは安心させるような笑みを浮かべ、
「つれていくのはいいが……別にあれ、倒してしまつても構わんのだろう?」

「？」

「僕は……」

そして、ようやくシリアスタイムに入った超のセリフをきき、ネギは深呼吸をした後、
「あなたを止めます。超さん」

「……自分が何を言っているのかわかた上で言っているノカ？ 君のその決断は少なくとも、私がこの世界を変えることによって救われる、数万数億人近い人間を不幸にする決断かも知れないヨ？」

「たとえそうだったとしても……超さん、いま生きる人の生活を、命を——犠牲にしかねないあなたの判断には、僕は到底賛成できません」

だから。と、ネギはそこで言葉を切り、杖から飛び降り飛行船の上に降り立つ。

その足にはすでに魔力が装填され、真っ赤に光り輝いている。

ディアブルジャンプ
悪魔風脚!!

「教師として、生活指導を実行します！」

「いい目をするようになったネ。ネギ先生……」

そしてそんなネギの瞳を見て超も笑う。その瞳には揺るがない信念と、自分の行動によつておこるすべての責任をとる覚悟が見えたから。

「ようやく先生は、ただの鬱陶しいガキから私の敵へとジョブチェンジしたネ」

蹴りは。と、内心で冷や汗をかきつつ、超はさらに攻めるため、迎撃した足を地面につける瞬間力をその足の一店へと集中させ、

「覇っ!!」

「っ!?!」

震脚。機械の鎧にアシストされとんでもない力を地面へとぶつけたその行為は、ネギと自分が立つ場所に局所的な激震を与え、ネギの行動をわずかに阻害する。

そしてそのわずかな行動阻害は、二人ほどの実力者にとっては致命的な隙。

「もらったよ、ネギ坊主」

瞬間、彼女上半身を覆う鎧の背中に搭載されたカシオペアがうなりをあげ起動し、彼女を瞬時にネギの背後へと移動させた。

指の間に挟み込んだ時間跳躍段を、ネギの背中にたたきこむような体制で。

「しまっ!?!」

「下手な芝居はやめるといいネ」

本来なら一撃必殺。これで敵は終わる攻撃。だが、ネギは違う。

「私の真似事など、やても意味はないヨ」

「くっ!?!」

瞬時に時間跳躍を行い、先ほどの超と同じよう彼女の背後に出現したネギ。だがそん

なもの超も予測済み。即座に時間跳躍を行いネギからはるか離れた地点へと転移する。

「そ、そんな!? カシオペアの時間跳躍を戦闘に組み込めるほどの精密さで操作するなんて、そんなもの超さんと私の合作であるそのパワードスーツでしかできないはず!」
「タネはそこにいる精霊だナ?」

驚く葉加瀬を落ち着かせるため、超はすぐさま敵の時間跳躍精密操作のタネを言い当てる。まさかこれほどすぐにタネが言い当てられると思っていなかったネギは、そのことにわずかに動揺を示しつつも、

「ええ、その通りですよ」

と、素直にカシオペアを掲げた。

そこには、カシオペアの時間操作を行うつまみを弄繰り回す小型の精霊がいた。

「簡単な魔法の応用ですよ。機械の操作程度だったらそれほど複雑な命令は必要ありませんから」

「いてくれるネ。私たちがこれほどの精密操作を行える人工知能をスーツに搭載するのにいたいどれだけの時間がかかたとおもてるネ」

やはりお前は天才だよネギ坊主。と、自分のご先祖様の優秀さに、超は苦笑いを浮かべた。だが、

「まだまだ、若いね。ネギ坊主」

「っ!」

瞬間、背後に出現した超にカシオペアを一時的に奪われ、ネギは思わず瞠目する。

それもそうだろう。なぜならネギのカシオペアは、

「はるか一週間先からこの時間に戻ってくるための影響かな? この戦闘で使える時間跳躍はせいぜいあと二回程度だロ?」

「くっ!!」

自身のターニングポイントを言い当てられ、思わず歯噛みをするネギに長は小さく嘲笑を浮かべる。

本当、若くて素直すぎる……と。

「そんなカシオペアで大丈夫か?」

「大丈夫です! あなたに心配されなくても、問題ありません!」

それ、死亡フラグヨ? と、カシオペアを取り返しあわてて超から距離を取ろうとしたネギに対し、時間跳躍を行った超は再び時間跳躍弾を叩き込む。

これで、ネギ坊主が使える時間跳躍はあと一回!

「これで終わりだ。ネギ坊主!」

そして、再び違う場所に出現したネギに超が、時間跳躍弾を叩き込もうとしたとき!

「超く。うしろうしろく」

「っ!？」

ふざけきつた掛け声とともに、超の背中にすさまじい衝撃が走る!

アソフエール・シャツゼソテ
「悪魔・飛翔撃!!」

その声と攻撃の威力は、武闘大会で見たネギと全く同じ!

「なっ!？」 馬鹿な………いつたいどうやって?!

超がそういつた瞬間、カシオペアを持っていたネギが風となりほどけ、その姿を完全に消滅させて、カシオペアを地面に落とす。

ま、まさか!?

「風魔法で編んだ………デコイ 罠だど!？」

「あのカシオペアではまともに戦闘できないことはわかりきっていましたがからね。でも、超さん相手ではカシオペアなしではまともな戦いはできない。その常識を逆手にとって」

「デコイにカシオペアを持たせて、私と戦わせたのか!？」

ただ罠の信憑性を上げるためだけに、自身の切り札をこんなにあっさり切って捨てるなんて!？ 長がそう驚きながら振り返ると、そこには不敵な笑みを浮かべるネギがいた。

消滅した。

そう思っていたのだが、

「まだネ」

「っ!？」

再び立ち上がる超を見て、ネギは思わず慄然とした。

「そんな……無理をしないでください！ あなたはもう、僕に対する対抗手段を失っているはずです!!」

「ははは……ネギ坊主、いたい何を勘違いしているネ。確かに私は今まで魔法を使ったことはなかった。だが」

ネギの攻撃によるダメージが抜けていないのか、超はややふらつきながらも、

「いつから私が……魔法を使えないと勘違いしていた?」

「なん……だど!？」

こんな時でもネタですか!? と、ネギが驚くのをしり目に、超は不敵に笑う！ そし

て、

「ウインデセクサーギンタ炎の精霊59柱《スピリトウス・イグニス》!! コエウンテース集い来たりて!! サギタ・マギカ魔法の射手 セリエス連弾・

火の59矢!!」

超が放った炎の矢が、油断していたネギに牙をむく!

「くっ!! 光の66矢!!」

…†……………†……………

上空での戦いは遠距離からの魔法戦へと突入した。

牽制用の魔法の射手が宙を彩り、時折放たれる敵を必殺するための雷光や炎が、無数の激突を経て爆発する。

それは一種の幻想的な風景を作り出し、祭りの最後へと突入した麻帆良を照らし出していた。

そんな光景を見て、

「くっ……………この上討伐報酬まで、とられるわけにはいかない!!」

地下から出てきた化け物が、空気も読まずに行動を開始した。

…†……………†……………

「超さん……………あなたは、どうして!? あなたの魔力はその体に刻まれた刻印によって賄われている!! でも、体内に無理やり魔力を生成する刻印なんて、使っただけで死ぬほ

どの激痛があなたを襲っているはずなのに!」

「どうして? 今更そんなことを聞くのかネギ坊主!」

そんなネギの質問に、超は小さく笑みを浮かべる。

「私の知るこの世界の未来は不幸なことばかりだ! そんな未来さきを知れば誰もが願うだろう! 幸せな未来でありたいと……幸多き世界であつてほしいと! ゆえに許してほしい、私という存在をおおおおお!!」

「くっ……それでも」

「いえた!! ようやく言えた!! と、ネギに見えないようにVサインを葉加瀬に出す超。

その数秒後、

何故ダ。葉加瀬から帰ってくる視線がやたら冷たい気がするネ……。と、超は凍えそうになった。

「いいこと言った口!? いいこと言った口!」

「テロツプ通信代わりに使うのやめてください。つか、それ思いつきりパクリじやないですか」

「違うネ! 先人からのリスペクトネ!!」

「さらに言ううとそれ、力でたたき伏せられるフラグですからからね?」

「そのふざけた幻想を今ここで修正する!! だって正論が勝たないと世界はいろいろおかしいネ!!」 と、超が挑戦者風の表情になった瞬間、

「守りたい世界があるんだああああああああああああ!!」

「!?!」

フラグ成立のセリフをきき、超と博士が思わず驚く。

そして、

「契約により我に従え 高 殿 の 王 ——」

上級古代呪文!? ネギの詠唱を聞き、超は小さく笑う。

「いいだろう。受けて立つ!!」

「契約に従い 我に従え 炎の霸王!!!」

一息、呪文を唱え切りネギを追う超。

「来れ 浄化の炎 燃え盛る大剣」

「来れ 浄化の炎 燃え盛る大剣」

二人の詠唱はやがて重なり、

「百重千重と 重なりて 走れよ 稲妻!!!」

「ほとばしれよ ソドムを 焼きし火と 硫黄 罪ありし者を 死の塵に」

やがてその文字の意味通り、歌うようにシンクロする。

「「「え?」」」

世界が氷結した。

超陣営も、ネギパーティも、学園を守っていた生徒たちも、まだ戦っていた田中たちも、生き残ったヒーローユニットたちも、

まるで突然氷河時代に叩き込まれたかのように凍りつき、その動きを止めた。

そんな中、動いている人間がたった一人。

「さて、これで超鈴音の撃退ボーナスは僕のものだな」

眼鏡を中指で押し上げる、ズタボロになったサディストを引きずった——犬神ゲルだ。

そのあんまりといえばあんまりな結末に、その場にいたメンバーは油の切れたブリキ人形のように、ギギギギと首を動かす、

「ん? どうした?」

と首をかしげた犬神に、

「空気読めやこの外道少年探偵いいいいいいいいいいいいいいいい!!」

金髪の少女が勢よくハリセンを叩き込むのを目撃した。

最終話・全体的なエピソード

あの騒がしい文化祭からしばらくの時間が流れた。

時期は夏休み直前。期末試験を控える学生たちではあったが、もうすぐ訪れる長い休みにどこか浮足立った雰囲気を感じ出していた。

そんな麻帆良学園都市の中を、

「下僕一号、右の裏路地に入ったぞ」

『く、くそつ!! 本気でおぼえてロヨ!! いつかぎやふんって言わせてやるネ!!』

「ぎやふん」

『そんな心のこもっていない『ぎやふん』聞きたくなかたネ!』

インカム型の通信機を付けた犬神が、また疾走していた。

目的は今日も今日とて、行方不明になった犬猫の捜索。

だが、今回の相手はマリーではなく、

「とつたああああああああああああああ!!」

「お見事です超さん」

「なんか最近ペットの捕獲技術が飛躍的に上がりましたね……」

そして、頭上から声が聞こえると同時にこちらを心配そうにのぞきこんできたネギの姿に、超は今までの騒ぎについて思い出した。

そうダ。私はネギ坊主と空の上でバトルして……。だめだ、その先が思い出せない……。

「ね、ネギ坊主……一応聞いておくが私とおまえの勝負はいたい……」

「え？　ちや、超さん？　覚えていないんですか!？」

「ん？　どうやら激しく頭を打たらしくてネ。ネギ坊主と戦っているシーンしか思い出せないヨ」

そんな超の言葉に冷や汗を流しながら「い、いや……むしろこっちのほうがいいのかも？」と、何やら不穏な言葉をつぶやくネギ。

「おいおい……本気で何があた!？」と、超が戦慄する中、

「い、いや。やだなく超さん。僕が起きていてあなたが気絶していたってことは、もう僕の勝ちに決まってるじゃないですか？　覚えてないからドロなんて言い出さないで下さいよ?」

「え？　いや……」

なんか言動が嘘くさいんだが……。と、不審に思った超は確認の意味を込め、葉加瀬にも視線を送る。

「え？ なんですか？ 当然ネギ先生の勝ちですよ？ まさか先生のことを疑っているんですか!？」 超さんの人でなし!!」

「え？ ええ!!? な、なんかすまナイ!?!」

なんで私怒られてるネ?! と、理不尽な葉加瀬の怒声に思わず泣きそうになりつつ、超はひとまず自分の敗北を認め謝罪した。

「でもそうか……私が負けた力」

そして、超はしばらく黙りこんだ後、

「ネギ坊主……」

「はい」

「やはり私の行いは、間違っていたのかな?」

そうネギに問いかけた。

きつとネギ坊主は肯定するだろう。超はそう思う。ネギはそのために来たのだから、それが当然だと思った。だが、

「いいえ、あなたは間違ってるんじゃないかいませんでしたよ」

「え?」

ネギは微笑みながら、超の質問を否定した。

「下を見てください、超さん」

「した？」

ネギに促され、列車の屋根から身を乗り出し、言われた通り下を見る超。

そこには、

「かつこよかつたぞ、子供先生!!」

「ラスボスの麻帆良最高の頭脳もすぐかつたぜ!!」

「楽しい文化祭ありがとおおお!!」

「最後の最後でいいもん見れたよ!!」

口々に彼らをほめたたえる、麻帆良の学生や住人たちの姿が、そこにはあった。

「これが、あなたがいた未来になればいいと思っただけですよね？」

「……」

「誰もが笑っていられる、この光景を作りたいと思っただけですよね……だったら」

あなたは、間違っただけでなんかないかったですよ。と、ネギは教師らしく諭してくれた。「あなたはほんのちよつと、手段を間違えただけで……ほんの少し、思いが暴走してしまっただけで、あなたの思いや、目的は——決して間違っていないんです。だから」

胸を張りなさい。そういつてくれた。そして、

「あなたが教えてくれた、悲劇があふれる未来にならないよう……この時代ほくの人たちも、頑張ります」

建築物の建物の屋根を疾走する。

目指す敵は強大だ。寄り道をしている余裕はない。行すべき行動はただ一つ。

「一直線に、ぶちかませええええええええええ!!」

「いい判断だが」

だがしかし、敵はそんな小太郎の突撃などものともせず、

「僕への奇襲を行うには早さが足りないな。全体的に力不足と知れ」

敵はその小太郎の突撃を平然と躲し、自身を殴りつけるために突き出された小太郎の手を取り関節を決める。

足を払う。

体を引き下げるように動かす。

投げ飛ばす!

この間わずか0, 001秒。当然小太郎は何をされたかわからないまま、ポーンという擬音が聞こえそうなほど鮮やかに、

「ぎゃああああああああああああああああ!!」

天高く放り投げられ、

「きゃー!!」

敵が追っていた猫の真上に叩き落された。

つぶされたカエルのような悲鳴をを上げる猫。

猫なのにカエルの声とはこれいかに？ と、くだらないことを考えながら気絶する小太郎。

そんなに二匹を見つめて敵——犬神ゲルは「フム」と一つ頷き、

「ミツシヨンコンプリートだ。帰るぞ安川」

「いや、コンプリート以前にターゲットと新助手が大変なことになってるやろうが!」
遠慮ないハリセンの一撃を食らった。

……+……+……+……+……+……

「ホンマ犬神君! 小太郎君がネギ君以上にやる気だしてつかかってくるからって、ちよつとは手加減せーへんかったら死んでまうで!」

「安心しろ安川。散々使いつぶしてぼろ雑巾のように捨てるまでは、壊れないように加減はしている」

「どの辺に安心したらええの!」

気絶した猫をケースに入れたマリーと、気絶した小太郎を引きずる犬神はそんな会話を交わしながら、麻帆良学園都市の往來を歩く。

猫はともかく小太郎を見られたら「すわ!? 殺人事件か!」と驚かれるのだろうか、

「なんだ犬神君か」

「犬神君ならしよ方がないな」

「あの子かわいそうに……。犬神君にかかわったばつかりに」

「ふむ、今日も認識阻害は十分働いているようだな」

「いや、認識阻害うんぬん以前に、君が危険すぎてだれももうこの光景に驚かんくなつて
るんやろ!」

「何か問題があるのか!」

「あるやろつ!? って、君に対して言い切れへんのがおつかないいいいいいいいい
!」

どうせだれに何を言われようと、態度を改めることなんてないのだから、むしろこの
ままのほうが都合がいいといえがいいのだが、その理論に納得してしまえる自分がい
ることに安川は少し絶望した。

「それにしても犬神君、ホンマよかつたん?」

「何がだ?」

「ネギ君夏休みが終わったらうち追い出すんやろ?」

「当然だ。上級古代呪文まで使えるようになった魔法使いを半人前とは呼べないだろ

う」

犬神がそう宣言したように、この夏休みが終わればネギは犬神アンダーグラウンドサーチを出ていくことになった。

文化祭の最後で見せた上級古代呪文は、ベテランの魔法使いでも使えない者がいる超高難易度呪文だ。あれがつかえてしまった以上、犬神と学園長の契約は完全に切れたことになる。

そのため、犬神がネギの保護を行う理由ももうなくなったのだ。だから、出て行かせる。犬神らしい効率的判断。だが、

「でも、なんかさびしいし……。 姫ちゃんもちよつと落ち込んでみたいやつたで？」

それに、修学旅行でネギ君を襲つてきよつたあの白髪の子のことかてまだ決着ついてへんし……」

やはり、10歳の子供を外にたたき出すというのはいささか気が引けるのか、マリーはわずかに未練がましく犬神に食い下がる。

そんなマリーの言葉に、犬神は嘆息を漏らし、

「野菜なら大丈夫だろう。あいつは何気にしたたかな奴だ。慕っている生徒も多い。家がなくなくなったのなら、あいつの教え子たちが自室に泊めてくれるだろう？ 小太郎のよ」

犬神らしい犬神による犬神のための正論に、マリーは思わず血反吐を出して倒れこむ。

「そうやった……こいつはこういうやつやった……。と、いまさらながら犬神の外道っぷりに涙を流すマリー。」

「それにだ」

「ん？」

「ここから先はあいつの物語だ。僕らがしゃしゃり出ていくのは、違うだろうか？」

「……犬神君？」

だが、ほんの少し……ほんの少しだけ、思わずといった様子で犬神の口から漏れ出たその言葉は、マリーの言葉に響いた。

「あいつはもう、一人で十分やっていける。そう育てたし、そう育った。ならば、僕らが余計な気を使うのは筋違いだ」

「……ん。そうやね」

その言葉には、ちゃんと育ったネギに対しての、絶対的な信頼と思いが隠されていて……。

「なんや、ちゃんとネギ君のこと考えてたんやん。と、マリーは笑う。」

不器用な自分の雇い主を見て、笑う。

二人が歩く道がだんだんオレンジ色に染まりだした。

時刻は夕方。

物語の舞台から退場する二人を見送るかのように、その夕日は二人を明るく照らしだした。

「夏休みが始まったらうちの事務所で送別会しよな?」

「ふん。好きにしろ」

否定はされなかった。そのことに気をよくしたマリーは、犬神の手を取り、

「おい、安川」

「ええやん! ほら、はよ事務所にかえろ!! 超もネギ君も——ほかのみんなも、きつと

私らの帰りを待ってんで」

夕日に向かって走り出した。

数時間後。

「あ、あの……ちよつとでもええから、俺が引きずられてることに気づいてください」
「あ」

さらに夏休みに入つてすぐ、

「さあ安川。魔法世界に突撃だ。野菜のピンチだ助けにいつて、学園長からすごい金がもらえるぞ!!」

「もう大丈夫やったんちゃうんかいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

目を?に変えた犬神が、いろいろと台無しな発言をする日は割とすぐにやってきたという…